河内長野市文化財調査報告書第42輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書XXII

三日市北遺跡 I

2006年3月

河内長野市教育委員会

河内長野市文化財調査報告書第42輯

河内長野埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅡ

三日市北遺跡　Ⅰ

正　誤　表

頁など	行など	誤	正
挿図目次	第112図	SI30出土石器④……114	SI30出土石器④……115
挿図目次	第311図	広口壺c・d・e口縁端部形態分類……388	広口壺c・d・e口縁端部形態分類……387
挿図目次	第312図	広口壺c・d・e口縁部内外面文様組み合わせ……388	広口壺c・d・e口縁部内外面文様組み合わせ……387
挿図目次	第313図	広口壺c・d・e口縁端部形態と文様の相関関係……388	広口壺c・d・e口縁端部形態と文様の相関関係……387
挿図目次	第321図	南河内地域弥生時代遺跡分布図……320	南河内地域弥生時代遺跡分布図……406
表目次	第6表	三日市北遺跡弥生時代中期集落の構成……400	三日市北遺跡弥生時代中期集落の構成……402
図版目次	図版15	SI18(南から)	SI18(西から)
146	24	看守できる。	看取できる。
161	13	〔SD2〕（第125・126図、図版26)	〔SD2〕（第125・126図)
217	4	〔SK15〕（第165・173図、図版75)	〔SK15〕（第165・173図、図版73)
218	16	〔SK16〕（第173図・174図、図版35・73)	〔SK16〕（第173図・174図、図版73)
251	17	1．遺物	1．遺構
298	1	NR1−第8調査区(247～250図、図版91・92)	NR1−第8調査区(247～250図、図版91・92・93)
331	28	〔SN9〕（第271図、図版47・96・97)	〔SN9〕（第271・272図、図版47・96・97)
図版78		SK60(755・757～760)	SK60(755・757～759)　SK65(760)追加
図版100		石錘	石錐

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう街道の要衝として発展してきた街です。このため、市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした文化財や自然に対する影響は大きなものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は、開発と直接的に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、現在の、さらには未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市に於いては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は、発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めて頂くと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用して頂ければ幸いです。

これらの発掘調査に協力して頂きました関係各位の埋蔵文化財への深いご理解に、末尾ながら謝意を表すものです。

平成18年３月

河内長野市教育委員会

教育長　福　田　弘　行

例　　言

1．本報告書は、平成12年度から平成17年度に行われた三日市町駅前市街地再開発事業に伴う三日市北遺跡・三日市宿跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．平成12年度から平成16年度にかけての調査は、河内長野市の委託を受けて河内長野市教育委員会の指導のもと河内長野市遺跡調査会が行った。平成17年度の調査については、河内長野市遺跡調査会の解散によって、河内長野市教育委員会が行った。各年度における調査期間の詳細は３頁の第１表による。

3．調査にかかる費用は全額、国土交通省の補助を受けた河内長野市が負担した。

4．発掘調査は、河内長野市教育委員会社会教育課参事尾谷雅彦、同文化財保護係太田宏明、同嘱託職員藤田徹也、(現富田林市教育委員会)、福田和浩を担当者として実施した。各担当者が受けもった調査区については、３頁の第１表に示した。各調査区の位置については２頁の第１図に示した。

5．本書の編集作業は、太田が行い、河内長野市立ふれあい考古館嘱託職員中野咲がこれを補佐した。執筆については第２章第３節の遺物に関する記載及び第４章１節を中野が、第３章を辻康男が、これら以外を太田が行った。

6．測量作業は、写測エンジニアリング株式会社、富士測量株式会社、株式会社航空撮影センター、株式会社アコードに委託して行った。また、自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。

7．発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。(敬称略、順不同)

荒田恵、池田和江、大塚美幸、大西京子、小林和美、喜多順子、斎田菜穂子、平野京美、杉本祐子、枡本裕子、松尾和代、牟田口京子、渡辺今日子（現和歌山県教育委員会)、田中由利、大西美智子、平松由紀、横田明日香、山田直子、中西和子、小浜加奈子、廣瀬佑美、田淵智子、細川由起子、安間克巳、湯浅敬子、柳光早矢香

8．発掘調査及び、整理作業については、下記の方々の指導・協力を得た。記して感謝する。(敬称略、順不同)

粟田薫、石野博信、上杉彰紀、上田睦、大庭重信、大谷宏治、笠井敏光、河内一浩、北野耕平、北山峰生、小浜成、酒井龍一、坂田典彦、杉本清美、田中元浩、竹村忠洋、樽野博幸、辻康男、永井正浩、中村浩、鍋島隆宏、濱田延充、林野全孝、福永信雄、別所秀高、正岡大実、松岡良憲、森岡秀人、矢野健一、山田隆一、若林邦彦、和田晴吾

9．本書で報告した記録類及び出土遺物は、河内長野市教育委員会が保管している。市民の方々が地域史を理解し、文化財保護の精神が向上するように、広く活用されることを望む。

10．本書に掲載した遺構写真の撮影は、調査担当者が行い、遺物の写真は大阪南部ラボに委託して行った。

11. 調査は、国土座標Ⅵ系の座標軸に依拠している。また、本書で用いる北は座標北を示している。レベル高はT.P.を使用している。
12. 本書で使用した土層及び遺物の色調は、『新版標準土色』(2001年版) に基づく。
13. 遺構番号については、本書で完結するように弥生～中世と近世で別個に通し番号を附した。
14. 遺物の観察表は、添付したCD－ROM内に記録している。

凡　　例

1．本書の遺構名は下記の略記号を用いた。
ＳＩ…竪穴住居　Ｐ…柱穴　ＳＡ…柵列　ＳＢ…掘立柱建物　ＳＤ…溝　ＳＫ…土坑　ＳＰ…遺物出土ピット　ＳＵ…方形周溝墓　ＮＲ…自然流路　ＮＶ…落ち込み　ＳＮ…桶埋置遺構　ＳＸ…不明遺構
2．遺構実測図の縮尺は、１/20・１/30・１/60・１/80・１/100・１/120・1/160・１/400・１/600である。
3．遺物実測図の縮尺は、土器展開図が１/４、断面・拓影のみのものが１/３・石器１/２・１/３・１/４・１/８・２/３を基準としているが、遺物の状況により変えている。
4．縄文土器・弥生土器・土師器・土師質土器・瓦質土器の断面は白抜き、須恵器・瓦器・陶磁器の断面は黒塗り、木器・漆器の断面は斜線である。
5．遺物番号と写真図版の番号は一致する。また、遺物挿図中で土器の遺物番号が斜体字になっているものは、生駒山西麓産胎土であることを示す。
6．弥生土器の編年については寺沢薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』に従った。石器の分類については粟田薫1995「石器資料」『富田林埋蔵文化財調査報告』26、古式土師器の編年については米田敏幸1988「土師器の編年　近畿」『古墳時代の研究』６、須恵器の編年については田辺昭三1988『須恵器大成』・西弘海1986『土器様式の成立とその背景』にそれぞれ従った。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
付図目次
図版目次
第１章　序論……1
　第１節　調査の経緯と経過……1
　第２節　地理的・歴史的環境……4
　第３節　既往の調査及び調査の概要……10
第２章　調査成果……21
　第１節　調査の方法……21
　第２節　調査区の地形と基本層序……26
　第３節　弥生時代～古代の遺構・遺物……34
　第４節　近世の遺構・遺物……306
　第５節　遺物包含層……337
第３章　自然科学的分析……365
第４章　総括……375
　第１節　三日市北遺跡出土畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器について……375
　第２節　弥生時代集落の検討……397
　第３節　まとめ……412
引用・参考文献一覧……413

挿　図　目　次

第１図　調査区配置図（１/2000）……2
第２図　河内長野市位置図……4
第３図　河内長野市地質図（１/40000）……5
第４図　河内長野市遺跡分布図（１/40000）……8

第５図　既往の調査区位置図（１/10000）……11
第６図　既往の調査遺構配置図(昭和60年次調査第４(88－４)調査区北部・１/1000)…12
第７図　既往の調査遺構配置図(昭和60年次調査第４(88－４)調査区南部・１/1000)…13
第８図　既往の調査遺構配置図（昭和60年次調査第５（88－５）調査区・１/1000）…14
第９図　既往の調査遺構配置図（平成４年次（MIC92－１）調査区・１/1000）……15
第10図　弥生時代遺構配置図（１/800）……17･18
第11図　近世遺構配置図（１/800）……19･20
第12図　調査区区割図（１/2000）……21
第13図　弥生土器分類図……24
第14図　土層断面柱状図１（１/40）……27･28
第15図　土層断面柱状図２（１/40）……29･30
第16図　土層断面柱状図３（１/40）……31･32
第17図　ＳＩ１平面図・土層断面図（１/60）……35･36
第18図　ＳＩ１出土遺物……37
第19図　ＳＩ２・３平面図・土層断面図（１/60）……39
第20図　ＳＩ２出土土器……40
第21図　ＳＩ３出土土器……40
第22図　ＳＩ３出土石器……41
第23図　ＳＩ４遺構土層断面図（１/60）……42
第24図　ＳＩ４平面図・土層断面図（１/60）……43･44
第25図　ＳＩ４出土土器①……45
第26図　ＳＩ４出土土器②……46
第27図　ＳＩ４出土石器……47
第28図　ＳＩ５平面図・土層断面図（１/60）……51･52
第29図　ＳＩ５遺構土層断面図（１/60）……53
第30図　ＳＩ５－ＳＫ１平面図（１/30）……53
第31図　ＳＩ５出土土器①……54
第32図　ＳＩ５出土土器②……55
第33図　ＳＩ５出土石器①……56
第34図　ＳＩ５出土石器②……56
第35図　ＳＩ６平面図・土層断面図（１/60）……57
第36図　ＳＩ７平面図・土層断面図（１/60）……59・60
第37図　ＳＩ７出土土器……61
第38図　ＳＩ７出土石器……62

第39図　ＳＩ８平面図・土層断面図（１/60）……64
第40図　ＳＩ８－炉土器出土状況図（１/30）……66
第41図　ＳＩ８出土土器……67
第42図　ＳＩ８出土石器①……68
第43図　ＳＩ８出土石器②……69
第44図　ＳＩ８出土石器③……70
第45図　ＳＩ９平面図・土層断面図（１/60）……72
第46図　ＳＩ９出土土器……73
第47図　ＳＩ９出土石器①……74
第48図　ＳＩ９出土石器②……75
第49図　ＳＩ10・11平面図・土層断面図（１/60）……76
第50図　ＳＩ10・11出土土器……77
第51図　ＳＩ12平面図・土層断面図（１/60）……79・80
第52図　ＳＩ12出土土器……81
第53図　ＳＩ12出土石器……82
第54図　ＳＩ13平面図・土層断面図（１/60）……83・84
第55図　ＳＩ13土層断面図（１/60）……85
第56図　ＳＩ13出土土器①……86
第57図　ＳＩ13出土土器②……87
第58図　ＳＩ13出土石器……88
第59図　ＳＩ14平面図・土層断面図（１/60）……90
第60図　ＳＩ14出土土器……90
第61図　ＳＩ15平面図・土層断面図（１/60）……91
第62図　ＳＩ15出土土器……92
第63図　ＳＩ15出土石器……93
第64図　ＳＩ16平面図・土層断面図（１/60）……95・96
第65図　ＳＩ16出土土器……97
第66図　ＳＩ17平面図・土層断面図（１/60）……99・100
第67図　ＳＩ17土層断面図（１/60）……101　102
第68図　ＳＩ17－ＳＫ１平面図・遺構断面図（１/20）……104
第69図　ＳＩ17出土土器①……104
第70図　ＳＩ17出土土器②……105
第71図　ＳＩ17出土石器……105
第72図　ＳＩ18平面図・土層断面図（１/60）……106
第73図　ＳＩ18出土土器……107

第74図　ＳＩ18出土石器……108
第75図　ＳＩ19平面図・土層断面図（１/60）……110
第76図　ＳＩ19出土土器……111
第77図　ＳＩ19出土石器……112
第78図　ＳＩ20平面図・土層断面図（１/60）……114
第79図　ＳＩ20出土土器……115
第80図　ＳＩ20出土石器……115
第81図　ＳＩ21出土土器……116
第82図　ＳＩ21平面図・土層断面図（１/60）……117・118
第83図　ＳＩ21出土石器……119
第84図　ＳＩ22平面図・土層断面図（１/60）……120
第85図　ＳＩ22遺構土層断面図（１/60）……121
第86図　ＳＩ22出土土器……121
第87図　ＳＩ22出土石器……122
第88図　ＳＩ23平面図・土層断面図（１/60）……124
第89図　ＳＩ23遺構土層断面図（１/60）……125
第90図　ＳＩ23出土土器……125
第91図　ＳＩ23出土石器……125
第92図　ＳＩ24平面図・土層断面図（１/60）……126
第93図　ＳＩ24出土土器……127
第94図　ＳＩ24出土石器……128
第95図　ＳＩ25平面図・土層断面図（１/60）……129
第96図　ＳＩ26平面図・土層断面図（１/60）……131
第97図　ＳＩ26遺構土層断面図（１/60）……132
第98図　ＳＩ26出土土器……133
第99図　ＳＩ26出土石器……134
第100図　ＳＩ27平面図・土層断面図（１/60）……135
第101図　ＳＩ27出土土器……136
第102図　ＳＩ28出土土器……136
第103図　ＳＩ28出土石器……136
第104図　ＳＩ28平面図・土層面図（１/60）……137
第105図　ＳＩ29出土土器……138
第106図　ＳＩ29平面図・土層断面図（１/60）……139
第107図　ＳＩ30出土土器……140
第108図　ＳＩ30平面図・土層断面図（１/60）……141

第109図　ＳＩ30出土石器①……142
第110図　ＳＩ30出土石器②……143
第111図　ＳＩ30出土石器③……144
第112図　ＳＩ30出土石器④……144
第113図　ＳＩ31平面図（１/60）……147・148
第114図　ＳＩ31土層断面図（１/60）……149・150
第115図　ＳＩ31出土土器……151
第116図　ＳＩ31出土石器……152
第117図　ＳＢ２出土土器……153
第118図　ＳＢ１平面図・土層断面図（１/60）……154
第119図　ＳＢ２平面図・土層断面図（１/60）……155
第120図　ＳＢ３平面図・土層断面図（１/60）……156
第121図　ＳＤ１平面図・土層断面図（１/100）……158
第122図　ＳＤ１遺物出土状況図（１/50）……159
第123図　ＳＤ１出土土器①……160
第124図　ＳＤ１出土土器②……161
第125図　ＳＤ２・３・７平面図（１/100）・土層断面図（１/40）……162
第126図　ＳＤ２出土土器……163
第127図　ＳＤ3出土土器①……163
第128図　ＳＤ３出土土器②……164
第129図　ＳＤ４平面図・土層断面図（１/100）……165
第130図　ＳＤ４遺物出土状況図（１/30）……166
第131図　ＳＤ４出土土器①……167
第132図　ＳＤ４出土土器②……168
第133図　ＳＤ４出土土器③……169
第134図　ＳＤ５平面図（１/100）・土層断面図（１/30）……172
第135図　ＳＤ６・８平面図（１/100）・土層断面図（１/30）……173
第136図　ＳＤ６～９出土土器……174
第137図　ＳＤ７土器出土状況図（１/30）……175
第138図　ＳＤ９～11平面図（１/100）・土層断面図（１/30）……176
第139図　ＳＤ10出土土器……177
第140図　ＳＤ11出土土器……178
第141図　ＳＤ12平面図・土層断面図（１/100）……180
第142図　ＳＤ12遺物出土状況図（１/30）……181
第143図　ＳＤ12出土土器①……183

第144図　ＳＤ12出土土器②……184
第145図　ＳＤ12出土土器③……185
第146図　ＳＤ12出土土器④……186
第147図　ＳＤ12出土土器⑤……187
第148図　ＳＤ12出土土器⑥……188
第149図　ＳＤ13～18平面図（１/120）・土層断面図（１/60）……191
第150図　ＳＤ13・14出土土器……192
第151図　ＳＤ17出土土器……192
第152図　ＳＤ19平面図（１/100）・土層断面図（１/60）……194
第153図　ＳＤ20・21平面図・土層断面図（１/120）……195
第154図　ＳＤ20出土土器①……196
第155図　ＳＤ20出土土器②……197
第156図　ＳＤ21出土土器……198
第157図　ＳＤ22・23・27平面図（１/100）・土層断面図（１/60）……199
第158図　ＳＤ22・23出土土器……200
第159図　ＳＤ24～26平面図（１/100）・土層断面図（１/60）……201
第160図　ＳＤ24遺物出土状況図（１/30）……202
第161図　ＳＤ24・25出土土器……203
第162図　ＳＤ26・27出土土器……204
第163図　ＳＤ出土石器①……205
第164図　ＳＤ出土石器②……206
第165図　ＳＫ１～３・６～15平面図・土層断面図（１/60）……208
第166図　ＳＫ４平面図・土層断面図（１/30）……209
第167図　ＳＫ４出土土器……209
第168図　ＳＫ５平面図・土層断面図（１/30）……211
第169図　ＳＫ５出土土器……212
第170図　ＳＫ８・11出土土器……213
第171図　ＳＫ12出土土器……215
第172図　ＳＫ13出土土器……215
第173図　ＳＫ14～18出土土器……217
第174図　ＳＫ16～26平面図・土層断面図（１/60）……219
第175図　ＳＫ20出土土器……221
第176図　ＳＫ21・22・24～26出土土器……222
第177図　ＳＫ27～32・34～36平面図・土層断面図（１/60）……225
第178図　ＳＫ33平面図・土層断面図（１/60）……227

第179図　ＳＫ33出土土器 ……228
第180図　ＳＫ34出土土器 ……229
第181図　ＳＫ35遺物出土状況図（1/30）……230
第182図　ＳＫ35出土土器 ……231
第183図　ＳＫ36出土土器 ……232
第184図　ＳＫ37～45平面図・土層断面図（１/60）……233
第185図　ＳＫ37・38・40・41・43～48出土土器 ……234
第186図　ＳＫ46～55平面図・土層断面図（１/60）……237
第187図　ＳＫ52出土土器 ……239
第188図　ＳＫ54・55出土土器（１/30）……240
第189図　ＳＫ56～64平面図・土層断面図（１/60）……241
第190図　ＳＫ56遺物出土状況図（１/30）……242
第191図　ＳＫ56出土土器① ……243
第192図　ＳＫ56出土土器② ……244
第193図　ＳＫ56出土土器③ ……245
第194図　ＳＫ57・58出土土器 ……246
第195図　ＳＫ60・62出土土器 ……247
第196図　ＳＫ65・68出土土器 ……249
第197図　ＳＫ65～78平面図・土層断面図（１/60）……250
第198図　ＳＫ70～72出土土器 ……251
第199図　ＳＫ76出土土器 ……252
第200図　ＳＫ77～79出土土器 ……253
第201図　ＳＫ79～82・85平面図・土層断面図（１/60）……254
第202図　ＳＫ81・84出土土器 ……255
第203図　ＳＫ83・84・86平面図・土層断面図（１/160）……256
第204図　ＳＫ出土石器① ……257
第205図　ＳＫ出土石器② ……258
第206図　ＳＫ出土石器③ ……259
第207図　ＳＫ出土石器④ ……260
第208図　ＳＫ出土石器⑤ ……261
第209図　ＳＰ１～11平面図・土層断面図（１/20）……263
第210図　ＳＰ１2～18平面図・土層断面図（１/20）……264
第211図　ＳＰ出土土器・石器 ……265
第212図　方形周溝墓群平面図（１/400）……268

第213図　方形周溝墓群土層断面図（１/100）……269
第214図　方形周溝墓群遺物出土位置図（１/400）……270
第215図　方形周溝墓群（Ｈ－ｆ１・２）出土土器 ……271
第216図　方形周溝墓群（Ｈ－ｆ４）出土土器 ……271
第217図　方形周溝墓群（Ｈ－ｅ２）出土土器 ……272
第218図　方形周溝墓群（Ｈ－ｅ３）出土土器 ……273
第219図　方形周溝墓群（Ｈ－ｄ２）出土土器 ……274
第220図　方形周溝墓群（Ｈ－ｄ３）出土土器① ……276
第221図　方形周溝墓群（Ｈ－ｄ３）出土土器② ……277
第222図　方形周溝墓群（Ｈ－ｃ３・４）出土土器 ……278
第223図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器① ……279
第224図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器② ……280
第225図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器③ ……281
第226図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器④ ……282
第227図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器⑤ ……283
第228図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器⑥ ……284
第229図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３・Ｈ－ａ３）出土土器 ……285
第230図　方形周溝墓群（Ｈ－ａ４）出土土器 ……286
第231図　方形周溝墓群出土石器① ……287
第232図　方形周溝墓群出土石器② ……288
第233図　方形周溝墓群出土石器③ ……289
第234図　ＮＲ１平面図（１/600）……290
第235図　ＮＲ１断面図①（１/120）……291
第236図　ＮＲ１断面図②（１/120）……292
第237図　ＮＲ１－第１調査区最下層出土土器 ……293
第238図　ＮＲ１－第１調査区下層出土土器 ……293
第239図　ＮＲ１－第１調査区中層出土土器 ……294
第240図　ＮＲ１－第１調査区上層出土土器 ……294
第241図　ＮＲ１－第２調査区出土土器 ……295
第242図　ＮＲ１－第３調査区出土土器 ……296
第243図　ＮＲ１－第４調査区出土土器 ……296
第244図　ＮＲ１－第５調査区出土土器 ……297
第245図　ＮＲ１－第６調査区出土土器 ……297
第246図　ＮＲ１－第７調査区出土土器 ……297
第247図　ＮＲ１－第８調査区出土土器① ……298

第248図　ＮＲ１－第８調査区出土土器②……299
第249図　ＮＲ１－第８調査区出土土器③……300
第250図　ＮＲ１－第８調査区出土木器……300
第251図　ＮＲ１－第９調査区出土土器……300
第252図　ＮＲ１出土石器①……301
第253図　ＮＲ１出土石器②……301
第254図　ＮＲ１出土石器③……302
第255図　ＮＲ１出土石器④……303
第256図　ＮＶ１出土石器……304
第257図　ＮＶ１出土土器……305
第258図　近世ＳＤ１～５平面図（１/400）・土層断面図（１/80）……307
第259図　近世ＳＤ８～15平面図（１/400）・土層断面図（１/80）……310
第260図　近世ＳＤ16～22平面図（１/600）・土層断面図（１/60）……312
第261図　近世ＳＤ17・24出土遺物……314
第262図　近世ＳＤ23～30平面図（１/400）・土層断面図（１/80）……316
第263図　近世ＳＤ25・26・31出土遺物……317
第264図　近世ＳＤ31～34平面図（１/400）・土層断面図（１/80）……318
第265図　近世ＳＫ１～７平面図・土層断面図（1/60）……320
第266図　近世ＳＫ８平面図・土層断面図（1/40）……321
第267図　近世ＳＫ９～15平面図・土層断面図（1/60）……323
第268図　近世ＳＫ11・14出土遺物……324
第269図　近世ＳＫ16～21平面図・土層断面図（1/60）……325
第270図　近世ＳＮ１～６平面図・土層断面図（1/60）……329
第271図　近世ＳＮ７～10平面図・土層断面図（1/60）……330
第272図　近世ＳＮ６・７・９・12出土遺物……332
第273図　近世ＳＮ11～13・ＳＸ１平面図・土層断面図（1/60）……333
第274図　近世ＳＸ２平面図・土層断面図（1/60）……334
第275図　包含層遺物出土位置図……337
第276図　包含層出土土器①……338
第277図　包含層出土土器②……340
第278図　包含層出土土器③……341
第279図　包含層出土土器④……342
第280図　包含層出土土器⑤……344
第281図　包含層出土土器⑥……345
第282図　包含層出土土器⑦……346

第283図　包含層出土土器⑧ ……347
第284図　包含層出土土器⑨ ……348
第285図　包含層出土土器⑩ ……349
第286図　包含層出土土器⑪ ……350
第287図　包含層出土土器⑫ ……351
第288図　包含層出土土器⑬ ……352
第289図　包含層出土土器⑭ ……353
第290図　包含層出土土器⑮ ……354
第291図　包含層出土土器⑯ ……355
第292図　包含層出土土器⑰ ……356
第293図　包含層出土土器⑱ ……357
第294図　包含層出土土器⑲ ……358
第295図　包含層出土土器⑳ ……359
第296図　包含層出土石器① ……360
第297図　包含層出土石器② ……361
第298図　包含層出土石器③ ……362
第299図　包含層出土石器④ ……363
第300図　ＮＲ１試料摂取位置図 ……366
第301図　ＮＲ１堆積層柱状図 ……366
第302図　植物珪酸体群集と珪酸組織片の産状 ……368
第303図　植物珪酸体群集と珪酸組織片の産状 ……368
第304図　生駒山西麓産土器の搬入率 ……376
第305図　各形式の細分 ……377
第306図　各形式に占める生駒山西麓産胎土・胎土1・2群の割合 ……377
第307図　広口壺A・甕C口縁端部形態分類 ……382
第308図　広口壺A・甕C口縁端部各類型の一括資料における共伴関係 ……382
第309図　広口壺Aの簾状文の原体幅・静止痕間隔と口縁端部形態の相関関係 ……382
第310図　Ａ類土器群編年表（１/10） ……384
第311図　広口壺ｃ・ｄ・ｅ口縁端部形態分類 ……388
第312図　広口壺ｃ・ｄ・ｅ口縁部内外面文様組み合わせ ……388
第313図　広口壺ｃ・ｄ・ｅ口縁端部形態と文様の相関関係 ……388
第314図　B類土器群編年表……390
第315図　三日市北遺跡出土土器における胎土各類型と各形式の占める割合 ……393
第316図　三日市北遺跡住居・方形周溝墓配置図（1/4000）……398
第317図　各検出遺構の消長 ……400

第318図　第２単位遺構配置図（1/800）……401
第319図　河内長野市内弥生時代遺跡分布図（1/20000）……404
第320図　河内長野市内弥生時代遺跡の消長……405
第321図　南河内地域弥生時代遺跡分布図（1/100000）……320
第322図　南河内弥生時代集落の消長……407
第323図　河内長野市内古墳時代集落遺跡の消長……409
第324図　河内長野市内古墳時代集落遺跡分布図（1/20000）……410

表　目　次

第１表　調査年次一覧……3
第２表　河内長野市内遺跡地名表……9
第３表　植物珪酸体分析結果……369
第４表　植物珪酸体分析結果……369
第５表　ＮＲ１埋土微細植物片分析結果……370
第６表　三日市北遺跡弥生時代中期集落の構成……400

付　図　目　次

付図１　調査区測量図

図　版　目　次

図版１　三日市北遺跡遠景（北から）、調査区西部（上から）
図版２　調査区中央部（上から）、調査区東部（上から）
図版３　ＳＩ１（西から）、ＳＩ２・３（東から）
図版４　ＳＩ４床面（南から）、ＳＩ４掘形底面（南から）
図版５　ＳＩ５床面（南から）、ＳＩ５掘形底面（南から）
図版６　ＳＩ６（西から）、ＳＩ７（東から）
図版７　ＳＩ８（東から）、ＳＩ８炉（東から）
図版８　ＳＩ８床面検出状況（東から）、ＳＩ８掘形完掘状況（東から）
図版９　ＳＩ９床面（南から）、ＳＩ９掘形底面（南から）

図版10　ＳＩ10・11検出状況（北から）、ＳＩ10・11完掘状況（北から）、ＳＩ14（東から）

図版11　上段：ＳＩ12西半部（南から）、下段：ＳＩ12東半部（北から）

図版12　ＳＩ13（南から）、ＳＩ15（北から）

図版13　ＳＩ16（東から）、ＳＩ17床面検出状況（東から）

図版14　ＳＩ17東半部完掘状況（東から）、ＳＩ17西半部完掘状況（西から）

図版15　ＳＩ18（南から）、ＳＩ19（上から）

図版16　ＳＩ20（東から）、ＳＩ21東半部（北から）

図版17　ＳＩ21西半部（北から）、ＳＩ22（西から）

図版18　ＳＩ23（東から）、ＳＩ24（北から）

図版19　ＳＩ26（西から）、ＳＩ26壁溝遺物出土状況（西から）

図版20　ＳＩ25（西から）、ＳＩ27（東から）

図版21　ＳＩ28（東から）、ＳＩ29（東から）

図版22　ＳＩ30（北から）、ＳＩ31（南から）

図版23　ＳＢ１（北から）、ＳＩ30・ＳＢ３（南から）

図版24　ＳＢ２（西から）、ＳＢ２（西から）

図版25　ＳＤ１（北から）、ＳＤ４（北から）

図版26　ＳＤ７（北から）、ＳＤ４（北から）

図版27　ＳＤ４（南から）、ＳＤ６（南から）

図版28　ＳＤ12（南から）、ＳＤ12遺物出土状況北部（北から）

図版29　ＳＤ12遺物出土状況南部（北から）、ＳＤ13～18（南から）

図版30　ＳＤ14（北から）、ＳＤ13・14（南から）

図版31　ＳＤ17（西から）、ＳＤ22・23（北から）

図版32　ＳＤ24～26（南から）、ＳＤ24（南から）

図版33　ＳＫ４（北から）、ＳＫ５（東から）

図版34　ＳＫ５遺物出土状況（東から）、ＳＫ５遺物出土状況（東から）

図版35　ＳＫ17（東から）、ＳＫ20（南から）

図版36　ＳＫ56（東から）、ＳＫ56（北から）

図版37　ＮＲ１東部（東から）、ＮＲ１東部（東から）

図版38　ＮＲ１（上から）、ＮＲ１西部（東から）

図版39　ＮＶ１（Ｈ－ｈ５区（東から））、ＮＶ１（Ｈ－ｇ４区（東から））

図版40　ＳＵ１～３（上から）

図版41　近世ＳＤ８～15（上から）、近世ＳＤ16・17（東から）

図版42　近世ＳＤ18・19（西から）、近世ＳＤ18～20・ＳＸ２（西から）、近世ＳＤ23～29（上から）

図版43　近世ＳＤ27～29（東から）、近世ＳＤ27（東から）

図版44　近世ＳＤ31（東から）、近世ＳＤ34（西から）

図版45　近世ＳＤ34（東から）、近世ＳＤ34（西から）

図版46　近世ＳＮ３・４（南から）、近世ＳＮ６（西から）

図版47　近世ＳＮ８（南から）、近世ＳＮ９・10（南から）

図版48　近世ＳＮ11（南から）、近世ＳＮ12（南から）

図版49　近世ＳＫ11（南から）、近世ＳＸ１（東から）

図版50　遺物　ＳＩ１、ＳＩ２、ＳＩ３、ＳＩ４、ＳＩ５、ＳＩ８、ＳＢ２

図版51　遺物　ＳＩ５

図版52　遺物　ＳＩ７、ＳＩ８、ＳＩ９

図版53　遺物　ＳＩ10、ＳＩ11、ＳＩ12、ＳＩ13

図版54　遺物　ＳＩ13、ＳＩ14、ＳＩ15、ＳＩ16、ＳＩ17

図版55　遺物　ＳＩ17、ＳＩ18、ＳＩ19

図版56　遺物　ＳＩ20、ＳＩ21、ＳＩ22、ＳＩ27

図版57　遺物　ＳＩ22、ＳＩ23、ＳＩ24、ＳＩ26、ＳＩ27、ＳＩ28、ＳＩ29

図版58　遺物　ＳＩ30、ＳＩ31、ＳＤ１

図版59　遺物　ＳＤ１、ＳＤ４

図版60　遺物　ＳＤ３、ＳＤ４

図版61　遺物　ＳＤ４

図版62　遺物　ＳＤ４

図版63　遺物　ＳＤ６、ＳＤ７、ＳＤ８、ＳＤ９、ＳＤ10、ＳＤ11、ＳＤ12

図版64　遺物　ＳＤ12

図版65　遺物　ＳＤ12

図版66　遺物　ＳＤ12

図版67　遺物　ＳＤ12、ＳＤ20

図版68　遺物　ＳＤ13、ＳＤ14、ＳＤ17、ＳＤ20、ＳＤ21

図版69　遺物　ＳＤ21、ＳＤ22、ＳＤ23、ＳＤ24

図版70　遺物　ＳＤ24、ＳＤ25、ＳＤ26、ＳＤ27

図版71　遺物　ＳＤ26、ＳＫ４、ＳＫ５

図版72　遺物　ＳＫ５、ＳＫ11、ＳＫ12、ＳＫ15

図版73　遺物　ＳＫ８、ＳＫ12、ＳＫ14、ＳＫ15、ＳＫ16、ＳＫ17、ＳＫ18、
ＳＫ20、ＳＫ21

図版74　遺物　ＳＫ22、ＳＫ24、ＳＫ26、ＳＫ33、ＳＫ36

図版75　遺物　ＳＫ34、ＳＫ35、ＳＫ36、ＳＫ37、ＳＫ38、ＳＫ40、ＳＫ41、ＳＫ43、ＳＫ44、ＳＫ47、ＳＫ48

図版76　遺物　ＳＫ52、ＳＫ54、ＳＫ55、ＳＫ56

図版77　遺物　ＳＫ56

図版78　遺物　ＳＫ56、ＳＫ57、ＳＫ58、ＳＫ60、ＳＫ62

図版79　遺物　ＳＫ70、ＳＫ71、ＳＫ72、ＳＫ76、ＳＫ77

図版80　遺物　ＳＫ36、ＳＫ78、ＳＫ79、ＳＫ81、ＳＫ84、ＳＰ

図版81　遺物　ＳＵ１～３（Ｈ－ｆ１・２）、ＳＵ１～３（Ｈ－ｅ２）、ＳＵ１～３（Ｈ－ｅ３）

図版82　遺物　ＳＵ１～３（Ｈ－ｅ３）、ＳＵ１～３（Ｈ－ｄ２）

図版83　遺物　ＳＵ１～３（Ｈ－ｄ３）

図版84　遺物　ＳＵ１～３（Ｈ－ｂ３）、ＳＵ１～３（Ｈ－ｅ３）、ＳＵ１～３（Ｈ－ｄ３）

図版85　遺物　ＳＵ１～３（Ｈ－ｂ３）

図版86　遺物　ＳＵ１～３（Ｈ－ｂ３）

図版87　遺物　ＳＵ１～３（Ｈ－ｂ３）

図版88　遺物　ＳＵ１～３（Ｈ－ｂ３）、ＳＵ１～３（Ｈ－ａ３）、ＳＵ１～３（Ｈ－ａ４）

図版89　遺物　ＮＲ１

図版90　遺物　ＮＲ１

図版91　遺物　ＮＲ１

図版92　遺物　ＮＲ１

図版93　遺物　ＮＲ１、ＮＶ１

図版94　遺物　ＮＶ１、近世ＳＤ17、近世ＳＤ24

図版95　遺物　ＮＶ１、近世ＳＤ24、近世ＳＤ25、近世ＳＤ26、近世ＳＤ31

図版96　遺物　近世ＳＫ11、近世ＳＫ14、近世ＳＮ９、近世ＳＮ12

図版97　遺物　近世ＳＮ６、近世ＳＮ７、近世ＳＮ９

図版98　遺物　石器（上・中）石鏃、（下左、下右）石鏃、未製品

図版99　遺物　石器（上・中）石鏃、（下）削器

図版100 遺物　石器（上・中）石錐、（下）削器

図版101 遺物　石器（上・下）石庖丁

図版102 遺物　石器（上・中）石剣、（下）台石

図版103 遺物　石器（上左・上右）石斧、（中左）叩石、砥石、（中右）台石、（下左）砥石、石斧、叩石、（下中・下右）ナイフ形石器

第１章　序論

第１節　調査の経緯と経過

当該発掘調査は、河内長野市（担当、三日市町駅前再開発事務局）を事業主体とする三日市町駅前市街地再開発事業（以下「再開発事業」という）、街路（三日市駅前線）事業及び三日市町駅前市街地再開発関連事業に伴う事前調査である。

平成11年度に、河内長野市三日市町駅前再開発事務局（以下「市」という）より、河内長野市教育委員会（以下「市教委」という）へ再開発事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。この際、事業地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である高野街道の範囲に該当するため、この場所については、発掘調査を実施する必要があることと、これ以外の範囲についても、開発面積が500㎡をこえるため、河内長野市開発事業指導要綱に基づいて、試掘調査の必要があることを伝えた。また、文化財保護法第57条の３の発掘通知、発掘調査依頼書、試掘調査依頼書を提出することを求めた。

平成12年１月19日には、市から発掘通知が提出され、同年２月14日付けで大阪府教育委員会に進達を行った。この結果、同年３月22日に大阪府教育委員会から工事施工前に発掘調査を実施するようにとの指導があった。この指導に基づき、再度、河内長野市と協議を行った結果、平成12年度に、周知の埋蔵文化財包蔵地内では確認調査を実施し、範囲外では試掘調査を実施することになった。

平成12年９月６日には、市から市教委へ確認調査のための発掘調査依頼書の提出があり、また、同年９月６日には試掘調査依頼書の提出があった。市教委は河内長野市遺跡調査会（以下「調査会」という）へ発掘調査、試掘調査を依頼するようにと回答した。その後、市は、市教委の指導のもと、調査会へ確認調査と試掘調査を依頼した。

確認調査は、平成12年９月25日～平成12年10月31日にかけて、試掘調査は平成12年９月25日～平成12年10月31日にかけて行われた。確認調査の結果、周知の埋蔵文化財包蔵地内で、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が検出された。また、試掘調査の結果、弥生時代の遺構が周知の埋蔵文化財包蔵地外にも広がっていることが確認された。市教委はこの結果を受けて、工事施工前に全面調査の必要があると判断し、市に伝えた。

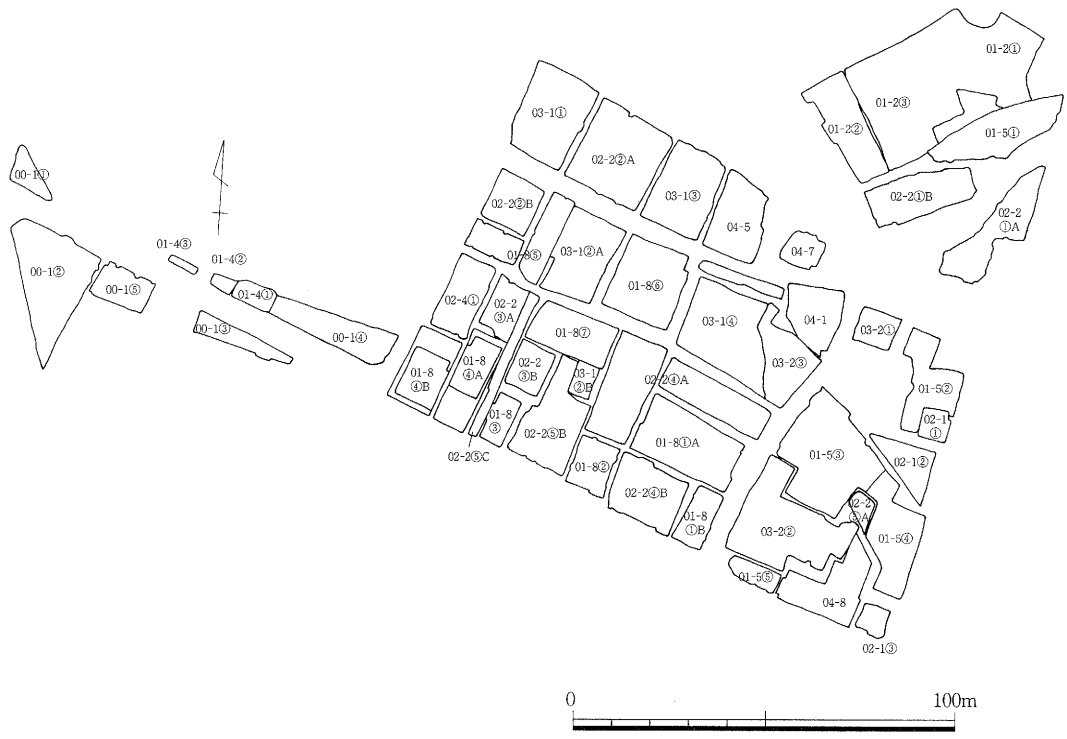
その後、市教委では試掘・確認調査の結果を受けて、市に対して、文化財保護法57条の６に基づく遺跡発見の通知の提出を求めた。平成12年11月１日に通知の提出があり、市教委では、平成12年11月６日付けで、大阪府教育委員会へ進達を行った。

市教委では、埋蔵文化財包蔵地が拡大したことを受けて平成12年11月16日付けで、大阪府教育委員会に対して、埋蔵文化財包蔵地の取扱い変更協議書の提出を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地についての取扱いの変更を求めた。協議書の内容は、次の２点である。１点

目は石見川南岸では古墳時代の遺構・遺物が、石見川北岸では、弥生時代の遺構・遺物が集中していることを考慮し、新たに発見された埋蔵文化財包蔵地と従来、「三日市遺跡」として保護を進めてきた「三日市遺跡」の北部（石見川以北）を合わせて新たに「三日市北遺跡」とし、保護を進めることである。２点目は、確認調査によって、従来「高野街道」として保護を進めてきた範囲から、旧三日市宿跡とみられる遺構が検出されたことを受けて、この範囲を「三日市宿跡」として保護するということである。この後、平成13年１月19日付けで、大阪府教育委員会から、協議書のとおり「大阪府文化財分布図」及び「大阪府文化財地名表」に記載された旨、通知があった。

一方で、平成12年11月には、全面調査の計画について市と市教委で協議を行った。この結果、調査は平成13年度から平成14年度にかけての２ヵ年で行い、その後、１年間で整理作業を行うことと、調査は、用地買収の進捗と工事施工計画にしたがって、分割して行うことを取り決めた。その後、この際に取り決められた内容について、平成12年11月21日に協定書の締結を行った。また、平成14年２月５日、平成15年３月31日、平成16年３月12日に業務期間の延長をする内容で協定書を変更する旨の覚書を交わしている。

この後、用地買収の進捗と工事施工計画に合わせて、開発予定地約20,000㎡の内、過去の地下埋設管工事等によって、遺構が破壊されていることが明らかな現道部分等を除く約



第１図　調査区配置図（1/2000）

調査年次	調査記号	業務名	調査区	担当者名	面積	履行期間
確認調査		三日市町駅前再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(確認調査その2)		太田宏明		平成12年9月25日～平成12年10月31日
試掘		三日市町駅前再開発事業に伴う埋蔵文化財試掘調査		太田宏明		平成12年9月25日～平成12年10月31日
第1次調査	MIN00－1 MIN01－4	三日市町駅前再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(駅前線)	第1調査区 ～第5調査区	太田宏明	1469.7㎡	平成13年2月6日～平成13年3月30日
第2次調査	MIN01－2	三日市町駅前再開発事業関連用地埋蔵文化財発掘調査業務	第1調査区	太田宏明	1599.5㎡	平成13年4月20日～平成13年7月10日
			第2・3調査区	藤田徹也		
第3次調査	MIN01－5	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(その1)	第3・4調査区	太田宏明	1796.98㎡	平成13年6月29日～平成13年10月16日
			第1・2調査区	藤田徹也		
			第5調査区	福田和浩		
第4次調査	MIN01－8	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(その2)	第2・3・5・7調査区	太田宏明	2525.35㎡	平成13年10月29日～平成14年3月20日
			第4調査区	藤田徹也		
			第1・6調査区	福田和浩		
第5次調査	MIN02－1	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(その3)	第1～3調査区	藤田徹也	342.68㎡	平成14年4月30日～平成14年6月4日
第6次調査	MIN02－2	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(その4)	第2A・3調査区	太田宏明	3346.16㎡	平成14年5月17日～平成14年12月25日
			第1・2B調査区	藤田徹也		
			第4・5調査区	福田和浩		
第7次調査	MIN02－4	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(その5)	第1調査区	太田宏明	250.70㎡	平成14年9月30日～平成14年11月29日
第8次調査	MIN03－1	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(その6)	第1・2A調査区	太田宏明	1822.71㎡	平成15年4月17日～平成15年10月10日
			第2B・3・4調査区	福田和浩		
第9次調査	MIN03－2	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(その7)	第1調査区	太田宏明	889.30㎡	平成15年7月15日～平成15年11月28日
			第2・3調査区	福田和浩		
第10次調査	MIN04－1	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(その8)	第1調査区	太田宏明	258.20㎡	平成16年4月5日～平成16年6月30日
第11次調査	MIN04－5 MIN04－7	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(その9)	第1調査区	太田宏明	611.56㎡	平成16年8月18日～平成16年9月30日
第12次調査	MIN04－8	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(その10)	第1調査区	太田宏明	326.63㎡	平成16年9月29日～平成16年11月30日
第13次調査	MIN05－3	三日市町駅前市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務	第1調査区	太田宏明	300㎡	平成17年7月27日～平成17年10月31日

第１表　調査年次一覧

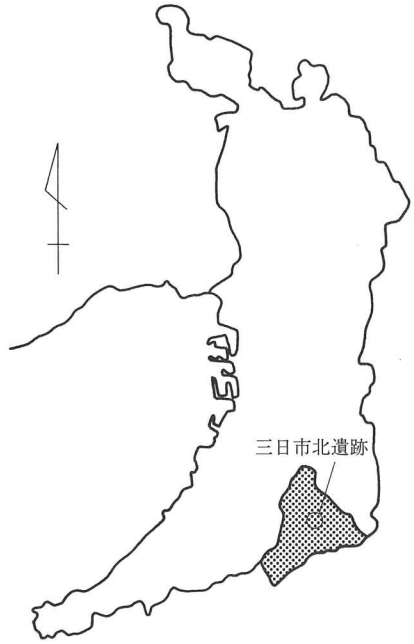
15,539.47㎡の調査を行った。調査は、１次調査～13次調査に及び、各次調査ごとの詳細は第１表に示し、各調査次の調査範囲は第１図に示した。平成12年度には、三日市町駅前線築造工事に伴い、1,469.7㎡の調査を行った。平成13年度には、5,921.83㎡を３回に分けて、平成14年度については3,939.54㎡を３回に分けて、平成15年度には2,712.01㎡を２回に分けて、平成16年度には1,196.39㎡を３回に分けて、平成17年度は300㎡の調査を行った。各次調査の名称、調査期間、担当者名については第１表のとおりである。なお、最後の13次調査については、調査会の解散にともない、市教委が直営で行っている。

内業調査については、平成15年度から平成17年度にかけて行われた。最終的には平成18年３月20日で、埋蔵文化財記録保存にかかわるすべての調査を完了した。

第２節　地理的・歴史的環境

地理的環境

河内長野市は南河内地域では最も南に位置し、石川流域においては、最上流部を占めている。旧国では河内国にあたるが、東は大和、南は紀伊、西は和泉に接する。市域には、天見川、石川が南北に流れており、市域北部で両河川が合流する。市内の大部分が丘陵と河岸段丘であり、可耕地はすくないが、交通の要衝であり、特に中世以降は高野街道の発達とともに栄えてきた場所である。



第２図　河内長野市位置図

当該遺跡は、市内のほぼ中央にあり、石川の支流である天見川東岸の河岸段丘上に立地する。当該遺跡の東側には金剛山の西斜面である丘陵部が広がっており、西側を流れる天見川の西岸も岩湧山から派生する丘陵もしくは台地となっている。また、南側には、和泉山脈が広がっており、当該遺跡は天見川流域の低位・中位段丘が続く北側を除いて丘陵に囲まれている。

歴史的環境

ここでは、弥生時代の集落遺跡が検出された当該遺跡の歴史的環境を、集落成立前、同時期、集落廃絶後の３段階にわけて記述する。

三日市北遺跡成立前の状況

当該遺跡周辺において、人間の生活の痕跡が確認できるのは、旧石器時代に遡る。旧石器時代の遺跡は、石川流域に高向遺跡・上原遺跡が、天見川流域に三日市遺跡が所在し、市内北西部にある小山田丘陵には寺ヶ池遺跡が所在している。三日市遺跡では181点にのぼる剥片、石核、石器が出土している。石器はナイフ形石器、尖頭器、削器、楔形石器が出土している。高向遺跡ではナイフ形石器、有舌尖頭器が出土しており、寺ヶ池遺跡でも、有舌尖頭器が採集されている。

縄文時代になると遺跡の数は増加する。縄文時代早期・前期の遺跡は旧石器時代の遺跡と重なる例が多い。三日市遺跡では早期の楕円押型文が施文された高山寺式土器が、高向遺跡からはＣ字形やＤ字形の爪形文が施文された前期の北白川下層式土器が出土している。また、三日市遺跡からみて天見川の対岸に位置する、小塩遺跡では楕円押型文が施文された早期の土器が出土しており、市内北部に位置する塩谷遺跡では縄文時代早期の石器

第３図　河内長野市地質図（1/40000）

が出土している。縄文時代中期の遺跡では先述の三日市遺跡や石川流域に位置する宮山遺跡があり、北白川C式土器が出土している。遺構の検出例としては、三日市遺跡では2基の土坑が、宮山遺跡で竪穴住居が検出されている。縄文時代後期・晩期には三日市遺跡で中津式土器、滋賀里Ⅲ式土器、船橋式土器が出土しており、石川流域の向野遺跡や、喜多町遺跡でも後期とみられる縄文土器が出土している。この他にも、菱子尻遺跡で縄文時代の石器が出土しており、寺ケ池遺跡では縄文時代の石器が表採されている。縄文時代の資料の乏しい、近畿地方においては、比較的豊富な資料が存在しているといえる。

三日市北遺跡と南河内地域の弥生時代集落

市内において、当該遺跡の他に弥生時代前期に相当するⅠ様式の弥生土器が出土した例はないが、弥生時代中期には、遺跡の数も増加する。弥生時代中期には、地域の核となる拠点集落が成立することが、一般的な傾向として知られている。南河内地域において、拠点集落もしくはその候補となりうる集落遺跡は、藤井寺市国府遺跡、富田林市喜志遺跡、甲田南遺跡等がある。しかし、喜志遺跡、甲田南遺跡については、この両遺跡の存続期間が、弥生時代の中期を中心とすることから、拠点集落には該当しないという考えもある(粟田1996)。河内長野市域では、当該遺跡が拠点集落の候補となる。

各拠点集落の周囲には、短期間で廃絶する小規模な集落が営まれている。当該遺跡の周辺には、中期中葉～後葉の大日寺遺跡、高向遺跡、塩谷遺跡、中期後葉の栄町遺跡、市町東遺跡が分布している。大日寺遺跡は、石川西岸の丘陵上に位置し、Ⅲ様式からⅣ様式にかけての土器が出土しており、方形周溝墓と考えられる溝が検出されている。高向遺跡は、石川西岸の中位段丘上に立地し、溝、土壙が確認されているが、遺構・遺物の密度は極めて低い。塩谷遺跡は、石川西岸の高位段丘上に立地する。遺構は検出されなかったものの、2次堆積層からⅢ～Ⅳ様式の土器、磨製石器、打製石器等が出土した。汐の宮町南遺跡からは、Ⅱ様式とⅣ様式の土器が出土している。この他、菱子尻遺跡からは、石器が出土している。

石川流域に形成された中期の集落群は、後期には消滅する。このような状況は、近畿地方に広く認められる現象であり、鉄器の普及に伴って、従来の社会システムが大きく変容したことに起因するとされている（禰宜田1992)。市域でも、中期の集落は後期には継続しない。かわって、当該遺跡背後の丘陵上に大師山遺跡が成立する。

古墳時代～古代に向けての展開

古墳時代前期には、全長50mの前方後円墳である大師山古墳が出現する。大師山古墳は天見川と石見川が合流する地点の東側の丘陵上に位置し、当該地域の地域首長墓と考えられる。大師山古墳は戦前と戦後の2度にわたって発掘調査が行われており、内行花文鏡1面、管玉8～9個、鍬形石1個、車輪石15～16個、石釧16～17個、紡錘車4個、刀子1口、鉄剣3口以上、埴輪が出土している。主体部は粘土槨であったと推定されている。市内では、これに続く首長墓の系譜は見いだせない。古墳時代前期の集落遺跡としては三日市遺

跡があり、竪穴住居６棟、土壙墓２基等が検出されている。

古墳時代中期にはいっても市内には首長墳と考えられるような大型の古墳は確認されていない。市内で確認されている中期古墳は方形低墳丘墳であり、先述の三日市遺跡から１基が検出されている。

古墳時代中期の集落としては、先述の三日市遺跡が、古墳時代前期から引き続いて存続している。三日市遺跡では、先述の古墳群に近接して、竪穴住居８棟と掘立柱建物２棟等が検出されている。

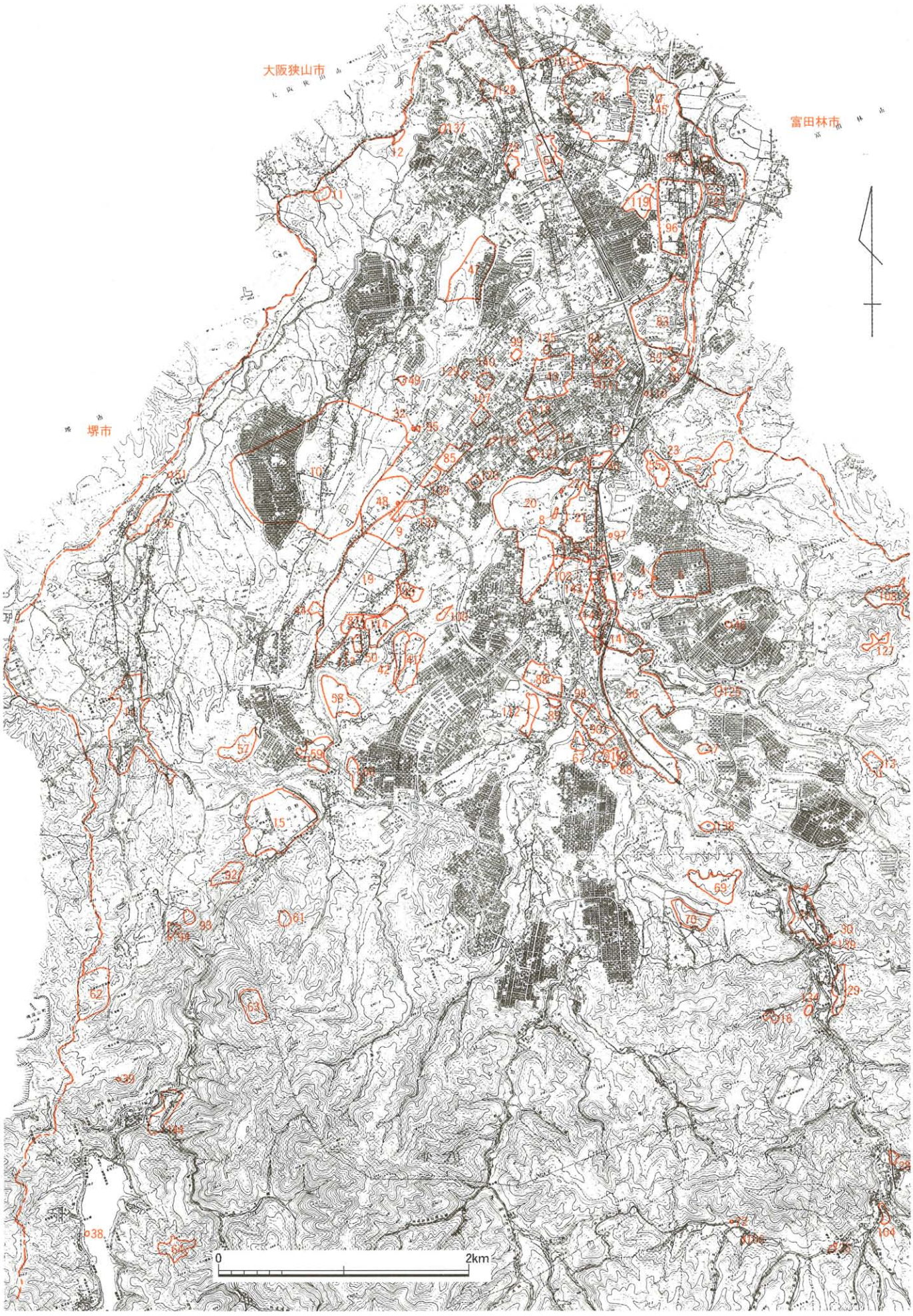
古墳時代後期には全国的に各地で横穴式石室を埋葬施設とする後期群集墳が出現するが、市内では三日市遺跡で検出された三日市古墳群が後期群集墳として位置づける事が可能である。市内菊水町には、五ノ木古墳がかつて位置しており、双子塚古墳、法師塚古墳等の古墳伝承地がある。これらは群集の度合いが弱く後期群集墳と呼ぶには躊躇される。また、喜多町には烏帽子形古墳、大日寺古墳がやはり単独で存在している。比較的広範囲にわたって古墳が散漫に分布する状況があったのであろう。集落遺跡では、石川西岸の高位段丘上に、新しい集落群が展開するようになる。このような集落遺跡として、小塩遺跡、加塩遺跡、尾崎遺跡、尾崎北遺跡、西浦遺跡があげられる。また、これらの集落群の他にも、高向遺跡、喜多町遺跡等が出現し、広範囲にわたって集落が拡散する。このような集落群の配置は、古代にもほぼ踏襲されてくる。

中・近世の動向

中世には、市内の遺跡は急増し、市内の大部分の遺跡で何らかの中世の遺構、遺物の検出をみている。これは高野街道の発展と金剛寺や観心寺の中興が大きく影響していると思われる。また、高野街道沿の集落遺跡や寺院では、貿易陶磁が集中的に出土している。

集落遺跡では、三日市遺跡、高向遺跡、尾崎遺跡、上原北遺跡、向野遺跡、野作遺跡、市町西遺跡、大日寺遺跡の調査で比較的広い面積からまとまった量の遺構が検出されている。この内、三日市遺跡では当時の集落域と墓域が検出されており、同様の状況は大日寺遺跡でもみることができる。また、向野遺跡、野作遺跡、上原北遺跡では、集落遺跡に生業活動の一部を示す遺構、遺物が伴って検出されている。向野遺跡や野作遺跡ではフイゴの羽口、鉄滓、鋳型の破片が検出されており、鋳物・鍛冶関係の工房跡とみられている。また、上原北遺跡では、炭焼窯群と建物跡が近接した場所から検出されている。

※三日市遺跡の北部（石見川以北）は、平成12年度に三日市北遺跡となったが本節では三日市遺跡としてあつかっている。



第４図　河内長野市遺跡分布図(1/40000)

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大師山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落・生産	弥生（後期）・平安
7	興禅寺遺跡	社寺	中世以降
8	烏帽子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳・墳墓	古墳（後期）・近世
10	長池窯跡群	生産	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺・生産	縄文・平安～近世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降
(17)	岩湧寺遺跡	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	縄文・古墳～中世
22	烏帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯跡	生産	中世
24	塩谷遺跡	散布地	縄文～近世
25	流谷八幡神社	社寺	平安以降
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世
30	岩瀬薬師寺遺跡	社寺	中世以降
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
(34)	滝畑埋墓	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良
43	西代藩陣屋跡	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町墓地	墳墓	近世
45	惣持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	膳所藩代官所跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	菱子尻遺跡	散布地・社寺	縄文～近世
55	河合寺城跡	城館	中世
56	三日市遺跡	集落・古墳他	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	中世
58	高木遺跡	散布地	縄文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	稲荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗蔵城跡	城館	中世
64	権現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂遺跡	社寺	近世以降
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	平安以降

番号	文化財名称	種類	時代
(73)	葛城第18経塚	経塚	平安以降
(74)	葛城第19経塚	経塚	平安以降
(75)	笹尾塞	城館	中世
(76)	大沢塞	城館	中世
(77)	三国山経塚	経塚	平安以降
(78)	光滝寺遺跡	社寺	中世以降
(79)	猿子城跡	城館	中世
80	蟹井淵神社遺跡	社寺	中世以降
(81)	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	社寺・古墳・墳墓	弥生～近世
87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
88	小塩遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塩遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生産	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
106	薬師堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	生産	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	縄文・奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
111	山上講山古墳跡	古墳	古墳
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	錦町遺跡	散布地	中世
(117)	太井遺跡	散布地	縄文・中世
118	錦町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
120	栄町南遺跡	集落	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世以降
127	三昧城遺跡	墳墓・城跡	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	弥生・鎌倉
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかしあ台遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世
140	昭栄町東遺跡	散布地・池跡	縄文・中世・近世
141	三日市北遺跡	集落	縄文・弥生～中世
142	三日市宿跡	宿駅に伴う街並	中世～近世
143	上田町宿跡	宿駅に伴う街並	中世～近世
144	滝尻遺跡	散布地	縄文・古代・中世
145	市町北遺跡	散布地	中世

（　）は地図範囲外　*は街道につき地図上にはプロットせず

第2表　河内長野市遺跡地名表

第３節　既往の調査及び調査の概要

当該遺跡は、周囲に位置する三日市遺跡と密接な関連があることから、ここでは、これらの遺跡を含めた形で既往の調査成果と今回の調査の概要についてまとめた。

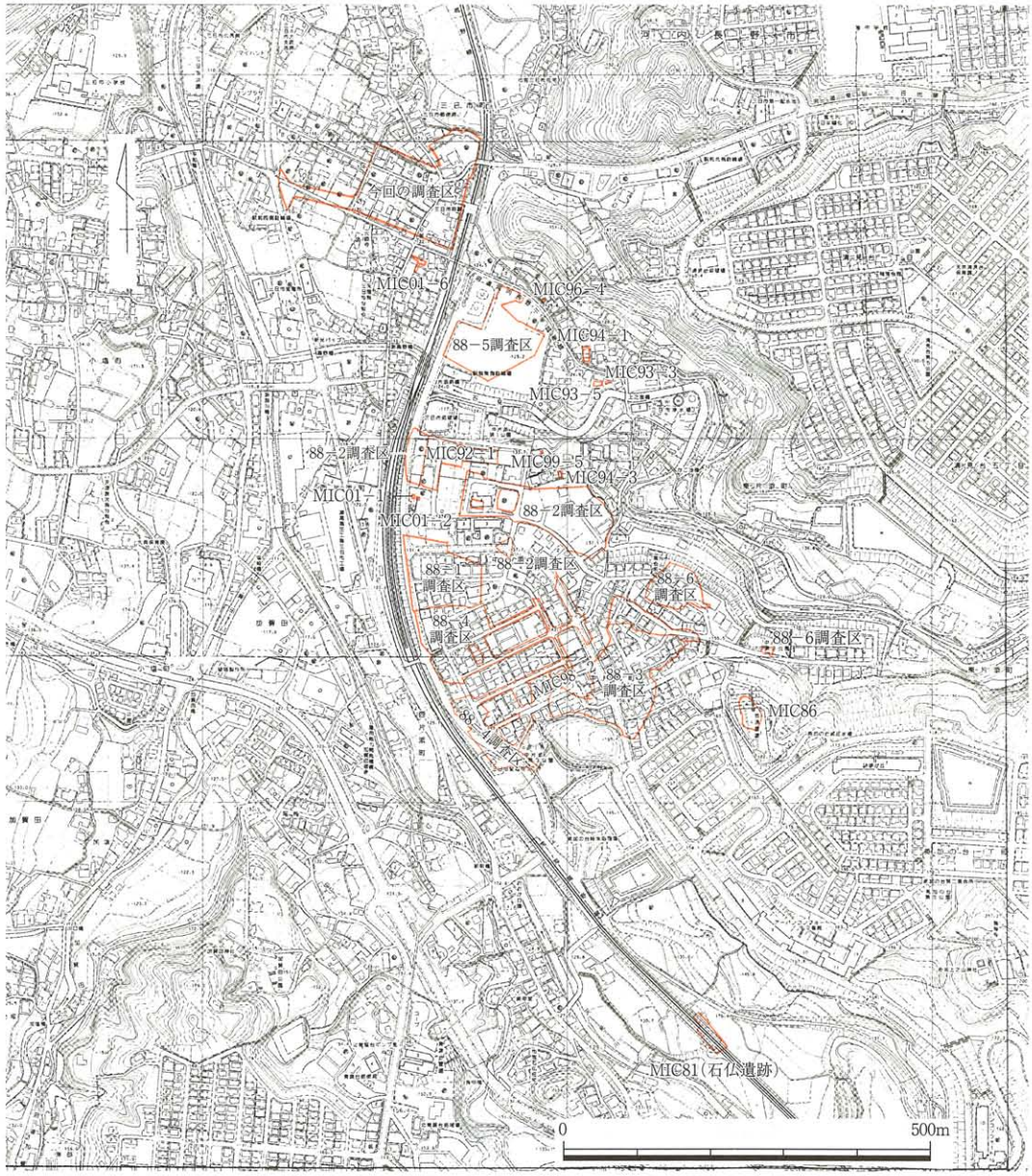
（１）既往の調査

当該遺跡付近に埋蔵文化財包蔵地が広がっている可能性が高いことは、昭和46年に河内長野市教育委員会が関西大学考古学研究室の協力を得て行った分布調査で明らかとなった。

昭和56年には、三日市遺跡において、大阪府教育委員会による約900㎡の発掘調査が行われた（ＭＩＣ81）。調査の結果、掘立柱建物６棟、土壙、溝が検出され、平安時代末から、鎌倉時代にかけての遺物が出土した（大阪府教委1982）。

その後、住宅都市整備公団と地元地権者による三日市・片添地区特定区画整理事業に伴って、昭和58年～59年にかけて財団法人大阪文化財センターによる範囲確認調査が行われた。この結果、区画整理事業区域全体に遺構・遺物が分布していることが明らかになった。範囲確認調査の結果を受けて、昭和60年から昭和62年にかけて河内長野市教育委員会・三日市遺跡調査会が、事業予定地内の約60,000㎡の調査（88－１～６調査区）を行った。調査の結果、旧石器～古代と中近世の２面の遺構面が検出された。旧石器～古代の遺構面からは、縄文時代の土壙墓、土坑、弥生時代の竪穴住居２棟、溝３条等、古墳時代の竪穴住居17棟、掘立柱建物２棟、溝６条、土坑46基、古墳８基、土壙墓11基、竪穴系小石室４基、窯状遺構３基等が検出された。弥生時代の溝、竪穴住居は、いずれも弥生時代中期のものであり、調査区北端に偏って検出された。古墳時代の竪穴住居は、古墳時代前期のもの６棟、中期のもの８棟、後期のもの３棟であり、古墳時代を通じて集落が存続していたことが窺える。掘立柱建物の時期については、遺物が伴っていなかったため不明である。古墳は、３つの群にわかれて分布しており、北から第１群～第３群と命名されている。古墳はいずれも上半部を削平された状態で検出された。第１群と第２群は円墳によって構成される群である。古墳時代後期に築造されたことが明らかになっている。主体部については、この際の調査では確認されなかった。一方で、第３群は方墳からなり、古墳時代中期末から後期前半に築造されたことが明らかになっている。いずれも主体部は検出されていない。初期群集墳的な様相を呈する第３群と後期群集墳的な様相を呈する第１・２群が並行し、かつ近接して造営されている点が特徴としてあげることができる。古代から中世にかけての遺構面では、掘立柱建物約50棟、溝、土坑、墓が検出され、平安時代後期から室町時代前半にかけて、建物群が変遷している様子が明らかになった。

昭和61年には、岩湧霊園造成に伴って、発掘調査が行われた（ＭＩＣ86）。この際には、近世の遺構・遺物が検出されている。1993年には、個人住宅の建築に伴い、２件の発掘調

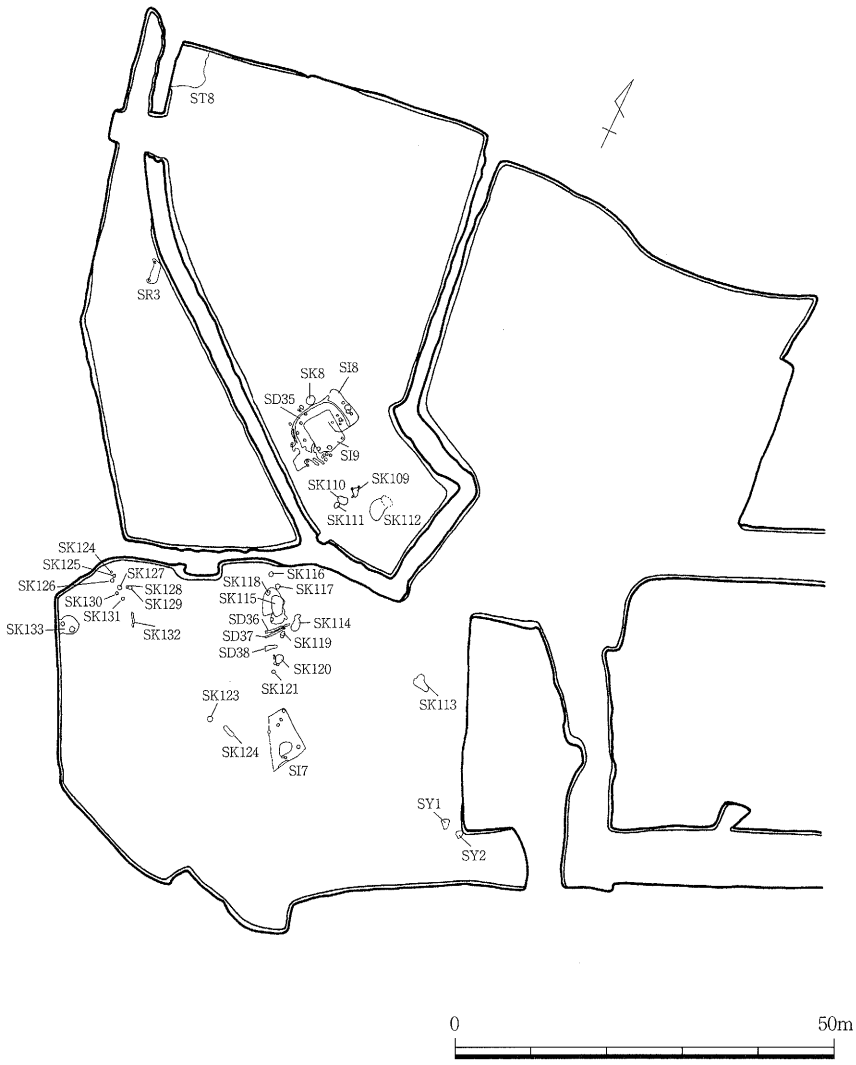


第５図　既往の調査区位置図(1/10000)

査（ＭＩＣ93－３、ＭＩＣ93－５）が行われている。この際には、古墳時代及び、弥生時代中期（第Ⅳ様式）の土器が出土した（河内長野市教委1994）。

その後、区画整理事業の進展によって、平成４年には、約3,500㎡の調査（ＭＩＣ92－１）が行われた。この際には、古墳時代の竪穴住居１棟、古墳７基、土坑10基が検出された（河内長野市遺跡調査会1994）。平成６年には、個人住宅の建築に伴い、発掘調査（ＭＩＣ94－1、ＭＩＣ94－３）が行われた。この際には、弥生時代中期（第Ⅲ様式）の土器、石庖丁、古墳時代の須恵器、中世の土師皿、瓦器が出土した（河内長野市教委1995）。

平成８年には、個人住宅の建築に伴い、発掘調査（ＭＩＣ96－４）が行われた。この際には、庄内期の土器、古墳時代の須恵器、中世の土師皿、瓦質土器が出土している（河内長野市教委1997）。



第６図　既往の調査遺構配置図（昭和60年次調査第４（88－４）調査区北部・1/1000）

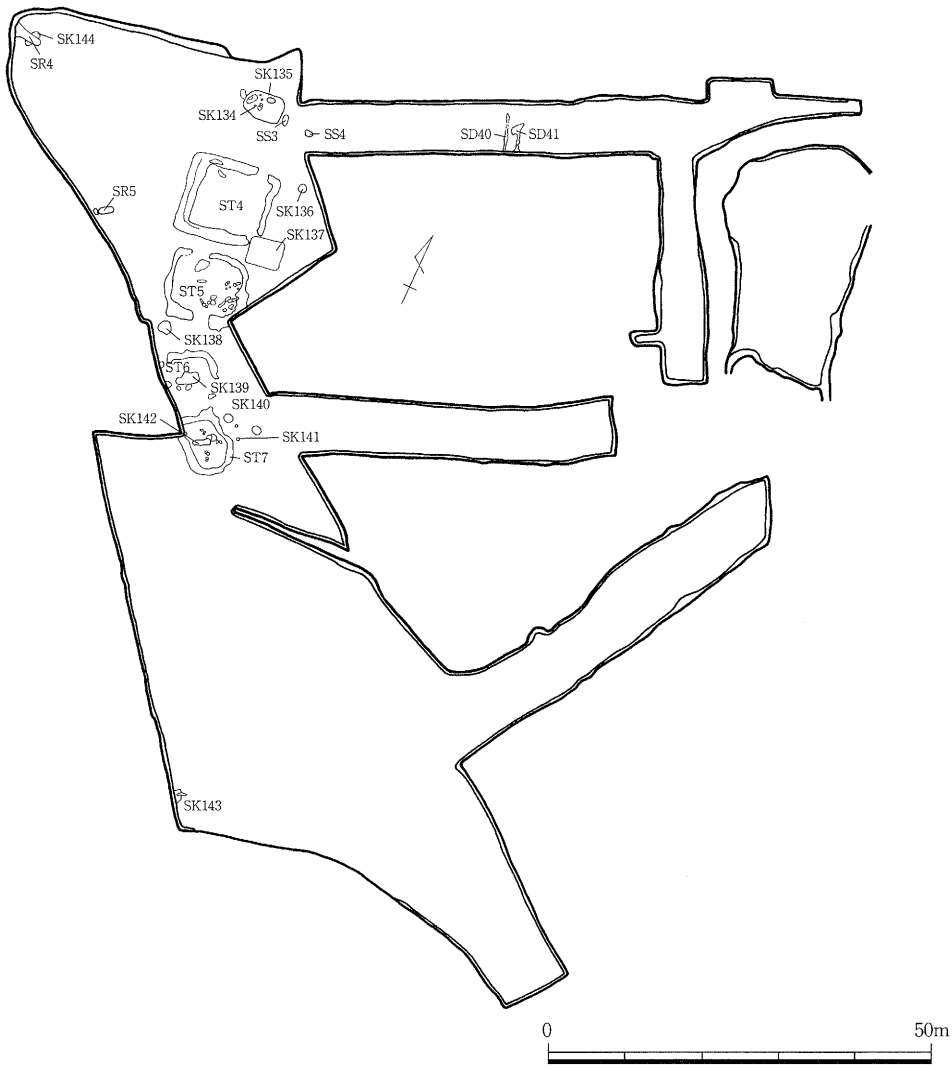
平成11年には、分譲住宅の造成に伴って、185㎡の調査（ＭＩＣ98－２）が行われた。この際には、中世（15世紀）の遺構・遺物が検出された。また個人住宅の建築に伴って、発掘調査（ＭＩＣ99－５）が行われ、古代の須恵器と、中世の瓦質土器が出土した（河内長野市教委2001）。

平成13年には、個人住宅の建築に伴って、発掘調査（ＭＩＣ01－１・ＭＩＣ01－２）が行われ、古墳の周溝が検出され、須恵器、土師器、埴輪が出土した（河内長野市教委2002）。

平成13年には、個人住宅の建築に伴って、発掘調査（ＭＩＮ01－６）も行われ、縄文土器、近世の遺構・遺物が検出された。

（２）調査の概要

今回の調査で出土した遺物で、最も遡るものは旧石器であり、もっとも新しいものは近



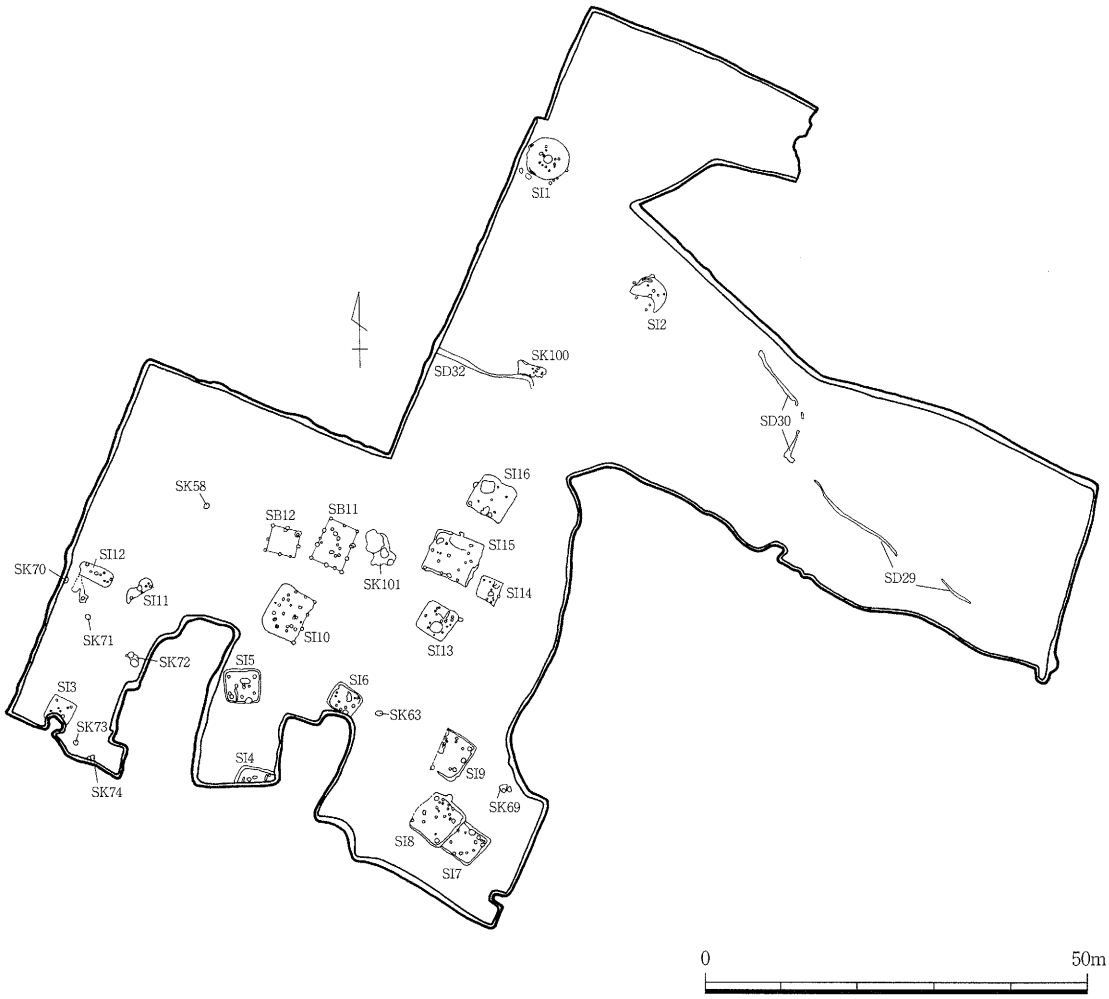
第７図　既往の調査遺構配置図（昭和60年次調査第４（88－４）調査区南部・1/1000）

世のものである。検出した遺構・遺物の量がもっとも豊富なのは弥生時代のものである。遺構としては、溝、土坑、柱穴、竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓等を検出しており、これらに伴う遺物として、弥生土器（Ⅰ様式～Ⅴ様式）、土師器（庄内期）、石器（石庖丁、石鏃、石剣、礫石器）等が出土している。また、近世の遺構として、暗渠、土坑、ピット等を検出しており、これらに伴う遺物として、陶磁器、土師質土器等が出土している。遺構の形成は、断続的に行われたようであり、古墳時代～古代にかけての遺構は希薄であり、中世の遺構はほとんど検出されていない。

先述したように、用地買収と工事の進捗に合わせて分割して発掘調査を行った。調査は、１次～13次に及んだ。本節では、時代ごとに調査成果の概要を述べる。

縄文時代

縄文時代早期の押型文土器である高山寺式土器、晩期の滋賀里式等が出土している。た



第８図　既往の調査遺構配置図（昭和60年次調査第５（88－５）調査区・1/1000）

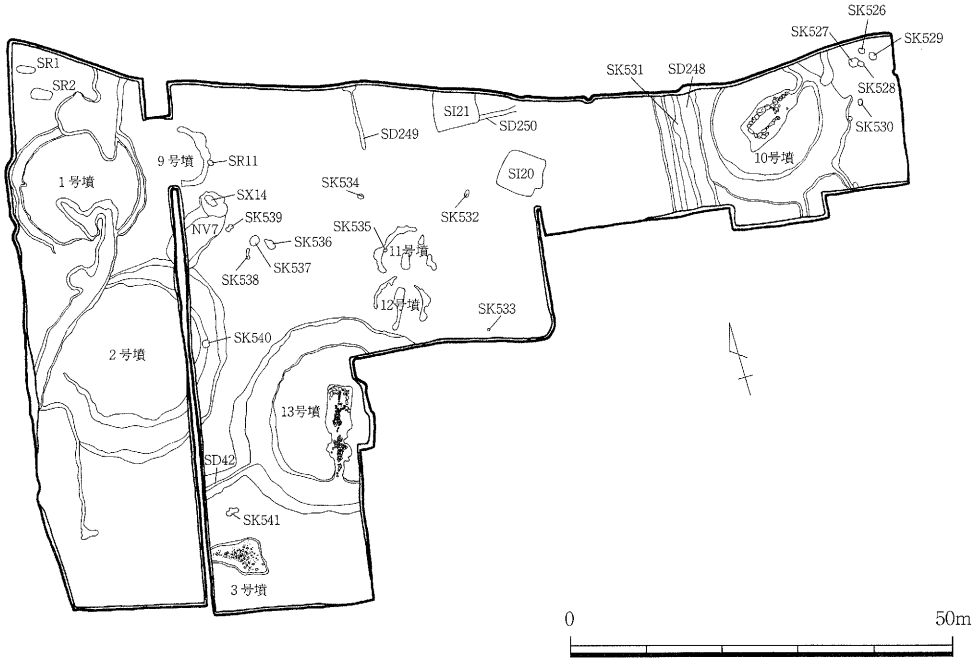
だし、同時期の遺構に伴なったものではない。

弥生時代

弥生時代の遺構は、調査区のほぼ全域から検出されている。当該調査でもっとも時期の遡る弥生時代の遺物は、ＳＤ４から、Ⅳ様式の遺物とともに出土した甕である。口縁部には多条沈線文が施文されており、Ⅰ様式まで遡ると考えられる。これに続くⅡ様式の遺物も出土しているが量が大変少ない。Ⅲ様式になると遺物の量が増加する。ＳＫ20は、Ⅲ様式でも前半のものと考えられる。

大部分の遺構は、Ⅳ様式のものである。Ⅳ様式には、居住域を区画すると考えられる溝、土坑、住居、墓等が検出されている。

溝：幅１ｍを超える大型の溝は、遺跡の西端（ＳＤ１～ＳＤ４）、南端（ＳＤ21・21）から検出されており、集落を区画する機能をもつものと考えられる。また、集落の居住域の中からも、中規模の溝（ＳＤ９・12）が検出されている。



第９図　既往の調査遺構配置図（平成４年次（ＭＩＣ92－１）調査区・1/1000）

土坑：土坑は、直径１ｍ程度のものが比較的多く検出されている。多くの土器が投棄されており、良好な一括資料として提示できるものは多くない。居住域の南端部にあたるＨ－ｆ10・Ｈ－ｅ９区ではこのような土坑が集中して検出された。

竪穴住居：竪穴住居は、調査区のほぼ全域にわたって30棟が検出されている。

掘立柱建物：掘立柱建物は、Ⅳ様式のものが２棟検出されている。

Ⅴ様式末～庄内期

庄内期の遺構は、調査区の北東隅で集中して検出されている。弥生時代後期の遺構形成の空白期間を経て、Ⅴ様式末～庄内期では、竪穴住居１棟、堀立柱建物跡、溝等を検出している。

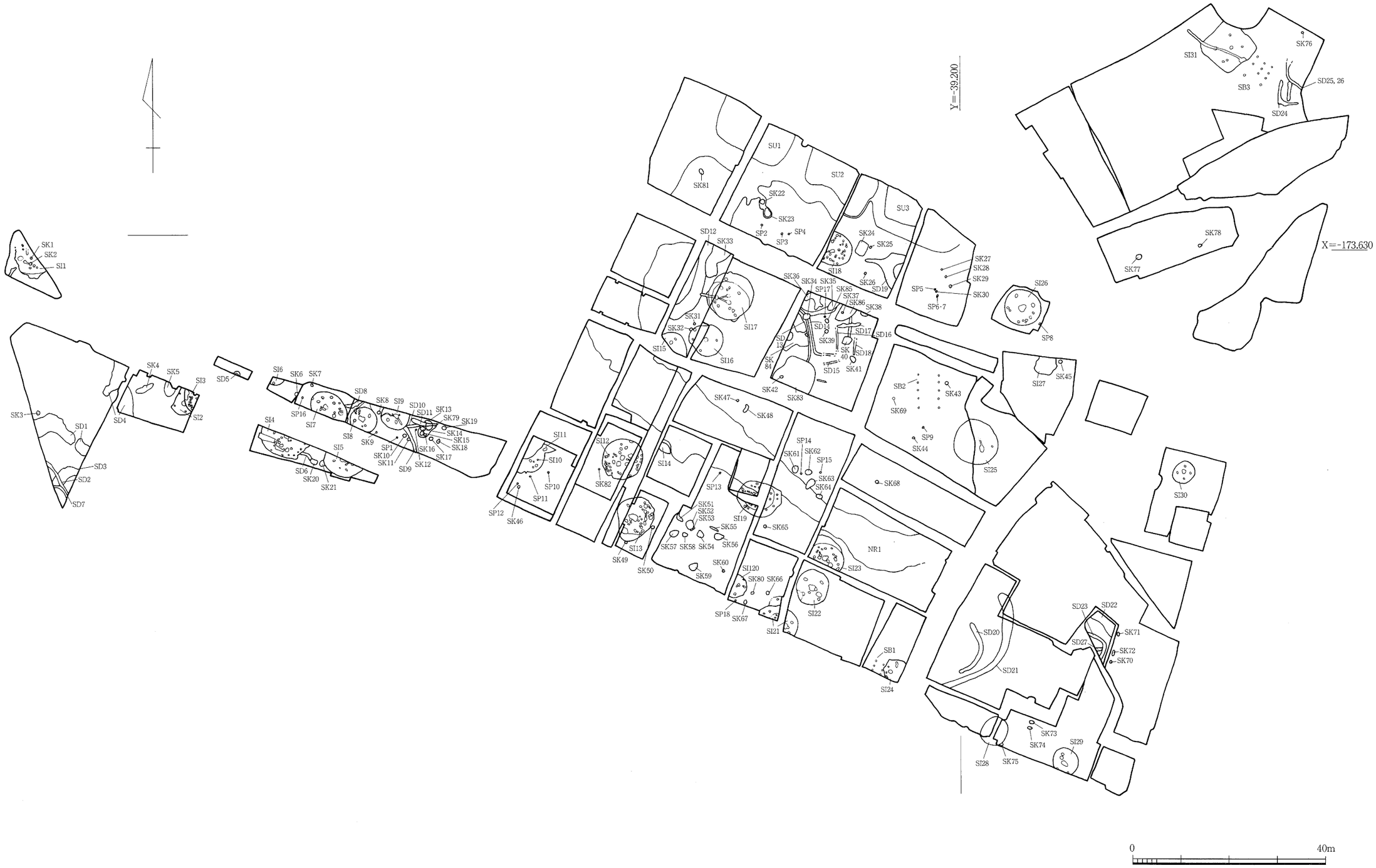
古墳時代～古代

当該時期の遺構は、極端に少ない。調査区の中央を東西にながれる流路をあげることができる。この流路からは、弥生土器に加え、古墳時代の須恵器、土師器、古代の須恵器、土師器、黒色土器が出土している。最下層から、古代の遺物が出土していることから、この流路が形成されたのは、古代であり、弥生時代の遺物包含層と遺構を削りながら形成されたようである。なお中世の遺構はほとんど検出されていない。

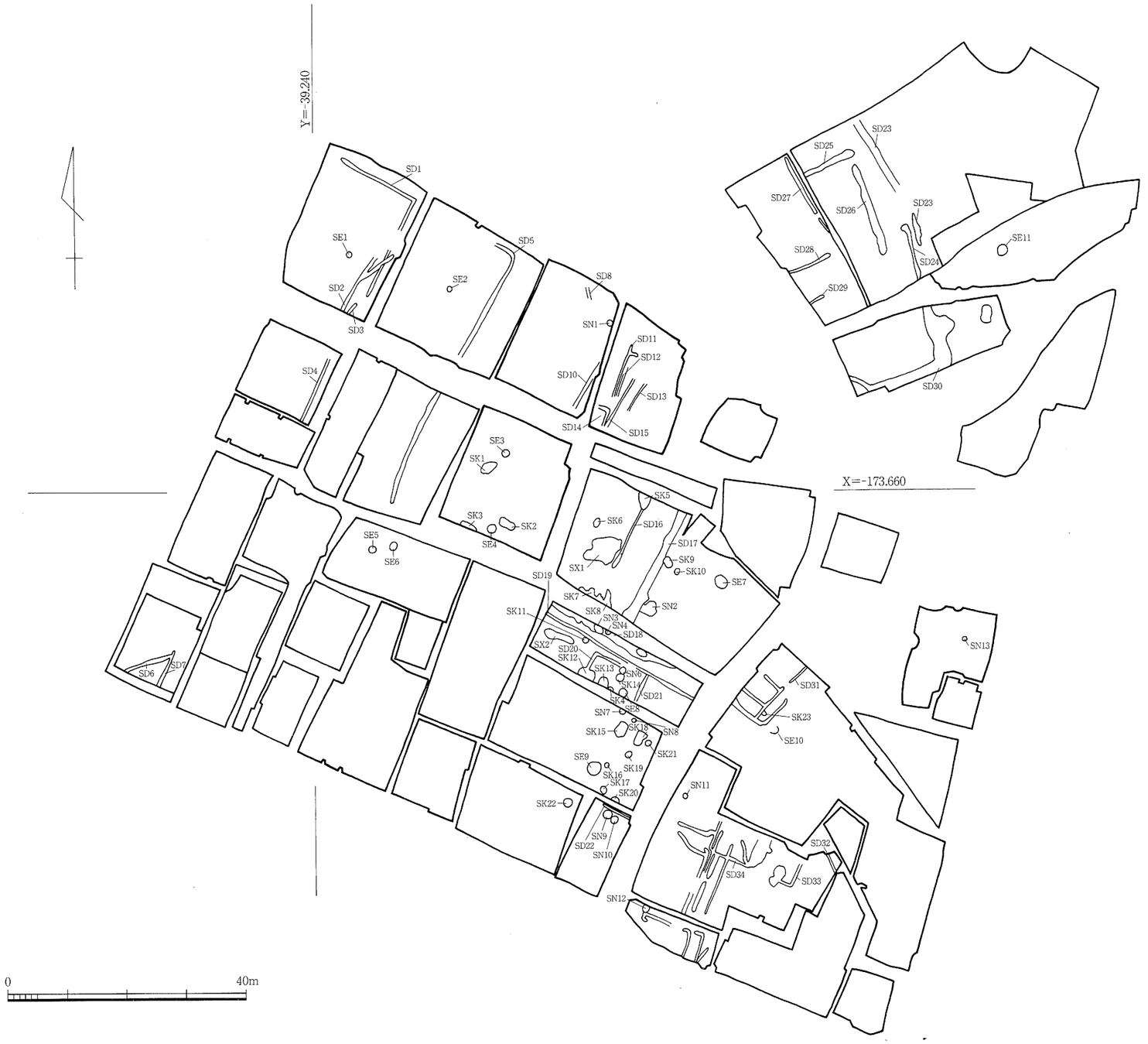
近世

近世の遺構は、調査区の東半部に集中している。この付近は、高野街道と三日市宿跡があった場所であることから、検出された遺構についても、これらに関連する遺構と思われる。

当該時期の遺構には、石組暗渠、ピット、池跡、土坑等がある。



第10図　弥生時代遺構配置図（1/800）



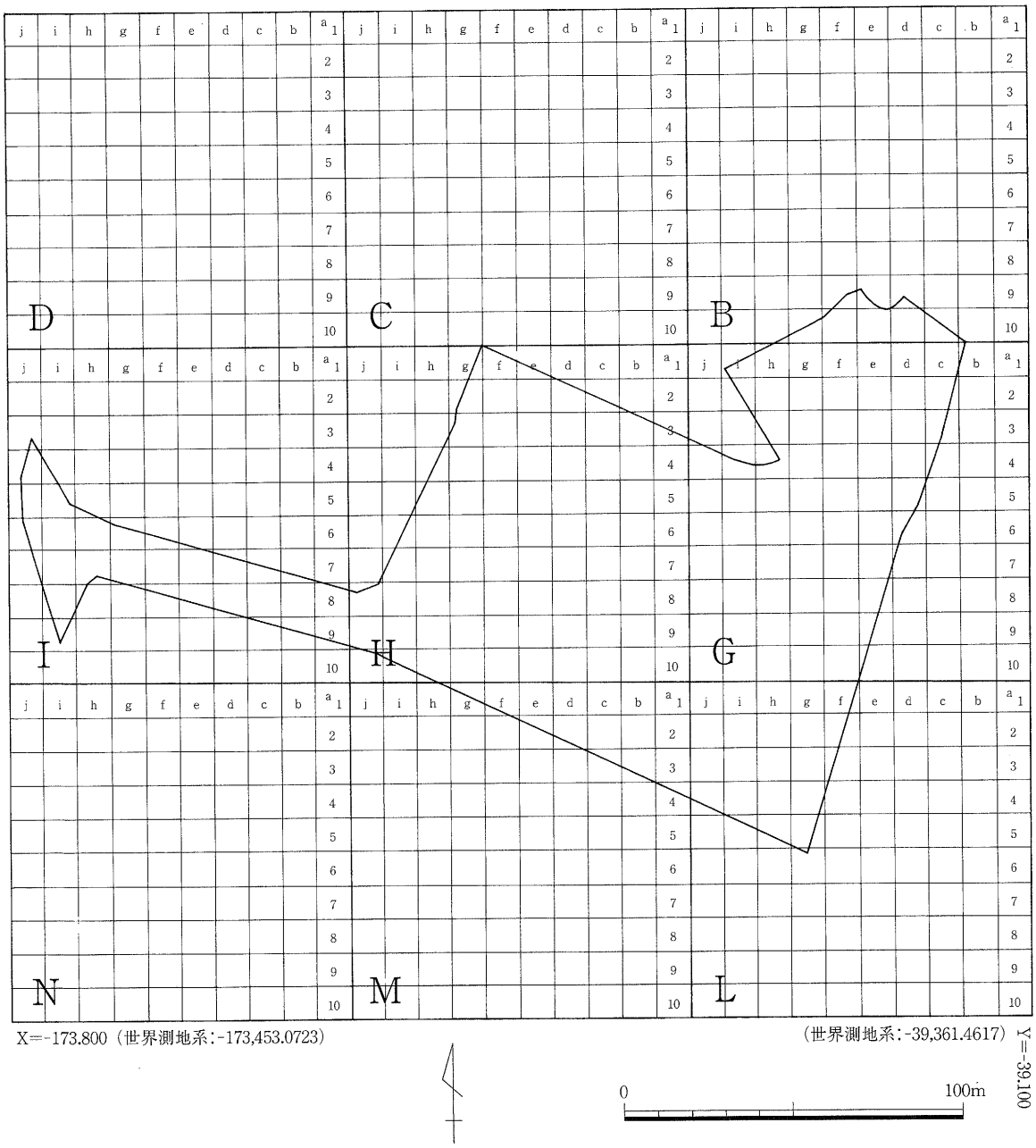
第11図　近世遺構配置図（1/800）

第２章　調査成果

第１節　調査の方法

（１）地区割

遺跡の位置は、旧測地系（日本測地系）に基づく平面直角座標の第Ⅵ座標系を使用して表示した。ただし、調査中に測量法の改正があったことから、旧測地系による座標と新測地系座標を第12図に併記した。地区割については、河内長野市発行平成13年度版１/2,500



第12図　　調査区区割図（1/2000）

都市計画基本図を基本とし、（Ｙ＝－34.900　Ｘ＝157.500）を原点として、遺跡全体を覆うように100m四方の区画を設定し、北東隅からアルファベットの大文字で各区画名を表した。次に、この100m四方の区画を100等分し、10m四方の小区画を設けた。各小区画は、北東隅から南へ１～10とアラビア数字で、西へａ～ｊアルファベットの小文字であらわし、この組み合わせを小区画名とした。したがって、各小区画は「Ｌ－ａ３」のように表した（第12図参照）。

（２）方位

方位は、地区割が国土座標に基づいていることから、座標北をもって表示した。

（３）水準

水準は、東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ．）を使用した。

（４）調査区

本調査は、用地買収や工事の進捗に併せて行わざるを得ず、また公道によって調査地が分断されていた。したがって、複数の調査区を設定し、分割して調査を行っている。分割された各調査区の番号については、調査年度ごとにＭＩＮを冠する略号を付与した（第１表・第１図）。出土遺物・原図についてはこの調査区単位で台帳管理しており、遺物への注記にもこの調査年次略号を用いた。ただし、本書の編集の際に、分割されていた調査区を合成し、各調査区の旧称は調査成果を記述する際には用いず、先述した地区割をもって示した。

（５）掘削方法

掘削は、調査区内にある現代の盛土・旧耕作土を機械掘削し、これより以下の遺物包含層は人力掘削を行った。遺構面では、精査によって遺構を検出し、写真の撮影を行った後、掘削を行った。

（６）測量

測量については、トラッククレーン、ラジコンヘリコプター及びバルーンを用いた空中測量を行い、１/20の平面図、遺構図と１/100の縮小編纂図の作成を行った。また、この他にも、必要に応じて、１/10の実測図を作成している。

（７）土層

遺構は、小型のものは半裁して、大型のものは十字の土層観察用の畦を残して掘削し，土層観察と記録の作成を行った。

（8）遺構番号

遺構番号については、発掘調査時に、旧調査区単位で遺構の種別に関係なく通し番号を付している。現地で作成した一切の記録は、この番号によっている。ただし、本書の編集の際に、遺構の種別ごとに北西から通し番号を新たに設け、本書では、この新たに付番した番号を遺構番号としている。

（9）遺物のとりあげ

遺物は、必要に応じて出土状況図を作成した後、取り上げを行った。取り上げは、小区画単位で層序・遺構ごとに行い、必要に応じて取り上げ番号をつけた。
遺構の掘削、遺物の取り上げが終了した時点で、調査区全体の垂直写真と斜め写真を撮影した。

(10) 弥生土器の分類

三日市北遺跡では弥生時代中期の土器が多量に出土している。ここでは記述の煩雑さを避けるために、一部の器種の分類を行う。対象とする器種は、広口壺・甕・鉢・高坏である。本遺跡から出土する土器は、ほとんどが破片で、全体の形態を知りえるものは少ない。そこで、広口壺については口縁部の形態によって、甕については法量と口縁部の形態によって分類し、鉢・高坏についても坏部の形態で分類した。それぞれの器種では、形態での分類と、胎土・調整にある程度の相関性が認められた。以下、形態の分類を記述し、相関性の高い属性についても併記する。

広口壺の分類

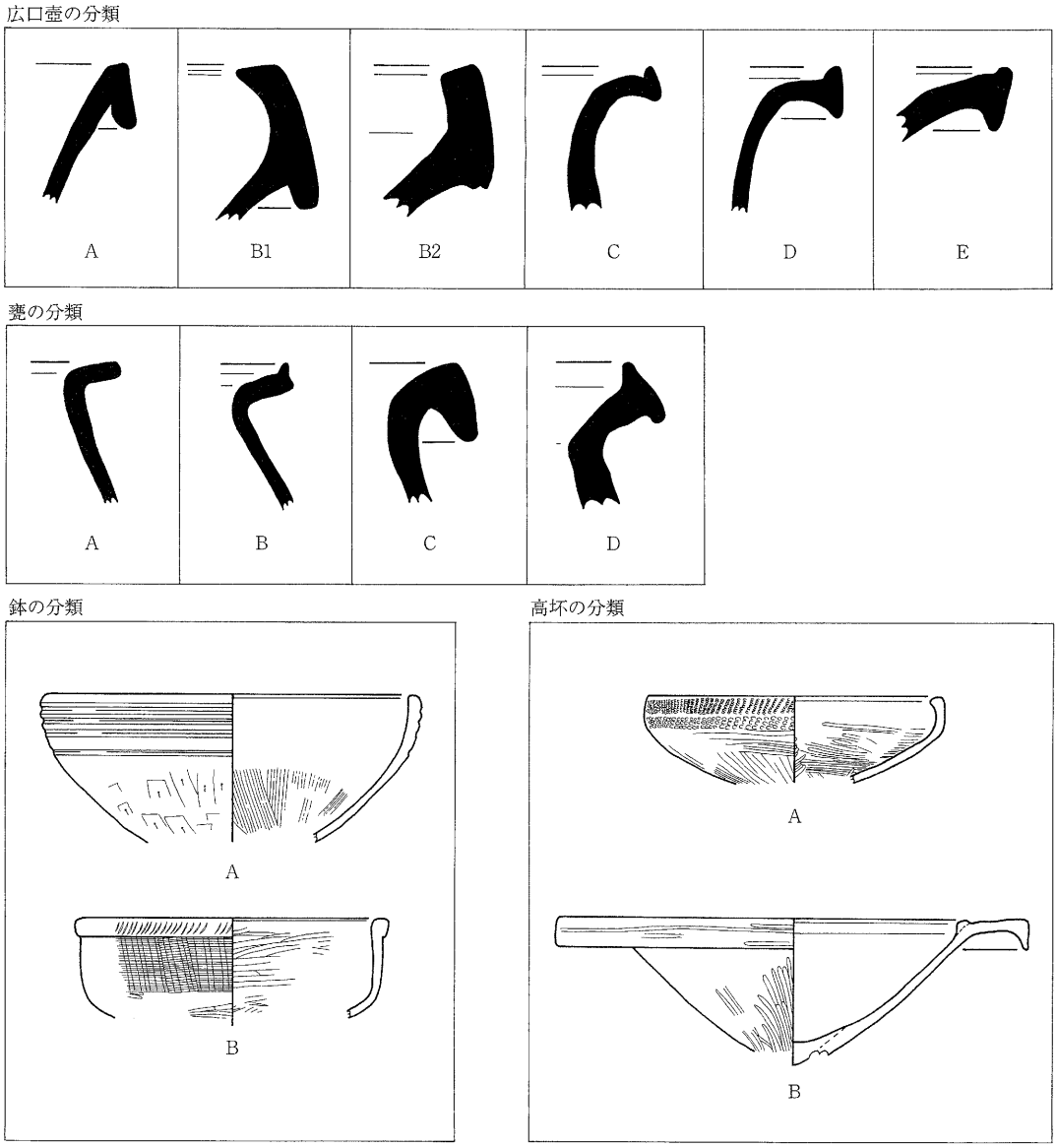
A　頸部が直線的、もしくは外反して広がり、口縁端部を下方向に拡張する。口縁端部の形態は時期差のメルクマールになる。胎土は角閃石を含み茶褐色を呈するものが多い。文様は簾状文を施文するものが多い。また、頸部以下の形態が判明したものについてのみ、長頸のものをＡ１類、短頸のものをＡ２類に細分する。

B　頸部が直線的、もしくは外反して広がり、口縁部は受け口状を呈する。口縁端部を下方向にも拡張するものをＢ１類、上方向にのみ拡張するものをＢ２類と細分する。

C　頸部は筒状に短く立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は上方向にのみ拡張する。胎土は角閃石を含まないものが多い。

D　頸部は筒状に短く立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は上下方向に拡張する。胎土は角閃石を含まないものが多い。

E　頸部は大きく外反し、口縁端部は上下方向に拡張する。胎土は角閃石を含まないものが多い。



第13図　弥生土器分類図

甕の分類

前述のように甕は口縁部の形態と法量により分類する。

A　小型の甕である。頸部はくの字状、または逆Ｌ字状を呈する。胎土は角閃石を含み茶褐色を呈するものが多い。調整は内外面をミガキで仕上げるものがほとんどである。従来「河内型甕」と呼ばれるものである。

B　小型の甕である。頸部は明瞭な稜を持ってくの字状に屈曲し、口縁端部を上方向に拡張する。口縁端部には凹線を施すものもある。胎土は角閃石を含まないものが多く、調整は内外面を粗いハケで仕上げるものがほとんどである。

C　大型の甕である。頸部は緩やかに外反し、口縁端部は下方向に拡張する。口縁端部の拡張傾向は、時期が下るにつれて顕著となる。胎土は角閃石を含み茶褐色を呈するものが多い。内外面を磨きで仕上げるものが大多数である。

D　大型の甕である。頸部は明瞭な稜を持ってくの字状に屈曲し、口縁端部は上方向または上下方向に拡張する。胎土には角閃石を含まないものが多く、内外面を粗いハケ調整し、体部下半をミガキで仕上げるものが多い。

鉢の分類

鉢は前述のように鉢部の形態で分類する。完形の個体がないため底部、脚部の形態は不明である。

A　体部が底部から口縁部まで内湾しながら開く。小型のものから大型のものまで一括する。

B　口縁部が底部から屈曲して直立する。口縁端部は下方向に拡張し、拡張傾向は時期が下るにしたがって顕著となる。時期が下ると、拡張した口縁端部が体部に密着して段状を呈するものも出現する。小型のものから大型のものまで一括する。

高坏の分類

高坏も坏部の形態で分類する。鉢同様完形の個体がないため脚部の形態は不明である。

A　坏部が椀状を呈する。底部から内湾しながら広がるものと底部から屈曲して直立する口縁を持つものがある。

B　水平にのびる口縁を持ち、口縁端部を下方向に拡張する。時期が下るにつれて口縁端部の拡張傾向が顕著となる。

第２節　調査区の地形と基本層序

（１）調査区の地形

調査地は、天見川が金剛山の西裾を侵食して、形成した河岸中・低位段丘上にある（第３図　参照)。したがって、天見川に近い西部が低く、金剛山に近い東部が高くなっている。調査地西端では、標高約118.00m、東端では約125.00mであり、約７mほどの比高差がある。調査地のすぐ西には、天見川と並行して段丘崖１が南北に走っている。段丘崖１の下面では、砂礫層が広がっており、遺物包含層は認められないことが試掘調査や工事立会によって確認されている。このようなことから、調査区以西に遺構や遺物包含層が広がっていくことは考えにくい。調査区の東は、河岸段丘から丘陵部への傾斜変換点となっていることから、弥生時代集落域の東端と考えても誤りないと思われる。

一方で、北方向には、比較的平坦な面が続いていることから、集落域の広がりが予想できる。南方向も平坦な面が続いているが、南方向100mには、石見川が東西方向にながれており、この川より南では弥生時代の遺構は確認されていない。おそらくは、この河川が弥生時代集落域の南限を画するものであろう。なお、調査区内にも、ほぼ中央で南北にはしる段丘崖２が存在している。

調査地の現状は、大部分が耕作地を経て宅地となっている。本来ゆるやかな東から西へ向かう斜面地であったと考えられる場所が、宅地単位で、切土と盛土によって平坦に造成されている。特に遺跡の東端は、近世に高野街道と三日市宿が設置された場所であり、古くから平坦に造成されていたようである。

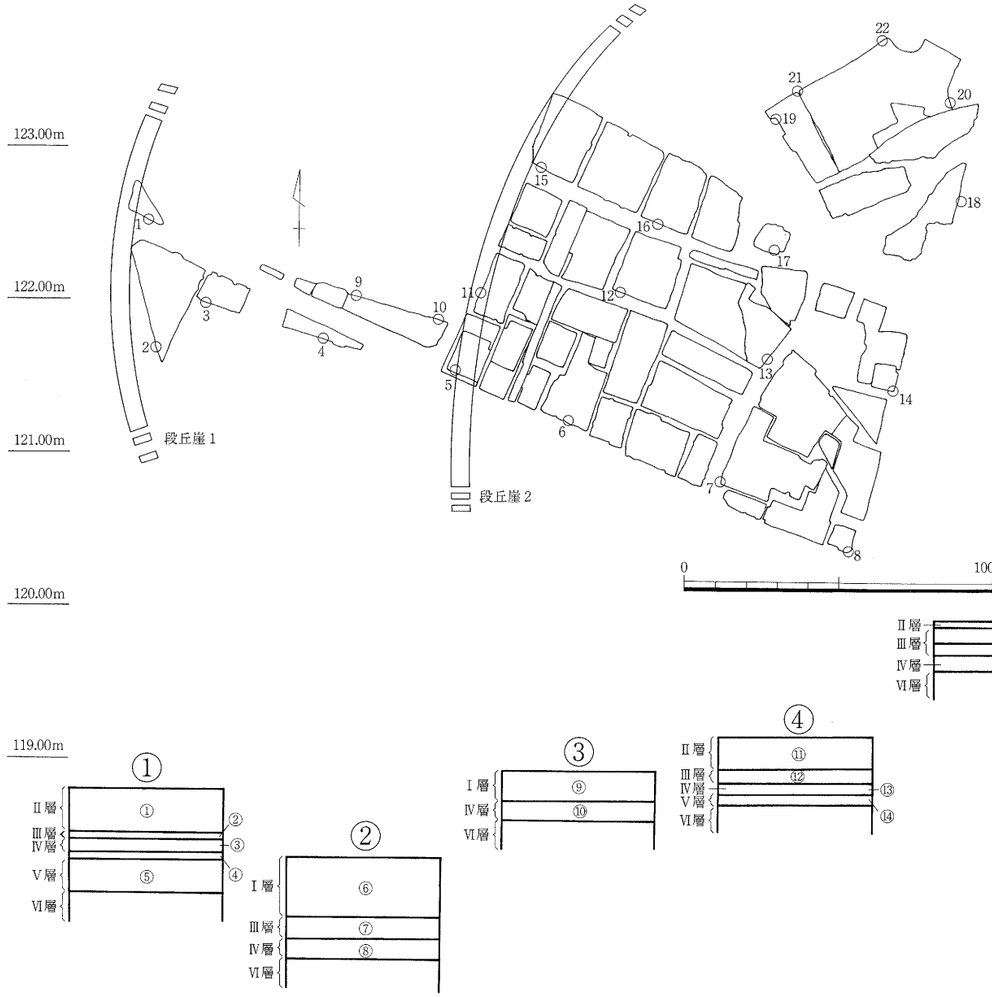
（２）基本層序

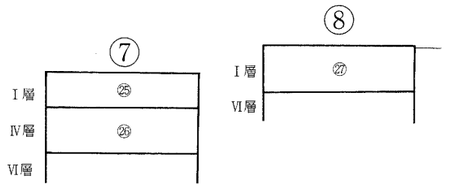
調査区内の層序については、各調査区壁で観察を行い、記録を残しているが、ここでは、流路や遺構の影響を受けていない地点を選び①～㉒の地点の土層柱状図を作成した。各地点で認められた層序は大きくⅠ～Ⅳの層に分けることができる。

Ⅰ層　現代の盛土層である。調査地全域では認められず、部分的に存在する。宅地造成の際に盛土され形成されたと考えられる。土質は場所によって様々であったが、褐色系の礫混じりシルトで構成されているものが多い。層厚は場所によって異なるが0.3～0.5mであった。

Ⅱ層　近世～近代の耕作土であり、褐灰色系の細砂まじりシルトを主体とする。層厚は概ね0.1m～0.3mである。ほぼ、調査区全面にわたって認められた。

Ⅲ層　近世～近代の耕作土に伴う床土であり、橙色系の細砂まじり微砂～シルトを主体とする。層厚は概ね0.1mである。調査区全面にわたって認められた。近世の遺物が含まれる。

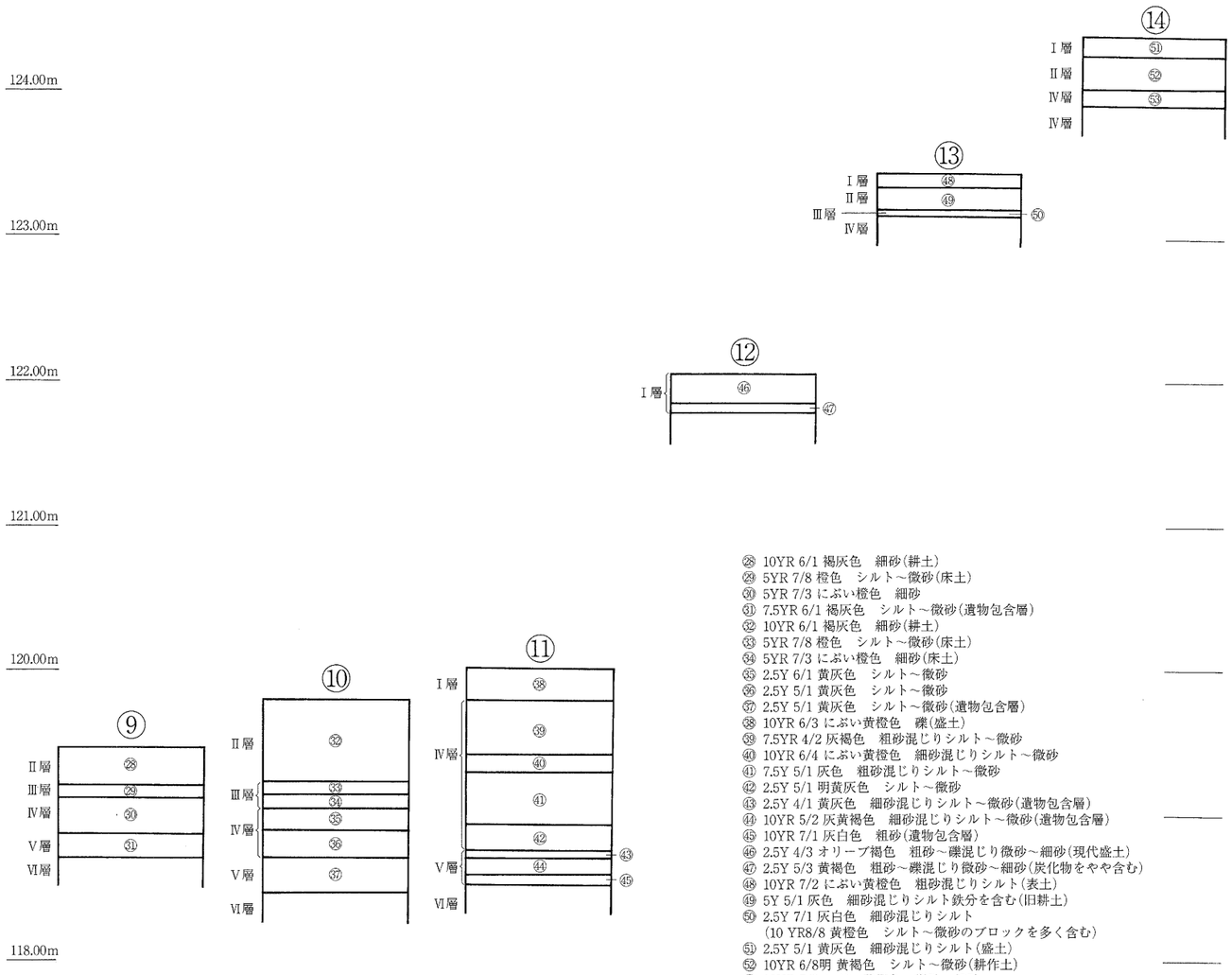




① 10YR 6/1 褐灰色　細砂(耕土)
② 5YR 7/8 橙色　シルト～微砂(床土)
③ 10YR 6/3 にぶい黄橙色　シルト
④ 7.5YR 7/8 黄橙色　シルト～微砂
⑤ 10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂
⑥ 2.5YR 8/8 黄色　シルト～微砂
(7.5YR 3/4 暗褐色　シルトを多く含む)(盛土)
⑦ 5Y 6/8 橙色　シルト～微砂(床土)
⑧ 10YR 4/2 灰黄褐色　シルト～微砂(遺物包含層)
⑨ 2.5YR 8/8 黄色　シルト～微砂
(7.5YR 3/4 暗褐色　シルトを多く含む)(盛土)
⑩ 7.5YR 4/2 灰褐色　シルト～微砂(礫を少量含む)
⑪ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　粗砂混じりシルト(耕土)
⑫ 7.5YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂(床土)
⑬ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂
⑭ 2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～微砂
(10YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂のブロックを多く含む)(遺物包含層)
⑮ 2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～微砂(耕土)
⑯ 10YR 5/6 黄褐色　シルト～微砂(床土)
⑰ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂(床土)
⑱ 2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルト～微砂
(10YR 5/2 灰黄褐色　シルト～微砂を含む)
⑲ 撹乱
⑳ 10YR 4/1 褐灰色　シルト～微砂(耕土)
㉑ 7.5YR 5/6 明褐色　シルト～微砂(床土)
㉒ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂(近世耕作土)
㉓ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂
(2.5Y 6/1 黄灰色　シルト～微砂のブロックを多く含む)
㉔ 2.5Y 6/2 灰黄色　シルト～微砂
㉕ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(盛土)
㉖ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(遺物包含層)
㉗ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(表土)

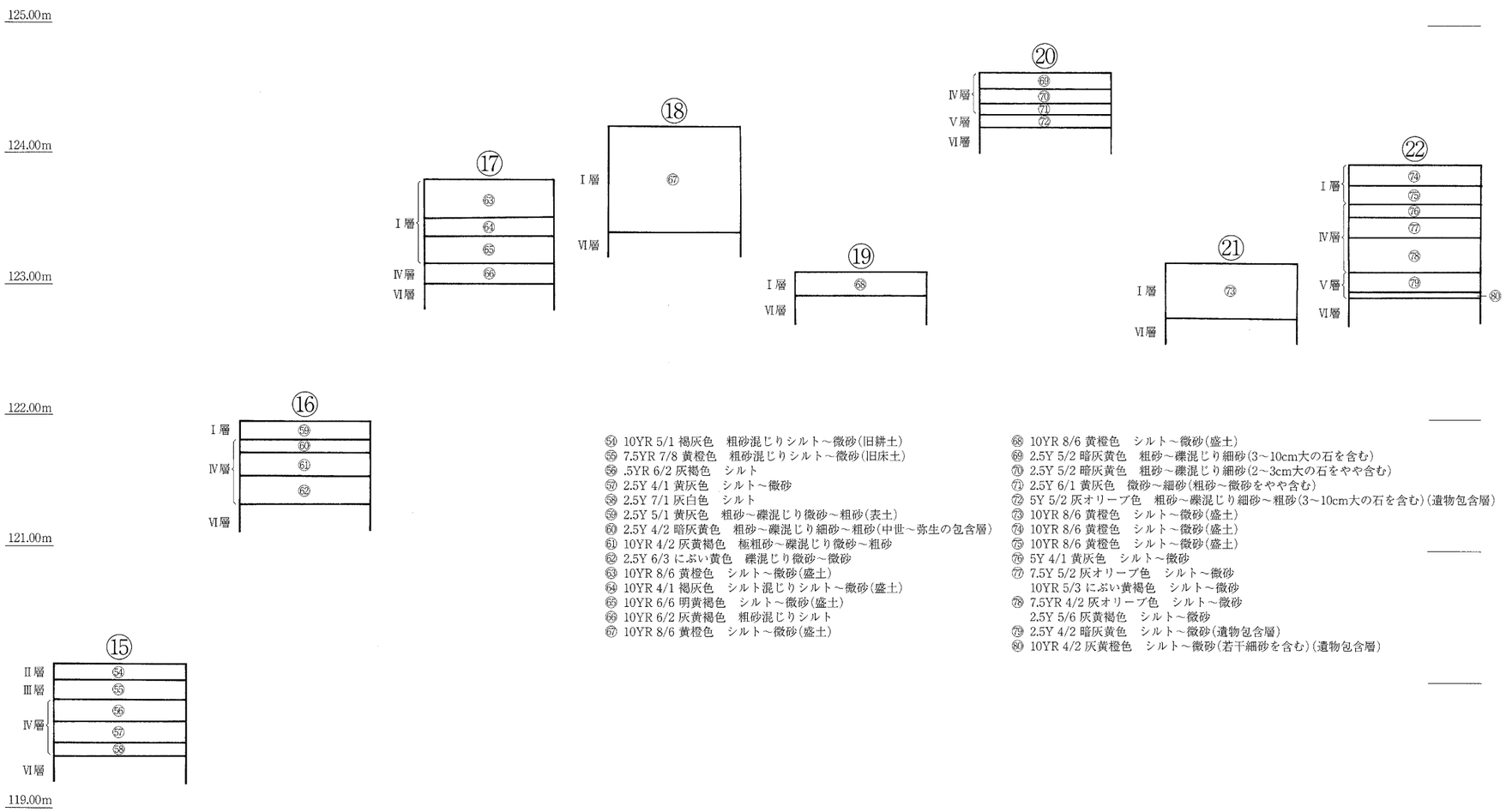
0　2m

第14図　土層断面柱状図1 (1/40)



㉘ 10YR 6/1 褐灰色　細砂(耕土)
㉙ 5YR 7/8 橙色　シルト～微砂(床土)
㉚ 5YR 7/3 にぶい橙色　細砂
㉛ 7.5YR 6/1 褐灰色　シルト～微砂(遺物包含層)
㉜ 10YR 6/1 褐灰色　細砂(耕土)
㉝ 5YR 7/8 橙色　シルト～微砂(床土)
㉞ 5YR 7/3 にぶい橙色　細砂(床土)
㉟ 2.5Y 6/1 黄灰色　シルト～微砂
㊱ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂
㊲ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂(遺物包含層)
㊳ 10YR 6/3 にぶい黄橙色　礫(盛土)
㊴ 7.5YR 4/2 灰褐色　粗砂混じりシルト～微砂
㊵ 10YR 6/4 にぶい黄橙色　細砂混じりシルト～微砂
㊶ 7.5Y 5/1 灰色　粗砂混じりシルト～微砂
㊷ 2.5Y 5/1 明黄灰色　シルト～微砂
㊸ 2.5Y 4/1 黄灰色　細砂混じりシルト～微砂(遺物包含層)
㊹ 10YR 5/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト～微砂(遺物包含層)
㊺ 10YR 7/1 灰白色　粗砂(遺物包含層)
㊻ 2.5Y 4/3 オリーブ褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(現代盛土)
㊼ 2.5Y 5/3 黄褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(炭化物をやや含む)
㊽ 10YR 7/2 にぶい黄橙色　粗砂混じりシルト(表土)
㊾ 5Y 5/1 灰色　細砂混じりシルト鉄分を含む(旧耕土)
㊿ 2.5Y 7/1 灰白色　細砂混じりシルト
(10 YR8/8 黄橙色　シルト～微砂のブロックを多く含む)
(51) 2.5Y 5/1 黄灰色　細砂混じりシルト(盛土)
(52) 10YR 6/8明 黄褐色　シルト～微砂(耕作土)
(53) 10YR 7/3 にぶい黄橙色　微砂～細砂

第15図　土層断面柱状図２ (1/40)



54 10YR 5/1 褐灰色　粗砂混じりシルト～微砂(旧耕土)
55 7.5YR 7/8 黄橙色　粗砂混じりシルト～微砂(旧床土)
56 .5YR 6/2 灰褐色　シルト
57 2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂
58 2.5Y 7/1 灰白色　シルト
59 2.5Y 5/1 黄灰色　粗砂～礫混じり微砂～粗砂(表土)
60 2.5Y 4/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じり細砂～粗砂(中世～弥生の包含層)
61 10YR 4/2 灰黄褐色　極粗砂～礫混じり微砂～粗砂
62 2.5Y 6/3 にぶい黄色　礫混じり微砂～微砂
63 10YR 8/6 黄橙色　シルト～微砂(盛土)
64 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じりシルト～微砂(盛土)
65 10YR 6/6 明黄褐色　シルト～微砂(盛土)
66 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト
67 10YR 8/6 黄橙色　シルト～微砂(盛土)
68 10YR 8/6 黄橙色　シルト～微砂(盛土)
69 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じり細砂(3～10cm大の石を含む)
70 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じり細砂(2～3cm大の石をやや含む)
71 2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～細砂(粗砂～微砂をやや含む)
72 5Y 5/2 灰オリーブ色　粗砂～礫混じり細砂～粗砂(3～10cm大の石を含む)(遺物包含層)
73 10YR 8/6 黄橙色　シルト～微砂(盛土)
74 10YR 8/6 黄橙色　シルト～微砂(盛土)
75 10YR 8/6 黄橙色　シルト～微砂(盛土)
76 5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂
77 7.5Y 5/2 灰オリーブ色　シルト～微砂
10YR 5/3 にぶい黄褐色　シルト～微砂
78 7.5YR 4/2 灰オリーブ色　シルト～微砂
2.5Y 5/6 灰黄褐色　シルト～微砂
79 2.5Y 4/2 暗灰黄色　シルト～微砂(遺物包含層)
80 10YR 4/2 灰黄橙色　シルト～微砂(若干細砂を含む)(遺物包含層)

第16図　土層断面柱状図３ (1/40)

Ⅳ層　耕作地化される以前に堆積した土である。弥生時代と中・近世の遺物が含まれる。土質は場所によって異なるが、灰褐色系の礫混じりシルト～微砂を主体とする。

Ⅴ層　弥生時代の遺物包含層であり、灰褐色系のシルト～微砂を主体とする。層厚は概ね0.1～0.3mである。調査地全域では認められず、盛土によって造成され、切土を免れた場所に存在する。

Ⅵ層　いわゆる地山と呼ばれる無遺物層である。すべての遺構はⅥ層上面で検出している。

地山層を構成する層は、シルト～徴砂と礫混じり細砂が交互に堆積しており、①～③地点では、灰白色系の礫混じり細砂、④～⑦・⑨・⑩では、黄色系もしくは、これがグライド化した青灰色系のシルト～徴砂となっている。⑧地点では、ふたたび灰白色系の礫混じり細砂となっている。地山層がグライド化している⑩地点は、湧水が激しく遺構が形成された時期も湿地であったようで、竪穴住居はほとんど検出されていない。この他の場所では、地山層の違いには関係なく遺構が検出されている。

（3）遺構面

遺構面は、先述したように、緩やかな西向きの斜面地であるが、①地点から④地点までは比較的平坦な面が続き、⑩地点から⑤地点では、急な勾配を持った斜面に変わっている。周囲も含めた現状地形からの観察によって、この場所には南北方向に段丘崖（段丘崖２）が形成されている状況が観察できる。この勾配も遺構が形成された時期における段丘崖の一部を構成したものであろう。また、この段丘崖直下は、先述したようにグライド化した地山が広がっており、湿地帯であったとみられる。このため、⑩地点では遺構は、ほとんど検出されていない。⑤地点から⑧地点にかけては、ふたたび比較的平坦な面が続き、㉒に至る。この平坦面の中央部には、古代に形成されたと考えられる流路が位置しており、弥生時代の集落の中心部を押し流している。

第３節　弥生時代～古代の遺構・遺物

本節では、弥生時代～古代にかけての遺構と遺物について述べる。弥生時代の遺構は、竪穴住居31棟（庄内期のもの１棟を含む）をはじめとし、掘立柱建物、土坑、溝、ピット、方形周溝墓が検出でき、弥生土器、木器、石器が出土している。これに対して古墳時代～古代にかけての遺構・遺物は極めて少ない。次の節で報告する近世の遺構群とは年代的に断絶している。

（１）竪穴住居

〔ＳＩ１〕

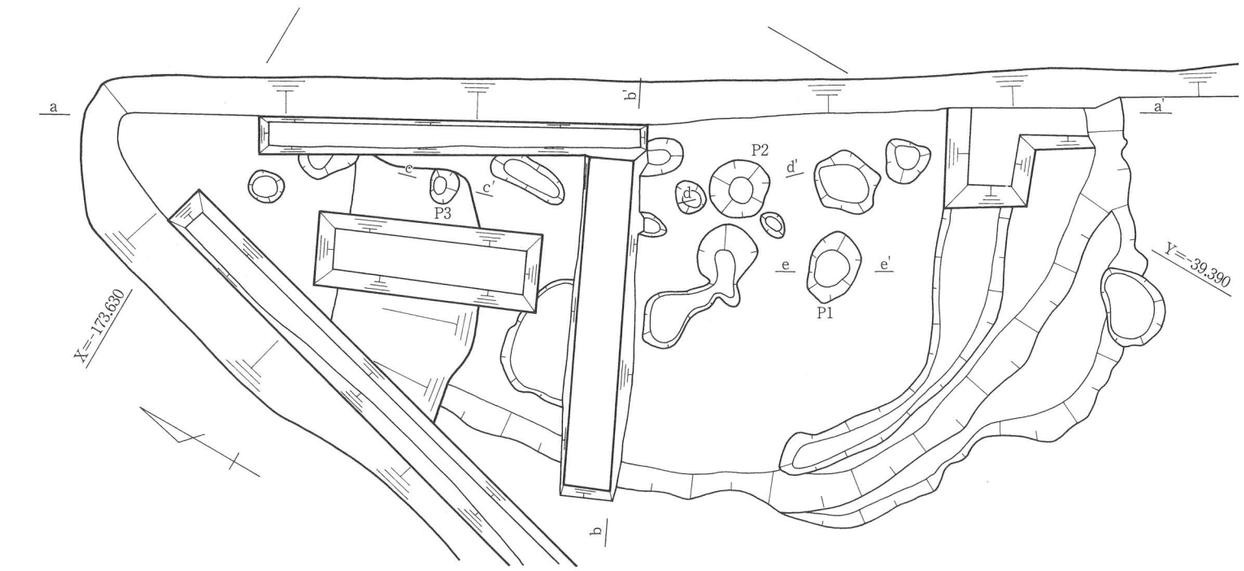
１．遺構（第17図、図版３）

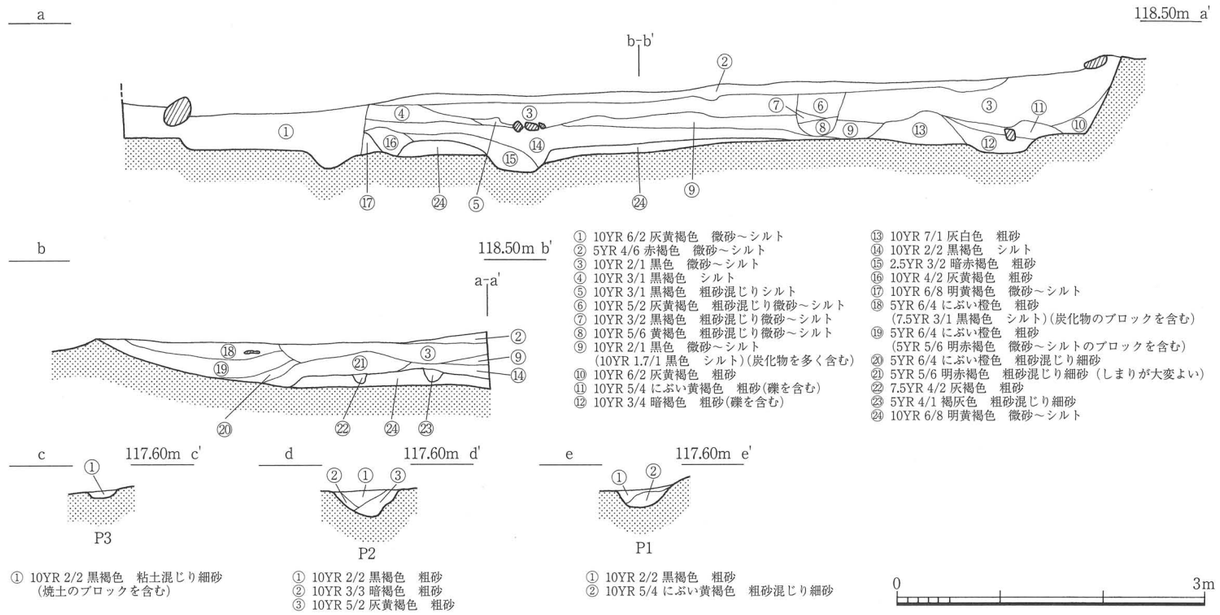
Ｉ－ｉ４・Ｉ－ｊ４区にまたがって位置する竪穴住居である。ＳＩ１が検出された調査区が孤立しているため、周囲の遺構との関連については、不明であるが、住居掘形肩部からはピットが検出されている。住居南部は遺存状況が良好であり、上層には遺物包含層が遺存している。一方、北部は大きく削平を受けており、ＳＩ１の床面下まで削平が及んでいる。現状での地形は、ＳＩ１の西５ｍに、段丘崖１が南北方向にはしっており、ＳＩ１が機能していた当時にもこの段丘崖１は存在していたと考えられる。本章第２節（１）で述べたように、この段丘下面には、遺構が分布していないことが想定できるので、ＳＩ１は集落の西端に位置しているといえる。

ＳＩ１の平面形は円形を呈しており、掘形の直径は８ｍ前後になると想定できる。床面から、検出面までの高さは、最も遺存状況が良好であった場所で0.7ｍであった。検出面の標高は118.14ｍであった。当該、竪穴住居の調査は、北半部が調査区外にあり、検出した南半部もその西側半分が削平されている。この結果、当該調査では、約1/4程度を調査することができたことになる。

ＳＩ１の掘形は、10ＹＲ7/3にぶい黄橙色シルトの地山面を基盤として検出された。地山面には、礫が多く含まれていた。住居の覆土が黒褐色系のシルトであったため、掘形は、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、約60度の勾配をもっている。覆土（②層～⑤層及び⑨層～㉑層）は、周囲に形成された弥生時代の遺物包含層に起因すると考えられ、他の時期の遺物は含まれていない。床については、基盤層を掘込んで掘形をつくった後、起伏をもった掘形底部に置土（㉔層）を行い、水平な床面をつくり出している。床面の直径は、６～７ｍ前後と想定でき、壁溝、土坑が検出されている。これらは、すべて掘形底部で検出した。また、炉や排水溝は検出されていない。

壁溝は、掘形に沿って、南側からのみ検出され、幅0.2～0.7ｍ、深さ0.15ｍで、長さ５ｍにわたり検出できた。壁溝は完周しない。





① 10YR 6/2 灰黄褐色　微砂～シルト
② 5YR 4/6 赤褐色　微砂～シルト
③ 10YR 2/1 黒色　微砂～シルト
④ 10YR 3/1 黒褐色　シルト
⑤ 10YR 3/1 黒褐色　粗砂混じりシルト
⑥ 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
⑦ 10YR 3/2 黒褐色　粗砂混じり微砂～シルト
⑧ 10YR 5/6 黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
⑨ 10YR 2/1 黒色　微砂～シルト
(10YR 1.7/1 黒色　シルト)(炭化物を多く含む)
⑩ 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂
⑪ 10YR 5/4 にぶい黄褐色　粗砂(礫を含む)
⑫ 10YR 3/4 暗褐色　粗砂(礫を含む)
⑬ 10YR 7/1 灰白色　粗砂
⑭ 10YR 2/2 黒褐色　シルト
⑮ 2.5YR 3/2 暗赤褐色　粗砂
⑯ 10YR 4/2 灰黄褐色　粗砂
⑰ 10YR 6/8 明黄褐色　微砂～シルト
⑱ 5YR 6/4 にぶい橙色　粗砂
(7.5YR 3/1 黒褐色　シルト)(炭化物のブロックを含む)
⑲ 5YR 6/4 にぶい橙色　粗砂
(5YR 5/6 明赤褐色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑳ 5YR 6/4 にぶい橙色　粗砂混じり細砂
㉑ 5YR 5/6 明赤褐色　粗砂混じり細砂（しまりが大変よい）
㉒ 7.5YR 4/2 灰褐色　粗砂
㉓ 5YR 4/1 褐灰色　粗砂混じり細砂
㉔ 10YR 6/8 明黄褐色　微砂～シルト

① 10YR 2/2 黒褐色　粘土混じり細砂
(焼土のブロックを含む)

① 10YR 2/2 黒褐色　粗砂
② 10YR 3/3 暗褐色　粗砂
③ 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂

① 10YR 2/2 黒褐色　粗砂
② 10YR 5/4 にぶい黄褐色　粗砂混じり細砂

第17図　ＳＩ１平面図・土層断面図（1/60）

ピットは10箇所検出された。竪穴住居掘形検出面から床面まで、相当の深さがあることから、これらは、竪穴住居に伴うものとみてよいと思われる。この内、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３は、その規模から、主柱穴の候補とすることができる。Ｐ１は、長軸0.7m、短軸0.45m、掘形底面からの深さは0.2mであった。Ｐ２は、直径0.6m、地山面からの深さは0.25mであった。調査できた床面の範囲が狭かったことから、主柱穴の配置を復元するには至らなかった。この他、Ｐ３は上部が削平され、底部がかろうじて遺存していたものであるが、埋土に焼土のブロックを含んでおり、特筆できる。

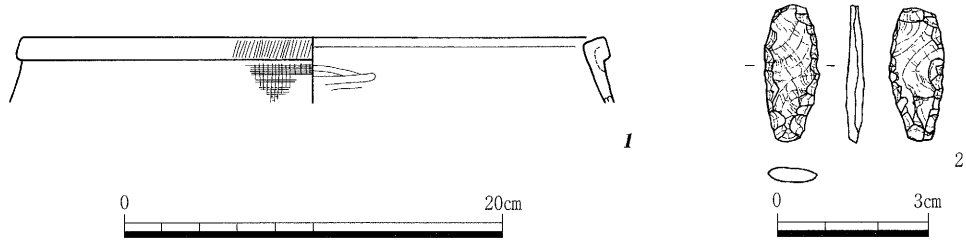
２．遺物（第18図、図版50・99）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。これらは、いずれも、床面に穿たれたピットより出土したものである。図化ができたのは、以下に述べる２点である。１は鉢Ｂの口縁部である。Ｐ３から出土した。全体の５％足らずの小片であり、復元口径は不明である。口縁部は、段状に肥厚しており、体部には、間隔の短い簾状文を施文している。Ⅳ様式に該当する。２はサヌカイト製の凸基式石鏃である。先端部が欠損しており、全長2.61cm、幅1.01cm、厚さ0.31cmをはかる。壁溝より出土した。

３．まとめ

当該竪穴住居は、集落西端の段丘崖１の際に位置する。住居内のピットから出土した遺物はⅣ様式のものであった。また、住居上部に形成された遺物包含層から出土した遺物は、Ⅱ様式、Ⅲ様式の遺物が若干含まれるものの、大部分がⅣ様式のものである。このようなことから、Ⅳ様式を中心に当該住居が機能していたことが推定できる。

調査を行うことができた範囲は全体の1/4程度であり、炉や主柱穴の多くは検出できていない。住居掘形の直径は約８m程度に復元できる。なお、調査区が狭く、今回の一連の調査では、はじめて検出された竪穴住居であったために、当該遺構が竪穴住居であることを認識するのが遅れ、当初は段丘崖の一部を構成する落ち込みであろうと推定していた。この認識の遅れのために、本来、床面上から掘り込まれたと推定される壁溝やピットを掘形底面で検出するという間違いを犯してしまったことを付記しておく。



第18図　ＳＩ１出土遺物

〔ＳＩ２〕

１．遺構（第19図、図版３）

Ｉ－ｇ７・Ｉ－ｇ８区にまたがって位置する竪穴住居である。当該遺構は、近現代の溝によって西側を破壊されている。また、ＳＩ３と重複して築造されている。周囲には東方向10mにＳＩ４を中心とする住居群がある。一方、西方向７ｍには、比較的大きな溝であるＳＤ４が位置する。ＳＤ４よりも南西では、住居は確認されておらず、より西では段丘崖１が南北にはしっている。段丘崖１の下面では遺構は存在しないものと推定される。このようなことからＳＩ１と同様に、集落の西端に位置するといえる。周囲は、削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山層もかなりの削平を受けているとみられる。当該遺構の残存状況は特に悪く、床面下まで削平を受けていた。したがって、掘形底面を構成する地山層や住居置土が一部露出した状態で、掘形が検出された。

ＳＩ２の平面形態は円形を呈しており、直径は約５ｍ前後になると推定できる。住居掘形底面から、検出面までの高さは0.01～0.05mであった。検出面の標高は118.49mであった。当該竪穴住居は、西側が近現代の溝によって破壊されており、北東部が調査区外にあるため、全体の３割程度を調査したにとどまった。

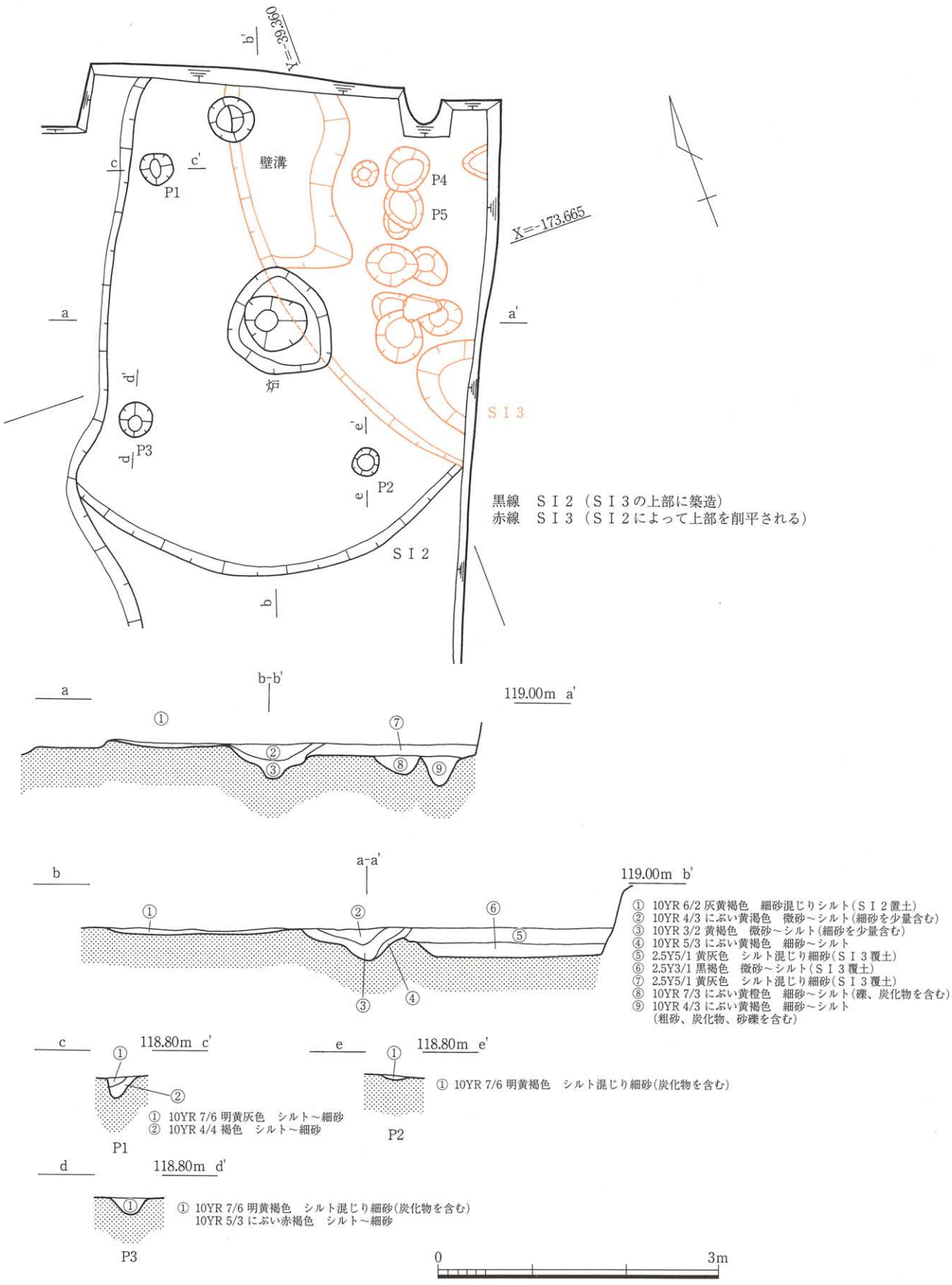
掘形は、10ＹＲ8/8黄橙色シルトの地山面を基盤として検出した。覆土はほとんど、遺存していなかった。検出段階で露出した置土は、10ＹＲ6/2灰黄褐色細砂まじりシルトであった。この置土の遺存によって、当該住居を検出することができた。残存していた掘形が浅かったため、掘形法面の勾配角度等はわからない。床面の直径は、検出した掘形と同じ直径約５ｍ前後と推定できる。床面からは、ピット、炉が検出されている。壁溝は検出されなかった。削平されているのか、本来的に存在しないのかは判断できなかった。

炉は、床面のほぼ中央で検出された。不整円形の平面形態を呈しており、検出面からの深さは0.38mであり、底には直径0.1mほどの平坦面があった。他の竪穴住居で検出された炉と異なり、炭化物層の堆積は認められなかった。炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。

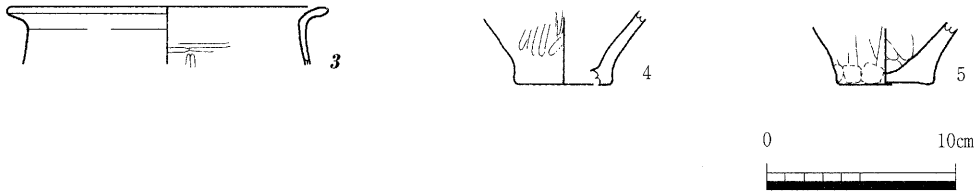
ピットは３箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はないが、いずれも配置からは主柱穴である可能性がある。Ｐ１は、直径0.35m、床面からの深さは0.23mであった。Ｐ２は、直径0.30m、検出面からの深さは0.05mであった。Ｐ３は、直径0.4m、検出面からの深さは0.2mであった。上部は削平を受けている。各主柱穴の配置から、当該竪穴住居は、４本柱構造を復元することができる。

２．遺物（第20図、図版50）

当該竪穴住居からは、甕の小片が３点出土している。３は甕Ａの口縁部である。内面はミガキによって仕上げている。全体の５％未満の小片であり、Ｐ２から出土した。４は甕の底部である。外面はミガキによって仕上げている。炉から出土した。５は甕の底部であ



第19図　ＳＩ２・３平面図・土層断面図(1/60)



第20図　ＳＩ２出土土器

る。外面はケズリ、内面はナデによって仕上げている。住居の置土層から出土した。いずれも残存率が低い小片であったため、時期を明らかにできないが、Ⅲ様式からⅣ様式に相当すると考えられる。

３．まとめ

当該竪穴住居は、Ⅲ～Ⅳ様式を中心に存続していたと考えられる。検出できた竪穴住居掘形の直径は約５ｍであった。床面からは、炉、柱穴が検出できた。４本柱構造を復元することができる。

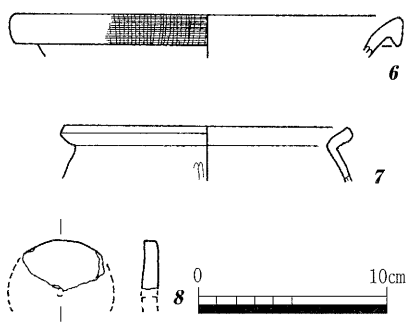
〔ＳＩ３〕

１．遺構（第19図、図版３）

Ｉ－ｇ８区に位置する竪穴住居である。ＳＩ２が、当該住居廃絶後に、重複してつくられていた。しかし、当該住居の方が深い掘形を有し、かつ、ＳＩ２が、掘形底面近くまで削平を受けていたことから、ＳＩ２を検出した時点ですでに、当該住居掘形の輪郭が検出できた。周囲は削平を受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山層も削平を受けているとみられる。

平面形は円形を呈しており、掘形の直径は５ｍ前後になると推定できる。床面から検出面までの高さは0.3ｍであった。検出面の標高は118.49ｍであった。当該調査では、南西部の約２割を調査することができた。

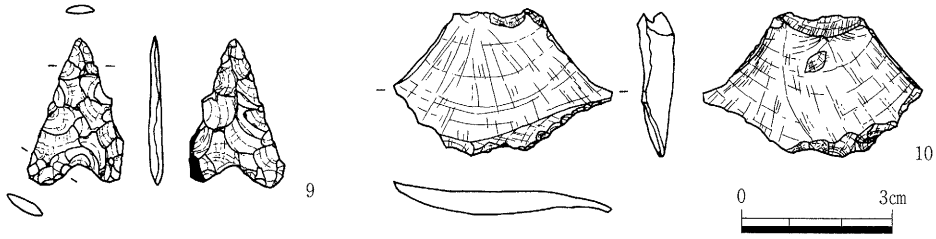
掘形は、10ＹＲ8/8黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出された。覆土が2.5Y3/1黒褐色微砂～シルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。残存していた掘形が浅かったため、掘形法面の勾配角度等はわからない。調査した範囲が限られるため、推測の域をでないが、掘形底面を床面としているようであった。床面の直径は検出した掘形の直径と同程度とみられ床面上からは壁溝、ピット、土坑が検出されている。



第21図　ＳＩ３出土土器

壁溝は、住居の壁に沿って、幅１ｍ、深さ0.1ｍで、長さ2.5ｍにわたって検出した。壁溝は完周しない。

ピットは10箇所検出された。これらのすべてが当該竪穴住居に伴う確証はない。いずれも0.2ｍから0.3ｍの深さをもつが、主柱穴を抽出するには至らなかった。



第22図　ＳＩ３出土石器

したがって、主柱穴配置については不明である。

２．遺物（第21・22図、図版50・99）

当該竪穴住居からは、土器、石器、紡錘車が出土している。６・８・９は住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土から出土した。６は広口壺Ａの口縁部である。覆土から出土し、５％に満たない小片であった。間隔の短い簾状文が施文されている。８は、紡錘車である。直径は5.6cmであり、厚さは0.8cmである。９は、サヌカイト製の凹基式石鏃である。全長2.9cm、幅1.91cm、厚さ0.23cmであった。７は、甕Ａである。外面はミガキで仕上げていた。全体の５％ほどの小片であり、Ｐ４から出土した。10はサヌカイトの細部調整剥片である。Ｐ５から出土した。

３．まとめ

当該竪穴住居は、覆土から出土した遺物の年代を参考にすると、Ⅳ様式を中心に存続していた可能性が考えられる。ＳＩ２が重複して築造されている。掘形の直径は５ｍ程度になると考えられる。床面からは、壁溝、ピット、土坑が検出できたが、調査を行うことができた範囲が狭く、主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔ＳＩ４〕

１．遺構（第23・24図、図版４）

Ｉ－ｄ８・Ｉ－ｅ８区にまたがって位置する竪穴住居である。周囲には、竪穴住居が集まっており、東方向３ｍにはＳＩ５が、北方向にはほぼ接してＳＩ７が、西方向７ｍにはＳＩ３が位置している。比較的造成の影響を受けておらず、遺存状況がよく、上面には弥生時代の遺物包含層が遺存していた。

ＳＩ４の平面形は円形を呈しており、掘形の直径は10.4ｍである。床面から、覆土上面までの高さは0.65ｍであった。掘形の検出は地山面で行い、検出面の標高は118.70ｍであった。当該竪穴住居の調査は、南半部を対象に行った。北半部については、道路下にあり、埋管等によって既に破壊されていた。

掘形は、10ＹＲ8/8黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出した。ただし、土層の観察によって、東部は地山層上に堆積した堆積土上から掘り込まれていることが明らか

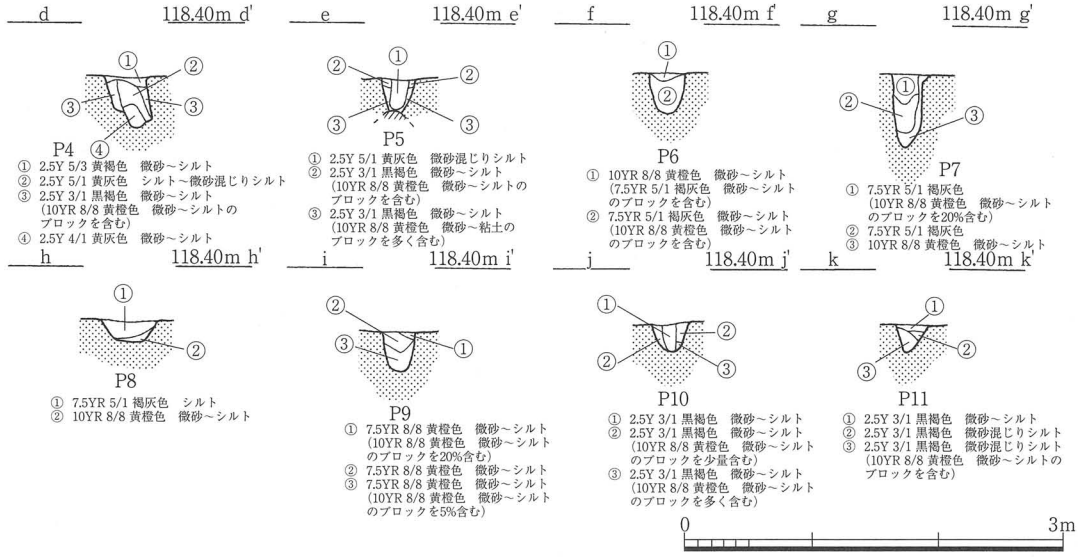
になった。また、西に隣接するＳＩ５との先後関係も堆積状況より明らかにでき、当該住居がＳ１５よりも後に築造されていた。住居の覆土が灰黄褐色系のシルトであったため、掘形を極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、全体として約30度の勾配をもっていたが、２段のテラス状の平坦面をもち、階段状に穿たれている。覆土（①層～㉙層）は、周囲に形成された弥生時代の遺物包含層に起因すると考えられ、他の時期の遺物は含まれていない。主に西側から土の流入があったようである。覆土には、地山層に起因するとみられる黄褐色のブロックを含んでいるものがあり、床面近くに堆積していたものに顕著であった。東側肩部付近の覆土には、堆積状況に変化（㉑層～㉖層）がみられた。これは、住居建替えに伴って掘形が再掘削された痕跡もしくは、壁板の裏込土である可能性がある。再掘削が行われていた場合は、直径が８ｍ程度の竪穴住居が重複していることになる。同様の堆積状況の変化は南側肩部（㉗層～㉙層）にもみられた。床面は、地山を掘り込んだ後、10ＹＲ5/1褐灰色シルト（㊲層）を置土することによって貼床が形成されている。床面の直径は、７ｍであり、壁溝、ピット、柱穴、炉、土坑が検出されている。また、床面上からは、炉を中心として薄い炭化物の層が検出された。

壁溝は、完周せず、掘形に沿って東側からのみ検出され、幅0.2～0.3m、深さ0.1～0.2ｍで、長さ４ｍにわたり検出できた。

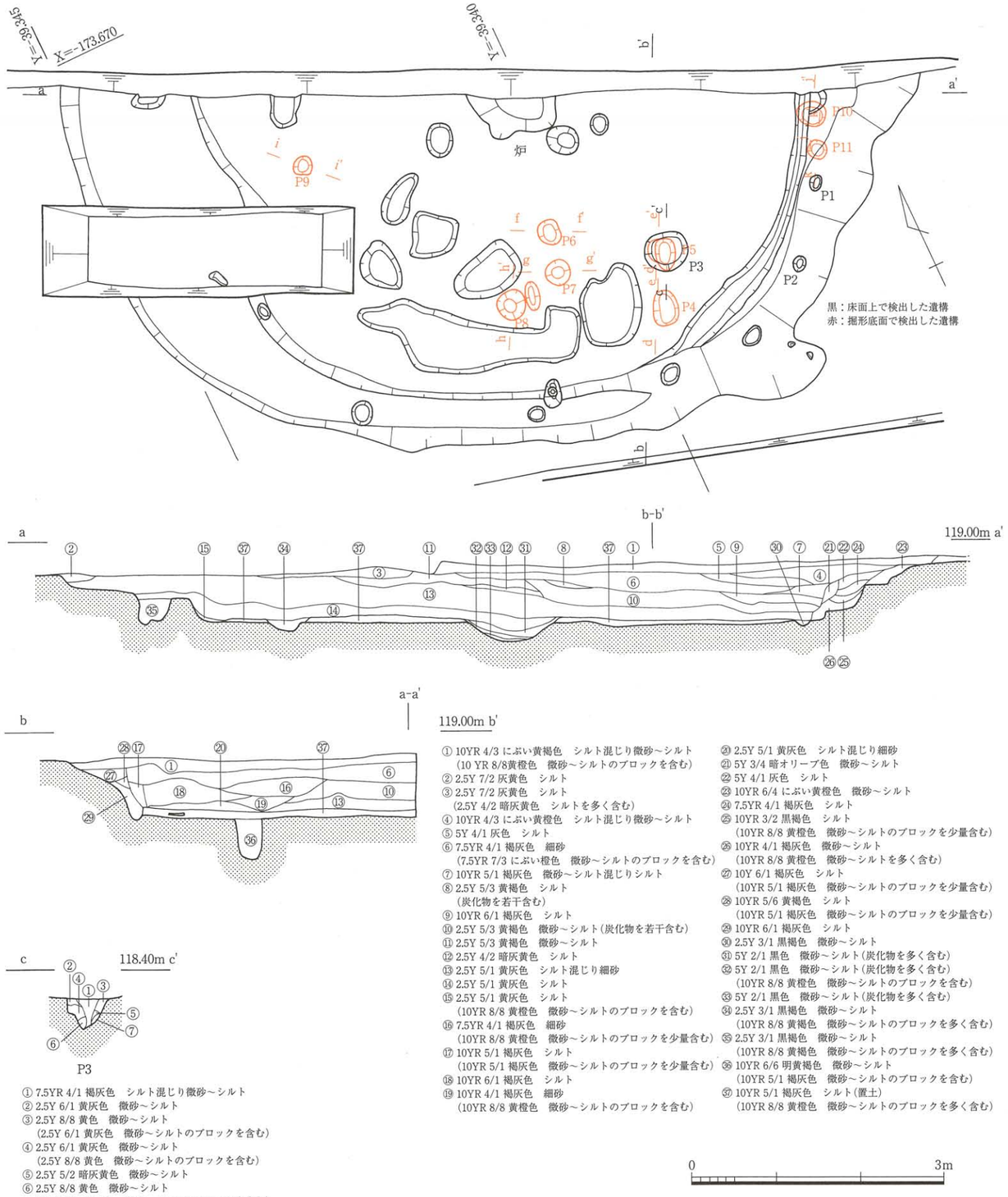
炉は、床面のほぼ中央で南側半分が検出された。不整円形の平面形態を呈しており、床面からの深さは0.3ｍであり、擂鉢状を呈している。炉内は、黒褐色系の炭化物層（㉛層・㉝層）と地山層に起因する黄褐色シルトのブロックを含んだ層（㉜層）が交互に繰りかえして堆積していた。炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。

排水溝は、検出されなかった。北半部に存在していた可能性はある。

床面からピットは20箇所検出された。すべてが竪穴住居に伴うと考えられる。また掘形法面からも、７箇所のピット（Ｐ１・Ｐ２他）が等間隔で検出された。床面で検出した、



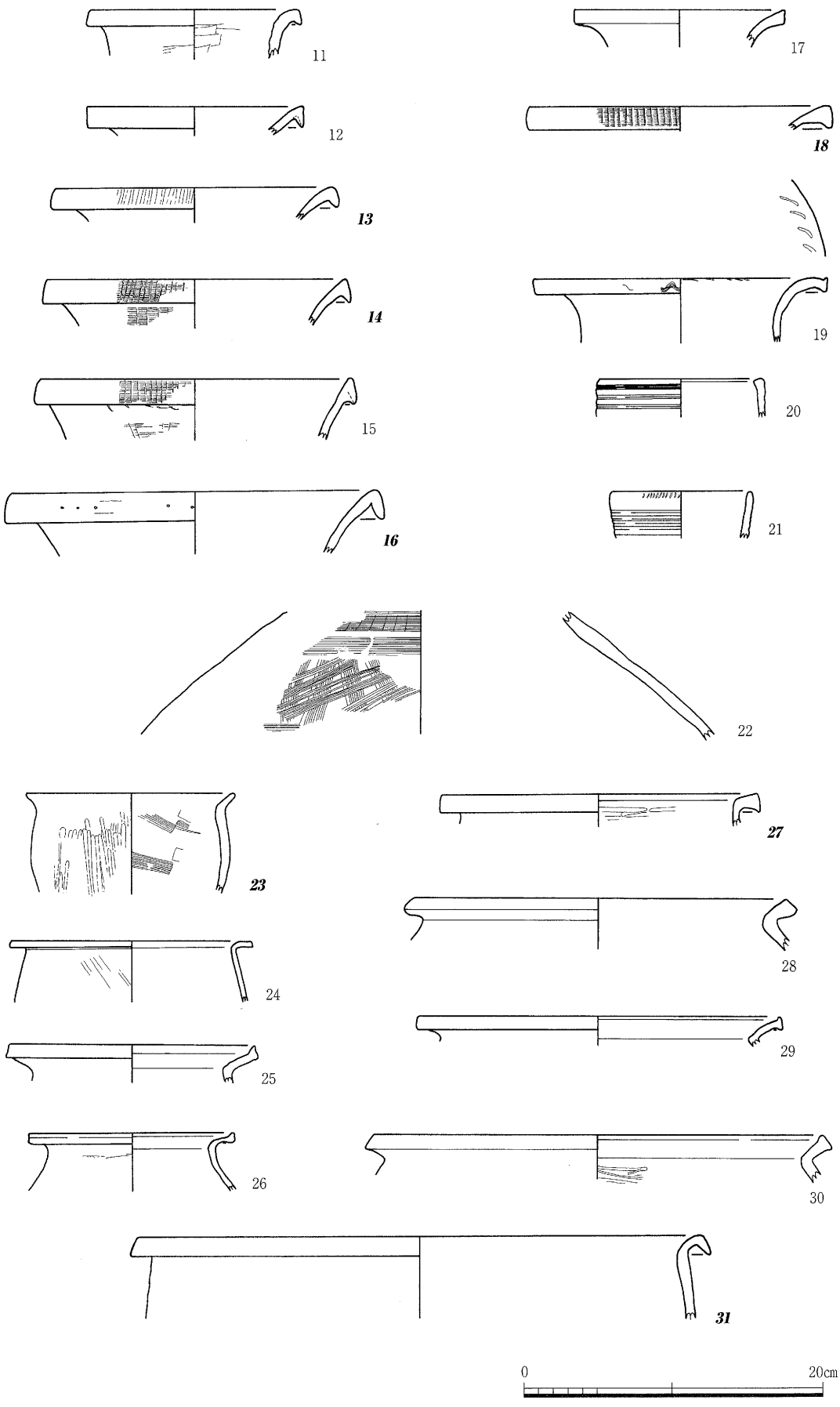
第23図　ＳＩ４遺構土層断面図（1/60）



① 10YR 4/3 にぶい黄褐色　シルト混じり微砂～シルト
（10 YR 8/8黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む）
② 2.5Y 7/2 灰黄色　シルト
③ 2.5Y 7/2 灰黄色　シルト
（2.5Y 4/2 暗灰黄色　シルトを多く含む）
④ 10YR 4/3 にぶい黄橙色　シルト混じり微砂～シルト
⑤ 5Y 4/1 灰色　シルト
⑥ 7.5YR 4/1 褐灰色　細砂
（7.5YR 7/3 にぶい橙色　微砂～シルトのブロックを含む）
⑦ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト混じりシルト
⑧ 2.5Y 5/3 黄褐色　シルト
（炭化物を若干含む）
⑨ 10YR 6/1 褐灰色　シルト
⑩ 2.5Y 5/3 黄褐色　微砂～シルト（炭化物を若干含む）
⑪ 2.5Y 5/3 黄褐色　微砂～シルト
⑫ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　シルト
⑬ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト混じり細砂
⑭ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト
⑮ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト
（10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む）
⑯ 7.5YR 4/1 褐灰色　細砂
（10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む）
⑰ 10YR 5/1 褐灰色　シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを少量含む）
⑱ 10YR 6/1 褐灰色　シルト
⑲ 10YR 4/1 褐灰色　細砂
（10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む）
⑳ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト混じり細砂
㉑ 5Y 3/4 暗オリーブ色　微砂～シルト
㉒ 5Y 4/1 灰色　シルト
㉓ 10YR 6/4 にぶい黄橙色　微砂～シルト
㉔ 7.5YR 4/1 褐灰色　シルト
㉕ 10YR 3/2 黒褐色　シルト
（10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む）
㉖ 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトを多く含む）
㉗ 10Y 6/1 褐灰色　シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを少量含む）
㉘ 10YR 5/6 黄褐色　シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを少量含む）
㉙ 10YR 6/1 褐灰色　シルト
㉚ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～シルト
㉛ 5Y 2/1 黒色　微砂～シルト（炭化物を多く含む）
㉜ 5Y 2/1 黒色　微砂～シルト（炭化物を多く含む）
（10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む）
㉝ 5Y 2/1 黒色　微砂～シルト（炭化物を多く含む）
㉞ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～シルト
（10YR 8/8 黄褐色　微砂～シルトのブロックを多く含む）
㉟ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～シルト
（10YR 8/8 黄褐色　微砂～シルトのブロックを多く含む）
㊱ 10YR 6/6 明黄褐色　微砂～シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
㊲ 10YR 5/1 褐灰色　シルト（置土）
（10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを多く含む）

① 7.5YR 4/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
② 2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～シルト
③ 2.5Y 8/8 黄色　微砂～シルト
（2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
④ 2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～シルト
（2.5Y 8/8 黄色　微砂～シルトのブロックを含む）
⑤ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　微砂～シルト
⑥ 2.5Y 8/8 黄色　微砂～シルト
（2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
⑦ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト

第24図　ＳＩ４平面図・土層断面図（1/60）

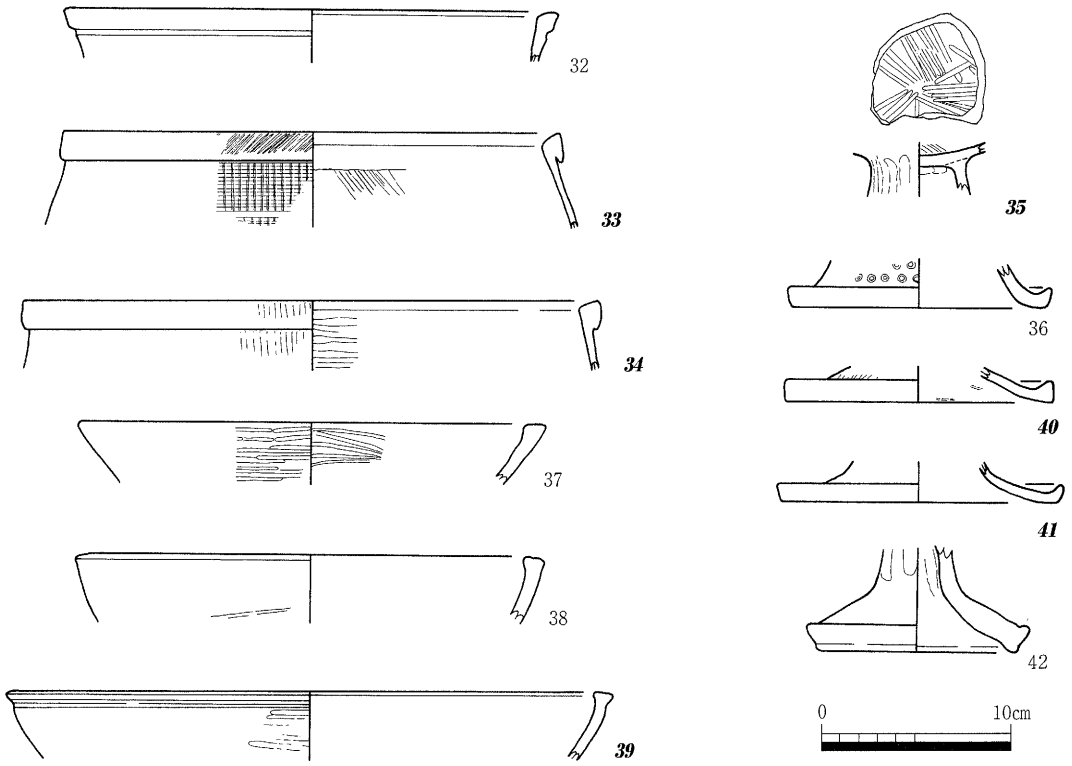


第25図　ＳＩ４出土土器①

Ｐ３は、その規模から、主柱穴であると考えられる。Ｐ３は、直径0.46m、床面からの深さは0.36mであった。柱を抜き取った痕跡が確認できた。この他のピットはいずれも、浅く皿状を呈していた。

ピットは掘形底面からも10箇所が検出されている。このことから、ＳＩ４は、建替えが行われていたことが分かる。これらのピット群は、最終時の住居に伴う床面がつくられた際には、置土下に埋没しており、建替え以前の住居に伴うものと考えることができる。これらのピットの内Ｐ４～11は、その規模から主柱穴を構成するものと考えることができる。

Ｐ４は、直径0.32m、深さ0.4mであった。柱を抜き取った痕跡が確認でき、柱痕跡の直径は、0.18mであった。Ｐ５は、直径0.29m、深さ0.24mであった。柱を抜き取った痕跡が確認でき、柱痕跡の直径は、0.14mであった。Ｐ６は、直径0.28m、深さ0.33mであった。埋土は２層により構成されていた。Ｐ７は、直径0.3m、深さ0.6mであった。柱を抜き取った痕跡が確認でき、柱痕跡の直径は、0.2cmであった。Ｐ８は、直径0.4m、深さ0.16mであった。皿状を呈する浅いピットである。埋土は２層から構成されていた。Ｐ９は、直径0.26m、深さ0.32mであった。埋土は３層から構成されていた。Ｐ10は、直径0.28m、深さ0.23mであった。柱を抜き取った痕跡が確認でき、柱痕跡の直径は、0.1mであった。Ｐ11は、直径0.25m、深さ0.23mであった。埋土は３層から構成されていた。



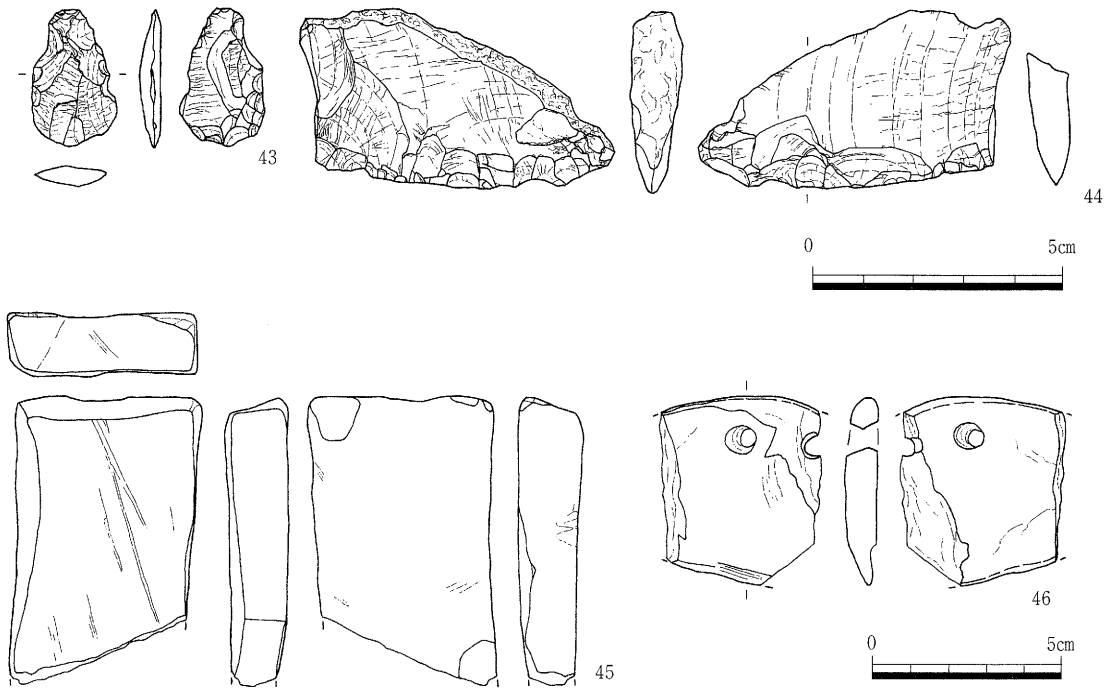
第26図　ＳＩ４出土土器②

ＳＩ４の西半部には、試掘調査を行った際の確認坑が位置しており、この場所に主柱穴が位置していた可能性は高い。いずれにしても、調査を行った範囲が限られていたことから、主柱穴配置を復元するには至らなかった。

２．遺物（第25～27図、図版50・99・101・103）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。11～25・27～32・34～46は、住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。11～16は広口壺Ａの口縁部である。11・12は、口縁部に施文は行われていない。13～15は、簾状文が施文されている。13は摩滅が進んでおり、口縁端部外面に簾状文がかろうじて観察できた。15は、口縁端部が断面三角形を呈しており、口縁端部外面と頸部外面に、比較的間隔の短い簾状文を施文している。16は斜め下方向に長く口縁端部を拡張しており、口縁端部外面には刺突文が施文されている。17は、広口壺と考えられる。口縁端部外面には、凹線が施されている。18は広口壺Ａで、口縁端部には簾状文を施文する。19は広口壺Ｃである。小片であり、口縁端部には外面に波状文が、内面にヘラ状工具による刻目が施文されている。20・21は細頸壺である。20・21は口縁部の細片であり、凹線文を巡らす。21は口縁端部にヘラ状工具による刻目を施文する。22は、壺の肩部であり、上部に間隔が長く、幅が狭い簾状文を施文し、その下部に斜格子文を施文し、その下部に間隔の長い簾状文、もしくは直線文を施文している。

23・24は甕Ａである。23は、口縁部は鈍角に屈曲し、口縁端部は丸く収めている。内面は、斜め方向のハケで仕上げている。24は、口縁端部を面取りしており、外面はミガキで



第27図　ＳＩ４出土石器

仕上げている。内面の調整については観察できなかった。25は、甕Ｂである。口縁端部を上方向にやや拡張し、外面を強くナデている。27・28・31は甕Ｃである。いずれも、僅かな細片であったため、全体の調整は観察できなかった。27は、口縁部の小片である。内面はミガキで仕上げていた。28も甕Ｃである。27・28はともに口縁端部の下方向への拡張が顕著ではない。31は甕Ｃである。口縁端部を下外方向に拡張している。29は、甕Ｄである。器壁は薄く仕上げられている。僅かな細片であったため、調整は観察できなかった。30は甕Ｄである。内面は横方向のハケで仕上げられていた。32・34は鉢Ｂである。32は、内外面をナデで仕上げている。口縁端部は段状に肥厚している。34は摩滅のため観察ができなかったが、外面には簾状文を施文していると推定できる。内面は横方向のミガキで仕上げていた。37～39は高坏Ａである。いずれも外面には横方向のミガキを加えていた。口縁端部はいずれも肥厚している。37～39は施文が行われていない。39は、口縁部に凹線状の窪みを巡らしていた。35・40・41・42は高坏の脚部である。41は端部を上方向に拡張していた。42は端部を上下方向に若干、拡張している。36は鉢類の脚部である。竹管文が施文されている。43は、凸基式石鏃である。サヌカイト製である。44は削器であり、サヌカイト製である。45は砥石であり、砂岩製である。46は石庖丁であり、緑泥片岩製である。

26は、甕Ｂで炉から出土した。33は鉢Ｂであり、置土中から出土した。口縁部には列点文、体部には、間隔が短く、幅の広い簾状文を施文している。以上、覆土と遺構から出土した遺物には大きな時期差は認められず、Ⅳ－３～４様式の様相を示している。

３．まとめ

当該竪穴住居は、床面上の遺構から出土した遺物によって、Ⅳ－３～４様式を中心に機能していたと考えられる。周囲には、竪穴住居が密集している。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることから、ＳＩ５及びＳＩ７は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複すると想定できる。したがって、これら２棟とは、同時には存在していなかったと想定できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は10.4ｍであったが、これは、建替えによって２～３棟の掘形が重複している可能性がある。重複していた場合、個々の直径は８ｍ程度になると考えられる。床面からは、炉、壁溝、柱穴、ピット、土坑が検出できた。床面の置土下からも遺構が検出されていることから、建替えが行なわれていたものと推測できる。調査を行うことができた範囲は全体の半分であり、主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔ＳＩ５〕

１．遺構（第28～30図、図版５）

Ｉ－ｃ８区を中心に位置する竪穴住居である。周囲には西方向３ｍにＳＩ４が、北方向にはＳＩ８が近接している。地表面から遺構面までの深さが、約0.4m程度と浅かったにもかかわらず、後世の削平を受けておらず、竪穴住居上面には、弥生時代の遺物包含層が遺存していた。

平面形は円形を呈しており、掘形の直径は8.75m、床面から、覆土上面までの高さは0.5mであった。検出は地山面で行い、検出面の標高は118.70mであった。当該竪穴住居の調査は、南半部を対象に行った。北半部については、道路下にあり、配管によって既に破壊されていた。

掘形は、10ＹＲ8/8黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出した。ただし、東部は地山層上面に約0.1mほど堆積した土の上面から掘り込まれていたことが土層の観察により明らかになった。住居の土が黒褐色系のシルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、東部で約50度、西部で約20度の勾配をもっている。比較的ゆるやかな勾配といえる。覆土（①層から㉘層）は、周囲に形成された弥生時代の遺物包含層に起因すると考えられ、他の時期の遺物は含まれていない。覆土には、床面近くに堆積していたものを中心として、地山層に起因するとみられる黄褐色シルトのブロックを含んでいるものがあった。肩部付近の覆土には、堆積状況の変化（西側：⑭層～⑱層・東側：⑲層～㉕層・南側：㉖層～㉘層）がみられ、住居建替えに伴って掘形が再掘削された痕跡である可能性が指摘できる。もしくは、堆積状況の変化は、住居壁体側板の裏込土と覆土の境である可能性がある。再掘削が行われていた場合は直径は8.75mの竪穴住居が廃絶した後に直径６ｍの竪穴住居掘形を再掘削したか、直径が６ｍ程度の竪穴住居が３回重複しているのかの２通りの想定が可能である。覆土は一部が掘形肩部上にまで堆積していた。堆積状況の違いが裏込土の存在を示しているとすれば、肩部に堆積している土は土塁状の施設になる可能性がある。床面は、地山を掘り込んだ後、7.5ＹＲ7/1明灰褐色微砂～シルト（10ＹＲ8/8黄橙色微砂～シルトのブロックと炭化物を含む）（㊷層）を置土することによって貼床が形成されている。床面の直径は、６ｍであり、壁溝、ピット、柱穴、炉、土坑が検出されている。また、床面上からは、炉を中心として薄い炭化物の層が検出された。

壁溝は、掘形に沿って、検出され、幅0.2～0.3m、深さ0.15～0.2mであった。壁溝は完周している。

炉は、床面のほぼ中央で南側半分が検出された。不整円形の平面形態を呈しており、直径は約1.2mである。床面からの深さは0.2mであり、擂鉢状を呈している。炉内は、黒褐色系の炭化物層が堆積していた。炉の掘形に被熱した痕跡は認められなかった。

排水溝は、検出されなかった。北半部に存在していた可能性はある。

床面からピットが８箇所検出された。すべてが竪穴住居に伴うと考えられる。この内、Ｐ１・Ｐ２は、その規模から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径0.4m、床面からの深さは0.3mであった。Ｐ２は、直径が0.55m、床面からの深さは0.5mであった。柱を抜き取った痕跡が確認できた。この他のピットはいずれも、浅く皿状を呈しており、主柱穴ではないと考えられる。主柱穴配置については、１間の幅が3.5mの４本柱を復元することができる。ピットは掘形底面からも10箇所が検出されている。Ｐ３は、直径0.41m、深さ0.42mであった。Ｐ４は、直径0.36m、深さ0.23mであった。Ｐ５は、直径0.3m、深さ0.36mであった。Ｐ６は、直径0.8m、深さ0.47mであった。Ｐ７は、直径0.22m、深さ0.33mであった。Ｐ８は、直径0.25m、深さ0.16mであった。ＳＩ５－ＳＫ１は、直径1.2m、深さ0.3mであった。Ｐ９は、直径0.26m、深さ0.32mであった。Ｐ10は、直径0.24m、深さ0.18mであった。これらは、建替以前の住居に伴うものと考えられる。

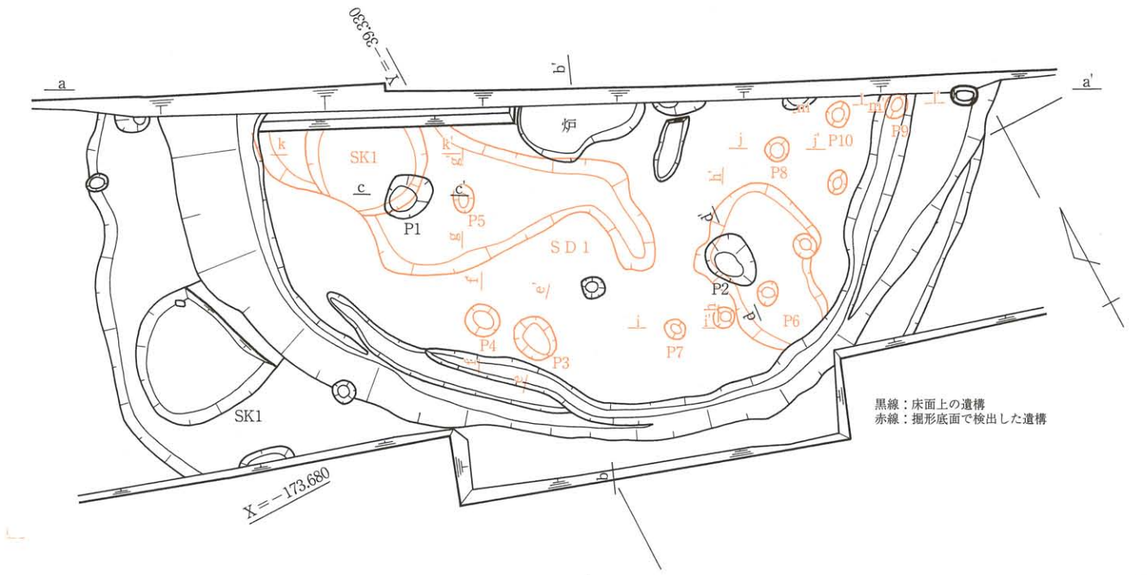
２．遺物（第31～34図、図版50・51・98・99・101・103）

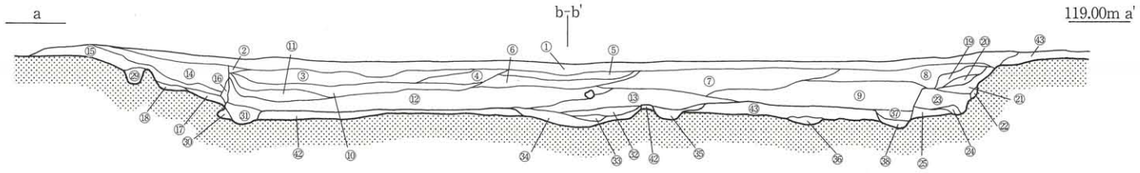
当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。47～54・56～63・65～81については、竪穴住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。

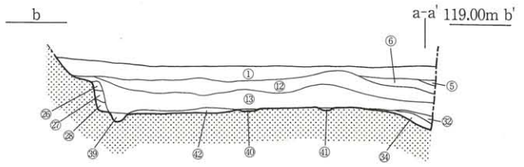
47・48・49は広口壺Ａである。外面には簾状文が施文されている。47は、外面に簾状文、内面に円形浮文を施文する。簾状文施文後に、口縁端部下端に刻目を加えている。内面に円形浮文を施文する。48は、簾状文に加えて刺突文が施文されている。49は、ＳＩ４－Ｐ３から出土した破片と接合できた。50～52は広口壺Ｃである。50は口縁端部外面に波状文を施文する。51・52は無文であり、外面をハケで仕上げている。53・54は大型の細頸壺の口縁部である。54はヘラ状工具による刻目を、53は列点文を施文し、その後、円形浮文を施文している。56～59は、甕Ａであり、摩滅しているものもあるが、外面はミガキ、内面はナデによって仕上げているものが多い。60～62は、甕Ｂである。61は、摩滅が著しいが、横方向のタタキの後、縦方向のハケを施している。63は、甕Ｃである。63は口縁端部に刺突文を施文している。66・67・68・70は鉢Ｂである。66・67・68は外面に簾状文を施文する。67は、口縁端部が外方向に屈曲するものであり、他のものよりも古く位置づけられる。70は波状文を施文する。65・69は鉢Ａである。65は凹線文により、69は刻目突帯文と直線文で飾られている。71は高坏Ａ、72は高坏Ｂである。74～76は高坏の脚部である。73は細頸壺の頸部である。

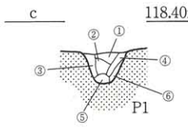
77・80はサヌカイト製の有茎式石鏃である。78は、石鏃の未製品である。79は削器である。ともにサヌカイト製である。81は、石庖丁の小片であり、緑泥片岩製である。

55・64・82は、ＳＩ５－ＳＫ１から出土した遺物である。住居の築造年代を考える際の参考とすることができる。55は広口壺である。肩部は丸みを持ち、腰は低く張る。櫛描文は、描きはじめと終わりが不一致であり、乱雑な施文がなされている。肩部には、間隔が短く幅の広い簾状文、体部には直線文、体部下半には、間隔が長い簾状文が施文されてい

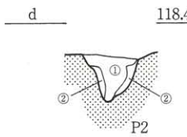








① 10YR 4/2 灰黄褐色　微砂～シルト
(10YR 8/8 黄褐色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
② 10YR 2/1 黒色　微砂～シルト(炭化物を若干含む)
③ 10YR 4/2 灰黄褐色　微砂～シルト
(10YR 8/8 黄褐色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
④ 10YR 4/2 灰黄褐色　微砂～シルト
⑤ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を若干含む)
⑥ 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト
(10YR 8/8 黄褐色　微砂～シルトのブロックを含む)(炭化物を若干含む)

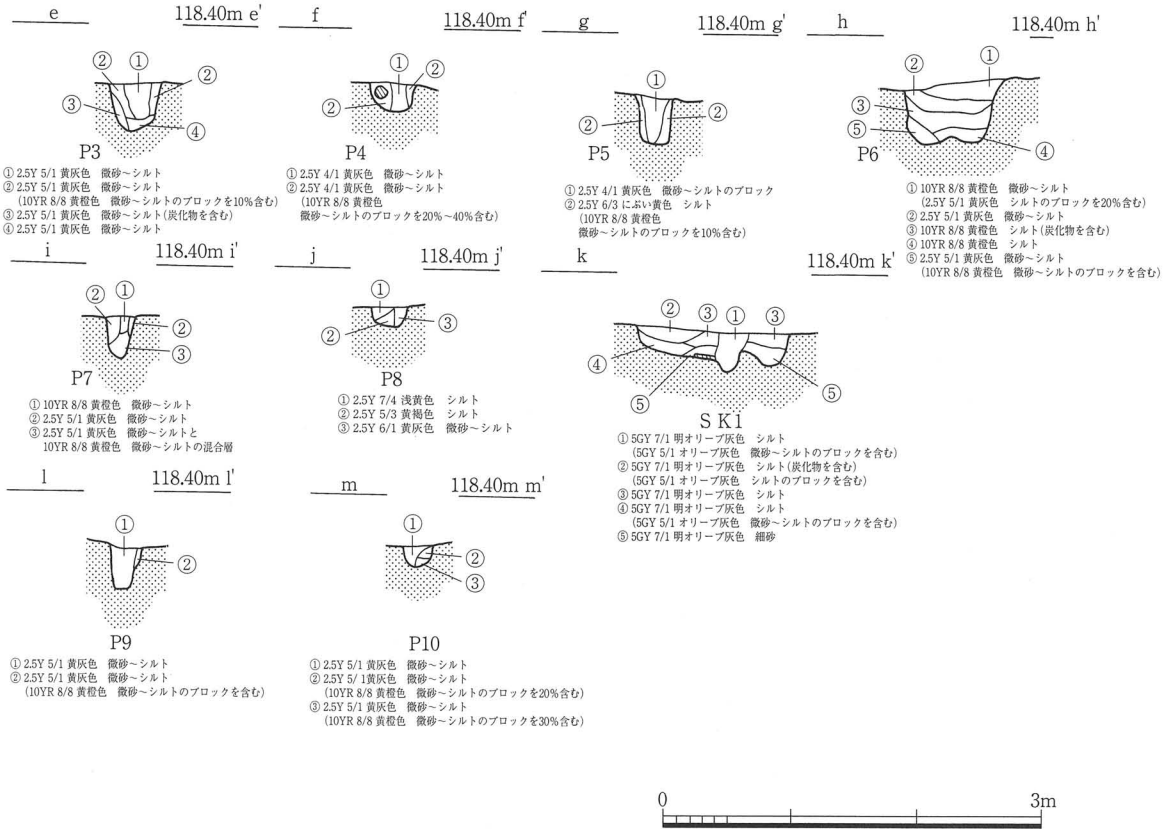


① 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物のブロックを含む)
② 10YR 4/1 褐灰色
(10YR 8/8 黄褐色　微砂～シルトのブロックを含む)

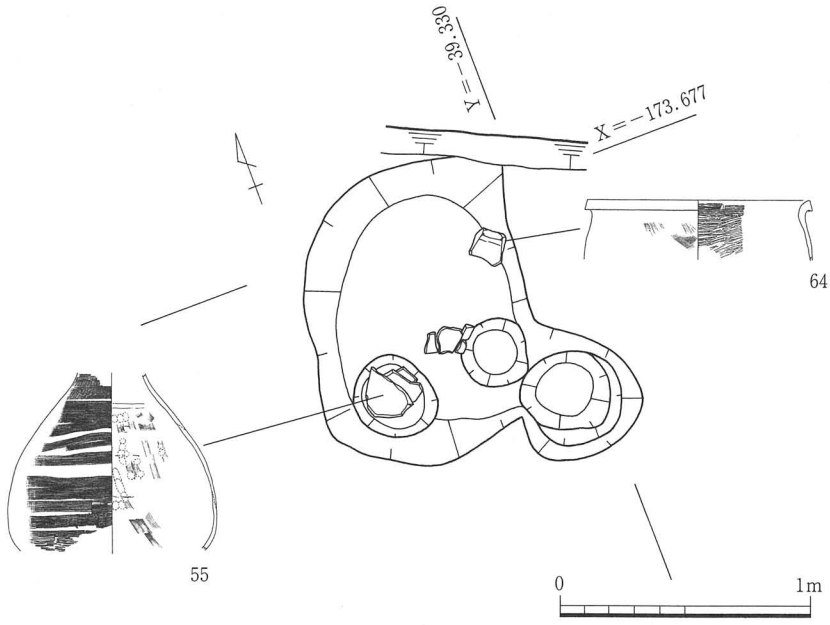
① 2.5Y 3/ 1黒褐色　シルト混じり微砂～シルト
② 10YR 3/1 黒褐色　シルト（炭化物を含む）
③ 7.5YR 5/1 褐灰色　細砂混じりシルト
④ 7.5YR 5/1 褐灰色　細砂混じりシルト(7.5YR 6/3 にぶい褐色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑤ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～シルト
⑥ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　微砂～シルト(2.5Y 5/4 黄褐色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑦ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト
⑧ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～シルト(2.5Y 5/3 黄褐色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
⑨ 2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～シルト(炭化物を含む)
⑩ 7.5YR 4/1 褐灰色　細砂混じりシルト(炭化物を含む)
⑪ 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
⑫ 2.5Y 3/2 黒褐色　微砂～シルト
⑬ 7.5Y 4/1 灰色　シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
⑭ 7.5YR 4/3 褐色　微砂～シルト
⑮ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を含む)
⑯ 10YR 5/2 灰黄褐色　微砂～シルト
⑰ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
⑱ 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
⑲ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト
⑳ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
㉑ 7.5Y 4/1 灰色　シルト混じり微砂～シルト
㉒ 10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルト(7.5Y 4/1 灰色　シルトのブロックを含む)
㉓ 7.5Y 5/1 灰色　微砂～シルト(炭化物を含む)
㉔ 2.5Y 6/2 灰黄色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
㉕ 7.5YR 7/1 明褐灰色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックと炭化物を含む)(床面置土)
㉖ 10YR 5/2 灰黄褐色　微砂～シルト
㉗ 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
㉘ 10YR 7/1 灰白色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
㉙ 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
㉚ 7.5YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
㉛ 2.5Y 7/1 灰白色　微砂～シルト
㉜ 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を含む)
㉝ 10YR 2/1 黒色　微砂～シルト
㉞ 10YR 2/1 黒色　微砂～シルト（炭化物を多く含む)(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを10%含む)
㉟ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～シルト（10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
㊱ 7.5Y 4/1 灰色　シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
㊲ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～シルト
㊳ 2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～シルト
㊴ 10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)(壁溝埋土)
㊵ 7.5Y 4/1 灰色　シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
㊶ 7.5Y 4/1 灰色　シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
㊷ 7.5YR 7/1 明褐灰色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックと炭化物を含む)(床面置土)
㊸ 7.5YR 7/1 明褐灰色　微砂～シルト(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックと炭化物を含む)(床面置土)

0　3m

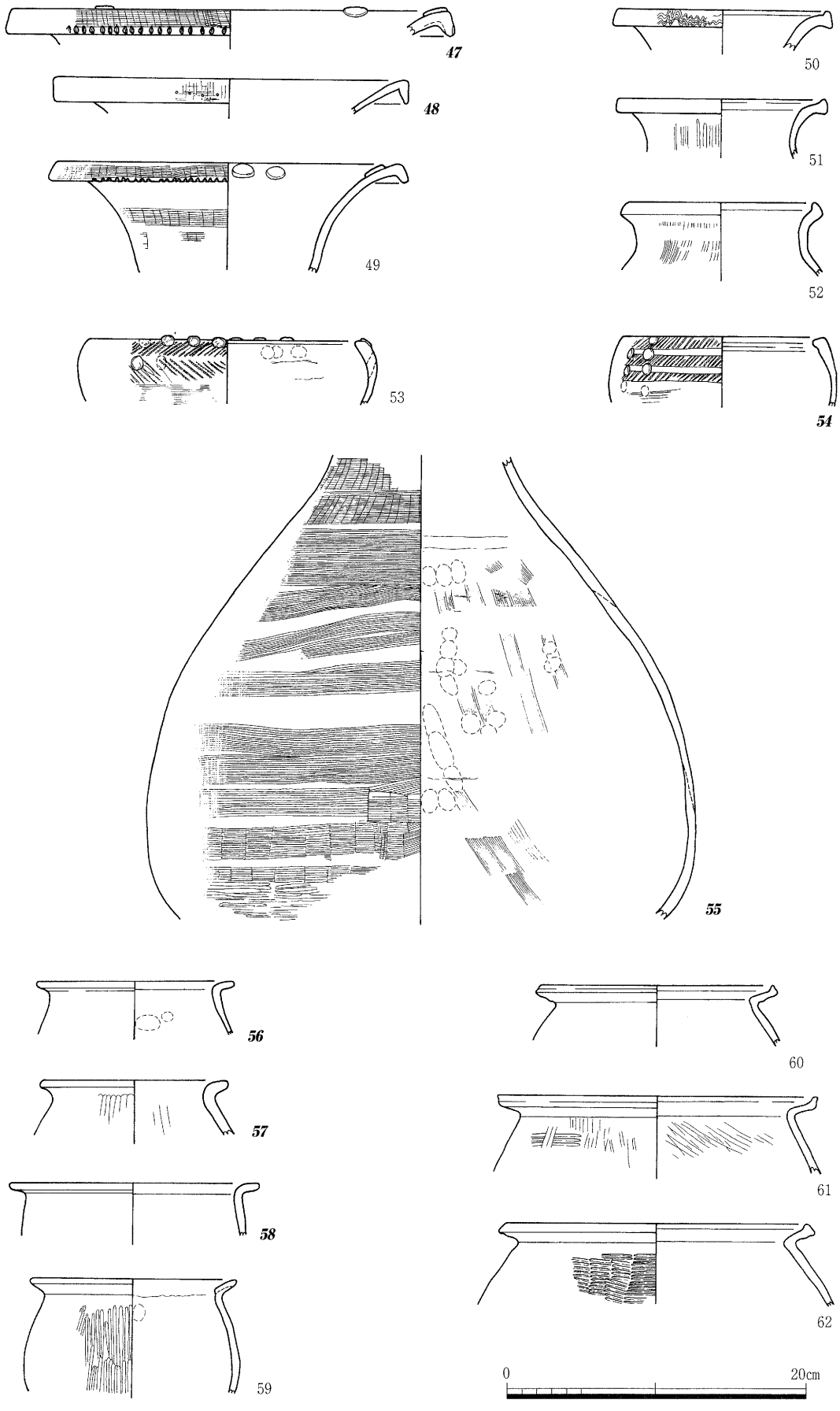
第28図　ＳＩ５平面図・土層断面図（1/60）



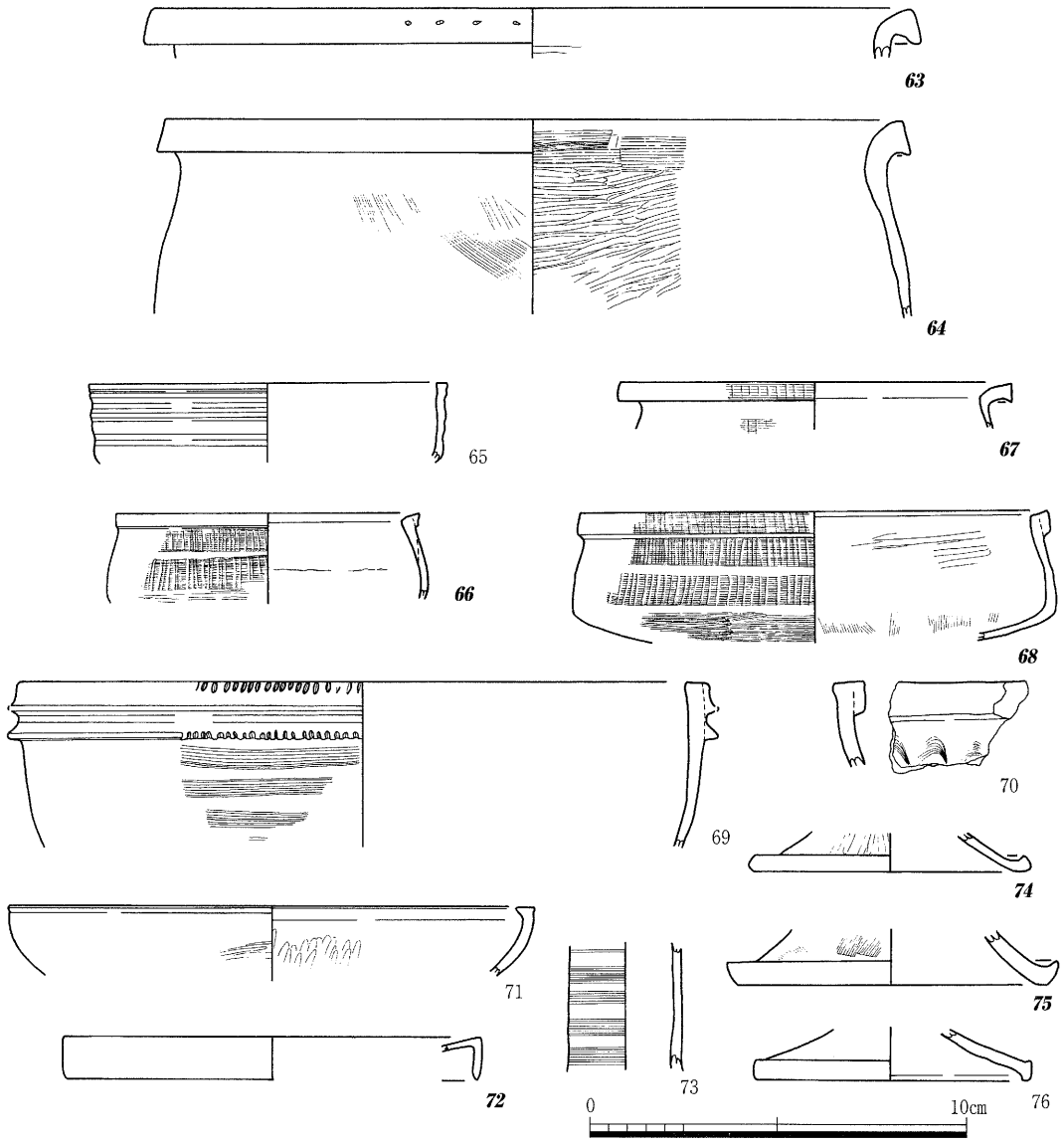
第29図　ＳＩ5遺構土層断面図（1/60）



第30図　ＳＩ５－ＳＫ１平面図（1/30）



第31図　ＳＩ５出土土器①



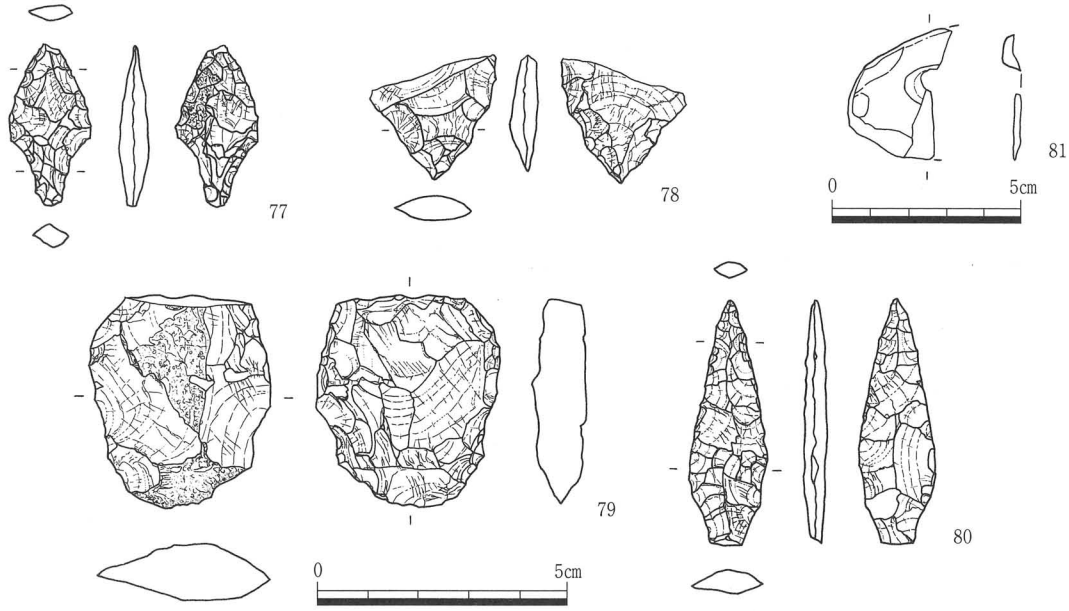
第32図　ＳＩ５出土土器②

る。64は、甕Ｃである。口縁端部を下方向に拡張しているものの未発達である。磨耗が激しいが外面はナデ、口縁部内面はハケ、体部内面はミガキによって仕上げられている。82は砂岩製の叩石である。楕円形を呈しており、長さ19.2cm、幅8.75cm、厚さ3.7cmであった。ＳＤ１から出土した。覆土から出土した遺物は、一部でⅢ様式の特徴をもつものからⅣ－３～４様式のものまで認められる。

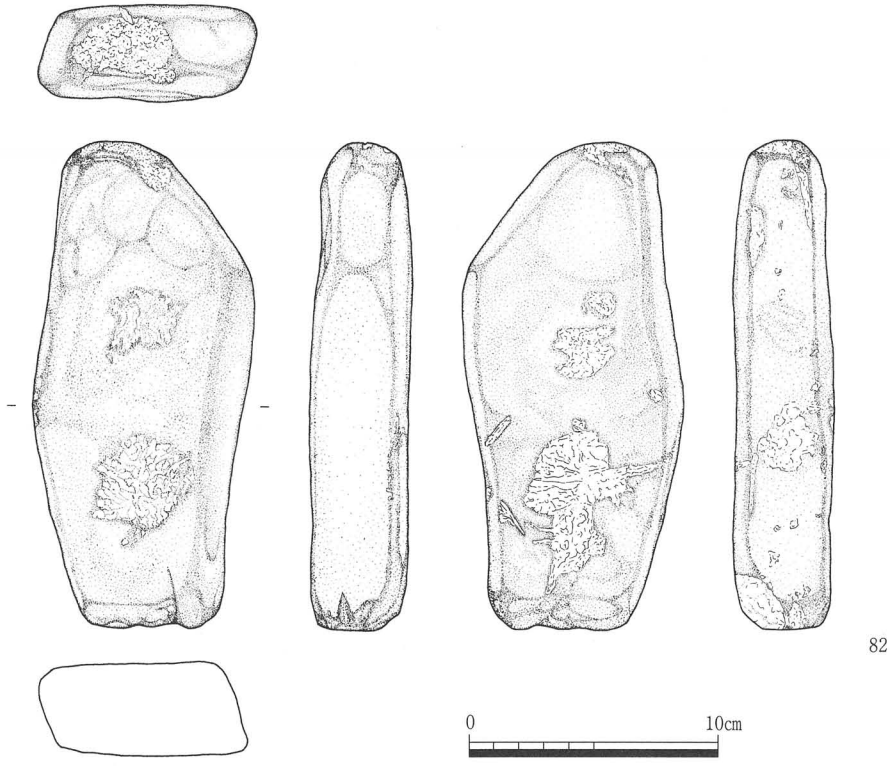
床面上の遺構から出土した遺物は、Ⅳ－１～２様式の様相を呈している。２点のみの出土であるが比較的大きな破片である。

３．まとめ

当該竪穴住居は、築造時点もしくは機能時点を示すと思われる床面上の遺構から出土した遺物によって、Ⅳ－１～２様式を中心に存続していたと考えられる。周囲には、竪穴住居が密集している。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることから、ＳＩ４



第33図　ＳＩ５出土石器①



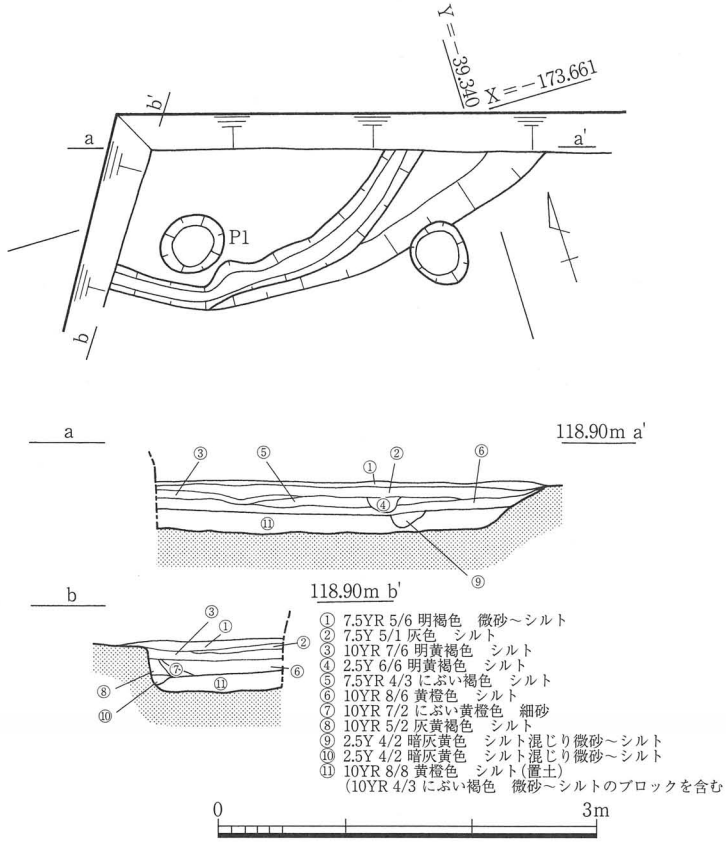
第34図　ＳＩ５出土石器②

及びＳＩ８は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複すると想定できる。したがって、これら２棟とは、同時には存在していなかったと想定できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は8.75ｍであるが、床面の直径は６ｍである。他の住居よりも規模が小さい。床面からは、炉、壁溝、柱穴、ピット、土坑が検出できた。主柱穴配列については４本柱構造を復元した。

〔ＳＩ６〕

１．遺構（第35図、図版６）

Ｉ－ｄ７・Ｉ－ｅ７区にまたがって位置する竪穴住居である。周囲には東方向10ｍにＳＩ７が位置している。当該竪穴住居の上層に堆積した土は削平を受けているようで、弥生時代の遺物包含層は薄く遺存していた。平面形は円形を呈していると推定される。調査ができた範囲がごくわずかであったため、直径は不明である。床面から、検出面までの高さは0.22ｍであった。検出面の標高は118.60ｍであった。



第35図　ＳＩ６平面図・土層断面図（1/60）

掘形は、10ＹＲ8/8黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出した。住居の覆土が褐色系のシルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、約60～80度の勾配をもっている。掘形底面は、凹凸が著しく、0.1ｍ～0.2ｍの厚さで置土がなされており、床面が造成されていた。覆土はほぼ水平に堆積していた。床面上の遺構については、調査を行えた範囲で壁溝とピットが検出できた。

壁溝は、幅0.25～0.3ｍ、深さ0.1ｍであり、約３ｍにわたって検出された。

Ｐ１は、直径0.45ｍ、深さ0.05ｍであり、浅い皿状のもので、柱穴ではないと考える。

２．遺物

遺物は、弥生土器の小片とサヌカイトの剥片が出土しているが、いずれも図化できなかった。

３．まとめ

当該竪穴住居は、調査できた面積も狭く、出土遺物も少なかったため不明な点が多い。大部分は調査区の北側に埋没している。

〔ＳＩ７〕

１．遺構（第36図、図版６）

Ｉ－ｃ７・Ｉ－ｄ７区にまたがって位置する竪穴住居である。周囲には東方向約１ｍにＳＩ８が、南方向にＳＩ４、ＳＩ５が、北西方向約10ｍにはＳＩ６が位置している。当該竪穴住居付近は削平を大きく受けているようで、弥生時代の遺物包含層も削平のため、薄くなって遺存していた。

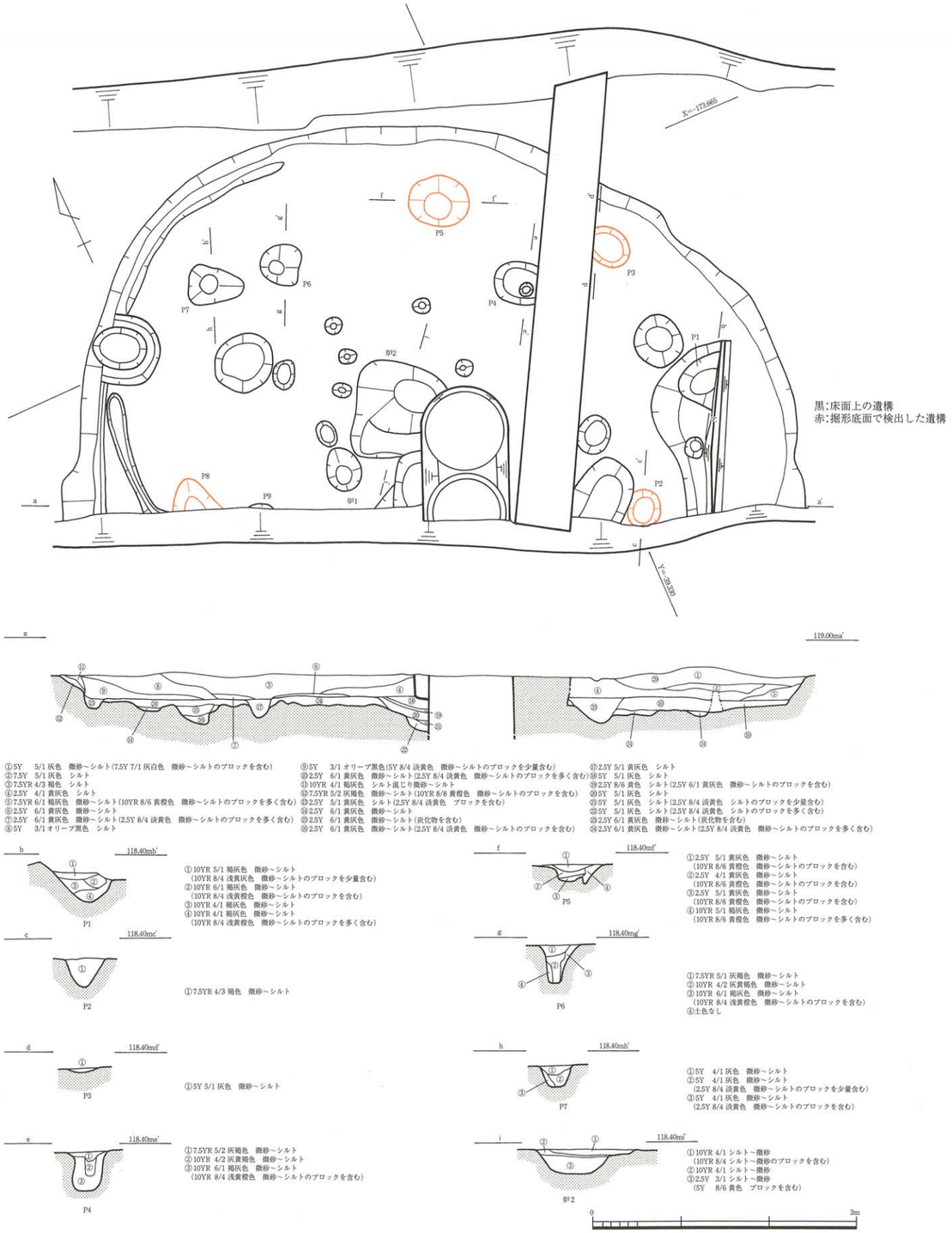
平面形は円形を呈しており、掘形の直径は8.50ｍ、床面から、検出面までの高さは、0.25ｍであった。検出面の標高は118.60ｍであった。当該竪穴住居の調査は、東半部と西半部の２回に分けて行った。合わせて、当該調査では、約６割程度を調査することができた。ＳＩ７の南側の一部は調査区外へ続いている。

掘形は、10ＹＲ8/8黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出した。住居の覆土が灰褐色系のシルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、約60～80度の勾配をもっている。掘形底部上には、2.5ＹＲ6/1黄灰色の微砂～シルトが置土されており、貼床（㉔層）が形成されている。床面からは、炉を中心とした範囲から、薄い炭化物の層が検出された。覆土（①層～⑨・⑪・⑫層）は、周囲に形成された弥生時代の遺物包含層に起因するものであり、主に東西両方向から流れ込んでいる状況が観察できた。床面近くには、地山に起因すると考えられる黄橙色系の微砂～シルトのブロックを含む土（⑨層）が堆積していた。この他、覆土には、微細な炭化物が多く含まれていた。また、掘形西肩部付近では、堆積状況の変化（⑪層・⑫層）が認められ、この変化に対応して、掘形法面の勾配も変化している。これは建替えに伴う、掘形再掘削の痕跡と判断できる。

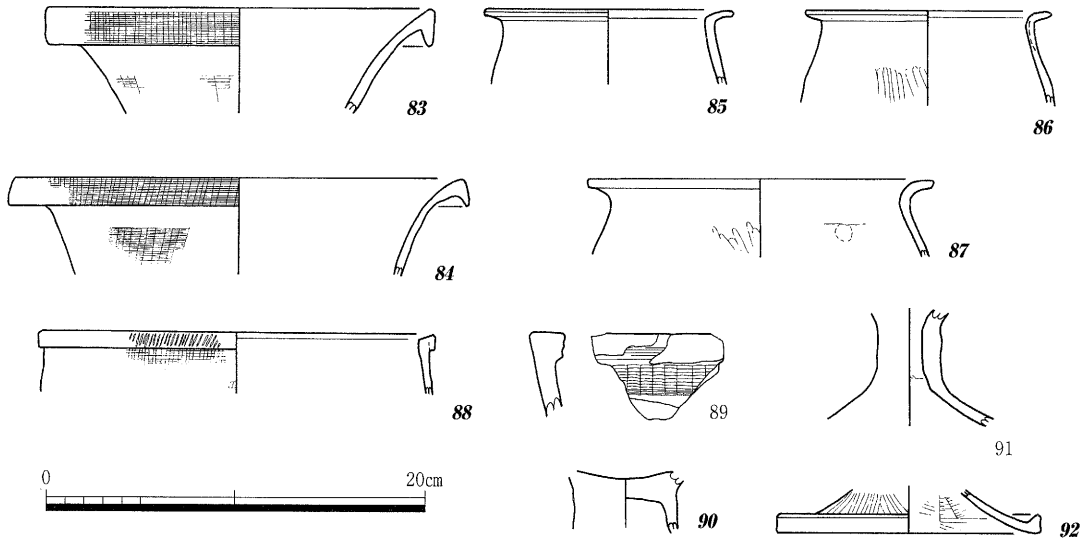
壁溝は、住居の壁に沿って、西側からのみ検出できた。幅は0.1～0.2ｍ、深さ0.1～0.2ｍで、長さ４ｍにわたって巡っていた。壁溝は完周せず、東側には巡っていなかった。

炉と思われる土坑は２箇所で検出された。炉１（土層⑱から㉒層）は、調査区の南壁に沿って検出されたものである。調査を行うことのできた範囲が全体の1/4程度であったことから、平面形態や規模については不明である。２段に掘られており、深さは床面から0.4ｍであった。炉２は床面のほぼ中央で検出された。一辺1.0ｍの方形の土坑で、北半部は、直径0.8ｍの不整円形に掘り窪められていた。底には直径0.5ｍの平坦面があった。上・中層は、褐灰色系のシルト～微砂で、下層は炭化物を含んだ黒褐色シルト～微砂が堆積していた。床面からの深さは0.3ｍほどであった。炉２は、検出した置土層の上面から掘込まれたものでなく、逆に炉２の覆土上に置土が堆積していた。したがって、住居が廃棄された段階での遺構ではないと判断できる。炉１・２ともに炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。

ピットは23箇所検出された。これらのうちＰ１～Ｐ９の９本は、その規模から主柱穴を構成するものであると考える。Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ９の５本は、置土上面の精査の結果検出されたものであり、最終次の住居に伴う主柱穴と推定できる。Ｐ１は直径が



第36図　ＳＩ７平面図・土層断面図（1/60）



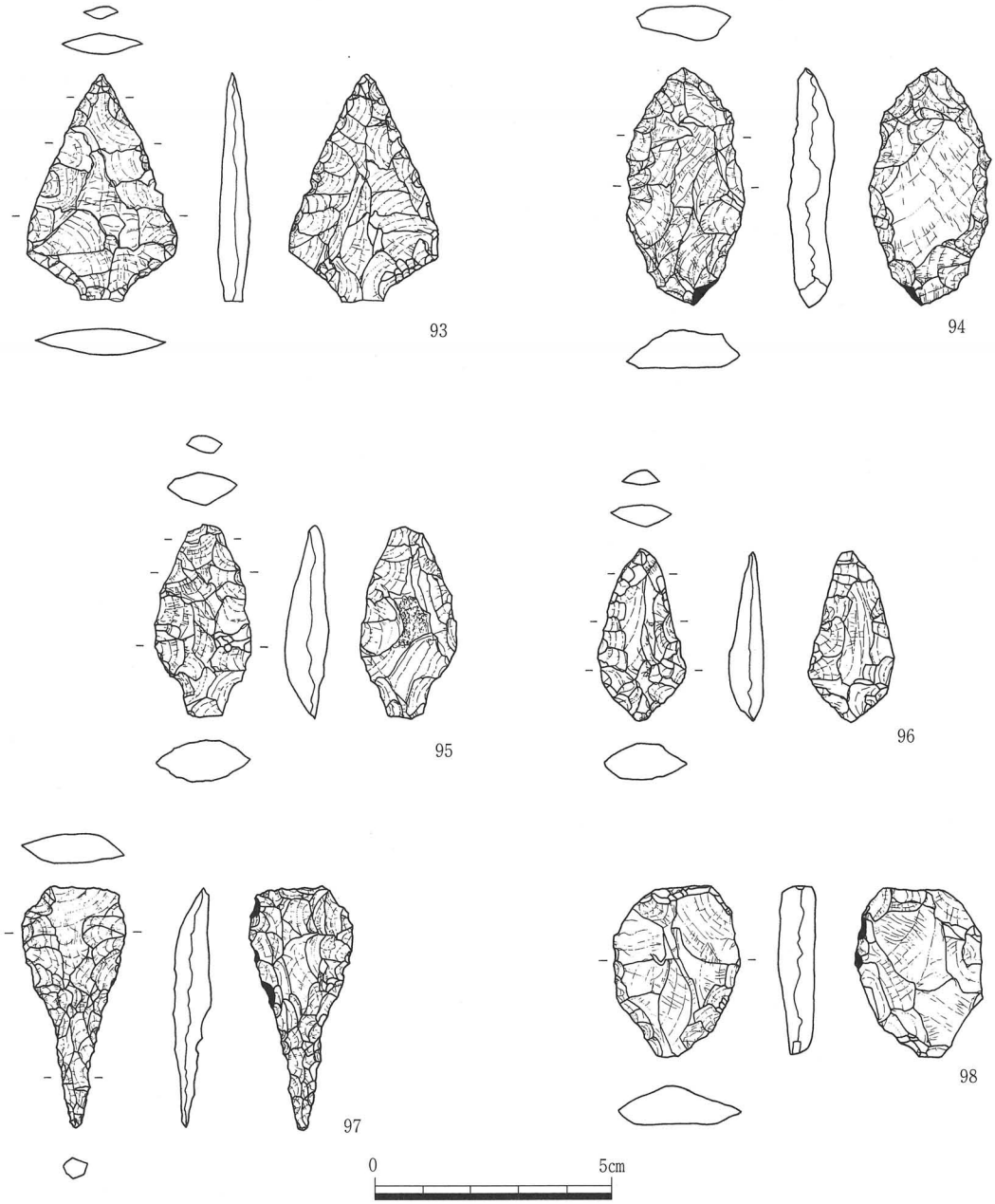
第37図　ＳＩ７出土土器

0.69m、床面からの深さが0.33mであった。Ｐ４は、直径0.48m、床面からの深さは、0.46mであった。柱痕跡が認められた。Ｐ６は直径0.48m、床面からの深さは、0.43mであった。柱痕跡が認められた。Ｐ７は、直径が0.37m、床面からの深さが0.25mであった。Ｐ９は、床面からの深さが0.2mであった。各柱穴の配列の状況からは、最終次の住居が６本柱構造であったことが推定できる。

一方、Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ８の４本は掘形底面で検出できたことから、置土上面から掘り込まれたものではないことが明らかになっている。したがって、最終次には機能していなかったものであるといえる。Ｐ２は直径が0.43m、掘形底面からの深さが0.3mであった。Ｐ３は直径が0.3m、掘形底面からの深さが0.03mである。Ｐ５は、直径が0.7m、掘形底面からの深さが0.19mであった。Ｐ８は直径0.5m、掘形底面からの深さが0.2mであった。これらは、建替え以前の住居に伴うものである。最終次の住居に伴う柱穴と比較して、深さはおしなべて浅いことが指摘できる。このことから、本来は、これらの柱穴も、かつての置土の上面から掘りこまれていたことが想定される。主柱穴の配列から建替え前の住居も６本柱構造であったと考えられる。

２．遺物（第37・38図、図版52・98～101）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。83・85～87・89・91～99については、竪穴住居廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。83は、広口壺Ａの口縁部である。口縁端部は下方向に拡張されている。口縁端部と頸部に間隔が短く幅の広い簾状文を施文している。85・86・87は甕Ａの口縁部である。外面は、縦方向もしくは、斜め方向のミガキで調整しており、内面はナデが認められるものがあった。89は鉢Ｂである。口縁端部に凹線文、体部に簾状文を施文する。92は高坏の脚部である。脚裾端部は上方向に拡張している。91も高坏の脚部である。99は石庖丁である。緑泥片岩製である。



第38図　ＳＩ７出土石器

93～96はサヌカイト製の石鏃である。93・95は有茎式である。97は、サヌカイト製の石錐である。98はサヌカイトの細部調整剥片である。

84は、広口壺Aの口縁部で、Ｐ５から出土した。非常に間隔が短く、幅の広い簾状文を施文している。88は、鉢Bの口縁部で、Ｐ６から出土した。口縁端部は肥厚している。口縁端部外面にヘラ状工具による刻目を施文している。体部には、間隔の短く幅の広い簾状文を施文する。90は高坏の脚部であり、炉２から出土した。

以上、覆土から出土した遺物も、床面の遺構から出土した遺物もⅣ－１～３様式の様相を呈している。

３．まとめ

当該竪穴住居は、築造時点もしくは機能時点を直接示すと思われる床面上の遺構から出土した遺物によって、Ⅳ－１～３様式を中心に存続していたと考えられる。周囲には、竪穴住居が密集している。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることから、ＳＩ４及びＳＩ５、ＳＩ８は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複すると想定できる。したがって、これら３棟とは、同時には存在していなかったと想定できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は8.5mであったが、これは、建替えによって２つの掘形が重複していることが、床面上の遺構の検出や土層の検討から明らかになっている。個々の直径は８m程度になると考えられる。建替前の住居の掘形に対して、最終次の住居の掘形はやや東南にそらして穿たれており、主柱穴や炉も最終次住居の方がやや東南にそれた位置で検出された。建替前の住居、最終次の住居ともに６本柱構造であると想定している。

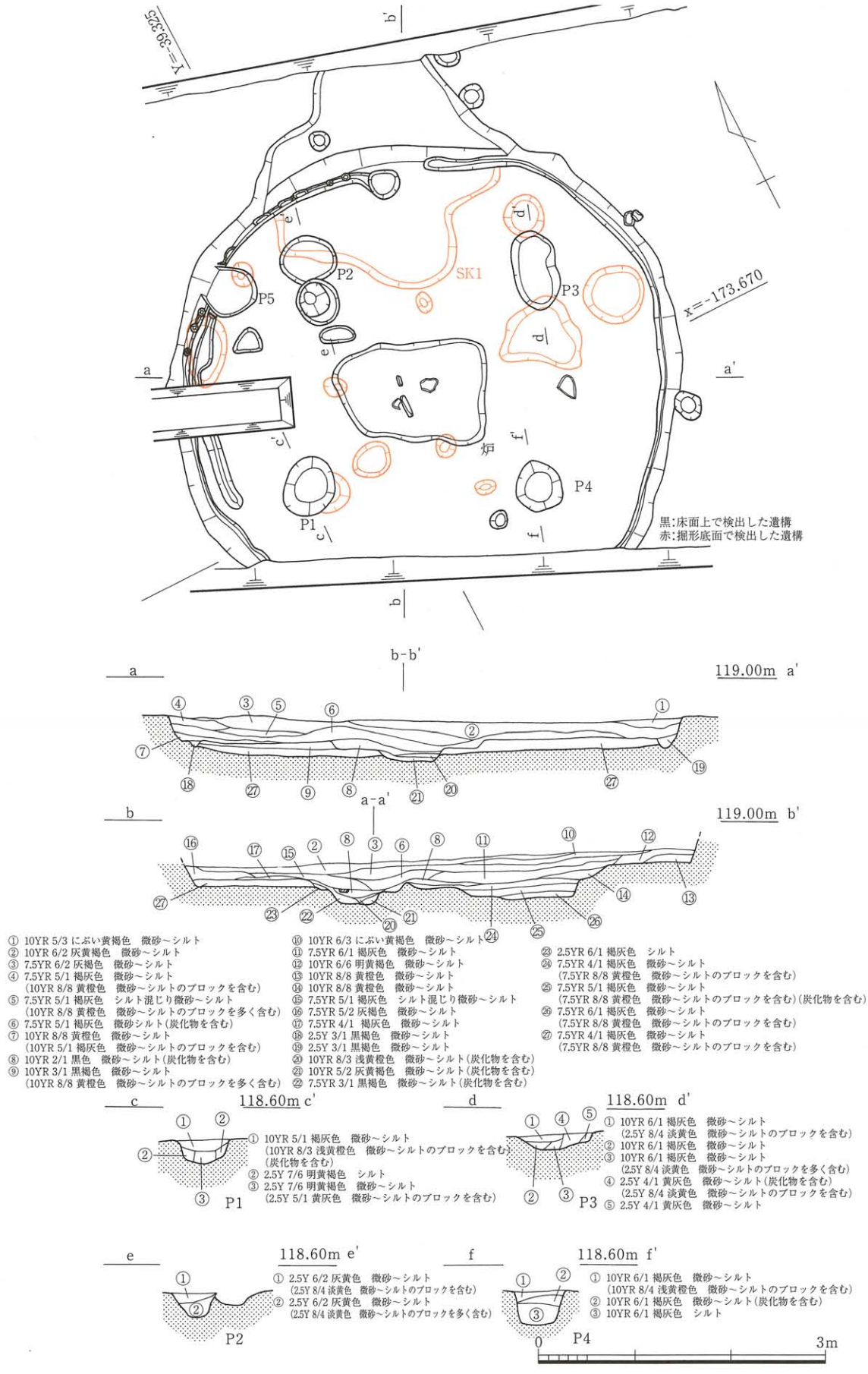
〔ＳＩ８〕

１．遺構（第39・40図、図版７・８）

Ｉ－ｃ７区を中心に位置する、竪穴住居である。周囲には東方向１mにＳＩ９が、西方向１mにＳＩ７が、南方向にＳＩ５が位置する。後世の削平による影響を比較的受けておらず、当該竪穴住居検出面の上層には弥生時代の遺物包含層が遺存していた。

竪穴住居掘形の平面形は円形を呈しており、直径は5.3mである。床面から、検出面までの高さは0.15～0.35mであった。ＳＩ４やＳＩ５と比較するとＳＩ８の掘形は浅いといえる。弥生時代の遺物包含層が上層に遺存していたことから、後世の削平は及んでいないと考えられ、本来的に浅いものであった可能性を考えている。検出面の標高は118.56mであった。なお、当該竪穴住居は、全体の８割程度を調査することができた。南側の一部が若干調査区外へ続いている。

掘形は、10ＹＲ8/8黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出された。住居の覆土が灰色系の微砂～シルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、約60度の勾配をもっている。覆土（①～⑧層・⑩～⑰層）は、周囲に形成された弥生時代



① 10YR 5/3 にぶい黄褐色　微砂～シルト
② 10YR 6/2 灰黄褐色　微砂～シルト
③ 7.5YR 6/2 灰褐色　微砂～シルト
④ 7.5YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑤ 7.5YR 5/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
⑥ 7.5YR 5/1 褐灰色　微砂シルト(炭化物を含む)
⑦ 10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルト
(10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑧ 10YR 2/1 黒色　微砂～シルト(炭化物を含む)
⑨ 10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルト
(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
⑩ 10YR 6/3 にぶい黄褐色　微砂～シルト
⑪ 7.5YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
⑫ 10YR 6/6 明黄褐色　微砂～シルト
⑬ 10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルト
⑭ 10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルト
⑮ 7.5YR 5/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
⑯ 7.5YR 5/2 灰褐色　微砂～シルト
⑰ 7.5YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト
⑱ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～シルト
⑲ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～シルト
⑳ 10YR 8/3 浅黄橙色　微砂～シルト(炭化物を含む)
㉑ 10YR 5/2 灰黄褐色　微砂～シルト(炭化物を含む)
㉒ 7.5YR 3/1 黒褐色　微砂～シルト(炭化物を含む)
㉓ 2.5YR 6/1 褐灰色　シルト
㉔ 7.5YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト
(7.5YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
㉕ 7.5YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
(7.5YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)(炭化物を含む)
㉖ 7.5YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
(7.5YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
㉗ 7.5YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト
(7.5YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)

c
① 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
(10YR 8/3 浅黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
(炭化物を含む)
② 2.5Y 7/6 明黄褐色　シルト
③ 2.5Y 7/6 明黄褐色　微砂～シルト
(2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルトのブロックを含む)
P1

d
① 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
(2.5Y 8/4 淡黄色　微砂～シルトのブロックを含む)
② 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
③ 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
(2.5Y 8/4 淡黄色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
④ 2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～シルト(炭化物を含む)
(2.5Y 8/4 淡黄色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑤ 2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～シルト
P3

e
① 2.5Y 6/2 灰黄色　微砂～シルト
(2.5Y 8/4 淡黄色　微砂～シルトのブロックを含む)
② 2.5Y 6/2 灰黄色　微砂～シルト
(2.5Y 8/4 淡黄色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
P2

f
① 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
(10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
② 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を含む)
③ 10YR 6/1 褐灰色　シルト
P4

第39図　ＳＩ８平面図・土層断面図（1/60）

の遺物包含層に起因するものであり、主に西方向から流れこんでいる状況が観察できた。床面近くには、地山に起因すると考えられる黄橙色のブロックを含んだ覆土（⑦層）が堆積していた。この他、覆土には、微細な炭化物が多く含まれていた。床面は、基盤層を掘り込んだ後、褐灰色系の微砂～シルトを置土（⑨・㉗層）することによって貼床を設けている。床面の直径は、4.7～4.9mであり、壁溝、ピット、柱穴、炉、土坑が検出されている。また、床面上からは、炉を中心として炭化物の層（⑥層）が検出された。

壁溝は、住居の壁に沿って、幅0.1～0.15m、深さ0.15mで巡っていた。壁溝は、一部で途切れるものの、ほぼ完周すると考えられる。

炉は、床面のほぼ中央で検出された。不整方形の平面形態を呈しており、床面からの深さは0.25mであり、底には１辺１mほどの平坦面があった。規模は、長辺が1.5m短辺が1.2mである。炉内下半部には、炭化物を多く含んだ層（⑳層から㉒層）が厚さ0.2m程堆積しており、この上面には、住居の覆土の一部（⑮層・⑧層・⑥層）が堆積し、炉を埋めていた。炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。

排水溝は、検出されていない。本来的に存在していないと判断できる。

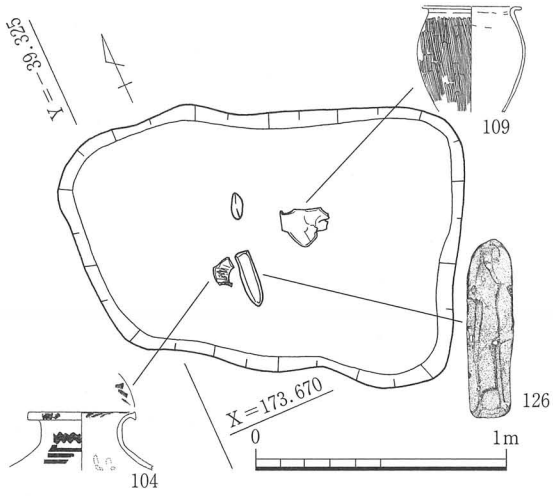
床面上からはピットが９箇所検出された。住居掘形の検出面から床面まで、ある程度の堆積があり、掘形上面で検出できた遺構がなかったことから、これらはすべてが住居に伴うものであると考えられる。この内、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４の４本は、その規模や配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径0.50m、床面からの深さは0.25mであった。比較的浅い皿状を呈するピットである。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.23mであった。Ｐ２は、直径0.42m、床面からの深さは0.25mであった。埋土は２層から構成されている。Ｐ３は、長軸0.8m、短軸0.48m、床面からの深さは0.18mであった。比較的浅い皿状の形態を呈する。Ｐ４は、直径約0.5m、床面からの深さは0.35mであった。各主柱穴の配置から、当該竪穴住居は、4本柱構造を復元することができ、柱間は2.5m程度である。この他のピットはいずれも、浅く皿状を呈しており、主柱穴ではないと考えられる。

掘形底面からも、土坑とピットが検出されている。ＳＩ18－ＳＫ１は、住居北端部の掘形法面に接する形で位置しており、比較的大きなものであった。ピットは、８箇所が検出されている。これらの遺構埋土の上面には置土が堆積していたことから最終次の住居に伴う床面が設置される以前の構造物に伴うものと考えることができる。このようなことから、建替えが行なわれていた可能性が高いといえる。

２．遺物（第41～44図、図版50・52・98・99・101～103）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。100・105・106・108・110～113、114～119・121～125は、住居廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。100は広口壺Ａであり、外面には簾状文を施文している。内面には、横方向のハケ

を施し、仕上げている。105・106は、甕Ａである。105は外面を、106は内面をミガキで仕上げている。108は甕Ｂである。摩滅が著しく、調整等の観察ができなかった。110・111は、鉢である。110は鉢Ａであり、口縁端部には刻目を、口縁部には列点文を施文している。111は鉢Ｂであり、口縁端部は段状に、肥厚しており、斜め方向にヘラ状工具による刻目を施文している。体部には間隔が短く幅の広い簾状文を施文している。内面は横方向のヘラミガキによって仕上げていた。112は高坏Ａであり、口縁部外面には斜め方向の列点文を施文する。113は高坏Ｂである。114・115は脚部である。115はＳＫ15の資料と接合できた。117は打製石剣である。サヌカイト製である。119は有茎式石鏃で、サヌカイト製である。118は凹基式石鏃で、サヌカイト製である。123は石庖丁である。緑泥片岩製である。124は、砥石である。緑泥片岩である。125は、砂岩製叩石、121・122は磨石である。122は花崗岩製、121は砂岩製である。



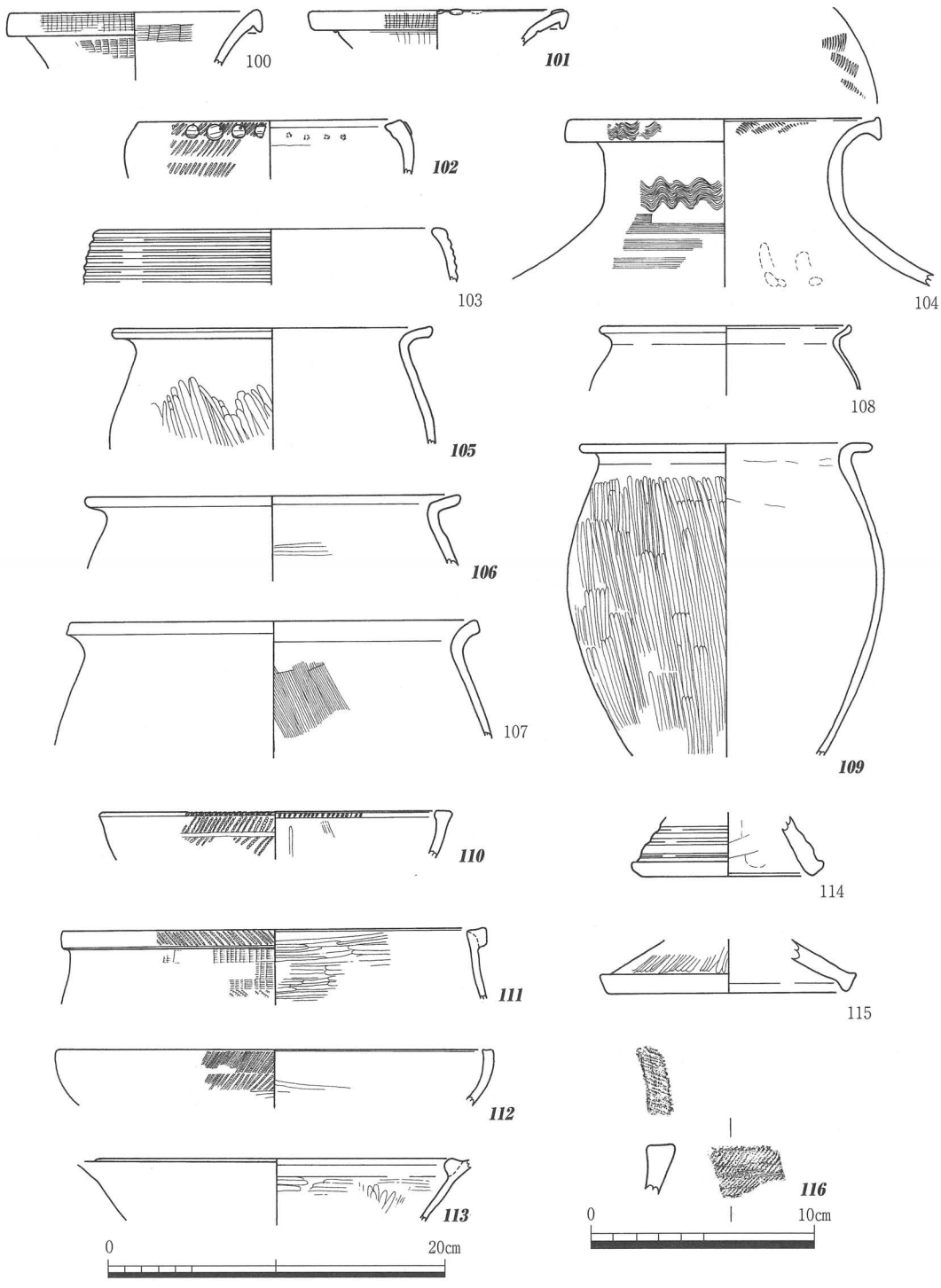
第40図　ＳＩ８一炉土器出土状況図(1/30)

103は細頸壺の口縁端部でＰ１から出土した。107は甕Ｃの小片である。内面はハケで仕上げている。口縁端部の上下方向への拡張は顕著ではない。Ｐ２から出土した。101は広口壺Ａの小片である。口縁部外面には、間隔の短い簾状文を内面には円形浮文を施文している。Ｐ５から出土した。120は安山岩製の砥石である。床面の壁溝の南西部から、出土したものである。102・104・109・126は、炉から出土した。102は細頸壺の口縁部の小片である。外面に列点文を施文した後、円形浮文を施文し、さらに刺突文を加えている。104は、広口壺Ｄである。口縁端部内面には、扇状文、外面には口縁端部に波状文を、頸部には波状文を、体部には直線文を施文している。口縁端部内面には扇状文を施文している。ＳＤ９から出土したものと接合できた。109は甕Ａである。外面を縦方向のミガキで調整している。ミガキを行う際には、上から下へ数回にわたる単位で作業を行っている。126は砥石である。砂岩製である。

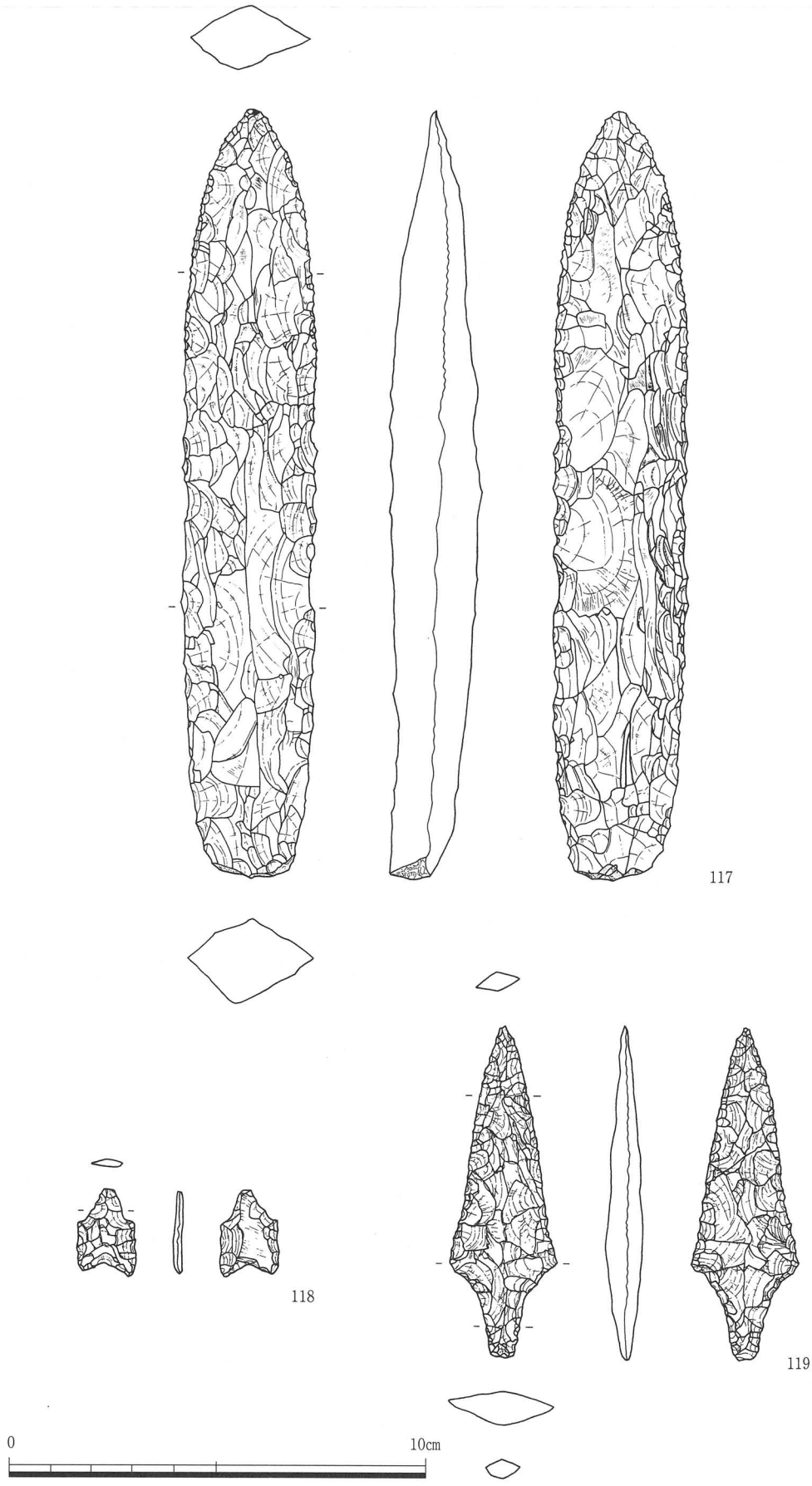
３．まとめ

当該竪穴住居からは、Ⅳ－１～２様式の遺物に加えて、107等のⅢ－２様式まで遡る遺物が出土している。後者は、築造時点もしくは機能時点を示す床面上の遺構から出土した遺物であり、当該住居は、Ⅲ－２様式を中心に機能していたと考えられる。周囲には、竪穴住居が密集している。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることからＳＩ５・ＳＩ７・ＳＩ９は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複することが想定で

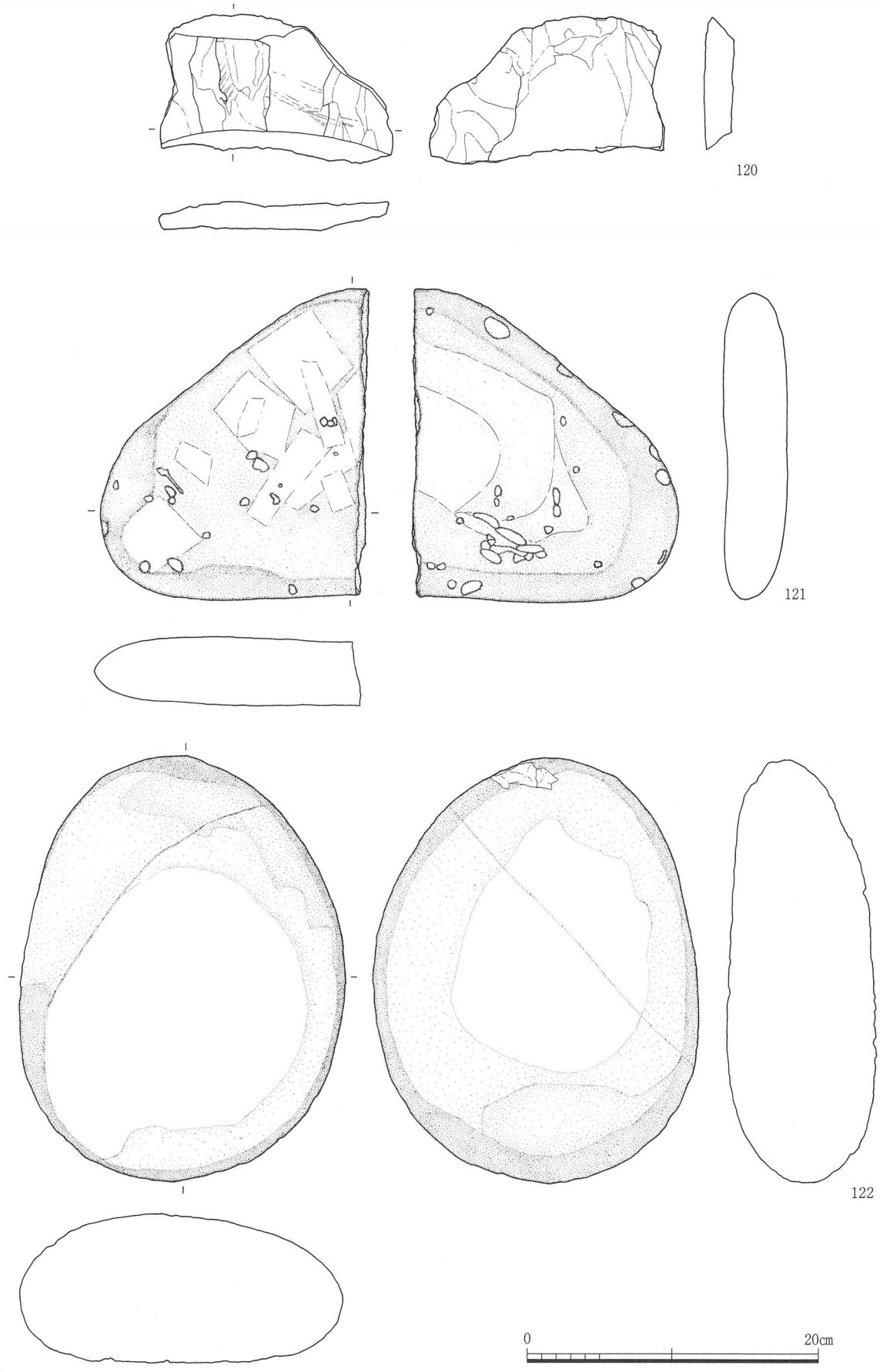
きる。したがって、これら３棟とは、同時には存在していなかったと想定できる。床面下の掘形底面からも遺構が検出されたことから、建替えが行われていた可能性が指摘できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は5.3mであり、他の住居と比較すると小型であるといえる。床面からは、炉、壁溝、柱穴、ピット、土坑が検出できた。主柱穴配列については、４本柱構構造であると考えられる。



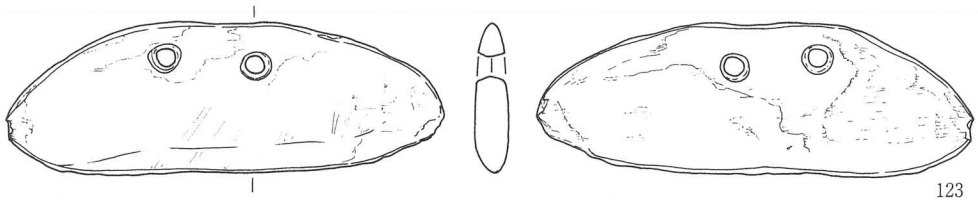
第41図　ＳＩ８出土土器

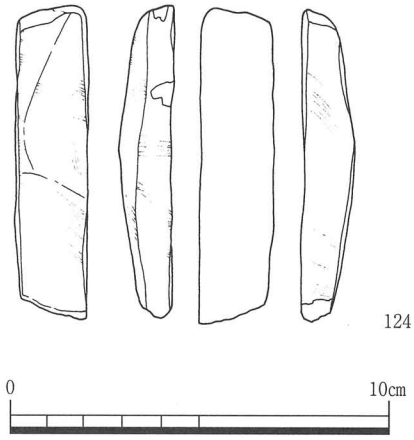


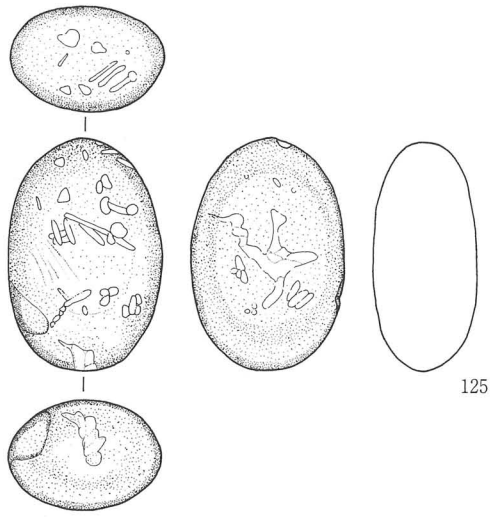
第42図　ＳＩ８出土石器①

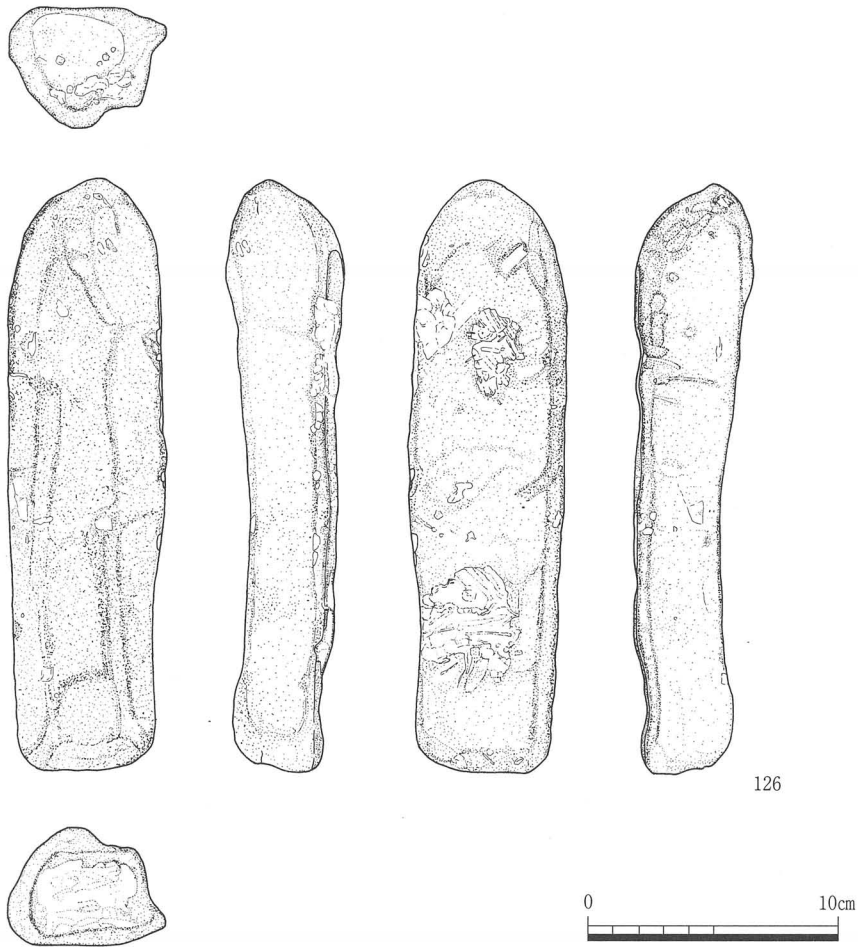


第43図　ＳＩ８出土石器②









第44図　ＳＩ８出土石器③

〔ＳＩ９〕

１．遺構（第45図、図版９）

Ｉ－ｂ７・Ｉ－ｂ８区にまたがって位置する竪穴住居である。周囲には西方向約１ｍにＳＩ８が位置する。また、南にはＳＤ９、ＳＤ10があり、ＳＩ９は、これらの溝を切り込んでつくられている。後世の削平による影響を比較的受けておらず、当該竪穴住居上層には弥生時代の遺物包含層が遺存していた。

平面形は円形を呈しており、掘形の直径は5.7m、床面から、検出面までの高さは0.2mであった。ＳＩ４やＳＩ５と比較するとＳＩ９の掘形は浅いといえる。弥生時代の遺物包含層が上層に遺存していたことから、後世の削平は及んでいないと考えられ、本来的に浅いものであった可能性が高い。検出面の標高は118.53～118.65mであった。当該竪穴住居は、北半部が調査区外に位置し、南半部の６割程度を調査することができた。

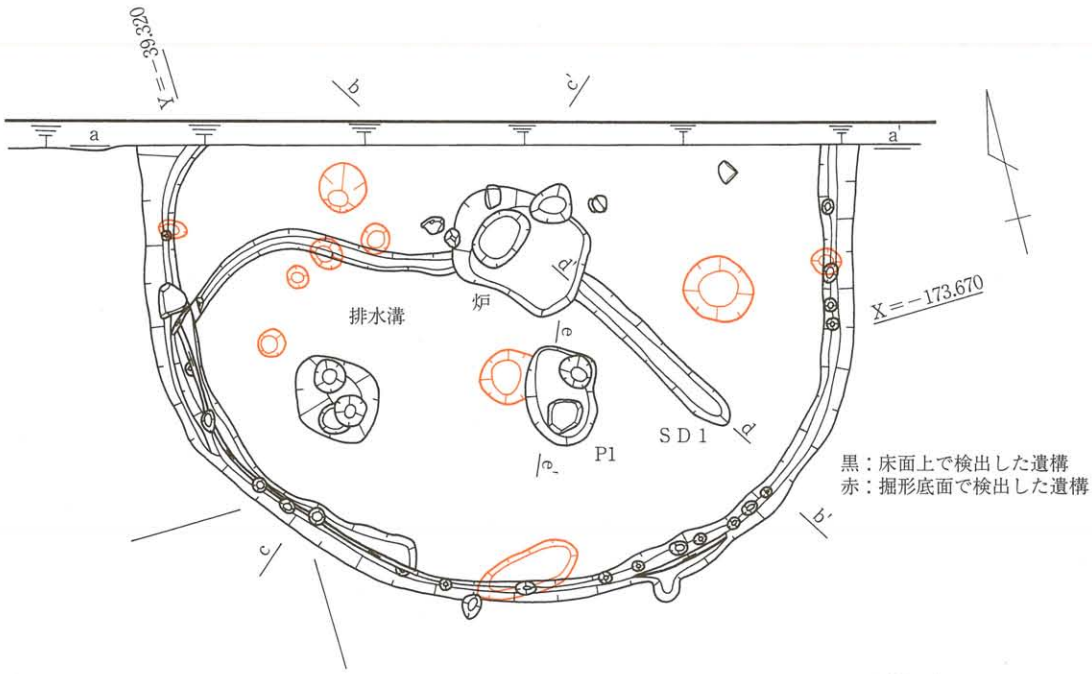
掘形は、10ＹＲ8/8黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出された。住居の覆土が灰色系の微砂～シルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、約30度の勾配をもっている。覆土（①層から㉓層）は、周囲に形成された弥生時代の遺物包含層に起因するものであり、主に西方向から流れ込んでいた。床面は、基盤層を掘り込んだ後、置土（㉞層）することによって貼床を形成している。置土には、５Ｙ7/6明黄褐色の微砂～シルトが使われていたが、遺物包含層の土質に近い2.5Ｙ5/1褐灰色微砂～シルトのブロックを含んでいた。床面の直径は、4.9mであり、壁溝、ピット、柱穴、炉、排水溝、溝、土坑が検出されている。

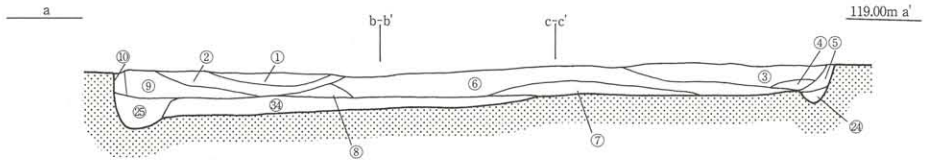
壁溝は、住居の壁に沿って、幅0.1～0.15m、深さ0.2mで巡っていた。壁溝は、調査を行った範囲でみるかぎり完周しているようである。部分的に２重に巡っていた。壁溝底部からは、直径0.1m前後のピットが検出された。

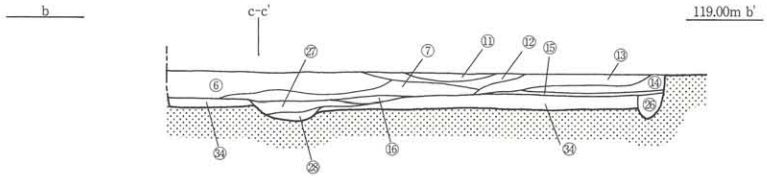
炉は、床面のほぼ中央で検出された。長辺1.1m、短辺0.8mの不整方形の平面形態を呈しており、床面からの深さは0.15mであり、底には一辺0.6mほどの平坦面があった。炉埋土は、上下２層が認められ、ともに炭化物を含んでいた。下層には、地山に起因するとみられる微砂～シルトのブロックが含まれていた。炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。

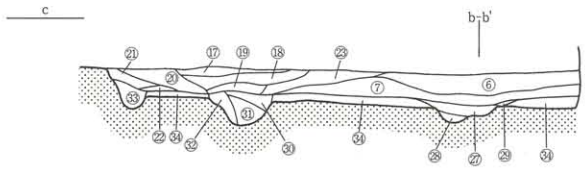
排水溝は、炉に接続しており、Ｓ字状に蛇行しながら西方向に2.3m程度のびて、壁溝に接続する。排水溝底面の標高は、炉に接続している地点で118.40m、壁溝と交わっている地点で118.36mであり、排水溝としての機能を想定した場合、住居中心に位置する炉から壁溝へ排水する機能を果たしうると考えられる。この排水溝以外にも、炉に接続する直線的にのびる溝（ＳＩ８－ＳＤ１）が検出されている、この溝は、幅が、0.25m、深さ0.13～0.15mであり、長さ1.5mにわたって検出された。

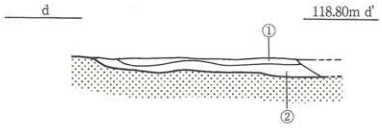
ピットは２箇所検出された。この内、Ｐ１は、規模から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径0.65m、床面からの深さは0.25mであった。床面全体を調査できたわけでは



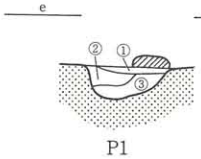








① 2.5YR 4/1 赤灰色　シルト混じり微砂
② 2.5YR 5/1 赤灰色　シルト混じり微砂(地山質のブロックを多く含む)



① 10YR 4/1 褐灰色　　シルト混じり微砂
② 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じり微砂(炭化物を含む)
(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
③ 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じり微砂(炭化物を含む)
(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを多く含む)

119.00m c'

① 2.5Y 7/3 浅黄色　微砂～シルト
② 2.5Y 灰黄色　微砂～シルト
(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
③ 10YR 6/2 灰黄褐色　微砂～シルト
④ 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を含む)
⑤ 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト
(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑥ 2.5Y 6/2 灰黄色　シルト混じり微砂～シルト
⑦ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト混じり微砂～シルト
⑧ 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
⑨ 10YR 6/2 灰黄褐色　微砂～シルト
(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑩ 10YR 6/1 褐灰色　シルト混じり微砂
⑪ 2.5Y 5/1 褐灰色　シルト(炭化物を含む)
⑫ 2.5Y 6/1 褐灰色　シルト
(2.5Y 8/6 黄色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
⑬ 2.5Y 6/1 褐灰色　微砂～シルト
⑭ 2.5Y 4/1 褐灰色　微砂～シルト
⑮ 2.5Y 7/6 明黄褐色　微砂～シルト
(2.5Y 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑯ 2.5Y 4/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を含む)
⑰ 2.5Y 6/2 灰黄色　シルト
⑱ 2.5Y 6/2 灰黄色　シルト
(2.5Y 8/2 灰白色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑲ 2.5Y 6/2 灰黄色　シルト混じり微砂～シルト
⑳ 7.5YR 5/1 褐灰色　シルト
(10Y R8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
㉑ 7.5YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
㉒ 2.5Y 7/6 明黄褐色　微砂～シルト
(2.5Y 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む)
㉓ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト混じり微砂～シルト
㉔ 7.5Y R6/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
㉕ 7.5Y R6/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
㉖ 7.5Y R6/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
㉗ 2.5Y 5/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を含む)
㉘ 2.5Y 5/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を含む)
(10YR 8/8 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
㉙ 2.5Y 5/1 褐灰色　微砂～シルト
㉚ 2.5Y 6/2 灰黄色　微砂～シルト
㉛ 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト
㉜ 2.5Y 6/2 灰黄色　微砂～シルト
㉝ 7.5YR 6/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
㉞ 2.5Y 7/6 明黄褐色　微砂～シルト
(2.5Y 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む)

0　3m

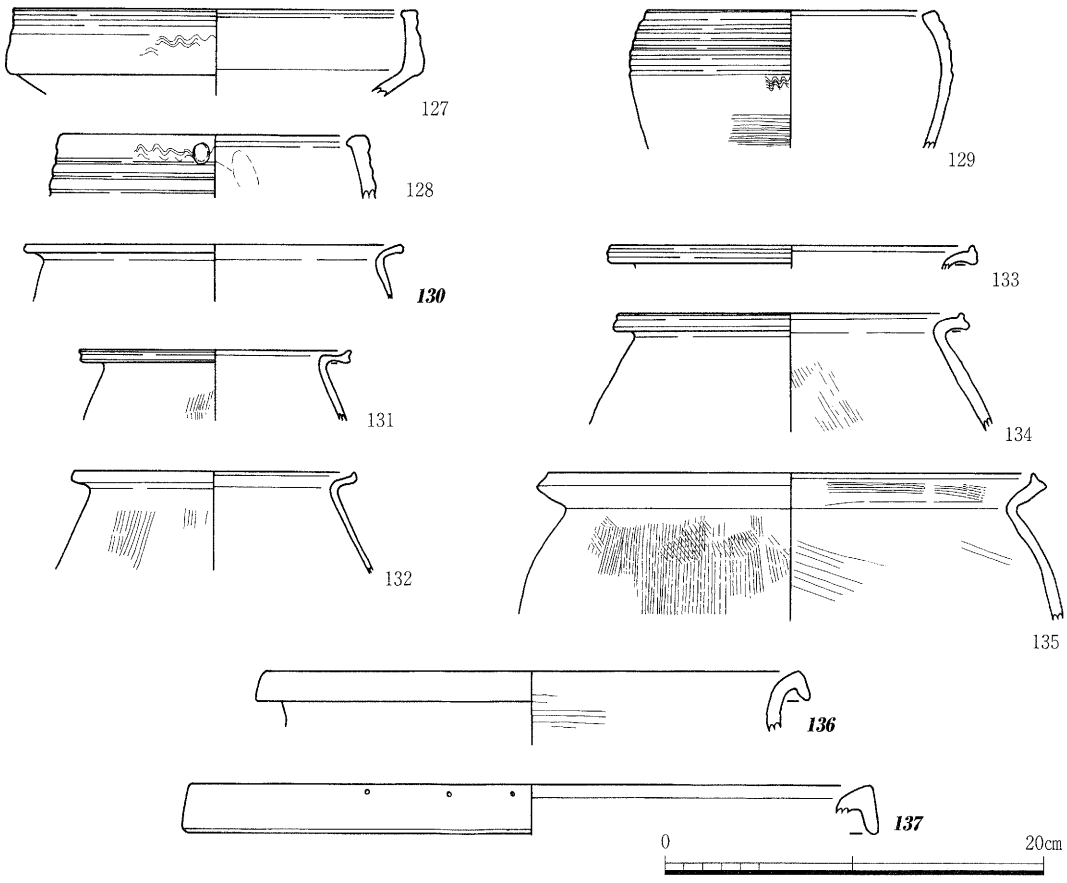
第45図　ＳＩ９平面図・土層断面図（1/60）

ないが、検出できた主柱穴の位置から、当該竪穴住居は、２本柱構造を復元することができる。２本柱構造の住居は、昭和60年の調査(三日市遺跡調査会1988)でも検出されている。

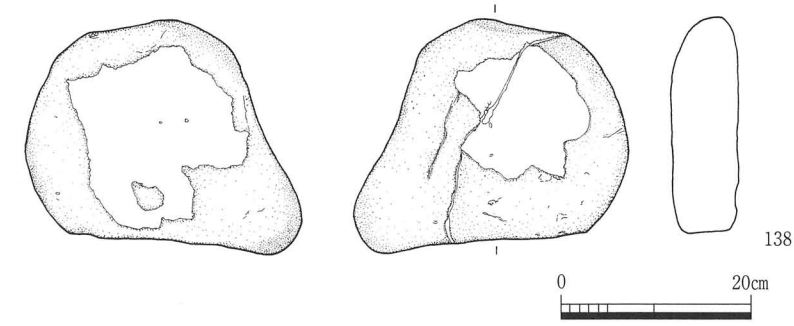
また、掘形底面からも10箇所のピットが検出されている。

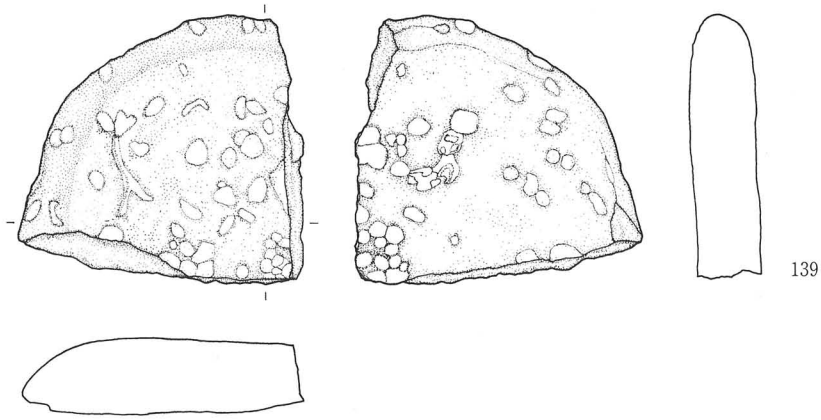
２．遺物（第46～48図、図版52・98・99・103）

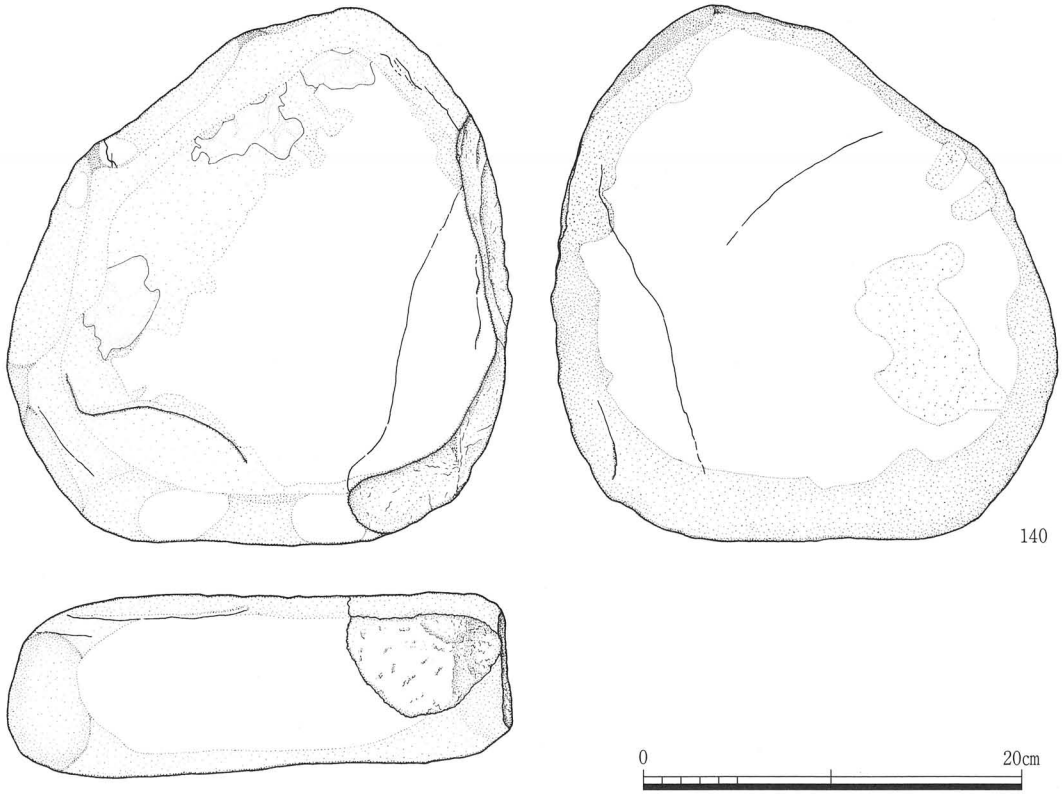
当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。これらは、住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ堆積土中に包含されていたものである。127は広口壺Ｂの口縁部の小片である。受け口状の口縁であり、凹線文、波状文を施文する。128・129は細頸壺の口縁部である。128は、凹線文、波状文、円形浮文を施文する。129は、凹線文、波状文、直線文を施文する。130は甕Ａである。131～134は、甕Ｂである。131・133・134は、口縁端部には凹線を施文している。131・132は外面をハケで調整している。136・137は甕Ｃである。137は口縁端部に刺突文を施文している。135は甕Ｄである。135は内外面にハケ調整が認められた。138～140は、台石と考えられる。138・139は砂岩製、140は花崗岩製である。すべて、上下面が平滑となっていた。当該住居周囲の地山層には、このような石は含まれない。したがって意図的に持ちこまれたものである。141～146はサヌカイト製の石器であり、141～143は有茎式石鏃である。141は全長2.81cm、幅2.11cm、厚さ0.69cmである。142は全長4.82



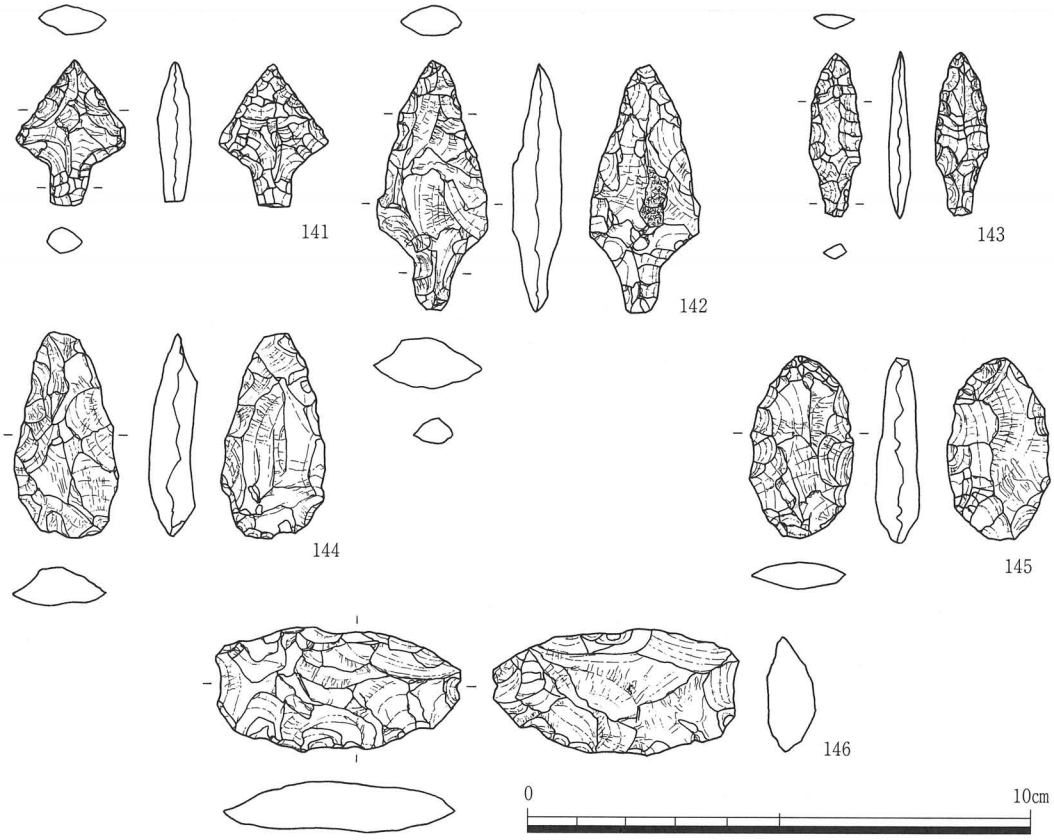
第46図　ＳＩ９出土土器







第47図　ＳＩ９出土石器①



第48図　ＳＩ９出土石器②

cm、幅2.15cm、厚さ0.95cmである。143は全長3.2cm、幅1.05cm、厚さ0.45cmである。144～146は剥片、もしくは石鏃の未製品であると考えられる。

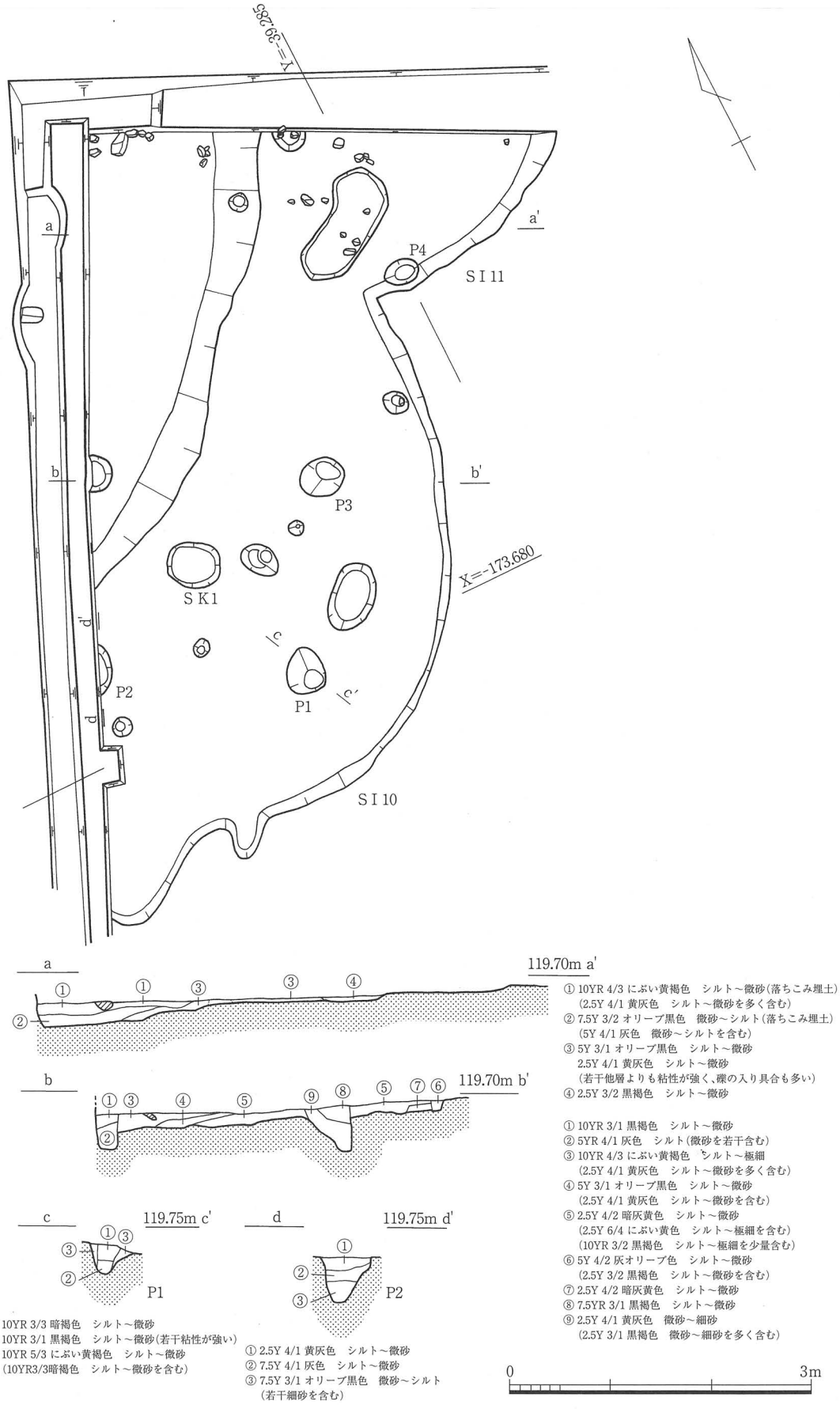
３．まとめ

当該竪穴住居は、覆土からのみ土器が出土しており、時期決定の資料を欠くが、覆土から検出された土器は、Ⅳ－１～２様式と思われるものを中心としている。周囲には、竪穴住居が密集している。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることから、ＳＩ８は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複すると想定できる。したがって、ＳＩ８とは、同時には存在していなかったと想定できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は5.7mであった。床面からは、炉、壁溝、排水溝、溝、柱穴、ピット、土坑が検出できた。２本柱構造であったと考えられる。

〔ＳＩ10〕

１．遺構（第49図、図版10）

Ｈ－ｉ８区を中心に位置する、竪穴住居である。周囲には北側にＳＩ11が位置している。西側には、ＳＩ10・11を浸食して、段丘崖２が南北にはしっている。北東方向約10mには、ＳＩ12が位置する。ＳＩ10は、上部が大幅に削平を受けているようで、竪穴住居掘形底面付近まで削平が及んでいた。



第49図　ＳＩ10・11平面図・土層断面図（1/60）

ＳＩ10の平面形態は円形を呈しており、掘形の直径は約５m程度になると推定できる。掘形底面から、検出面までの高さは0.1mであった。検出面の標高は119.68～119.73mであった。当該竪穴住居は、西側を段丘崖２によって浸食されていたため、６～７割程度の残存部分について、調査を行った。

掘形は、2.5Y6/4にぶい黄色シルト～微砂の地山面を基盤として検出した。住居の覆土が2.5Y4/2暗灰色シルト～微砂であったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、約60～80度の勾配をもっていると推定できるが、遺存状況が悪いため不明である。掘形底面は、凹凸が著しい。掘形底部には2.5Y4/2暗灰黄色シルト～微砂（⑤層）が堆積していたが、これは覆土ではなく、置土である可能性が高い。

床面上の遺構については、すべて掘形底部で検出を行っている。掘形底部からは、ピット、柱穴、土坑が検出された。

ＳＩ10－ＳＫ１は、炉の可能性がある。ＳＫ１は隅丸方形の平面形を呈しており、長辺0.54m、短辺0.37mであった。深さは0.06mであった。

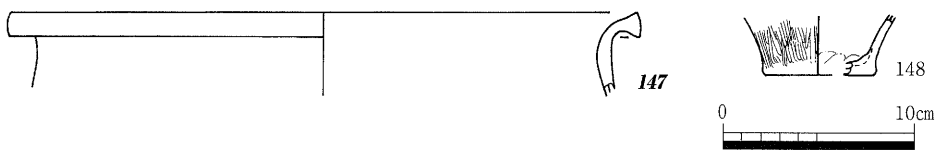
ピットは８箇所検出された。この内、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３は、その配列・規模から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は直径が0.5m、掘形底面からの深さが、0.25mであった。柱痕跡が認められた。Ｐ２は直径が約0.5m、掘形底面からの深さが、0.45mであった。Ｐ３は直径が約0.48m、掘形底面からの深さが、0.35mであった。

２．遺物（第50図、図版53）

当該竪穴住居からは、土器が出土しており、弥生土器の甕Ｃを図化することができた。147は全体の５％程度の小片であり、住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。口縁端部外面から内面にかけてはナデによって仕上げられている。

３．まとめ

当該竪穴住居の所属時期は、出土した遺物が少なく不明である。ＳＩ11とは、一部が重複しているが、先後関係については、明らかにすることができなかった。床面からは、土坑、柱穴、ピットが検出できた。主柱穴は、４柱構造である。



第50図　ＳＩ10・11出土土器

〔ＳＩ11〕

１．遺構（第49図、図版10）

Ｈ－ｉ８区に位置する竪穴住居である。周囲には南側にＳＩ10が、西側には、当該住居を浸食して、段丘崖２が南北にはしっている。北東方向約10ｍには、ＳＩ12が位置する。上部は大幅に削平を受けており、竪穴住居掘形底面付近まで削平されていた。

ＳＩ11の平面形態は円形を呈しており、掘形の直径は約５ｍ程度になると推定する。住居掘形底面から、検出面までの高さは平均して0.06ｍ程であった。検出面の標高は119.60ｍであった。当該竪穴住居は北半部が調査区外にあり、西半部は、段丘崖２によって浸食されていたため、調査を行うことができたのは、２割程度であった。

掘形は、2.5Ｙ6/4にぶい黄色シルト～微砂の地山面を基盤として検出した。住居の覆土が５Ｙ3/1オリーブ黒色シルト～微砂であったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面の勾配は、遺存状況が悪いため不明である。掘形底部には③～④層が堆積していたが、これは覆土ではなく、置土である可能性がある。

床面上の遺構については、すべて掘形底部で検出を行っている。掘形底部からは、ピット、土坑が検出された。調査を行った範囲では、主柱穴や炉に相当するような遺構は検出されなかった。

２．遺物（第50図、図版53）

当該竪穴住居に伴う遺物としては、Ｐ４から出土した甕の底部（148）がある。外面はミガキで仕上げている。

３．まとめ

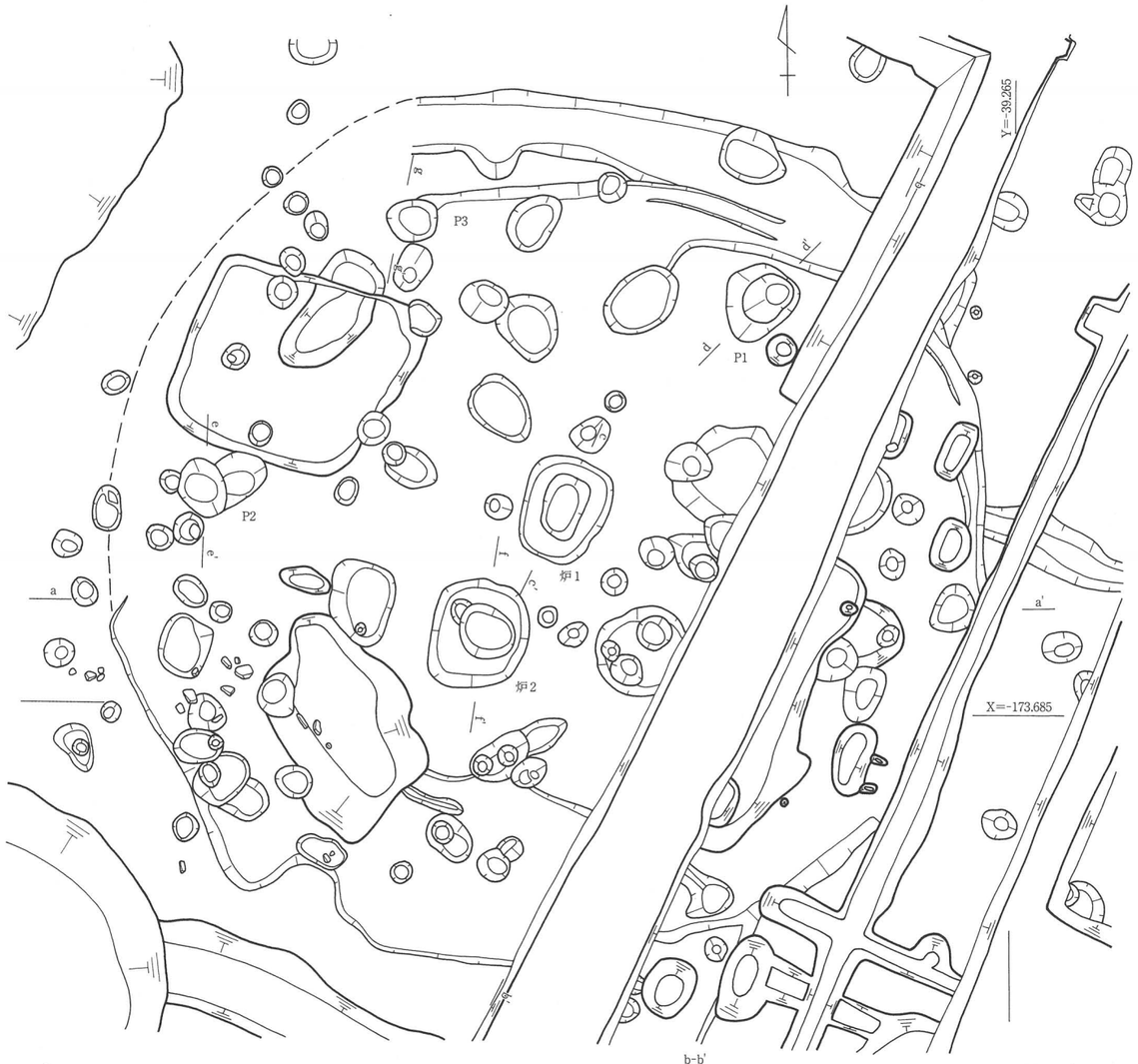
当該竪穴住居の所属時期は、出土した遺物が少なく不明である。ＳＩ10とは、一部が重複しているが、先後関係については、明らかにすることができなかった。

〔ＳＩ12〕

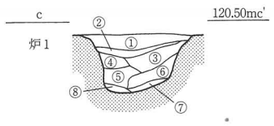
１．遺構（第51図、図版11）

Ｈ－ｈ８区を中心に位置する、竪穴住居である。周囲には南方向３ｍにＳＩ13が位置している。東側20ｍには、大量の土器片が投棄された状況で出土したＳＫ56が位置している。また、西側15ｍには、南北にはしる段丘崖２が位置している。周囲は後世の造成による削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山層もかなりの削平を受けているとみられる。

平面形は円形を呈しており、掘形の直径は8.58ｍであった。当該竪穴住居の調査は、西半部と東半部の２回に分けて行われた。西半部の削平は特に著しく、床面下まで削平が及んでいた。検出面の標高は120.40～120.60ｍであった。



①2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～微砂(5Y 6/4 オリーブ黄色　シルトのブロックを含む)
②2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～細砂(2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～細砂を含む)
③2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～微砂(5Y 6/4 オリーブ黄色　シルトのブロックを含む)
④5Y　3/1 オリーブ黒色　シルト～微砂
⑤2.5Y　3/1 黒褐色　シルト～微砂(5Y 6/4 オリーブ黄色　シルトのブロックを含む)
⑥10YR 4/2 灰黄褐色　シルト～微砂
⑦10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂(10YR 8/2 灰黄褐色を含む)

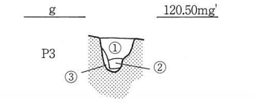


炉1 ①5Y　3/1 オリーブ黒色　シルト～極細
(2.5Y 4/1 黄灰色
極細～細(若干小礫が混じる)を含む)
②5Y　3/1 オリーブ黒色　シルト～極細
③5Y　2/2 オリーブ黒色　シルト
④2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～細砂
(5Y　6/4 オリーブ黄色
シルト(地山質)のブロックを含む)
⑤2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～細砂
(5Y　6/4 オリーブ黄色
シルトの地山ブロックを含む)
⑥5Y　3/1 オリーブ黒色　シルト
(2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～細砂を含む)
⑦5Y　6/4 オリーブ黄色　微砂～シルト
(7.5Y 3/1 オリーブ黒色　微砂～シルトを含む)
⑧7.5Y 3/1 オリーブ黒色
微砂～シルト(炭化物を多く含む)

P1 ①2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂
(2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～微砂を多く含む)
(5Y　6/4 オリーブ黄色　シルト(地山質)を含む)
②2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～微砂
(5Y　6/4 オリーブ黄色　シルト(地山質)を含む)
③5Y　4/1 灰色　細砂(炭化物を含む)

P2 ①5Y　3/1 オリーブ黒色　シルト～微砂
②5Y　3/1 オリーブ黒色　シルト～微砂
(2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルトを少量含む)
③7.5Y 4/1 灰色　シルト～微砂
(2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルトを少量含む)
④7.5Y 4/1 灰色　シルト～微砂
(2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルトを多く含む)

炉2 ①5Y　4/1 灰色　シルト～微砂
(2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルトを少量含む)
②5Y　3/1 オリーブ黒色　シルト～微砂
③7.5Y 2/1 黒色　シルト～微砂
(2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルトを含む)
④5Y　6/4 オリーブ黄色　シルト～微砂
(5Y　6/1 灰色　シルト～微砂を含む)



P3 ①5Y 3/1 オリーブ黒色　シルト～微砂
(2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルトを少量含む)
②5Y 3/1 オリーブ黒色　シルト～微砂
(2.5Y 4/1 黄灰色　細砂を少量含む)
③2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～細
(2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルト(地山質)を含む)

第51図　ＳＩ12平面図・土層断面図（1/60）

掘形は、5Y6/4オリーブ黄色シルトの地山面を基盤として検出した。竪穴住居覆土は部分的にしか遺存していなかったため、検出はやや困難であり、当該遺構が竪穴住居であることを認識するのが遅れた。

床面は、比較的遺存状況の良かった東側で観察した結果、基盤層を掘り込んだ後、地山に起因する黄褐色の粘土のブロックを含んだ10YR5/1黄褐シルトを置土することによって貼床を造成していることがわかった。床面の直径は、約７m程度と推定される。床面からは、壁溝、ピット、柱穴、炉、土坑が検出されている。

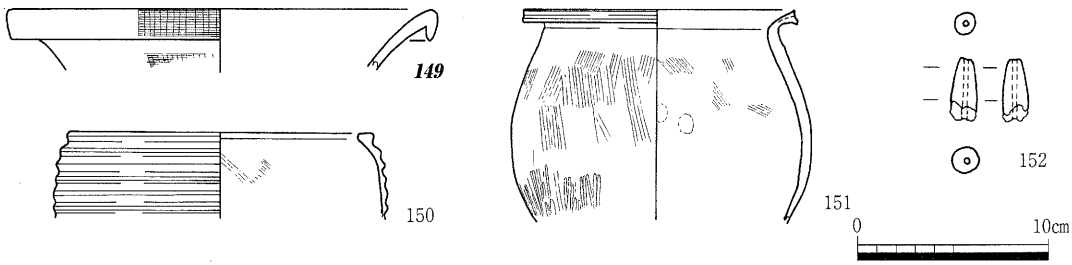
壁溝は、住居の壁に沿って、幅0.2～0.7mで巡っていた。壁溝は完周せず、部分的に２重に巡っていた。

炉は、床面のほぼ中央で２箇所検出された。１箇所は建替えに伴うものであると推定できる。炉１は長辺１m、短辺0.8mの隅丸方形の平面形態を呈しており、検出面からの深さは0.55mであり底には直径0.7mほどの平坦面があった。覆土は、周囲から、土が流れ込んだ状況を呈しており、炭化物層と地山に起因する層が互層となっていた。炉２は、直径約1.1mの不正円形を呈しており、底部は擂鉢状を呈していた。埋土は下層に炭化物層が堆積しており、上層には、周囲の遺物包含層が流れ込んだと推定される灰褐色の層がみられた。炉１・２ともに炉掘形には被熱した痕跡が認められなかった。

ピットは床面より多数のものが検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１，Ｐ２、Ｐ３の３本は、その規模、配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径0.7m、検出面からの深さは0.3mであった。Ｐ２は、直径0.6m、検出面からの深さは0.64mであった。Ｐ３は、直径0.33m、床面からの深さは0.3mであった。

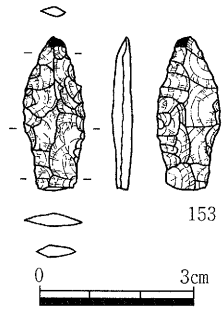
２．遺物（第52・53図、図版53・98）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。149・150・152・153は、住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。149は広口壺Ａの口縁部の小片である。口縁端部は下方向に拡張し、簾状文を施文している。150は細頸壺の口縁部であり、凹線文を施文している。152は、土錘である。153は、サヌカイト製の凸基式石鏃である。151は、甕Ｂであり、炉１から出土した。内・外面ともに、ハケ調整を行っている。当該住居から出土した遺物は数が少なく、小片が多い。Ⅳ－２～３様式の様相を呈している。



第52図　ＳＩ12出土土器

３．まとめ



第53図　ＳＩ12出土石器

当該竪穴住居は、築造時点もしくは機能時点を示す床面上の遺構から出土した遺物によって、Ⅳ－２～３様式を中心に存続していたと考えられる。周囲には、竪穴住居が比較的集まっている。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることから、ＳＩ13は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複すると想定できる。したがって、ＳＩ13とは、同時には存在していなかったと想定できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は8.58ｍであったが、これは、建替えによって２つの掘形が重複している可能性がある。重複していた場合、個々の直径は８ｍ程度になると考えられる。床面からは、炉、壁溝、柱穴、ピット、土坑が検出できた。主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔ＳＩ13〕

１．遺構（第54・55図、図版12）

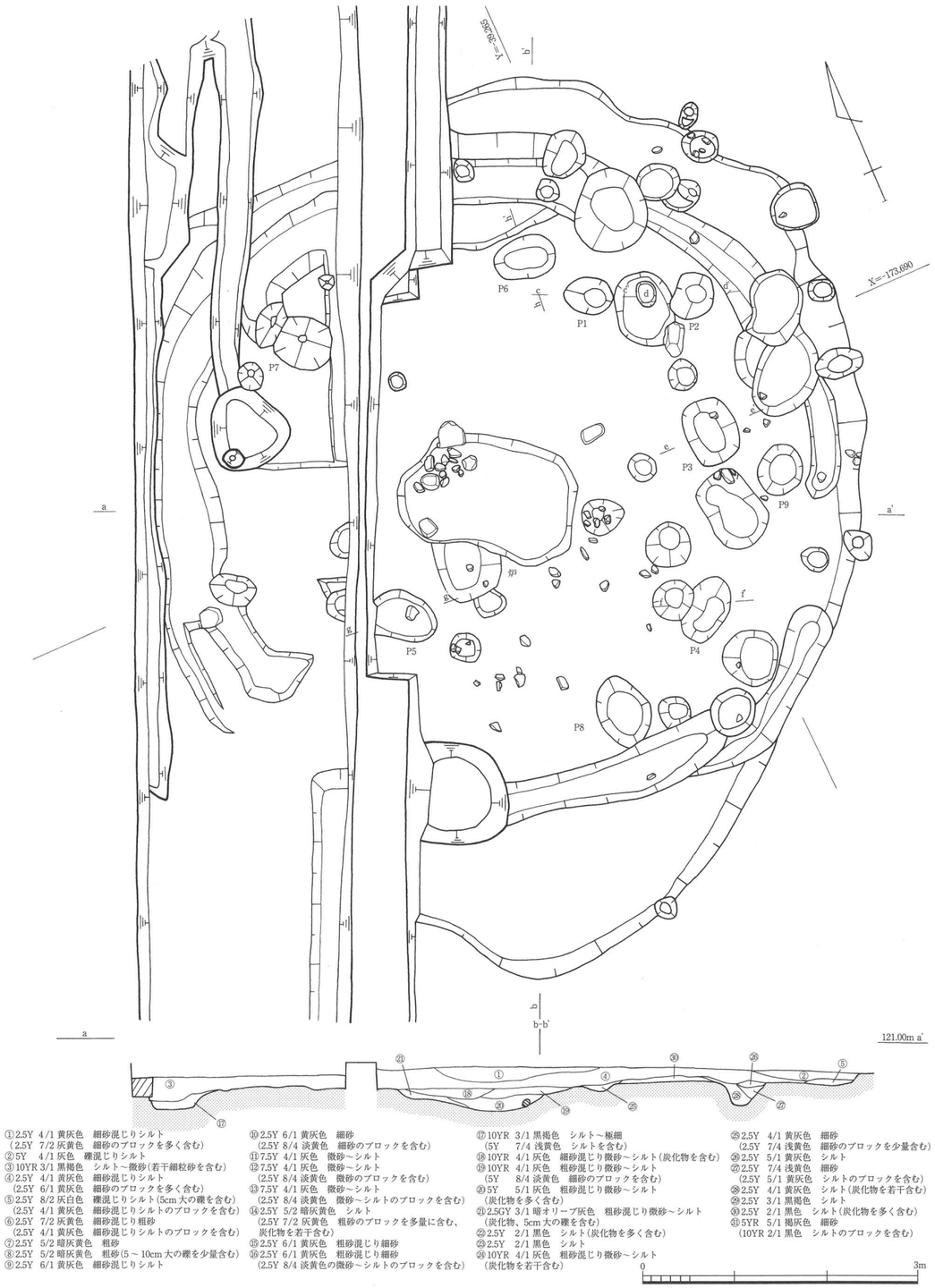
Ｈ－ｇ10区を中心に位置する竪穴住居である。周囲には、北方向３ｍにＳＩ12が位置しており、東方向15ｍには、大量の土器片が投棄された状況で出土したＳＫ56が位置している。また、西側15ｍには、南北方向にはしる段丘崖２が位置している。周囲には、弥生時代の遺物包含層が遺存しておらず、地山層もかなりの削平を受けているとみられる。

平面形は、円形を呈しており、掘形の直径は7.7ｍ、床面から、検出面までの高さは0.13～0.45ｍであった。検出面の標高は120.60～120.70ｍであった。当該竪穴住居の調査は、東半部と西半部の２回に分けて行われた。

掘形は、2.5Y8/4淡黄色シルトを基盤として検出された。住居の覆土が黄灰色系の細砂まじりシルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、約40度の勾配をもっている。覆土（①層～⑰層）は主に北方向から流れ込んだ状況が確認された。床面は、地山層を掘り込んだ後、部分的に窪んだ場所に置土（⑳層）を行うことでつくりだしていた。床面の直径は、6.6ｍであり、壁溝、ピット、柱穴、炉、土坑が検出されている。なお南には、三日月状の平面形態を呈する張り出し部が認められるが、建替えの痕跡と考えられる。

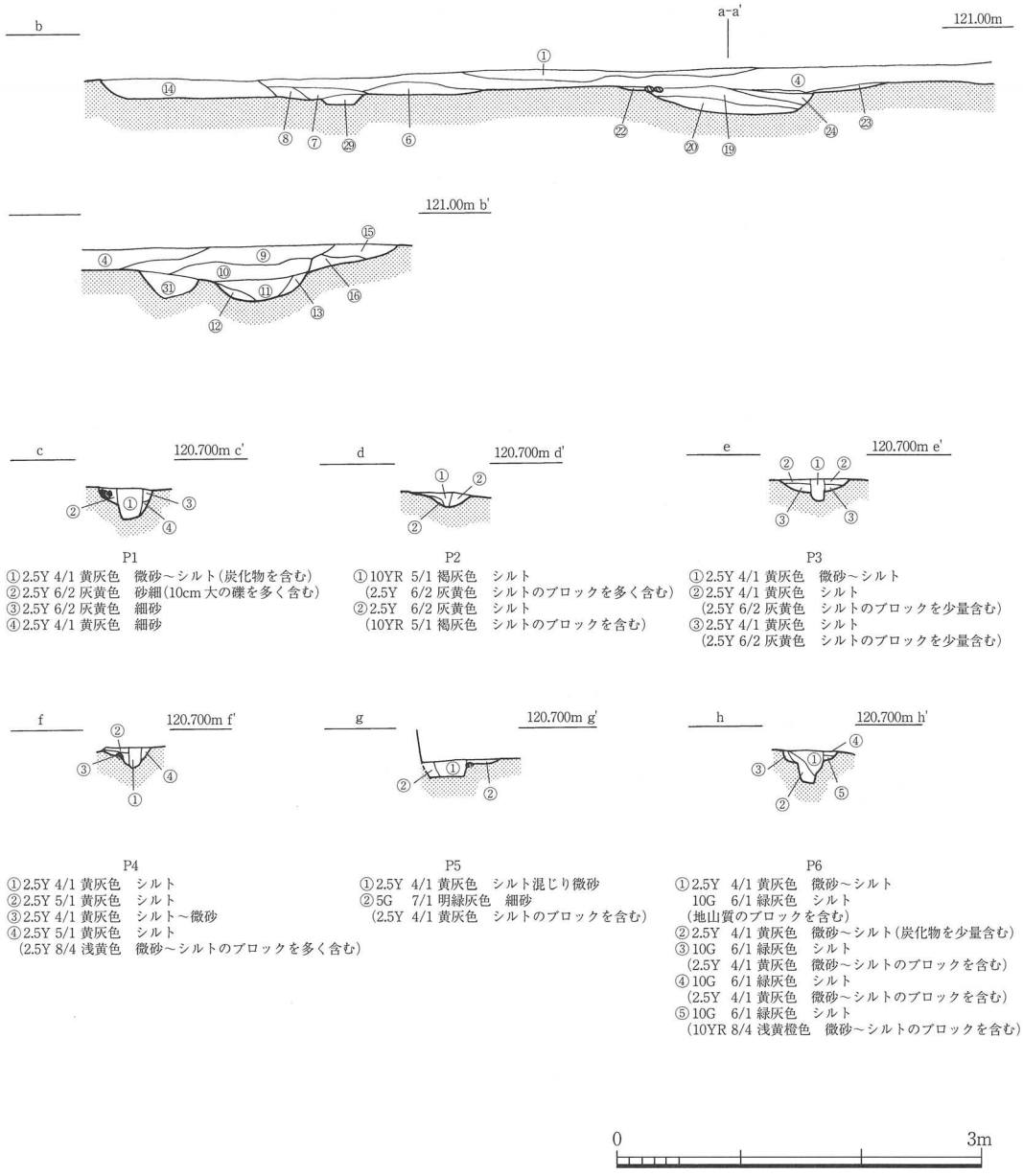
壁溝は、住居の壁に沿って、幅0.25～0.7ｍ、深さ0.1～0.2ｍで巡っていた。壁溝は完周せず、部分的に壁溝が巡っていない場所があった。

炉は、床面のほぼ中央で検出された。隅丸方形の平面形態を呈しており、床面から底部までの深さは0.25ｍであり、底部は擂鉢状を呈している。底部に炭化物を多く含んだ層（⑳層）が堆積しており、この上層に堆積した層（⑱層）にも炭化物が含まれていた。炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。



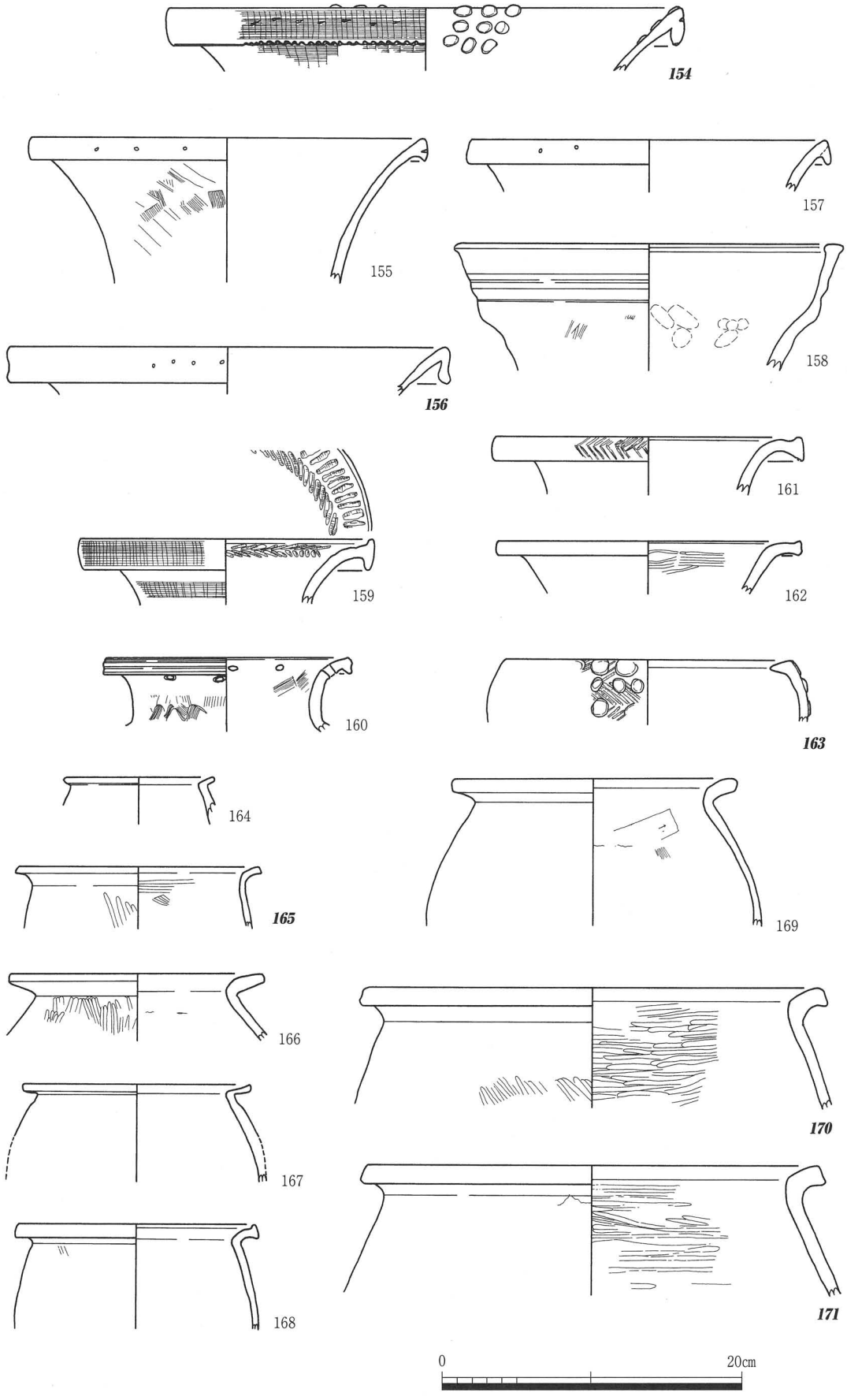
①2.5Y 4/1 黄灰色　細砂混じりシルト
（2.5Y 7/2 灰黄色　細砂のブロックを多く含む）
②5Y　4/1 灰色　礫混じりシルト
③10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂（若干細粒砂を含む）
④2.5Y 4/1 黄灰色　細砂混じりシルト
（2.5Y 6/1 黄灰色　細砂のブロックを多く含む）
⑤2.5Y 8/2 灰白色　礫混じりシルト（5cm 大の礫を含む）
（2.5Y 4/1 黄灰色　細砂混じりシルトのブロックを含む）
⑥2.5Y 7/2 灰黄色　細砂混じり粗砂
（2.5Y 4/1 黄灰色　細砂混じりシルトのブロックを含む）
⑦2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂
⑧2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂（5～10cm 大の礫を少量含む）
⑨2.5Y 6/1 黄灰色　細砂混じりシルト
⑩2.5Y 6/1 黄灰色　細砂
（2.5Y 8/4 淡黄色　細砂のブロックを含む）
⑪7.5Y 4/1 灰色　微砂～シルト
⑫7.5Y 4/1 灰色　微砂～シルト
（2.5Y 8/4 淡黄色　微砂のブロックを含む）
⑬7.5Y 4/1 灰色　微砂～シルト
（2.5Y 8/4 淡黄色　微砂～シルトのブロックを含む）
⑭2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト
（2.5Y 7/2 灰黄色　粗砂のブロックを多量に含む、炭化物を若干含む）
⑮2.5Y 6/1 黄灰色　粗砂混じり細砂
⑯2.5Y 6/1 黄灰色　粗砂混じり細砂
（2.5Y 8/4 淡黄色の微砂～シルトのブロックを含む）
⑰10YR 3/1 黒褐色　シルト～極細
（5Y　7/4 浅黄色　シルトを含む）
⑱10YR 4/1 灰色　細砂混じり微砂～シルト（炭化物を含む）
⑲10YR 4/1 灰色　粗砂混じり微砂～シルト
（5Y　8/4 淡黄色　細砂のブロックを含む）
⑳5Y　5/1 灰色　粗砂混じり微砂～シルト
（炭化物を多く含む）
㉑2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色　粗砂混じり微砂～シルト
（炭化物、5cm 大の礫を含む）
㉒2.5Y　2/1 黒色　シルト（炭化物を多く含む）
㉓2.5Y　2/1 黒色　シルト
㉔10YR 4/1 灰色　粗砂混じり微砂～シルト
（炭化物を若干含む）
㉕2.5Y 4/1 黄灰色　細砂
（2.5Y 7/4 浅黄色　細砂のブロックを少量含む）
㉖2.5Y 5/1 黄灰色　シルト
㉗2.5Y 7/4 浅黄色　細砂
（2.5Y 5/1 黄灰色　シルトのブロックを含む）
㉘2.5Y 4/1 黄灰色　シルト（炭化物を若干含む）
㉙2.5Y 3/1 黒褐色　シルト
㉚2.5Y 2/1 黒色　シルト（炭化物を多く含む）
㉛5YR 5/1 褐灰色　細砂
（10YR 2/1 黒色　シルトのブロックを含む）

第54図　ＳＩ13平面図・土層断面図（1/60）



第55図　ＳＩ13土層断面図，(1/60)

ピットは多数のものが検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１～６の６本は、土層断面の観察から、柱痕跡と思われるものが認められたため、主柱穴と想定した。Ｐ１は、直径0.5m、床面からの深さは0.28mであった。柱痕跡の直径は0.2mであった。Ｐ２は、直径0.45m、床面からの深さは0.12mであった。柱痕跡の直径は0.05mであった。Ｐ３は、直径0.55m、床面からの深さは0.18mであった。柱痕跡の直径は0.1mであった。Ｐ４は、直径0.35m、床面からの深さは0.17mであった。柱痕跡の直径は0.1mであった。Ｐ５は、直径0.65m、床面からの深さは0.18mであった。柱痕跡の直径は0.25mであった。Ｐ６は、直径0.45m、床面からの深さは0.28mであった。



第56図　ＳＩ13出土土器①

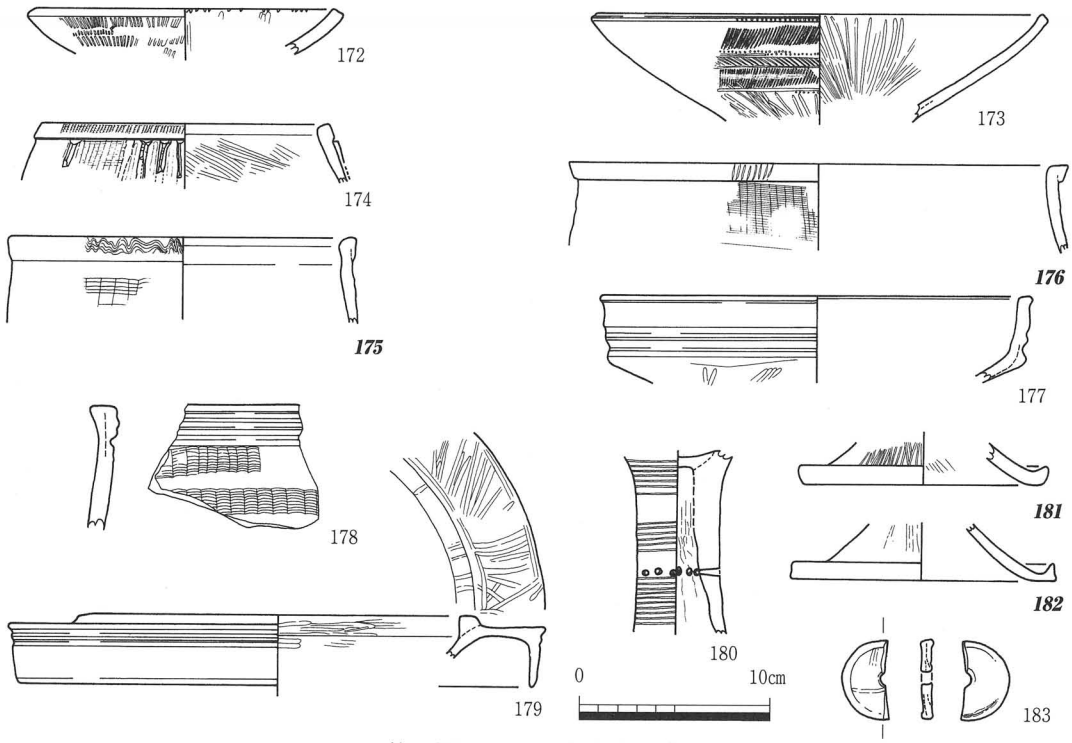
柱痕跡の直径は0.3mであった。各主柱穴の配置から、当該竪穴住居は、6本柱構造を復元することができる。

2．遺物（第56～58図、図版53・54・98・101～103）

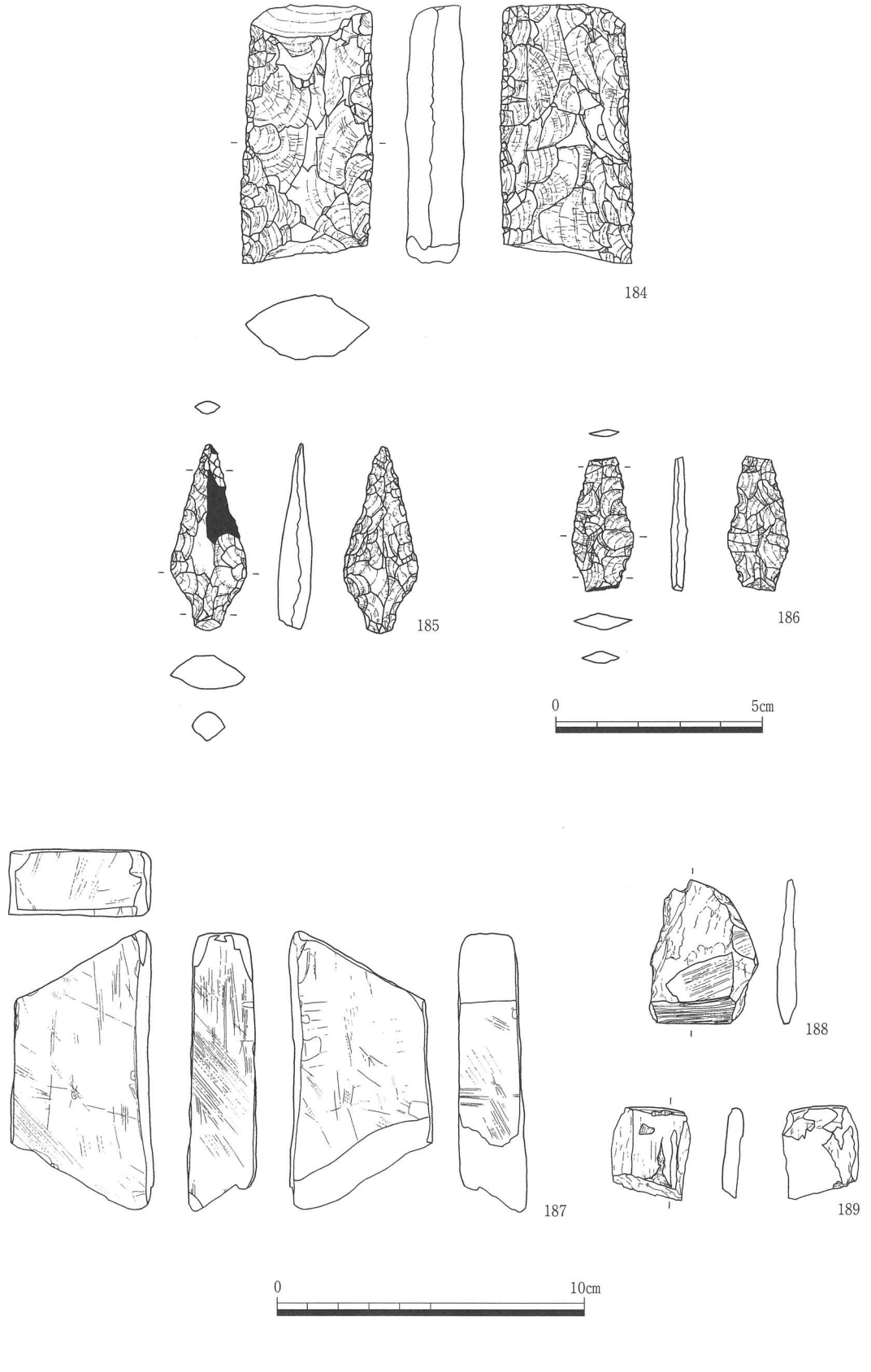
当該竪穴住居からは、比較的豊富な土器と石器が出土している。ここでは、覆土出土のものと遺構出土のものに分けて以下に内容をのべる。

・覆土出土の遺物

154・155・157～162は、広口壺の口縁部である。これらのうち、154・155・157は広口壺Aである。154は外面に簾状文を内面に円形浮文を施文している。155・157は口縁端部外面に刺突文を施文している。158は、広口壺Bである。口縁部には凹線文を施文している。160・162は、広口壺Dである。160は、口縁端部に凹線文を施文しており、紐孔を穿孔している。159・161は広口壺Eである。159は、外面に簾状文を、内面に列点文を施文する。161はヘラ状工具による刻目を上下に組み合わせて、綾杉状の文様をつくりだしている。163は、細頸壺の小片であり、円形浮文と列点文を施文している。164・166・167は、甕Aである。内外面はミガキで仕上げている個体があった。168は甕Bである。摩滅が著しいが、外面をハケで仕上げていた。170・171は甕Cである。内外面をミガキで仕上げている。172・173は鉢Aである。173は細かい列点文を施文している。讃岐からの搬入品である。174・175・176・178は、鉢Bである。体部外面には、簾状文を施文し、口縁端部は肥厚する。口縁端部の施文は、176がヘラ状工具による刻目を、175が波状文、178が凹線



第57図　ＳＩ13出土土器②



第58図　ＳＩ13出土石器

文である。179は高坏Bの小片である。177は、高坏Aであり、凹線を施文している。182は高坏の脚部である。184は石剣、185は凸基式石鉄鏃である。いずれもサヌカイト製である。188・189は石庖丁である。緑泥片岩製である。

・遺構出土の遺物

180・181は高坏の脚部と考えられる。180は、沈線状の退化した凹線文を施し、透穴を穿孔している。炉から出土した。181は小片であり、端部を上方向に拡張している。Ｐ３から出土した。156は、広口壺Aである。Ｐ７から出土した。口縁部には刺突文を施文している。169は、甕Aの小片であり、Ｐ８から出土している。ともに、くの字状に屈曲する口縁部を持ち、口縁端部は面取りしている。165も甕Aであり、Ｐ９から出土した。、外面にミガキを加えている。183は、土製の紡錘車である。直径は4.15cm、厚さ0.65cmであった。炉から出土した。187は、泥岩製の砥石である。Ｐ８から出土した。186は、サヌカイト製の有茎式石鏃である。Ｐ９から出土した。以上当該住居から出土した遺物はⅣ－１～２様式の様相を持つといえる。

３．まとめ

当該竪穴住居からは、170・171のようにⅢ様式まで遡る可能性のある遺物から155・157のようにⅣ－３～４様式の遺物まで含まれている。築造時点もしくは機能時点を示す床面上の遺構から出土した遺物からは、Ⅳ－１～２様式を中心に存続していたことが考えられる。周囲には、竪穴住居が比較的集まっている。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることから、ＳＩ12は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複すると想定できる。したがって、ＳＩ12とは、同時には存在していなかったと想定できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は7.7ｍであった。床面からは、炉、壁溝、柱穴、ピット、土坑が検出できた。主柱穴の配列については、６本柱構造を復元することができる。

〔ＳＩ14〕

１．遺構（第59図、図版10）

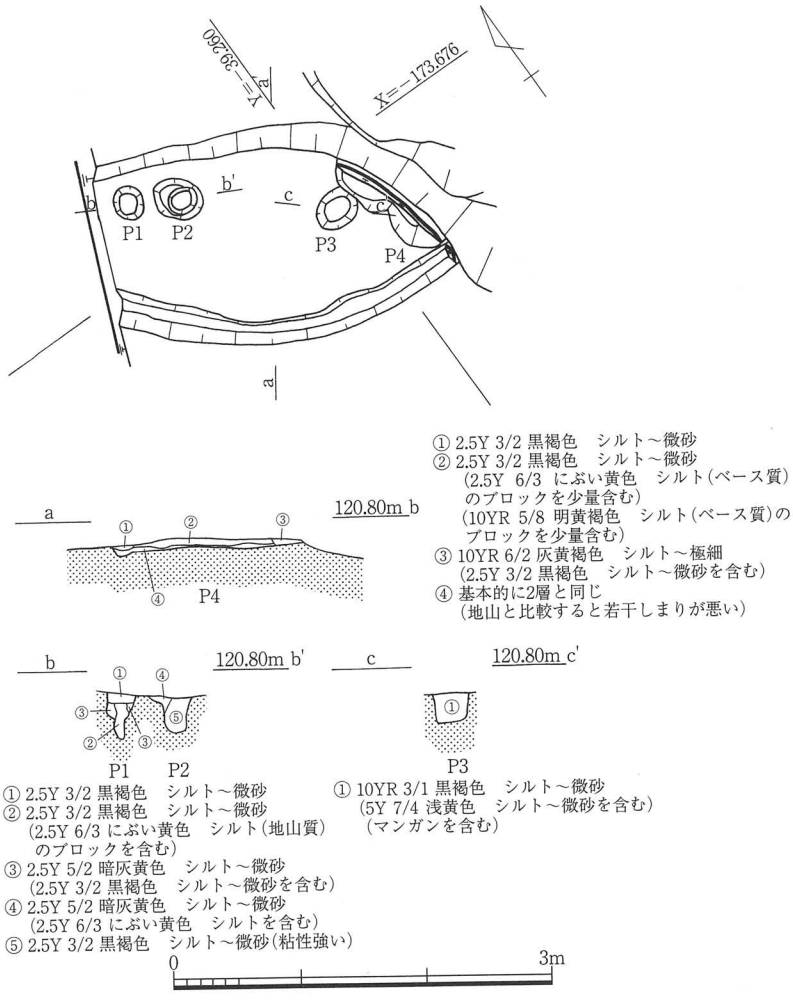
Ｈ－ｆ８・Ｈ－ｇ８区にまたがって位置する竪穴住居である。周囲には、北方向に古代の流路（ＮＲ１）が東西方向にはしっており、当該住居の大部分はこの流路によって破壊されている。周囲は、後世に削平されているようで、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山にまで削平が及んでいるようであった。遺存していたのは、全体の３割程度であったが、平面形態は円形を呈すると考えられ、直径は６ｍ前後になると推定できる。床面から、検出面までの高さは0.1ｍであった。検出面の標高は120.60ｍであった。

掘形は、2.5Y6/3にぶい黄色シルトの地山面を基盤として検出した。床面には、地山質に近似した2.5Y3/2黒褐色シルト～微砂を置き、床面を作り出していた。床面上からは、

壁溝、ピットが検出されている。

壁溝は、住居の壁に沿って、幅0.15～0.3m、深さ0.05mで巡っていた。

ピットは５箇所検出された。Ｐ１～Ｐ３は規模の大きなものであり、主柱穴の可能性がある。Ｐ１は直径0.23m、床面からの深さは0.38mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.08mであった。Ｐ２は、直径0.35m、床面からの深さは0.27mであった。Ｐ３は、直径0.28m、床面からの深さは0.25mであった。



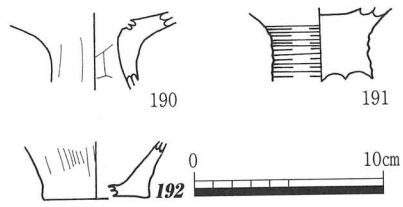
第59図　ＳＩ14平面図・土層断面図（1/60）

２．遺物（第60図、図版54）

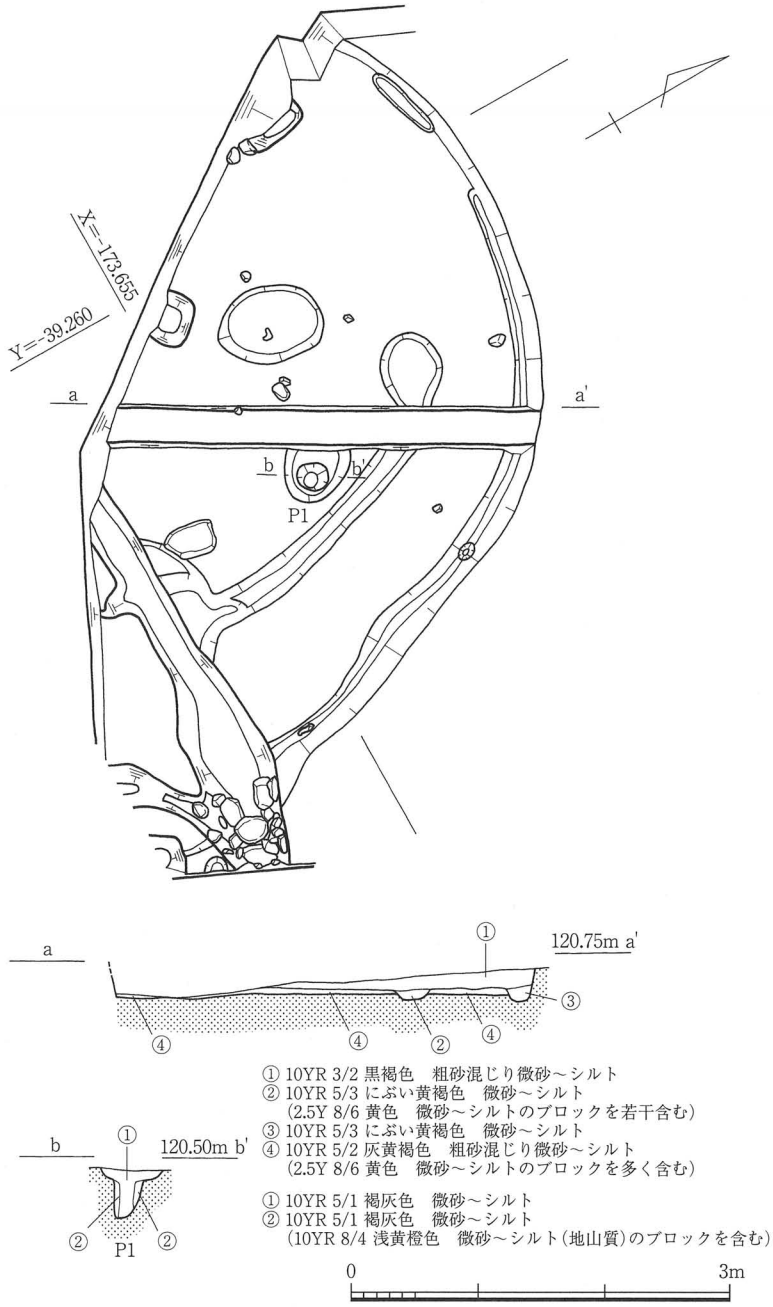
当該竪穴住居からは、覆土より高坏（191）が、Ｐ４より甕の底部(192)、高坏（190）が出土している。いずれも小片であるが、高坏の脚部(191）は凹線文を施文する。Ⅳ様式に該当する。

３．まとめ

当該竪穴住居は、出土遺物が少ないため、時期を確定することが難しいが、Ⅳ様式を中心に存続していたと考えられる。古代の流路によって大部分が破壊されていたが、規模は直径６ｍ前後の円形プランであると考えられる。床面からは、壁溝、ピットが検出できた。主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。



第60図　ＳＩ14出土土器

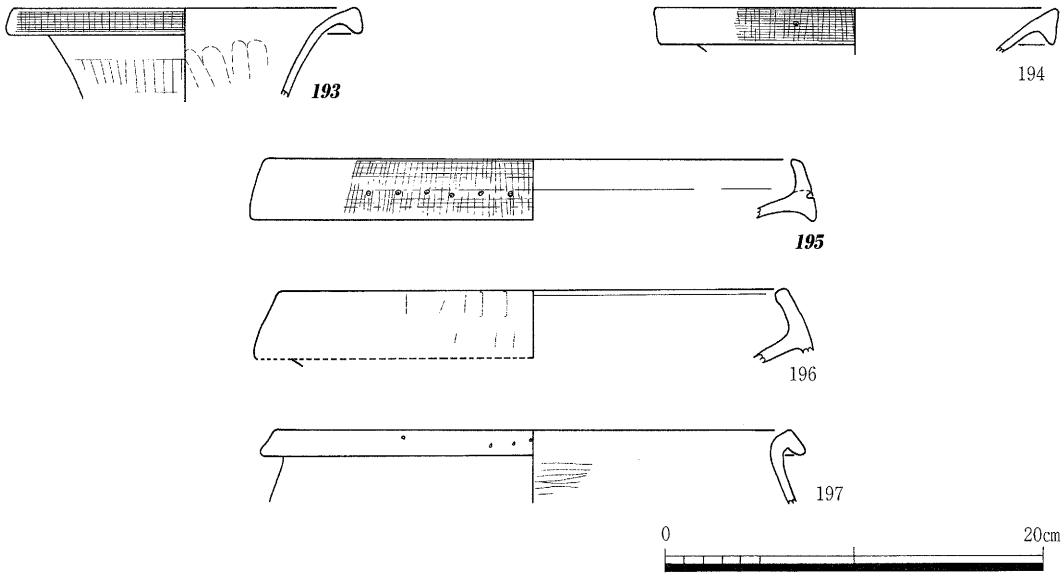


第61図　ＳＩ15平面図・土層断面図（1/60）

〔ＳＩ15〕

１．遺構（第61図、図版12）

Ｈ－ｆ６区を中心に位置する、竪穴住居である。周囲には北方向１ｍにＳＩ16が、さらに北方向10ｍにＳＩ17が位置している。南方向にはＮＲ１が位置している。周囲は近代の造成による削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存していなかった。周囲の遺構の残存状況をみると、南側は、遺構の遺存状況がよく、北側は悪い傾向がみられる。造成が平坦になされていることを勘案すると、当時は、南向きの緩やかな斜面地であったことが推定できる。当該竪穴住居の調査は、南半部が生活道路である里道にかかっており、



第62図　ＳＩ15出土土器

調査を行うことができなかった。

平面形は円形を呈しており、掘形の直径は約７～８ｍ前後に復元できる。検出面から、床面までの深さは0.15ｍであった。掘形底面には、置土が敷かれていた。掘形法面は、約75度の勾配をもっている。掘形は、10ＹＲ8/4浅黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出された。住居の覆土は、10ＹＲ3/2黒褐色粗砂まじり微砂～シルトであったので極めて明瞭に検出することができた。

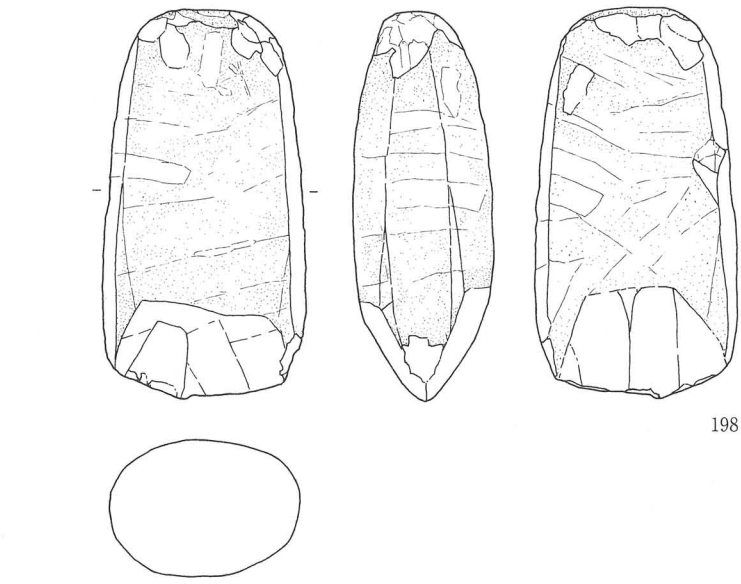
床面の直径は、６ｍ程であると想定でき、壁溝、ピット、柱穴が検出されている。

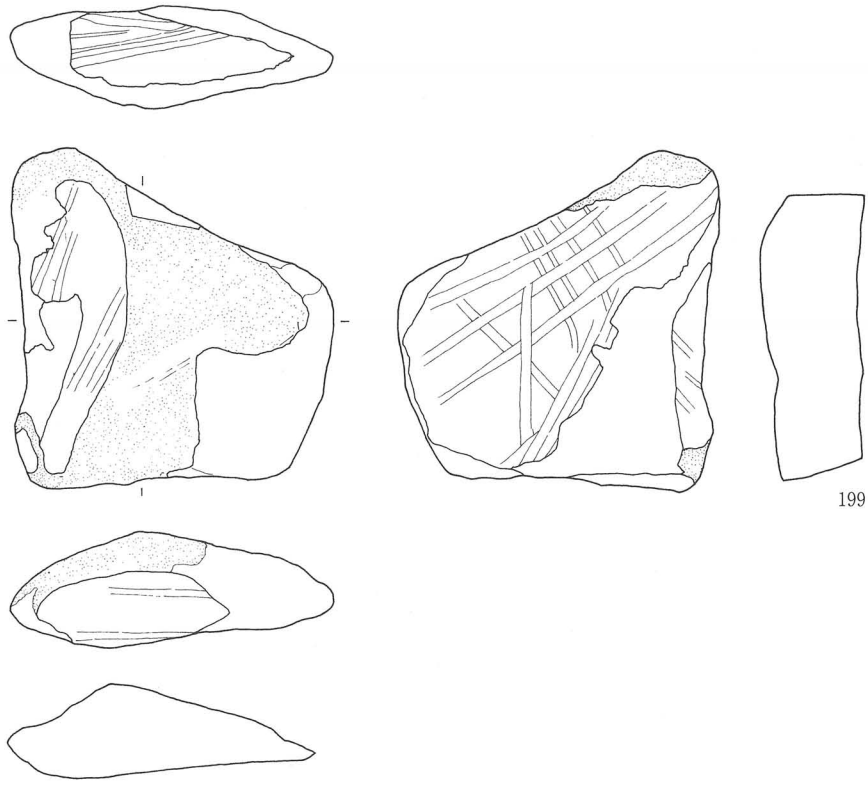
壁溝は、住居の壁に沿って、幅0.2ｍ、深さ0.15ｍで巡っていた。壁溝は完周していなかった。

ピットは、調査を行えた範囲で３箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１は、その規模から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径0.50ｍ、床面からの深さは0.4ｍであった。柱痕跡が遺存しており、その直径は0.1ｍであった。調査を行えた範囲が狭かったことから、主柱穴の配列を復元するには至らなかった。

２．遺物（第62・63図、図版54・103）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。193～195・197～199は、住居廃絶後に竪穴内に流れ込んだ堆積土中に包含されていたものである。193、194は広口壺Ａである。ともに口縁端部を下方向に拡張しており、比較的間隔の長い簾状文を施すが、194はこれに加えて、刺突文を施文している。195は広口壺Ｂ１の口縁部である。195の外面には間隔が短く、幅の広い簾状文・刺突文を施文している。197は甕Ｃである。口縁端部は下方向に拡張されており、外面には、刺突文を施文している。199は凝灰岩製の砥石である。198は砂岩製の太型蛤刃石斧である。





第63図　ＳＩ15出土石器

196は、壁溝から出土した。ＳＤ12から出土したものと接合することができた。広口壺Ｂ１の口縁部である。口縁端部は上下方向に拡張している。196は、摩滅が著しいが、簾状文を施文した痕跡が観察できる。

３．まとめ

当該竪穴住居は、出土遺物が少なく、多くが覆土から出土した資料であるため、時期を確定することが難しいが、Ⅳ様式を中心に存続していたと考えられる。広口壺Ａの口縁端部断面形態からはⅣ様式でもⅣ－３～４様式を中心に存続していたと考えられる。周囲には、ＳＩ16が近接している。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることから、ＳＩ16は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複すると想定できる。したがって、ＳＩ16とは、同時には存在していなかったと想定できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は約７～８ｍ前後と推定できる。床面からは壁溝、柱穴、ピットが検出できた。主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔ＳＩ16〕

１．遺構（第64図、図版13）

Ｈ－ｅ６・Ｈ－ｆ６区にまたがって位置する竪穴住居である。周囲には北方向１ｍにＳＩ17が位置している。南方向１ｍにはＳＩ15が位置している。周囲は後世の造成による削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山層もかなりの削平を受けているとみられる。

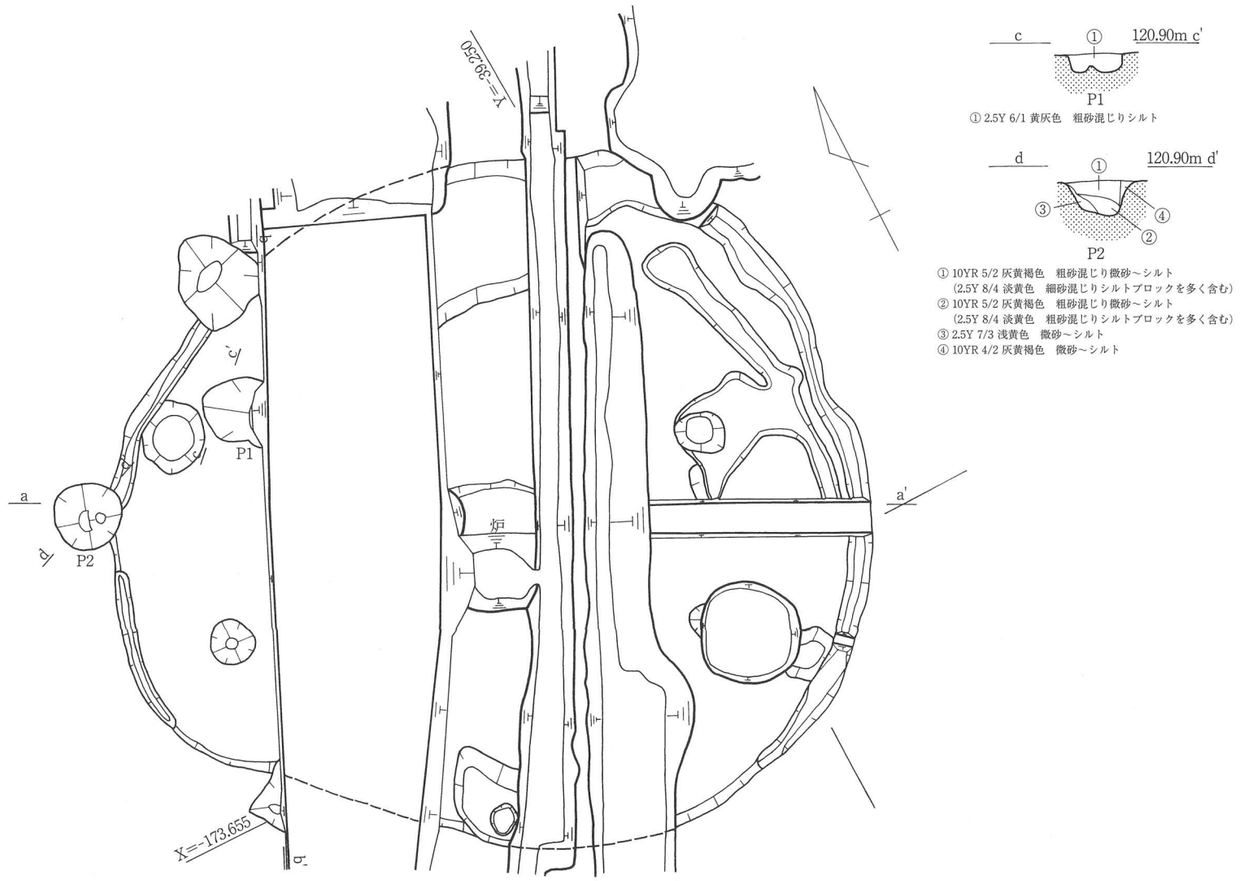
平面形は円形を呈しており、掘形の直径は7.38ｍであった。当該竪穴住居の調査は、東半部と西半部の２回に分けて行われた。削平は、床面まで及んでいた。検出面の標高は東側で120.95ｍであり、西側で120.76ｍであった。当該調査では、ほぼ全体を調査したが、地上構造物の一部を残して調査を行うことがもとめられたため、一部が調査できなかった。

掘形は、10ＹＲ8/4浅黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出された。竪穴住居の覆土は、部分的にしか残っておらず、壁溝や柱穴の検出によってかろうじて竪穴住居の範囲が確認できた。

床面の直径は、6.8ｍであり、壁溝、ピット、柱穴、炉が検出されている。

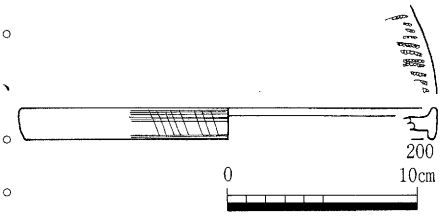
壁溝（ＳＩ17－ＳＤ２）は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.15～0.2ｍ、深さ0.1ｍで巡っていた。壁溝は完周せず、部分的に２重に巡っていた。

炉は、床面のほぼ中央で検出された。攪乱によって、大部分が破壊されているが、直径1.2ｍ程度の不正円形を呈すると思われる。２段に掘削されており、底部には、地山に起因するブロックを含んだ層が堆積し、この上層に炭化物層が堆積していた。炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。



第64図　ＳＩ16平面図・土層断面図（1/60）

ピットは、調査を行えた範囲で８箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１は、その規模から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径0.5m、床面からの深さは0.2mであった。Ｐ２は、直径0.65m、床面からの深さは0.35mであった。床面の攪乱が著しく、調査を行えた範囲から主柱穴の配列を復元するには至らなかった。



第65図　ＳＩ16出土土器

２．遺物（第65図、図版54）

当該竪穴住居の覆土からは、広口壺Ｅの口縁端部（200）が出土した。口縁端部を上下方向に拡張して、内面に列点文、外面には簾状文を施文している。ＳＩ16の炉からは、土器の細片が出土しているが、図化できなかった。

Ⅳ様式に位置づけられる。

３．まとめ

当該竪穴住居の周囲には、竪穴住居が密集している。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることから、ＳＩ15及びＳＩ17は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複すると想定できる。したがって、これら２棟とは、同時には存在していなかったと想定できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は7.38mであった。床面からは、炉、壁溝、柱穴、ピットが検出できた。調査を行えた面積が限られていたことから、主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔ＳＩ17〕

１．遺構（第66～68図、図版13・14）

Ｈ－ｅ５・Ｈ－ｆ５区を中心に位置する、竪穴住居である。周囲には、南方向１mにＳＩ16が位置しており、北東方向15mにＳＩ18が位置している。周囲は、後世の造成に伴う削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山面もかなりの削平を受けているとみられる。このような事から地面から遺構面までは浅くなっており、攪乱の影響を非常に受けやすかったようである。竪穴住居床面には中央で南北方向に近現代の地下埋設管の掘形が穿たれていることをはじめとして、規模の大きな攪乱坑が多く認められた。

当該竪穴住居は、若干位置を移動させながら、３箇所の掘形が重複しており少なくとも２回の建替えが行われていた。新しいものから順にＳＩ17―１、ＳＩ17―２、ＳＩ17―３と呼称する。各住居の床面は、ＳＩ17―１がもっとも深く、ＳＩ17―２、ＳＩ17―３がやや浅くなっている。したがって、新しいものが深く掘られているといえる。検出面の標高は129.95mであった。古い時代の竪穴住居床面は大部分が新しく作られた竪穴住居の掘形

によって破壊されていた。

当該竪穴住居の調査は、東部と西部の２回に分けて行った。

ＳＩ17―１

ＳＩ17―１は、平面形が円形を呈しており、掘形の直径は9.2m、床面から、検出面までの高さは0.1～0.2mであった。当該調査では、ほぼ全体を調査することができた。

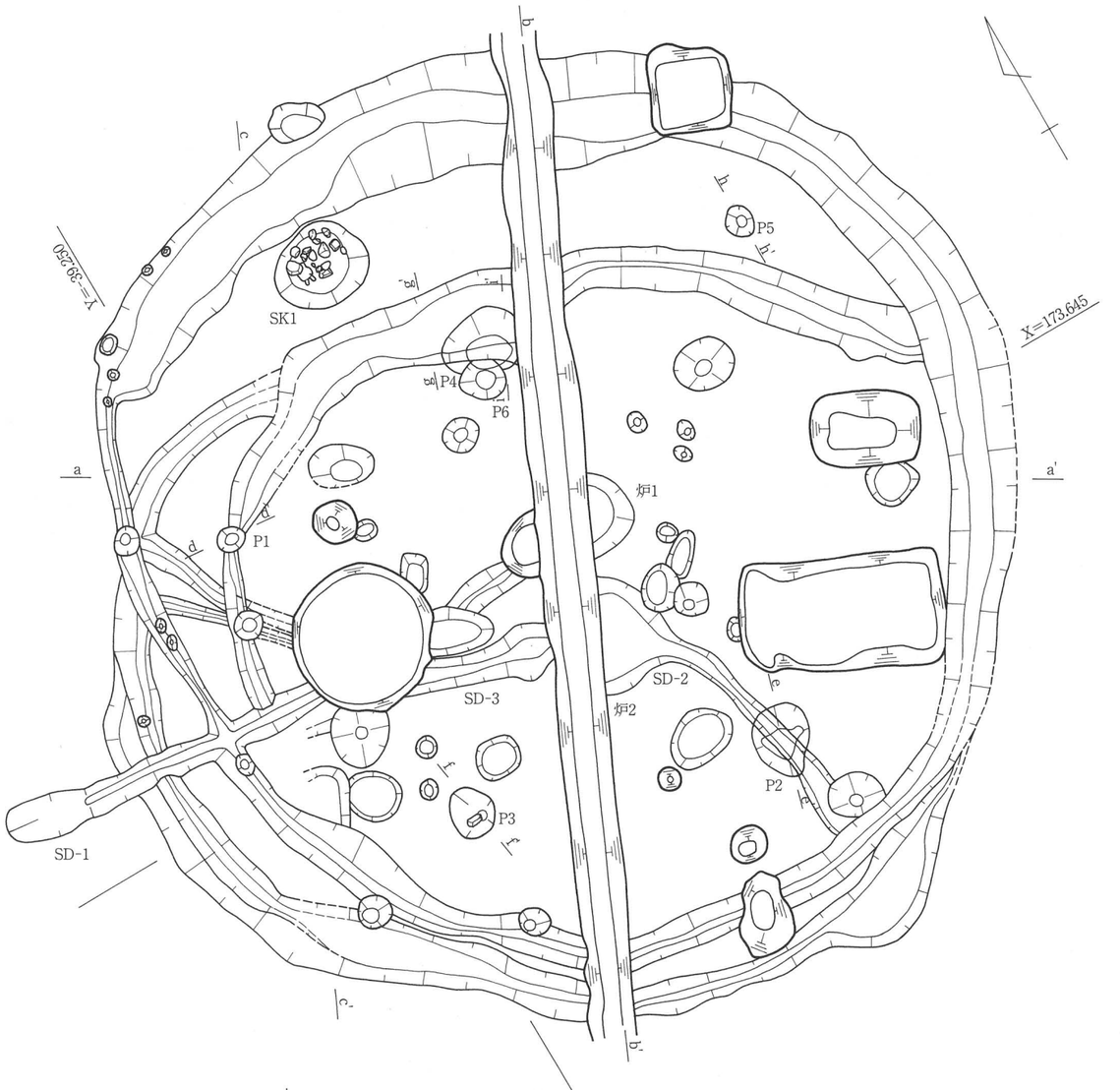
掘形は、10ＹＲ8/6黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出された。竪穴住居の覆土が褐灰色系のシルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、60～70度の勾配を持っている。床面は、地山上面ではなく、地山上面に堆積した㊶層上面で検出された。ただし㊶層は、ＳＩ17―２に伴うと考えられる炉２によって切り込まれていることから、ＳＩ17―１の構築に伴い敷かれた置土ではなく、より古い時代の竪穴住居構築の際に敷かれたものであると考えられる。床面の直径は、8.1mであり、壁溝、ピット、柱穴、炉、排水溝、土坑が検出されている。

壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.1～1.2m、深さ0.1～0.2mで巡っていた。北側は、幅が広くなっており1.2mの幅があった。

炉１は、床面のほぼ中央で検出された。しかし大部分が近現代の撹乱による破壊を受けていた。検出された位置からＳＩ17―１に伴うものとみられる。平面形態は不明であるが、おそらくは、直径１m前後の不正円形を呈していたことが想定できる。底には直径0.5m程の平坦面があったと思われる。炉内は、黒褐色系の炭化物層と地山層に起因する黄褐色シルト～微砂のブロックを含んだ層が交互に繰り返し堆積していた。炉の掘形に被熱した痕跡は認められなかった。

排水溝（ＳＩ17－ＳＤ１）は、炉１に接続していると考えられ、西方向に６mにわたり竪穴住居外までのびており、ＳＤ12に接続していた。ＳＩ17―２、ＳＩ17―３の壁溝を切り込んでいることから、ＳＩ17―１に伴うものと判断できる。排水溝底面の標高は、炉に接続している地点で120.74m、壁溝と交わっているところで120.55m、先端部で120.51mであり、排水溝としての機能を想定した場合、使用に耐えうる構造となっている。

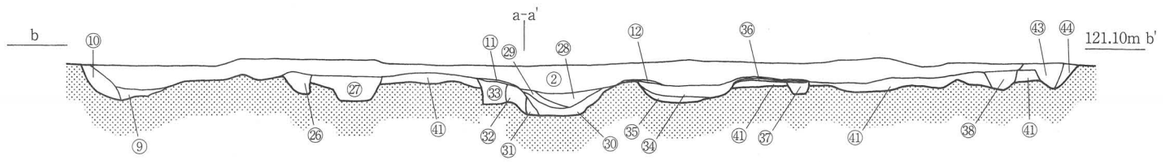
ピットは多数が検出された。これらのすべてがＳＩ17―１に伴う確証はなくＳＩ１７－２もしくはＳＩ１７－３に伴う可能性のあるものもあるがここで、一括して報告する。Ｐ１～６は、その規模配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径が0.25m、床面からの深さは0.4mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.15mであった。Ｐ２は、直径0.6m、床面からの深さは0.2mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.15mであった。Ｐ３は、直径0.5m、床面からの深さは0.25mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.15mであった。Ｐ４は、直径0.55m、床面からの深さは0.2mであった。Ｐ５は、直径0.3m、床面からの深さは0.2mであった。Ｐ６は、直径0.5m、床面からの深さは0.35mであった。これらすべてが、同じ建物を構成する確証はなく、また、撹乱によっ

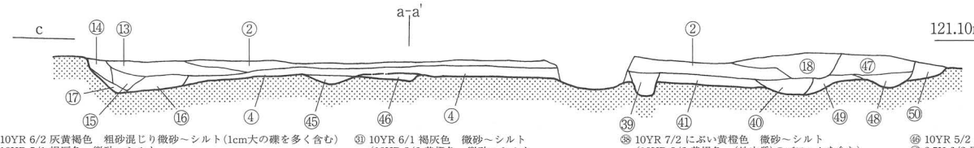


① 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト
　(10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト(地山質)のブロックを若干含む)
② 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
　(10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト(地山質)のブロックを多く含む)
③ 10YR 7/1 黒色　微砂～シルト
④ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂混じりシルト
⑤ 10YR 7/2 にぶい黄橙色　シルト
　(10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑥ 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
　(10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
⑦ 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
⑧ 10YR 7/2 にぶい黄橙色　シルト
　(10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
⑨ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
　(10YR8/6 黄褐色　(地山質)微砂～シルトのブロックを少量含む)
⑩ 10YR 7/2 にぶい黄橙色　微砂～シルト
　(10YR 8/6 黄褐色　(地山質)微砂～シルトのブロックを含む)
⑪ 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト(1cm大の礫を含む)
⑫ 10YR 6/2 灰黄褐色　微砂～シルト
　(10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト(地山質)のブロックを含む)
⑬ 2.5Y 6/1 黄灰色　細砂混じり微砂～シルト
　(2.5Y 7/6 明黄褐色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
⑭ 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト
　(2.5Y 7/6 明黄褐色　細砂混じり微砂～シルトのブロックを含む)
⑮ 10YR 5/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
　(2.5Y 7/6 明黄褐色　微砂～シルトのブロックを若干含む)
⑯ 10YR 5/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
　(2.5Y 7/6 明黄褐色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
⑰ 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト
　(2.5Y 7/6 明黄褐色　細砂混じり微砂～シルトブロックを多く含む)
⑱ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂混じり微砂～シルト
⑲ 10YR 5/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
　(2.5Y 7/6 明黄褐色　微砂～シルトのブロックを若干含む)
⑳ 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
　(10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト(地山質)のブロックを多く含む)

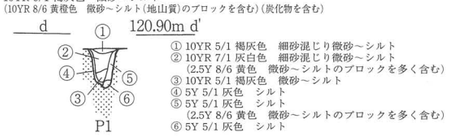
0　3m

第66図　ＳＩ17平面図・土層断面図（1/60）



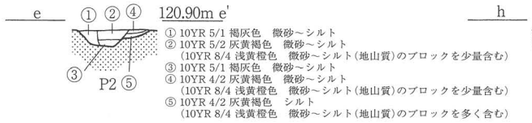


㉑ 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト（1cm大の礫を多く含む）
㉒ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを多く含む）
㉓ 10YR 5/2 灰黄褐色　微砂～シルト
㉔ 10YR 5/2 灰黄褐色　微砂～シルト
（10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを若干含む）
㉕ 10YR 5/2 灰黄褐色　シルト
㉖ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを含む）
㉗ 10YR 5/2 灰黄褐色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを含む）
㉘ 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じり微砂～シルト
㉙ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
㉚ 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを含む）（炭化物を含む）
㉛ 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを多く含む）
㉜ 10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト
㉝ 10YR 7/3 にぶい黄橙色　微砂～シルト
㉞ 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを多く含む）（炭化物を含む）
㉟ 10YR 6/1 褐灰色　シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを多く含む）（炭化物を含む）
㊱ 10YR 2/1 黒色　微砂～シルト（炭化物を含む）
㊲ 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト
（2.5Y 7/4 浅黄色　微砂～シルトを含む）
㊳ 10YR 7/2 にぶい黄橙色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄褐色　（地山質）のブロックを含む）
㊴ 2.5Y 6/1 黄灰色　細砂混じり微砂～シルト
（2.5Y 7/6 明黄褐色　微砂～シルトのブロックを含む）
㊵ 10YR 3/2 黒褐色　粗砂混じり微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む）
㊶ 10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト
（2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルトのブロックを若干含む）
㊷ 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
㊸ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄褐色　（地山質）のブロックを少量含む）
㊹ 10YR 5/2 灰黄褐色　微砂～シルト
㊺ 10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルト
（2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルトのブロックを若干含む）
㊻ 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
㊼ 2.5Y 6/2 灰黄色　粗砂混じり微砂～シルト
（2.5Y 7/1 灰白色　微砂～シルトのブロックを含む）
㊽ 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
（10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む）
㊾ 2.5Y 7/3 浅黄色　粗砂混じり微砂～シルト
（2.5Y 7/1 灰白色　微砂～シルトのブロックを含む）
㊿ 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
（10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む）
(51) 10YR8/4 灰黄色　シルト～微砂
（2.5Y 5/1 シルト～微砂のブロックを若干含む）

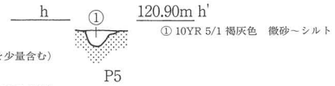


① 10YR 5/1 褐灰色　細砂混じり微砂～シルト
② 10YR 7/1 灰白色　細砂混じり微砂～シルト
（2.5Y 8/6 黄色　微砂～シルトのブロックを多く含む）
③ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
④ 5Y 5/1 灰色　シルト
⑤ 5Y 5/1 灰色　シルト
（2.5Y 8/6 黄色　微砂～シルトのブロックを多く含む）
⑥ 5Y 5/1 灰色　シルト

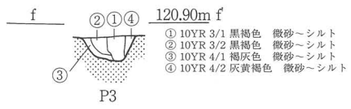
① 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/4 浅黄橙色　（地山質）のブロックを多く含む）
② 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/4 浅黄橙色　（地山質）のブロックを多く含む）



① 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
② 10YR 5/2 灰黄褐色　微砂～シルト
（10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを少量含む）
③ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
④ 10YR 4/2 灰黄褐色　微砂～シルト
（10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを少量含む）
⑤ 10YR 4/2 灰黄褐色　シルト
（10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを多く含む）

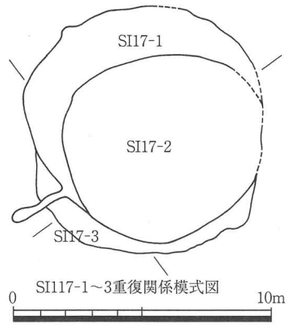


① 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト



① 10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルト
② 10YR 3/2 黒褐色　微砂～シルト
③ 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト
④ 10YR 4/2 灰黄褐色　微砂～シルト

① 10YR 5/1 褐灰色　粗砂混じりシルト
② 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルト（地山質）のブロックを含む）



第67図　ＳＩ17土層断面図（1/60）

て破壊された柱穴も多かったことが推定できる。このようなことから、主柱穴の配列を復元するのは困難である。当該竪穴住居は直径9.2mと大型であり、6本柱構造であった可能性が高い。

ＳＩ17―2

ＳＩ17―2は、平面形が円形を呈しており、掘形の直径は7.1m、床面から検出面までの高さは0.2mであった。当該調査では、ほぼすべてを調査することができた。しかし、床面は大部分がＳＩ17―1の構築に伴い破壊されていた。

掘形法面は、60～70度前後の勾配を持っている。床面は、掘形底部ではなく、掘形底部に㊶層を置土することでつくりだしていた。床面の直径は、6.5mであり、壁溝、ピット、炉、排水溝が検出されている。

壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.15～1.0m、深さ0.1～0.2mで巡っていた。北側は、幅が広くなっており1m程の幅があった。

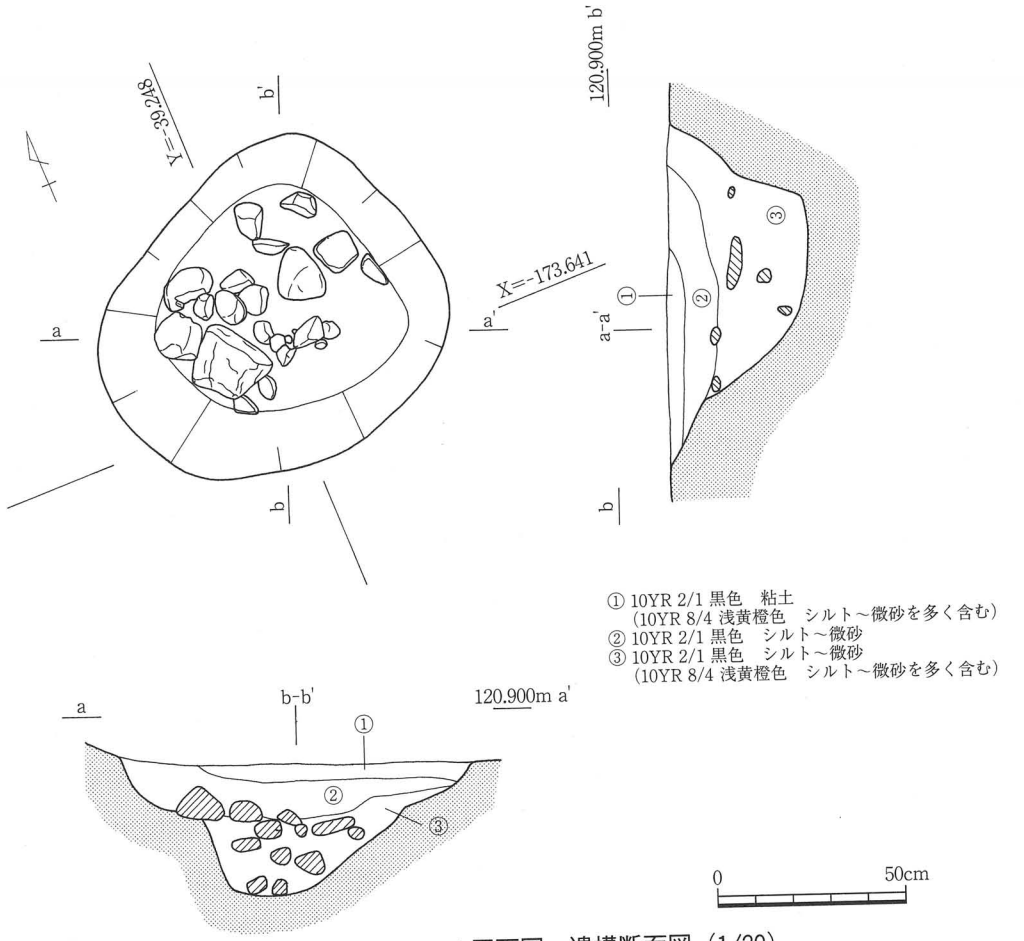
炉2は、床面のほぼ中央で検出された。しかし大部分が近現代の撹乱による破壊を受けていた。検出された位置からＳＩ17―2に伴うものとみられる。平面形態は不明であるが、おそらくは、1辺1m前後の方形を呈していたことが想定できる。底には直径0.5m程の平坦面があったと思われる。炉内は、黒褐色系の炭化物層と地山層に起因する黄褐色シルトのブロックを含んだ層が堆積していた。炉の掘形に被熱した痕跡は認められなかった。

排水溝（ＳＩ17－ＳＤ2）は、炉2に接続しており、2.5mにわたり南東方向にのびておりＰ2の下層で検出され、ＳＩ17－1の壁溝に破壊されていた。排水溝底面の標高は、炉に接続している地点で120.68m、壁溝と交わっているところで120.53mであり、排水溝としての機能を想定した場合、使用に耐えうる構造となっている。また、撹乱によって確認できていないものの、ＳＤ3もこの炉2に接続する可能性がある。ＳＤ3は、ＳＩ17―1の壁溝に切り込まれていると思われることから、ＳＩ17―2に伴う溝と考えられる。ＳＩ17―2の炉2には、西方向と東方向の2方向にのびる排水溝が接続していた可能性が指摘できる。

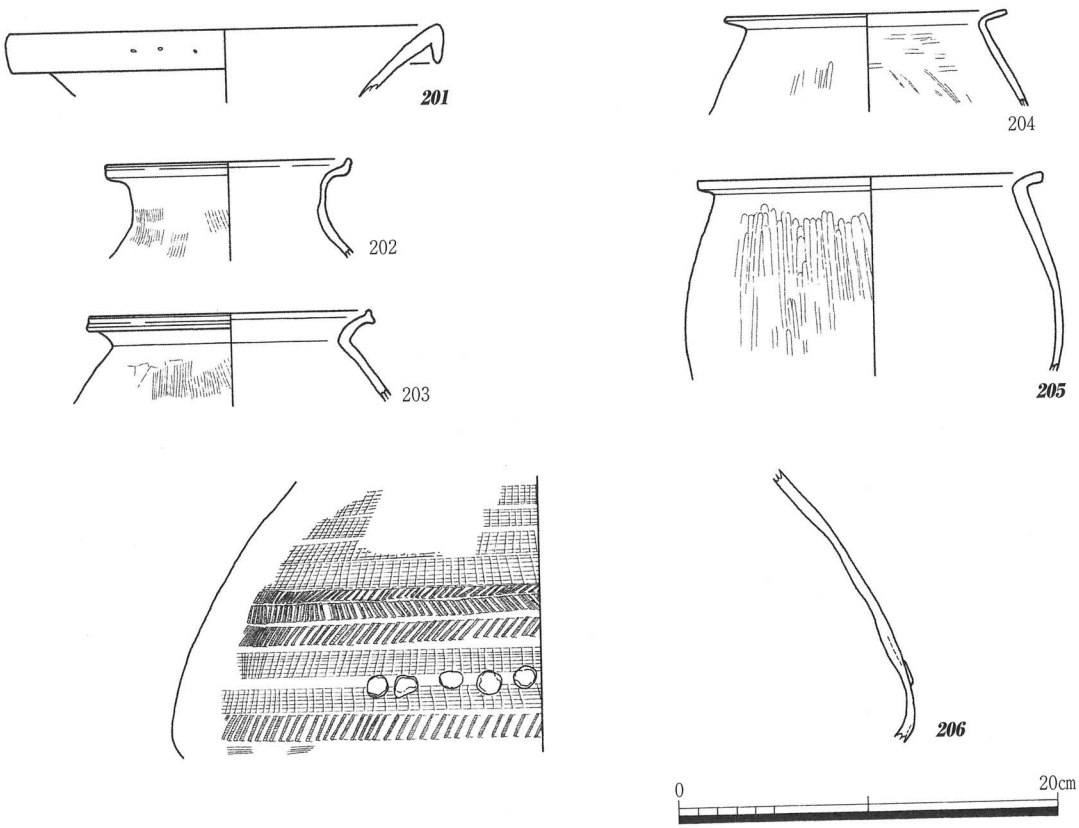
ＳＩ17―3

ＳＩ17―3は、平面形が円形を呈しており、直径は8.5mであった。ＳＩ17―3は、ＳＩ17―2、ＳＩ17―1によってほぼ全域が削平されていた。南北主軸に並行して設定した西側セクション（ｃ－ｃ'ライン）の観察により、わずかに床面が遺存していることが明らかとなっている。掘形法面は、約60～70度前後の勾配を持つものと思われる。床面は、掘形底部ではなく、掘形底部に㊾層を置土することで作りだしていた。床面からは壁溝が検出されている。柱穴、炉も本来的に穿たれていたと考えられるが、ＳＩ17―1、ＳＩ17―2のものと区別するのが困難であった。

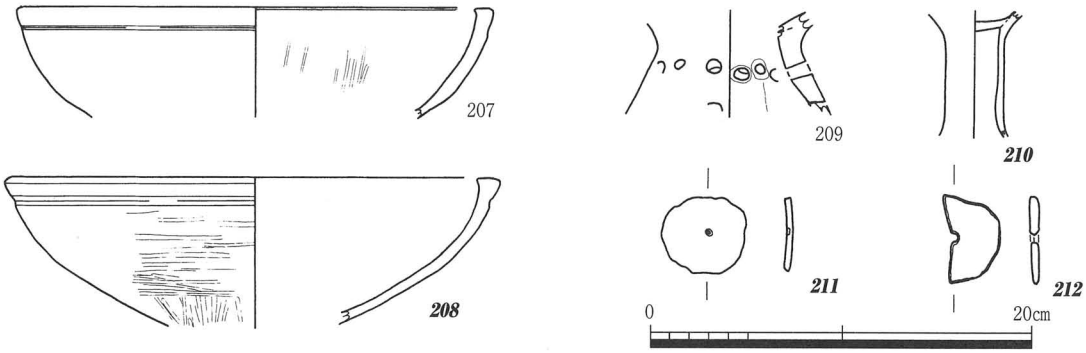
2．遺物（第69～71図、図版54・55・99・103）



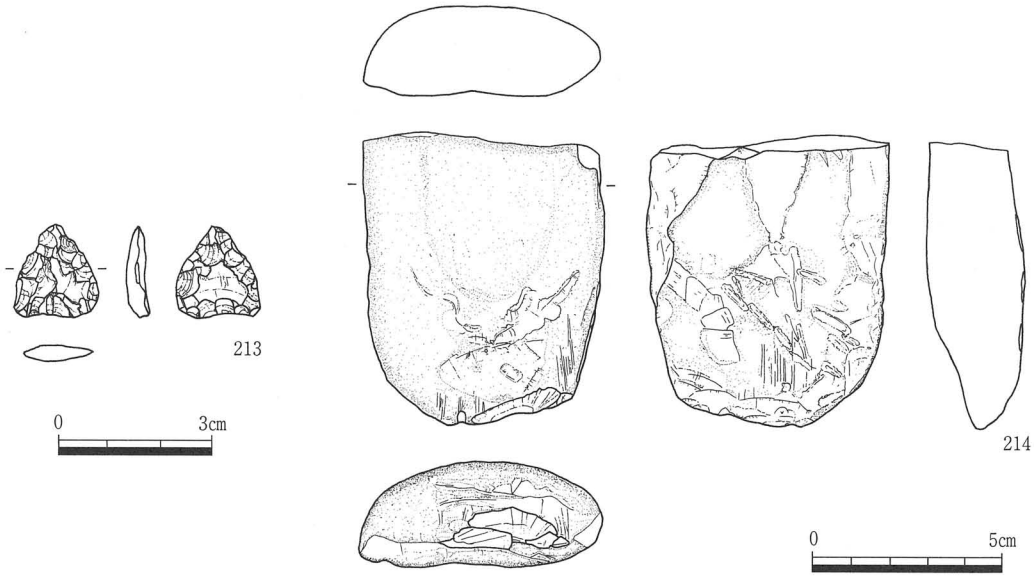
第68図　ＳＩ17－ＳＫ１平面図・遺構断面図（1/20）



第69図　ＳＩ17出土土器①



第70図　ＳＩ17出土土器②



第71図　ＳＩ17出土石器

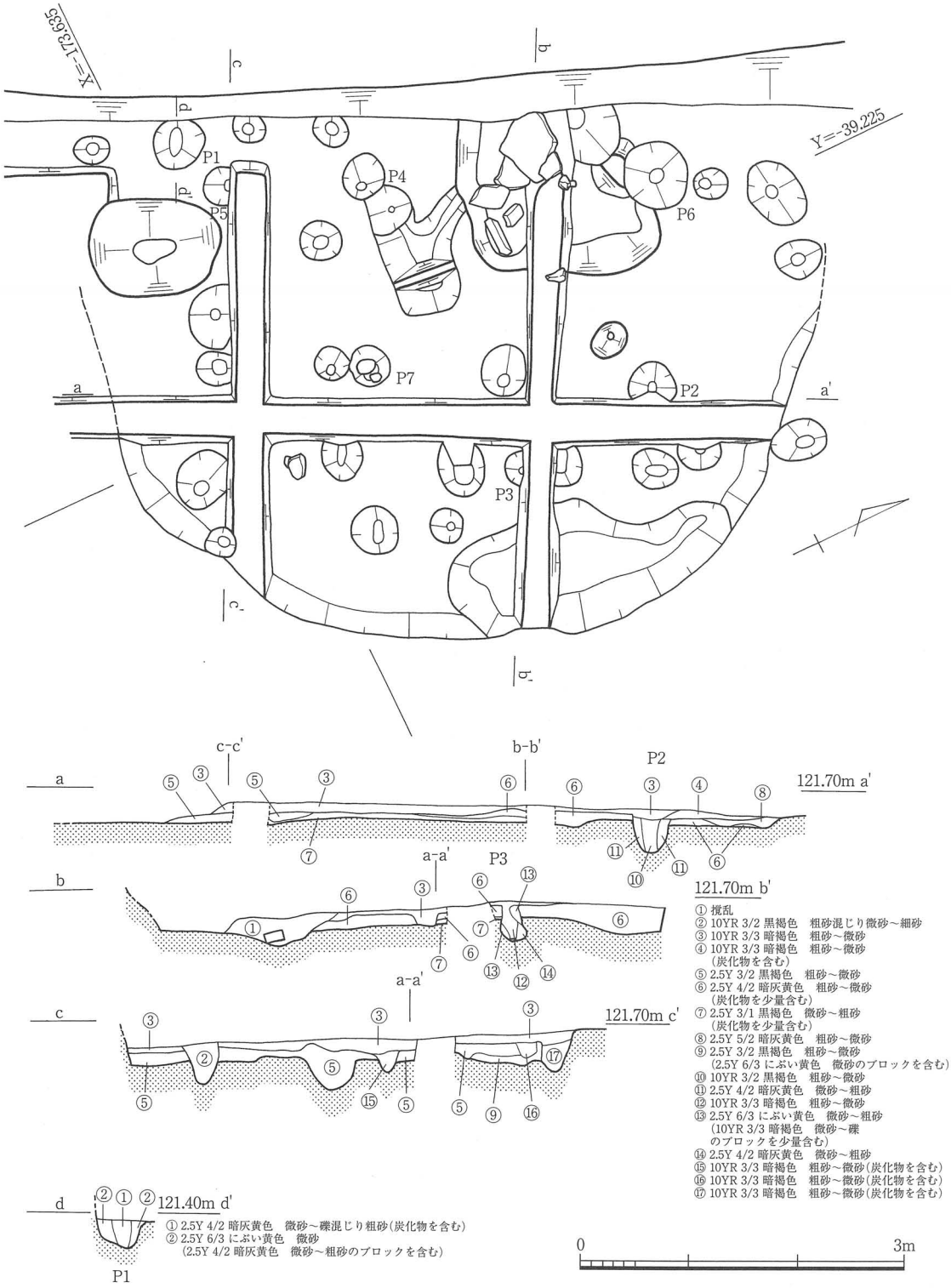
当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。201・209・210・211・212・213・214は、ＳＩ17の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ堆積土中に包含されていたものである。201は広口壺Ａの小片である。無文化が進んでいるが、刺突文を施文している。210は高坏の脚部である。209は鉢の脚部であり、円形の透が穿孔されている。211・212は紡錘車である。214は砂岩製の太型蛤刃石斧である。213はチャート製の凹基式石鏃である。

206は広口壺Ａもしくは細頸壺の体部と考えられる。外面には簾状文と円形浮文を施文している。排水溝（ＳＩ17－ＳＤ１）より出土している。205は甕Ａであり、Ｐ３から出土した。外面には縦方向のミガキを加えている。202は、広口壺Ｃである。これも飾飾性の乏しいもので、口縁端部に凹線を施し、外面を粗いハケで仕上げている。ＳＩ17－ＳＫ１より出土した。203は甕Ｂであり、外面をハケで仕上げている。204は甕Ａである。ともにＳＩ17－ＳＫ１より出土している。207・208は高坏Ａである。207はＳＩ17－ＳＫ１から、208はＰ３より出土している。

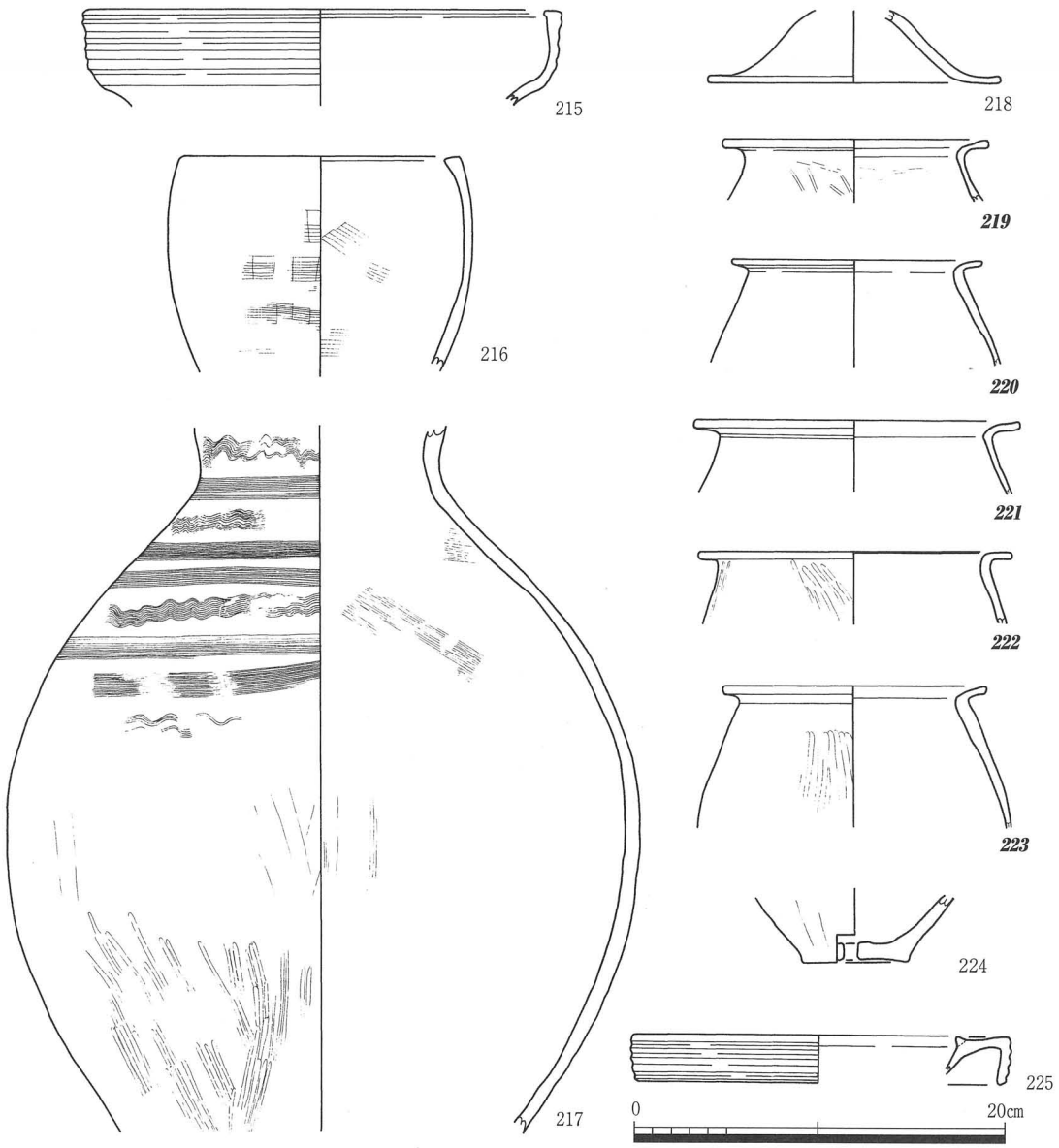
３．まとめ

当該竪穴住居は、覆土や床面上の遺構から出土した遺物が、いずれもⅣ－２～３様式の

様相を示すことから当該時期を中心に存続していたと考えられる。３棟の竪穴住居掘形が重複して検出されており、少なくとも２回の建替が行われていたことが明らかになった。規模は、最も古いものが8.5m、２回目に建てられたものが7.1m、３回目に建てられたものが9.2mであった。周囲には、竪穴住居が検出されていない場所が広がっているにも関わらず、この場所に固守している状況がみられる。



第72図　ＳＩ18平面図・土層断面図（1/60）



第73図　ＳＩ18出土土器

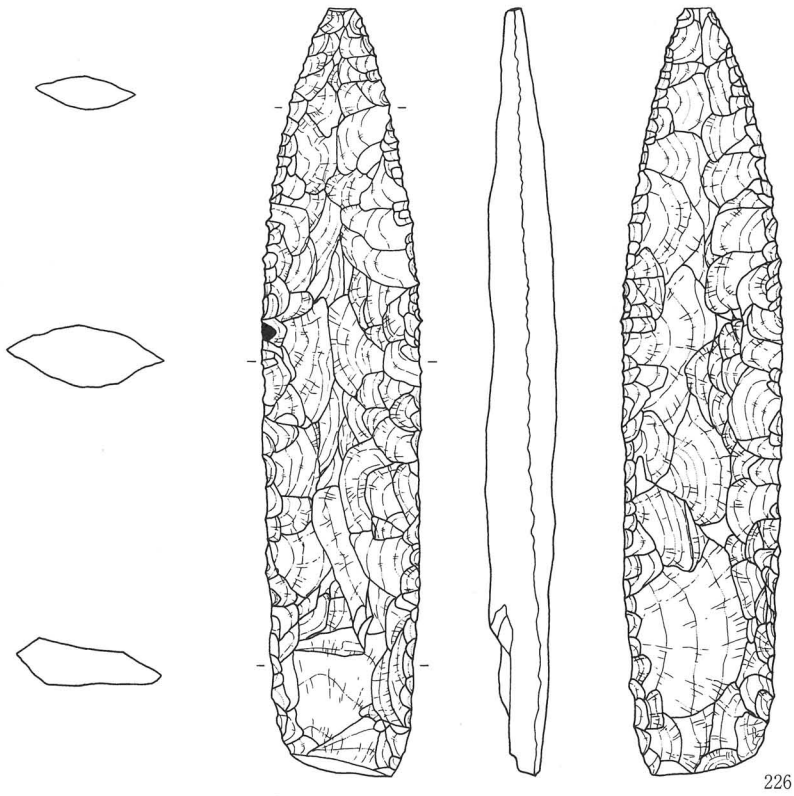
〔ＳＩ18〕

１．遺構（第72図、図版15）

Ｈ－ｃ３・Ｈ－ｃ４区にまたがって位置する、竪穴住居である。周囲には北方向５ｍに方形周溝墓群が位置する。弥生時代中期の竪穴住居としてはもっとも北に位置している。周囲は、後世の造成による削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山層もかなりの削平を受けているとみられる。

平面形は円形を呈しており、掘形の直径は6.2m、床面から、検出面までの高さは0.1mであった。検出面の標高は121.50mであった。当該調査では、竪穴住居の東部の７割程度を調査することができた。西側は、後世の造成のために完全に削平されている。

掘形は、2.5Ｙ6/3にぶい黄色微砂の地山面を基盤として検出された。竪穴住居の覆土が10ＹＲ3/3暗褐色粗砂～微砂であったため、極めて明瞭に検出することができた。床面は、



第74図　ＳＩ18出土石器

地山層を掘り込んだ後、置土することによって貼床が形成されている。床面の直径は、６ｍであり、ピット、柱穴、土坑が検出されている。壁溝は検出されなかった。床面には、２箇所の攪乱坑によって破壊されている箇所がある。

ピットは24箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１～３の３本は、その規模から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径0.4m、床面からの深さは0.25mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.2mであった。Ｐ２は、直径0.35m、床面からの深さは0.3mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.15mであった。Ｐ３は、直径0.15m、床面からの深さは0.3mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.1mであった。

２．遺物（第73・74図、図版55・99・101・102）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。215・219～222・225・227は、竪穴住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。215は広口壺Ｂ２である。口縁部外面には凹線文を施す。219・222は甕Ａである。くの字状に屈曲する頸部を持ち、端部は丸くおさめている。219は、小片であるが調整が観察でき、内外面ともにミガキで調整を行っていた。225は高坏Ｂであり、口縁端部は下方向に拡張し、凹線文を施文している。227はサヌカイト製の削器である。

218は甕の蓋と推定され、Ｐ１から出土した。223は甕Ａであり、Ｐ４より出土した。216・217は細頸壺であり、Ｐ４（216)、Ｐ５（217）より出土した。216は頸部に簾状文を、217は体部に直線文と波状文を施文している。224は甕の底部であり、Ｐ６から出土した。底部は穿孔されている。内面はナデ、外面はミガキによって仕上げている。226はサヌカイト製の石剣であり、厚みがある。228は緑泥片岩製の石庖丁であり、226・228は、ともにＰ７より出土した。

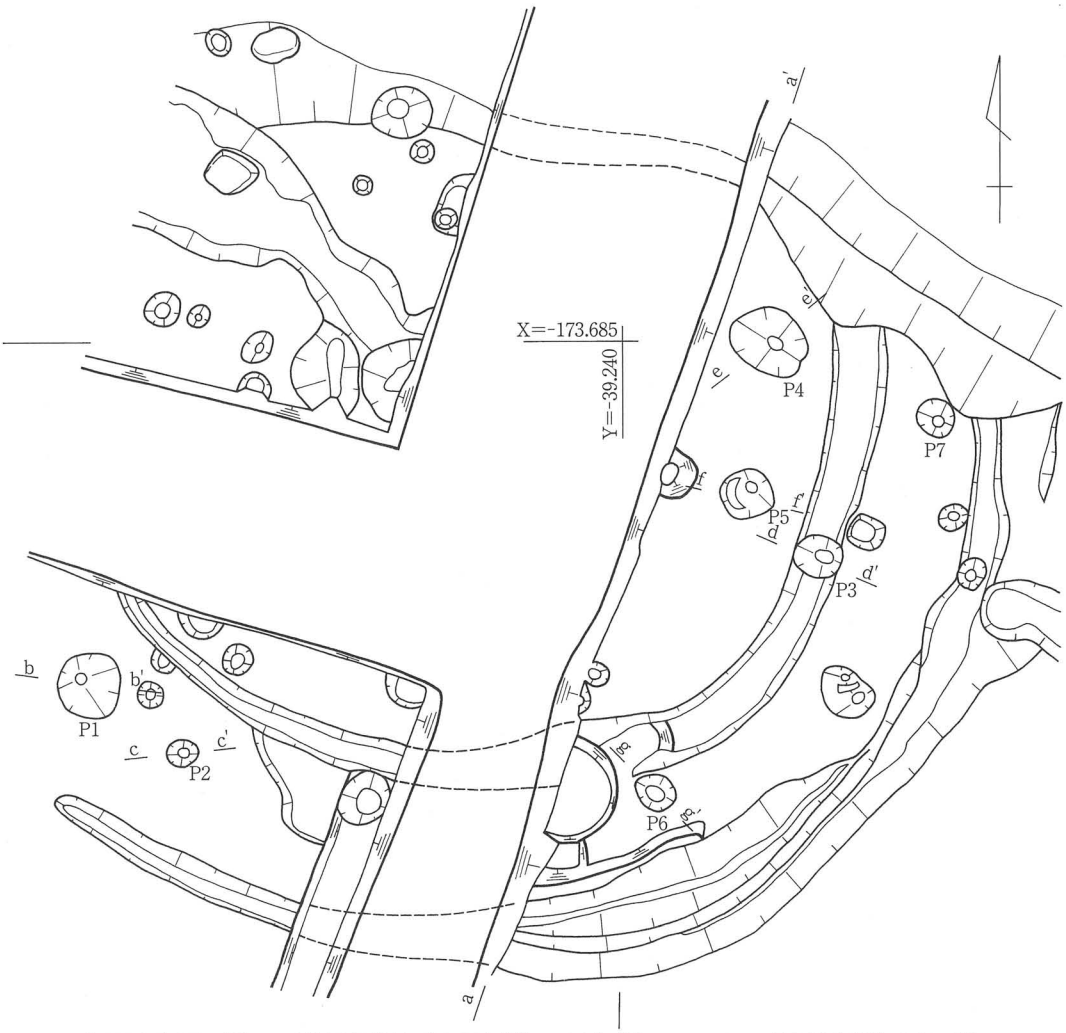
３．まとめ

当該竪穴住居は、築造時点もしくは機能時点を示す床面上の遺構から出土した遺物によって、Ⅳ様式を中心に存続していたと考えられる。規模は掘形の直径が6.2mであり、床面からは柱穴、ピット、土坑が検出できた。壁溝は検出されなかった。調査を行うことができた範囲は全体の７割であり、主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔ＳＩ19〕

１．遺構（第75図、図版15）

Ｈ－ｄ９・Ｈ－ｅ９区にまたがって位置する竪穴住居である。周囲には北側にＮＲ１が東西方向にながれており、当該竪穴住居の北半部はこの流路によって破壊されている。周



① 2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～シルト(粘土を若干含む)
② 2.5Y 4/2 暗灰黄色　シルト～微砂
(10YR 5/2 灰黄褐色　シルト～微砂を多く含む)
③ 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂
(5Y 5/1 灰色　シルト～微砂を含む)
④ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　シルト～細砂
(2.5Y 5/4 黄褐色　シルト～細砂の地山ブロックを含む)
(2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂を少量含む)
⑤ 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂
(2.5Y 6/6 明黄褐色　シルト～微砂の地山ブロックを少量含む)
⑥ 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂
(2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂を多く含む)
⑦ 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂
(2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂を含む)
⑧ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂
(2.5Y 7/2 灰黄色　シルト～微砂を少量含む)
⑨ 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂
(5Y 5/1 灰色　シルト～微砂を少量含む)
⑩ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　シルト～細砂
(2.5Y 5/4 黄褐色　シルト～細砂の
地山質のブロックを少量含む)
(2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂を少量含む)
⑪ 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト

a　122.20m a'

b　121.70m b'

① 10YR 5/2 灰黄褐色　シルト～微砂
② 10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂
(10YR 6/6 明黄褐色　シルト～微砂を含む)
③ 2.5Y 6/2 灰黄色　シルト～微砂
(10YR 6/6 明黄褐色　シルト～微砂を多く含

c　121.70m c'

① 10YR 5/2 灰黄褐色　シルト～微砂
② 10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂
(10YR 6/6 明黄褐色　シルト～微砂を含む)

d　121.70m d'

① 5Y 5/2 灰オリーブ色　シルト～微砂
② 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂
(2.5Y 6/6 明黄褐色　シルト～微砂を含む)

e　121.70m e'

① 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂

f　121.70m f'

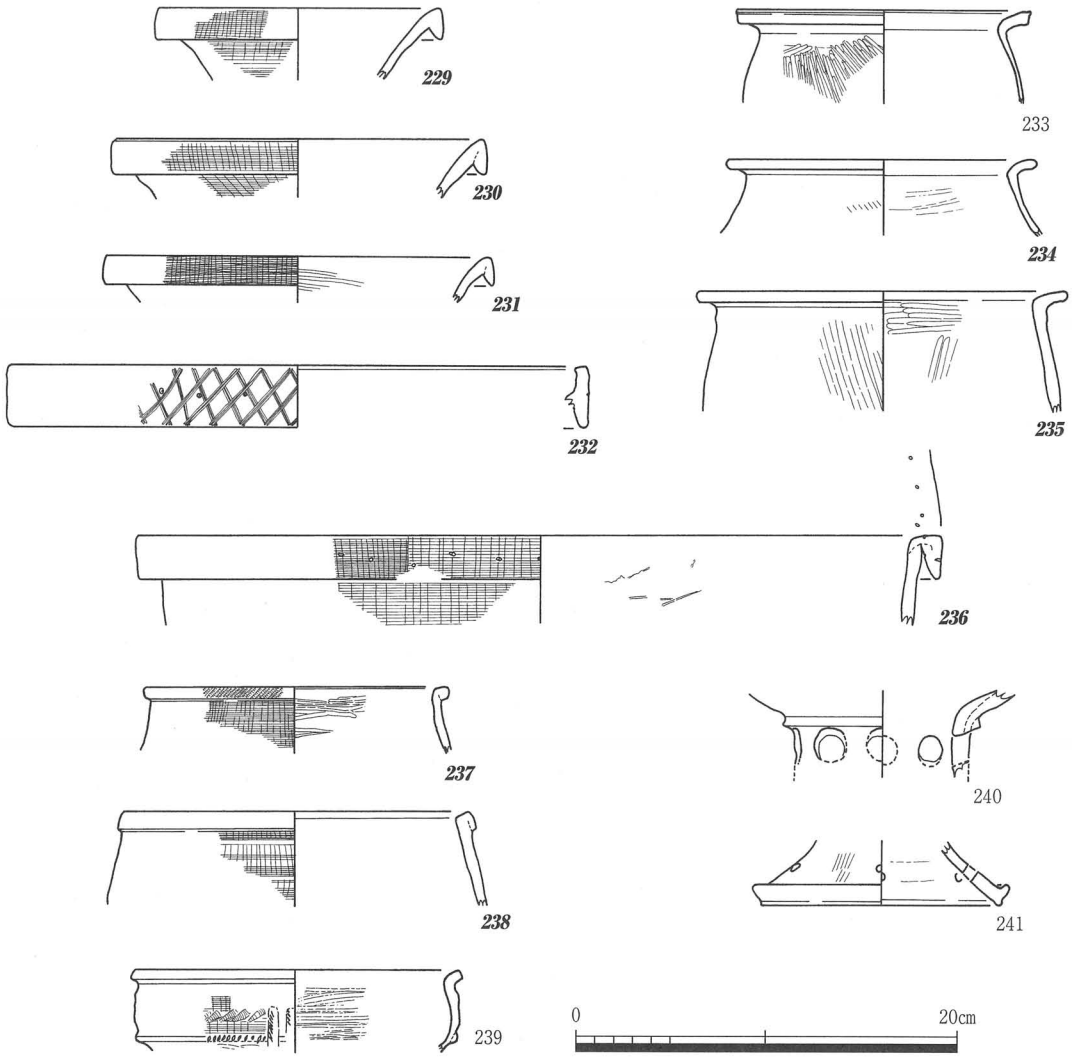
① 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂
(2.5Y 6/6 明黄褐色　シルト～微砂を少量含む)
② 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂
③ 2.5Y 3/2 黒褐色　微砂～シルト

g　121.70m g'

① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂
(2.5Y 6/6 明黄褐色　シルト～微砂を含む)
② 2.5Y 3/2 黒褐色　微砂～シルト
(2.5Y 6/6 明黄褐色　微砂～シルトを含む)

0　3m

第75図　ＳＩ19平面図・土層断面図（1/60）



第76図　ＳＩ19出土土器

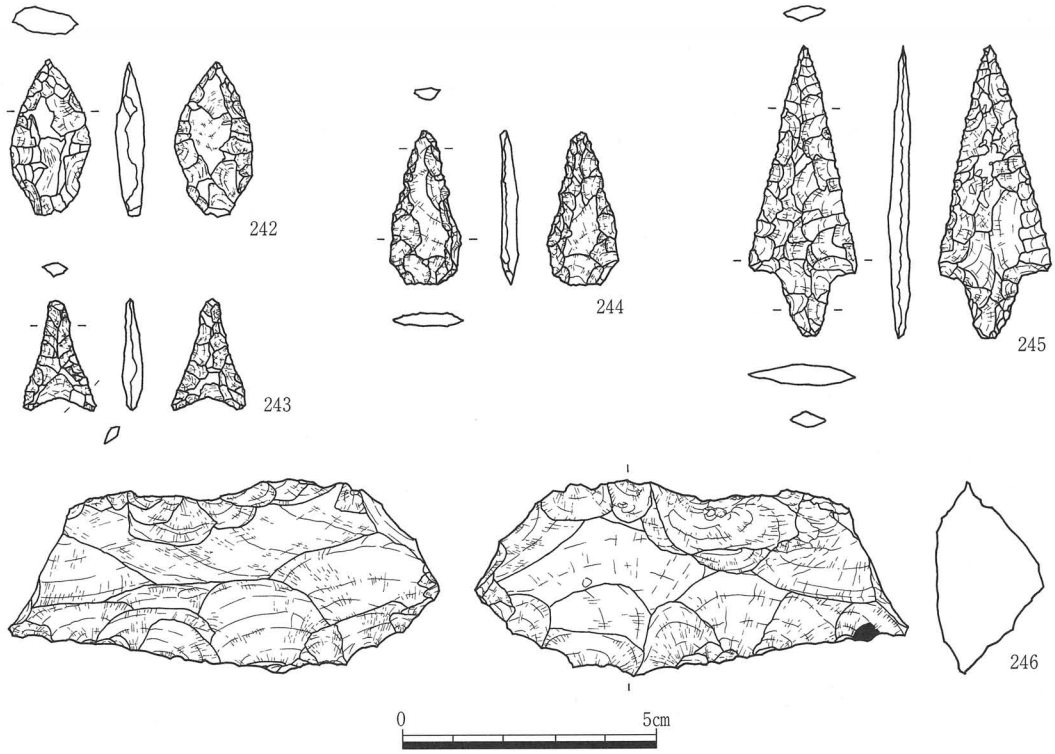
囲は、後世の削平によって、弥生時代の遺物包含層が遺存しておらず、地山にまで削平が及んでいる。調査は、３回に分けて行った。歩道を残して調査を行うことが求められたため、全体を調査することができなかった。

平面形は円形を呈しており、掘形の直径は９ｍ程度に復元できる。床面から検出面までの高さは0.25～0.3ｍであった。検出面の標高は121.50～121.90ｍであった。当該竪穴住居は、古代の流路によって北半分が破壊され、約６割程度を調査できたにとどまった。

掘形は、2.5Y6/6明黄褐色微砂まじりシルトの地山面を基盤として検出された。竪穴住居の覆土が黒褐色系のシルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。床面には、基盤層を掘り込んだ後、⑩層を置土することによって貼床が形成されている。床面の直径は、7.5～8.5ｍ前後と想定でき、壁溝、ピット、柱穴が検出されている。

壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.15～0.5ｍ、深さ0.07ｍで巡り、その内側１ｍでも、壁溝と考えられる円形の溝を検出している。

ピットは31箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１～６は、その規模配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は直径が0.45ｍ、床面か



第77図　ＳＩ19出土石器

らの深さは0.28ｍであった。Ｐ２は直径が0.25ｍ、床面からの深さは0.4ｍであった。Ｐ３は直径が0.35ｍ、床面からの深さは0.61ｍであった。Ｐ４は直径が0.46ｍ、床面からの深さは0.3ｍであった。Ｐ５は、直径が0.46ｍ、床面からの深さは0.32ｍであった。Ｐ６は、直径が0.24ｍ、床面からの深さは0.3ｍであった。

残存していた床面の面積が狭かったことから主柱穴の配列を復元するには至らなかった。

２．遺物（第76・77図、図版55・98・99）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。229～238、240～246は、竪穴住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。229～231は、広口壺Ａの口縁部である。外面には間隔が短く、幅の広い簾状文を施文している。232は、広口壺Ｂ１の小片である。口縁端部を上下方向に拡張している。口縁端部外面には斜格子文・刺突文を施文する。233は甕Ｂである。口縁端部に面取りを行い、体部外面はミガキによって仕上げている。234・235は、甕Ａである。口縁端部を丸くおさめており、外面はミガキによって仕上げている。241は高坏の脚部の小片である。236～238は鉢Ｂの口縁部である。236は、下方向に拡張した口縁端部を持ち、簾状文を施文した後、刺突文を施文する。237・238の口縁端部は肥厚しており、間隔が短く、幅の広い簾状文を施文している。242～245はサヌカイト製の石鏃であり凸基式（242）、凹基式（243）、平基式（244）、有茎式（245）、のものがある。246はサヌカイト製の削器である。

239は鉢Bであり、P7から出土した。口縁端部は外方向に屈曲し、体部外面には、間隔の長い簾状文と扇状文を施文し、刻目突帯を付加している。

3．まとめ

当該竪穴住居は、概ねⅣ様式の遺物で占められるが、239のようにⅢ様式まで遡るものもみられる。Ⅲ様式～Ⅳ様式にかけて存続していたと考えられる。当該竪穴住居は、流路によって北半分が破壊されていた。直径は8.5mと推定できる。床面からは、壁溝、柱穴、ピットが検出できた。調査を行うことができた範囲は全体の4割程度であり、主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔SI20〕

1．遺構（第78図、図版16）

M－e1区に位置する竪穴住居である。周囲には東方向5.0mにSI21が位置している。周囲は後世の造成による削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存していなかった。遺構の残存状況も非常に悪く、西半部は、造成によって完全に削平されていた。平面形は円形を呈しており、掘形の直径は5mである。検出面から、床面までの深さは0.05mであった。掘形底面には、置土が敷かれていた。掘形は、10YR8/6黄褐色シルト～微砂の地山面を基盤として検出され、検出段階で、置土の一部が露出した。覆土は、10YR3/1黒褐色シルト～微砂であったので極めて明瞭に検出することができた。床面の直径は、4.3m程であると想定でき、壁溝、ピット、柱穴が検出されている。

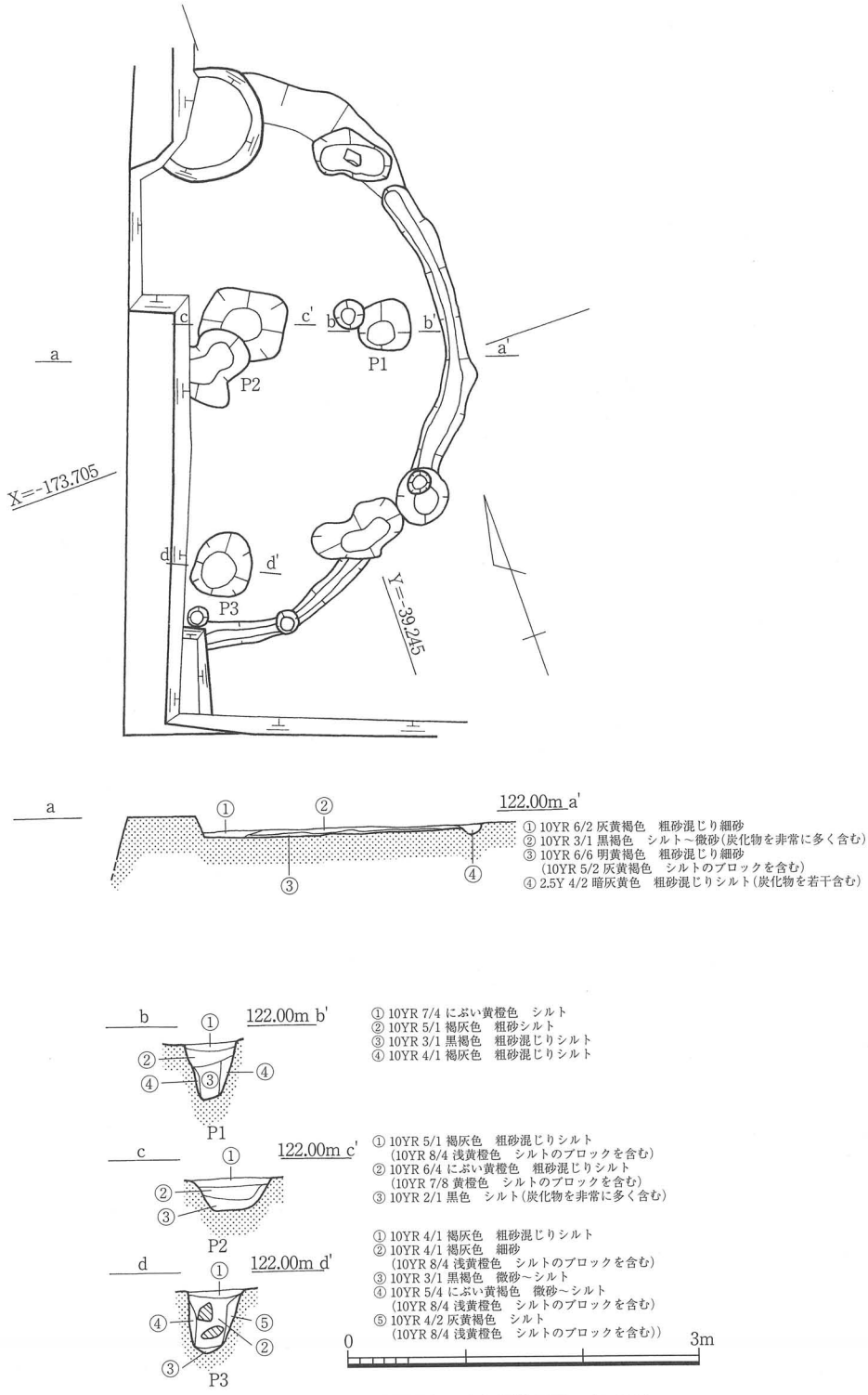
壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.2m、深さ0.1～0.15mで巡っていた。壁溝は完周していなかった。

ピットは、調査を行った範囲で10箇所が検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、P1、P3は、その規模から、主柱穴であると考えられる。P1は、直径0.45m、床面からの深さは0.5mであった。柱痕跡が遺存しており、その直径は0.2mであった。P3は、直径が0.45m、床面からの深さは0.5mであった。柱痕跡が遺存しており、その直径は0.25mであった。遺存していた範囲が狭かったことから、主柱穴の配列を復元するには至らなかった。

なお、P2は、炉と考えることもできるが、その位置が中心部から、ややそれることや、炭化物層が認められなかったこと等、通有の竪穴住居で検出されている炉とは様相が異なる。

2．遺物（第79・80図、図版56・98）

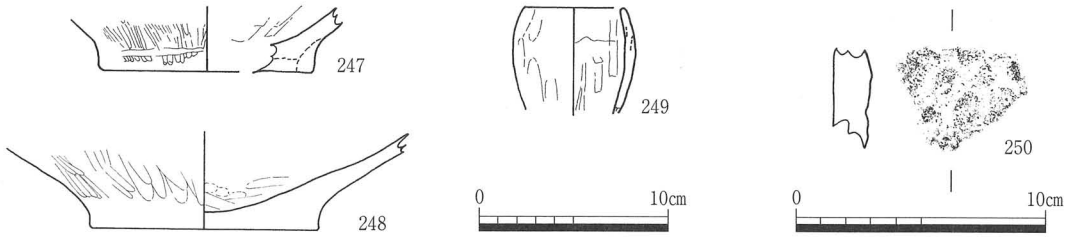
当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。250・251は、竪穴住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。250は縄文土器である。高山寺式



第78図　ＳＩ20平面図・土層断面図（1/60）

の押型文土器であり、縄文時代早期の所産である。251はサヌカイト製の凸基式石鏃である。

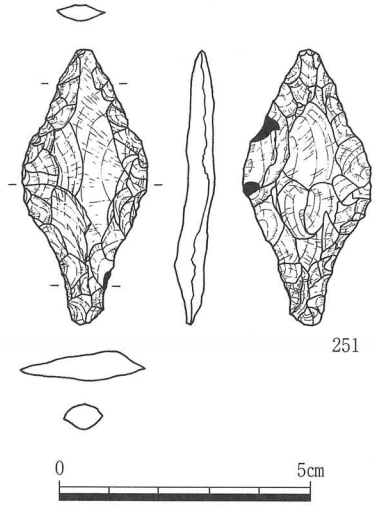
249は、蛸壺と思われ、Ｐ２から出土した。247、248は、弥生土器壺の底部であり、Ｐ３から出土した。



第79図　ＳＩ20出土土器

３．まとめ

当該竪穴住居からは、縄文土器等も出土しているものの、床面の遺構から出土した遺物は弥生時代のものであった。出土した遺構がいずれも時期を明確にし得ない部位の小片であったことから、時期については明らかにしえない。周囲には、ＳＩ21が近接している。検出できた竪穴住居掘形の直径は5.0ｍであり、他の竪穴住居と比較すると小規模な竪穴住居といえる。床面からは壁溝、柱穴、ピットが検出できた。主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。



第80図　ＳＩ20出土石器

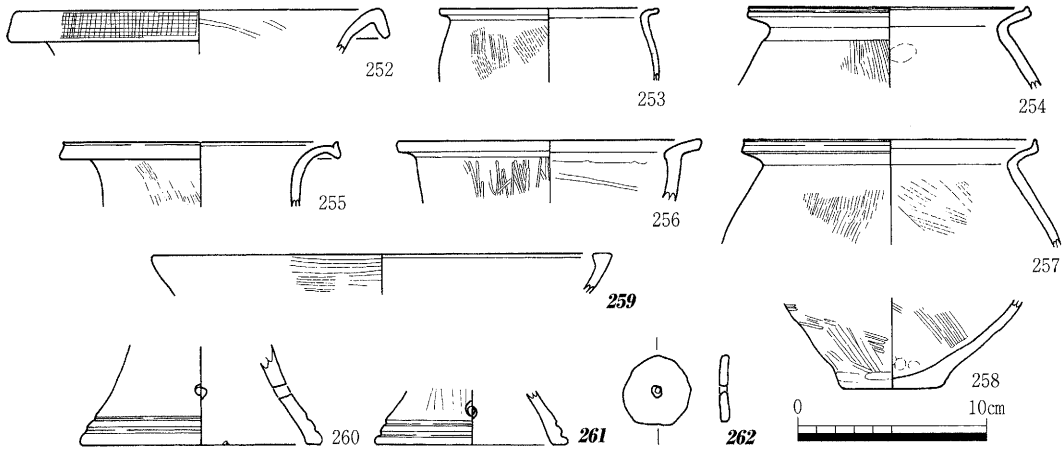
〔ＳＩ21〕

１．遺構（第82図、図版16・17）

Ｍ－ｄ１・Ｍ－ｅ１区にまたがって位置する竪穴住居である。周囲には北方向３ｍにＳＩ22が、西方向５ｍにＳＩ20が位置している。周囲は、後世の造成による削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山層も削平を受けているとみられる。周囲の遺構の残存状況をみると、北側に位置するものは、削平の影響を大きく受けており、南に位置しているものほど遺存状況が良好であるという傾向がみられる。現在は、ほぼ水平に造成されていることから、当時は、南向きの緩やかな斜面であったことが想定できる。当該竪穴住居は、２回にわたって調査を行った。この結果、２棟の竪穴住居掘形が重複していることが明らかとなった。

平面形は円形を呈しており、直径は8.5m、床面から検出面までの高さは最も遺存状況が良かった場所で、0.35mであった。検出面の標高は121.90～122.14mであった。竪穴住居は、さらに調査区外へと続いているものと判断され、今回の２次にわたる調査で、当該竪穴住居の約３～４割を調査することができた。

掘形は、10ＹＲ8/6黄橙色シルトの地山面を基盤として検出した。竪穴住居の覆土が褐灰色系のシルト～微砂であったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、60度～70度の勾配を持っている。土層からは覆土が周囲から流れ込んでいる状況を観察で



第81図　ＳＩ21出土土器

きた。床面については、掘形を掘削した後、10ＹＲ7/4にぶい黄橙色粗砂混じりシルト（⑯層）を置土し、水平な床面を造成している。床面の直径は、７ｍ前後になると考えられる。床面からは、壁溝、ピット、柱穴、炉が検出されている。また、床面上からは、炉を中心として薄い炭化物の層が検出された。

壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.3～0.8m、深さ0.05～0.1mで巡っていた。

炉は、床面のほぼ中央で検出された。不整円形の平面形態を呈しており、床面からの深さは0.1mであった。底部には直径0.5mほどの平坦面があり、擂鉢状を呈している。炉の堆積物については、炭化物を多く含む微砂～シルト層がみられた。炉の掘形は被熱していなかった。

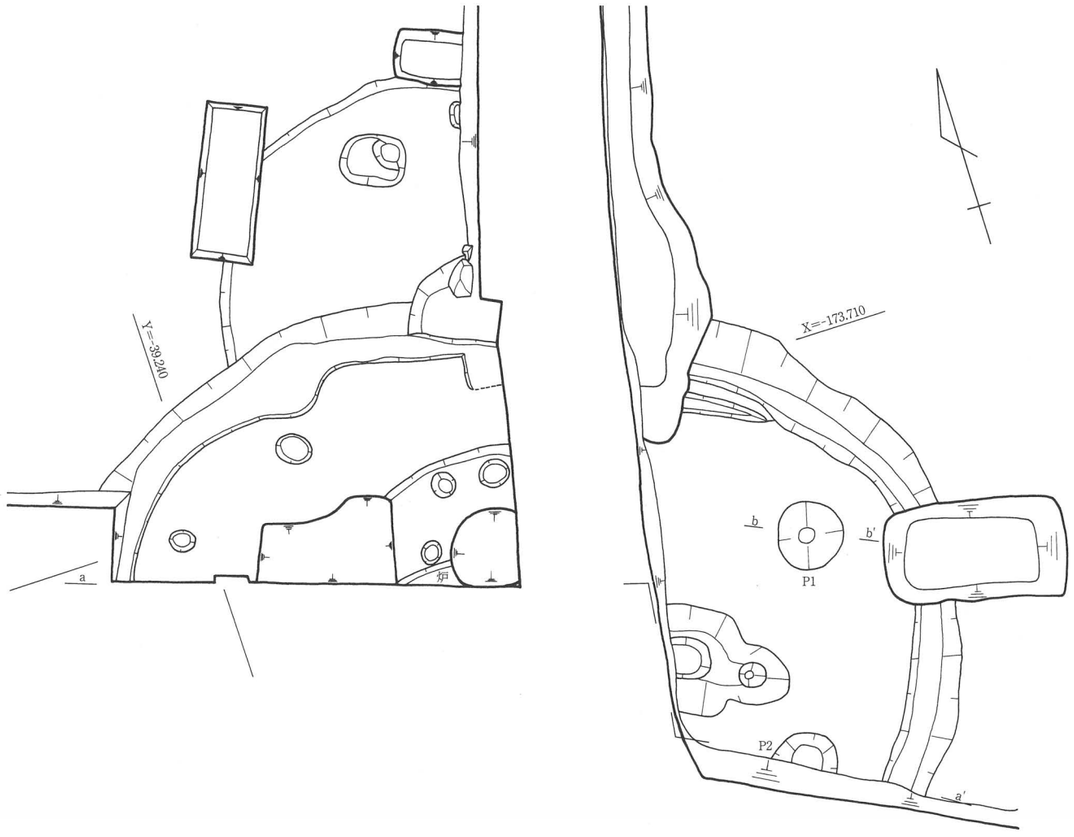
ピットは８箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１・Ｐ２の２箇所は、その規模配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径が0.65m、床面からの深さは0.4mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.2mであった。Ｐ２は、直径が0.6m、床面からの深さは0.2mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.15mであった。

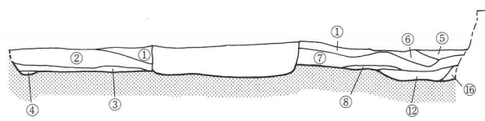
検出した柱穴から、主柱穴の配列を復元するには至らなかった。

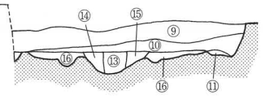
２．遺物（第81・83図、図版56・98・99）

当該竪穴住居からは、弥生土器が出土している。図化できたものは、竪穴住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ床面上の覆土中に包含されていたものである。

252は、広口壺Ａの小片である。口縁端部を下方向に拡張しており、間隔の短い簾状文を施文している。255は広口壺Ｃの小片である。無文で、口縁端部を上方向にやや拡張している。外面は粗いハケ調整で仕上げる。258は壺の底部である。253・254・257は甕Ｂである。すべて外面はハケ調整で仕上げており、口縁端部は拡張し、横ナデを加えている。256は鉢Ａの小片であり、口縁部を外方向に屈曲させている。260・261は脚部の小片であり、台付鉢のものと考えられる。いずれも凹線と円形の透を施している。259は高坏Ａの

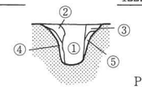






a　　123.00ma'

b　　122.00mb'



P1

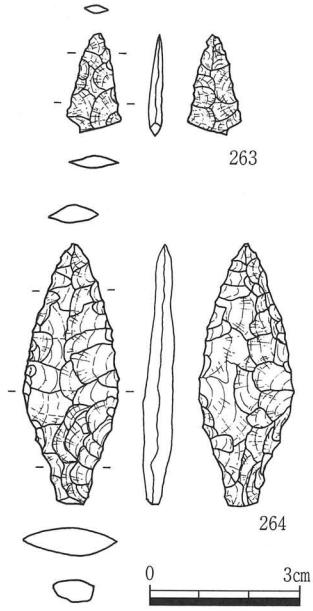
①10YR 4/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト(5cm 大の礫を若干含む)
②10YR 5/4 にぶい黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
(10YR 4/1 褐灰色　粗砂混じりシルトのブロックを含む)
③10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト
(10YR 8/3 浅黄橙色のブロックを含む)
④10YR 5/3 にぶい黄褐色　粗砂混じりシルト～微砂
(10YR 8/4 浅黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑤10YR 5/3 にぶい黄褐色　粗砂混じりシルト
(10YR 4/2 灰黄褐色　微砂～シルトのブロックを含む)

①10YR 7/5 灰黄褐色　粗砂混じりシルト
②10YR 5/1 褐灰色　粗砂混じりシルト
③10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を多く含む)
④10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を多く含む)
⑤10YR 3/1 黒褐色　細砂混じりシルト
⑥10YR 5/1 灰黄色　細砂混じりシルト
⑦10YR 5/2 灰黄褐色　シルト(炭化物を多く含む)
⑧10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を多く含む)
⑨7.5Y 4/2 灰オリーブ色　粗砂混じり微砂～シルト
⑩10YR 5/1 褐灰色　粗砂混じり微砂～シルト
⑪10YR 6/4 にぶい黄橙色　粗砂混じりシルト
(10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑫10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト(炭化物を多く含む)
⑬2.5YR 4/1 赤灰色　粗砂混じりシルト
⑭10YR 5/1 褐灰色　粗砂混じりシルト
⑮10YR 5/1 褐色　粗砂混じりシルト
⑯10YR 7/4 にぶい黄橙色　粗砂混じりシルト
(10YR 4/2 灰黄褐色　微砂～シルトのブロックを含む)

0　　3m

第82図　ＳＩ21平面図・土層断面図（1/60）

口縁部の細片である。262は紡錘車である。263・264はサヌカイト製の凸基式石鏃である。



第83図　ＳＩ21出土石器

３．まとめ

当該竪穴住居は、覆土から出土した遺物をみる限り、Ⅳ様式には、廃絶していた可能性が高い。周囲には、竪穴住居が密集している。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることから、ＳＩ22は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複すると想定できる。したがって、ＳＩ22とは、同時に存在していなかったことを想定できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は約8.5ｍであった。床面からは、炉、壁溝、柱穴、ピットが検出できた。調査を行うことができた範囲は全体の３～４割であり、主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔ＳＩ22〕

１．遺構（第84・85図、図版17）

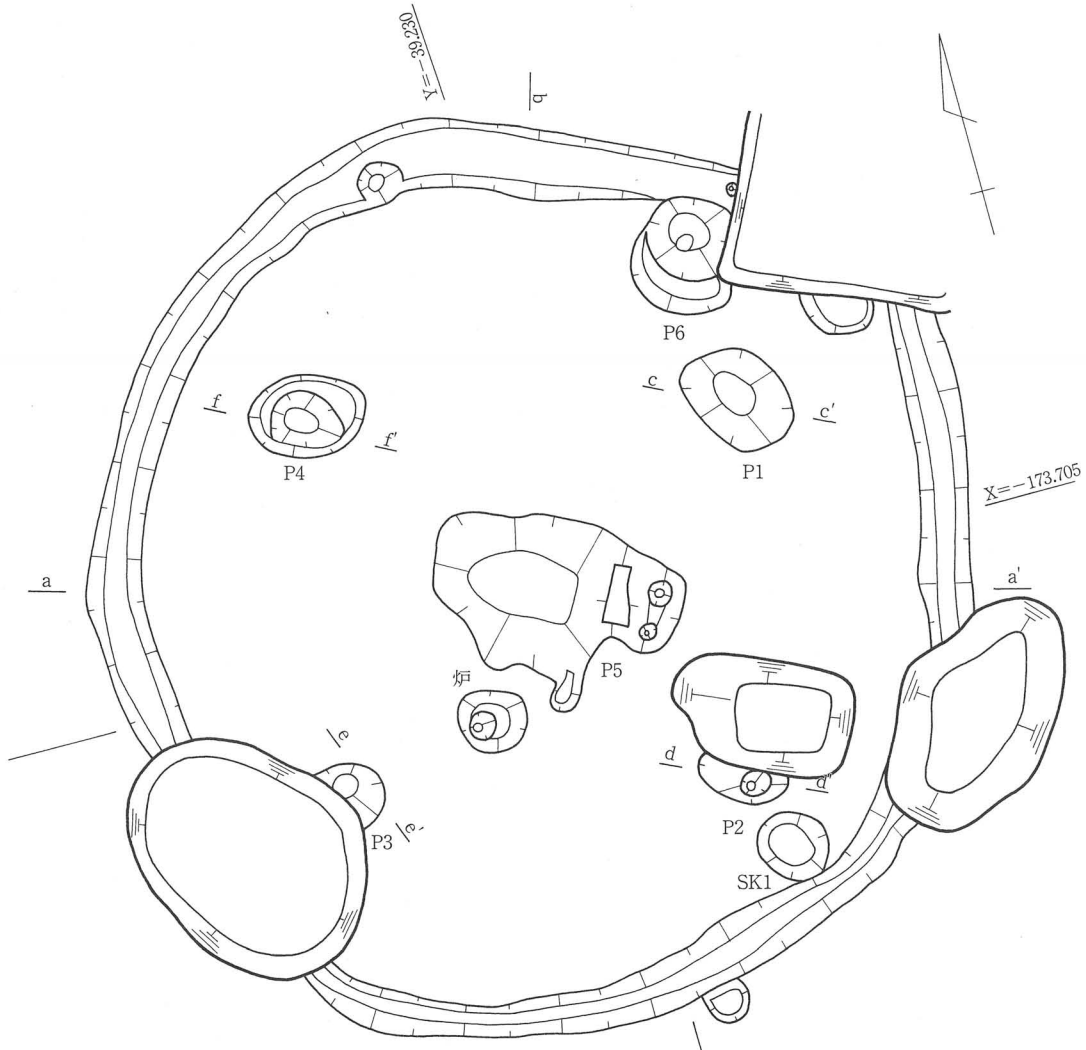
Ｍ－ｃ１・Ｍ－ｄ１区にまたがって位置する竪穴住居である。周囲には南方３ｍに、ＳＩ21が位置しており、北方向には隣接してＳＩ23が位置している。東側18ｍには、ＳＩ24、ＳＢ１が位置しており、比較的竪穴住居が密集している箇所の中心に位置している。周囲は、後世の削平を大きく受けていた。このため、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山層もかなりの削平を受けているとみられる。

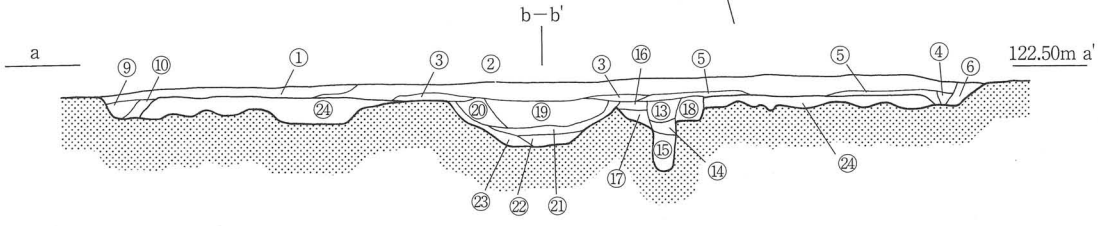
平面形は円形を呈しており、掘形の直径は7.3ｍ、床面から、検出面までの高さは0.20ｍであった。検出面の標高は約122.20～122.40ｍであった。当該竪穴住居の調査では、ほぼ全体を調査することができた。

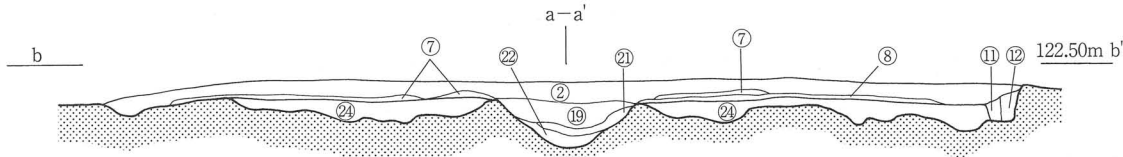
掘形は、10ＹＲ8/6黄橙色シルトまじり微砂の地山面を基盤として検出した。竪穴住居の覆土が灰黄色～黒色の砂まじりシルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、約70～80度の勾配を持っている。床面は、基盤層を掘り込み、掘形を掘削した後、㉔層（10ＹＲ7/4にぶい黄橙色粗砂まじりシルト）を置土することによって水平な床面を造成していた。床面の直径は、6.1ｍであり、壁溝、ピット、柱穴、炉、土坑が検出されている。また、床面上からは、炉を中心として薄い炭化物の層が検出された。

壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.25～0.5ｍ、深さ0.15～0.2ｍで巡っていた。壁溝は、部分的に撹乱による破壊を受けているものの本来、完周していたと考えられる。

炉は、床面のほぼ中央で検出された。不整形の平面形態を呈しており、床面からの深さは0.35ｍであり、底部には長軸0.8ｍ、短軸0.5ｍほどの平坦面があり、擂鉢状を呈してい



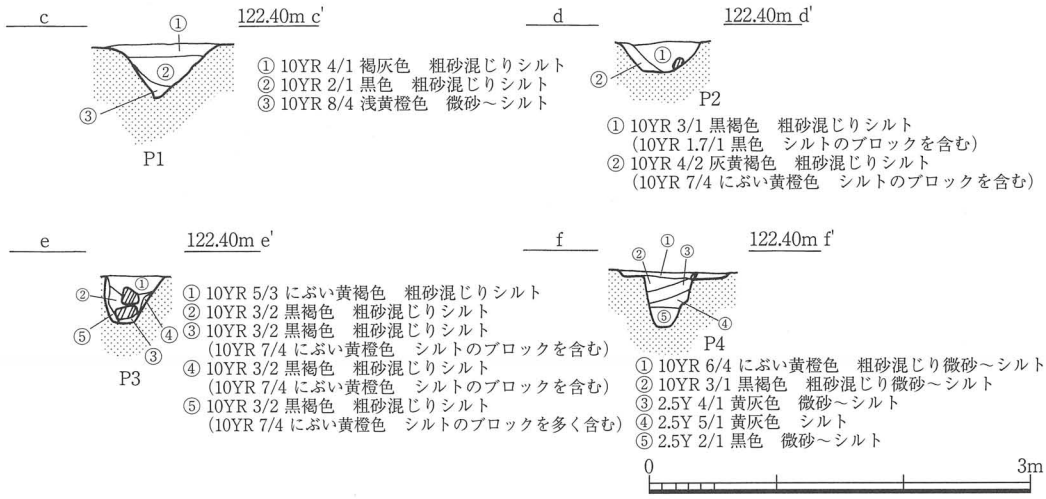




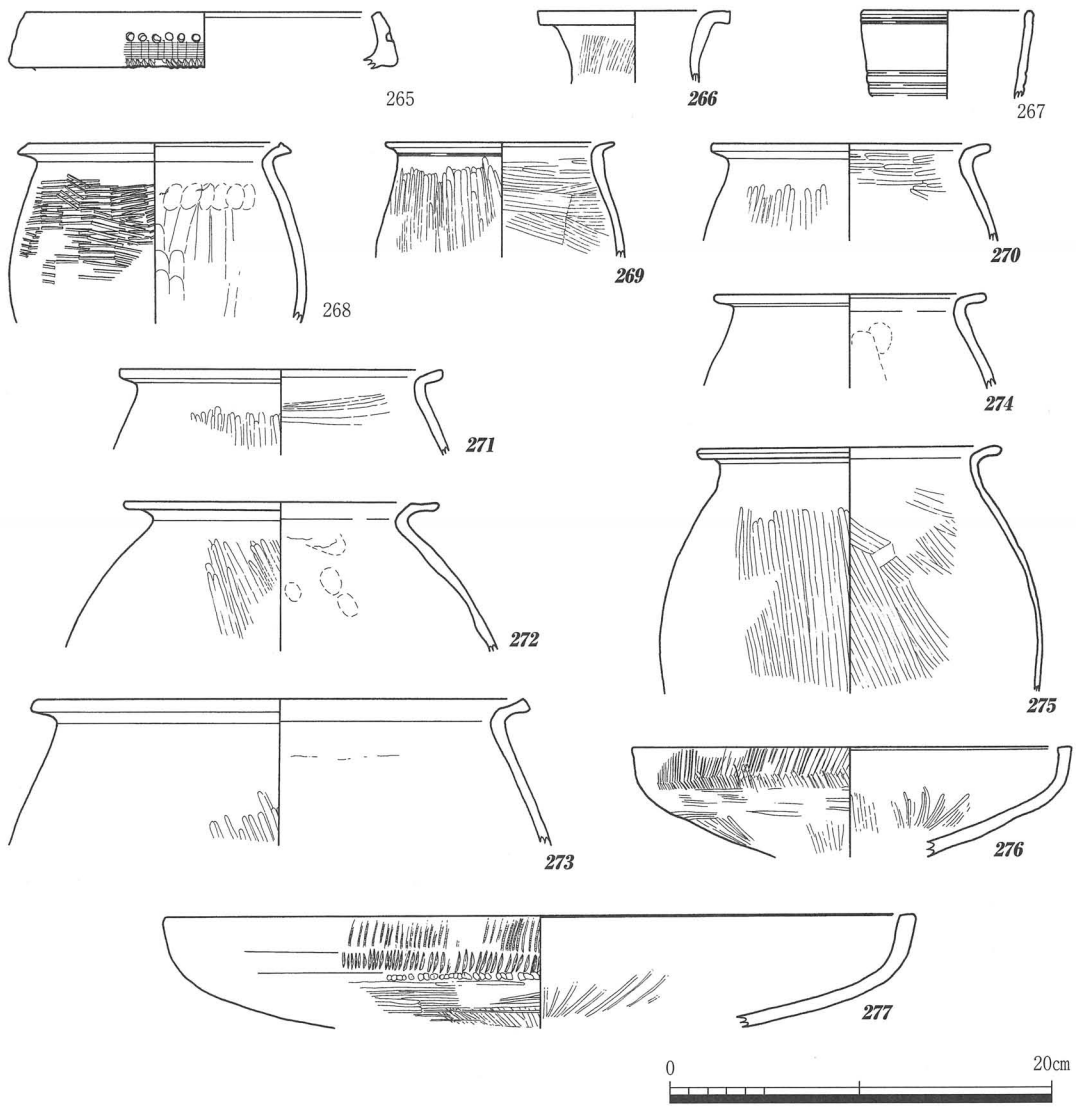
① 10YR 4/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト
(2.5Y 8/6 黄色　粗砂混じりシルトのブロックを含む)
② 5Y 3/1 オリーブ黒色　粗砂混じりシルト
③ 10YR 2/1 黒色　シルト(炉の灰に起因すると考える)
④ 10YR 3/1 黒褐色　粗砂混じりシルト
⑤ 5YR 3/1 オリーブ黒色　粗砂混じりシルト
(2.5Y 8/6 黄色　粗砂混じりシルトのブロックを多く含む)
⑥ 5YR 3/1 オリーブ黒色　粗砂混じりシルト
(2.5Y 8/6 黄色　粗砂混じりシルトのブロックを含む)
⑦ 10YR 2/1 黒色　シルト(炉の灰に起因すると考える)
⑧ 10YR 2/2 黒褐色　微砂～シルト
⑨ 10YR 3/1 黒褐色　粗砂混じりシルト
⑩ 10YR 5/3 にぶい褐色　粗砂混じりシルト
(2.5Y 8/6 黄色　粗砂混じりシルトのブロックを含む)
⑪ 10YR 3/1 黒褐色　粗砂混じりシルト
⑫ 10YR 6/4 にぶい黄褐色　シルト
(2.5Y 8/6 黄色　粗砂混じりシルトのブロックを含む)
⑬ 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト(炭化物を含む)
⑭ 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
(10YR 7/4 にぶい黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑮ 7.5Y 6/3 オリーブ黄色　粗砂混じり微砂～シルト
⑯ 10YR 4/1 褐灰色　粗砂混じりシルト
⑰ 10YR 7/4 にぶい黄橙色　微砂～シルト
(10YR 4/1 褐灰色　シルトのブロックを含む)
⑱ 10YR 7/4 にぶい黄橙色　粗砂混じりシルト
(10YR 5/1 褐灰色　シルトのブロックを含む)
⑲ 7.5Y 4/1 褐灰色　粗砂混じり微砂～シルト
(10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑳ 10YR 5/3 にぶい黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
㉑ 10YR 5/1 褐灰色　粗砂混じり微砂～シルト
(10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルトのブロックを含む)
㉒ 10YR 2/1 黒色　粗砂混じり微砂～シルト
(10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルトのブロックを含む)
㉓ 10YR 2/2 黒褐色　微砂～シルト
㉔ 10YR 7/4 にぶい黄橙色　粗砂混じりシルト

0　3m

第84図　ＳＩ22平面図・土層断面図（1/60）



第85図　ＳＩ22遺構土層断面図（1/60）



第86図　ＳＩ22出土土器

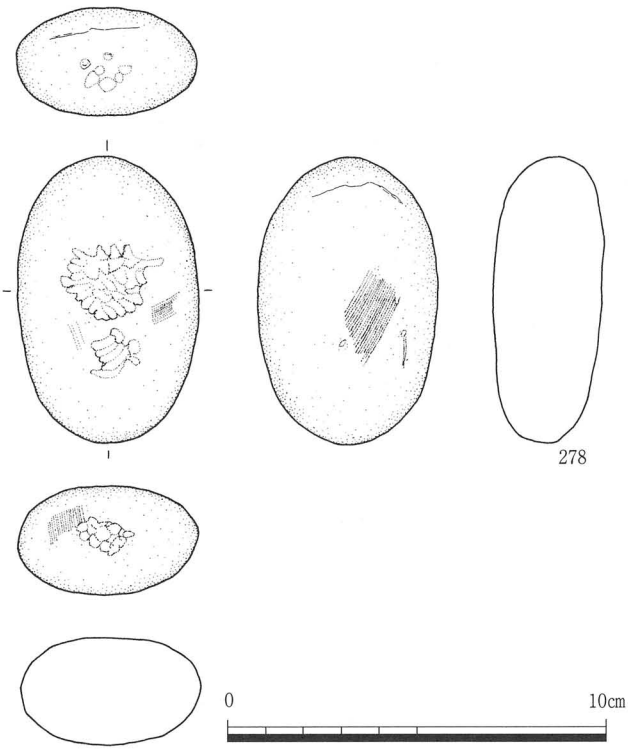
る。炉の堆積土には、下層に炭化物からなる層が認められ、上層は、炭化物を含んだ微砂～シルト層がみられた。炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。

ＳＫ１は、床面の南東隅で検出した。直径は0.5mで深さは、0.15mであった。土坑内からは、土器片が出土した。

ピットは９箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１～Ｐ４は、その規模や配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径が0.9m、床面からの深さは0.45mであった。Ｐ２は、直径が0.65m、床面からの深さは0.25mであった。Ｐ３は、直径が0.45m、床面からの深さは0.4mであった。柱穴内からは、礫が出土した。Ｐ４は、直径が0.85m、床面からの深さは0.45mであった。各主柱穴の配置から、当該竪穴住居は、４本柱構造を復元することができる。この他Ｐ５も柱穴と考えられるが、竪穴住居の中央で検出された。

２．遺物（第86・87図、図版56・57・103）

当該竪穴住居からは、弥生土器、石器が出土している。266・268～270・272・274・276～278は、竪穴住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。266は、広口壺の口縁部の小片である。口縁端部は上下方向への拡張はなされておらず、面取りが行われている。文様はなく、外面はハケで仕上げている。269・270・272は甕Ａである。外面はミガキで仕上げており、内面は269・270がミガキで仕上げている。274も甕Ａの小片であるが、口縁端部を丸く収め、外面は摩滅が著しいが、ナデで調整している。268は甕Ｂであり、外面にはタタキを残している。276・277は高坏Ａである。276・277は外面にヘラ状工具による刻目を施文する。278は砂岩製の叩石である。



第87図　ＳＩ22出土石器

265は受口状口縁を有する広口壺Ｂ１の小片であり、Ｐ１から出土した。口縁部外面には、簾状文、刺突文、刻目を施文する。267は細頸壺の口縁部であり、Ｐ１から出土した。271・273・275は甕Ａであり、口縁端部を丸く収め、外面は縦方向のミガキで仕上げている。271は炉から、275はＳＩ22－ＳＫ１から、273はＰ６から出土している。

３．まとめ

当該竪穴住居は、時期を明らかにし得る器種にとぼしいものの、Ⅳ－１～２様式を中心

に存続していたと考えられる。また、甕は生駒山西麓産のもので多くが占められている点に特色がある。周囲には、竪穴住居が密集している。掘形の外側に軒先が位置していたことが想定できることから、ＳＩ21及びＳＩ23は、当該竪穴住居と接近しすぎており、軒先が重複すると想定できる。したがって、これら２棟とは、同時には存在していなかったと想定できる。検出できた竪穴住居掘形の直径は7.3ｍであった。床面からは、炉、壁溝、柱穴、ピット、土坑が検出できた。主柱穴配列は４本柱構造を復元することができる。

〔ＳＩ23〕

１．遺構（第88・89図、図版18）

Ｍ－ｃ10・Ｍ－ｄ10区を中心に位置する竪穴住居である。周囲には南方向に隣接して、ＳＩ22が、北方向１ｍには、ＮＲ１が形成されていた。周囲は、後世の造成による削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山層もかなりの削平を受けているとみられる。竪穴住居は、２棟の掘形が重複している。新しいものから順にＳＩ23―１、ＳＩ23―２と呼称する。掘形底面は、ＳＩ23―１のほうが深かったようであり、ＳＩ23－２竪穴住居床面は、大部分がＳＩ23－１によって破壊されていた。

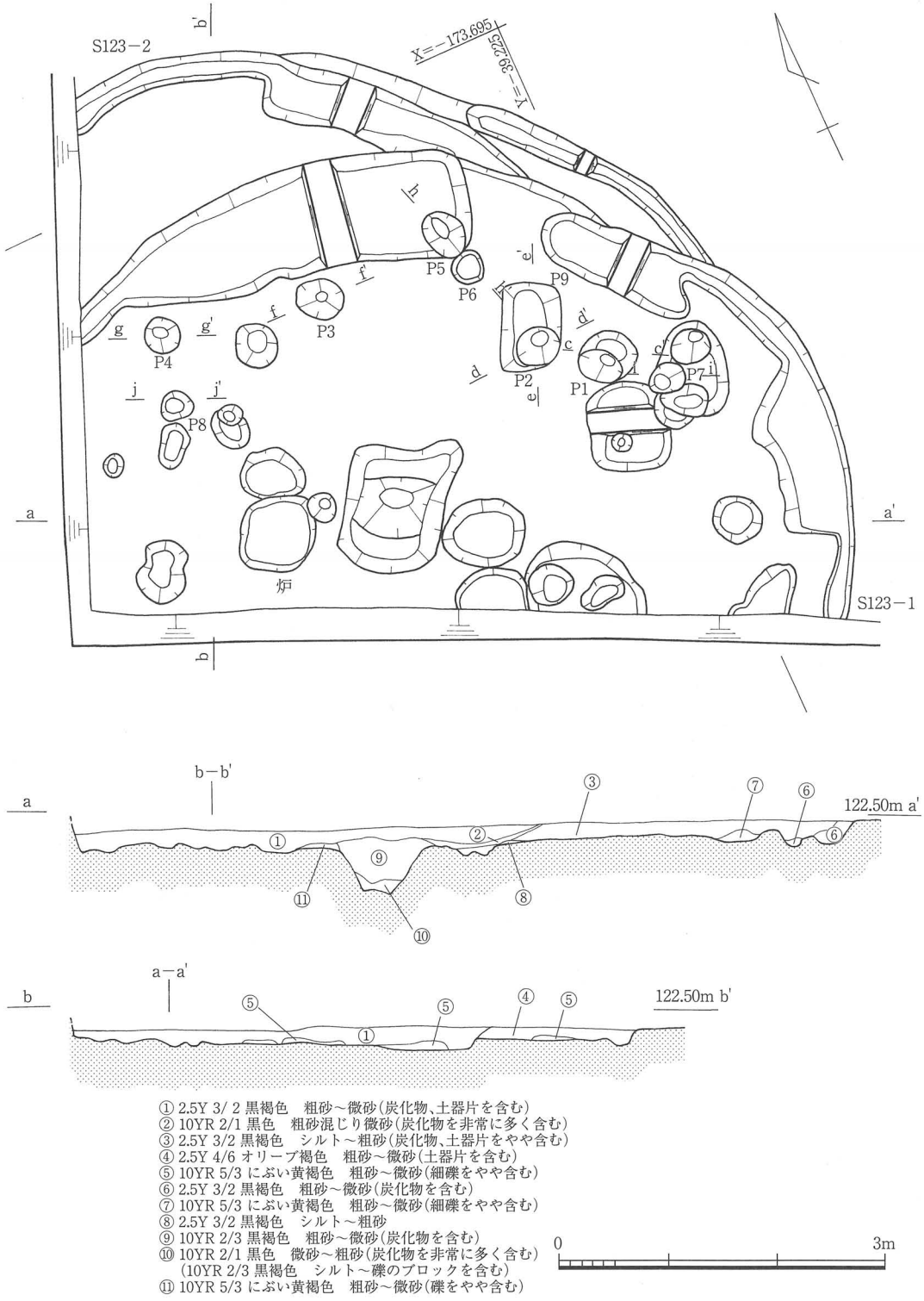
ＳＩ23―１

ＳＩ23―１の平面形は円形を呈しており、掘形の直径は８ｍ程度と推定され、検出面から、床面までの深さは0.12ｍであった。掘形底面には、部分的に置土⑤層が敷かれていた。検出面の標高は122.35～122.43ｍであった。当該、竪穴住居の調査は、北側約半分を対象に行った。南側半分に相当する場所の調査も行っているが、この付近は削平がより深く及んでおり、竪穴住居掘形は、完全に削平されていた。掘形は、10ＹＲ8/6黄褐色シルトの地山面を基盤として検出された。竪穴住居の覆土が2.5ＹＲ3/2黒褐色の粗砂もしくは、シルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、約60～70度の勾配を持っている。床面の直径は、7.5ｍと推定され、壁溝、ピット、柱穴、炉、土坑が検出されている。

壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.25～1.0ｍ、深さ0.1～0.13ｍで巡っていた。壁溝は完周せず、北側には、0.5ｍほど壁溝が途切れる場所があった。また、一部で幅が0.5ｍから１ｍほどに拡張されている部分があった。

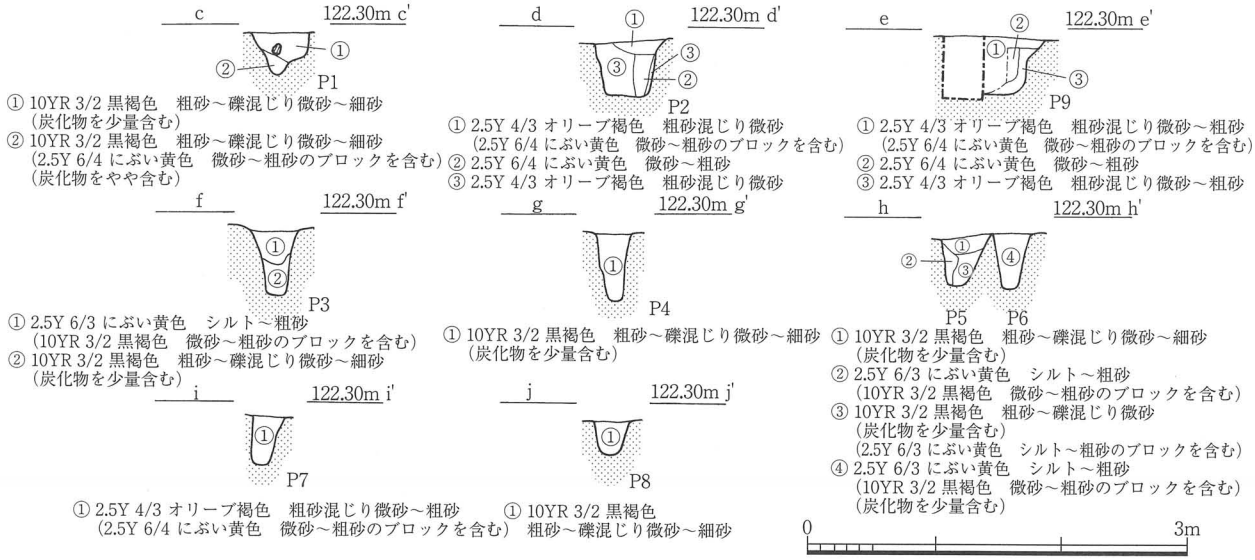
炉は、床面のほぼ中央で検出された。方形の平面形態を呈しており、中央部はさらに円形に掘り窪められていた。床面から深さ0.5ｍにある底部には直径0.3ｍほどの平坦面があった。下層には、炭化物を多く含む、黒色の微砂～粗砂が堆積しており、上層にも、炭化物を含む層が堆積していた。炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。

ピットは22箇所検出された。これらのすべてがＳＩ23―１に伴う確証はない。この内、Ｐ１～Ｐ８の８箇所は、その規模配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径が0.45ｍ、床面からの深さは0.35ｍであった。Ｐ２は、直径が0.55ｍ、床面からの深さは



第88図　ＳＩ23平面図・土層断面図（1/60）

0.45mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.13mであった。Ｐ３は、直径が0.4m、床面からの深さは0.5mであった。Ｐ４は、直径が0.30m、床面からの深さは0.5mであった。Ｐ５は、直径が0.4m、床面からの深さは0.4mであった。Ｐ６は、直径が0.3m、床面からの深さは0.45mであった。Ｐ７は、直径が0.3m、床

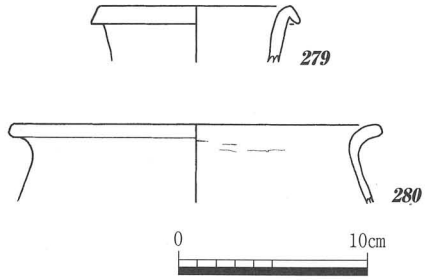


第89図　ＳＩ23遺構土層断面図（1/60）

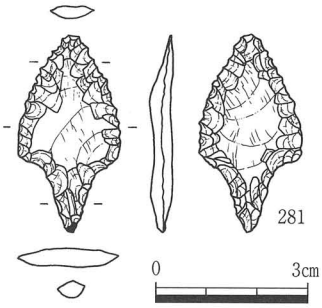
面からの深さは0.4mであった。Ｐ８は、直径が0.25m、床面からの深さは0.25mであった。各主柱穴の配置から、柱構造を復元することはできなかった。

ＳＩ23―２

ＳＩ23―２の平面形は、円形を呈しており、掘形の直径は10m前後になると考えられる。検出面から、床面までの深さは0.1mであり、大部分は、ＳＩ23―１の掘形によって破壊されていた。床面からは、壁溝が検出されている。壁溝は、幅0.2～0.5m、深さ0.1mで巡っていた。



第90図　ＳＩ23出土土器



第91図　ＳＩ23出土石器

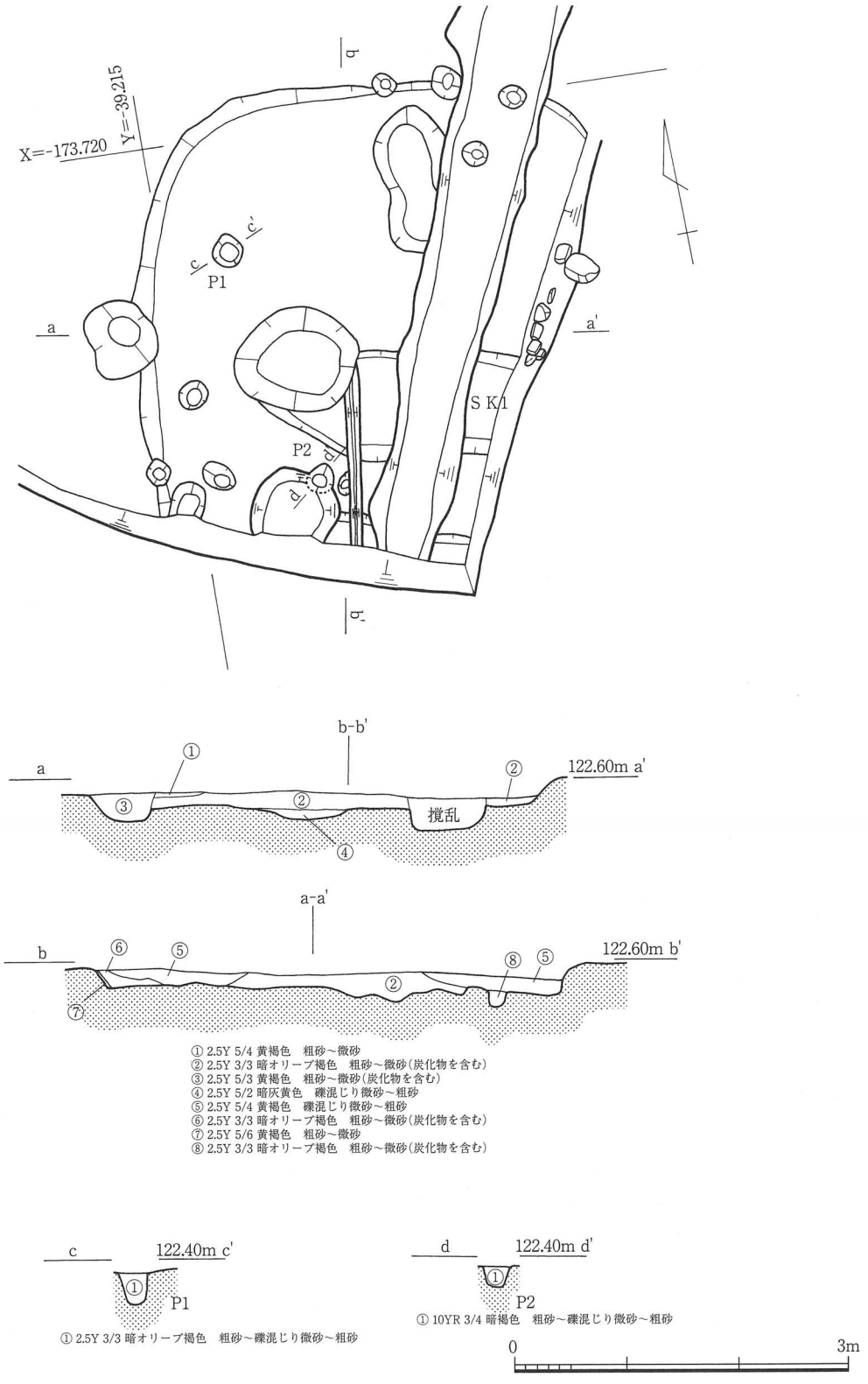
２．遺物（第90・91図、図版57・98）

当該竪穴住居からは、土器（280）、石器（281）が、住居の廃絶後に竪穴住居内に流れ込んだ覆土中から出土している。279は広口壺Ａである。口縁端部や頸部に施文は行われていない。279はＰ７から出土した。280は甕Ａの小片であり、口縁端部は丸くおさめられている。摩滅が著しく調整は観察できなかった。281はサヌカイト製の有茎式石鏃である。

３．まとめ

当該竪穴住居は、出土遺物の量がとぼしく、年代を推定する根拠に欠けるが、覆土から出土した広口壺の細片は、Ⅳ様式のものと推定される。竪穴住居掘形が２棟重複しており、直径10m前後のＳＩ23―２がまず築造され、廃絶後に直径約8.0mのＳＩ23―１が築造されている。床面からは、炉、壁溝、柱穴、ピット、土坑が検出できた。調査できた面積が

限られていたことから、主柱穴の配列については、復元することができなかった。



第92図　ＳＩ24平面図・土層断面図（1/60）

〔ＳＩ24〕

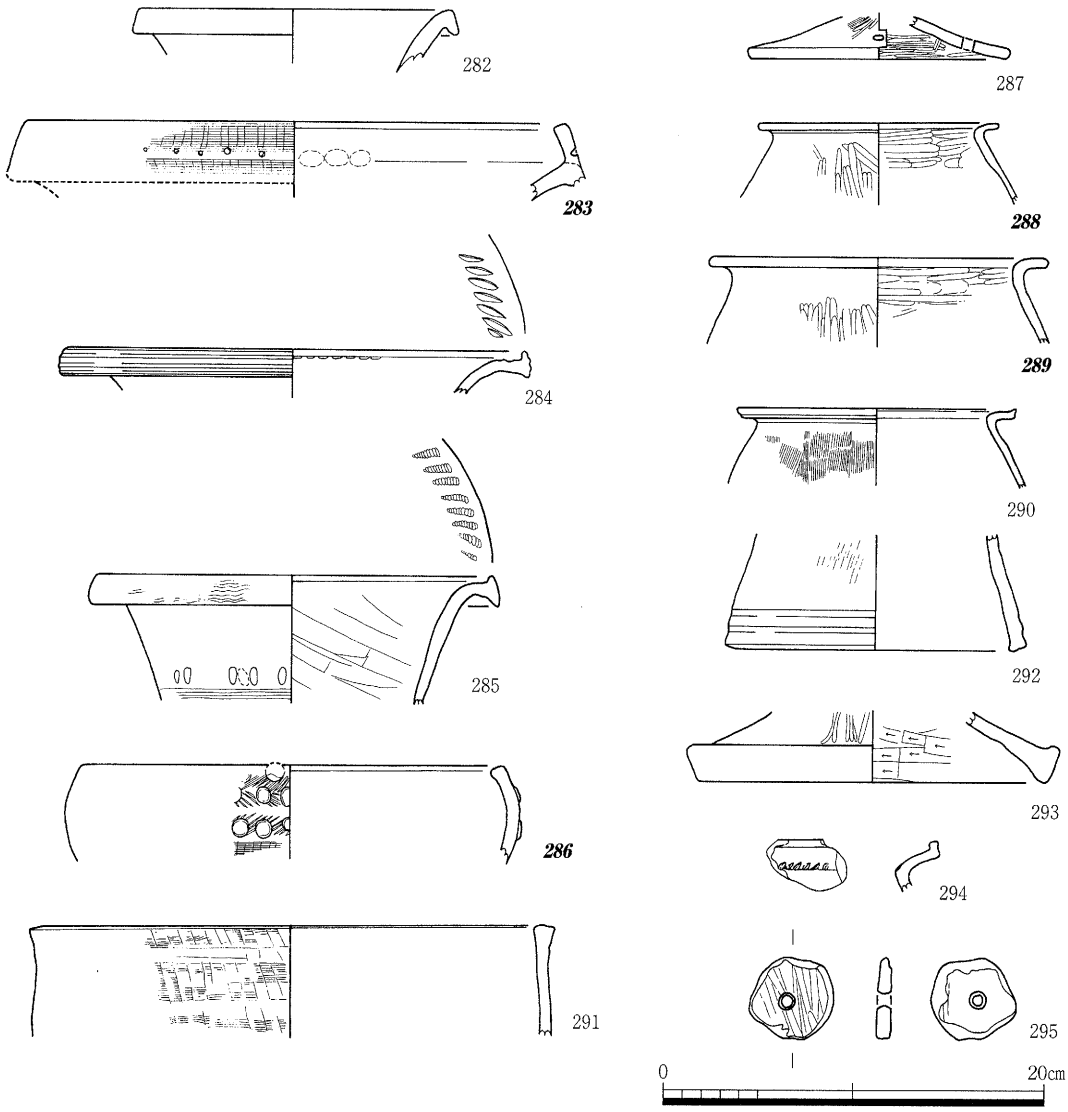
１．遺構（第92図、図版18）

Ｍ－ｂ３区を中心に位置する竪穴住居である。周囲には、西側に隣接してＳＢ１が、東方向７ｍには、ＳＤ20が位置している。周囲は、後世の削平によって、遺物包含層が遺存しておらず、地山にまで削平が及んでいるとみられる。

平面形は円形もしくは隅丸方形を呈しており、方形の場合、掘形の一辺は4.2m程度と推定できる。床面から、検出面までの高さは0.15mであった。検出面の標高は122.55mであった。当該竪穴住居は、約７割程度を調査することができた。

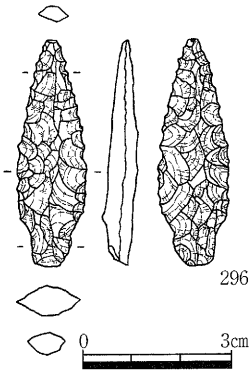
掘形は、2.5Y8/4微砂の地山面を基盤として検出された。竪穴住居の覆土は、黄褐色～暗オリーブ褐色の細砂であり、地山層の土質に近かったため、検出はやや不明瞭であった。床面は、掘形底部をそのまま使用しており、柱穴、ピット、土坑が検出されている。床面には、比較的大きな攪乱が２箇所穿たれていた。

ピットは、12箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、



第93図　ＳＩ24出土土器

Ｐ１、Ｐ２は、その規模、配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径が0.3m、床面からの深さは0.28mであった。Ｐ２は、直径が0.27m、床面からの深さは0.2mであった。床面は、すべてが調査できたわけではなく、また攪乱による破壊もあったため、主柱穴の配列を復元するには至らなかった。



第94図　ＳＩ24 出土石器

２．遺物（第93・94図、図版57・98）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。282～284・286～295・296は、竪穴住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ堆積土中に包含されていたものである。282は広口壺Ａである。口縁端部及び頸部には施文はされていない。283は広口壺Ｂ１の小片である。口縁端部を上下方向に拡張している。口縁端部外面には、比較的間隔が長く、幅の狭い簾状文と刺突文を施文している。284は広口壺Ｅである。口縁端部には、凹線文を施文している。286は、細頸壺である。列点文施文後に円形浮文、簾状文を施文している。287は甕の蓋の小片である。288・289は甕Ａの小片である。口縁端部を丸くおさめ、内外面ともにミガキで仕上げている。290は甕Ｂの小片である。外面を粗いハケで仕上げている。291は鉢Ｂである。口縁端部は肥厚しているが、退化した状況を呈している。外面には簾状文を施文している。292は鉢類の脚部の小片であるとおもわれる。293は、高坏の脚部の小片である。内面を削っている。294は、甕の口縁端部の細片である。頸部内面に刻目を施す。295は紡錘車である。296はサヌカイト製の有茎式石鏃である。

285は、広口壺Ｅであり、ＳＩ24－ＳＫ１から出土した。口縁端部は上下方向に拡張しており、外面に波状文、内面に扇状文を施文している。

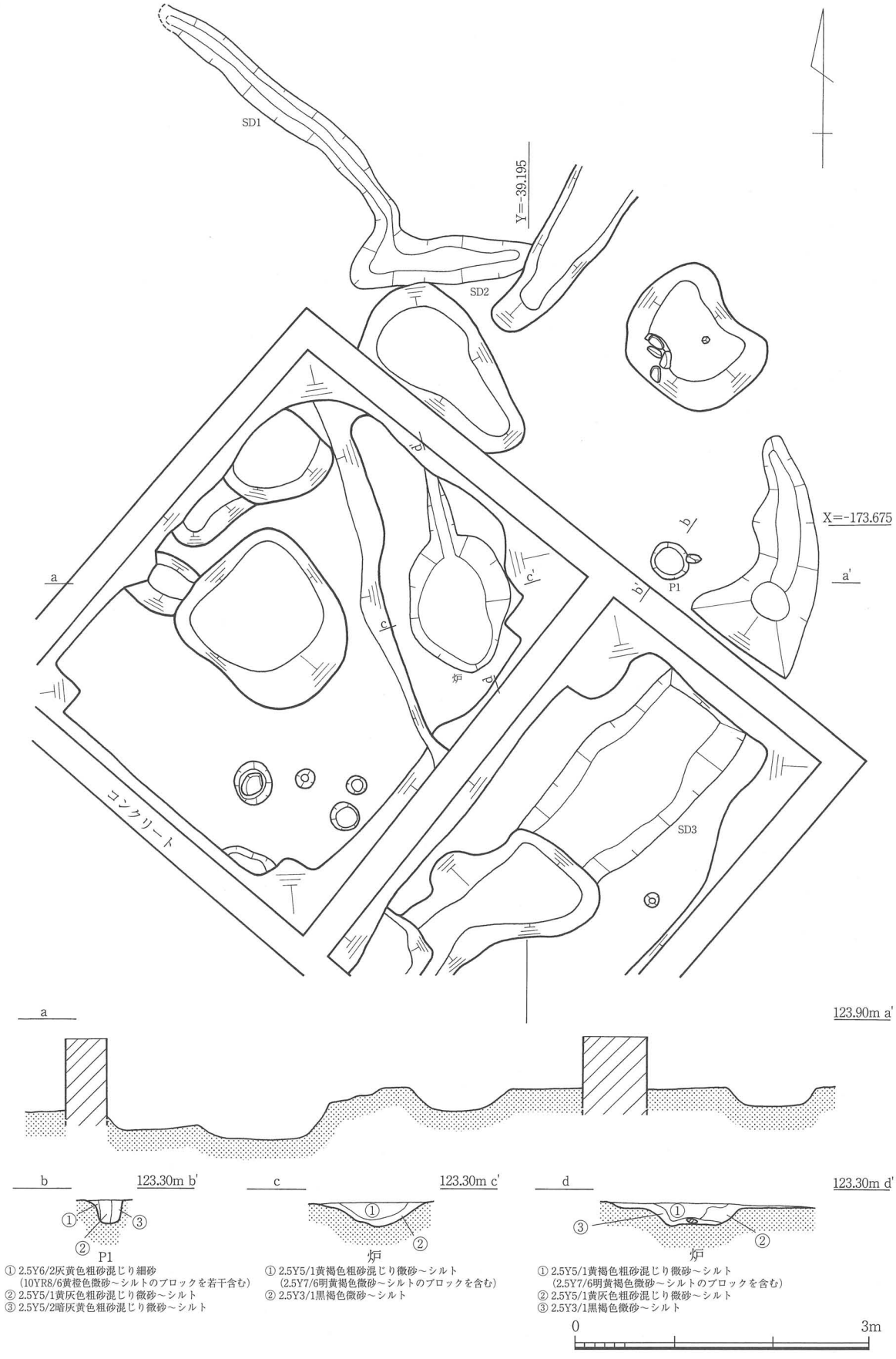
３．まとめ

当該竪穴住居出土遺物は、覆土から出土したものが多くを占めるが、Ⅳ様式を中心に存続していたと考えられる。隅丸方形、もしくは円形の平面形態であり、一辺は4.2mと推定できる。床面からは、柱穴、ピット、土坑が検出できた。主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔ＳＩ25〕

１．遺構（第95図、図版20）

Ｇ－ｊ８区に位置する竪穴住居である。周囲は、主に近世の遺構が展開しており、弥生時代の遺構は希薄である。これは、近世以降の削平が著しかったことに起因しており、弥生時代の遺物包含層も遺存していなかった。地山層もかなりの削平を受けているとみられる。



第95図　ＳＩ25平面図・土層断面図（1/60）

当該竪穴住居も、床面下まで削平が及んでおり、壁溝や炉、排水溝等の旧地表面下の深い位置にあった遺構の残存によって、かろうじて、竪穴住居の存在を認識することができた。また、コンクリートの基礎が竪穴住居に重なっており、大きく破壊を受けていた。

平面形は円形を呈していると考えられ、掘形の復元直径は約７～８m程度になると思われる。検出面の標高は123.20～122.90mであった。

掘形は、10ＹＲ8/6黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出された。竪穴住居の覆土は、まったく遺存していなかった。

床面の範囲と想定される場所からは、壁溝、ピット、柱穴、炉・排水溝が検出されている。

壁溝は、一部が検出されただけであり、南東側隅と北側の一部が検出された。本来、竪穴住居の壁に沿って巡っていたものと推定でき、その幅は、0.5～1.2m、深さは0.1～0.2mであった。炉は、床面のほぼ中央で検出された。長径1.3mの楕円形を呈すると思われる。底部に、炭化物層が堆積し、上層には地山に起因するブロックを含んだ層が堆積していた。炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。

排水溝は、炉に接続しており、北東方向に６mにわたりのびていた。壁溝に接続していると推定できる。排水溝底面の標高は、炉に接続している地点で123.12m、壁溝と交わっているところで123.03mであり、排水溝としての機能を想定した場合、使用に耐えうる構造となっている。

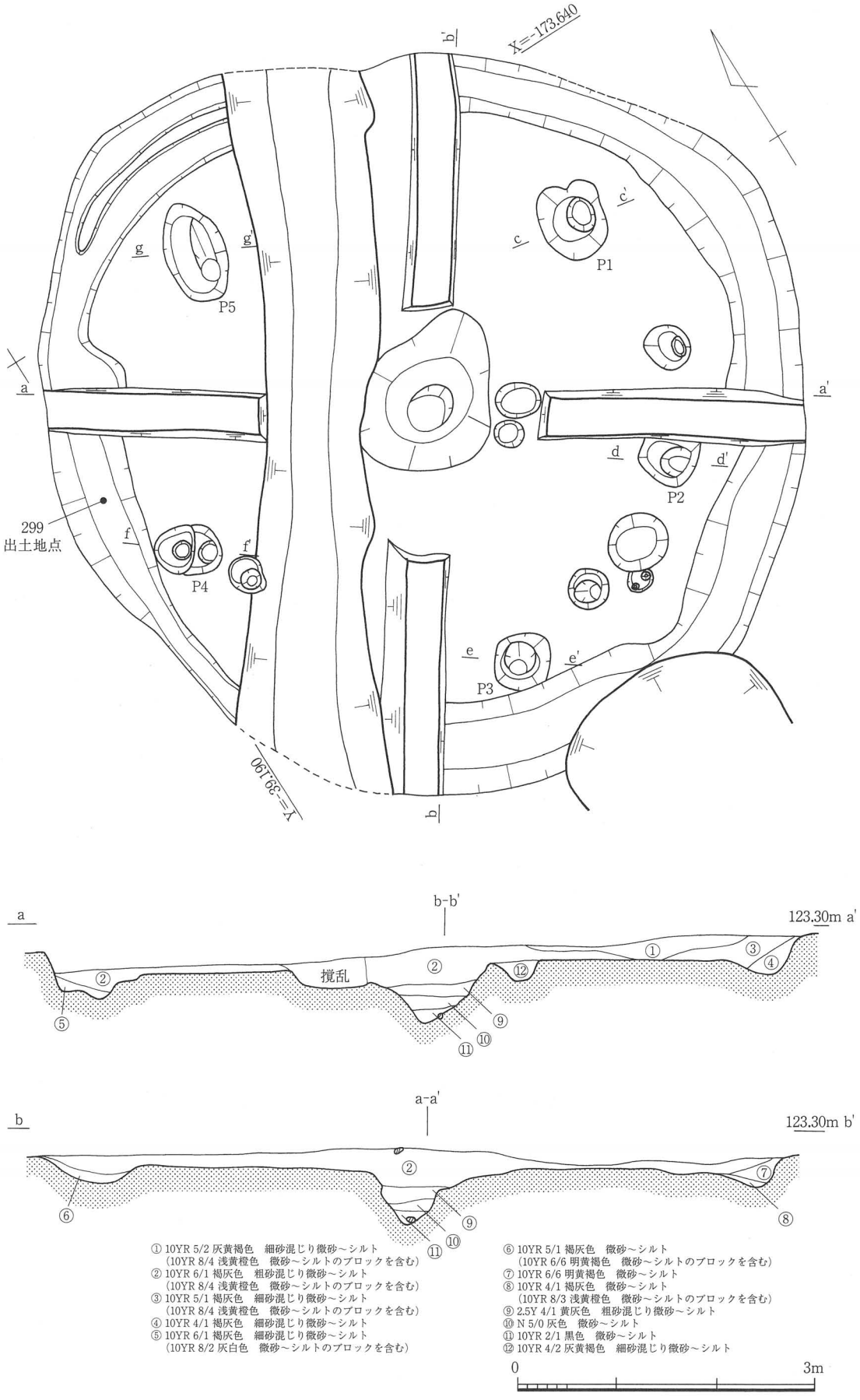
ピットは、床面と想定される範囲から、５箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１は、その規模配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径が0.4m、検出面からの深さは0.25mであった。柱痕跡が遺存しており、その規模は、直径が0.1mであった。当該竪穴住居は大部分が削平を受けており、また、周囲には攪乱も多かったことから、主柱穴の配列を復元するには至らなかった。

２．遺物

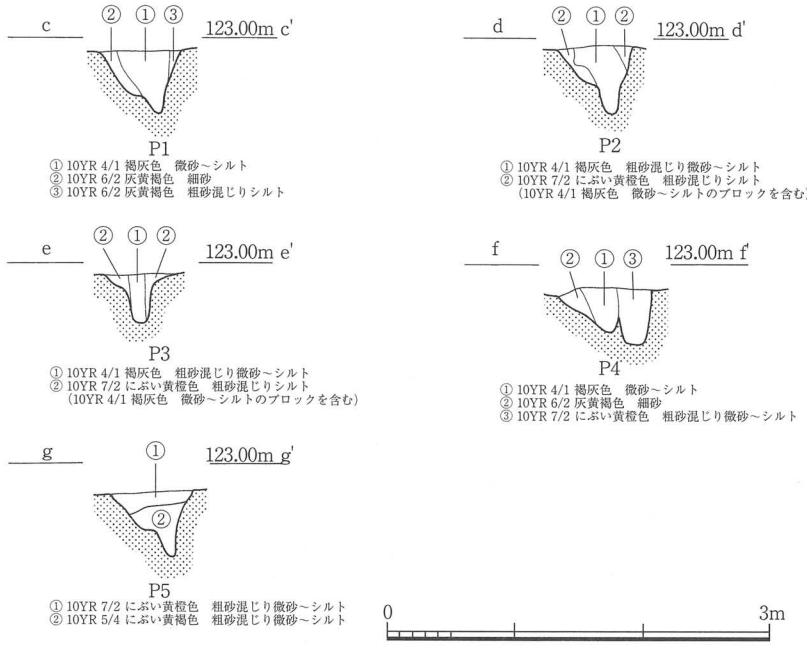
当該竪穴住居からは、遺物は出土しなかった。

３.まとめ

当該竪穴住居は、遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。周囲には、近世以降の削平のため、弥生時代の遺構の残存状況は非常に悪く、当該竪穴住居も、壁溝の一部と排水溝、炉の残存によってかろうじて認識することができた。検出できた竪穴住居掘形の直径は推定で約７～８mであった。床面からは、炉、壁溝、排水溝、柱穴、ピットが検出できた。主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。



第96図　ＳＩ26平面図・土層断面図（1/60）



第97図　ＳＩ26遺構土層断面図（1/60）

〔ＳＩ26〕

１．遺構（第96・97図、図版19）

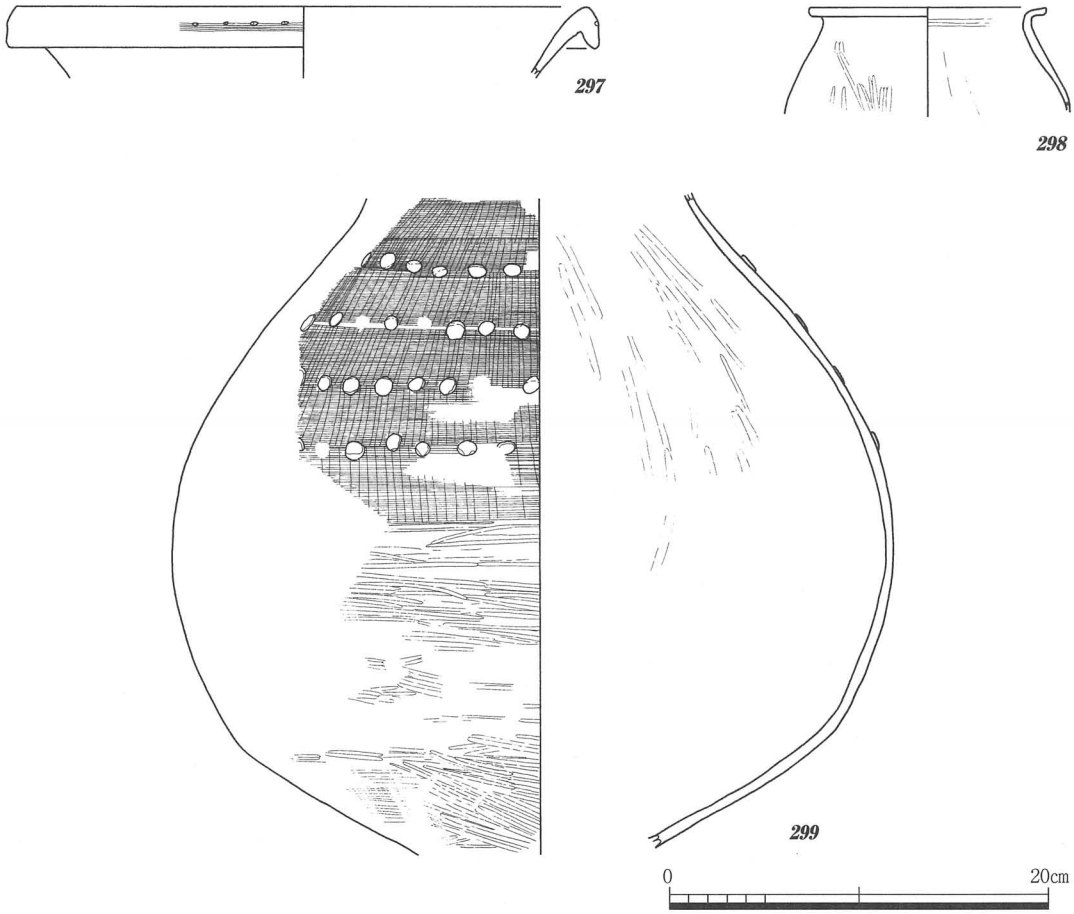
Ｇ－ｊ５区を中心に位置する竪穴住居である。周囲には南西方向20ｍにＳＢ２が、西方向30ｍには、ＳＩ18が位置している。南東６ｍには、ＳＩ27が位置するものの、他の竪穴住居群からは孤立した位置にある。東方向は、約100ｍで、丘陵部となるので、集落のなかでは東端部に位置しているといえる。周囲は、削平の影響が比較的少なく、弥生時代の遺物包含層が遺存していた。中央には、南北方向に溝状の撹乱が穿たれていた。

平面形は円形を呈しており、直径は7.8ｍ、床面から、検出面までの高さは最も遺存状況が良好な場所で、0.3ｍであった。検出面の標高は123.00～123.20ｍであった。当該調査では、竪穴住居全体を調査することができた。

掘形は、10ＹＲ8/6浅黄橙色シルトの地山面を基盤として検出された。竪穴住居の覆土が10ＹＲ6/1褐灰色粗砂まじり微砂～シルトであったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面は、約60～70度の勾配を持っている。覆土は標高の高い東側から流れ込んだ状況が土層の観察から確認できた。床面付近には、炉を中心として炭化物層が薄く堆積していた。床面の直径は、約6ｍであり、壁溝、ピット、柱穴、炉が検出されている。

壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.3～0.9ｍ、深さ0.2ｍで巡っていた。壁溝は完周しており、北側のみ部分的に２重に巡っていた。

炉は、床面のほぼ中央で検出された。不整円形の平面形態を呈しており、床面からの深さは0.6ｍであり、円錐形を呈していた。底部には、炭化物層が堆積しており、上層には黄褐から、灰褐色系の微砂～シルトが堆積していた。炉掘形には被熱した痕跡が認められなかった。

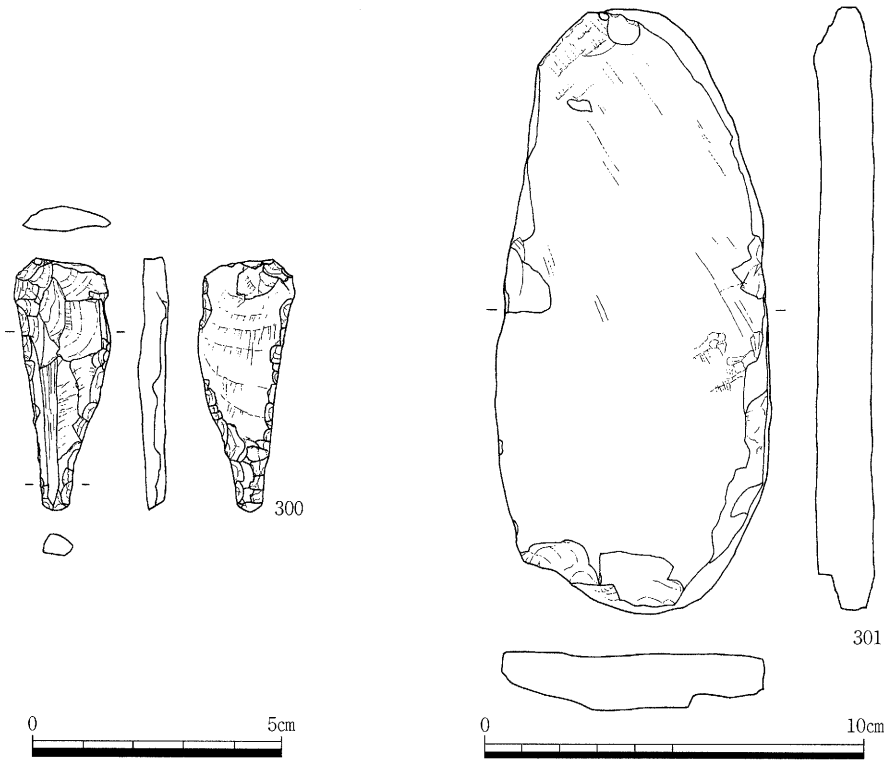


第98図　ＳＩ26出土土器

ピットは12箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１～５は、その規模、配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径が0.65m、床面からの深さは0.5mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.2m～0.4mであった。Ｐ２は、直径が0.6m、床面からの深さは0.50mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.15～0.3mであった。Ｐ３は、直径が0.55m、床面からの深さは0.4mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.12mであった。Ｐ４は、長軸が0.7m、短軸が0.5mであり、床面からの深さは0.45mであった。２本の柱穴が重複している。Ｐ５は、直径0.7m、床面からの深さは0.5mであった。この他、攪乱が穿たれている箇所にも、柱穴があった可能性があり、各主柱穴の配置から、当該竪穴住居は、６本柱構造を復元することができる。

２．遺物（第98・99図、図版57・100・103）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。297は広口壺Ａの小片である。覆土より出土した。口縁端部を下方向に拡張し、外面に刺突文を施文する。300はサヌカイト製の石錐であり、覆土より出土した。



第99図　ＳＩ26出土石器

299は細頸壺もしくは広口壺Ａであり、壁溝西側より出土した。溝底部に貼り付く状態で、まとまった数の破片が一括して出土している。間隔が短く幅の広い簾状文と円形浮文を施文している。298は甕Ａである。外面はミガキで仕上げている。壁溝より出土した。301は安山岩製の砥石であり、壁溝より出土した。

当該住居から出土した遺物は、覆土出土遺物にⅣ－３～４様式、床面上の遺構出土遺物にⅣ－１～２様式の様相がみられる。

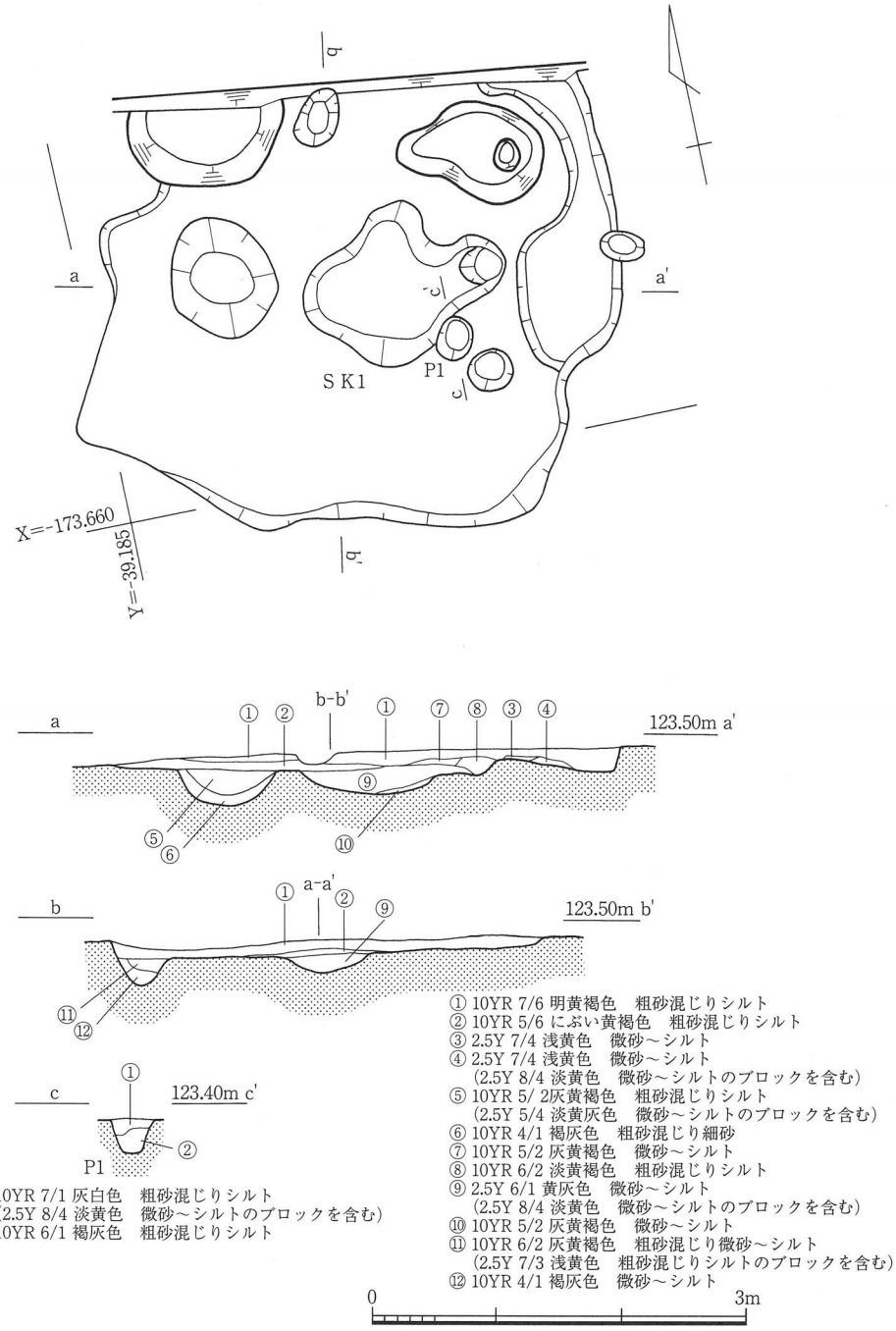
３．まとめ

当該竪穴住居は、出土遺物が少ないが、床面上の遺構から出土した299はⅣ－１～２様式のものであり、機能していた時期の一点が求められる。近接した位置に他の竪穴住居はなく、比較的孤立した位置にあるが、掘立柱建物等（ＳＢ２）が近くにある。検出できた竪穴住居掘形の直径は、7.8mであった。比較的大型の竪穴住居といえる。床面からは、炉、壁溝、柱穴、ピットが検出できた。ほぼ全体を調査することができ、６本柱の主柱穴配列の構造を復元した。

〔ＳＩ27〕

１．遺構（第100図、図版20）

Ｇ－ｉ６区を中心に位置する、竪穴住居である。周囲には北方向６mにＳＩ26が位置している。周囲は近世の造成による削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存



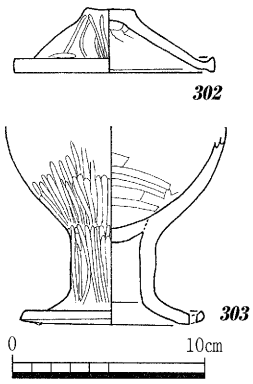
第100図　ＳＩ27平面図・土層断面図（1/60）

していなかった。北側の一部は調査区外にのびており、全体の６割程度を調査することができた。

平面形は方形を呈しており、掘形は、2.5Y8/4浅黄色シルト～微砂の地山面を基盤として検出された。竪穴住居掘形の覆土は、10ＹＲ7/6明黄褐色粗砂まじりシルトであったので極めて明瞭に検出することができた。

床面の一辺は、約３～４ｍ程であると想定でき、土坑、壁溝、ピット、柱穴が検出されている。

壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.2～0.8m、深さ0.15ｍで巡っていた。壁溝は完周していなかった。



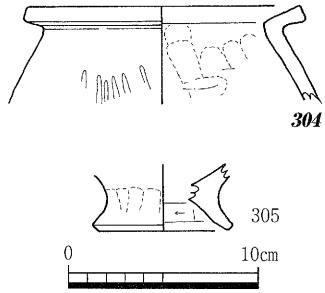
第101図　ＳＩ27
出土土器

ピットは、調査を行えた範囲で４箇所検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１は、その規模から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径0.35ｍ、床面からの深さは0.29ｍであった。主柱穴の配列を復元するには至らなかった。

なお、ＳＩ27－ＳＫ１は、炉と考えることもできるが、その位置が中心部から、それることや、炭化物層が認められなかったこと等、通有の竪穴住居で検出されている炉とは様相が異なる。

２．遺物（第101図、図版56・57）

当該竪穴住居覆土からは、302・303の２点の土器が出土している。302は、甕の蓋である。303は、高坏である。ミガキを施す以外は、無文である。当該竪穴住居から出土した遺物は少ないが、これらの遺物は、Ⅳ－４様式の特徴を示しているといえる。



第102図　ＳＩ28出土土器

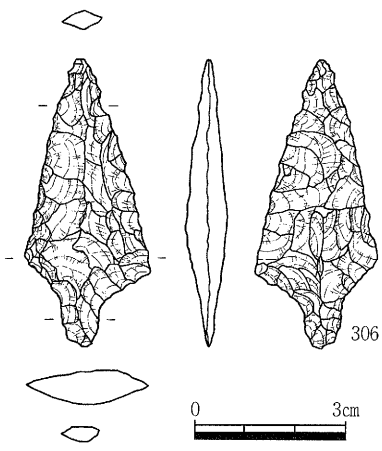
３．まとめ

当該竪穴住居は、Ⅳ－３～４様式を中心に存続していたと考えられる。周囲には、ＳＩ26が位置している。床面からは柱穴、ピット、土坑、壁溝が検出できた。主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔ＳＩ28〕

１．遺構（第104図、図版21）

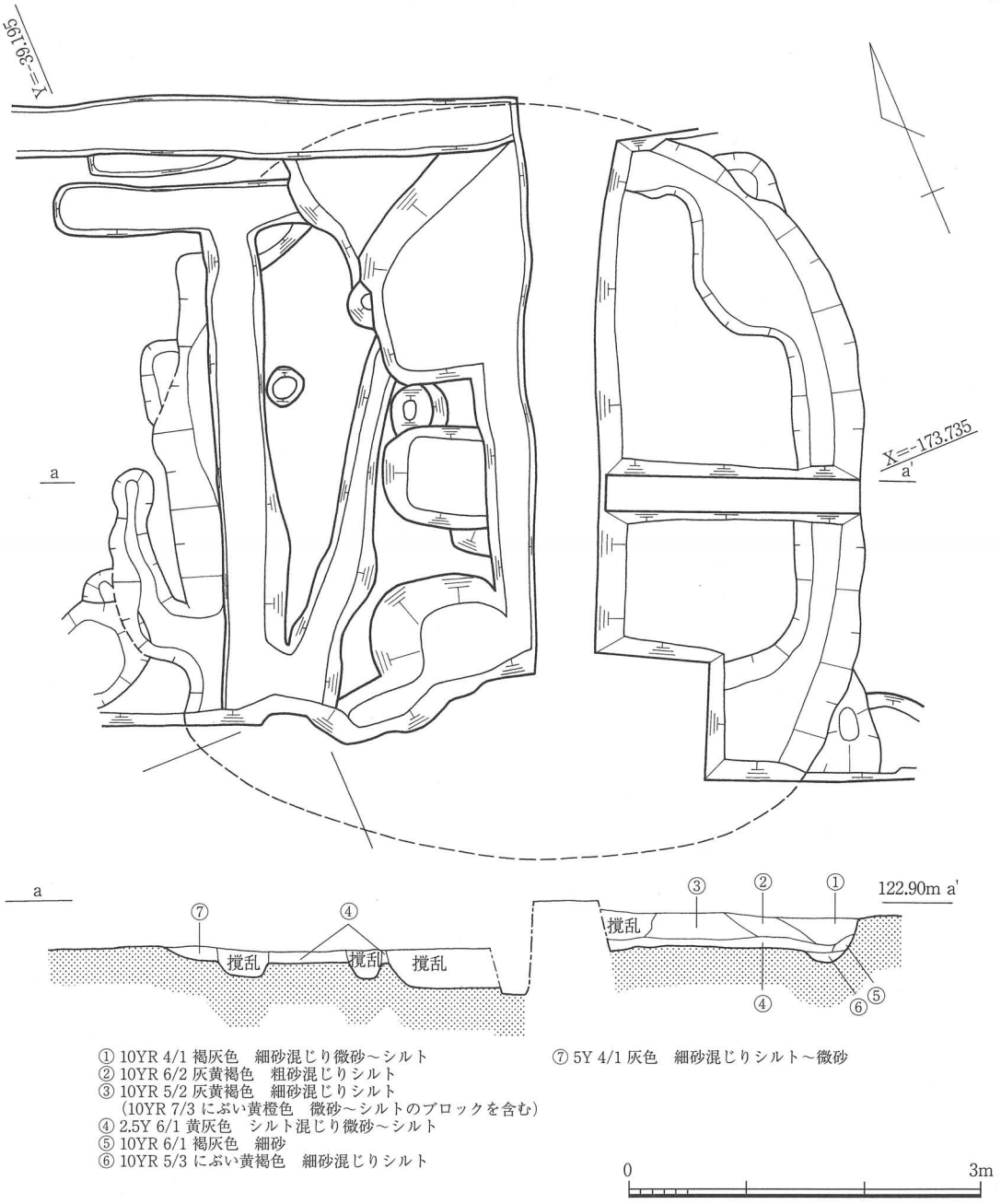
Ｌ－ｊ４区を中心に位置する、竪穴住居である。周囲には、西方向20ｍに、ＳＩ24が、東方向10ｍにはＳＩ29が位置している。また、東方向100ｍは、丘陵となっている。周囲は、後世の削平によって、弥生時代の包含層は遺存しておらず、地山にまで削平が及んでいる。当該竪穴住居は、西半部と東半部に分けて調査を行った。



第103図　ＳＩ28出土石器

西半部の調査では、撹乱による破壊が著しく、竪穴住居と認識することができなかった。

平面形は円形を呈しており、掘形の直径は5.8ｍ程度に復元できる。床面から、検出面までの高さは0.28ｍであった。検出面の標高は東半部で122.80ｍ、西半部で122.50ｍであった。したがって、西半部の残存状況は非



第104図　ＳＩ28平面図・土層断面図（1/60）

常に悪い。当該調査では、竪穴住居の約８割程度を調査することができた。竪穴住居は、さらに調査区外へと続いている。

掘形は、2.5Ｙ５／６黄褐色細砂の地山面を基盤として検出された。床面は、掘形底部をそのまま使用しており、壁溝、が検出されている。床面は、近世の遺構や、比較的大きな攪乱によって破壊されていた場所が多かった。

壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.6～1.0m、深さ0.12mで巡っていた。

２．遺物（第102・103図、図版57・98）

当該竪穴住居からは、土器（304・305）、石器（306）が出土している。これらは竪穴住

居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。304は甕Aの小片である。口縁端部は、面取りを行っている。外面はミガキで仕上げている。305は台付鉢の小片である。306はサヌカイト製の有茎式石鏃である。当該住居から出土した遺物は少ないが、304等は、Ⅲ～Ⅳ様式の特徴を呈している。

3．まとめ

当該竪穴住居は、出土遺物が少ない。Ⅲ～Ⅳ様式を中心に存続していたと考えられる。掘形の規模は、直径5.8mであり、円形の平面を呈する。床面からは、壁溝が検出できた。主柱穴配列の構造を復元するには至らなかった。

〔ＳＩ29〕

1．遺構（第106図、図版21）

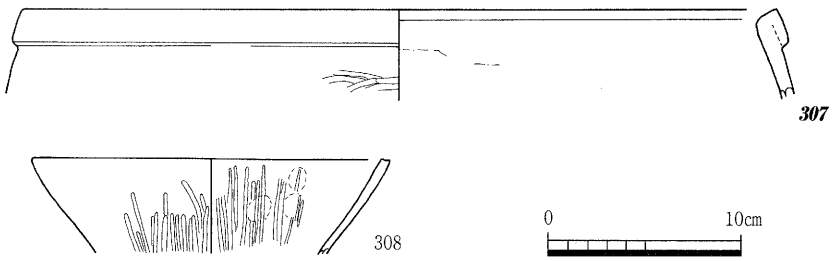
Ｌ－ｈ５区を中心に位置する、竪穴住居である。周囲には西方向10mにＳＩ28が位置している。周囲は後世の造成による削平を大きく受けており、弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、地山層もかなりの削平を受けているとみられる。周囲の遺構の残存状況をみると、西に位置するものほど遺構の残りが良い傾向がある。したがって、当初は、緩やかな西向きの斜面地であったものが水平に造成されたと推定できる。

平面形は円形を呈しており、掘形の直径は６mであった。削平は、床面下まで及んでおり、壁溝や炉の検出によって当該遺構が竪穴住居であることを認識できた。検出面の標高は123.20mであった。当該調査では、約８割程度を調査することができたが、遺構は、さらに調査区外へと続いている。

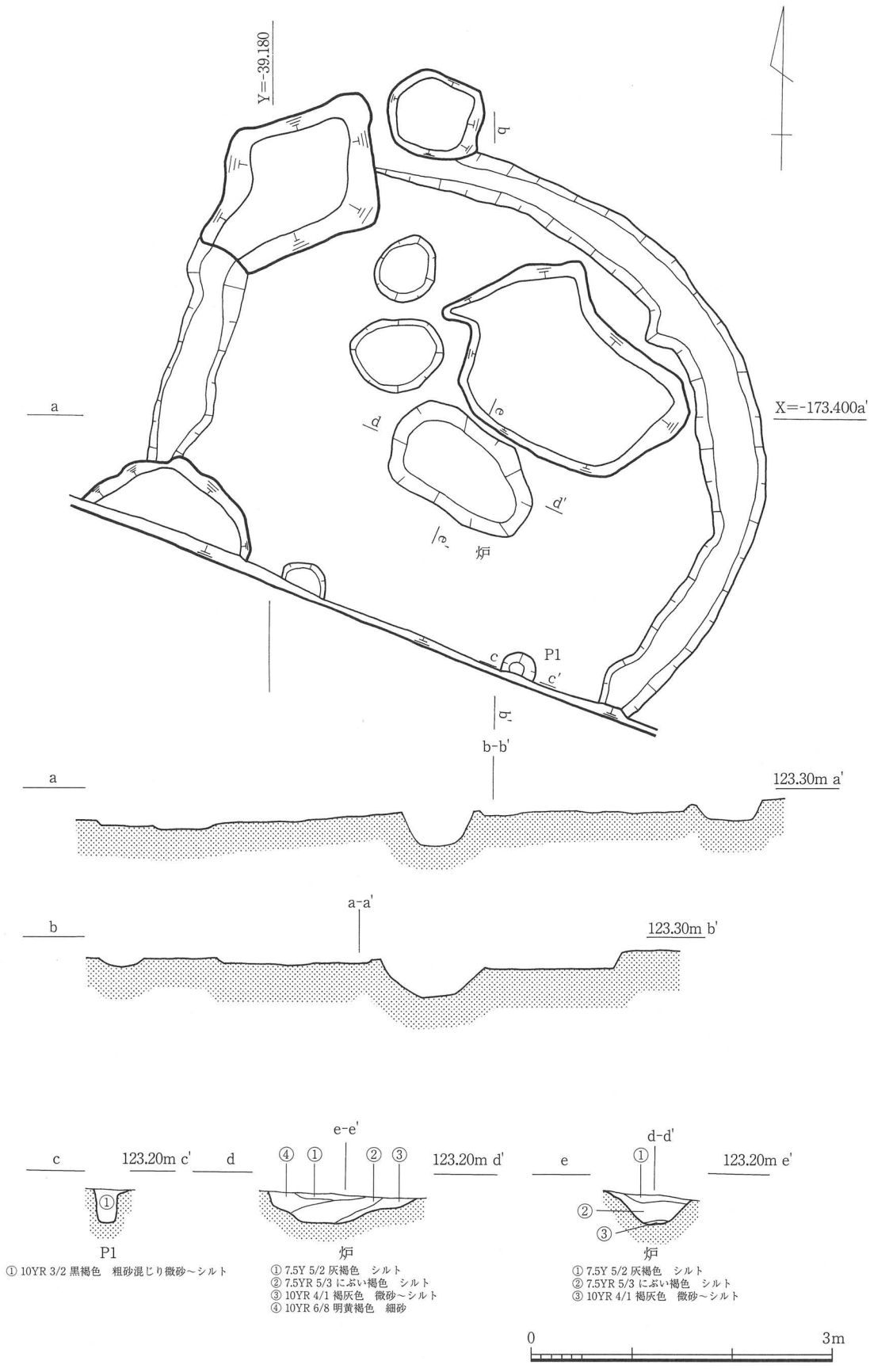
掘形は、2.5Y5/6黄褐色細砂の地山面を基盤として検出された。床面の直径は、4.8mであり、壁溝、ピット、柱穴、炉が検出されている。なお床面には、３ヶ所で攪乱が認められた。

壁溝は、本来、竪穴住居の壁に沿っていたものと推定でき幅0.3～0.6m、深さ0.15～0.2mで巡っていた。

炉は、床面のほぼ中央で検出された。楕円形の平面形態を呈しており、床面からの深さは0.30mであり、底部は擂鉢状を呈している。炉の埋土には、通有にみられる炭化物層がなく、褐灰色系の土で構成されていた。炉の掘形には、被熱の跡がみられなかった。



第105図　ＳＩ29出土土器



第106図　ＳＩ29平面図・土層断面図（1/60）

ピットは４箇所が検出された。これらのすべてが竪穴住居に伴う確証はない。この内、Ｐ１は、その規模から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径約0.35m、床面からの深さは0.33mであった。当該竪穴住居は、全体が調査できておらず、床面に攪乱が多かったこと等から主柱穴の配列を復元することはできなかった。

２．遺物（第105図、図版57）

当該竪穴住居からは、土器（307・308）が出土している。307は甕Ｃの口縁部である。口縁端部は肥厚している。壁溝から出土した。308は鉢Ａの細片である。Ｐ１から出土した。当該竪穴住居から出土した遺物は、307等の特徴からⅣ－３～４様式のものといえる。

３．まとめ

当該竪穴住居は、直径が６mと比較的小型である。削平が著しく、また床面上に穿たれた攪乱によって得ることができた情報は限られた。Ⅳ－３～４様式を中心に機能していたと推定する。

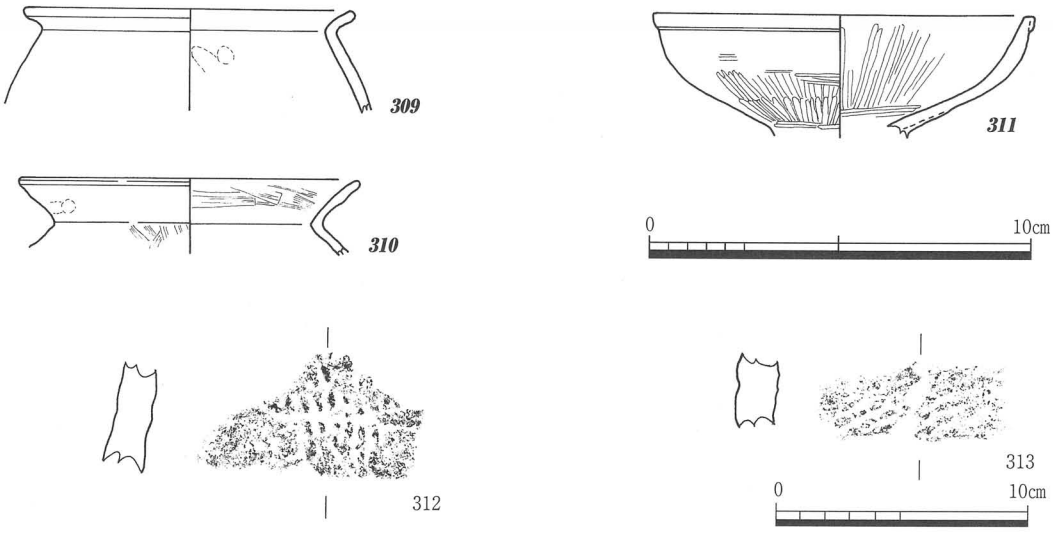
〔ＳＩ30〕

１．遺構（第108図、図版22・23）

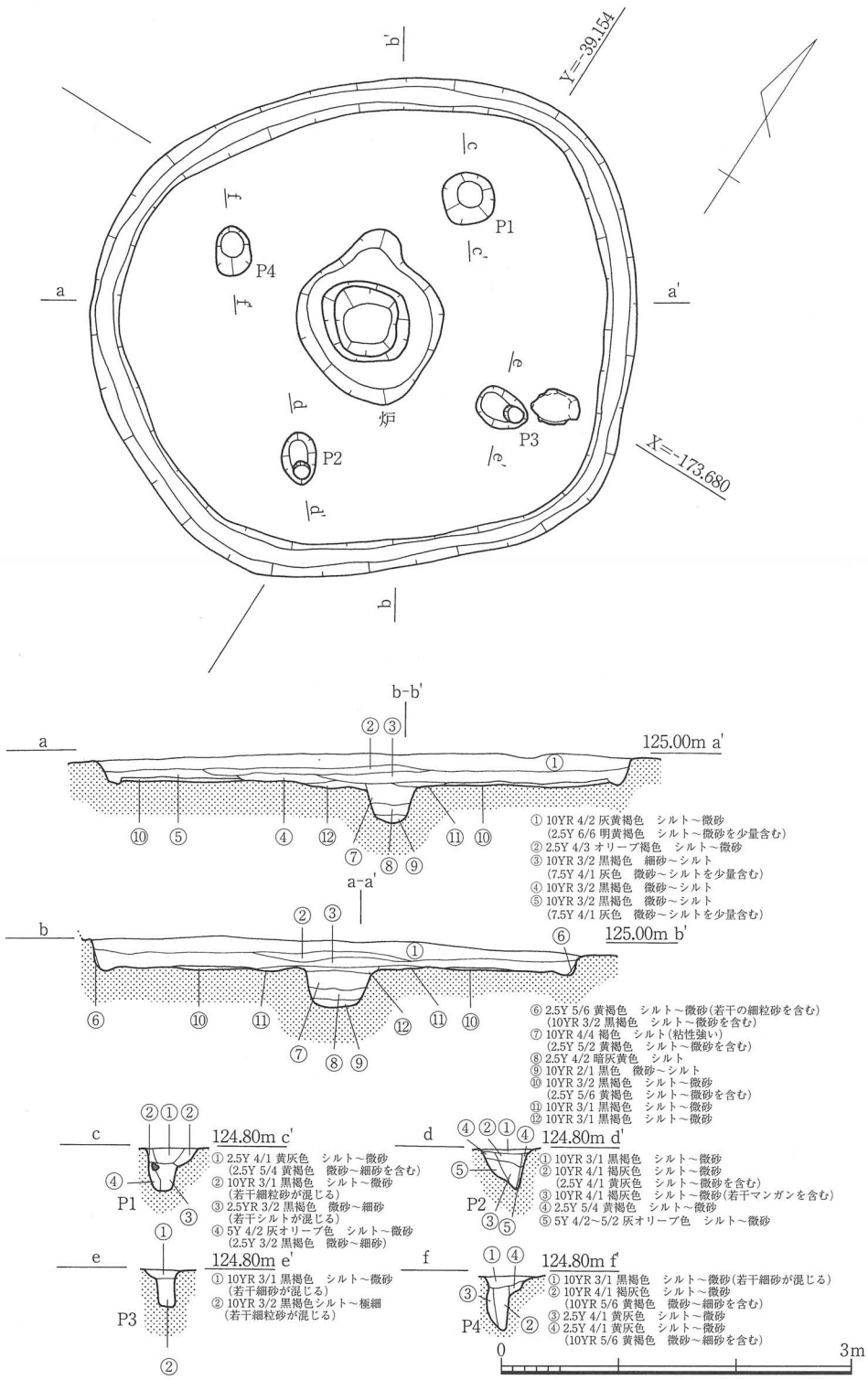
Ｇ－ｆ８・Ｇ－ｆ９区を中心に位置する竪穴住居である。周囲には、弥生時代の遺構は存在せず、孤立した位置にある。もっとも近い位置にある弥生時代住居は、ＳＩ25である。

東方向は丘陵部となっており、ＳＩ30付近が居住域の東端に相当すると考えられる。造成の影響を受けており、上面にあったと思われる弥生時代の遺物包含層は完全に削平されていた。

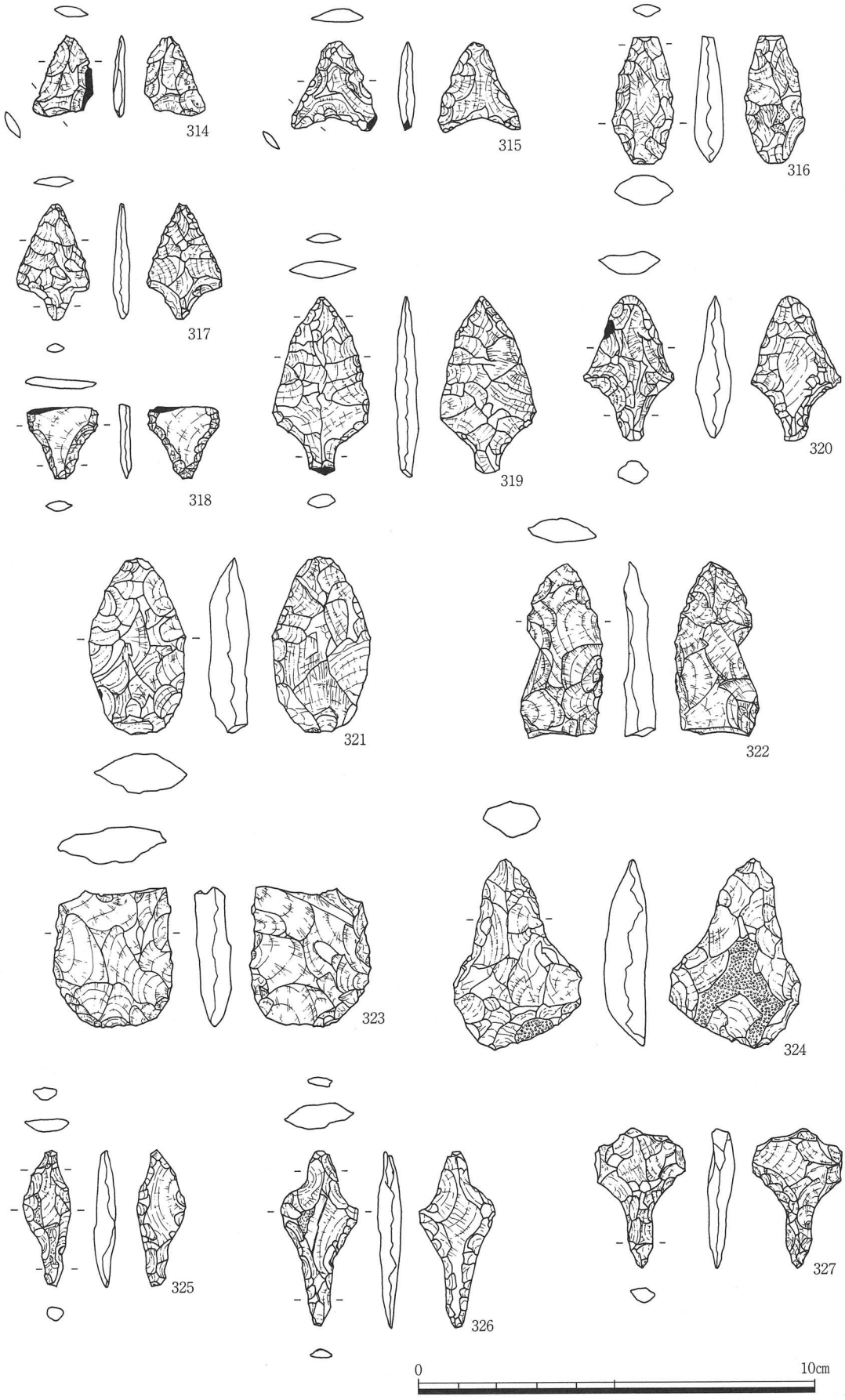
ＳＩ30の平面形は円形を呈しており、掘形の直径は4.72m、床面から、覆土上面までの



第107図　ＳＩ30出土土器



第108図　ＳＩ30平面図・土層断面図（1/60）



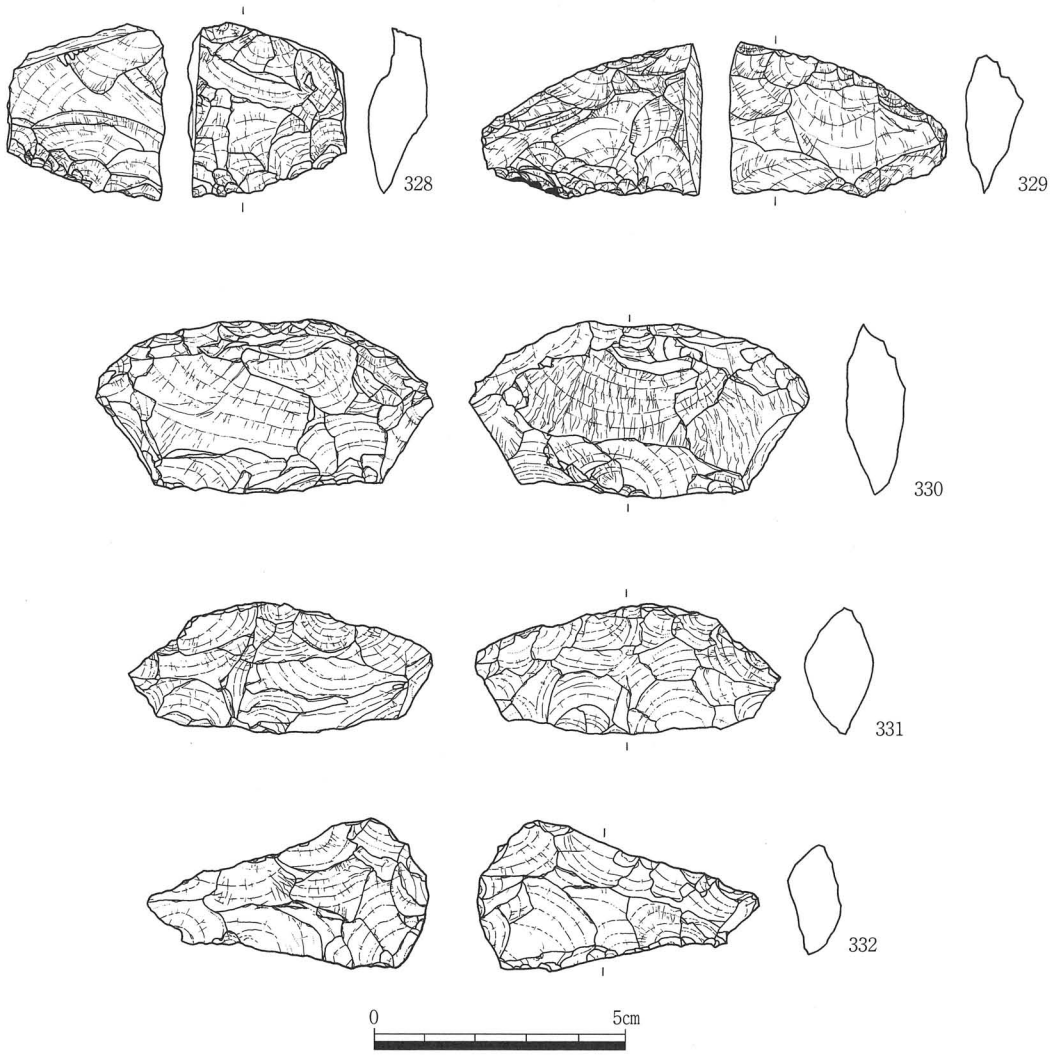
第109図　ＳＩ30出土石器①

高さは0.25mであった。検出は地山面で行い、検出面の標高は124.90mであった。当該竪穴住居の調査では全体を調査することができた。

掘形は、10ＹＲ8/8黄橙色微砂～シルトの地山面を基盤として検出した。竪穴住居の覆土が10ＹＲ4/2灰黄褐色シルト～微砂であったため、極めて明瞭に検出することができた。掘形法面の勾配はきつく、全体として約80度～85度であった。掘形底面はかなり凹凸が認められた。覆土（①層から⑥層）は、周囲に形成された弥生時代の遺物包含層に起因すると考えられ、他の時期の遺物は含まれていない。覆土には大量のサヌカイトの薄片が含まれていた。その量は、762.5ｇに達する。覆土は、ほぼ水平に堆積していた。

床面は、地山層を掘り込んだ後、⑩層（10ＹＲ3/2黒褐色シルト～微砂）を置土することによって貼床が形成されている。置土には地山層に起因する2.5Ｙ5/6黄褐色シルト～微砂のブロックが含まれていた。床面の直径は、4.2mあり、壁溝、ピット、柱穴、炉が検出されている。また、床面上からは、炉を中心として薄い炭化物の層が検出された。

壁溝は、掘形に沿って、検出され、完周していた。幅0.2m、深さ0.1～0.15mであった。



第110図　ＳＩ30出土石器②

第111図　ＳＩ30出土石器③

第112図　ＳＩ30出土石器④

炉は、床面のほぼ中央で検出された。不整円形の平面形態を呈しているが、北側に突出部がある。床面からの深さは0.35ｍであり、２段に掘削されていた。炉は、黒褐色系の炭化物層と地山層に起因する黄褐色シルト～微砂のブロックを含んだ層が交互に繰り返し堆積していた。炉掘形に被熱した痕跡は認められなかった。

排水溝は、検出されなかった。当該竪穴住居が比較的標高の高い場所に立地していることに関係する可能性が指摘できる。

床面からピットは４箇所検出された。すべてが竪穴住居に伴うと考えられ、その規模からすべてが主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径が0.43ｍ、床面からの深さは0.39ｍであった。柱痕跡が確認でき、直径は0.15ｍであった。Ｐ２は、直径が0.47ｍ、床面からの深さは0.35ｍであった。柱痕跡が確認でき、直径は0.15ｍであった。Ｐ３は、直径0.3ｍ、床面からの深さは0.33ｍであった。２段に掘られていた。Ｐ４は、直径が0.45ｍ、床面からの深さは0.45ｍであった。柱痕跡が確認でき、直径は0.15ｍであった。この他にピットは検出されなかった。これらのことから４本柱構造をもつ住居であると考えられる。建替の痕跡は認められなかった。

２．遺物（第107・109～112図、図版58・98～100・102・103）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。310～314・316・320～327・329～335は、竪穴住居の廃絶後に竪穴内に流れ込んだ覆土中に包含されていたものである。312・313は高山寺式押型文土器である。310は甕Ａであり、外面をハケで仕上げている。口縁部が長く外反し、Ｖ様式まで下る可能性がある。311は高坏Ａであり、口縁端部が肥厚している。316・320はサヌカイト製の凸基式石鏃である。314はサヌカイト製の凹基式石鏃である。321・322・324は石鏃等の未製品である。すべてサヌカイト製である。323は、サヌカイト製の石剣の一部である。325～327はサヌカイト製の石錐である。329～332はサヌカイト製の削器である。333は砂岩製の台石である。334は砂岩製の砥石である。335は砂岩製の叩石である。以上の覆土から出土した遺物は、土器からⅣ様式を中心とすると考えられる。

309は、甕Ａである。摩滅が著しいため、調整は観察できなかった。炉から出土した。317・318・319はサヌカイト製の有茎式石鏃である。炉から出土した。315はサヌカイト製の凹基式石鏃である。これらも炉から出土した。328は、削器であり壁溝から出土した。

３．まとめ

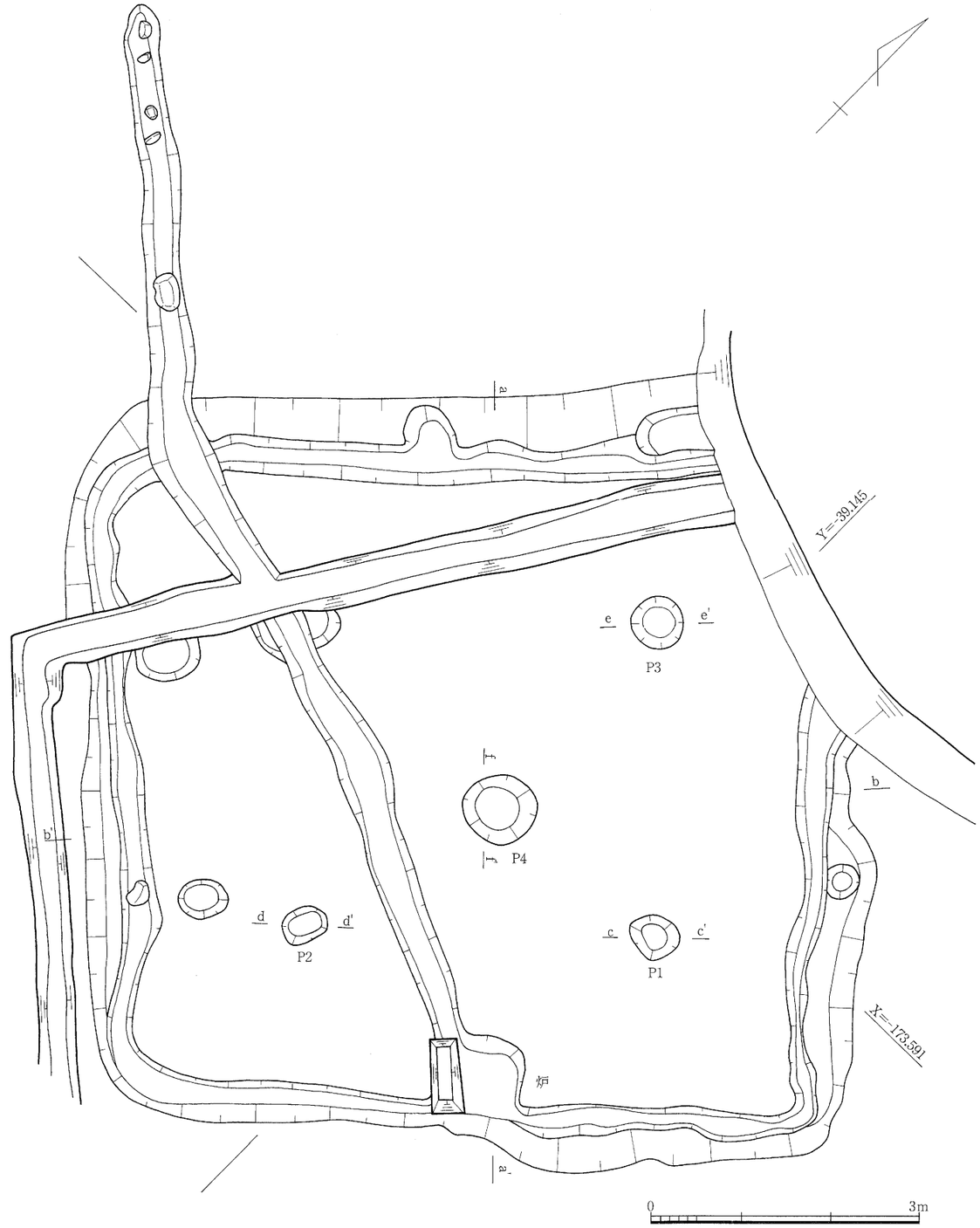
当該竪穴住居からは、Ⅳ様式の遺物が多数を占めるものの、Ｖ様式の可能性のある遺物も出土している。床面上の遺構に伴う遺物はⅣ様式のものであるため、当該時期を中心に機能していたものと考えられる。周囲には、他の竪穴住居がなく、孤立している。また、立地においても、他の竪穴住居よりも標高の高い場所に位置している。また、竪穴住居の規模も、長軸4.72m、短軸4.22mと他の竪穴住居と比較して非常に小規模である。また、掘形内に流入した覆土には、大量のサヌカイトの剥片が含まれていた。掘形内の覆土は、周囲に形成された遺物包含層に起因すると考えられ、竪穴住居が機能していた当時において、竪穴住居周囲には、サヌカイト剥片が多く散布していた状況が想定できる。このように当該竪穴住居は、規模、立地、出土遺物のいずれの面においても特殊な様相が看守できる。

〔ＳＩ31〕

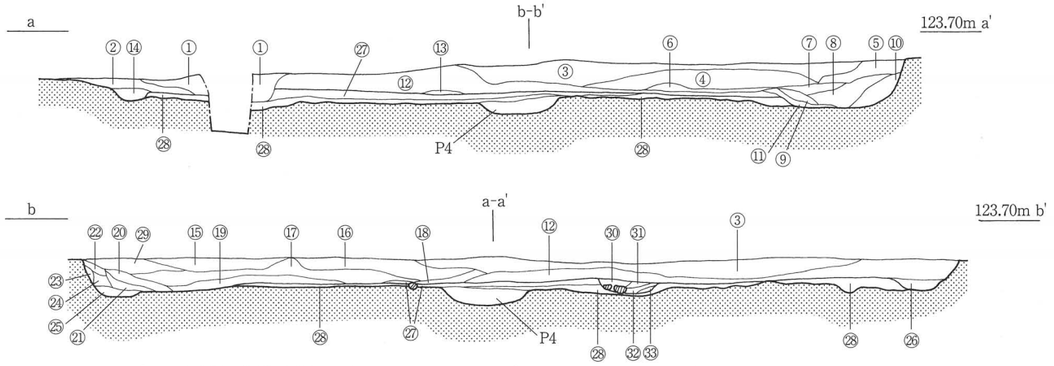
１．遺構（第113・114図、図版22）

Ｂ－ｅ９・Ｂ－ｅ10区を中心に位置する竪穴住居である。南東方向１ｍにはＳＢ３が位置している。東方向２ｍでは、落込みを検出している。遺構検出面の上層には、0.15～0.2mの厚さでＶ様式末～庄内期の遺物包含層が遺存していた。当該竪穴住居は、近現代の暗渠によって攪乱を受けている。

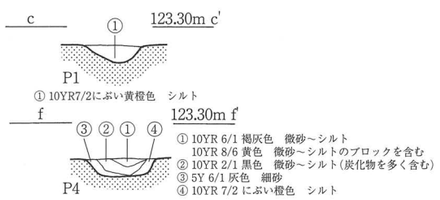
平面形は方形を呈しており、長辺8.6m、短辺8.2mであり、床面から検出面までの高さは0.23mであった。検出面の標高は123.40mであった。当該竪穴住居は、北東の一部が調査区外へ続くものの、ほぼ全体を調査することができた。



第113図　ＳＩ31平面図（1/60）

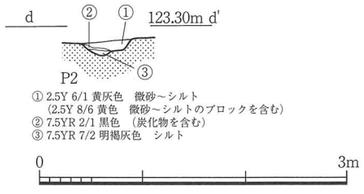


① 2.5Y 5/3 黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
② 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
③ 10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを多く含む）
④ 7.5YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む）
⑤ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
⑥ 10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを少量含む）
⑦ 2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む）
⑧ 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルトのブロックを多く含む）
⑨ 2.5Y 3/1 黒褐色　シルト混じり微砂
⑩ 10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルト
⑪ 10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルトのブロックを少量含む）
⑫ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
（10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルトと炭のブロックを含む）
⑬ 10YR 8/6 黄橙色　微砂～シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
⑭ 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト
⑮ 10YR 5/2 灰黄褐色　シルト
⑯ 10YR 5/2 灰黄褐色　シルト
⑰ 2.5Y 7/4 浅黄色　シルト混じり微砂
⑱ 2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
⑲ 2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
⑳ 2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～シルト（炭化物のブロックを含む）
㉑ 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
㉒ 2.5Y 4/4 オリーブ褐色　微砂～シルト
㉓ 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト
㉔ 2.5Y 4/4 オリーブ褐色　微砂～シルト
（2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
㉕ 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト
（2.5Y 4/4 オリーブ褐色　微砂～シルトのブロックを含む）
㉖ 10Y 7/1 灰白色　微砂～シルト
（7.5Y 5/1 灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
㉗ 10YR 2/1 黒色　微砂～シルト（炭化物を多く含む）
㉘ 10YR 8/6 黄橙色　シルト
（2.5GY 7/1 明オリーブ灰色　シルトのブロックを含む）
㉙ 10YR 8/6 黄橙色　シルト
㉚ 5Y 8/3 淡黄色　粗砂混じり微砂～シルト
（10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む）
㉛ 5Y 8/3 淡黄色　微砂～シルト
㉜ 5YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
㉝ 5Y 8/3 淡黄色　粗砂混じり微砂～シルト

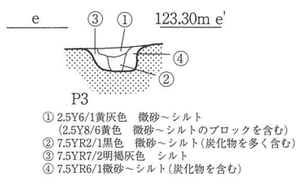


① 10YR7/2にぶい黄橙色　シルト

① 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト
10YR 8/6 黄色　微砂～シルトのブロックを含む
② 10YR 2/1 黒色　微砂～シルト（炭化物を多く含む）
③ 5Y 6/1 灰色　細砂
④ 10YR 7/2 にぶい橙色　シルト



① 2.5Y 6/1 黄灰色　微砂～シルト
（2.5Y 8/6 黄色　微砂～シルトのブロックを含む）
② 7.5YR 2/1 黒色　（炭化物を含む）
③ 7.5YR 7/2 明褐灰色　シルト



① 2.5Y6/1黄灰色　微砂～シルト
（2.5Y8/6黄色　微砂～シルトのブロックを含む）
② 7.5YR2/1黒色　微砂～シルト（炭化物を多く含む）
③ 7.5YR7/2明褐灰色　シルト
④ 7.5YR6/1微砂～シルト（炭化物を含む）

第114図　ＳＩ31土層断面図（1/60）

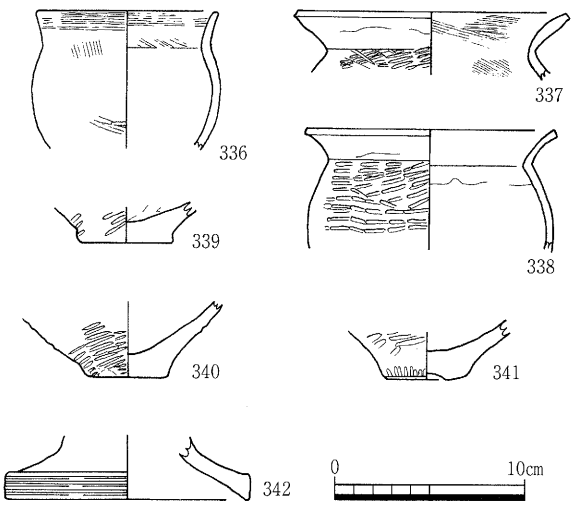
掘形は、10ＹＲ8/6黄橙色シルト～微砂の地山面を基盤として検出された。竪穴住居の覆土は、黄色～灰黄褐色系の覆土が複雑に流れ込んでいたため、検出時点で、掘形の輪郭はやや不明瞭であった。掘形法面は、約55度の勾配を持っている。覆土は周囲に形成されたＶ様式末～庄内期の遺物包含層が、流れ込んで形成されたようである。床面は、基盤層を掘り込んだ後、地山の土質に近いシルト（㉗・㉘層）を置土することによって貼床が形成されている。置土には、遺物包含層の土質に近い10ＹＲ5/1灰褐色粘土のブロックが含まれていた。床面の１辺は、短辺が7.1m長辺が7.3mであり、壁溝、ピット、柱穴、炉、排水溝、土坑が検出されている。また、床面上からは、炉を中心として薄い炭化物の層が検出された。なお、掘形底面からはＰ４が検出された。

壁溝は、竪穴住居の壁に沿って、幅0.3～0.5m、深さ0.1mで巡っていた。壁溝は、掘形法面に沿って、方形に完周しているようであった。

炉は、南東側の一辺に沿って、ほぼ中央で検出した。一辺0.8mの方形の平面形態を呈しており、床面からの深さは0.24mであり、底には、１辺が0.7mほどの平坦面がある。炉掘形には、被熱した痕跡が認められなかった。

排水溝は、炉に接続しており、北西方向に12mにわたり竪穴住居外までのびていた。排水溝底面の標高は、炉に接続している地点で123.00m、壁溝と交わっているところで122.90m、先端部で122.70mであり、排水溝としての機能を想定した場合、使用に耐えうる構造となっている。

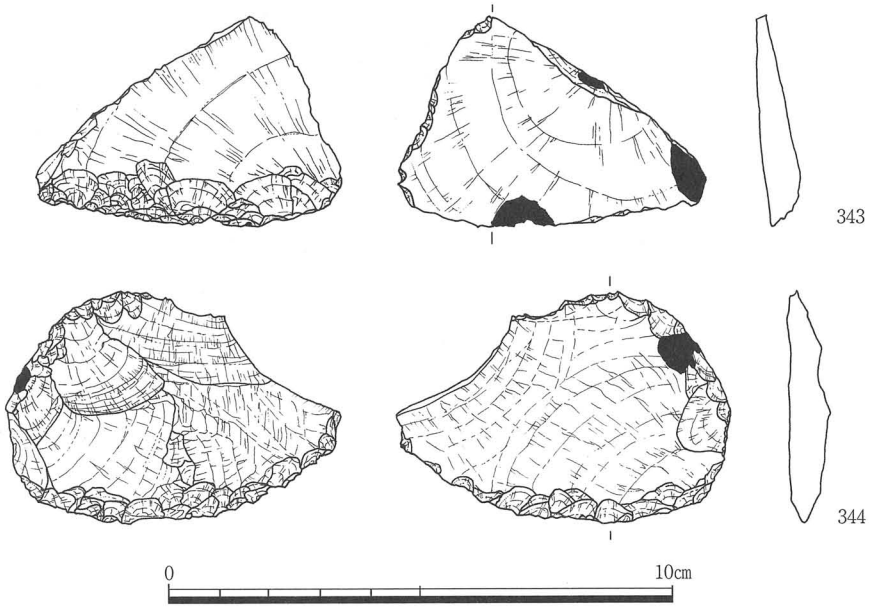
ピットは７箇所検出された。この内、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３は、その規模、配列から、主柱穴であると考えられる。Ｐ１は、直径が0.55m、床面からの深さは0.15mであった。Ｐ２は、直径が0.48m、床面からの深さは0.15mであった。Ｐ３は、直径が0.6m、床面からの深さは0.23mであった。土層断面の観察からは、柱痕跡の存在が確認でき、その直径は0.15mであった。各柱穴はいずれも浅い。各主柱穴の配置から、当該竪穴住居は、４本柱構造を復元することができ、柱間は、3.5m前後の規模をもつ。残りの１本については、近現代の暗渠によって破壊されたものと考えられる。これらの主柱穴に沿って、南西側の一辺付近に２箇所のピットが検出されている。これらは、竪穴住居の出入り口に関連する遺構である可能性がある。



第115図　ＳＩ31出土土器

２．遺物（第115・116図、図版58・99）

当該竪穴住居からは、土器、石器が出土している。338・341は甕であり、覆土から出土した。いずれもＶ様式系の甕で



第116図　ＳＩ31出土石器

あり、外面はタタキを残し、内面はハケで仕上げている。336は小型丸底壺である。覆土から出土し、ＳＤ26から出土したものと接合できた。342は高坏の脚部の小片である。覆土から出土した。344はサヌカイト製の削器である。覆土から出土した。

337・339・340はＶ様式系の甕であり、排水溝から出土した。外面は右上がりのタタキを残している。343はサヌカイト製の削器であり、排水溝から出土した。

当該竪穴住居から出土した遺物の様相をみると、Ｖ様式系の甕が出土しているが、底部は小型化しており、庄内期のものである。

３．まとめ

当該竪穴住居は、出土した土器や、周辺に形成された遺物包含層の様相を勘案すると、庄内期のものと考えられる。また、当該竪穴住居が方形の平面プランであることは、このことを査証している。他のⅣ様式の竪穴住居とは離れた場所から検出されており、周辺は調査を行っていないことから、庄内期の遺構の広がりについては不明である。４本柱構造であり、炉は壁体に沿って検出されている。円形プランで、中央部に炉を有する他のⅣ様式の住居とは、構造上の大きな違いが指摘できる。

（２）掘立柱建物

〔ＳＢ１〕（第118図、図版23）

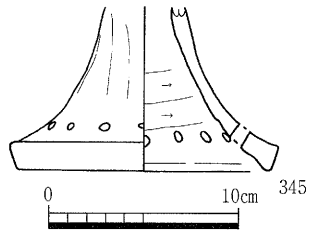
Ｍ－ｂ２区、Ｍ－ｂ３区にまたがって位置する堀立柱建物である。梁間１間、桁行３間以上の建物と推定される。梁間の長さは2.08m、桁行の長さは2.32m以上で、主軸は、Ｎ－27°－Ｅである。検出面の標高は122.50mである。柱穴掘形は円形で、直径は0.3m前後である。遺物はまったく出土しなかったが、掘形埋土が、弥生時代の遺構の埋土と近いことから、弥生時代に帰属する遺構と考えられる。

〔ＳＢ２〕（第117・119図、図版24・50）

Ｈ－ａ７区に位置する堀立柱建物である。周囲を見渡せる比較的小高い場所に立地しており、周囲に他の建物跡は少ない、また、東に隣接して、小型のピットと直交する溝によって構成される特殊な遺構が位地している。

梁間１間、桁行４間の建物と推定される。梁間の長さは4.35m、桁行の長さは6.8mで、主軸は、Ｎ－２°－Ｅである。検出面の標高は122.70mである。柱穴掘形は円形で、直径は0.5m前後である。

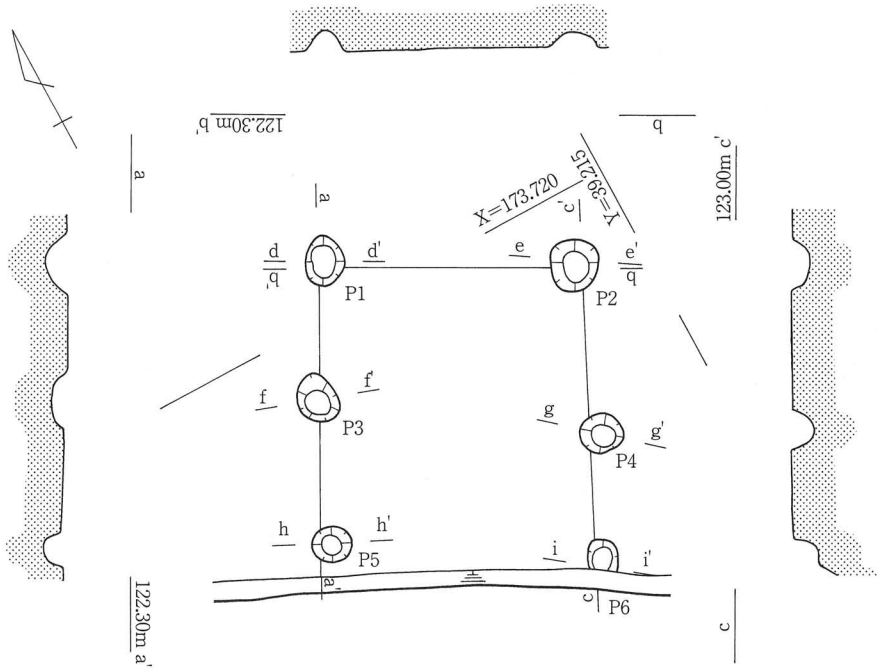
遺物は、Ｐ２から、高坏の脚部（345）が出土している。円形の透が穿たれている。他の柱穴の埋土は、Ｐ２の埋土と同質であり、周辺の近世の遺構の埋土とは明確に区別することができた。

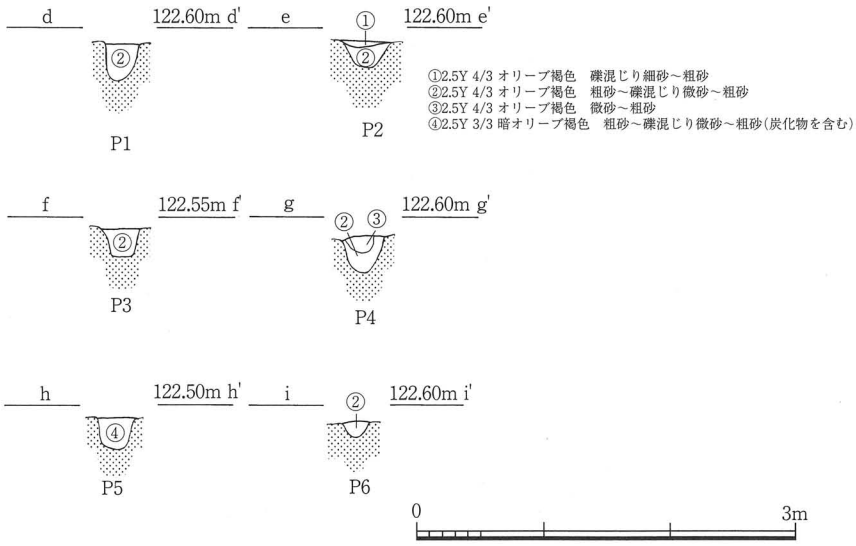


第117図
ＳＢ２出土土器

〔ＳＢ３〕（第120図、図版23）

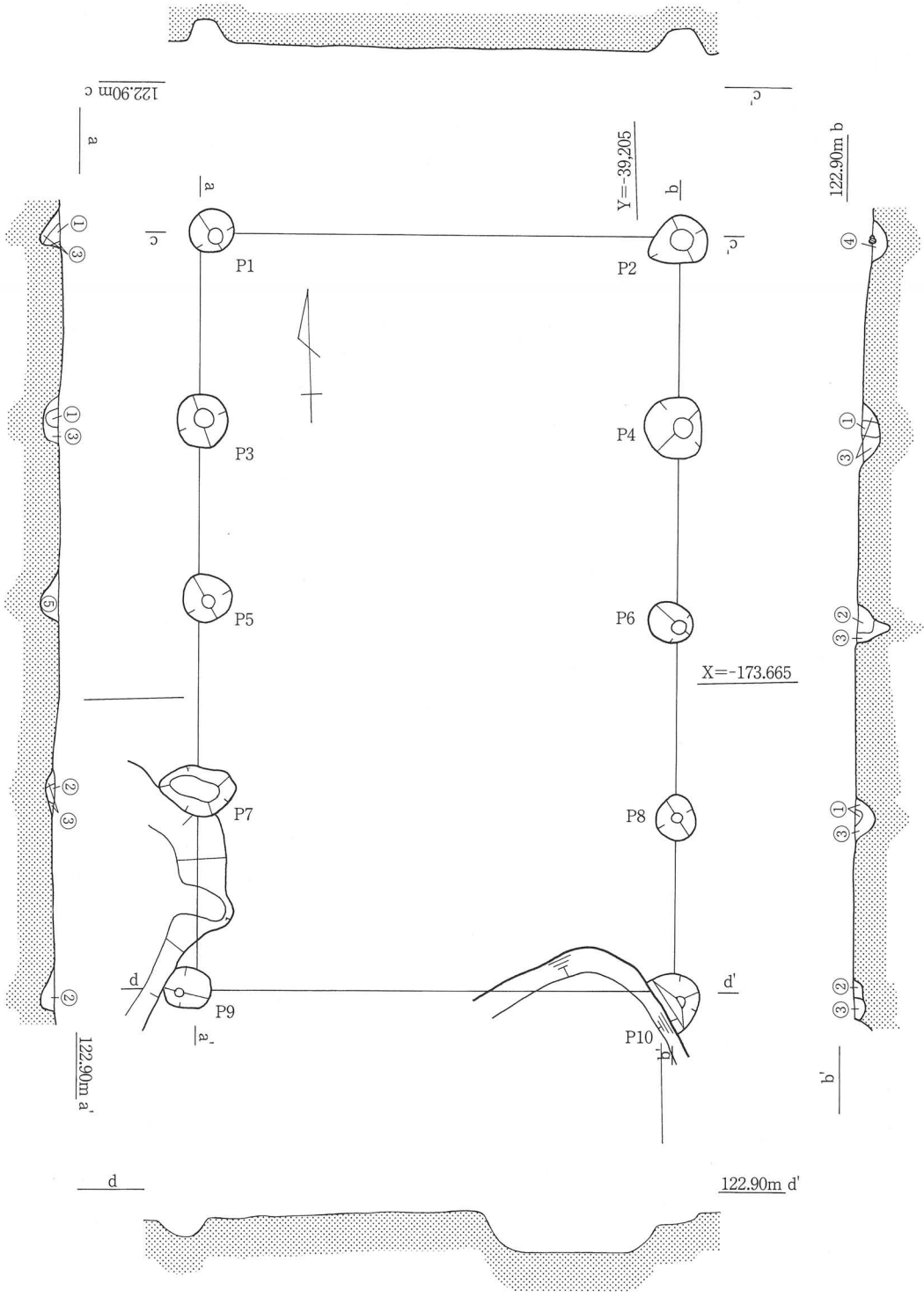
Ｍ－ｂ２区、Ｍ－ｂ３区にまたがって位置する堀立柱建物である。北西方向には、隣接してＳＩ31が位置している。梁間２間、桁行２間の総柱建物と推定される。梁間の長さは2.64m、桁行の長さは3.76mで、主軸は、Ｎ－57°－Ｗである。検出面の標高は123.15mである。柱穴掘形は円形で、直径は0.5m前後である。遺物はまったく出土しなかったが、周囲に形成された遺物包含層や周囲の遺構がすべてＶ様式末～庄内期のものであることから、ＳＢ３の帰属時期はＶ様式末～庄内期と考えられる。



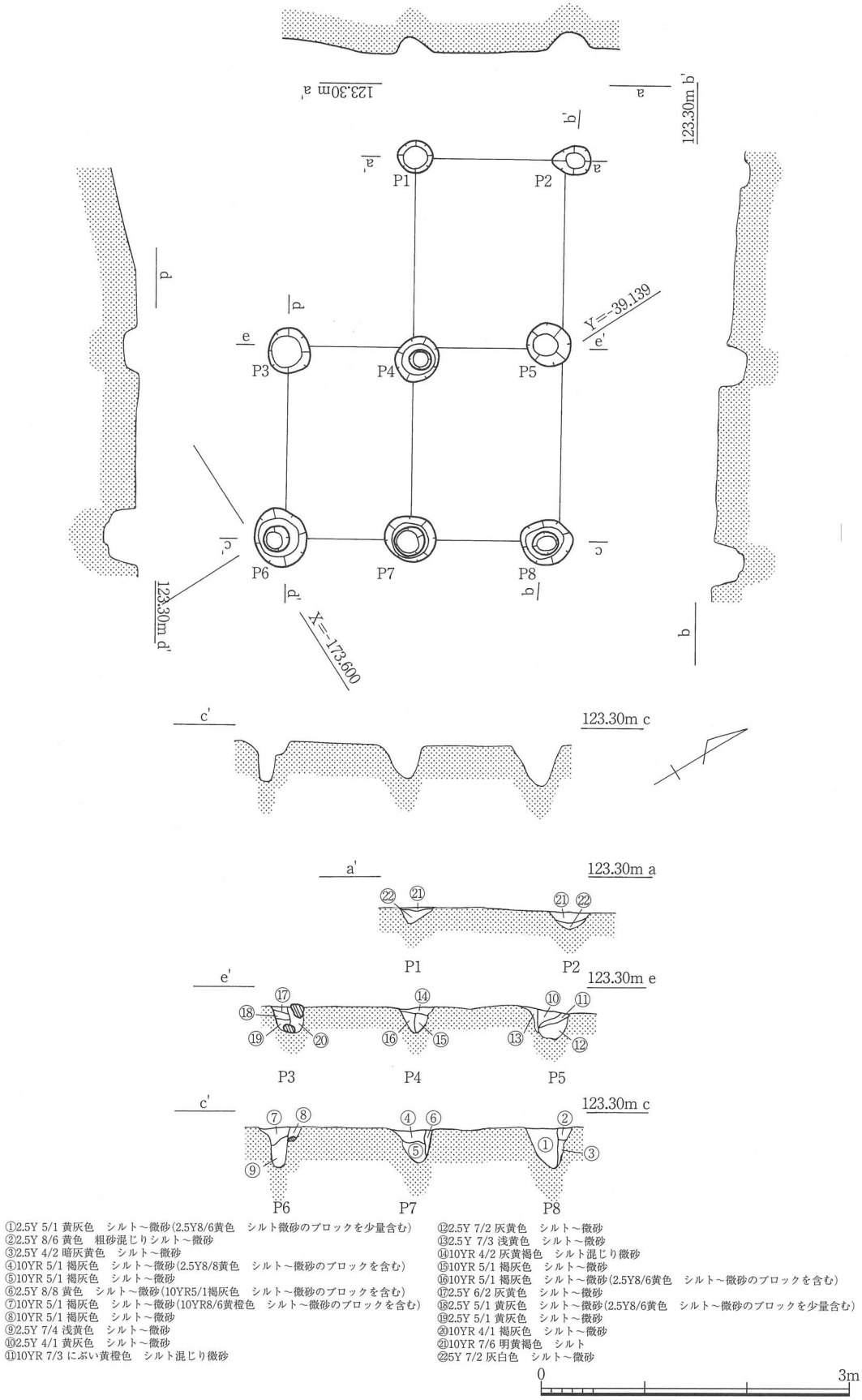


①2.5Y 4/3 オリーブ褐色　礫混じり細砂～粗砂
②2.5Y 4/3 オリーブ褐色　粗砂～礫混じり微砂～粗砂
③2.5Y 4/3 オリーブ褐色　微砂～粗砂
④2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色　粗砂～礫混じり微砂～粗砂(炭化物を含む)

第118図　ＳＢ１平面図・土層断面図（1/60）



第119図　ＳＢ２平面図・土層断面図（1/60）



①2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂(2.5Y8/6黄色　シルト微砂のブロックを少量含む)
②2.5Y 8/6 黄色　粗砂混じりシルト～微砂
③2.5Y 4/2 暗灰黄色　シルト～微砂
④10YR 5/1 褐灰色　シルト～微砂(2.5Y8/8黄色　シルト～微砂のブロックを含む)
⑤10YR 5/1 褐灰色　シルト～微砂
⑥2.5Y 8/8 黄色　シルト～微砂(10YR5/1褐灰色　シルト～微砂のブロックを含む)
⑦10YR 5/1 褐灰色　シルト～微砂(10YR8/6黄橙色　シルト～微砂のブロックを含む)
⑧10YR 5/1 褐灰色　シルト～微砂
⑨2.5Y 7/4 浅黄色　シルト～微砂
⑩2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂
⑪10YR 7/3 にぶい黄橙色　シルト混じり微砂
⑫2.5Y 7/2 灰黄色　シルト～微砂
⑬2.5Y 7/3 浅黄色　シルト～微砂
⑭10YR 4/2 灰黄褐色　シルト混じり微砂
⑮10YR 5/1 褐灰色　シルト～微砂
⑯10YR 5/1 褐灰色　シルト～微砂(2.5Y8/6黄色　シルト～微砂のブロックを含む)
⑰2.5Y 6/2 灰黄色　シルト～微砂
⑱2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂(2.5Y8/6黄色　シルト～微砂のブロックを少量含む)
⑲2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂
⑳10YR 4/1 褐灰色　シルト～微砂
㉑10YR 7/6 明黄褐色　シルト
㉒5Y 7/2 灰白色　シルト～微砂

0　3m

第120図　ＳＢ３平面図・土層断面図（1/60）

（3）　溝

当該調査で検出できた溝は、大きく５つのグループに分けることができる。これを溝１群～５群とする。溝１群は、調査区の西端に位置する。より西には、段丘崖１が南北方向にはしっており、段丘崖１の下面には集落が広がらないことが確認されているので、溝１群は集落の西端に位置していることになる。ＳＤ１～ＳＤ４までが含まれ、比較的大きな溝で構成されており、集落域を区画する機能があったことが想定できる。溝２群（ＳＤ５～ＳＤ11）は、段丘崖２下面に広がる竪穴住居群（ＳＩ１～ＳＩ９）内で検出された溝である。比較的小型の溝によって構成され、竪穴住居群の機能に関係する可能性が指摘できる。溝３群（ＳＤ12～ＳＤ19）は、段丘崖２上面の竪穴住居群（ＳＩ10～ＳＩ29）内で検出されたものである。溝３群では、Ｈ－ｃ６区を中心に小規模に方形区画を巡るような溝が多数検出されている。溝４群（ＳＤ20・ＳＤ21）は、段丘崖２上面の竪穴住居群の東南端に位置する２条の比較的大きな溝である。この溝４群の外側にも竪穴住居が位置するものの、これらも集落域を区画する機能があったものと考えられる。溝５群（ＳＤ24～ＳＤ26）は、調査区北東端で検出された庄内期の小規模な溝群である。おもに竪穴住居の周辺で検出されている。

なお、出土遺物については、大部分が土器であったため、土器は、遺構ごとにまとめて図示し、石器については各溝から出土したものを最後に一括して図示している。

〔ＳＤ１〕（第121～124・163・164図、図版25・58・59・99）

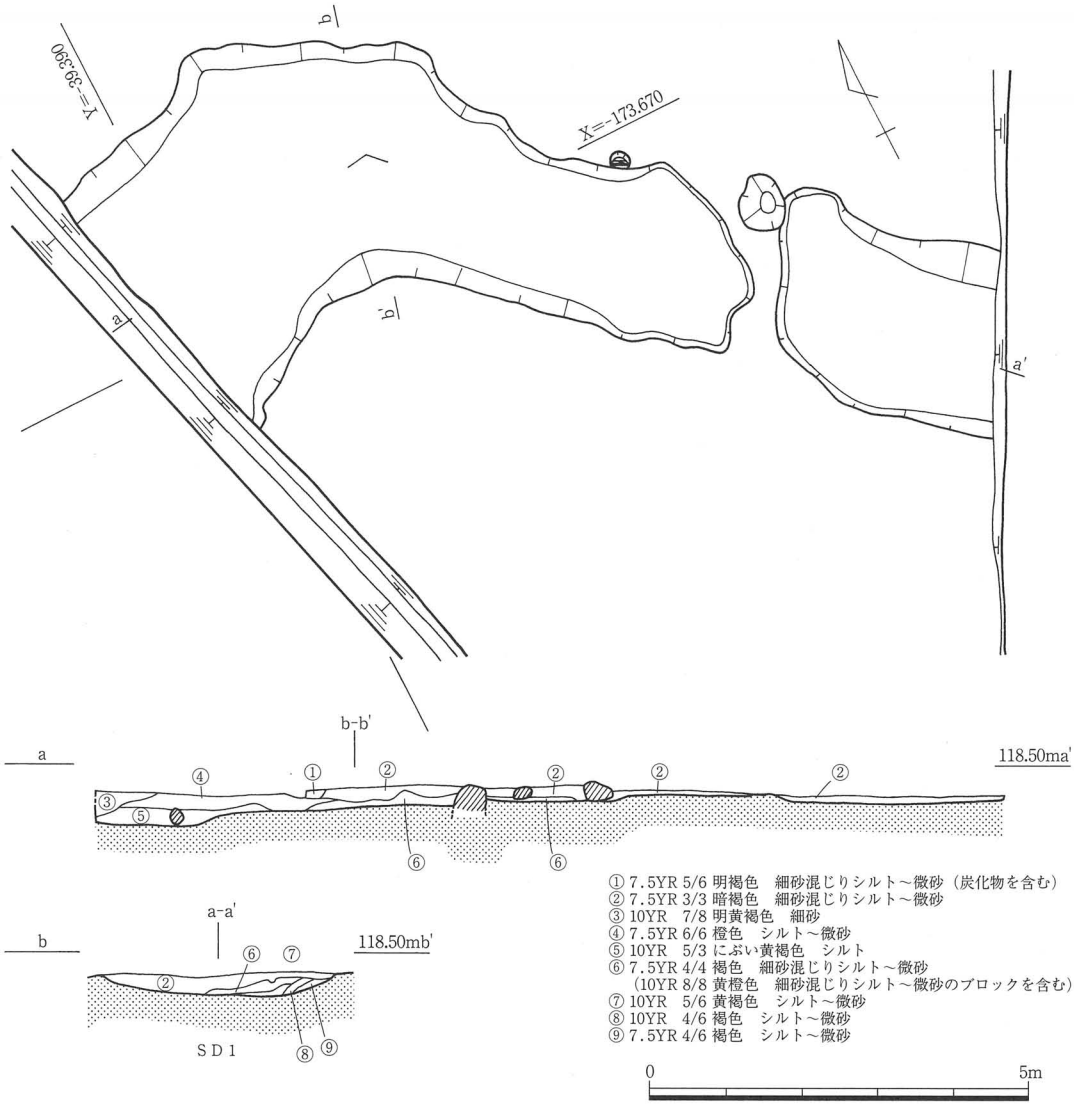
１．遺構

Ｉ－ｈ８区からＩ－ｉ８区にかけて検出された溝である。調査区の西端に位置している。すぐ西側には段丘崖１が南北方向にはしっており、段丘崖１の下面は、遺構が存在しないことが確認されているので、この溝は集落の西端に位置していることになる。平面形態をみると、東方向から南方向に屈曲し、段丘崖１に接続しているようである。上層に弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、上部は大幅に削平を受けているとみられる。検出面の標高は118.00～118.10ｍである。規模は幅2.03ｍ、深さ0.2～0.3ｍであり、長さ12ｍにわたり検出した。今回の調査で、検出された溝の中では、規模が大きいといえる。検出面から溝底までの深さをみると、検出した範囲の中央部は浅く、両端に向かって深くなっている。溝内には、褐色系シルトが堆積していた。埋土の各層には、土器の細片が比較的均等に含まれていた。溝底には、シルト～微砂が主に堆積しており、調査した範囲では流水があった跡はみられず、南側から、土が流れこんだような状況が認められた。

２．遺物

遺物は比較的細かい破片となった状態で、埋土に混じって出土している。

当該遺構からは、広口壺Ａ（348・349）、広口壺Ｂ（346・347）、細頸壺（352・353）、



第121図　ＳＤ１平面図・土層断面図（1/100）

水差（351）、甕Ａ（354～361）、甕Ｂ（362）、鉢Ｂ（365）、縄文土器（366～368）、搬入品の直口壺（350）、石鏃（602）等が出土している。

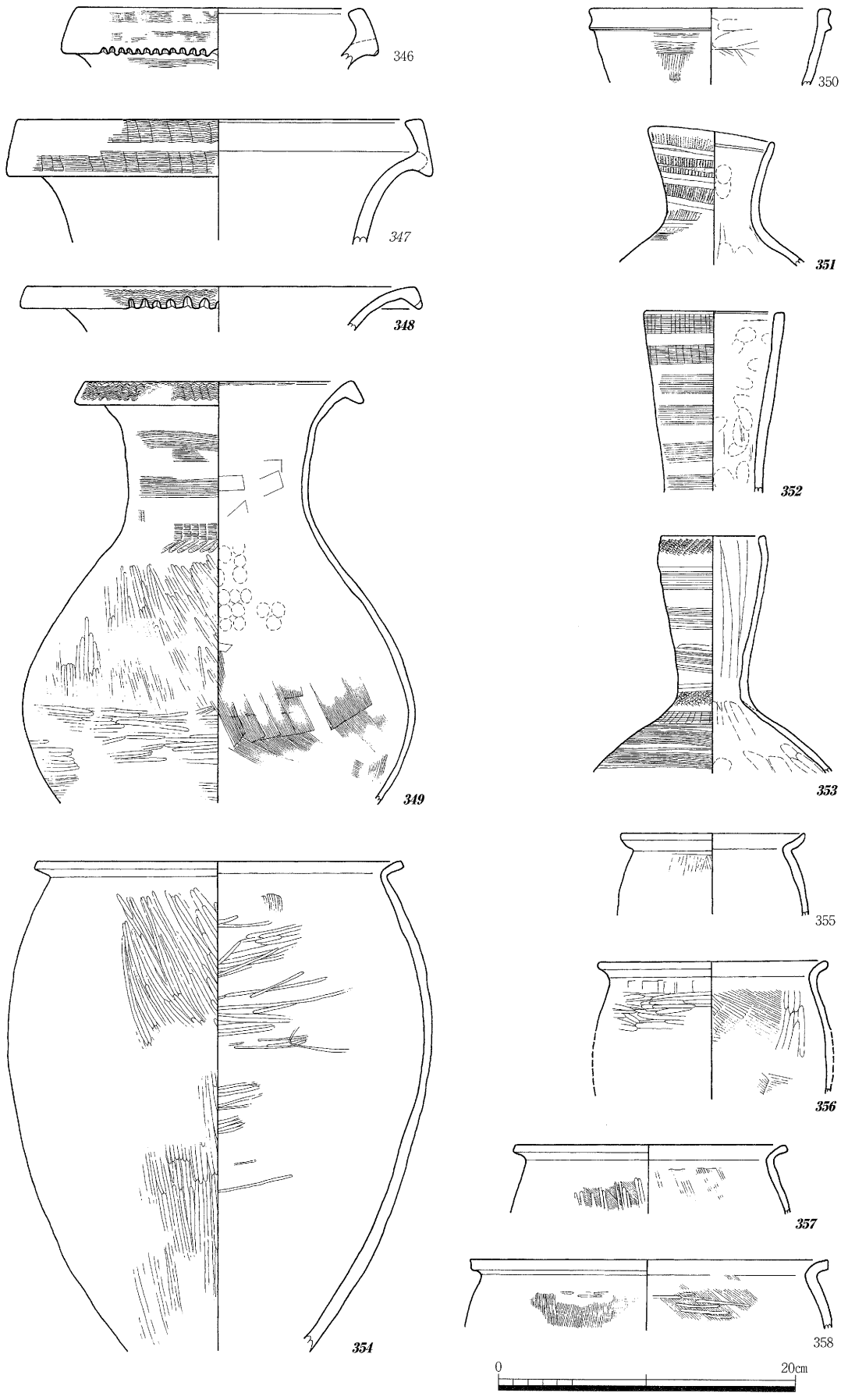
348・349は広口壺Ａである。348は、口縁端部を下方向外側に拡張している。口縁端部には波状文を施文し、端部下端には刻目を加える。349は広口壺Ａ１である。体部は中ほどに最大径を持つ。頸部は筒状を呈し、体部から頸部は緩やかに移行する。口縁端部を下方向外側に拡張しており、外面には波状文を施文する。頸部には直線文、簾状文、列点文を施文している。広口壺Ｂには、Ｂ１とＢ２がある。347はＢ１である。上方向に拡張した口縁端部は、やや内傾する。下方向への拡張は顕著ではない。口縁端部外面には波打った稚拙な簾状文を施文している。346は広口壺Ｂ２である。上方向に拡張した口縁端部は、短く立ち上がっている。外面には波状文、直線文を施文し、口縁端部下端には刻目を加える。細頸壺には口縁部まで直立するもの（352）と、口縁部付近で内側に屈曲するもの

第122図　ＳＤ１遺物出土状況図（1/50）

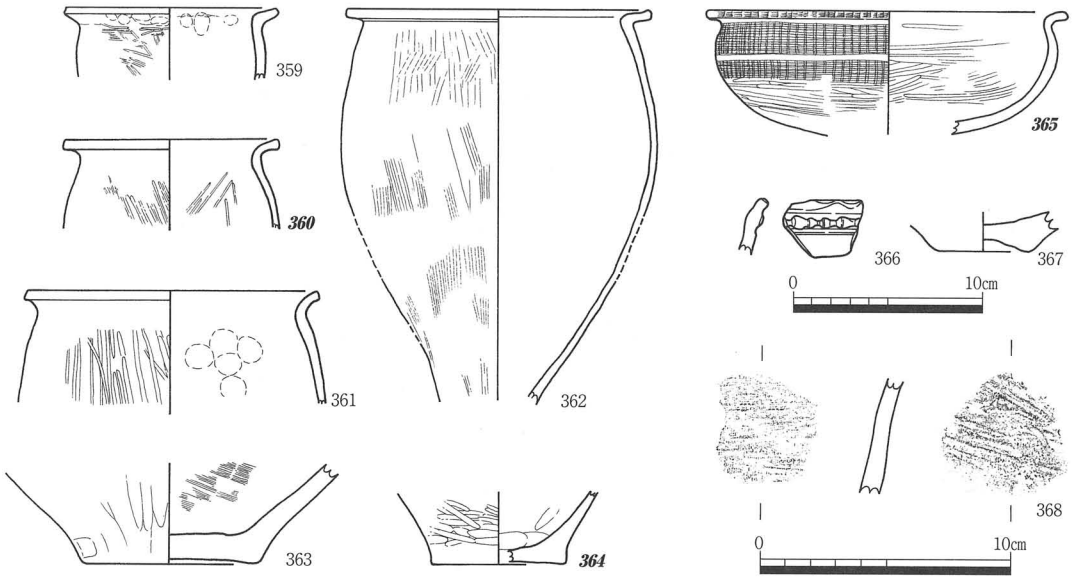
（353）がある。外面には、352が簾状文と直線文を、353が列点文と直線文、簾状文を施文している。350は直口壺である。口縁部外面に突帯を貼り付けている。紀伊からの搬入品と考えられる。

351は水差である。頸部から体部には列点文を施し、その上から横方向のミガキを施して列点文の一部を消している。

354～361は甕Ａである。頸部がくの字状に屈曲するもの（354～358）と、緩やかに外反するもの（360・361）がある。354は外面に縦方向のミガキ、内面には横方向のミガキを施す。355の口縁部は内湾する。外面には粗いハケを施す。356は、外面にケズリを頸部付近まで施した後、横方向のミガキを施している。357は外面にハケを施した後、疎らに縦方向のミガキを施している。358の器壁はやや厚くなっている。内外面に細かいハケを施し、内面にはさらに横方向のミガキを加えている。359は、頸部のしまりのない釣鐘状の形態を呈するものと考えられる。口縁部を接合した際の指押さえの痕跡が、口縁部内外面に顕著に残る。360の頸部は緩やかに外反し、口縁端部は面をもつ。361はやや幅の広い縦方向のミガキを疎らに施している。362は甕Ｂである。頸部は逆Ｌ字状を呈する。口縁端部の上下方向への拡張傾向はほとんどなく、口縁端部上面がわずかに窪む程度である。外面には粗いハケを施した後、下半部にミガキを施している。363・364は甕の底部である。



第123図　ＳＤ１出土土器①



第124図　ＳＤ１出土土器②

363は外面に幅の広い縦方向のミガキを施す。364は外面に横方向から斜め方向のミガキを施している。

365は鉢Ｂである。口縁部を外折し、口縁端部には面を持つ。口縁端部と体部には簾状文を施文している。

366は縄文土器深鉢の口縁部である。口縁端部と突帯に刻目を施している。縄文時代晩期の滋賀里Ⅳ式に比定される。367は縄文土器深鉢の底部である。上げ底を呈する。後期後葉から晩期中葉の所産であると考えられる。368は縄文土器深鉢の体部片である。外面はケズリの上からミガキを施しており、内面は下部に板ナデ、上部にナデを施している。

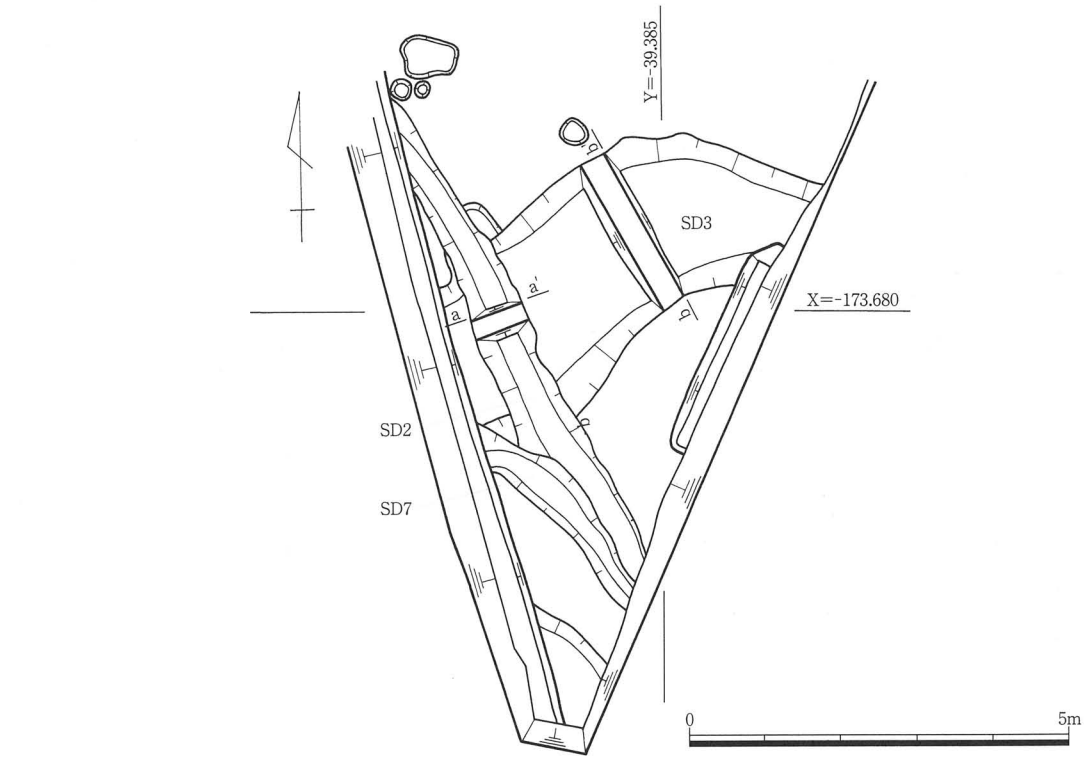
602はサヌカイト製の凸基式石鏃である。基部を欠損している。612は不明石製品で砂岩製である。

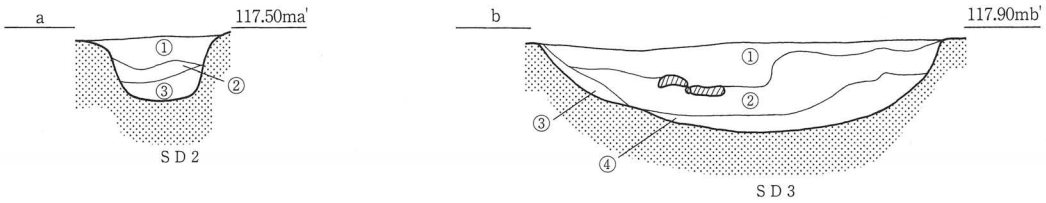
当該遺構出土の土器は、縄文土器を含むものの、他はⅢ－２様式～Ⅳ－１様式に位置づけられる。

〔ＳＤ２〕（第125・126図、図版26）

１．遺構

Ｉ－ｉ９区に位置する溝である。後述するＳＤ３の埋没後に掘削されている。ＳＤ１の西南にあり、集落の西端に位置しており、段丘崖１とは並行して掘削されているようである。南北に直線的に掘られており、底面は北方向に向かって傾斜していた。上層に弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、上部は大幅に削平を受けているとみられる。検出面の標高は117.40～117.80ｍである。規模は幅0.44～0.82ｍ、深さ0.35ｍであり、長さ6.5ｍにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈しており、本来、幅に対して深さのある溝であったと推定される。埋土は、褐色系のシルトであった。各層にはブロックを含んだ土がおおむね水平に堆積していることから、人為的に埋められた可能性が指摘できる。





① 10YR 4/1 褐灰色　シルト～微砂混じりシルト
② 10YR 4/1 褐灰色　シルト～微砂混じりシルト
(10YR 8/8 黄橙色　シルトのブロックを多く含む)
③ 10YR 4/1 褐灰色　シルト～微砂混じりシルト
(10YR 8/8 黄橙色　シルトのブロックを少量含む)

① 10YR 5/4 にぶい黄褐色　シルト～微砂
② 10YR 4/1 褐灰色　シルト～微砂混じりシルト
③ 10YR 5/1 褐灰色　シルト～微砂混じりシルト
④ 10YR 4/1 褐灰色　シルト～微砂混じりシルト
(10YR 8/8 黄褐色　シルトのブロックを含む)

第125図　ＳＤ２・３・７平面図（1/100）・土層断面図（1/40）

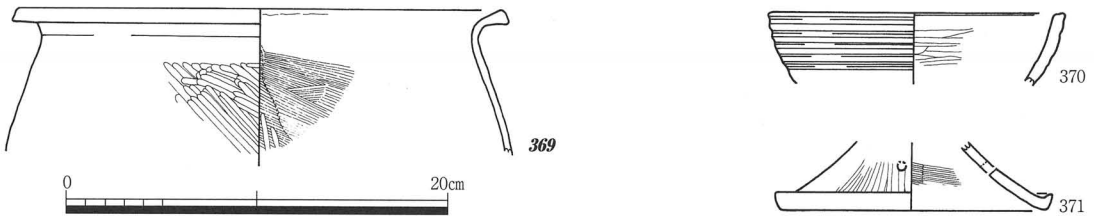
２．遺物

当該遺構からは甕Ｃ（369)、鉢Ａ（370)、高坏（371）が出土している。

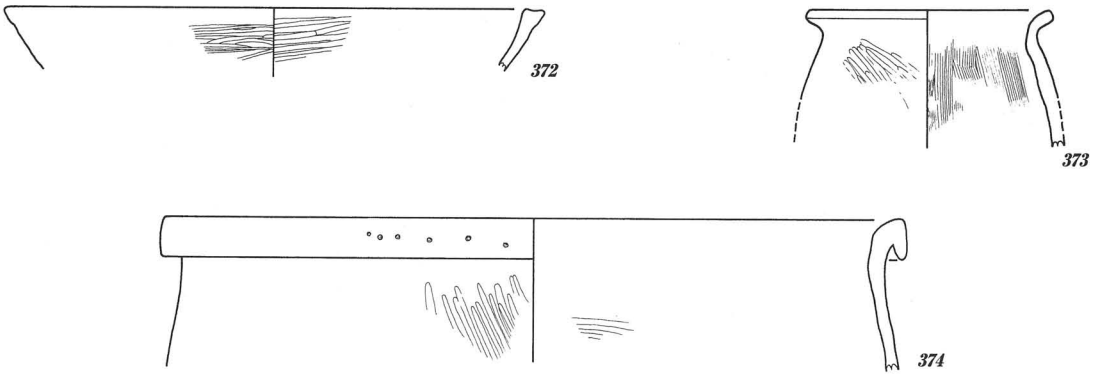
369は甕Ｃである。口縁端部は下方向への拡張がなく、わずかに肥厚する程度である。外面に斜め方向のミガキを密に施し、内面には細かいハケの後、縦方向のミガキを施す。

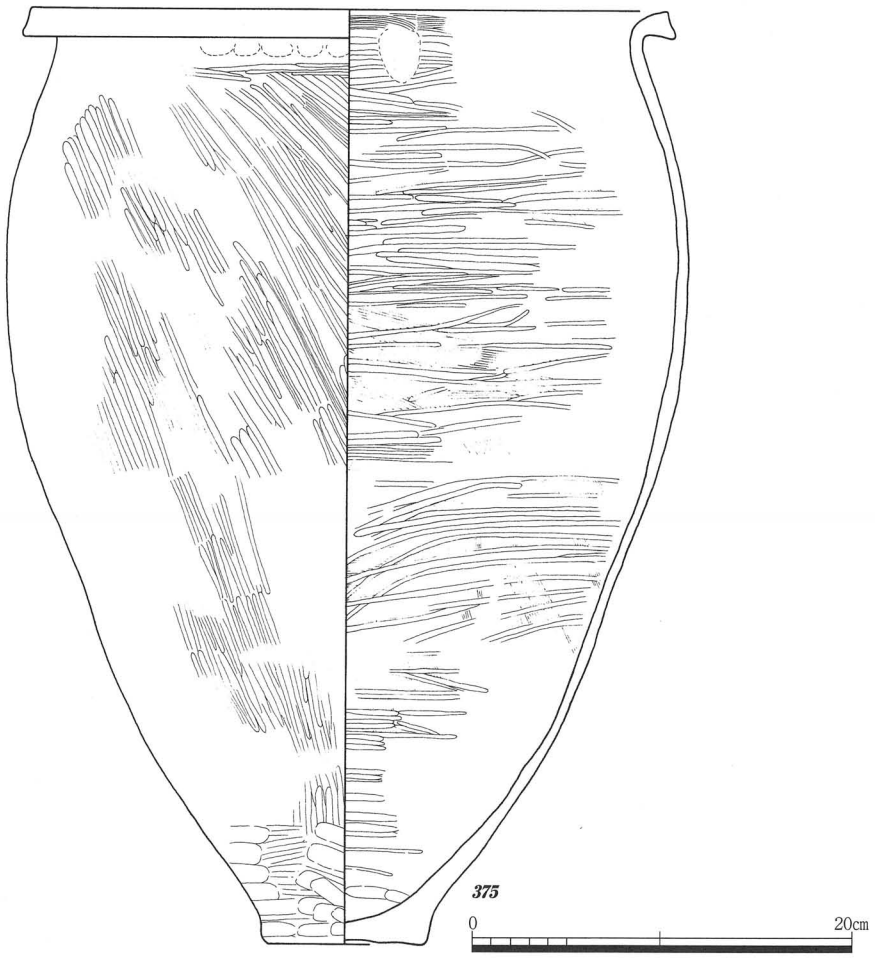
370は鉢Ａである。外面には凹線文を施す。

371は高坏の裾部である。端部を上方に拡張する。外面にはミガキを施し、円形透を穿孔している。



第126図　ＳＤ２出土土器





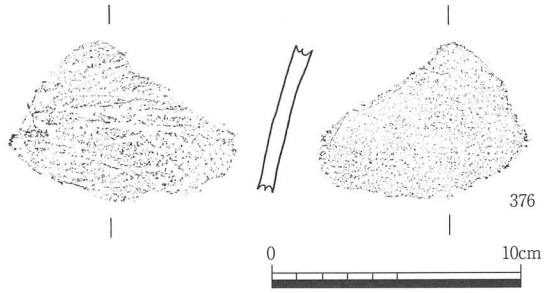
第127図　ＳＤ３出土土器①

当該遺構出土の土器は、Ⅲ－２様式～Ⅳ－１様式に位置づけられる。

〔ＳＤ３〕（第125・127・128図、図版60）

１．遺構

Ｉ－ｉ８区からＩ－ｉ９区にかけて位置する溝である。ＳＤ１の南側に、ほぼ並行して掘削されており、当該遺構の埋没後には、先述のＳＤ２が掘削されている。当該遺構は、東西方向に掘られており、西端は段丘崖１に接続しているものとみられる。上層に弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、上部は大幅に削平を受けている。検出面の標高は117.85ｍである。規模は幅2.1ｍ、深さ0.47ｍであり、長さ４ｍにわたり検出した。底部は東側が高く、西側が低い。したがって、段丘崖１に向かって傾斜しているといえる。削平を免れ遺存していた範囲でみるかぎり、溝の断面は、Ｕ字形を呈するが、本来はどのような形であったのか不明である。埋土の観察からは流水があった痕跡は認められず、褐灰色系の微砂～シルトが北方向から流れ込んでいる状況が確認された。



第128図　ＳＤ３出土土器②

２．遺物

当該遺構からは、甕Ａ（373）、甕Ｃ（374・375）、高坏Ａ（372）、縄文土器深鉢（376）が出土している。

373は甕Ａである。頸部は緩やかに外反している。外面に斜め方向のミガキ、内面には縦方向の細かいハケを施している。

甕Ｃには口縁端部の下方向への拡張が顕著であるもの（374）と、拡張が顕著ではなく、肥厚する程度のもの（375）がある。両者とも外面に斜め方向のミガキ、内面には横方向のミガキを施している。374は口縁端部外面に刺突文を巡らす。

372は高坏Ａである。直線的に開く坏部を持ち、口縁端部は肥厚する。内外面に横方向のミガキを施している。

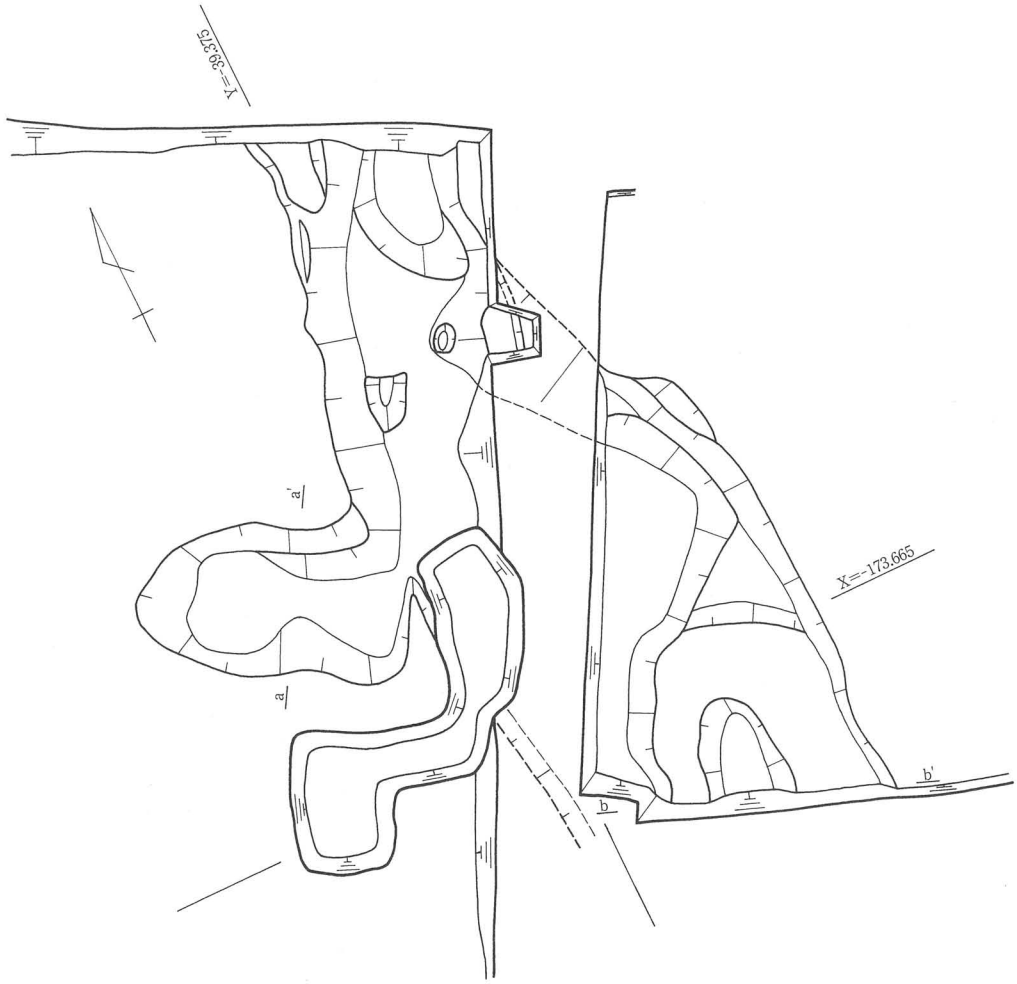
376は縄文土器の深鉢の体部片である。内面はケズリの後、ミガキを施している。

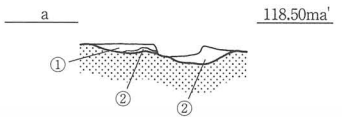
当該遺構から出土した土器は、縄文土器を含むものの、他はⅢ－２～Ⅳ－３様式に位置づけられる。

〔ＳＤ４〕（第129～133・163図、図版25～27・59～62・99）

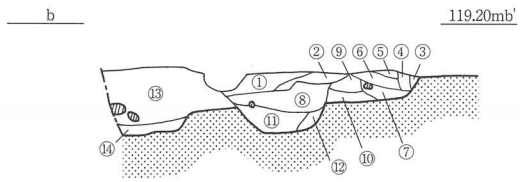
１．遺構

Ｉ－ｈ６区からＩ－ｇ７区にかけて位置する溝である。南西方向10ｍにはＳＤ１が東方向10ｍにはＳＩ２が位置する。２回に分けて調査を行った。上層に弥生時代の遺物包含層



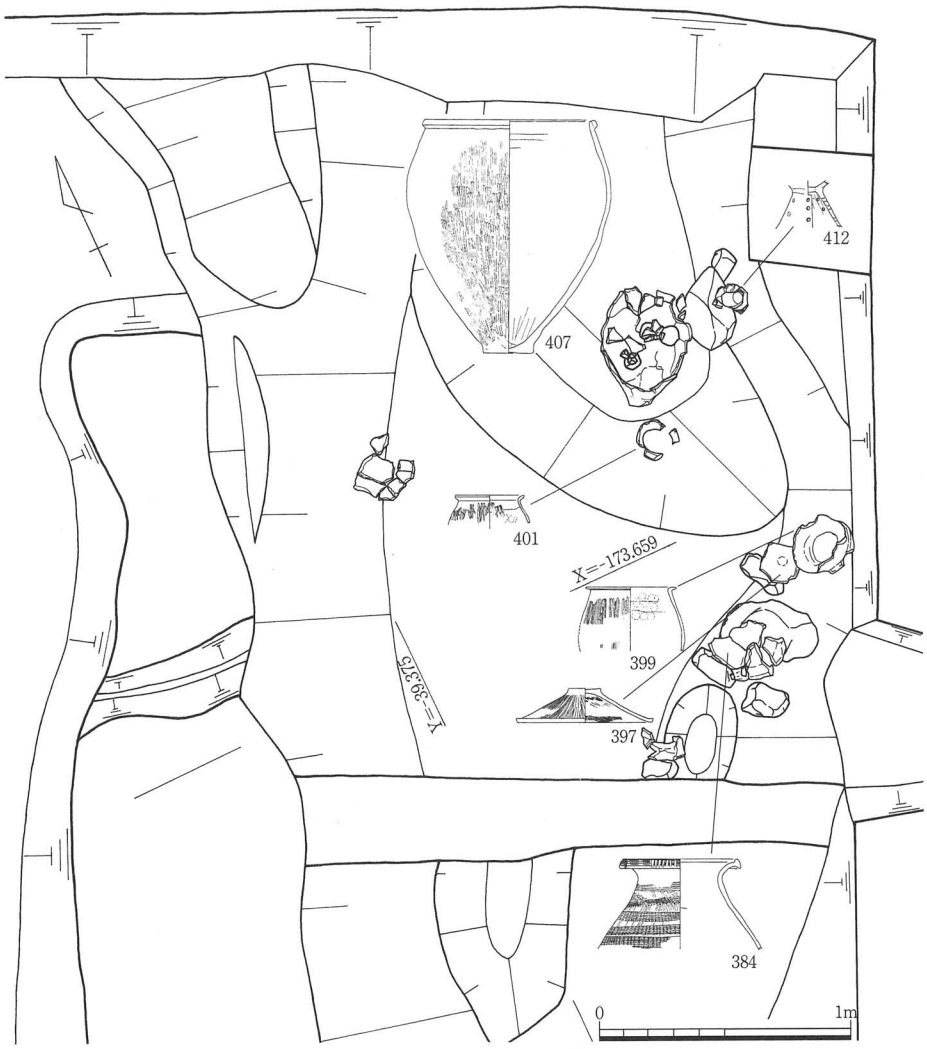


① 10YR 4/3 にぶい黄褐色　シルト
② 10YR 4/3 にぶい黄褐色　細砂混じりシルト(炭化物を含む)



① 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト
② 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト
(2.5Y 8/8 黄色　シルト～微砂のブロックを含む)
③ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト混じり細砂
④ 2.5Y 7/2 灰黄色　シルト混じり細砂
⑤ 2.5Y 8/4 淡黄色　細砂
⑥ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト混じり細砂
⑦ 2.5Y 3/1 黒褐色　シルト混じり細砂
⑧ 2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～微砂
⑨ 2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルト混じりシルト～微砂
⑩ 2.5Y 7/2 灰黄色　シルト混じり細砂
⑪ 2.5Y 3/1 黒褐色　シルト混じり微砂
⑫ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　シルト～微砂
⑬ 10YR 3/3 暗褐色　細砂～シルト
⑭ 2.5Y 7/2 灰黄色　シルト混じり細砂

第129図　ＳＤ４平面図・土層断面図（1/100）



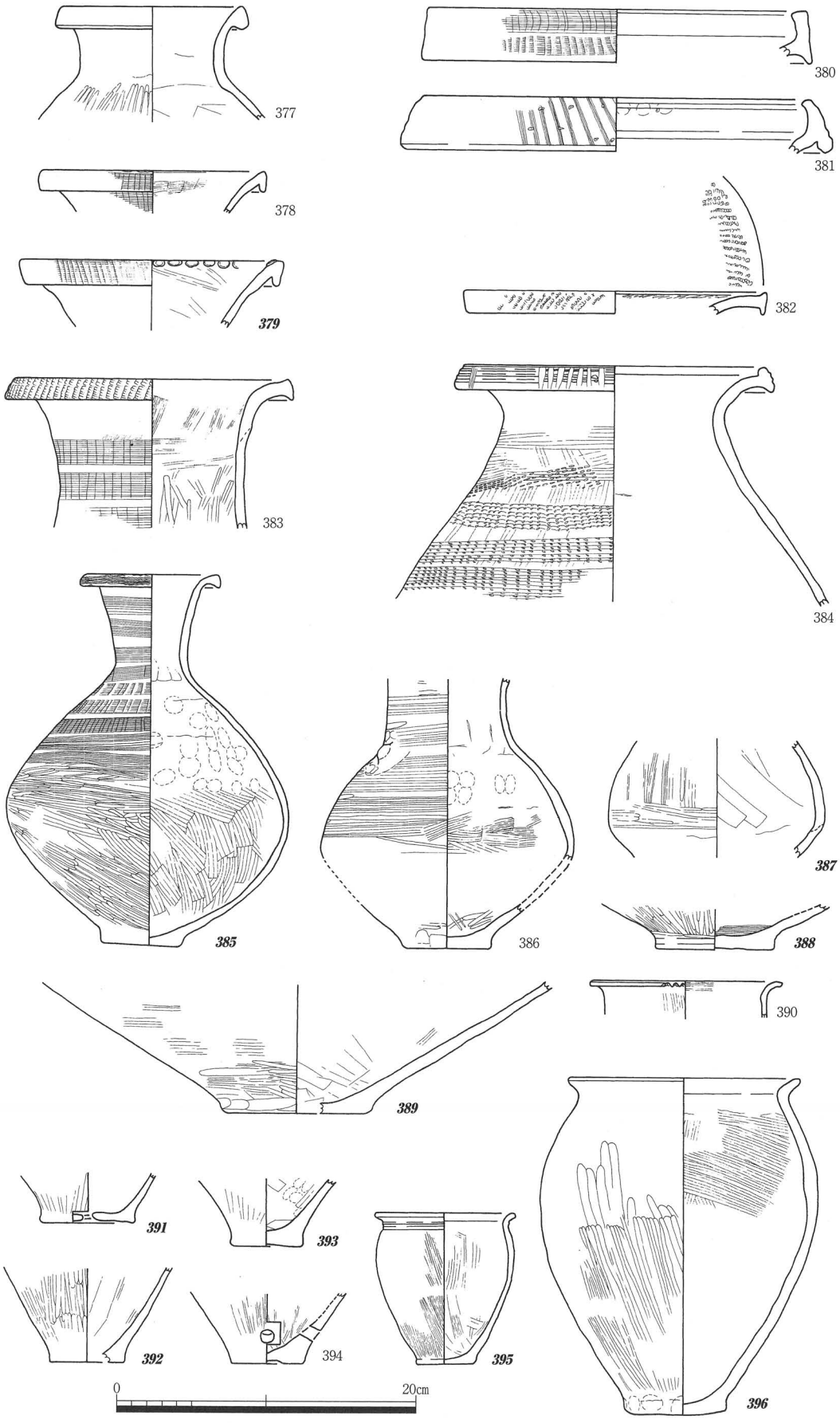
第130図　ＳＤ４遺物出土状況図（1/30）

は遺存しておらず、上部は大幅に削平を受けている。南東から北西に向かって直線的にのびていた。検出面の標高は118.20～118.60mである。規模は幅２～４m、深さ0.8m、長さ11mにわたり検出した。底部は南東が高く、北西に向かって低くなっていた。溝底は、凹凸が著しい。埋土は、細砂やシルトによって構成されており、流水があったことが推定できる。

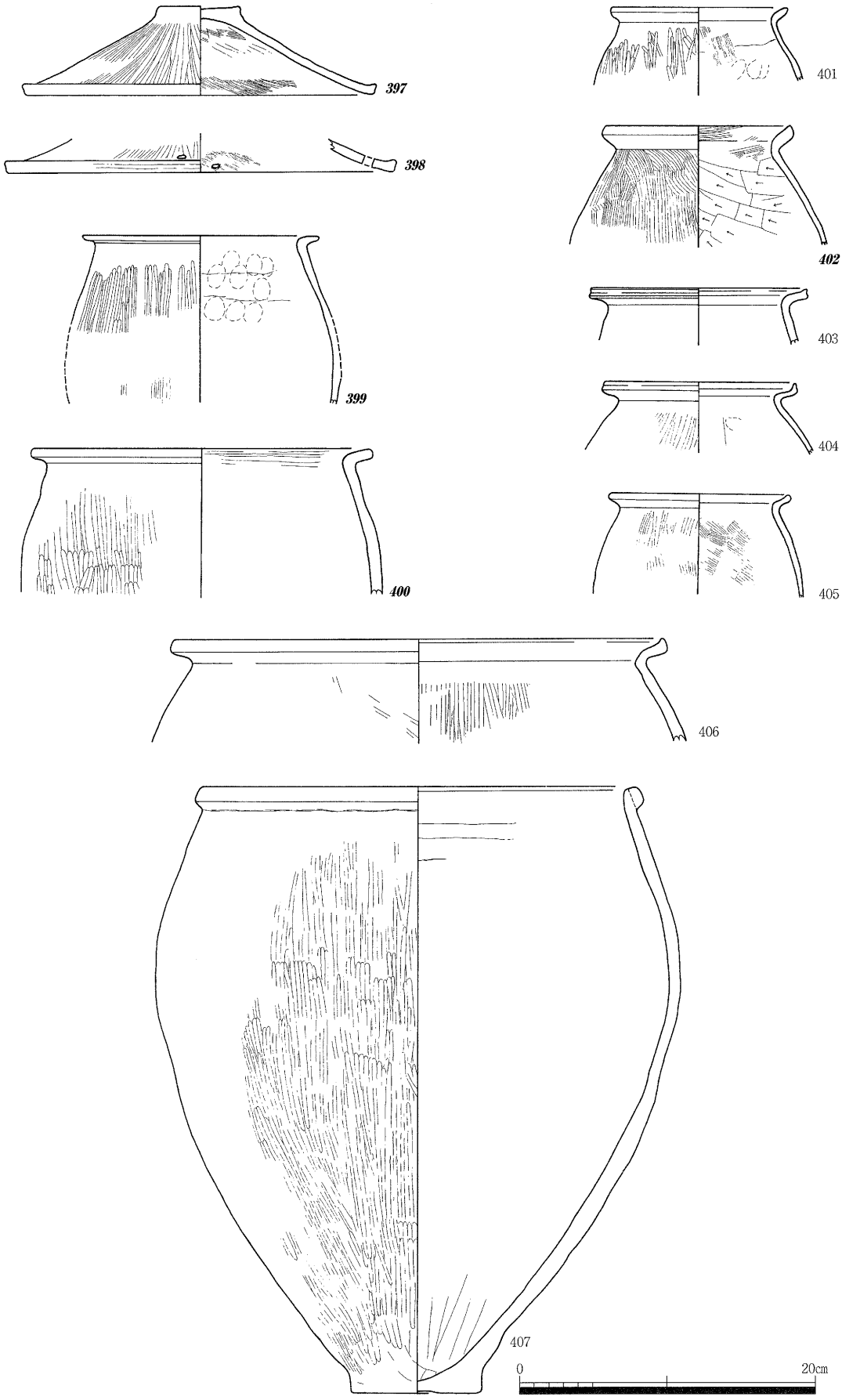
２．遺物

当該遺構からは多量の土器が出土している。特に底部からは比較的まとまった個体が出土しており、出土状況の図化を行った後取り上げを行った。

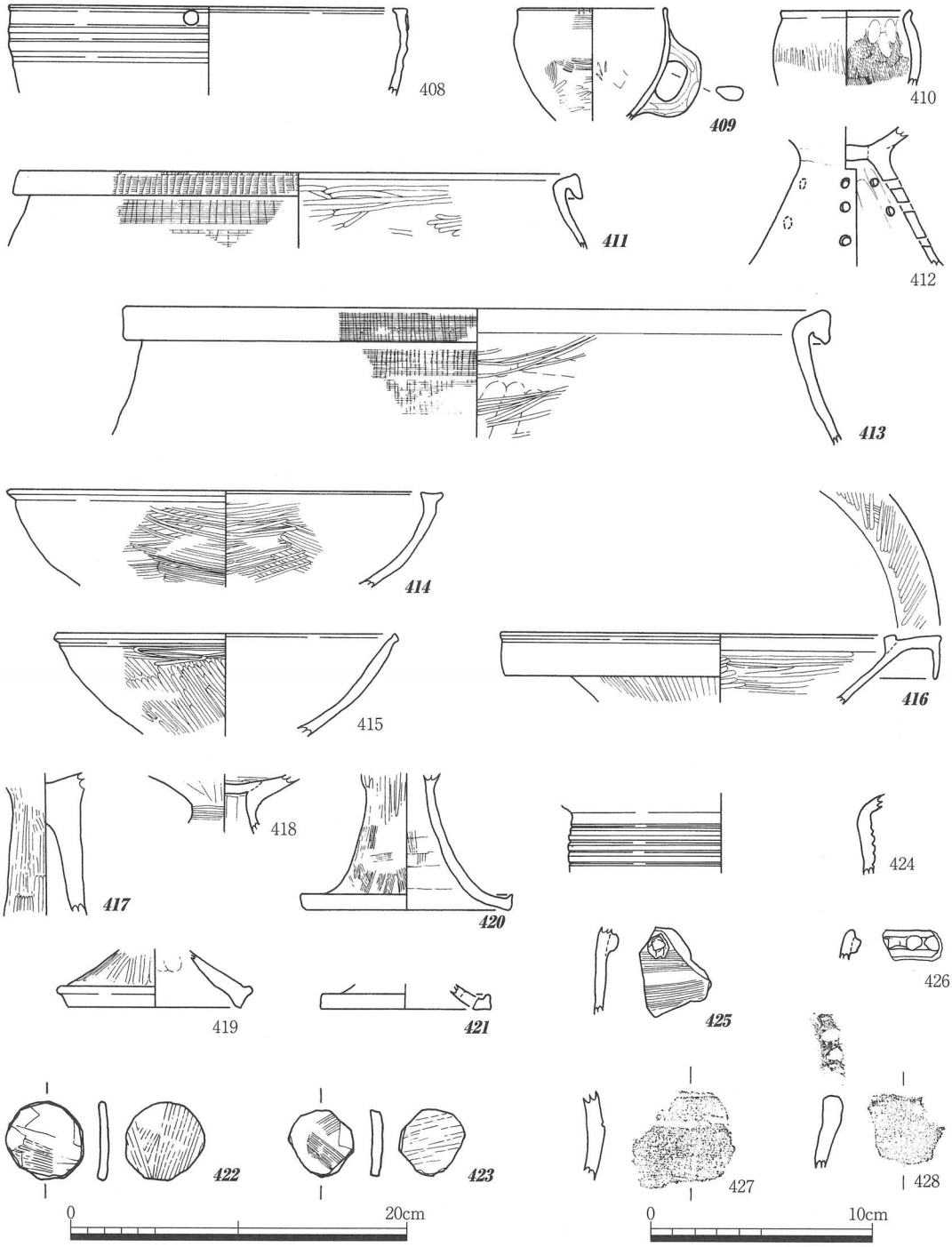
広口壺Ａ（377～379・385）、広口壺Ｂ（380・381）、広口壺Ｅ（382～384）、水差（386）、甕蓋（397・398）、甕Ａ（395・396・399～402）、甕Ｂ（403～405）、甕Ｃ（407）、甕Ｄ（406）、鉢Ａ（408～410）、鉢Ｂ（411・413）、高坏Ａ（414・415）、高坏Ｂ（416）、土製円板（422・423）、Ｉ様式の甕（424）、縄文土器（426～428）、大和形甕（390）等がある。



第131図　ＳＤ４出土土器①



第132図　ＳＤ４出土土器②



第133図　ＳＤ４出土土器③

377は広口壺Ａである。頸部は短く外反し、口縁端部は肥厚して、断面が逆三角形状を呈する。体部には縦方向のミガキを施すのみで、無文である。378・379・385は小型の広口壺Ａである。378・379は垂直に下方向へ口縁端部を拡張している。378は口縁端部と頸部に間隔の短い簾状文を施文している。379は内面に円形浮文を巡らす。385は、体部の中程に最大径をもつ。頸部と体部上半部に簾状文と直線文を施文し、下方向に拡張した口縁端部には波状文を施文している。380・381は広口壺Ｂ１である。380は口縁端部を上方向に拡張しており、口縁端部はほぼ直立する。口縁端部外面には簾状文を２条施文している。

381の上下に拡張した口縁端部は内傾し、口縁端部上端は内側に肥厚する。外面には斜線文を施文した後、不規則に刺突を加えている。382～384は広口壺Ｅである。382は口縁部内外面に列点文を施文する。383は筒状の頸部を持ち、口縁部は短く外反する。上下にやや拡張した口縁端部には、簾状文手法の斜列点文を、頸部には幅の狭い簾状文を施文している。384は大きく張る体部と短い頸部を持つ。上下に拡張した口縁端部には凹線を施し、その上から一定間隔で縦方向の研磨痕を巡らす。体部には、波打った稚拙な直線文の上から一定間隔で列点文を施文している。簾状文を意識した表現と考えられる。

386は水差である。把手は欠損しているが、挿入法で体部に接合していると考えられる。外面には直線文を施文している。388・389は壺の底部である。388は内外面にミガキを施している。389は外面に横方向のミガキを施している。

387は壺の体部である。底部は欠損しているが、体部は強く張り出す形態を呈する。縦方向のミガキの後、体部下半には横方向のミガキを施している。

397、398は蓋である。397は外面と天井部に密にミガキを施し、内面には細かいハケを施している。398は紐孔を穿孔する。

甕Ａには頸部をくの字状に屈曲させるもの（395・396・401・402）と、逆Ｌ字状のもの（399・400）がある。395は小型の甕Ａで、内外面に縦方向のミガキを施す。396は、前後２回に分けてミガキを施しており、先行するミガキの幅はやや広く、後行の下半部のミガキは前者に比べて幅が狭い。内面には細かいハケを施している。401は外面に縦方向のミガキを疎らに施している。402は外面に粗いハケを施す。内面には頸部から口縁部内面に横方向のハケ、体部にはケズリを施している。ケズリのために口縁に比して体部の器壁がやや薄い。399・400は頸部が逆Ｌ字状に屈曲する。399は外面に縦方向のミガキを密に施している。内面には粘土接合痕や指押さえの痕跡が残る。400は外面に縦方向のミガキを施し、内面には口縁部に横方向のミガキを密に施している。403～405は、甕Ｂである。403は口縁端部に凹線を施している。404は口縁端部を上方向に拡張する。外面には粗いハケを施す。405は口縁部をわずかに上方向に拡張している。外面には縦方向の粗いハケ、内面には外面に比べて細かい斜め方向のハケを施す。407は甕Ｃである。口縁部に突帯を貼り付けている。外面には縦方向のミガキを密に施す。406は甕Ｄである。口縁部を上方向に拡張する。内外面には粗いハケを施している。391～394は甕の底部である。391は底部に穿孔している。394は底部付近に穿孔している。392・393は外面に密にミガキを施している。390は大和形甕である。外面には縦方向の粗いハケ、口縁部内面には粗い横方向のハケを施し、口縁端部には刻目を加えている。

408は大型の鉢Ａである。口縁端部は内面に肥厚する。外面には凹線文を施し、その上に円形浮文を貼り付けている。409・410は小型の鉢Ａである。409は椀状を呈する。把手を体部に挿入して接合している。体部上位に流水文を施文し、体部下位には横方向のミガキを施す。口縁部には刻目を加える。410は口縁端部を短く外折している。外面に縦方向

のミガキ、内面にはハケを施す。411・413は大型の鉢Ｂである。両者とも口縁端部を下方向にやや拡張しており、端部の断面は三角形を呈する。411は口縁端部と体部外面に簾状文を施し、口縁端部には刻目を加える。413は外面に間隔の短い簾状文を施し、その上から刺突文を巡らす。412は鉢の脚部である。円形の透を３段にわたって穿孔している。

414・415は高坏Ａである。坏部が内湾しながら開く。414の口縁端部は内外に肥厚している。坏部内外面には横方向のミガキを施している。415は口縁端部がわずかに外側に肥厚する。坏部外面は縦方向のミガキの後、口縁部付近に横方向のミガキを施している。416は高坏Ｂである。口縁部が水平に伸び、端部を下方向に拡張する。拡張した口縁端部には凹線を１条巡らす。坏部外面には縦方向のミガキ、坏部内面には横方向のミガキを施し、口縁部上面にも斜め方向の暗文状のミガキを施している。417～421は高坏の脚部である。417は高坏の脚柱部で、脚柱部上位は中実である、脚柱部外面と坏部内面にミガキを密に施し、脚柱部内面では絞り痕をナデ消している。418は高坏の坏部底部から脚部である。坏部内面にミガキを施す。脚部上位には沈線状の退化した凹線を施す。坏部と脚部の接合方法は円盤充填法である。420は脚部と裾部がなだらかに接続する。外面にはハケを施した後、上半部にミガキを施している。内面には粘土接合痕を残したまま粗いハケを施す。419、421は高坏の裾部である。419は端部を内外に拡張している。外面にはミガキ、内面にはナデを施している。421は端部を上方向に拡張する。円孔透を穿孔している。

424は甕の頸部である。頸部外面にはヘラ描多条沈線文が施されている。Ｉ－３～４様式に比定できる。

425はおそらく壺の破片と推定できる。直線文を施文した上から円形の突起を貼り付けている。

422・423は土製円盤である。外面にミガキを施した土器片を再利用している。

426～428は縄文土器の深鉢である。427は体部の破片であり、外面には沈線と刺突が施されている。縄文時代後期の元住吉山式に比定される。426・428は深鉢の口縁部である。426は口縁部に突帯を貼り付け、刻目を加える。428は口縁端部に刻目を施す。前者は滋賀里式～船橋式、後者は滋賀里Ⅲｂ式に比定され、ともに縄文時代晩期の所産である。

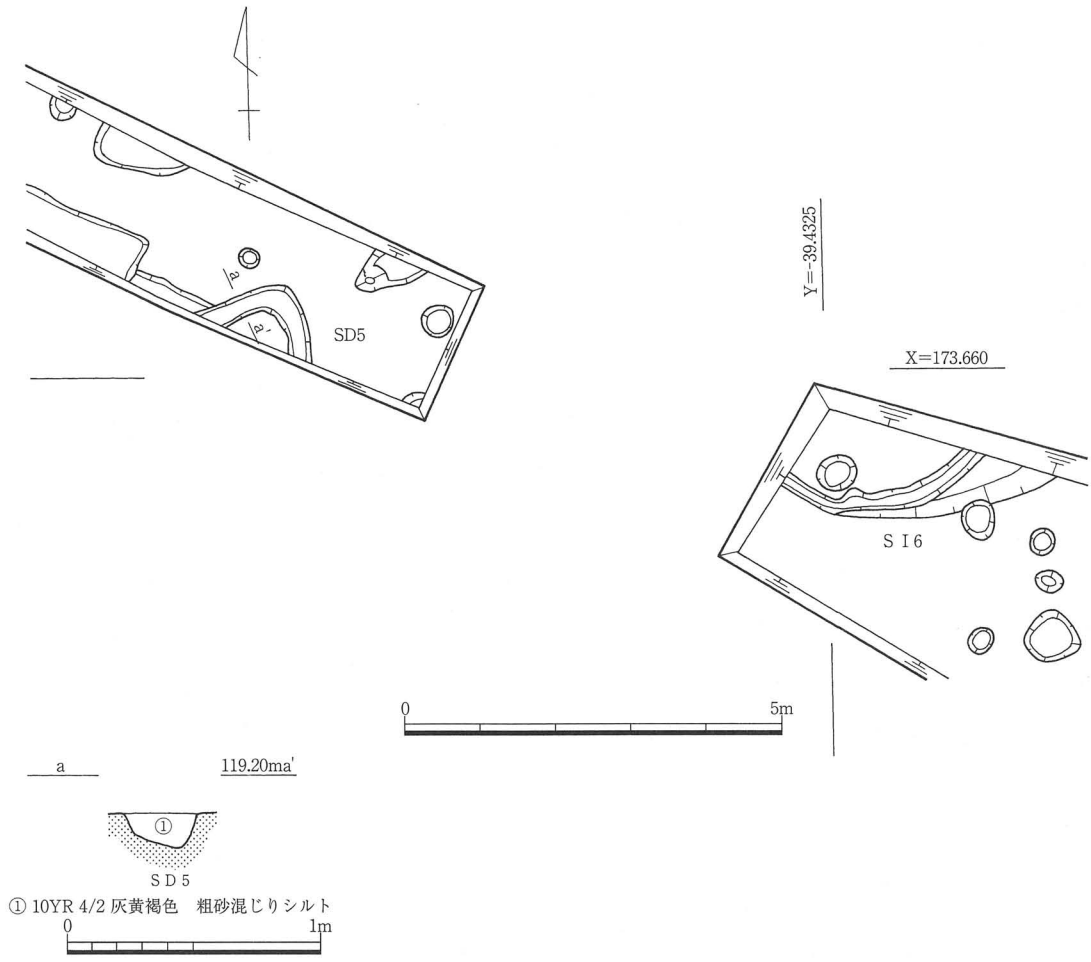
607はサヌカイト製の削器である。一部に自然面を残す。

当該遺構から出土した遺物は、幅広い時期の土器を含んでいる。主体をなすのは、Ⅲ様式からⅣ様式の土器である。380・385はⅢ様式に遡るものであり、377・384・407・416はⅣ様式でも後半期のものである。これらの他、Ｉ様式の土器（424）や、縄文土器（426～428）も含まれているが数が少なく、いずれも細片であることから混入と思われる。

〔ＳＤ５〕（第134図）

１．遺構

Ｉ－ｅ６区に位置する溝である。東方向５ｍにはＳＩ６が位置し、南西方向には、本来、



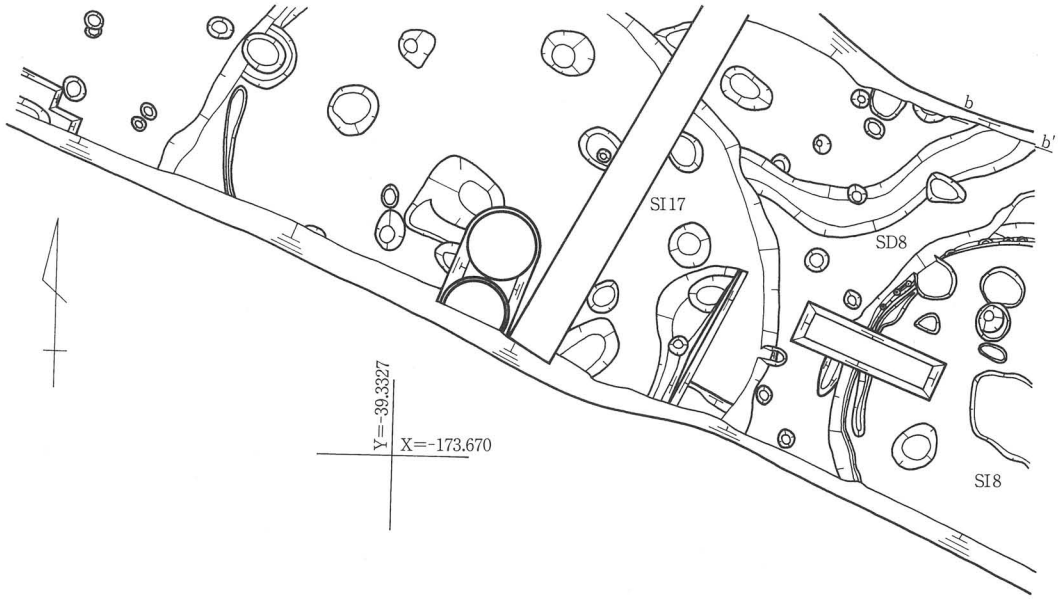
第134図　ＳＤ５平面図（1/100）・土層断面図（1/30）

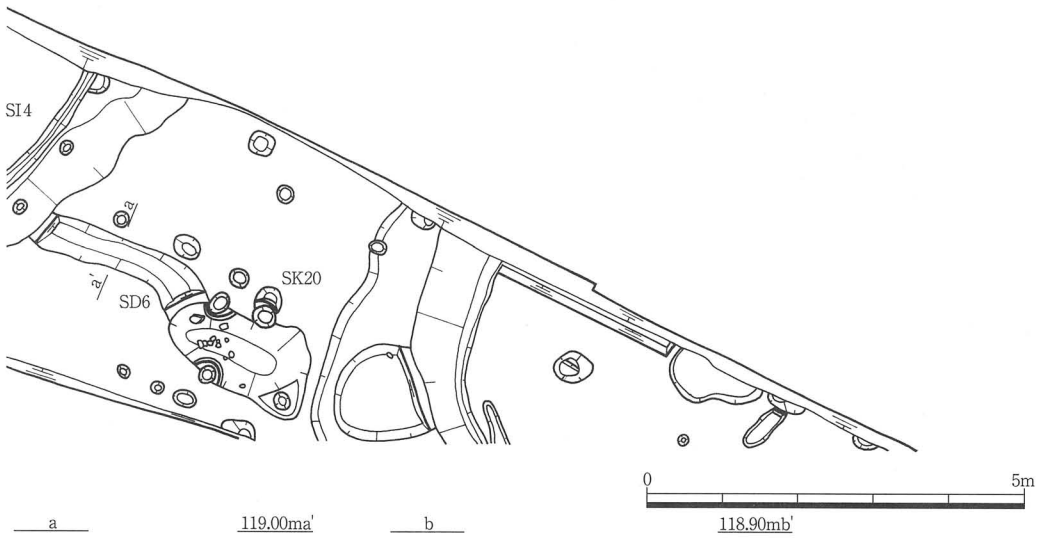
当該遺構に隣接して、ＳＩ３が位置するものと思われる。上層には同時期の弥生時代の遺物包含層が遺存していたので、削平は受けていない可能性が高い。南から西方向に屈曲する。検出面の標高は119.05ｍである。規模は、幅0.3～0.44ｍ、深さ0.14ｍであり、長さ2.3ｍにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。底面は南が高く西に向かって低くなっていた。堆積は、弥生時代の遺物包含層と同質の土によって単層で埋まっていた。遺物は出土していない。

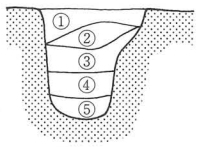
〔ＳＤ６〕（第135・136図、図版63）

１．遺構

Ｉ―ｄ８区に位置する溝である。ＳＩ４とＳＫ20に挟まれた地点に位置しており、両遺構が当該遺構を破壊してつくられている。上層には弥生時代の遺物包含層が遺存していたので、削平は受けていない可能性が高い。溝は、東西方向に直線的に伸びている。検出面の標高は118.70ｍである。規模は幅0.42ｍ、深さ0.44ｍであり、長さ2.32ｍにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。底面は東が高く西に向かって低くなっていた。埋土は、ほぼ水平に堆積しており、弥生時代の遺物包含層と近似した質の土によって埋まっ

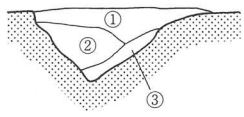






SD6

①2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂
　(2.5Y 5/1 黄灰色　シルトのブロックを含む)
②2.5Y 6/3 にぶい黄色　シルト混じり微砂
③2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂
④2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルト～微砂
⑤2.5Y 5/6 黄褐色　シルト



SD8

①10YR 7/1 灰白色　細砂混じりシルト～微砂
②10YR 7/1 灰白色　細砂混じりシルト～微砂
　(10YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂のブロックを含む)
③10YR 7/1 灰白色　シルト～微砂

第135図　ＳＤ６・８平面図（1/100）・土層断面図（1/30）

ていた。

２．遺物

当該遺構からは甕Ａ（434）、大和形甕（435）が出土している。いずれも細片である。

435は甕Ａであり、頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部は面をもつ。

435は大和形甕である。頸部がくの字状に屈曲する。口縁部はやや厚くなっている。体部外面には縦方向のハケを施し、口縁部内面には横方向のハケを施している。口縁端部には刻目を加える。

当該遺構から出土した遺物は少ないもののⅢ－１様式に位置づけられる。

〔ＳＤ７〕（第125・136・137図、図版63）

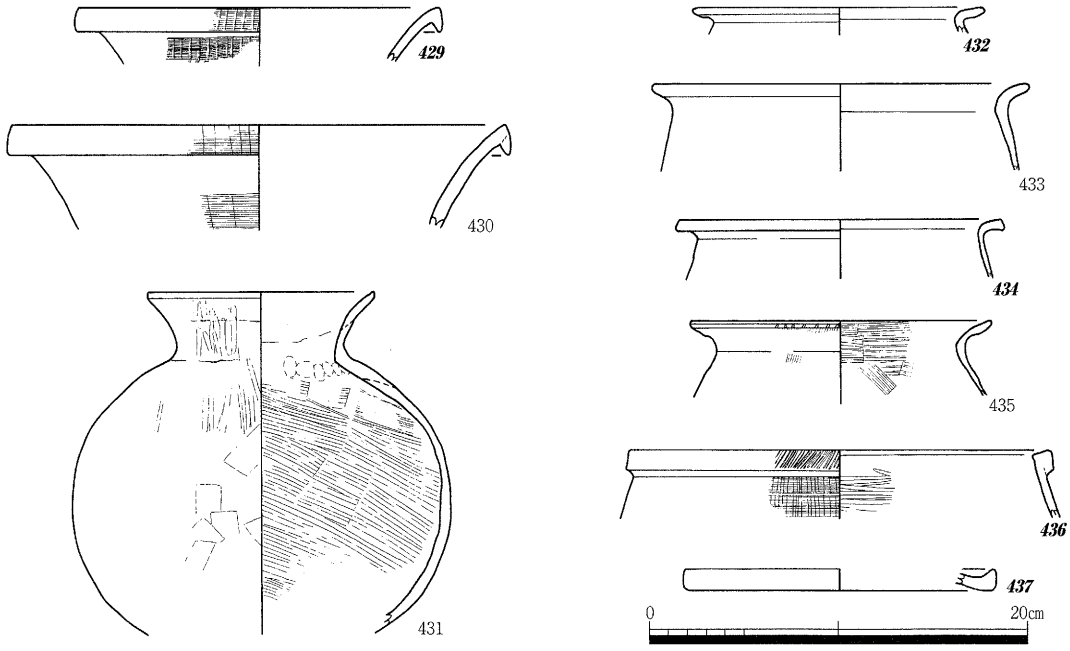
１．遺構

Ｉ－ｉ９区に位置する溝である。ＳＤ２を一部破壊した形で掘削されている。上層に弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、上部は大幅に削平を受けているとみられる。溝は、南北方向に直線的に伸びており、西端で段丘崖１に接続するものと思われる。検出面の標高は117.70mである。規模は幅0.5～0.8m、深さ0.1mであり、長さ３mにわたり検出した。底面は東が高く西に向かって低くなっていた。

２．遺物

当該遺構から出土した土器には広口壺Ａ（429・430）、Ｖ様式の広口壺（431）がある。431以外は細片である。

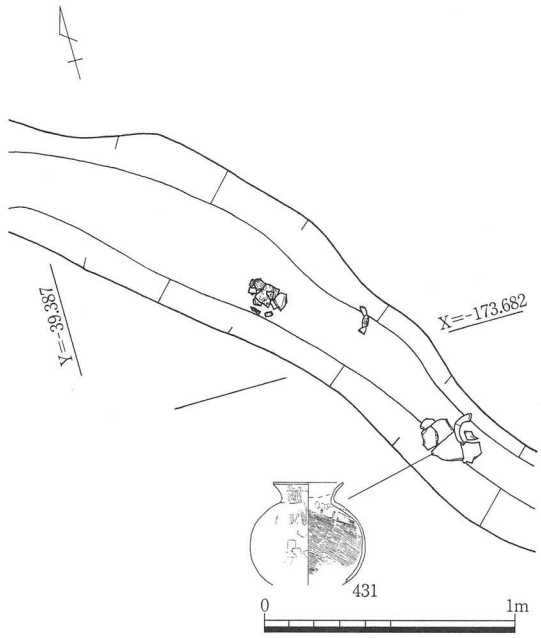
広口壺Ａ（429・430）は、下方向に口縁端部を拡張する。429は間隔の短い簾状文を施



第136図　ＳＤ６～９出土土器

している。430は前者に比べて間隔の比較的長い簾状文を施文している。431はⅤ様式の広口壺である。球形の体部を持ち、口縁部は大きく外反する。内面には粗いハケを施し、外面には縦方向のミガキの後、下半部に板ナデを施している。

当該遺構出土土器については、429、430はⅣ様式の弥生時代中期に、431はⅤ様式の弥生時代後期と、大きく２時期に分けられる。



第137図　ＳＤ７土器出土状況図（1/30）

〔ＳＤ８〕（第135・136図、図版63）

１.遺構

Ｉ－ｃ７区に位置する溝である。西方向にはＳＩ７が当該遺構を破壊する形で重複しており、東方向１ｍにはＳＩ８が位置する。上層には同時期の弥生時代の遺物包含層が遺存していたので、削平は受けていない可能性が高い。北から西に向けて緩やかに屈曲している。検出面の標高は118.70ｍである。規模は幅0.66ｍ、深さ0.3ｍ、長さ４ｍにわたり検出した。底部はＶ字形をなしている。溝底は北東が高くに南西に向かって低くなっていた。包含層とほぼ同質の土によって埋没していた。

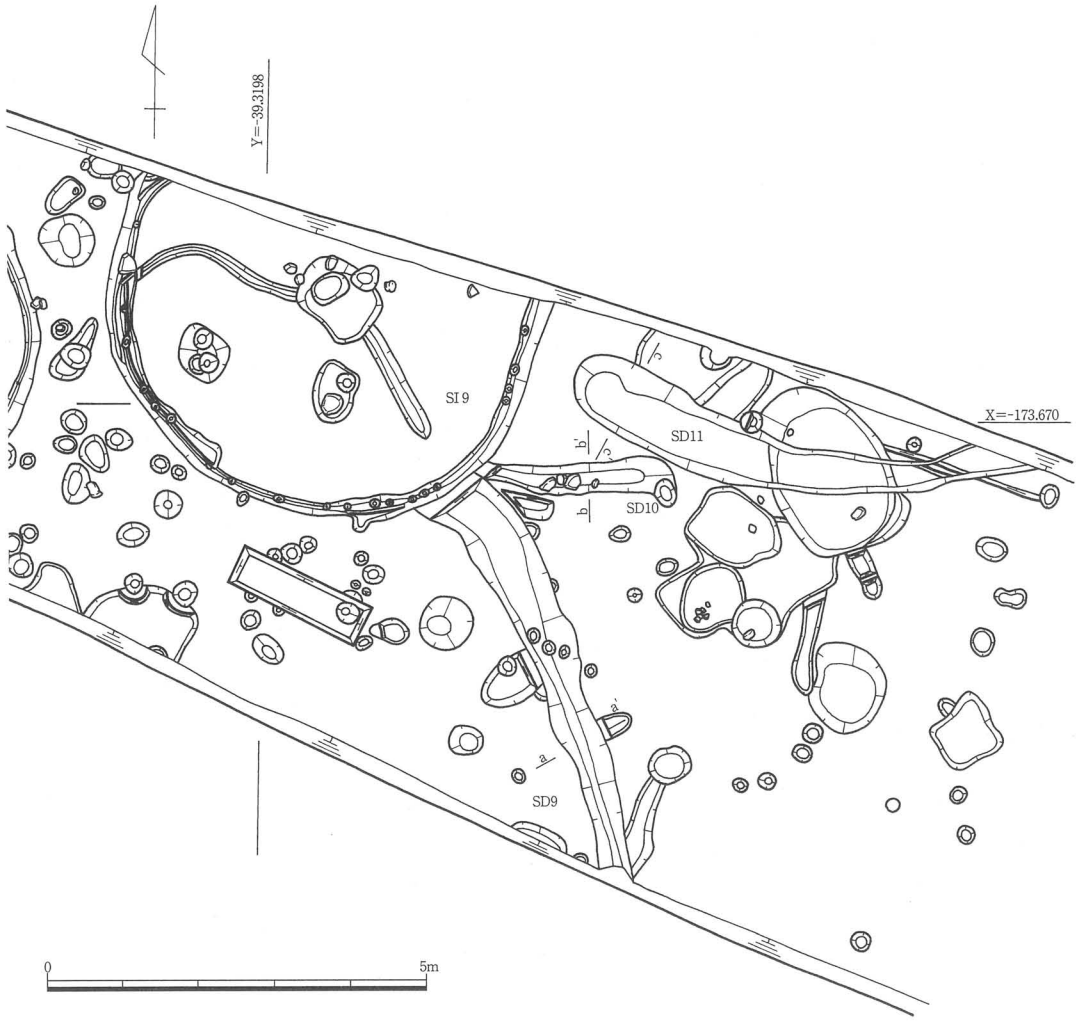
２.遺物

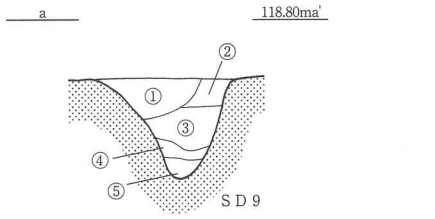
当該遺構からは甕Ａ（433）が１点出土しているが、細片である。頸部は緩やかに屈曲している。調整は摩滅のため不明である。

〔ＳＤ９〕（第136・138図、図版27・63）

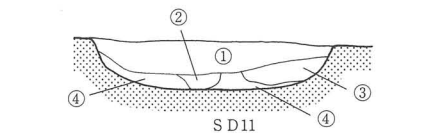
１.遺構

Ｉ－ｂ８区に位置する溝である。北西方向には、当該遺構を破壊する形でＳＩ９が重複している。上層には弥生時代の遺物包含層が遺存していたので、削平は受けていない可能性が高い。溝は、直線的に伸びている。検出面の標高は118.60ｍである。規模は幅0.82～0.36ｍ、深さ0.4ｍ、長さ5.5ｍにわたり検出した。溝の断面はＶ字形を呈している。底部はＳＩ９に近い北西側が高く、南東側が低い。堆積は、埋土が北側から流れ込んだ状況を呈していた。埋土の質は遺物包含層に近似していた。ＳＩ９の排水溝である可能性がある。

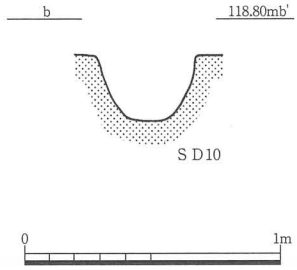




① 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じりシルト～微砂
② 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じりシルト～微砂
（10YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂のブロックを含む）
③ 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じりシルト～微砂
（10YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂のブロックを多く含む）
④ 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じり微砂
⑤ 10YR 4/1 褐灰色　シルト混じり微砂
（10YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂のブロックを含む）



① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト混じり微砂
② 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂
③ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂
④ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト混じり微砂
（10YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂のブロックを含む）



第138図　ＳＤ９～11平面図（1/100）・土層断面図（1/30）

2．遺物

当該遺構からは甕Ａ（432）、鉢Ｂ（436）、高坏（437）が出土している。いずれも細片である。

432は甕Ａである。口縁部は逆Ｌ字状を呈する。

436は鉢Ｂである。口縁端部は段状に肥厚し、ヘラ状工具による刻目を施している。体部には間隔の短い簾状文を施す。

437は高坏の脚部である。端部を上方向に短く拡張している。

当該遺構出土の遺物は、Ⅲ様式からⅣ様式に位置づけられる。

〔ＳＤ10〕（第138・139・163・164図、図版63・99・103）

1．遺構

Ⅰ－ｂ８区に位置する溝である。西方向にはＳＩ９が位置する。上層には弥生時代の遺物包含層が遺存していたので、削平は受けていない可能性が高い。溝は、直線的に伸びている。検出面の標高は118.70mである。規模は幅0.31～0.4m、深さは0.2mであり、長さ2.5mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底はほぼ平坦であった。埋土の質は遺物包含層に近似していた。

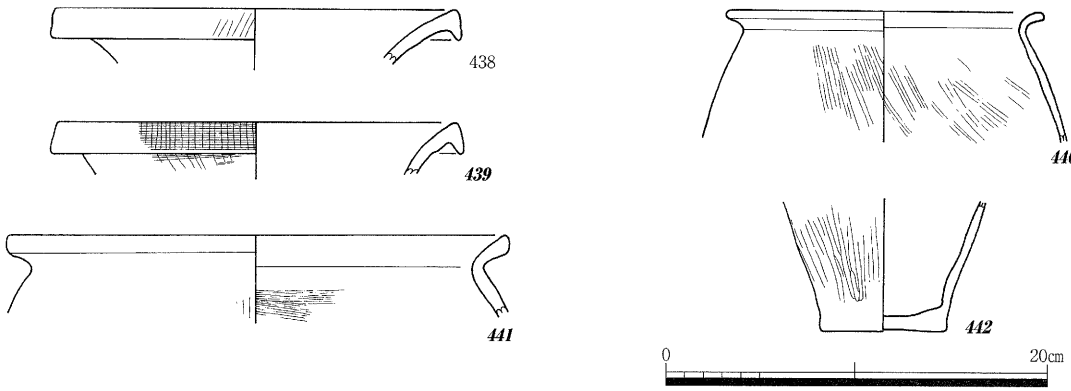
2．遺物

当該遺構からは広口壺Ａ（438・439）、甕Ａ（440）、甕Ｃ（441）、甕底部（442）、石鏃（603）、叩石（613）が出土している。土器はいずれも細片である。

438、439は広口壺Ａである。438は口縁端部を下方向に拡張し、静止痕が傾いた簾状文を施している。439は口縁端部と頸部に間隔の短い簾状文を施している。

440は甕Ａである。口縁部は緩やかに屈曲する。外面には縦方向のミガキ、内面にはやや細かいハケを施している。440は甕Ｃである。口縁端部の下方向への拡張はほとんどなく、わずかに肥厚する程度である。内面には細かい横方向のハケを施している。442は甕の底部である。外面には縦方向のミガキを施している。

603はサヌカイト製の凸基式石鏃である。基部と先端を欠損している。613は砂岩製の叩



第139図　ＳＤ10出土土器

石である。使用痕はほとんど認められない。

当該遺構出土遺物は、Ⅲ様式～Ⅳ－２様式に位置づけられる。

〔ＳＤ11〕（第138・140図、図版63）

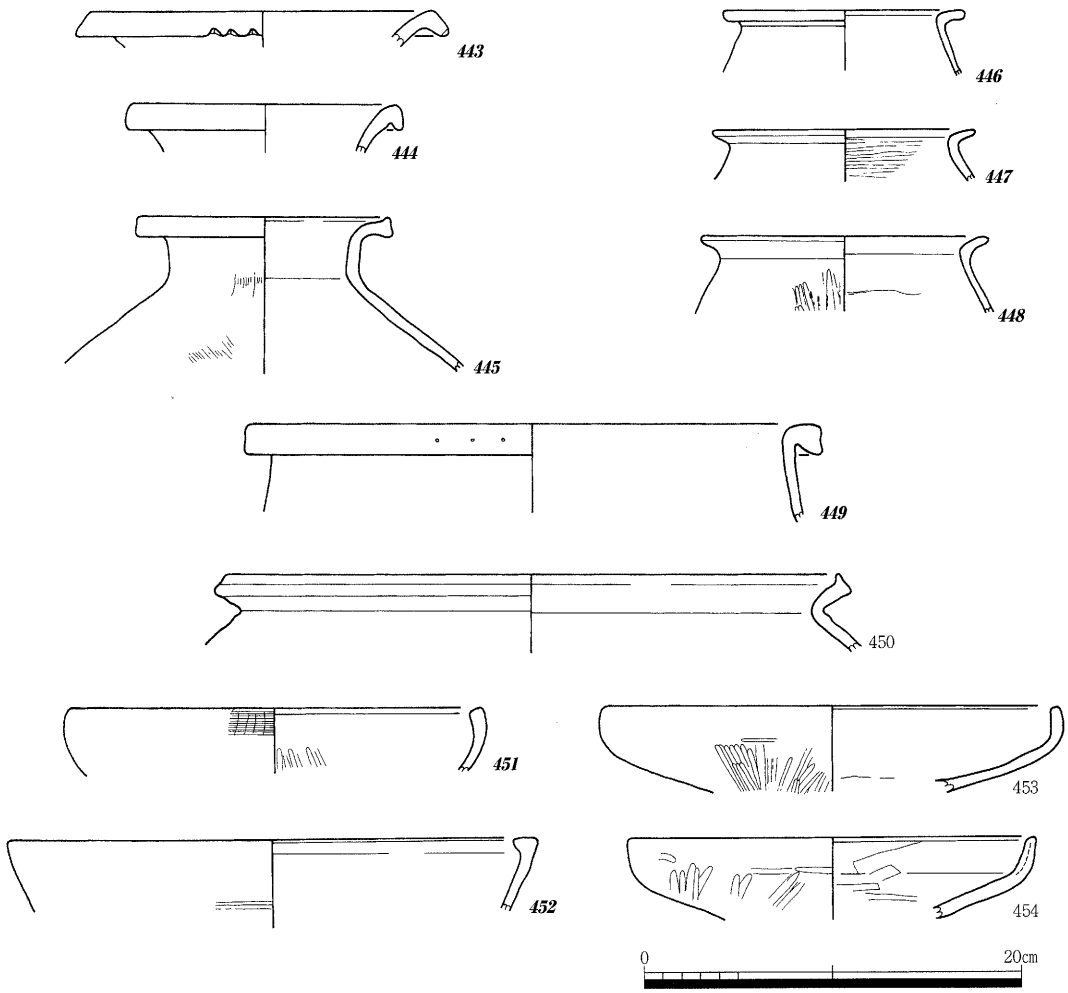
１.遺構

Ⅰ－ｂ７区からⅠ－ａ８区にかけて位置する溝である。西方向１ｍにはＳＩ９が位置する。上層には弥生時代の遺物包含層が遺存していたので、削平は受けていない可能性が高い。溝は、直線的に伸びていた。検出面の標高は118.60ｍである。規模は幅0.31～0.94ｍ、深さ0.2ｍであり、長さ６ｍにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底はほぼ平坦であった。埋土の質は遺物包含層に近似していた。

２.遺物

当該遺構からは、広口壺Ａ（443・444）、広口壺Ｃ（445）、甕Ａ（446～448）、甕Ｃ（449）、甕Ｄ（450）、高坏Ａ（451～454）が出土している。

443、444は広口壺Ａである。443は口縁端部を斜め下方向に拡張している。外面は摩滅



第140図　ＳＤ11出土土器

して文様は不明であるが、端部下端には刻目を加えている。444は口縁端部を垂直に下方向に拡張している。無文である。445は広口壺Ｃである。筒状の頸部に逆Ｌ字状に屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は上方向に拡張している。外面には縦方向のやや細かいハケを施す。

446～448は甕Ａである。446は頸部が逆Ｌ字状に屈曲し、内外面にはナデを施している。447・448は頸部が、くの字状に屈曲する。447は内面に横方向のミガキを密に施している。448の外面には疎らに縦方向のミガキを施している。449は甕Ｃである。口縁端部をやや下方向に拡張しており、外面には刺突文を施している。450は甕Ｄである。口縁端部を上方向へ拡張している。

451～454は高坏Ａである。451は口縁部が内湾しながら開く。外面には間隔の短い簾状文を施している。453・454は坏部が底部から屈曲して、口縁部が直立する形態を呈する。453は底部外面に縦方向のミガキを、口縁部付近には横方向のミガキを施している。454は口縁部がやや開きながら立ち上がる。外面にはミガキを施している。452は坏部が内湾しながら開く形態を呈すると考えられる。口縁端部は内側に肥厚する。外面には横方向のミガキを施している。

当該遺構出土の遺物はⅢ様式～Ⅳ様式に位置づけられる。

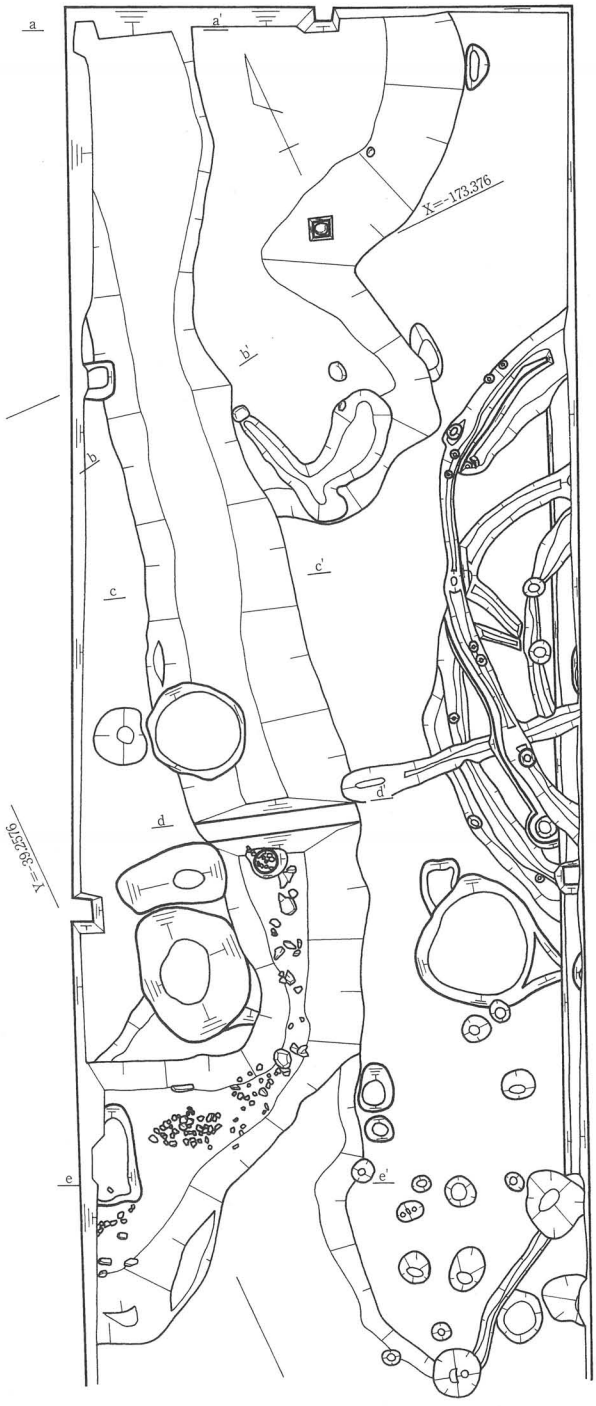
〔ＳＤ12〕（第141～148・163・164図、図版28・29・63～67・99・101・102）

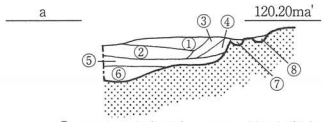
１.遺構

Ｈ－ｆ４区からＨ－ｆ５区にかけて位置する溝である。東側にはＳＩ15、ＳＩ16、ＳＩ17の竪穴住居群があり、西側には、段丘崖２が位置する。当該遺構は段丘崖２に接続するものとみられる。上層に弥生時代の遺物包含層は遺存していない。付近の竪穴住居が検出面より0.1m前後の深さでしか遺存していなかったので、当該溝の上部は大幅に削平を受けているとみられる。当該遺構は、段丘崖２に並行して直線的にのびているが、南端で段丘崖２の方向に屈曲している。検出面の標高は120.50mから120.80mである。規模は幅1.3～2.1m、深さ0.8mであり、長さ17mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。上部が削平されていることを勘案すると、当初はさらに大規模な溝であったことが考えられる。底部は、屈曲している箇所付近がもっとも高く、西方向と北方向へ低くなっていた。溝埋土の下層は、細砂～シルトが堆積しており、この上面に大量の土器が投棄されていた。上層には、遺物包含層と近似している細砂を含んだシルト～微砂が堆積していた。これらのことから溝は、ある一定の流水のある状態があり、その後、土器が投棄され埋没したと思われる。

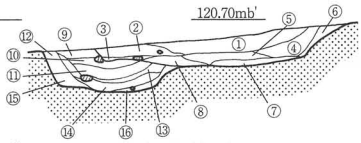
２.遺物

当該遺構からは多量の土器が出土している。３つのブロックに分けて取り上げた。

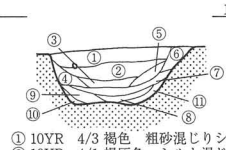




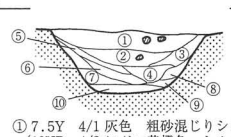
① 10YR 4/1 褐灰色 シルト混じり微砂
(10YR 5/2 灰黄褐色 シルト～微砂のブロックを含む)
② 10YR 4/1 褐灰色 シルト混じり微砂
(5G 6/1 緑灰色 細砂のブロックを含む)
③ 10YR 6/1 褐灰色 シルト～微砂
(10YR 4/1 褐灰色 シルトのブロックを含む)
④ 10YR 5/1 褐灰色 シルト～微砂
(10YR 8/4 浅黄橙色 のブロックを含む)
⑤ 10YR 3/1 黒褐色 シルト～微砂
(5G 6/1 緑灰色 細砂のブロックを含む)
⑥ 10YR 3/1 黒褐色 シルト～微砂
(5G 6/1 緑灰色 細砂のブロックを多く含む)
⑦ 10YR 7/1 灰白色 シルト～微砂
⑧ 10YR 7/1 灰白色 シルト～微砂



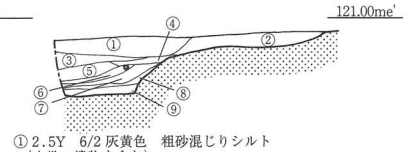
① 10YR 6/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト
② 2.5Y 4/1 黄灰色 シルト～微砂
③ 2.5Y 8/3 淡黄色 シルト～微砂
④ 2.5Y 5/1 黄灰色 シルト～微砂
⑤ 2.5Y 6/2 灰黄色 細砂
⑥ 2.5Y 8/3 淡黄色 シルト～微砂
(2.5Y 6/1 黄灰色 シルト～微砂のブロックを含む)
⑦ 2.5Y 5/1 黄灰色 細砂混じりシルト～微砂
⑧ 2.5Y 7/3 浅黄色 細砂
(2.5Y 4/1 黄灰色 シルト～微砂のブロックを含む)
⑨ 10YR 7/2 にぶい黄橙色 細砂混じりシルト～微砂
⑩ 10YR 7/1 灰白色 細砂混じりシルト～微砂
⑪ 10YR 7/1 灰白色 シルト～微砂
⑫ 10YR 7/2 にぶい黄橙色 シルト～微砂
(2.5Y 8/3 淡黄色 シルト～微砂のブロックを含む)
⑬ 10YR 7/2 にぶい黄橙色 シルト～微砂
(2.5Y 8/3 淡黄色 シルト～微砂のブロックを多く含む)
⑭ 2.5Y 6/1 黄灰色 粗砂混じりシルト～微砂
⑮ 2.5Y 7/3 浅黄色 シルト～微砂
(2.5Y 8/3 淡黄色 シルト～微砂のブロックを含む)
⑯ 2.5Y 8/3 淡黄色 シルト～微砂（地山層と近似）



① 10YR 4/3 褐色 粗砂混じりシルト～微砂
② 10YR 4/1 褐灰色 シルト混じり微砂
(炭化物を若干含む)
③ 10YR 6/1 褐灰色 シルト～微砂
④ 10YR 6/1 褐灰色 粗砂混じりシルト～微砂
(10YR 8/4 浅黄橙色 シルト～微砂のブロックを多く含む)
(炭化物を若干含む)
⑤ 2.5Y 6/2 灰黄色 細砂混じりシルト
(10YR 6/1 褐灰色 シルトのブロックを含む)
(炭化物を若干含む)
⑥ 10YR 7/1 灰白色 シルト～微砂
(10YR 8/4 浅黄橙色 シルト～微砂のブロックと
10YR 4/3 にぶい黄褐色 粗砂混じりシルト～微砂のブロックを含む)
⑦ 10YR 5/1 褐灰色 シルト～微砂
(2.5Y 8/4 淡黄色 細砂のブロックを含む)
⑧ 10YR 5/1 褐灰色 シルト～微砂
⑨ 2.5Y 7/4 浅黄色 粗砂混じり細砂
(10YR 6/1 褐灰色 シルト～微砂のブロックを含む)
⑩ 2.5Y 7/4 浅黄色 粗砂混じり細砂
⑪ 2.5Y 8/4 淡黄色 細砂
(10YR 5/1 褐灰色 シルト～微砂のブロックを含む)



① 7.5Y 4/1 灰色 粗砂混じりシルト～微砂
(10YR 4/3 にぶい黄橙色 シルト～微砂のブロックを含む)
② 7.5Y 4/1 灰色 粗砂混じりシルト～微砂
(炭化物を若干含む)
③ 10YR 7/2 にぶい黄橙色 粗砂混じりシルト
(10YR 8/3 浅黄橙色 シルト～微砂のブロックを含む)
④ 10YR 6/1 褐灰色 シルト混じり微砂
⑤ 5Y 6/1 灰色 粗砂混じり細砂
⑥ 5Y 6/1 灰色 シルト～微砂
⑦ 2.5Y 6/1 黄灰色 粗砂混じりシルト～微砂
(10YR 8/3 浅黄橙色 シルト～微砂のブロックを含む)
⑧ 10YR 6/1 褐灰色 シルト
(10YR 8/3 浅黄橙色 シルト～微砂のブロックを多く含む)
⑨ 10YR 5/1 褐灰色 シルト～微砂
(2.5Y 8/4 淡黄色 細砂のブロックを多く含む)
⑩ 5Y 5/1 灰色 粗砂混じりシルト～微砂



① 2.5Y 6/2 灰黄色 粗砂混じりシルト
(中世の遺物を含む)
② 10YR 4/2 灰黄褐色 粗砂混じりシルト～微砂
(2.5Y 8/4 浅黄色 シルト～微砂のブロックを含む)
(弥生時代の遺物を含む)
③ 10YR 3/2 黒褐色 粗砂混じりシルト～微砂
④ 10YR 4/1 褐灰色 シルト～微砂
⑤ 10YR 5/1 褐灰色 粗砂混じりシルト～微砂
(10YR 8/3 浅黄橙色 シルト～微砂のブロックを含む)
⑥ 10YR 5/1 褐灰色 シルト～微砂
(10YR 8/3 浅黄橙色 シルト～微砂のブロックを多く含む)
(炭化物を若干含む)
⑦ 10YR 6/1 褐灰色 シルト～微砂
(10YR 8/3 浅黄橙色 シルト～微砂のブロックを多く含む)
(炭化物を若干含む)
⑧ 2.5Y 7/4 浅黄色 粗砂混じり細砂
⑨ 10YR 6/1 褐灰色 粗砂混じり細砂

第141図　ＳＤ12平面図・土層断面図（1/100）

第142図　ＳＤ12遺物出土状況図（1/30）

広口壺Ａ（455～462）、広口壺Ｂ（464～466）、広口壺Ｅ（467・468）、細頸壺（470～473）、水差（475・476）、蓋（477～479）、甕Ａ（480～491）、甕Ｂ（492～496・498～503）、甕Ｃ（497・504～506・510～514）、甕Ｄ（507～509・515～518）、鉢Ａ（519・520）、鉢Ｂ（521～524・531～533）、高坏Ｂ（525）、搬入品の広口壺（463）、石鏃（604・605）石剣（606）、削器（608）等がある。

455～462は広口壺Ａである。口縁端部をいずれも下方向に拡張している。456～461は口縁端部と頸部に幅が広く間隔の短い簾状文を施文している。460・461は口縁部内面に円形浮文を貼り付けている。459は口縁端部が断面三角形を呈し、簾状文の静止痕の間隔が他に比べて広い。455は無文である。462は口縁端部に刺突文を巡らす。463は口縁端部を下方向に拡張するタイプの広口壺であるが、端部に凹線文を施しており、他地域からの搬入品と考えられる。

464～466は広口壺Ｂ１である。464・466は上下に拡張した口縁部が内傾する。464は口縁端部が内側に肥厚する。口縁端部、外面には斜線文を施文する。466は口縁部外面に簾状文を３段にわたって施文し、口縁端部上端に刻目を加える。頸部に施文した簾状文は幅が狭く間隔が長い。465は上下に拡張した口縁端部がほぼ直立する。口縁端部外面には垂下直線文を施文している。

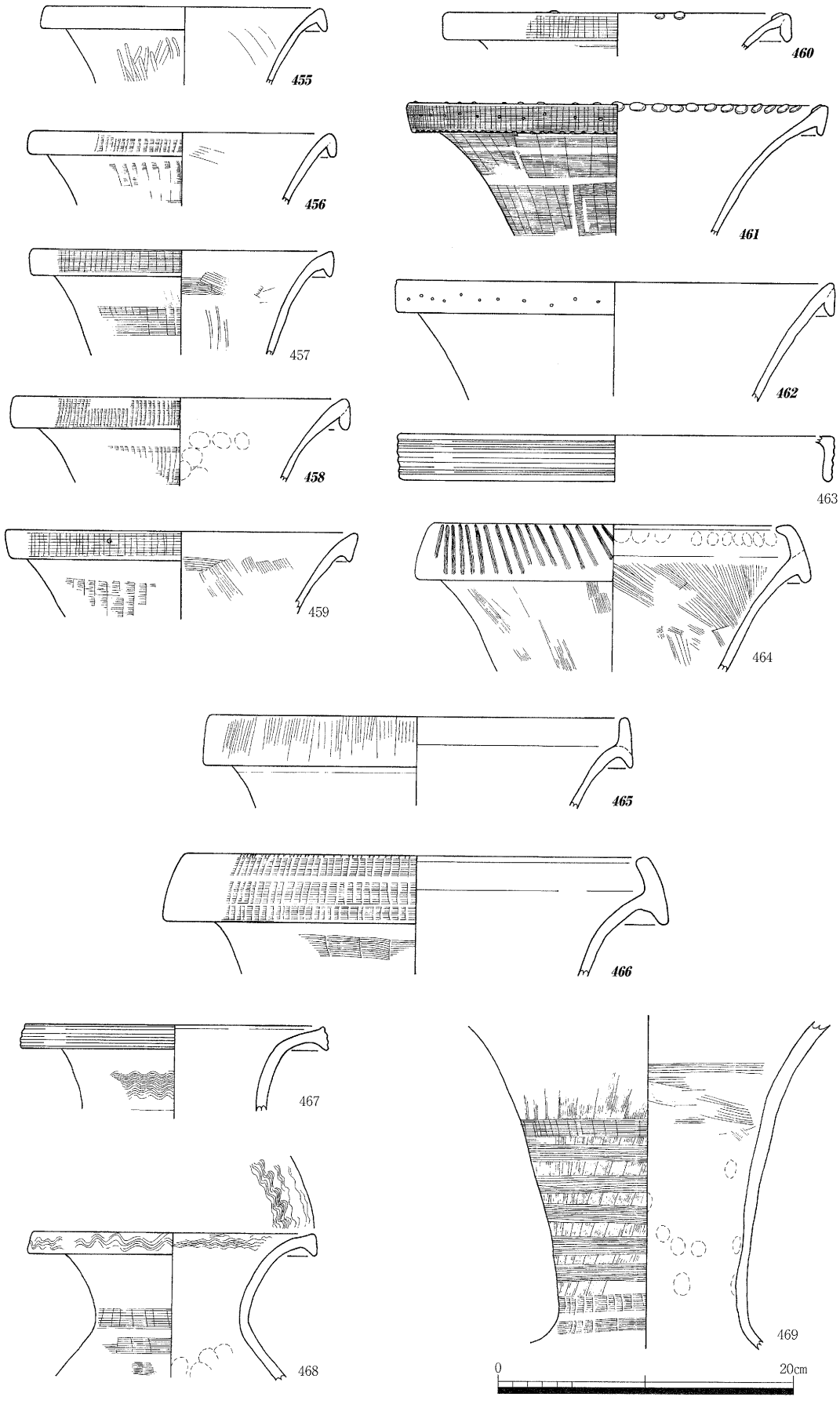
467・468は広口壺Ｅである。467は口縁端部に凹線文を、頸部には波状文、直線文を施文している。468は口縁部内外面に波状文を、頸部から体部には簾状文を施文している。469は壺の頸部である。口縁部と体部は欠損しているが、広口壺Ａ１の頸部であると考えられる。簾状文と直線文を施文している。

470～473は細頸壺で、頸部が内湾するもの（470・472）と直立するもの（471）がある。470は頸部外面に口縁部側から列点文、凹線文、波状文、直線文を施文している。472は口縁端部が内側に肥厚する。口縁部付近には列点文を施文し、その上から円形浮文を貼り付ける。頸部には簾状文を施文している。471は頸部外面に口縁部側から凹線文、列点文、波状文、直線文、簾状文と多様な文様を施文する。473は細頸壺の体部から頸部である。直線文と波状文を施文している。474は壺の底部である。外面には幅の広い縦方向のミガキ、内面にはハケを施している。

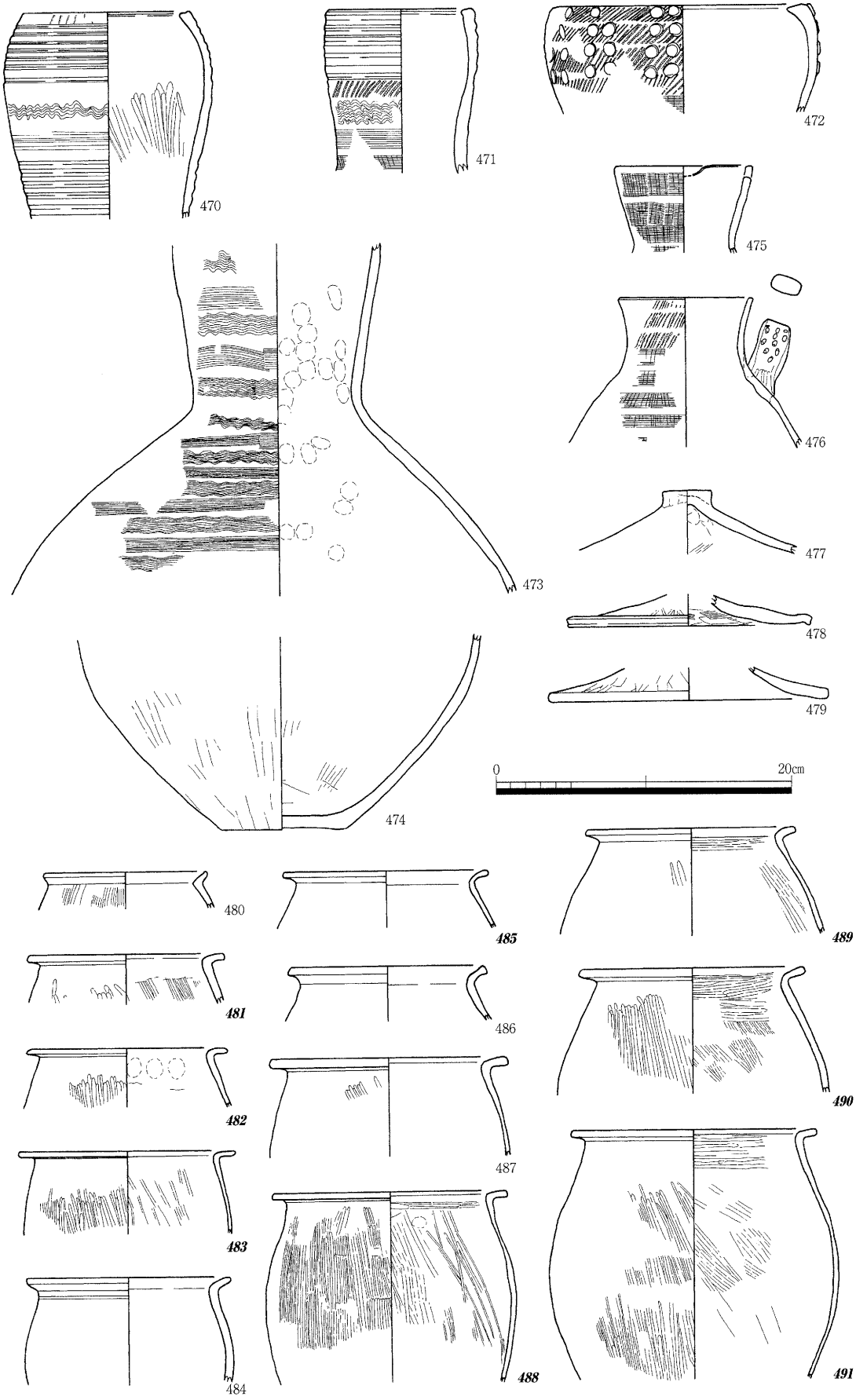
475・476は水差である。475は口縁部に抉りを施す。頸部外面には間隔のやや広い簾状文を施文している。476は頸部から体部外面に列点文と簾状文を施文する。把手は挿入法で体部に接合し、刺突を加えている。

477～479は蓋である。477の内面にはハケが残る。478は端部をわずかに下方向に拡張している。内面には粗いハケ、外面にはミガキを施している。479は外面にケズリを施している。

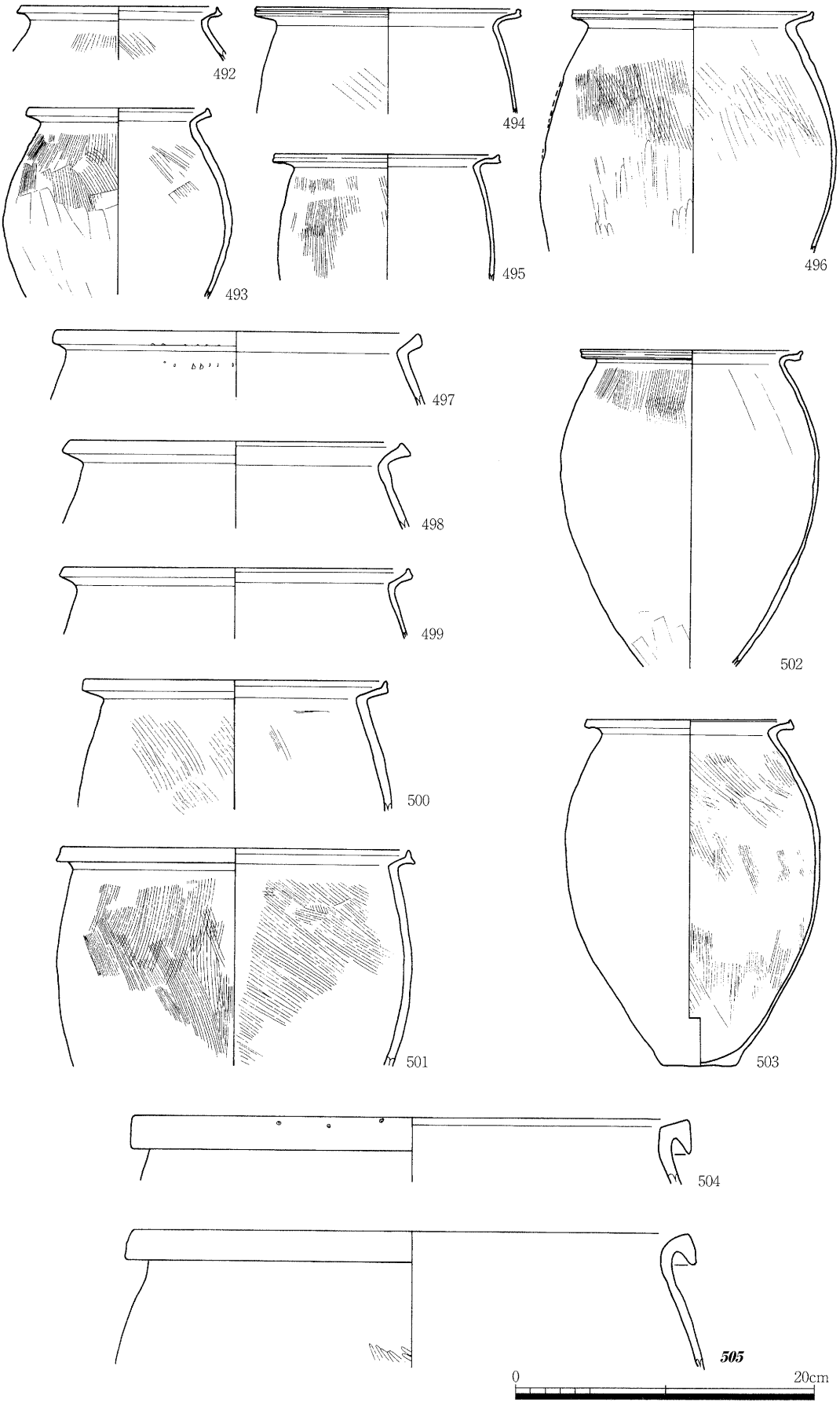
480～491は甕Ａである。480・481・484・486・490は頸部がくの字状に屈曲する。480は口縁端部をわずかに上方向につまみあげる。外面にはやや粗いハケを施す。481は外面に



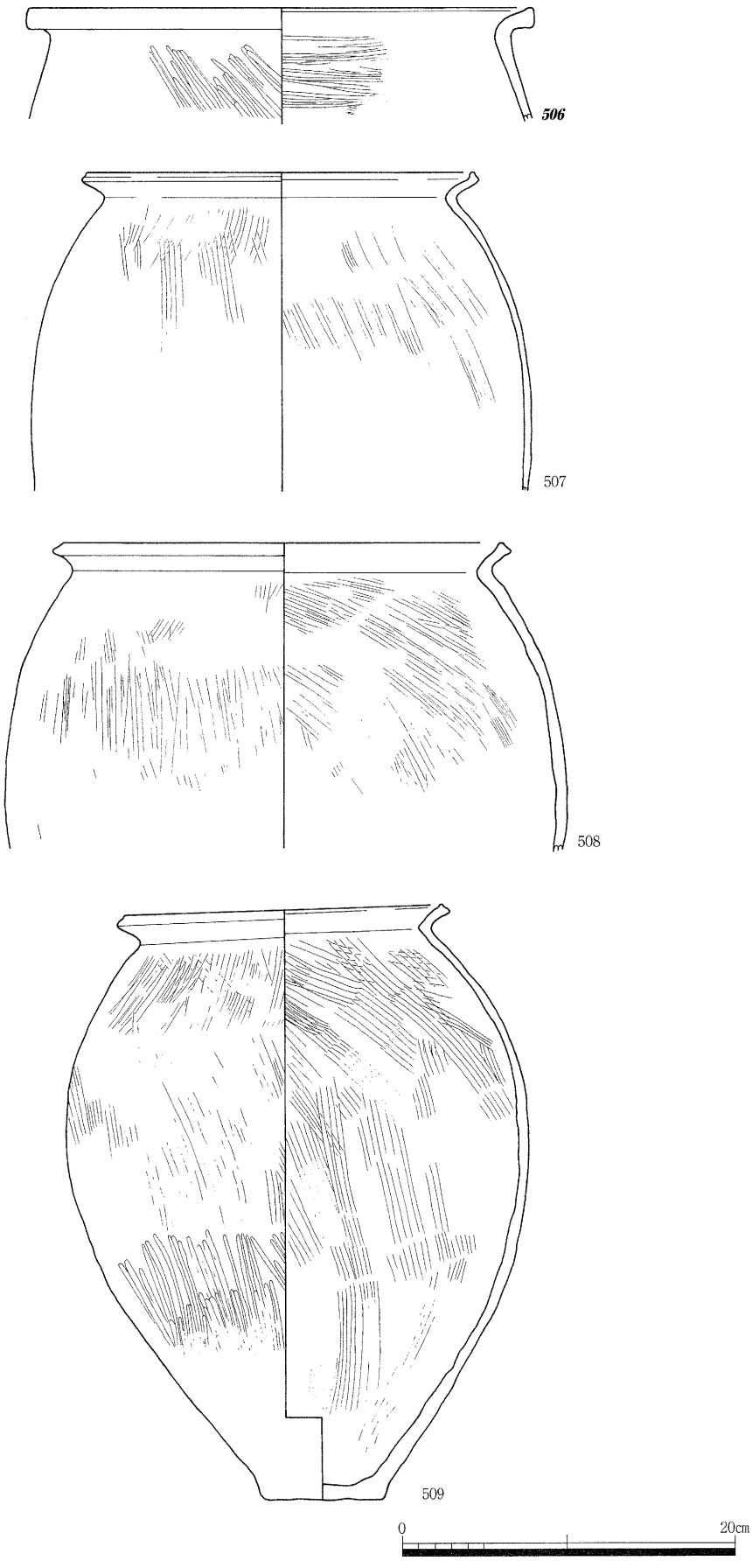
第143図　ＳＤ12出土土器①



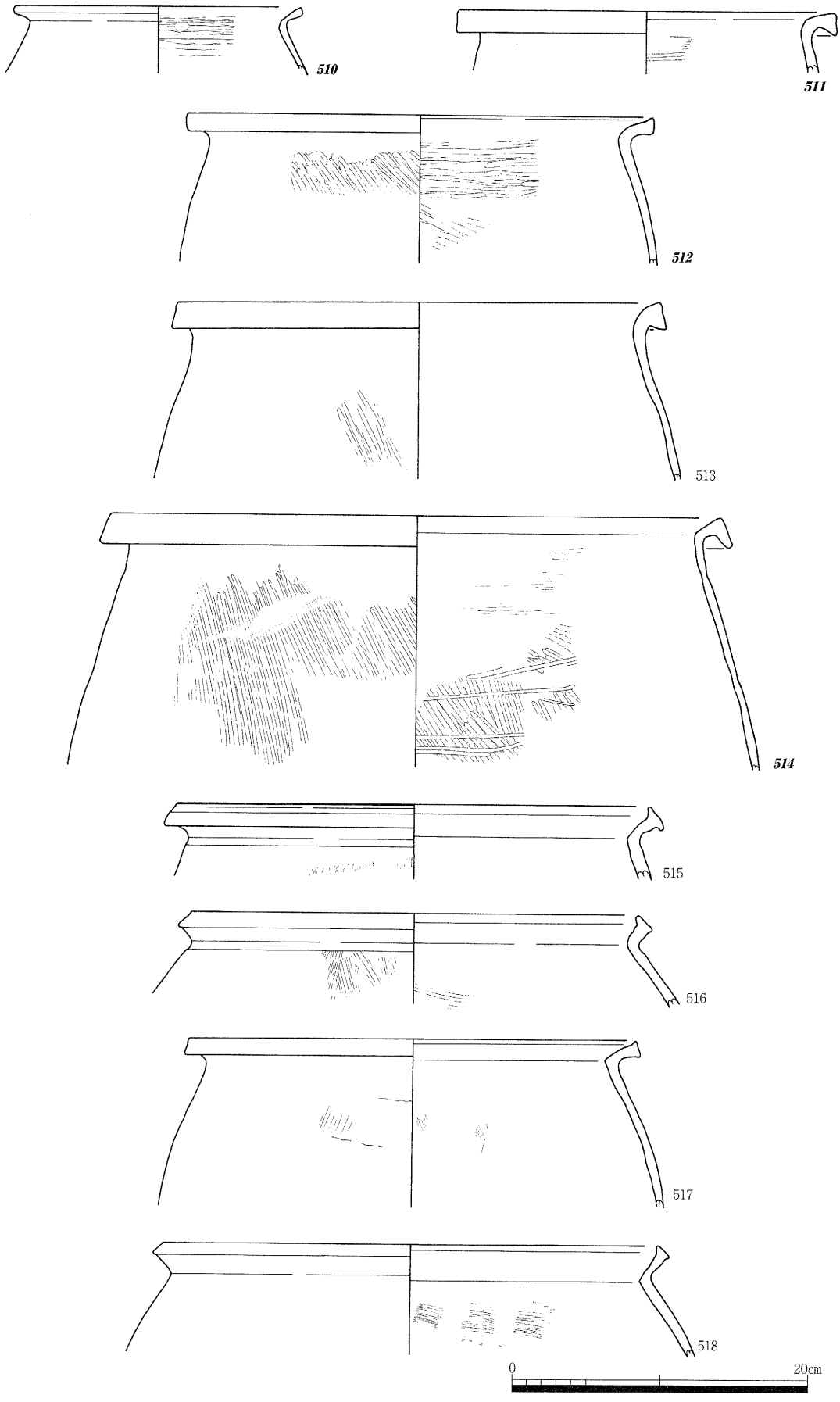
第144図　ＳＤ12出土土器②



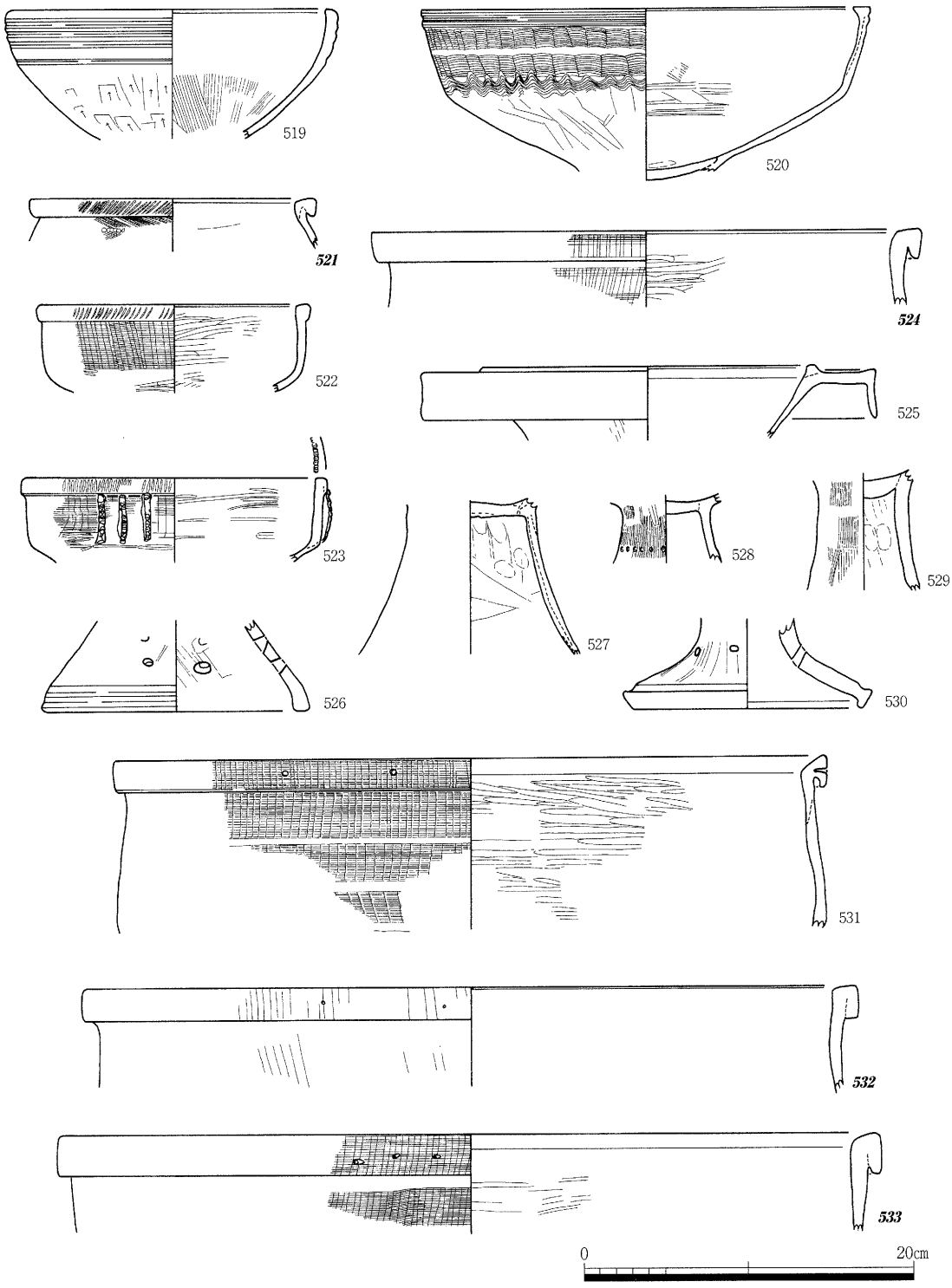
第145図　ＳＤ12出土土器③



第146図　ＳＤ12出土土器④



第147図　ＳＤ12出土土器⑤



第148図　ＳＤ12出土土器⑥

縦方向のミガキ、内面に細かい縦方向のハケを施す。484は頸部外面に沈線を巡らす。486は内外面にナデを施す。490は外面に縦方向のミガキを施し、内面は斜め方向のハケの後、口縁部付近に横方向のミガキを施している。482・483・487・488・491は頸部が逆Ｌ字状に屈曲する。482は内面に指押さえが残る。483は内外面に縦方向のミガキを施す。487は外面に縦方向のミガキを施す。488は外面に縦方向のミガキを施し、内面は縦方向のミガキの後、頸部付近に横方向のミガキを施す。491は外面に縦方向ミガキを施し、内面は斜

め方向のハケの後、口縁部付近を横方向のミガキを施している。485・489は頸部が緩やかに外反する。485は内外面にナデを施す。489は外面に縦方向のミガキ、内面の頸部付近に横方向のミガキ、下半部に縦方向のハケを施している。

492～496・498～503は甕Bである。492は内外面に粗いハケを施す。493は外面に粗いハケを施した後、下半部にケズリを施している。494の外面はミガキ、内面にはナデを施している。495の外面はやや細かいハケ、内面調整にはナデを施している。496は外面に粗いハケを施した後、下半部にミガキを施す。502は外面にやや粗いハケを施した後、底部付近を板ナデしている。503の外面は二次焼成のため劣化が激しく、調整は不明である。内面には粗いハケを施している。498～501は中型の甕Bである。498は内外面にナデを施し、500・501は内外面に粗いハケを施している。

497・504～506・510～514は甕Cである。497・506・510・512は口縁端部の下方向への拡張が顕著ではなく、肥厚する程度である。497の外面には櫛状工具の刺突文が巡る。506・512の外面には斜め方向に密にミガキを、内面には横方向にミガキ施す。510は内面に横方向のミガキを密に施す。511・513は口縁端部をやや下方向へ拡張しており、口縁端部の断面が逆三角形を呈する。511は内面に横方向にミガキを、513は外面に斜め方向のミガキを施している。504・505・514は口縁端部を長く下方向に拡張している。504は口縁部外面に刺突文を巡らす。505は外面に斜め方向のミガキを施している。514は内外面に斜め方向のミガキを施し、内面にはさらに横方向のミガキを施している。

507～509・515～518は甕Dである。いずれも内外面に粗いハケ、もしくはナデを施している。509は外面に粗いハケを施した後、体部下半にミガキを施している。

519・520は鉢Aである。519の鉢部は、底部から内湾しながら口縁部まで開く形態を呈する。口縁部に凹線を施し、鉢部下半部にケズリを施している。内面にはやや粗いハケを施す。520の鉢部は、口縁部が底部から屈曲して直線的に立ち上がる。口縁端部は内側に肥厚する。口縁部には凹線文、波打った稚拙な簾状文、波状文を施文し、下半部にケズリを施している。521～524・531～533は鉢Bで、小型のもの（521～523）と大型のもの（524・531～533）がある。521はやや高い段状に肥厚する口縁端部を持つ。列点文と刺突文を施文している。522、523は低い段状に肥厚する口縁端部を持つ。口縁端部外面にはヘラ状工具による刻目を施す。522は体部に幅が広く間隔の極めて短い簾状文を施文している。523は口縁端部の内側に刻目を加える。体部には簾状文の上から、棒状浮文を貼り付けている。524・531～533は大型の鉢Bで、いずれも口縁端部を下方向に長く拡張している。532・533は下方向に拡張した口縁端部が体部に密着している。524は幅の広い間隔の短い簾状文を施文する。531～533は口縁端部に簾状文を施文した後に、刺突文を巡らす。527・528は鉢の脚部である。528は脚部外面に縦方向のハケを施した後、竹管文を施文している。526も鉢の脚部である。裾部に凹線を施している。

525は高坏Bである。全体はにぶい黄褐色を呈するが、坏部内面の突帯のみ明赤褐色の

粘土を貼り付けている。坏部内面には化粧土を塗布している。529・530は高坏の脚部である。529は外面にやや細かい縦方向のハケを施している。坏部との接合方法は円盤充填法である。530は端部を内外に拡張している。外面にはミガキを施す。

604は凸基式石鏃である。基部と先端を欠損している。605は凹基式石鏃である。606は石剣の破片である。608は削器である。一部自然面を残す。以上の石器はサヌカイト製である。611は緑泥片岩製の石庖丁の破片である。

当該遺構出土土器は465・497・506・512がⅢ様式に遡る他は、Ⅳ様式に位置づけられる。

〔ＳＤ13～ＳＤ18〕（第149図、図版29～31）

１.遺構

Ｈ－ｃ６区を中心に位置する溝群である。これらの溝は、相互に関連が深いと考えられ、ここで一括して報告する。東方向10ｍには掘立柱建物であるＳＢ２があり、集落の中心的な場所に位置している。比較的標高が高い場所で、周囲の眺望が利く場所であった。各溝は幅0.5ｍ前後であり、深さは0.1ｍに満たないものが多い。しかし、上面の弥生時代の遺物包含層が削平されており、周囲の遺構の遺存状況も悪いことから、当初は、より深い溝であったことが推測できる。溝は、合計で６条検出されており、各溝は矩形に屈曲している場所がある。一辺９ｍ程度の方形区画が複数連接しているようにも見受けられる。区画内からは、直径0.2～0.4ｍのピットが多数検出されている。ピットの埋土と溝の埋土は、土質が近似しており、同時代に機能していた可能性が指摘できる。

各溝の埋土は、単層で構成されているものが多い。各溝の埋土の質は、弥生時代の遺物包含層や、弥生時代の遺構埋土に特有の暗褐色系の細砂～シルトであった。

２.遺物

ＳＤ13（第150図、図版68）

当該遺構からは、広口壺Ａ（534・535）、細頸壺（536）、甕Ａ（538）が出土した。いずれも細片である。

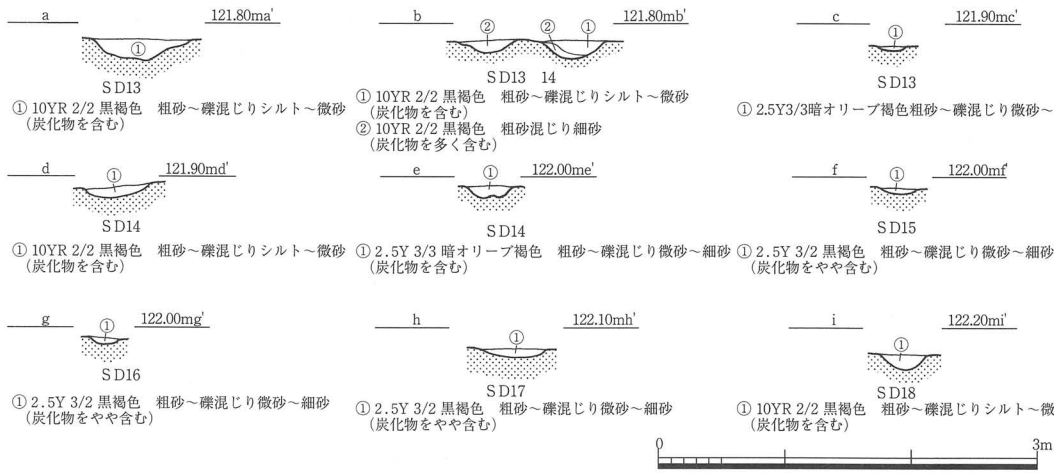
534・535は広口壺Ａである。両者とも口縁端部を下方向へ垂直に拡張している。534は間隔のやや短い簾状文を施文する。535は間隔の極めて短い簾状文を施文している。536は細頸壺である。口縁部側から波状文、円形浮文、凹線文の順に施文している。

538は甕Ａである。頸部は逆Ｌ字状に屈曲している。

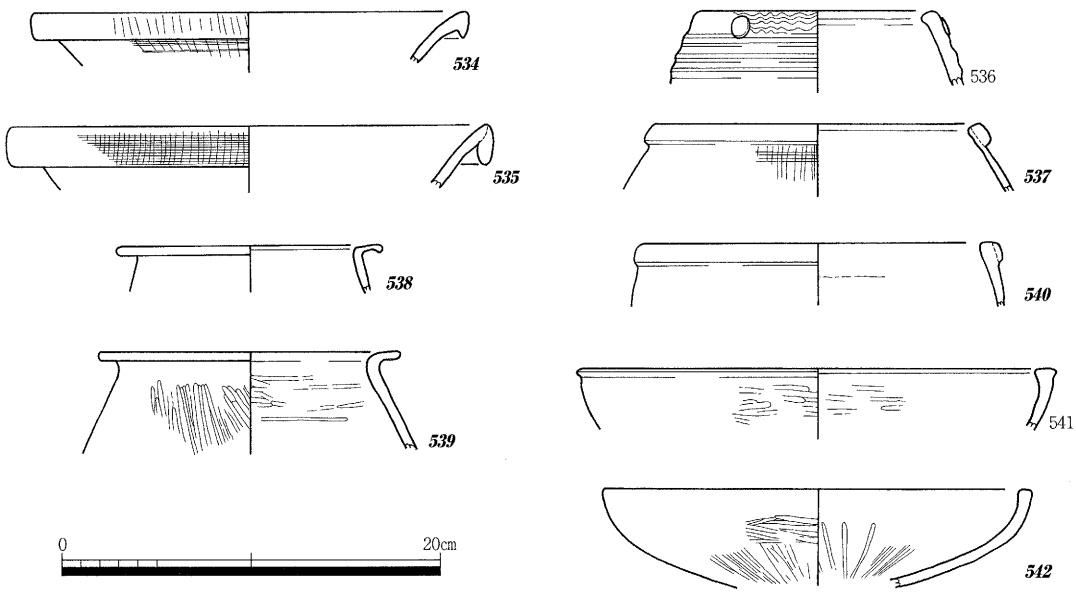
当該遺構出土遺物はⅣ様式に位置づけられる。

ＳＤ14（第150・164図、図版68・101）

ＳＤ14からは無頸壺（537）、甕Ａ（539）、鉢Ｂ（540）、高坏Ａ（541・542）、石庖丁（609）が出土した。いずれも細片である。



第149図　ＳＤ13～18平面図（1/120）・土層断面図（1/60）



第150図　ＳＤ13・14出土土器

537は無頸壺である。口縁端部は段状に肥厚する。体部には幅が広く間隔の短い簾状文を施文している。

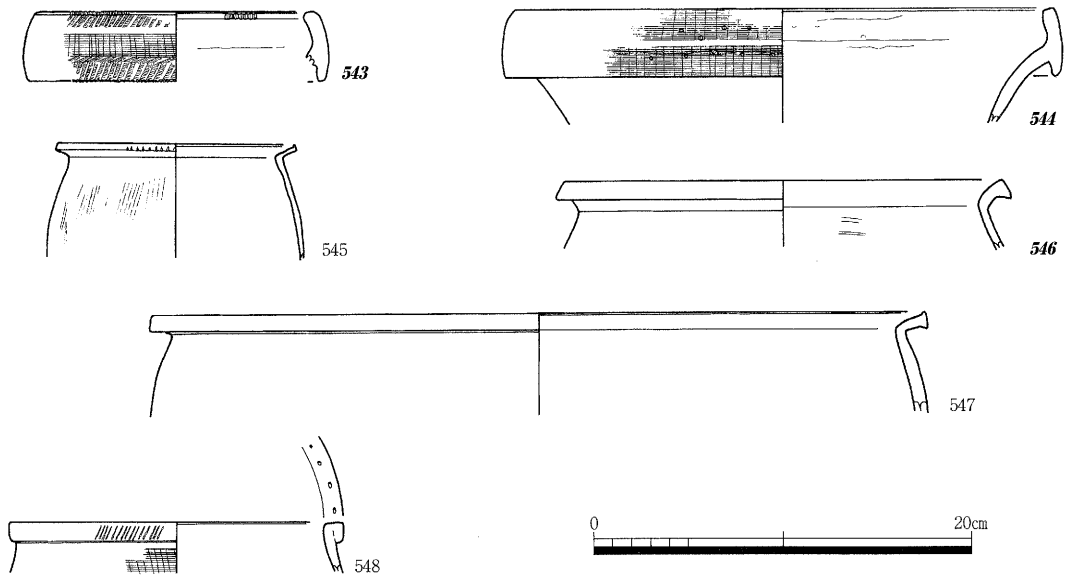
539は甕Ａである。口縁部は逆Ｌ字状に屈曲する。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施している。

540は鉢Ｂである。口縁端部は低く段状に肥厚する。無文である。

541・542は高坏Ａである。541は坏部が底部から内湾しながら開く形態を呈する。口縁端部は内外に肥厚する。内外面には横方向のミガキを施す。542は、口縁部が坏部低部から屈曲して立ち上がる形態の坏部を持つ。外面には底部に縦方向のミガキ、口縁部に横方向のミガキ、内面は放射状のミガキを施している。

609は緑泥片岩製の石庖丁の破片である。

当該遺構から出土した土器はⅣ様式に位置づけられる。



第151図　ＳＤ17出土土器

ＳＤ17（第151図、図版68）

当該遺構からは、広口壺Ｂ（543・544）、甕Ｂ（545）、甕Ｃ（546）、甕Ｄ（547）、鉢Ｂ（548）が出土している。いずれも細片である。

543は小型の広口壺Ｂ１である。上下に拡張した口縁端部はやや内湾する。外面には列点文と簾状文を施文し、口縁端部上端の内外に刻目を加える。544は、広口壺Ｂ１である。上方向に拡張した口縁端部はほぼ直立する。外面には２段にわたって簾状文を施文し、その上から刺突文を巡らす。

545は甕Ｂである。口縁端部下端に刻目を加える。体部外面には縦方向の粗いハケを施す。546は甕Ｃである。口縁端部はやや下方向に拡張している。547は甕Ｄである。口縁端部を上下にわずかに拡張している。

548は鉢Ｂである。口縁端部は低い段状に肥厚する。口縁部には列点文、体部には簾状文を施文する。平坦面を持った口縁端部上面には刺突文を巡らしている。

当該遺構出土遺物はⅣ－１～２様式に位置づけられる。

〔ＳＤ19〕（第152図）

Ｈ－ｂ４区に位置している。西方向10ｍにはＳＩ18が位置し、北方向に５ｍには方形周溝墓群が位置している。上層には弥生時代の包含層が遺存していたので、削平は受けていない可能性が高い。溝は、弧状に巡るが、中央で分岐し突出部を形成している。規模は幅２ｍ、深さ0.12ｍであり、長さ14.5ｍにわたり検出した。溝の断面は、Ｕ字形を呈している。底部はほぼ平らであった。堆積は、ほぼ一層であり、遺物包含層と近似した土によって埋没していた。

〔ＳＤ20・21〕（第153～156・164図、図版67～69・101）

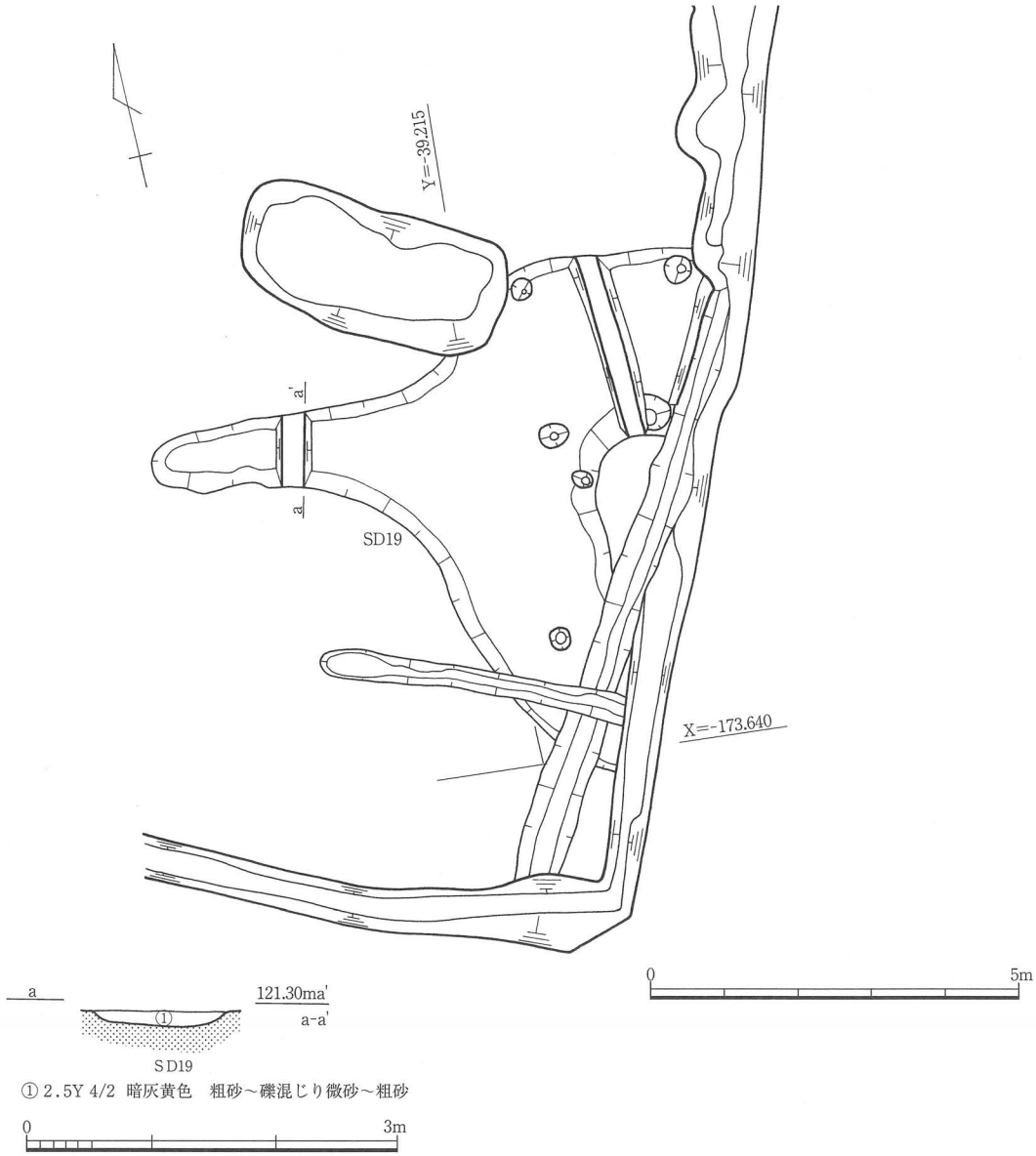
１.遺構

Ｌ－ｊ２区を中心に位置している。東方向10ｍにはＳＩ28が位置し、西方向10ｍには、ＳＩ24が位置している。上層に弥生時代の遺物包含層は遺存しておらず、上部は大幅に削平を受けているとみられる。近世の遺構と攪乱によって、破壊されている部分が多いが、ＳＤ20とＳＤ21は、約１ｍの間隔をあけて並行し、弧状に巡る。規模は双方とも幅１～２ｍであり、長さ14.5ｍにわたり検出した。溝は断面が皿状を呈する。堆積は、東西双方から土が流れ込み埋まった状況を呈する。

２．遺物

ＳＤ20からは、広口壺Ａ体部（549）、広口壺体部（550・551）、甕Ｃ（552・553）が出土した。

549は広口壺Ａの体部から頸部である。体部は強く張り出す形態を呈する。口縁部は欠



第152図　ＳＤ19平面図（1/100）・土層断面図（1/60）

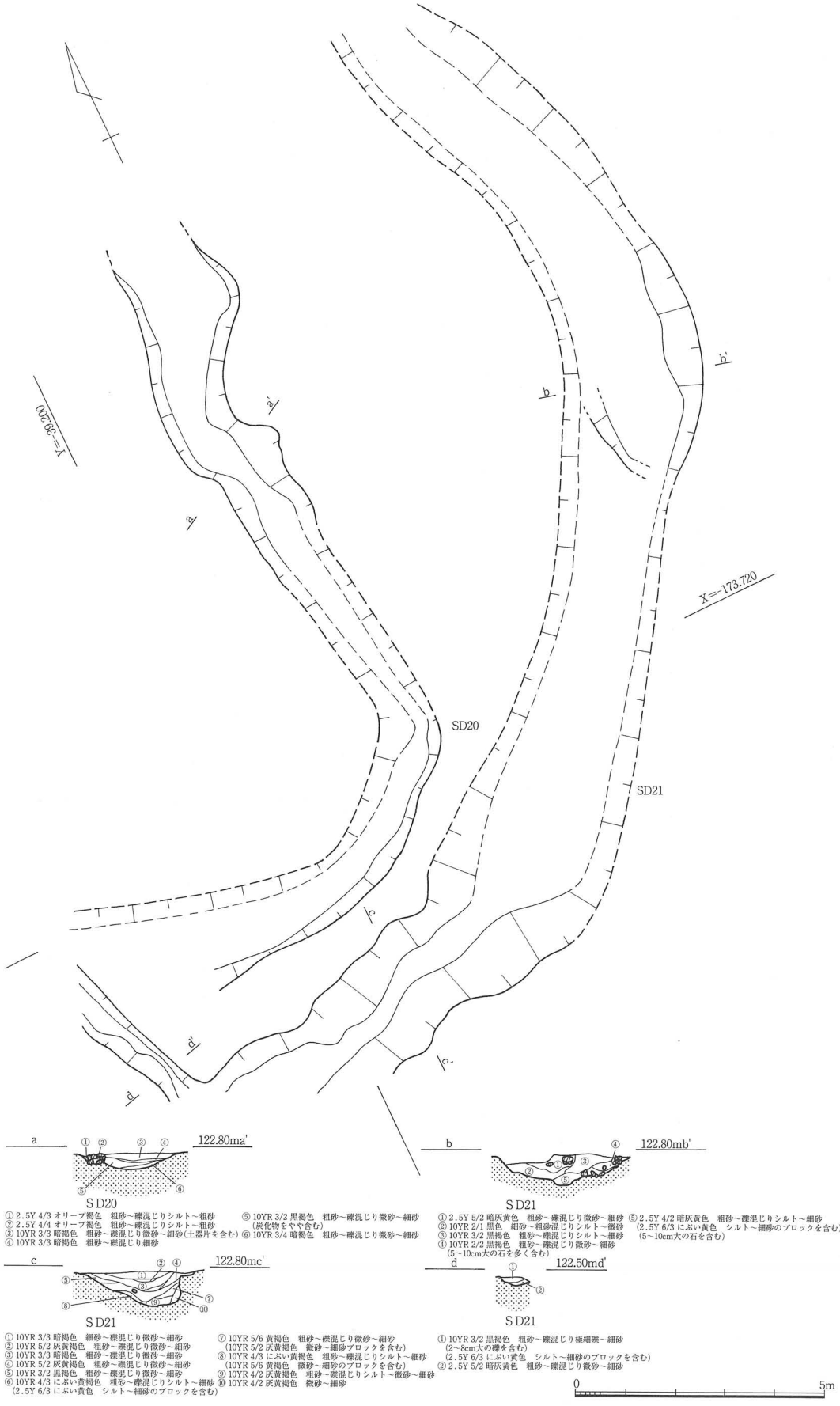
損しているが漏斗状に開くと考えられる。頸部から体部外面には幅の広い間隔の短い簾状文を施文し、その上から円形浮文を貼り付けている。551は細頸壺もしくは、小型の広口壺Ａの体部である。底部外面にまでミガキが施されている。底部は穿孔している。

552・553は甕Ｃである。両者とも口縁端部を下方向にやや拡張しており、口縁端部の断面が逆三角形を呈する。553は外面に密にミガキを施している。ＳＫ69から出土した破片と接合した。

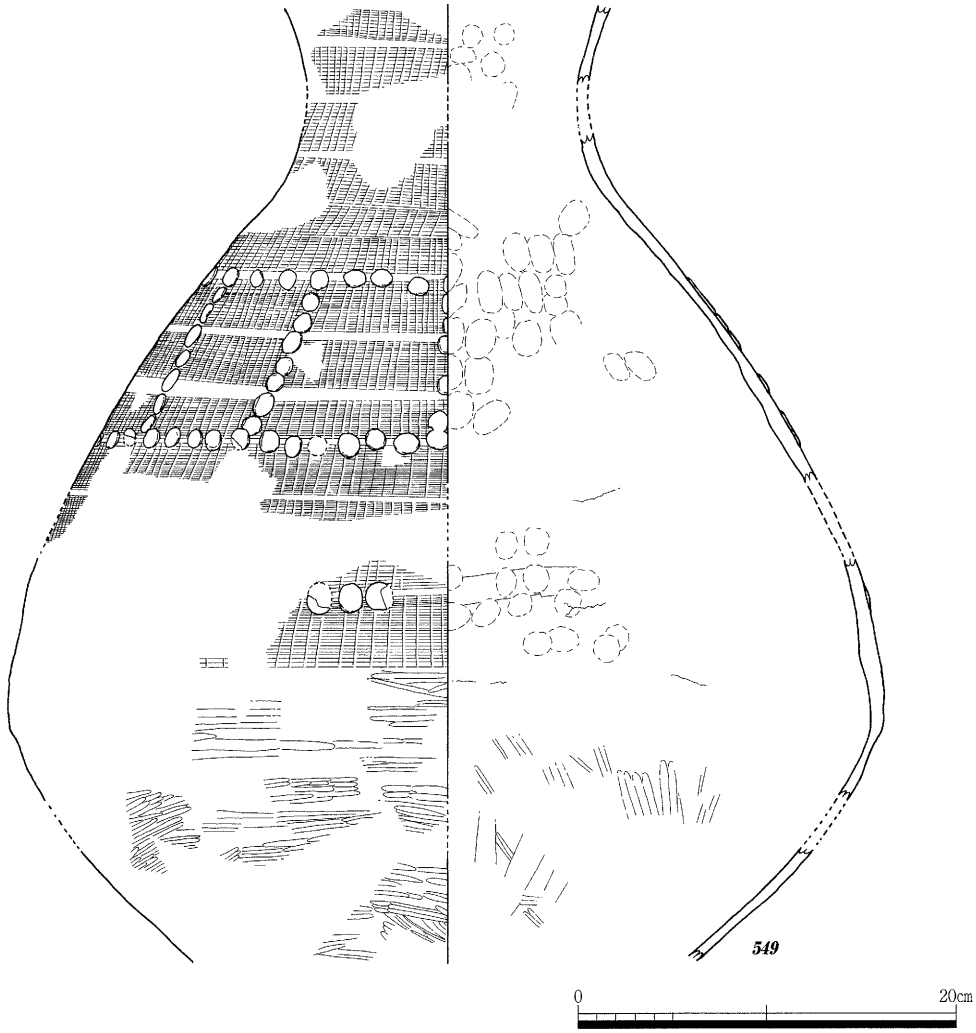
当該遺構出土遺物はⅣ－１～２様式に位置づけられる。

ＳＤ21からは、甕Ｃ（554）、甕Ｄ（555）、高坏Ａ（559）、石庖丁（610）等が出土した。

554は甕Ｃである。口縁部を下方向にやや拡張しており、口縁端部の断面がシャープな三角形を呈する。口縁部外面には刺突文を施し、端部下端には凹線状の窪みを巡らす。内外面にはナデを施している。555は甕Ｄである。上下に拡張した口縁端部には凹線を施す。



第153図　ＳＤ20・21平面図・土層断面図（1/120）



第154図　ＳＤ20出土土器①

内外面に粗いハケを施し、外面下半部にはミガキを施している。556・557はいずれも甕Ｄの底部と考えられる。557の底部は上げ底である。外面には幅の広いミガキを施している。556の外面にはミガキ、内面にはやや粗いハケを施している。558は壺の底部である。内外面はナデで仕上げている。

560・561は鉢の脚部である。560は円形透を穿孔する。鉢部との接合は円盤充填法である。561は裾部に凹線文を施文している。内面にはケズリを施している。

559は高坏Ａである。口縁部外面には凹線文を施文する。

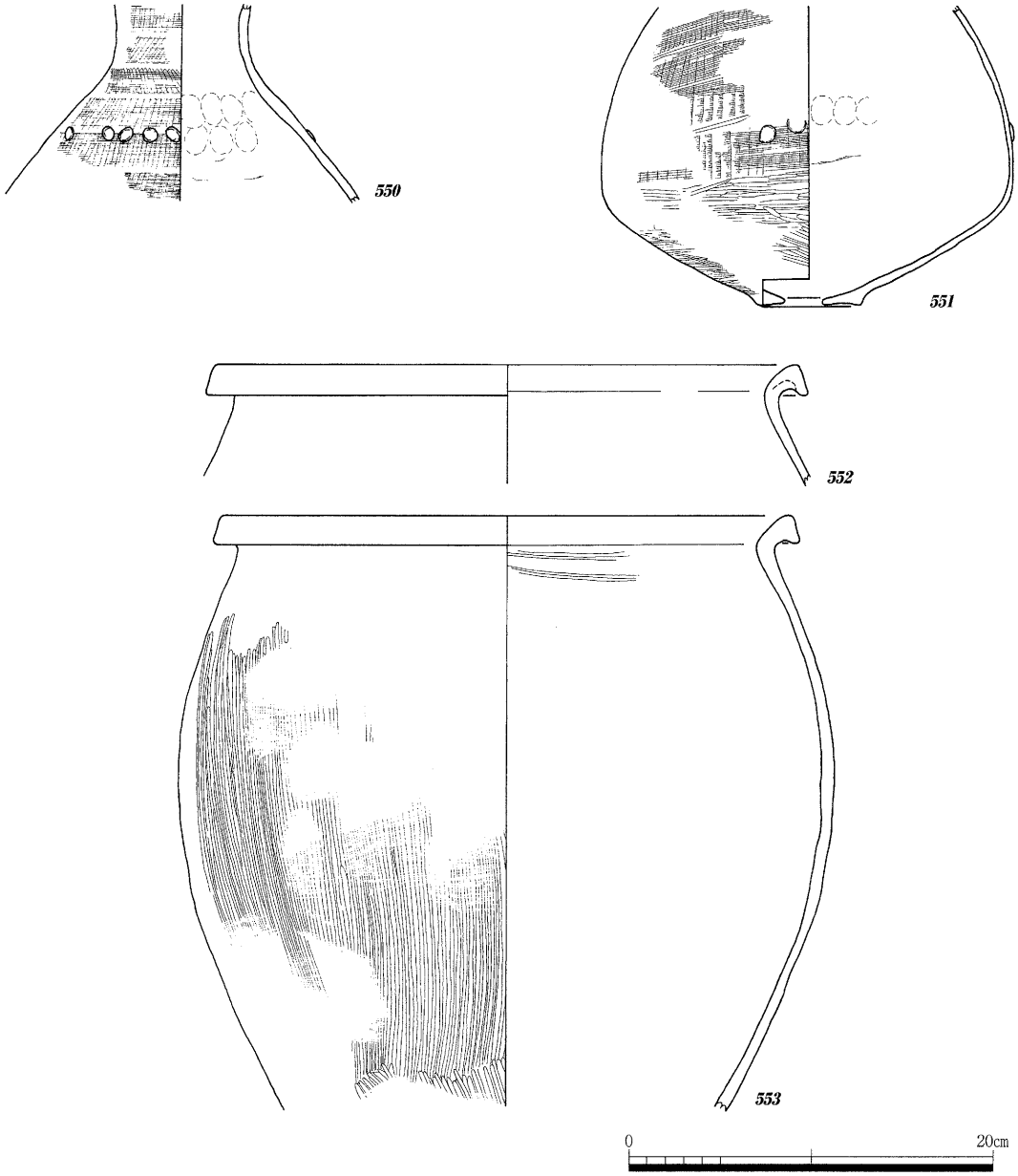
610は石庖丁の破片である。緑泥片岩製である。

当該遺構出土遺物はⅣ－１～２様式に位置づけられる。

〔ＳＤ22〕（第157・158図、図版31・69）

１．遺構

Ｌ－ｇ２区からＬ－ｈ１区にかけて位置する溝である。周囲には、南方向３ｍにＳＤ23が位置する。上層に遺物包含層は遺存しておらず、上部は大幅に削平を受けているとみら



第155図　ＳＤ20出土土器②

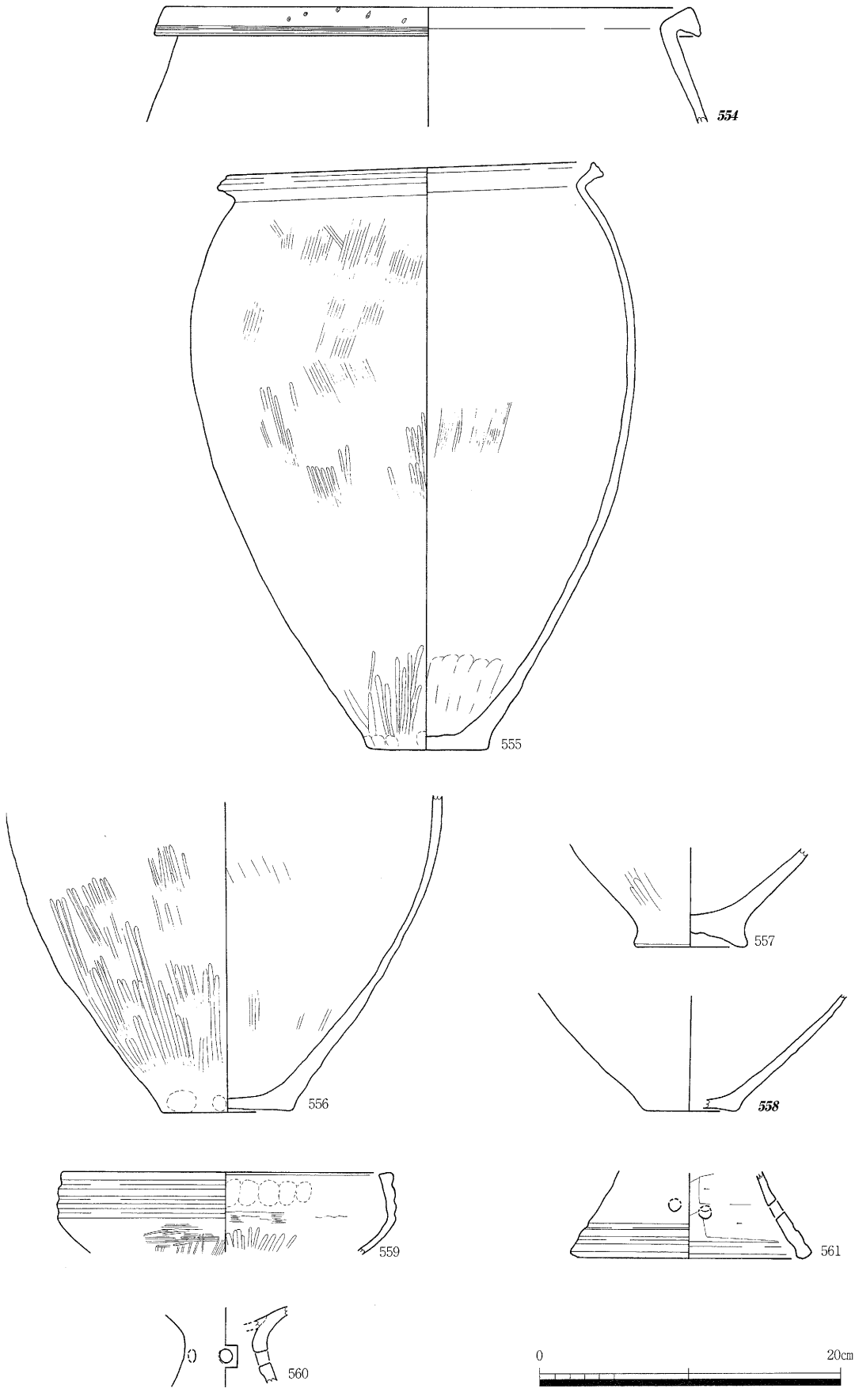
れる。溝は、東から西へ直線的に伸びている。検出面の標高は123.95ｍである。規模は幅１～２ｍ、深さ0.6ｍであり、長さ5.5ｍにわたり検出した。溝の断面は起伏に富む。溝底部は東部が高く、西部に向かって低くなっていた。埋土は、下層で礫まじりの砂が堆積しており、流水があったことが窺える。

２．遺物

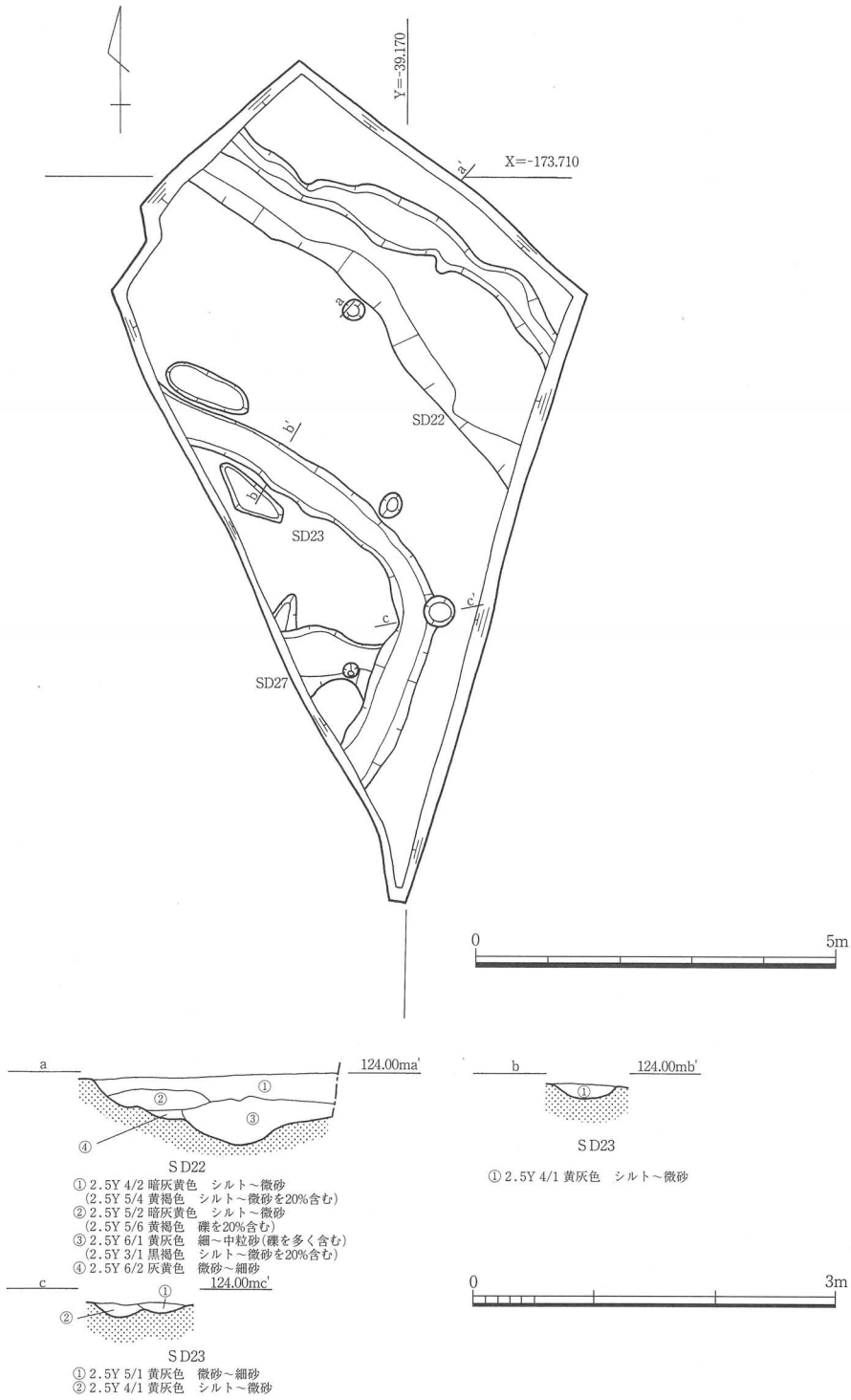
562は須恵器坏蓋のつまみである。563は須恵器坏身である。

〔ＳＤ23〕（第157・158図、図版31・69）

１．遺構

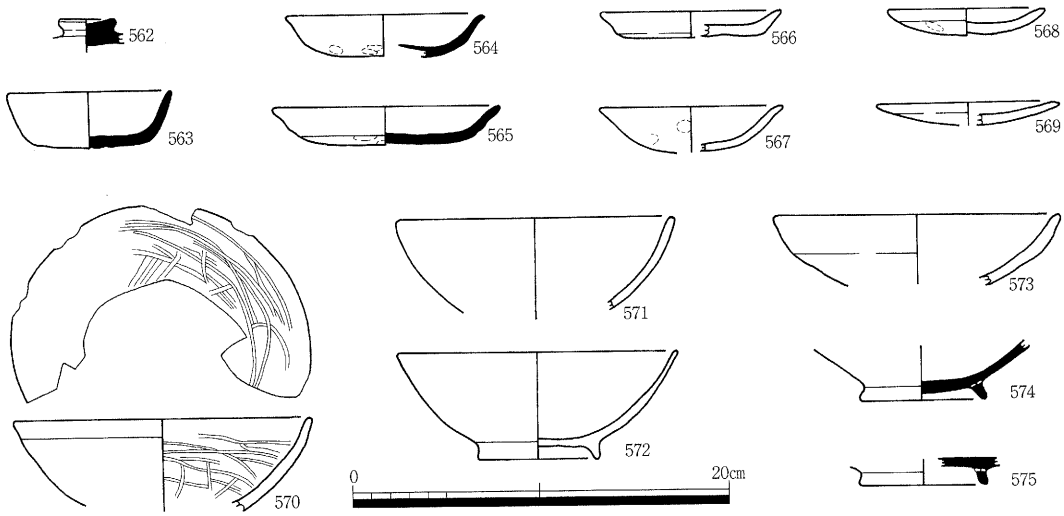


第156図　ＳＤ21出土土器



第157図　ＳＤ22・23・27平面図（1/100）・土層断面図（1/60）

Ｌ－ｈ２区からＬ－ｈ２区にかけて位置する溝である。周囲には、北方向３ｍにＳＤ22が位置する。上層に遺物包含層は遺存しておらず、上部は大幅に削平を受けているとみられる。溝は、南から西へ矩形に屈曲している。検出面の標高は123.90ｍである。規模は幅0.4～0.6ｍ、深さ0.15ｍであり、長さ6.6ｍにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈し



第158図　ＳＤ22・23出土土器

ている。溝底は西部が高く、南部に向かって低くなっていた。埋土は、ほぼ１層からなっていた。

２.遺物

当該遺構からは土師皿（566～569・573）、黒色土器埦（570～572・574・575）、黒色土器の皿（564・565）が出土している。

566～569・573は土師皿である。570～572は黒色土器の埦である。570は内面に暗文が施されている。574・575は黒色土器埦の底部である。564・565は黒色土器の皿である。564はやや焼成が甘く、断面が橙色を呈する。

いずれも11世紀の所産であると考えられる。

〔ＳＤ24・25・26〕（第159～162図、図版32・69～71）

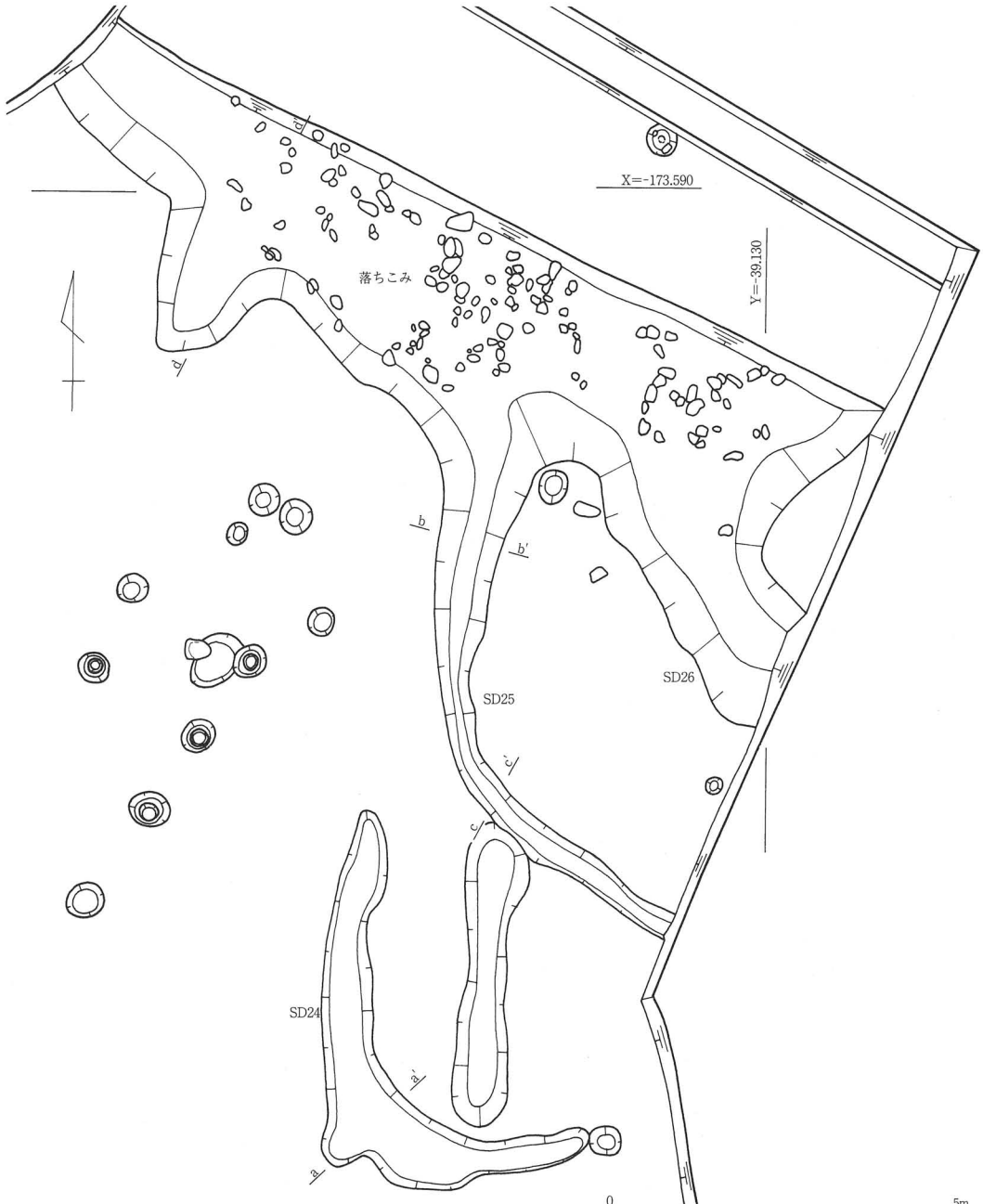
１．遺構

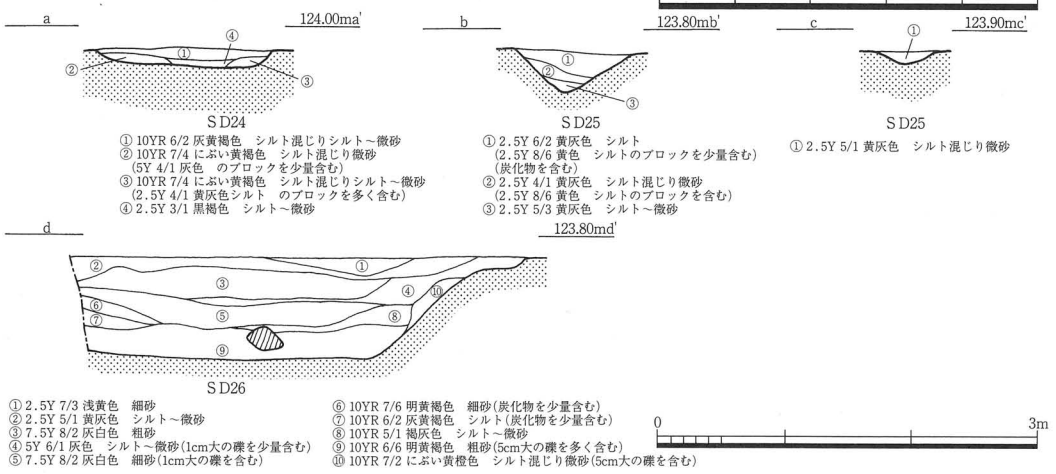
Ｂ－ｄ10区を中心に位置する溝群である。西側には庄内期の竪穴住居であるＳＩ31が位置している。上層にはＶ様式～庄内期の遺物包含層が遺存していたので、削平による影響はないものと思われる。溝は、北側で検出した落ち込みに接続している。溝底の標高は、南部が高くなっており、北部に向かって低くなっている。

２．遺物

ＳＤ24からは、長頸壺（576）、Ｖ様式系甕（577～585）、鉢（586）、高坏（587）が出土している。これらは、比較的破片がまとまった状態で出土したため、図化を行った後、取り上げを行った。

576は長頸壺である。口縁部は欠損しているが直立するタイプであると考えられる。体部の断面が横方向に長い楕円形を呈する。





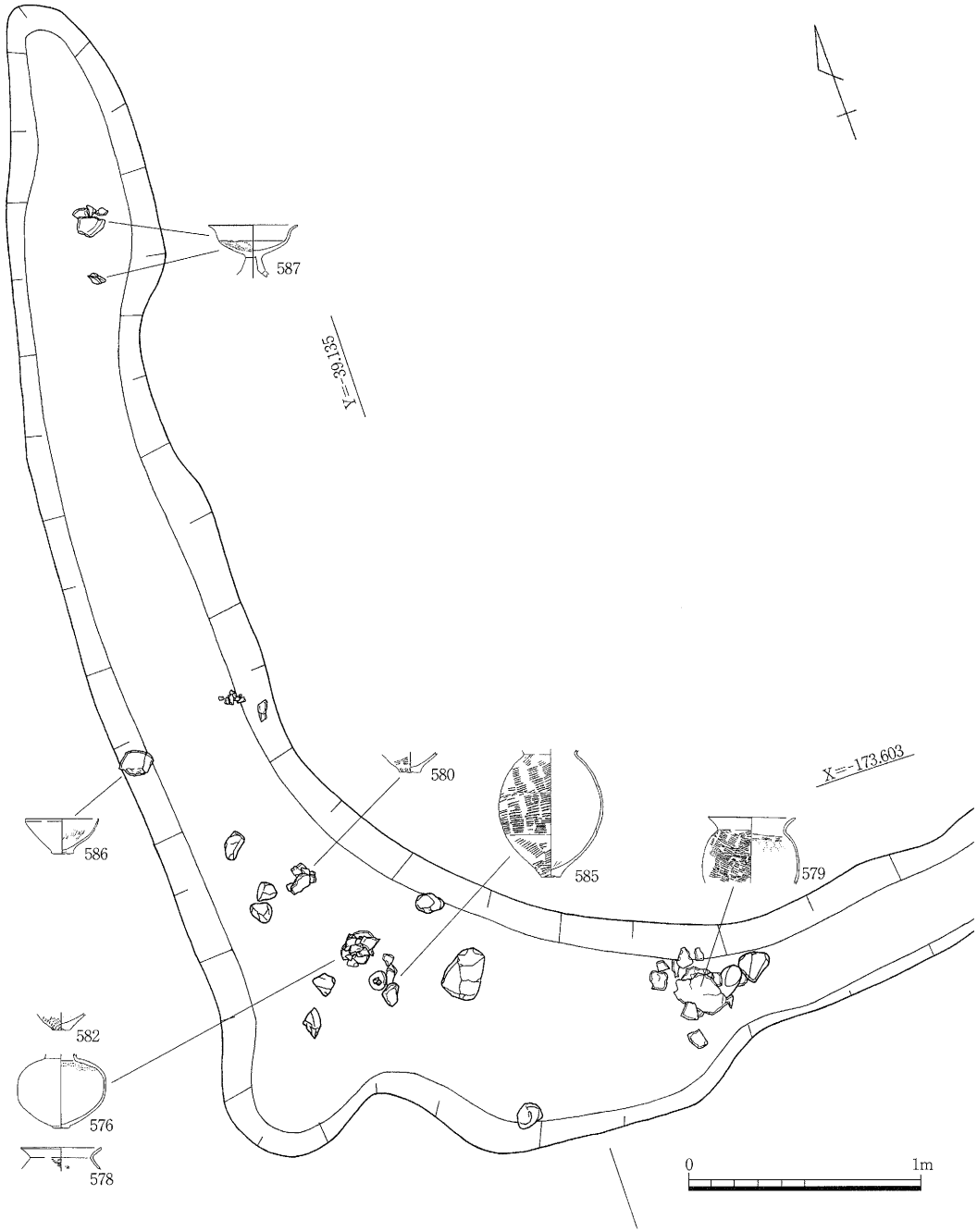
① 10YR 6/2 灰黄褐色　シルト混じりシルト～微砂
② 10YR 7/4 にぶい黄褐色　シルト混じり微砂
(5Y 4/1 灰色　のブロックを少量含む)
③ 10YR 7/4 にぶい黄褐色　シルト混じりシルト～微砂
(2.5Y 4/1 黄灰色シルト　のブロックを多く含む)
④ 2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～微砂

① 2.5Y 6/2 黄灰色　シルト
(2.5Y 8/6 黄色　シルトのブロックを少量含む)
(炭化物を含む)
② 2.5Y 4/1 黄灰色　シルト混じり微砂
(2.5Y 8/6 黄色　シルトのブロックを含む)
③ 2.5Y 5/3 黄灰色　シルト～微砂

① 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト混じり微砂

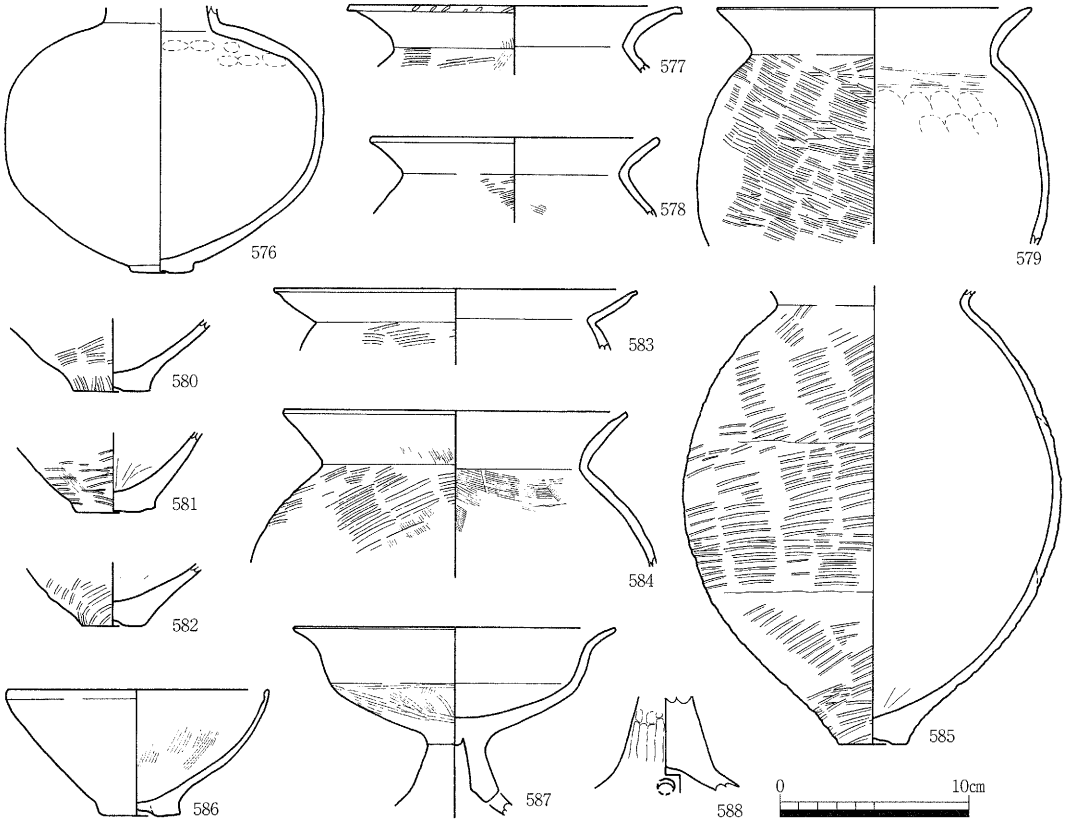
① 2.5Y 7/3 浅黄色　細砂
② 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂
③ 7.5Y 8/2 灰白色　粗砂
④ 5Y 6/1 灰色　シルト～微砂(1cm大の礫を少量含む)
⑤ 7.5Y 8/2 灰白色　細砂(1cm大の礫を含む)
⑥ 10YR 7/6 明黄褐色　細砂(炭化物を少量含む)
⑦ 10YR 6/2 灰黄褐色　シルト(炭化物を少量含む)
⑧ 10YR 5/1 褐灰色　シルト～微砂
⑨ 10YR 6/6 明黄褐色　粗砂(5cm大の礫を多く含む)
⑩ 10YR 7/2 にぶい黄橙色　シルト混じり微砂(5cm大の礫を含む)

第159図　ＳＤ24～26平面図（1/100）・土層断面図（1/60）



第160図　ＳＤ24遺物出土状況図（1/30）

577～585はＶ様式系甕である。577～579・583・584は頸部がくの字状に屈曲する。579以外はいずれも右上がりのタタキを施している。577は口縁端部に刻目を加える。579は左上がりのタタキを施している。583の頸部は鋭い稜をもつ。口縁部はわずかに内湾気味である。584は外面にハケの上からタタキを施している。585は甕の体部である。低部は小さな上げ底で、体部は中位に最大径をもつ。外面には右上がりのタタキを施し、分割成形時の接合痕が顕著に残っている。580～582は甕の底部である。いずれも外面には右上がりのタタキを施している。580・582の底部は上げ底である。



第161図　ＳＤ24・25出土土器

586は鉢である。上げ底の底部に緩やかに内湾して開く口縁部を持つ。内面には縦方向のハケを施す。

587は高坏である。坏部は、底部から屈曲して口縁部が外反する形態を呈する。外面には坏部底部にハケの後ミガキを施している。裾部には４方向に円形透を穿つ。坏部と脚部の接合方法は、坏部内面から棒状の粘土を挿入した円盤充填法である。

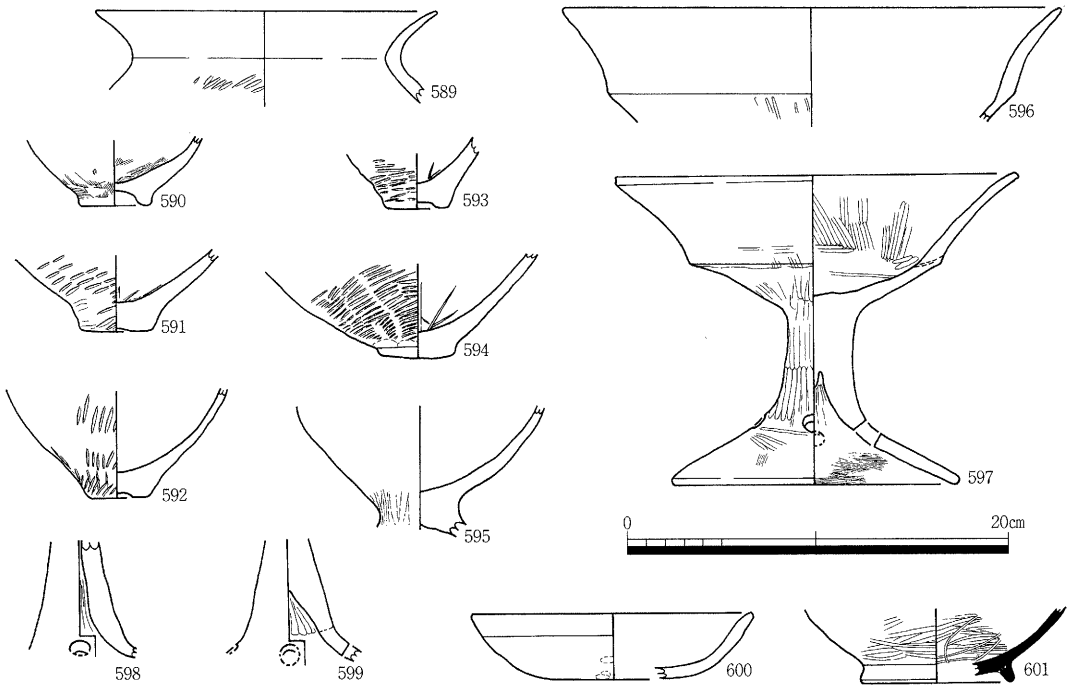
当該遺構から出土した土器はＶ様式末に位置づけられる。

ＳＤ25からは高坏の脚部が１点（588）出土した。脚柱部は中実で、裾部には円孔透を穿つ。外面にはミガキを施している。

ＳＤ26からはＶ様式系甕（589～594）、高坏（595～599）が出土している。

589はＶ様式系甕である。くの字状に屈曲する頸部を持ち、口縁端部ほど器壁が薄くなっている。非常に硬緻に焼しまっており、灰色を呈する部分もある。底部（590～594）は、上げ底のもの（590～593）と、小さな平底に大きく開く体部をもつもの（594）がある。593は底部を工具で抉り、上げ底に仕上げている。外面には、590がハケを施す以外は、いずれも右上がりのタタキを施している。592は底部に右上がりのタタキの上から縦方向のタタキを施している。

595～599は高坏である。595は口縁部と裾部を欠いているが、椀状の坏部を持ち、低脚で裾部が大きく広がるタイプのものと考えられる。脚部外面には縦方向のミガキを施し、内面には板状工具の当りが残る。596・597は坏部の形態が、底部から屈曲して、口縁部が



第162図　ＳＤ26・27出土土器

外反するタイプである。596は坏部外面に縦方向のミガキを施す。597は外面にハケを施した後、口縁部と裾部にはナデ、脚部と坏部底部には縦方向のミガキを施している。脚柱部上部は中実で、内面には絞り目が残る。脚部（598・599）は、内面に絞り目が残る。

以上の当該遺構出土土器は庄内期に位置づけられる。

〔ＳＤ27〕（第157・162図、図版70）

１.遺構

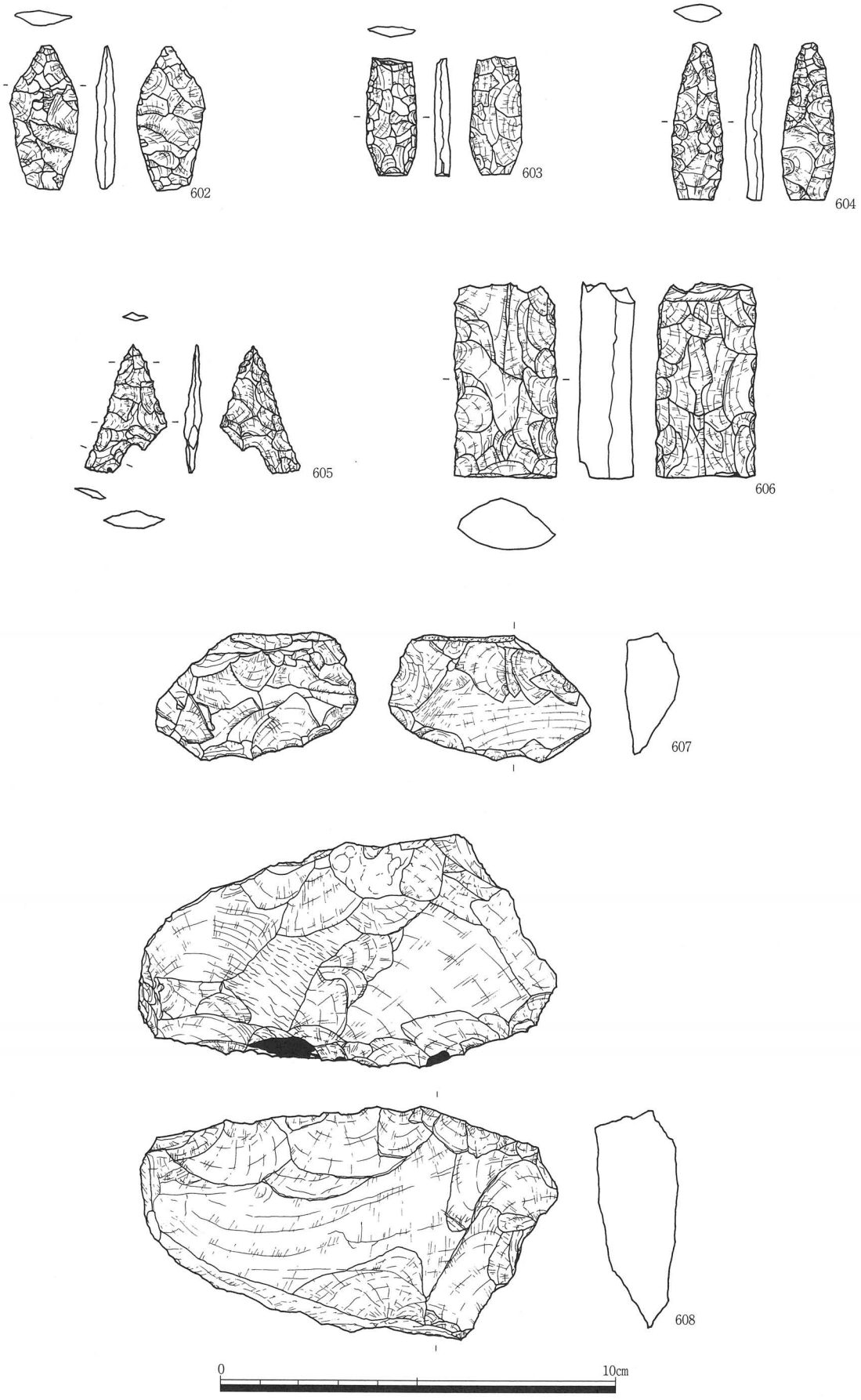
Ｌ－ｈ２区に位置する溝である。上層に包含層は遺存しておらず、上部は、後世の造成に伴って、大幅に削平を受けているとみられる。溝は、直線的にのびている。検出面の標高は123.90ｍである。規模は幅0.7ｍ、深さ0.1ｍであり、長さ１ｍにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。底部は南東が高くなっており、北西に向かって低くなっていた。

２.遺物

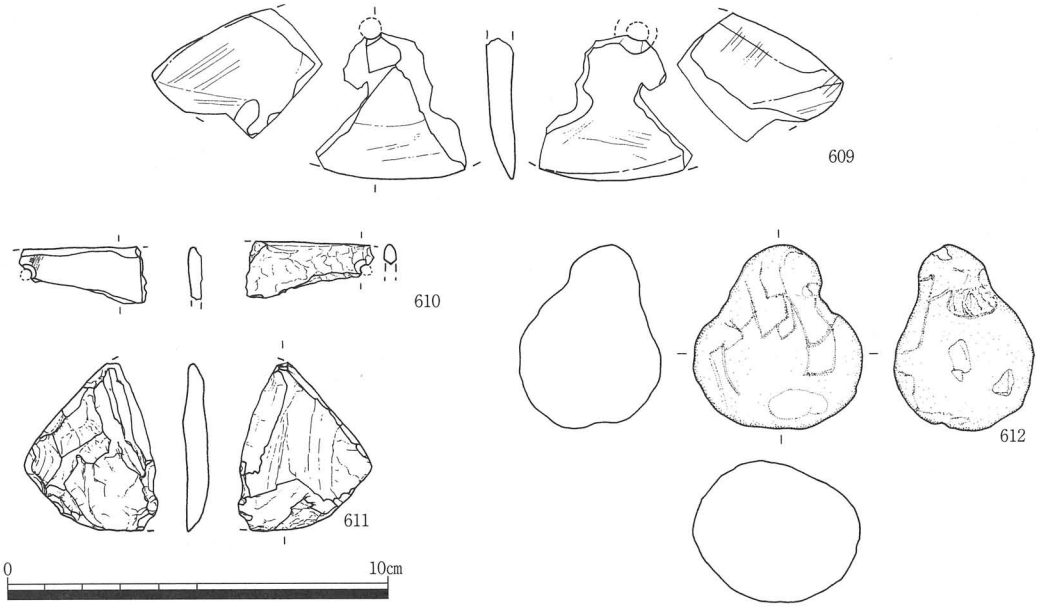
土師皿（600）と瓦器椀（601）が出土している。

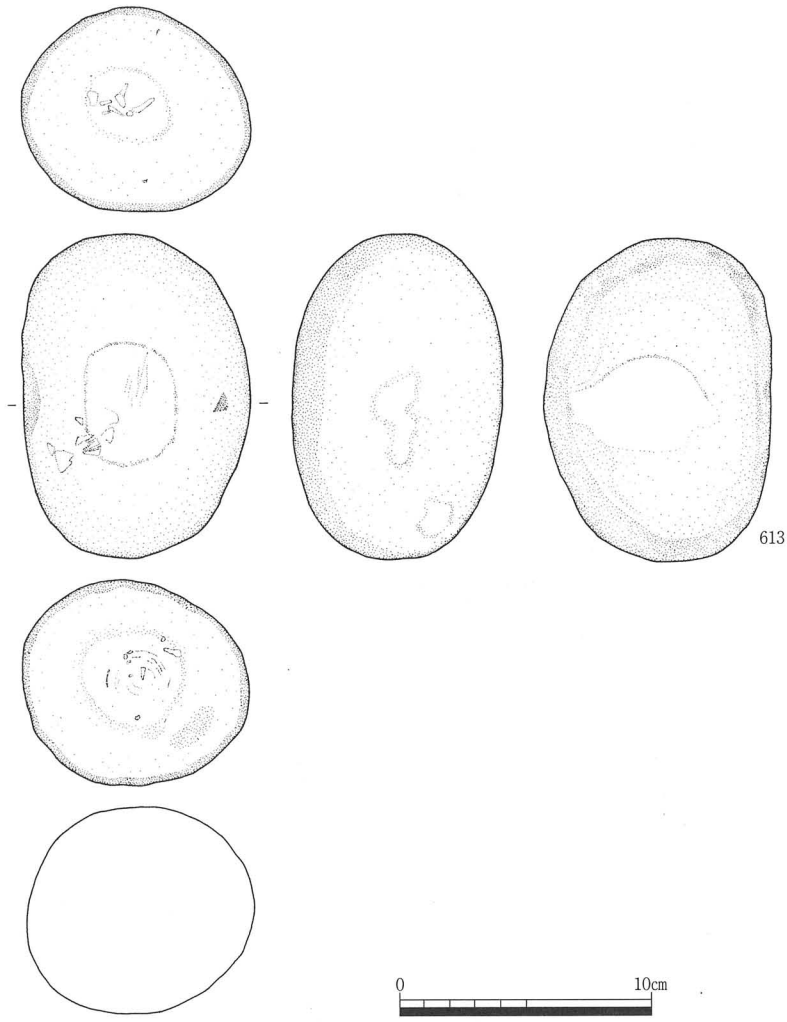
601は、はの字に開いた高台を持つ。外面に横方向のミガキを密に施し、内面には横方向から斜め方向の暗文を施している。

当該遺構出土土器は12世紀の所産と考えられる。



第163図　ＳＤ出土石器①





第164図　ＳＤ出土石器②

（4）土坑

本節では弥生時代～古代の土坑の報告を行う。本調査では、弥生時代から古代の遺構と近世の遺構が同一面で検出されている場合が多い。検出されたすべての土坑から弥生時代～古代の土坑を抽出した際の根拠については、各遺構の報告の際に詳述したが、主に、出土した遺物や、遺構埋土の特徴等による。なお、遺物については、大部分が土器であったため、土器は、遺構ごとにまとめて図示し、石器については、土坑から出土したものを一括して最後に図示している。

〔ＳＫ１〕（第165図）

Ｉ－ｊ４区に位置する土坑で、検出面の標高は117.90mである。平面形は円形を呈しており、直径は0.58m、深さは0.26mであった。ＳＫ１は、ＳＩ１の覆土中で検出された。弥生土器の小片が出土しているが、図化できなかった。

〔ＳＫ２〕（第165図）

Ｉ－ｉ５区に位置する土坑で、検出面の標高は東側117.72m、西側117.80mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.72m、短軸0.5mであり、深さは0.17mであった。ＳＫ２は、ＳＩ１の覆土中で検出された。弥生土器の小片が出土しているが、図化できなかった。

〔ＳＫ３〕（第165図）

Ｉ－ｉ７区に位置する土坑で、検出面の標高は118.20mである。ＳＤ１に隣接している。平面形は不正円形を呈しており、長軸は南北に0.93m以上、短軸は東西に0.85m、深さは0.2mであった。弥生土器の小片が出土している。

〔ＳＫ４〕（第166・167・205・206図、図版33・71・98・103）

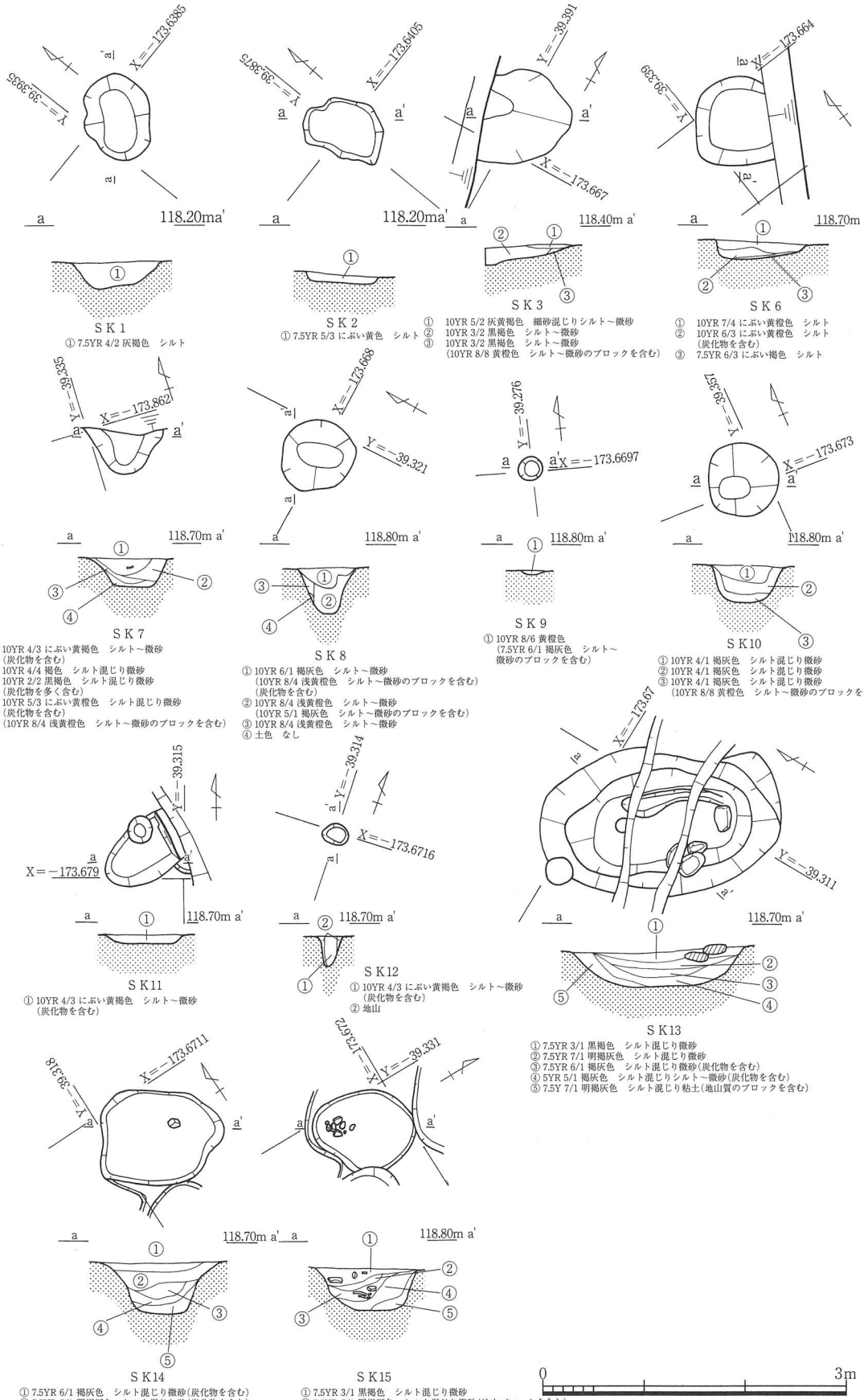
１.遺構

Ｉ－ｇ７区に位置する土坑で、検出面の標高は118.50mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は4.11m、短軸は1.27m、深さは0.42mであった。掘形は２段に掘られており、埋土には、直径20～30㎝大の礫と、弥生土器が多く含まれていた。

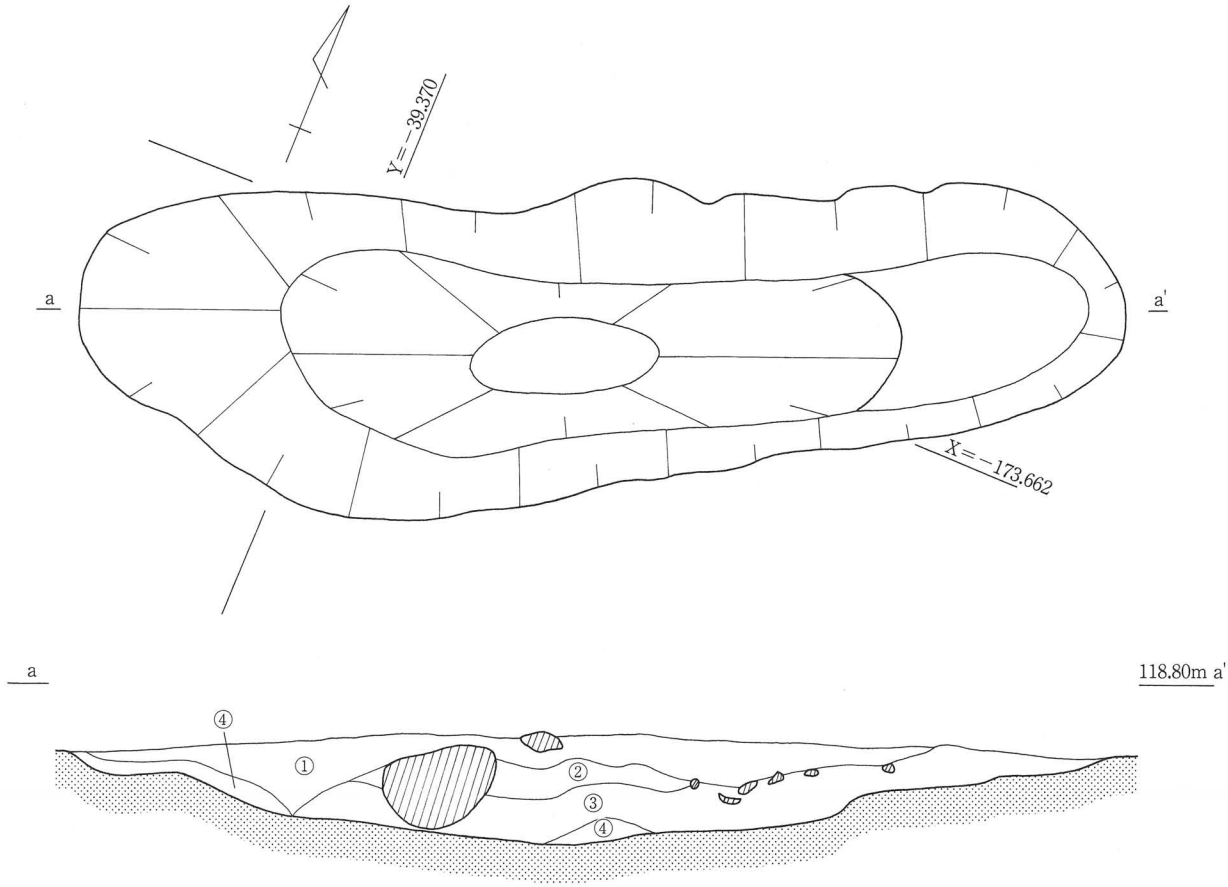
２.遺物

当該遺構からは広口壺Ａ（616）、広口壺Ｂ２（614）、鉢Ｂ（615）、叩石（797・799）、削器（794）が出土している。

614は広口壺Ｂ２である。器壁は厚手で、上方向へ拡張した口縁端部はわずかに内湾する。口縁端部と頸部外面に直線文を施文し、口縁端部下端に刻目を加えている。616は壺



第165図　ＳＫ１～３・６～15平面図・土層断面図（1/60）

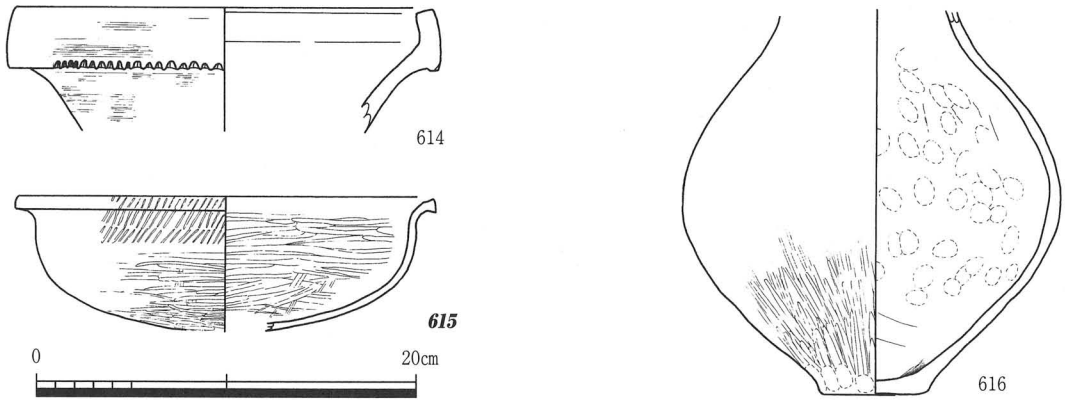


ＳＫ４

① 10YR 3/4 暗褐色　シルト～微砂(細砂を含む)
② 10YR 3/3 暗褐色　シルト～微砂(細砂を含む)
③ 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色　シルト～微砂(細砂を含む)
④ 10YR 6/6 明黄褐色　細砂

0　1m

第166図　ＳＫ４平面図・土層断面図（1/30）



第167図　ＳＫ４出土土器

の体部である。体部中位に最大径を持ち、頸部へと緩やかに接続する。広口壺Ａ１の体部であると考えられる。下半部には縦方向のミガキを施す。上半部については摩滅が激しく、文様が観察できなかった。

615は鉢Ｂである。口縁部を外折し、端部に面を持つ。口縁端部と体部には列点文を施文する。

797・799は叩石である。前者は中央に使用痕もみられるが、大きく半分に割れている。両者とも石材は砂岩である。794はサヌカイト製の削器である。上半部が欠損している。

以上の土器はⅢ－１様式に位置づけられる。

〔ＳＫ５〕（第168・169・206・207図、図版33・34・71・72・101・103）

１．遺構

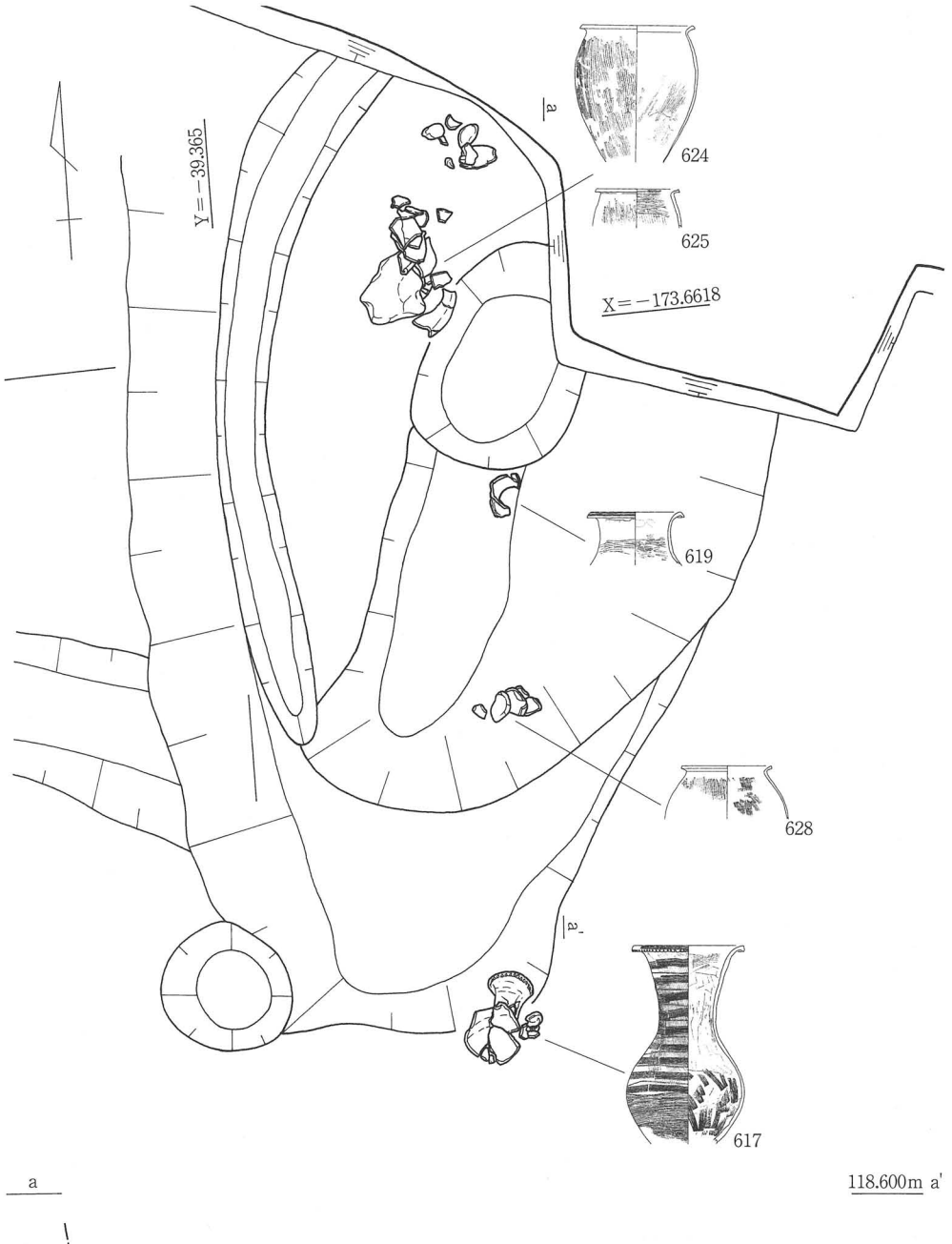
Ｉ－ｇ７区に位置する土坑で、検出面の標高は118.15ｍである。遺構は、調査区外へ伸びており、南半部のみ調査をおこなった。平面形は楕円形を呈しており、長軸は３ｍ以上、短軸は2.7ｍ、深さは0.4ｍであった。埋土からは、多量の遺物が出土している。当該遺構は、本来、ＳＩ２と重複していたと考えられるが、重複している場所は、近現代の溝によって削平され、より浅かったＳＩ２が完全に削平されている。このため、ＳＩ２との先後関係を土層から確認することはできなかった。

２．遺物

当該遺構からは広口壺Ａ（617～619）、無頸壺（621）、甕Ａ（623～625・628）、大和形甕（626）、鉢Ａ（629）等が出土している。

617は広口壺Ａ１である。体部中位に最大径を持ち、頸部へと緩やかに接続する。下方向に拡張した口縁端部はあまり開かない。口縁端部外面には簾状文を施文し、端部には刻目を加える。頸部から体部上半は直線文と暗文状のミガキを交互に施している。618・619は広口壺Ａである。618は口縁端部にやや間隔の短い簾状文、頸部に直線文を施文している。619は下方向に拡張した口縁端部が大きく開く。口縁端部には直線文を施文している。頸部外面には板ナデの後、横方向のミガキを施す。620は細頸壺の体部である。体部は中位で大きく張る算盤玉状の形態を呈する。外面には最上段に簾状文を施文し、それ以下は直線文と暗文状のヘラミガキを交互に施している。621は無頸壺である。頸部が短く外反し、口縁端部は外側にわずかに肥厚している。内外面ともにナデで仕上げている。622は壺の体部である。器壁が厚く、内面には粗雑なナデを施す。外面は摩滅が著しいが、縦方向のミガキがわずかに観察できる。

623～625・628は甕Ａである。623は小型の甕Ａである。体部は釣鐘状を呈し、口縁端部はわずかに上方向に拡張する。外面にはミガキを施しているが、二次焼成を受けて剥離が著しい。624は体部最大径を中位よりもやや上に持つ。頸部がくの字状に屈曲し、内外面

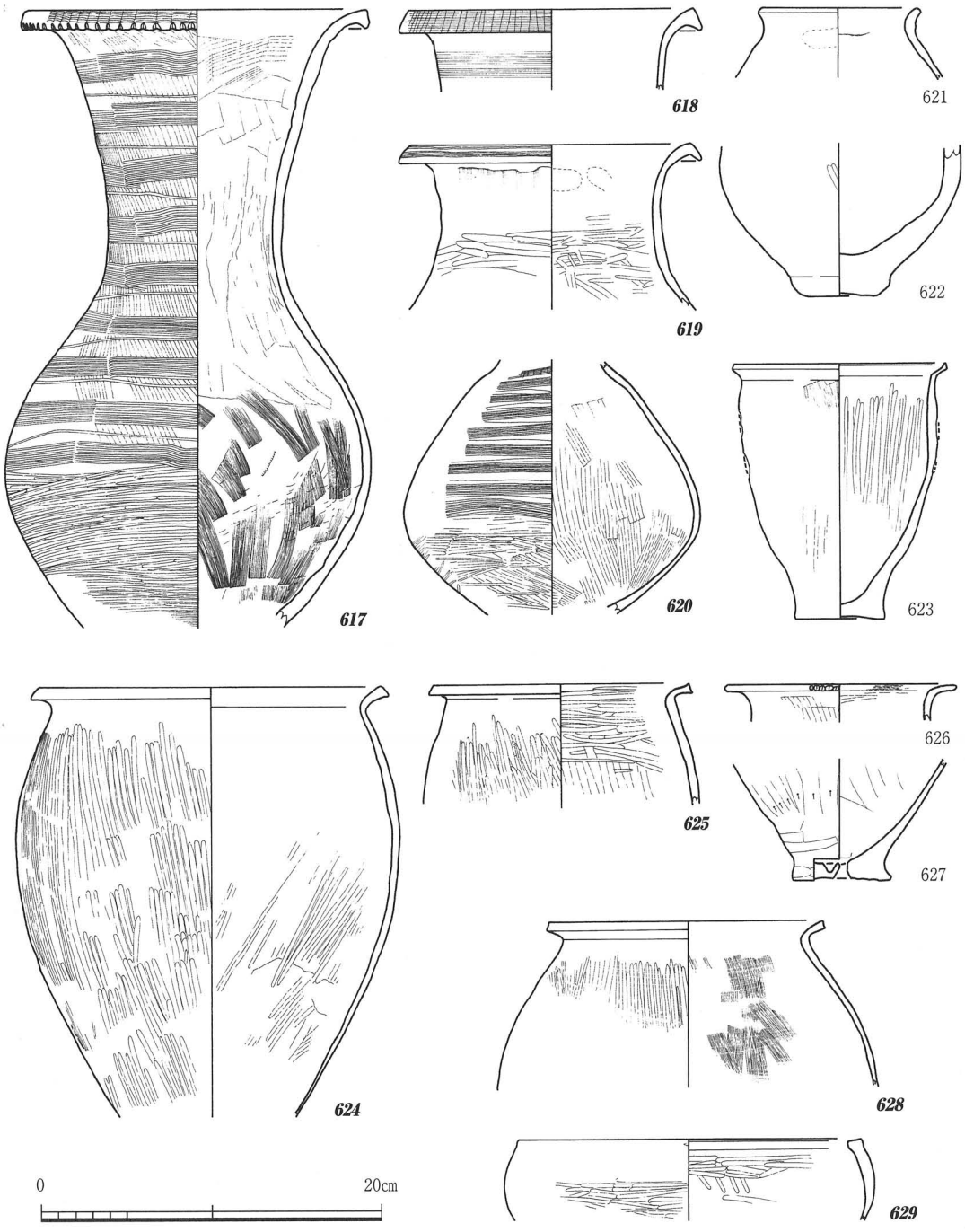


ＳＫ５

① 10YR 5/3 にぶい黄橙色　微砂～シルト(細礫を含む)(炭化物を含む)
② 10YR 7/3 にぶい黄橙色　シルト～微砂(細礫を含む)(炭化物を含む)
③ 2.5Y 8/1 灰白色　礫
④ 10YR 7/2 にぶい黄橙色　シルト～微砂(炭化物を含む)

0　1m

第168図　　ＳＫ５平面図・土層断面図（1/30）



第169図　ＳＫ５出土土器

にはミガキを施している。625の頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部には面をもつ。外面には縦方向のミガキを施し、内面には縦方向の粗いハケの後、口縁部付近に横方向のミガキを施している。628は頸部が強く締まる形態を呈する。内面には細かいハケ、外面にはミガキを施している。627は甕の底部である。底部に２箇所穿孔しているが、片方は貫通していない。外面にはケズリを施している。626は大和形甕である。外面に粗い縦方向のハケ、口縁部内面に粗い横方向のハケを施し、口縁端部に刻目を加えている。

629は鉢Ａである。口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部は肥厚する。内外面にミガ

キを施す。

796は緑泥片岩製石庖丁の未成品である。剥離したのみで未調整段階のものである。800は砂岩製の叩石である。使用痕はほとんどみられない。

当該遺構から出土した遺物は、Ⅲ様式に位置づけられる。

〔ＳＫ６〕（第165図）

Ｉ－ｄ７区に位置する土坑で、検出面の標高は118.55ｍである。平面形は隅丸方形を呈しており、長軸は0.89ｍ以上、短軸は0.72ｍ以上、深さは0.18ｍであった。弥生土器の細片が出土しているが図化できなかった。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出されたことから、弥生時代の遺構であるといえる。

〔ＳＫ７〕（第165図）

Ｉ－ｄ７区に位置する土坑で、検出面の標高は118.55ｍである。北半部は調査区外に位置している。平面形は不正形を呈しており、東西方向の幅が0.75ｍ、深さは0.28ｍであった。掘形底面は比較的平坦であった。弥生土器の小片が出土している。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出されたことから、弥生時代の遺構であるといえる。

〔ＳＫ８〕（第165・170・207図、図版73・103）

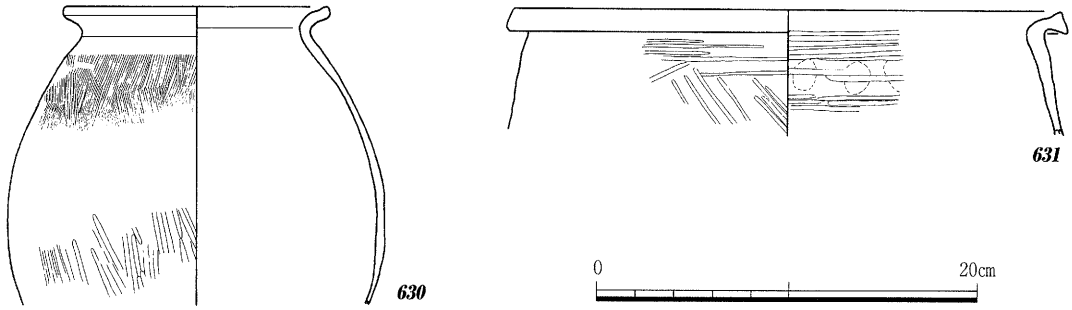
１.遺構

Ｉ－ｂ７区に位置する土坑で、検出面の標高は118.60ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.72ｍ、深さは0.45ｍであった。掘形は、急な勾配を持って掘られており、底面は比較的平坦であった。弥生土器が出土し、弥生時代に形成された遺物包含層下で検出されたことから、弥生時代の遺構であるといえる。

２.遺物

当該遺構からは甕Ｃ（631）、砥石（801）が出土した。

631は甕Ｃである。口縁端部は肥厚して、断面が三角形を呈する。内外面にミガキを施す。



第170図　ＳＫ８・11出土土器

801は砂岩製の砥石である。

〔ＳＫ９〕（第165図）

Ｉ－ｂ８区に位置する土坑で、検出面の標高は118.60ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.23ｍ、深さは0.06ｍであった。小規模な土坑である。遺物は出土しなかった。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出されたことから、弥生時代の遺構であるといえる。

〔ＳＫ10〕（第165図）

Ｉ－ｂ８区に位置する土坑で、検出面の標高は118.60ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.69ｍ、深さは0.36ｍであった。底は皿状を呈しており、埋土は３層よりなっている。弥生土器の小片が出土しているが、図化できなかった。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出されたことから、弥生時代の遺構であるといえる。

〔ＳＫ11〕（第165・170図、図版72）

１．遺構

Ｉ－ｂ８区に位置する土坑で、検出面の標高は118.60ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.8ｍ以上、短軸は0.58ｍ、深さは0.10ｍであった。ＳＤ９によって北半部を破壊されている。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出され弥生土器が出土していることから、弥生時代の遺構であるといえる。

２．遺物

当該遺構からは甕Ａ（630）が１点出土した。頸部は強く締まり、くの字状に屈曲する。外面は体上部半部に細かいハケ、下半部にミガキを施す。

〔ＳＫ12〕（第165・171図、図版72・73）

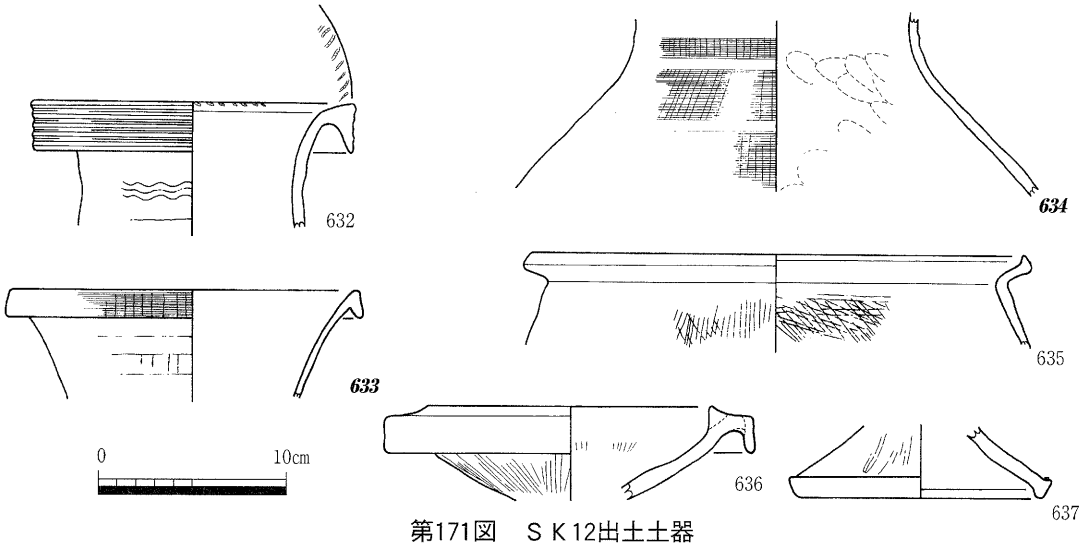
１.遺構

Ｉ－ｂ８区に位置する土坑で、検出面の標高は118.60ｍである。平面形は不正円形を呈しており、直径は0.27ｍ、深さは0.3ｍであった。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出されたことから、弥生時代の遺構であるといえる。

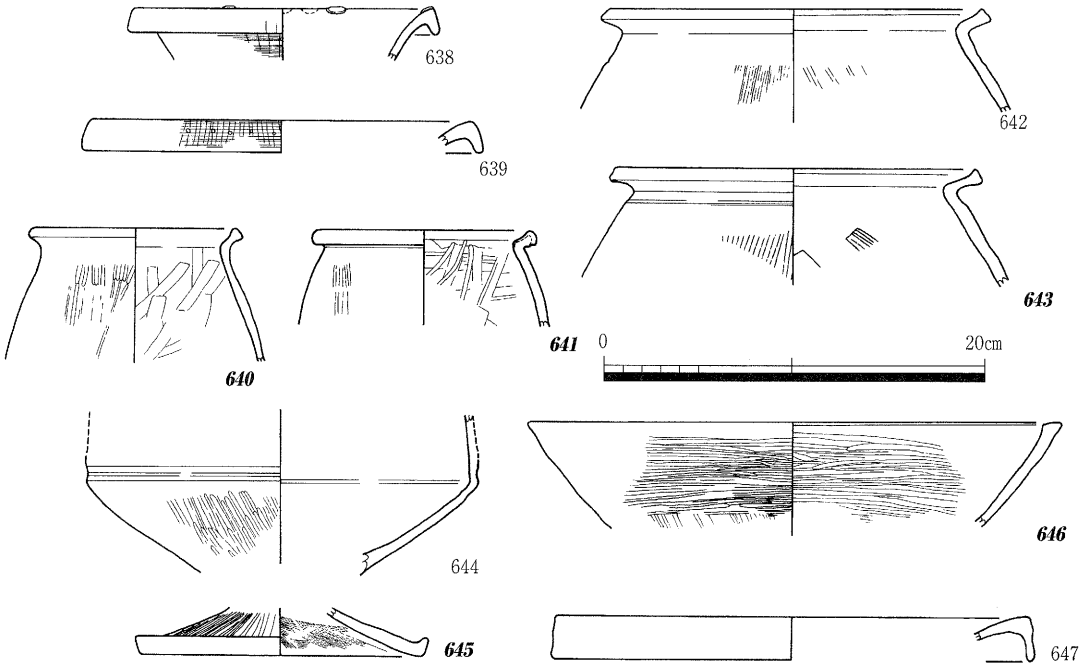
２.遺物

当該遺構からは広口壺Ａ（633）、甕Ｄ（635）、高坏Ｂ（636）、搬入品の広口壺（632）等が出土している。

633は広口壺Ａである。口縁端部を下方向に拡張する。口縁端部と頸部に簾状文を施文



第171図　ＳＫ12出土土器



第172図　ＳＫ13出土土器

している。634は壺の頸部から体部である。体部から頸部にかけて緩やかに接続する。外面には幅が広く間隔の短い簾状文を施文している。632は広口壺である。口縁端部を下方向に拡張し、凹線文を施文する。口縁部内面には列点文を、頸部には波状文と直線文を施文している。摂津からの搬入土器と考えられる。

635は甕Ｄである。内外面に粗いハケを施す。

636は高坏Ｂである。口縁端部は長く垂下し、内面の突帯は口縁部より上方に突出する。坏部内外面に縦方向のミガキを施している。637は高坏の裾部である。裾部は、直線的に広がり、端部は内外に肥厚する。外面にはミガキを施している。

当該遺構から出土した遺物はⅣ様式に位置づけられる。

〔ＳＫ13〕（第165・172・207・208図、図版103）

１．遺構

Ｉ－ａ７区を中心に位置する土坑で、検出面の標高は118.42～118.50ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は2.34ｍ、短軸は1.48ｍ、深さは0.36ｍであった。底部は比較的平坦であり、埋土には、20㎝大の礫が複数含まれていた。当該土坑埋没後にＳＤ11が掘削されている。

２．遺物

当該遺構からは広口壺Ａ（638・639）、甕Ａ（640・641）、甕Ｂ（642・643）、鉢Ａ（644）、高坏Ａ（646）、高坏Ｂ（647）、台石（802・803）等が出土している。土器はいずれも細片である。

638・639は広口壺Ａである。638は口縁端部と頸部に簾状文を施文し、口縁部内面には円形浮文を貼り付けている。639は、下方向に拡張した口縁端部に簾状文、刺突文を施文する。

640・641は甕Ａである。頸部は、くの字に屈曲し、口縁端部はやや肥厚して面を持つ。641は内外面にミガキを施している。642、643は甕Ｂである。642は外面にやや細かいハケ、内面には外面に比べて粗いハケを施す。643は、外面にミガキ、内面にはハケを施している。

644は鉢Ａである。口縁部は欠損しているが、体部は、口縁部が底部から屈曲して直線的に立ち上がる形態を呈する。屈曲部に凹線を１条施している。646は高坏Ａである。坏部は口縁部まで直線的に開く。内外面に横方向のミガキを施す。647は高坏Ｂである。口縁端部を下方向に長く拡張する。水平にのびた口縁部上面には横方向のミガキを施す。645は高坏の脚部である。端部を上方に拡張している。外面にミガキ、内面にハケを施す。

802・803は台石である。中央付近に使用痕がみられる。両者とも砂岩製である。

以上の当該遺構出土土器は、Ⅳ様式に位置づけられる。

〔ＳＫ14〕（第165・173図、図版73）

１．遺構

Ｉ－ａ８区とＩ－ｂ８区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は118.50～118.60ｍである。平面形は隅丸方形を呈しており、長軸は1.22ｍ、短軸は0.93ｍ、深さは0.49ｍであった。掘形は比較的急な勾配を持って掘られており、底部は比較的平坦であった。比較的浅い掘形を持ち、平面規模が大きいＳＫ79埋没後に、当該遺構が穿たれている。弥生土器が出土しており、遺物包含層下で検出されたことから、弥生時代の遺構であるといえる。

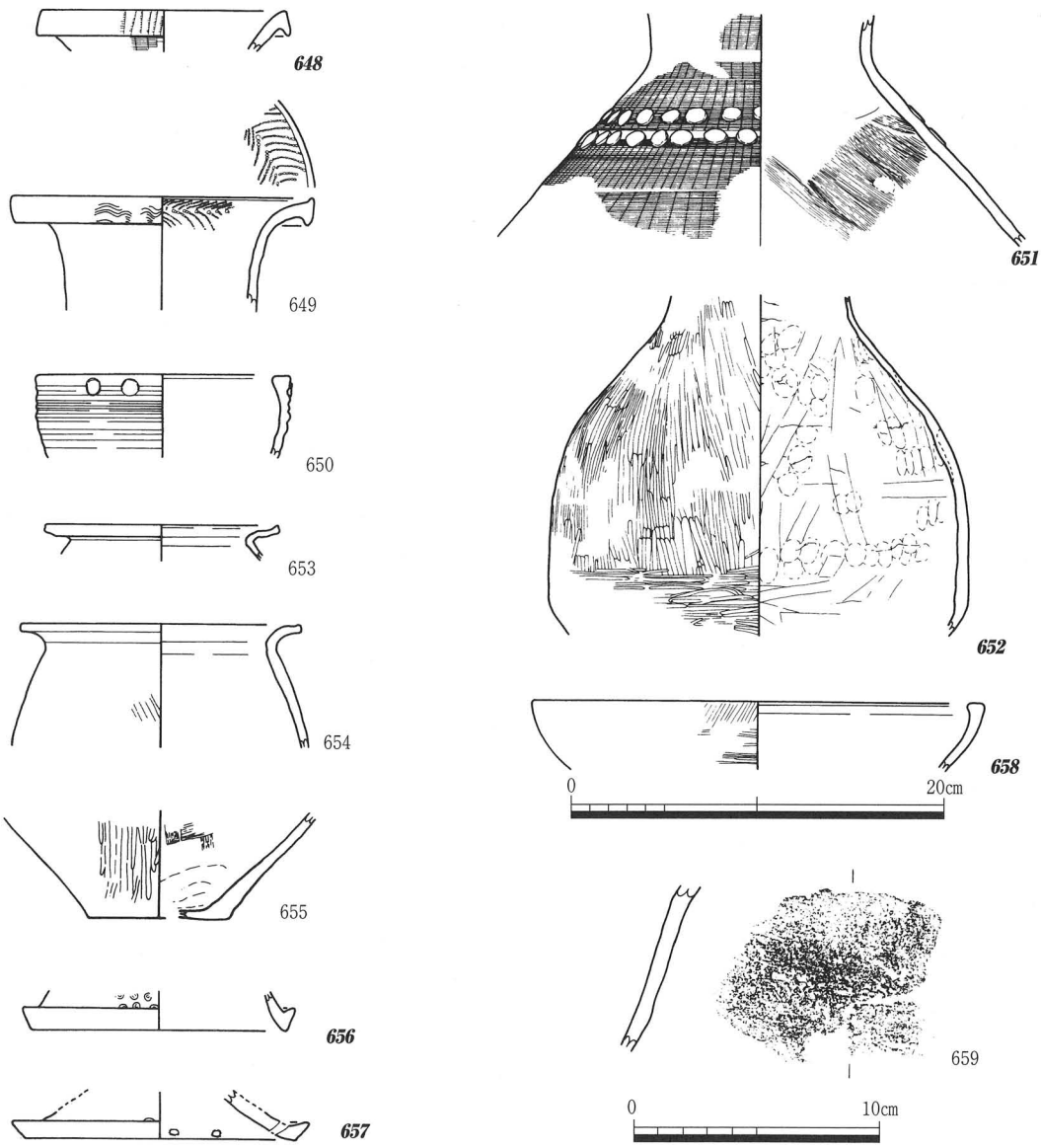
２．遺物

当該遺構からは広口壺Ｄ（649）が出土している。口縁端部外面には波状文、内面には綾杉状に列点文を施文している。

〔ＳＫ15〕（第165・173図、図版75）

１．遺構

Ｉ－ｂ８区に位置する土坑で、検出面の標高は118.60ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.02ｍ、短軸は0.84ｍ、深さは0.41ｍであった。掘形は比較的急な勾配を持って掘られており、底部は比較的平坦であった。埋土は、東側から流れ込んだ状況を呈しており、土器が多く含まれていた。ＳＫ79埋没後に当該遺構が穿たれている。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出され、弥生土器が出土していることから、弥生時代の遺



第173図　ＳＫ14～18出土土器

構であるといえる。

2．遺物

当該遺構からは壺（651・652）、細頸壺（650）、甕A（654）、高坏（657）等が出土している。

651・652は壺の体部である。651は大きく張る体部を持つ。口縁部は欠損しているが頸部は残存部で観察する限り直立している。広口壺Aもしくは細頸壺のものであると考えられる。外面には幅が広くやや間隔が短い簾状文を施し、その上に円形浮文を貼り付けている。652も壺の体部である。底部と口縁部は欠損しているが、体部は最大径を低い位置に持ち、強く張る形態を呈すると考えられる。外面には丁寧なミガキを施している。650は細頸壺である。頸部はわずかに内湾し、口縁端部は内側に肥厚する。外面は凹線文を施文し、その上から円形浮文を貼り付けている。

654は甕Aである。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部上面はわずかに窪む。外面にはミガキを施している。

657は高坏の裾部である。端部を上方向に拡張する。円形透を穿っている。

以上の当該遺構出土の遺物は、Ⅳ様式に位置づけられる。

〔ＳＫ16〕（第173・174図、図版35・73）

1．遺構

Ⅰ－ａ８区とⅠ－ｂ８区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は118.60mである。平面形は円形を呈しており、直径は0.66m、深さは0.14mであった。弥生時代の遺物包含層下で検出され、弥生土器が出土していることから、弥生時代の遺構であるといえる。

2．遺物

当該遺構からは壺の底部（655）が出土した。外面には縦方向のミガキを施す。

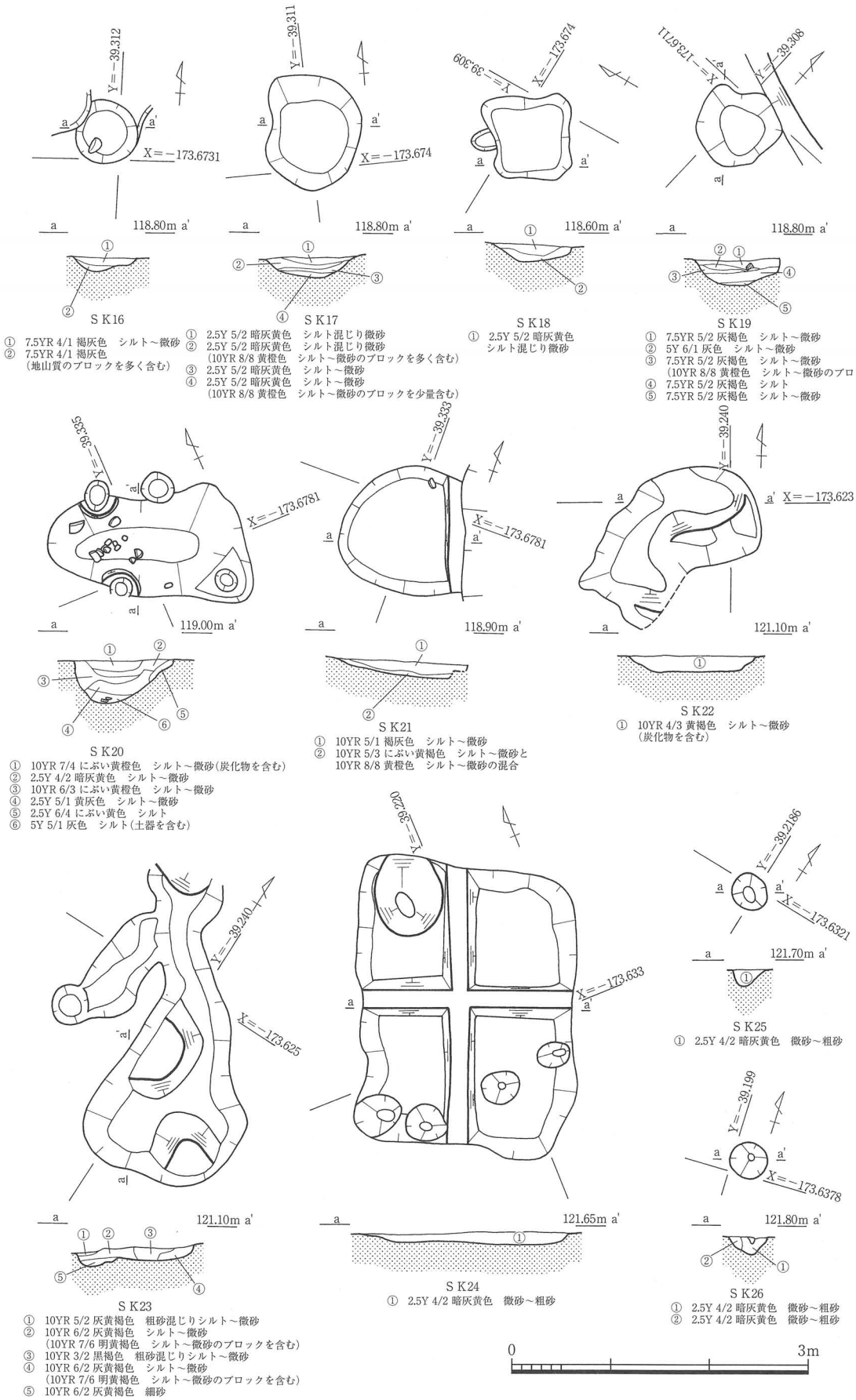
〔ＳＫ17〕（第173・174図、図版35・73）

1．遺構

Ⅰ－ａ８区に位置する土坑で、検出面の標高は118.62mである。平面形は不正形な隅丸方形を呈しており、長軸は1.18m、短軸は0.92m、深さは0.2mであった。掘形は比較的浅く、皿状を呈していた。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出され、弥生土器が出土していることから、弥生時代の遺構であるといえる。

2．遺物

ＳＫ17からは広口壺A（648）、甕B（653）、高坏A（658）等が出土した。いずれも細



S K16

① 7.5YR 4/1 褐灰色　シルト～微砂
② 7.5YR 4/1 褐灰色
（地山質のブロックを多く含む）

S K17

① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト混じり微砂
② 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト混じり微砂
（10YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂のブロックを多く含む）
③ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂
④ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂
（10YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂のブロックを少量含む）

S K18

① 2.5Y 5/2 暗灰黄色
シルト混じり微砂

S K19

① 7.5YR 5/2 灰褐色　シルト～微砂
② 5Y 6/1 灰色　シルト～微砂
③ 7.5YR 5/2 灰褐色　シルト～微砂
（10YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂のブロックを含む）
④ 7.5YR 5/2 灰褐色　シルト
⑤ 7.5YR 5/2 灰褐色　シルト～微砂

S K20

① 10YR 7/4 にぶい黄橙色　シルト～微砂（炭化物を含む）
② 2.5Y 4/2 暗灰黄色　シルト～微砂
③ 10YR 6/3 にぶい黄橙色　シルト～微砂
④ 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂
⑤ 2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルト
⑥ 5Y 5/1 灰色　シルト（土器を含む）

S K21

① 10YR 5/1 褐灰色　シルト～微砂
② 10YR 5/3 にぶい黄褐色　シルト～微砂と
10YR 8/8 黄橙色　シルト～微砂の混合

S K22

① 10YR 4/3 黄褐色　シルト～微砂
（炭化物を含む）

S K23

① 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト～微砂
② 10YR 6/2 灰黄褐色　シルト～微砂
（10YR 7/6 明黄褐色　シルト～微砂のブロックを含む）
③ 10YR 3/2 黒褐色　粗砂混じりシルト～微砂
④ 10YR 6/2 灰黄褐色　シルト～微砂
（10YR 7/6 明黄褐色　シルト～微砂のブロックを含む）
⑤ 10YR 6/2 灰黄褐色　細砂

S K24

① 2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～粗砂

S K25

① 2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～粗砂

S K26

① 2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～粗砂
② 2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～粗砂

第174図　ＳＫ16～26平面図・土層断面図（1/60）

片である。

648は小型の広口壺Ａである。口縁端部を下方向に拡張している。口縁端部と頸部にはやや間隔の広い簾状文を施文している。

653は甕Ｂである。口縁端部を上方向に拡張している。

658は高坏Ａである。坏部は椀状を呈し、口縁端部は内側に肥厚する。口縁部外面はヘラ状工具による刻目を施している。

656は鉢の脚部である。外面に竹管文を施文している。

当該遺構から出土した遺物は、Ⅳ様式に位置づけられる。

〔ＳＫ18〕（第173・174図、図版73）

１．遺構

Ⅰ－ａ８区に位置する土坑で、検出面の標高は118.50ｍである。平面形は、方形を呈しており、長辺は0.82ｍ、短辺0.72ｍ、深さは0.18ｍであった。弥生時代の遺物として弥生土器が出土しているが、図化できなかった。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出され、弥生土器が出土していることから、弥生時代の遺構であるといえる。

２．遺物

当該遺構からは縄文土器の深鉢（659）が出土している。内外面はケズリを施している。

この他に図化できなかったが、弥生土器が出土している。

〔ＳＫ19〕（第174図）

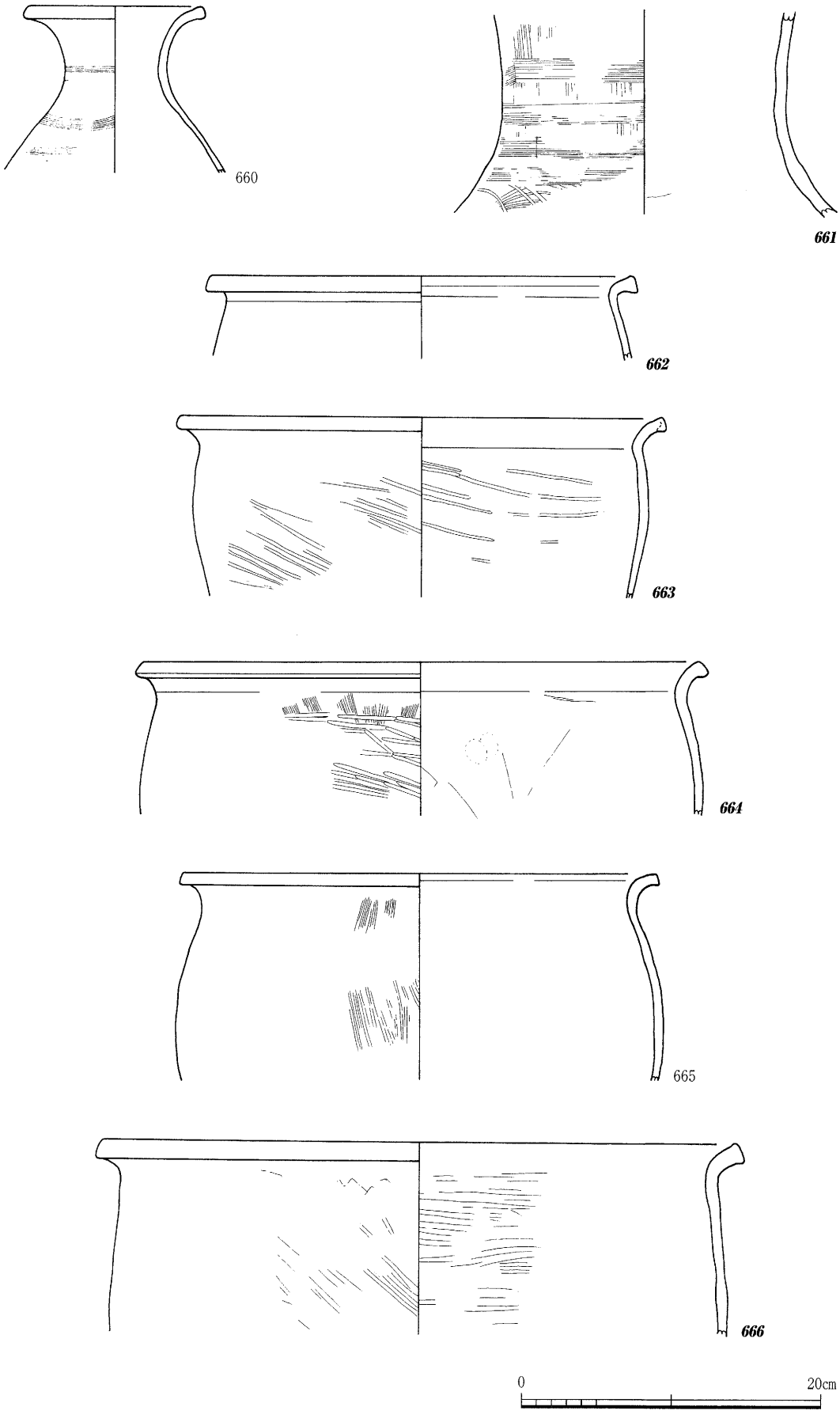
Ⅰ－ａ８区に位置する土坑で、検出面の標高は118.62ｍである。平面形は不正形な隅丸方形を呈しており、長辺は0.88ｍ、短辺は0.84ｍ、深さは0.25ｍであった。掘形は比較的急な勾配を持って掘られており、底部は比較的平坦であった。弥生土器が出土しているが、図化できなかった。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出されたことから、弥生時代の遺構であるといえる。

〔ＳＫ20〕（第174・175図、図版35・73）

１．遺構

Ⅰ－ｄ８区に位置する土坑で、検出面の標高は118.70ｍである。平面形は不正形な楕円形を呈しており、長軸は1.98ｍ、短軸1.26ｍ、深さは0.43ｍであった。掘形は擂鉢状に掘られていた。ＳＤ６を破壊して掘られており、ＳＩ５に接していた。埋土は６層よりなり、最下層の④層及び、その上部に堆積した⑤層からは豊富な遺物が出土している。

２．遺物



第175図　ＳＫ20出土土器

当該遺構からは広口壺（660）、甕Ｃ（662～666）等が出土している。

660は広口壺である。口縁部は大きく外反している。頸部から体部には直線文を施文している。661は壺の頸部である。広口壺Ａ１のものであると考えられる。体部から頸部にかけては緩やかに接続している。外面には直線文を施文する。

662～666は甕Ｃである。662は口縁端部が肥厚し断面はシャープな三角形を呈する。663～666はいずれも頸部のしまりがなく、釣鐘形の体部を持つと考えられる。口縁端部は、下方向にほとんど拡張せず、肥厚する程度である。663・666は外面に斜め方向のミガキ、内面に横方向のミガキを施す。664は外面に斜め方向のハケを施した後、横方向のミガキを施している。665は頸部が緩やかに外反する。外面には斜め方向のミガキを施す。

以上の土器は、Ⅲ－１様式に位置づけられる。

〔ＳＫ21〕（第174・176・204・205図、図版73・98・100）

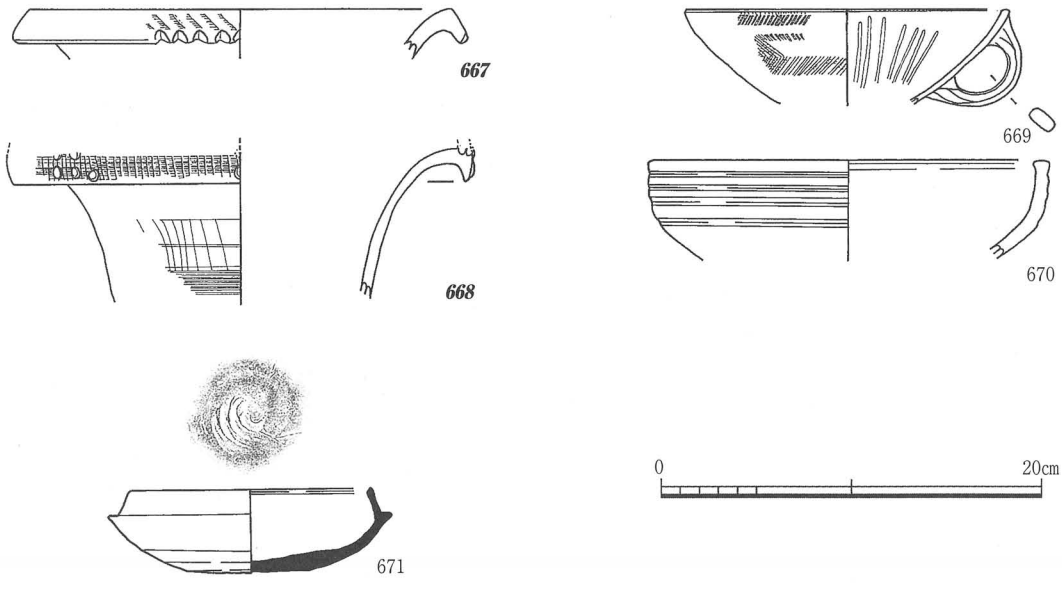
１.遺構

Ⅰ－ｄ８区に位置する土坑で、検出面の標高は118.60ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は1.32ｍ、深さは0.15ｍであった。掘形は浅く、椀形に掘られていた。ＳＩ５により破壊されていた。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出され、弥生時代中期の竪穴住居であるＳＩ５により破壊されていることから、弥生時代の遺構であるといえる。

２.遺物

当該遺構からは広口壺Ａ（667）、石鏃（785）、石錐（789）が出土している。

667は広口壺Ａである。下方に拡張した口縁端部は大きく開く。口縁端部外面には簾状文手法の斜列点文を施文し、口縁端部下端には刻目を施す。



第176図　ＳＫ21・22・24～26出土土器

785は凸基有茎式の石鏃である。基部は欠損している。789は石錐である。先端部は欠損している。両者ともサヌカイト製である。

〔ＳＫ22〕（第174・176図、図版74）

１．遺構

Ｈ－ｄ３区とＨ－ｅ３区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は120.60ｍである。平面形は不正形を呈しており、長軸は1.77ｍ、短軸1.33ｍ、深さは0.18ｍであった。ＭＴ15型式の須恵器が出土していることから、当該遺構は、古墳時代後期のものといえる。

２．遺物

671は須恵器の坏身である。内面にはスタンプ文が残る。ＭＴ15型式に位置づけられる。

〔ＳＫ23〕（第174図）

Ｈ－ｄ３区とＨ－ｅ３区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は120.80ｍである。平面形は不正形を呈しており、長軸は2.91ｍ、短軸は1.51ｍ、深さは0.19ｍであった。遺物は出土していない。弥生時代に形成された遺物包含層下で検出されたことから、弥生時代の遺構であるといえる。

〔ＳＫ24〕（第174・176・204図、図版74・98）

１．遺構

Ｈ－ｂ４区とＨ－ｃ４区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は120.60ｍである。平面形は方形を呈しており、長軸は2.85ｍ、短軸は2.15ｍ、深さは0.14ｍであった。底部は平坦で、直径0.3ｍ前後のピットが４箇所穿たれていた。埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、弥生土器が出土していることから、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

２．遺物

当該遺構からは鉢Ａ（669）、高坏Ａ（670）、石鏃（783）が出土している。

669は把手付の鉢Ａである。底部は欠損しているが、鉢部は内湾しながら開く。把手を器壁に貼り付けて接合している。外面には極めて細かい列点文を施文し、口縁端部内外面には刻目を加える。

670は高坏Ａである。ＳＫ25から出土した破片と接合した。坏部は底部から屈曲して口縁部が直線的に立ち上がる形態である。口縁部外面に凹線文を施文している。

783はサヌカイト製の有茎式石鏃である。

当該遺構から出土した遺物はⅣ様式に位置づけられる。

〔ＳＫ25〕（第174・176図、図版74）

Ｈ－ｂ４区に位置する土坑で、検出面の標高は121.60ｍである。平面形は円形を呈しており、直径0.37ｍ、深さは0.2ｍであった。埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。弥生土器が出土しており、ＳＫ24出土土器と接合できた。

〔ＳＫ26〕（第174・176図、図版74）

１．遺構

Ｈ－ｂ４区に位置する土坑で、検出面の標高は121.70ｍである。平面形は円形を呈しており、直径0.38ｍ、深さは0.15ｍであった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、弥生土器が出土していることから当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

２．遺物

当該遺構からは広口壺Ｂ１（668）が出土している。口縁端部の上方向に拡張した部分は欠損している。口縁端部外面には簾状文を施した後に、円形浮文を貼り付けている。頸部には、幅が狭く間隔の比較的広い簾状文と、直線文を施文する。

〔ＳＫ27〕（第177図）

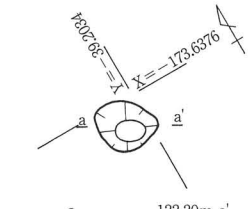
Ｈ－ａ４区に位置する土坑で、検出面の標高は122.05ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.51ｍ、短軸は0.4ｍ、深さは0.19ｍであった。弥生土器の小片が出土しているが図化できなかった。埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

〔ＳＫ28〕（第177図）

Ｈ－ａ４区に位置する土坑で、検出面の標高は122.20ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.61ｍ、短軸0.5ｍ、深さは0.25ｍであった。掘形底面は椀形を呈している。弥生土器が出土しているが図化できなかった。埋土は２層からなる。埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

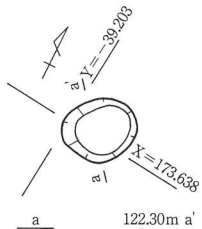
〔ＳＫ29〕（第177図）

Ｈ－ａ４区からＨ－ａ５区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は122.32ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.91ｍ、短軸0.65ｍ、深さは0.31ｍであった。掘形法面は急な勾配を持っており、底部は平坦であった。弥生土器が出土しているが図化



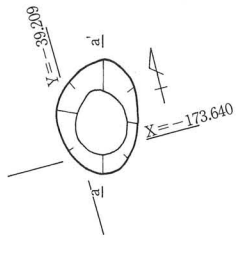
S K27

① 10YR 6/1 褐灰色　シルト
② 10YR 6/2 灰黄褐色　細砂
③ 10YR 6/1 褐灰色　シルト～微砂



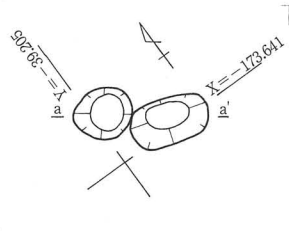
S K28

① 10YR 4/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト～微砂
② 10YR 4/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト～微砂
(地山質のブロックを含む)



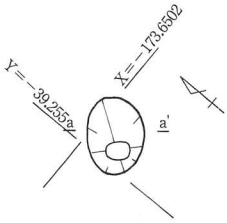
S K29

2.5Y 6/2 灰黄色　シルト
① 10YR 6/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト



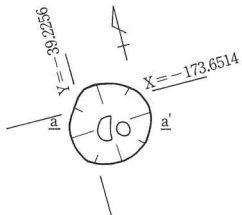
S K30

① 10YR 4/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト～微砂
② 10YR 6/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト
③ 10YR 4/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト～微砂
(地山質のブロックを含む)
④ 10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂



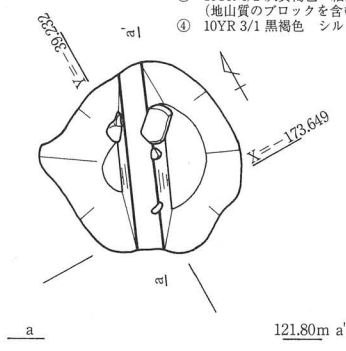
S K31

① 10YR 6/3 にぶい黄橙色　シルト～微砂
(マンガンを含む)
② 10YR 5/3 にぶい黄褐色　シルト～微砂
③ 10YR 6/3 にぶい黄橙色　シルト～微砂



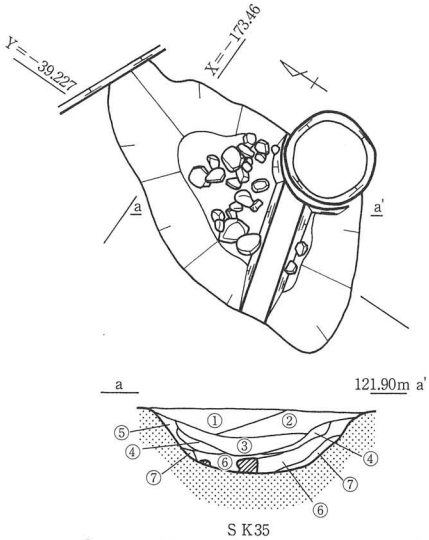
S K32

① 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト～微砂
(2.5Y 8/4 淡黄色　細砂混じりシルトのブロックを含む)
② 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト～微砂
(2.5Y 8/4 淡黄色　細砂混じりシルトのブロックを多く含む)
③ 2.5Y 7/3 浅黄色　シルト～微砂
④ 10YR 4/2 灰黄褐色　シルト～微砂



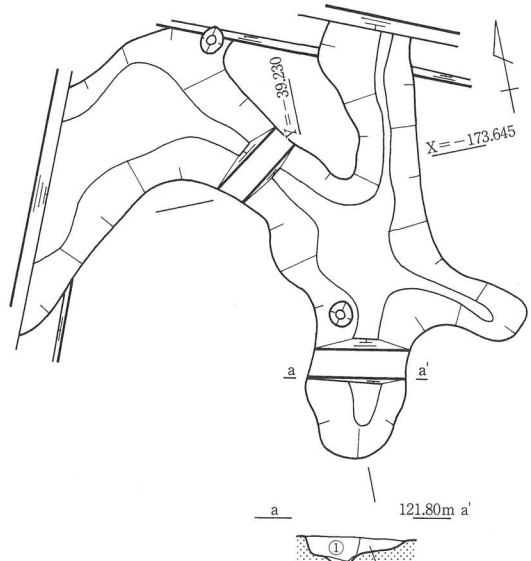
S K34

① 2.5Y 3/2 黒褐色　粗砂～礫混じりシルト～細砂
(炭化物2～5cm大の石を含む)
② 2.5Y 5/2 暗灰黄色　微砂～粗砂
③ 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト極粗砂
(2.5Y 5/2 暗灰黄色　極細砂～極粗砂のブロックを含む)(炭化物を多く含む)



S K35

① 10YR 2/2 黒褐色　粗砂～礫混じり微砂(炭化物を含む)
② 10YR 3/2 黒褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂
(2.5Y 6/4 にぶい黄色　微砂～粗砂のブロックを含む)
③ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(炭化物を含む)
④ 2.5Y 6/4 にぶい黄色　粗砂～礫混じり微砂～細砂
⑤ 10YR 4/2 灰黄褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(炭化物を含む)
⑥ 2.5Y 3/1 黒褐色　粗砂～微砂混じりシルト～細砂(炭化物を多く含む)
⑦ 10YR 4/2 灰黄褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(炭化物をやや含む)



S K36

① 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(炭化物を含む)
② 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(炭化物を含む)
(2.5Y 6/3 にぶい黄色　微砂～粗砂のブロックを含む)

第177図　S K27～32・34～36平面図・土層断面図（1/60）

できなかった。埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

〔ＳＫ30〕（第177図）

Ｈ－ａ５区に位置する土坑で、検出面の標高は122.26ｍである。平面形は方形を呈しており、長軸は0.55ｍ、短軸は0.4ｍ、深さは0.32ｍであった。掘形法面は急な勾配を持っており、底部は比較的平坦であった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

〔ＳＫ31〕（第177図）

Ｈ－ｆ６区に位置する土坑で、検出面の標高は120.79ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.62ｍ、短軸は0.46ｍ、深さは0.28ｍであった。掘形法面は急な勾配をもっており、底部は比較的平坦であった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

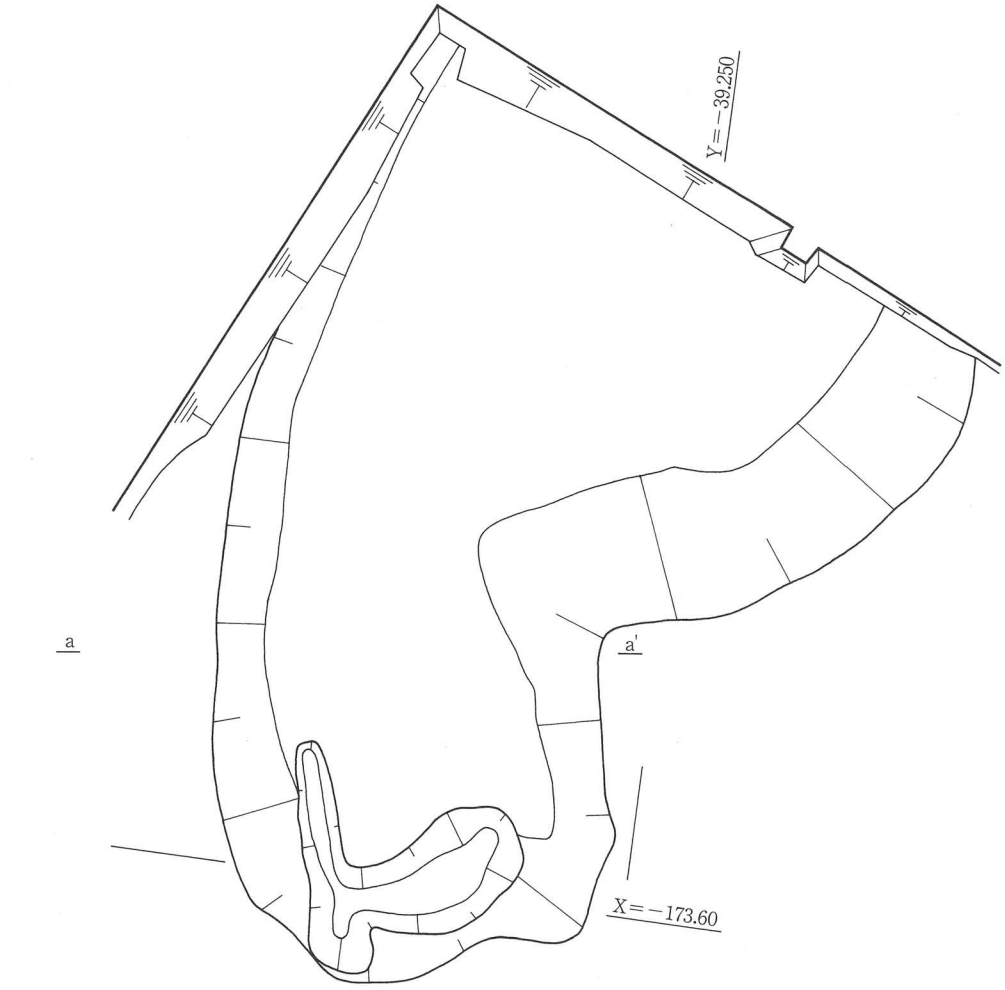
〔ＳＫ32〕（第177図）

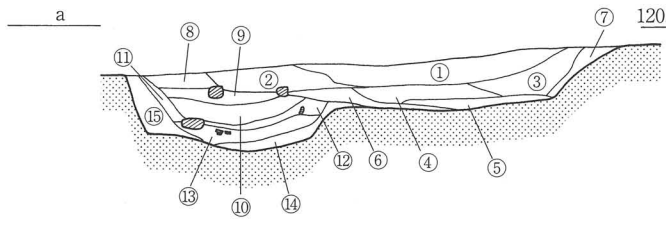
Ｈ－ｆ６区に位置する土坑で、検出面の標高は120.76ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.65ｍ、深さは0.34ｍであった。掘形法面は急な勾配を持っており、底部は起伏が認められた。ＳＩ16に関する土坑もしくはピットである。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

〔ＳＫ33〕（第178・179図、図版74）

１．遺構

Ｈ－ｅ４区からＨ―ｆ４区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は120.40～120.70ｍである。平面形は不正形を呈している。土坑は調査区外へさらに伸びていたことから、全体の大きさは不明である。長軸は６ｍを超える大きなものである。ＳＤ12が埋没した後、穿たれている。古墳時代の遺物と弥生時代の遺物が出土しているが、弥生時代のものについて、本来ＳＤ12もしくは、周囲の包含層に本来的に含まれていたものが、当該土坑の埋没過程で混入したのであろう。

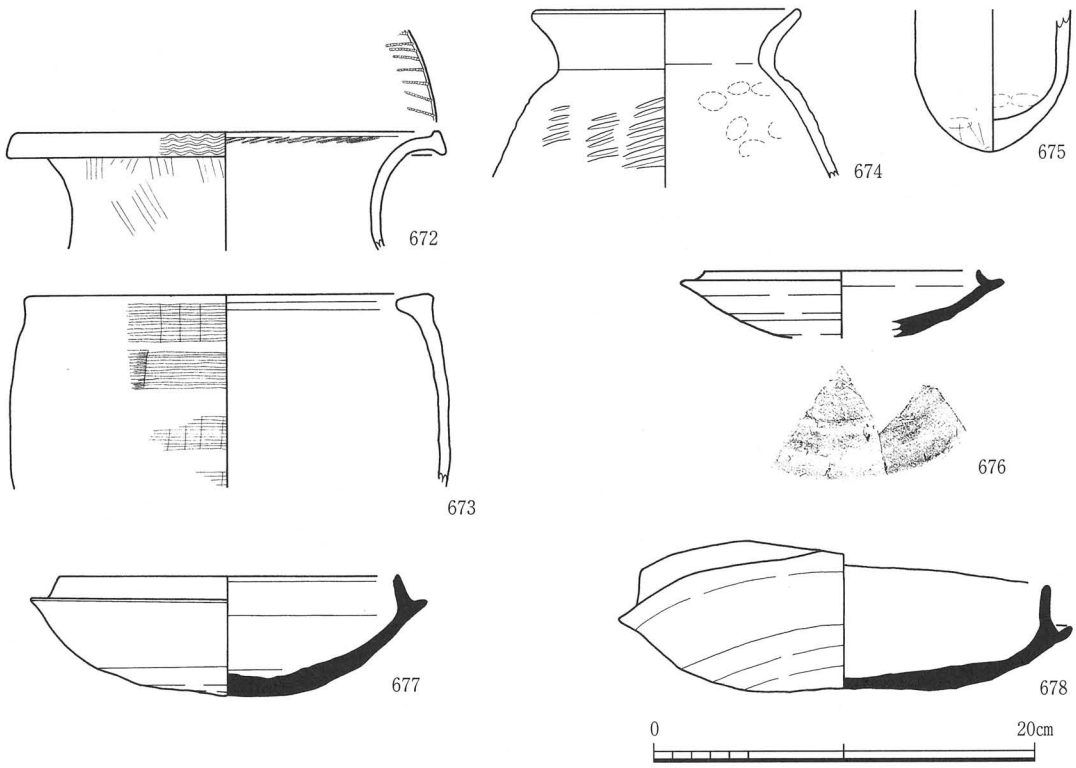




① 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト
② 2.5Y 4/1 黄灰色　微砂混じりシルト
③ 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂混じりシルト
④ 2.5Y 6/2 灰黄色　細砂
⑤ 2.5Y 8/3 淡黄色　微砂～シルト
⑥ 2.5Y 7/3 浅黄色　微砂～シルト
(2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂のブロックを含む)
⑦ 2.5Y 8/3 淡黄色　微砂～シルト
(2.5Y 6/1 黄灰色　粘土のブロックを含む)
⑧ 10YR 7/2 灰黄色　細砂混じりシルト
⑨ 10YR 7/1 灰白色　細砂混じり微砂～シルト
⑩ 10YR 7/1 灰白色　微砂～シルト
⑪ 10YR 7/2 灰白色　微砂～シルト
(2.5Y 8/3 淡黄色　のブロックを多く含む)
⑫ 10YR 7/2 灰白色　微砂～シルト
(2.5Y 8/3 淡黄色　シルト～微砂のブロックを含む)
⑬ 2.5Y 6/1 黄灰色　粗砂混じり微砂～シルト
⑭ 2.5Y 8/3 淡黄色　微砂～シルト
⑮ 2.5Y 7/3 浅黄色　微砂～シルト
(2.5Y 8/3 淡黄色　シルト～微砂のブロックを含む)

0　3m

第178図　ＳＫ33平面図・土層断面図（1/60）



第179図　ＳＫ33出土土器

２．遺物

当該遺構からは広口壺Ｄ（672）、細頸壺（673）、Ｖ様式の甕（674）、蛸壺（675）、須恵器坏身（676～678）が出土している。

672は広口壺Ｄである。口縁端部を上下方向に拡張し、口縁端部外面には波状文、内面には列点文を施文している。頸部外面には粗いハケを施す。673は細頸壺である。頸部はわずかに内湾し、口縁端部は内側に大きく肥厚する。外面には幅が狭く間隔の長い簾状文を施文している。以上の弥生土器はⅣ様式に位置づけられる。

674はＶ様式の甕である。外面には右上がりのタタキを施している。Ｖ様式に位置づけられる。

675は蛸壺である。

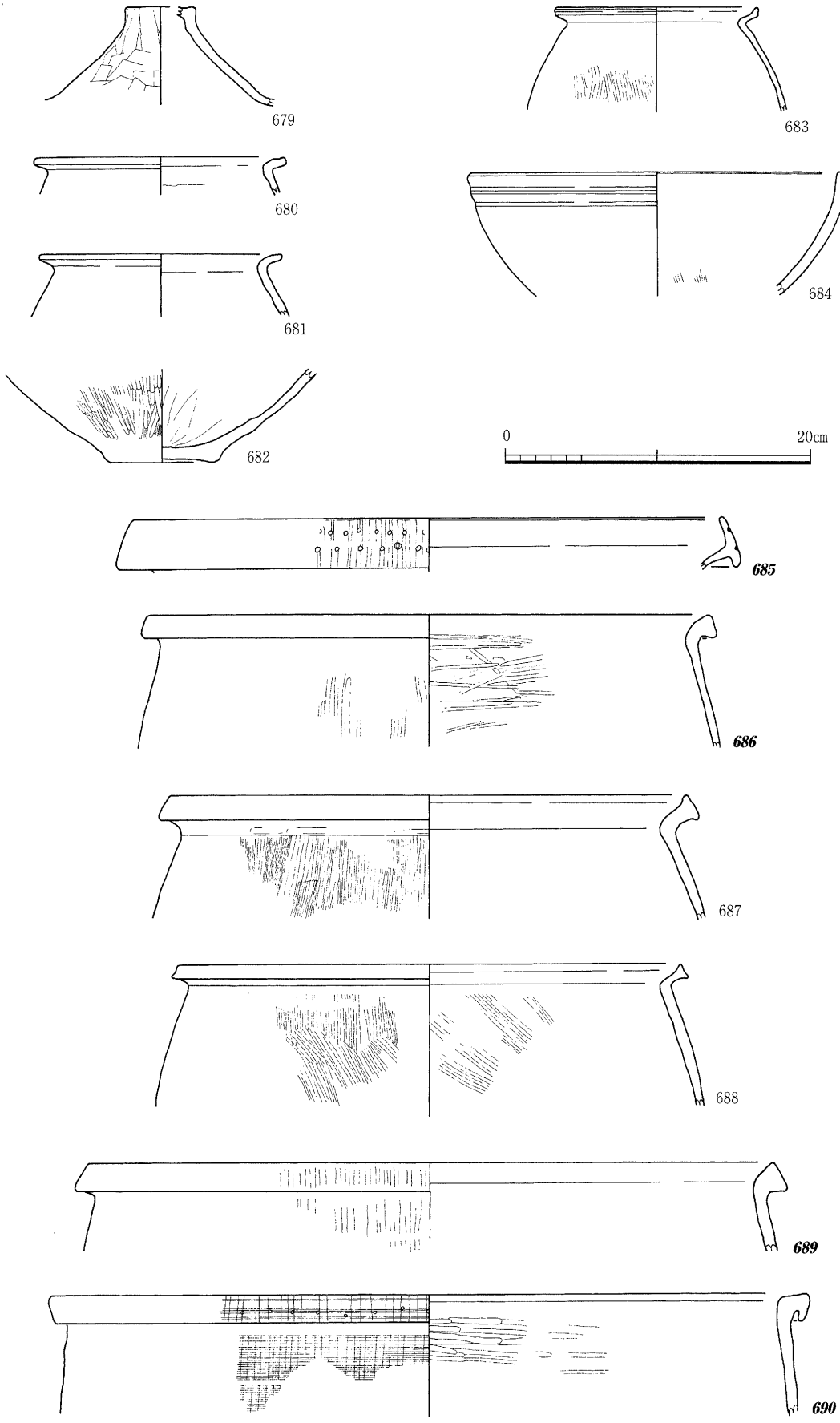
676～678は須恵器坏身である。676は底部にヘラ記号を刻んでいる。ＴＫ209型式である。678は大きく焼けひずんでいる。677・678ともＴＫ10型式に位置づけられる。

当該遺構出土遺物は、弥生時代中期から古墳時代後期まで幅広い時期のものである。

〔ＳＫ34〕（第177・180・206図、図版75・103）

１．遺構

Ｈ－ｄ５区に位置する土坑で、検出面の標高は121.50ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は1.6ｍ、短軸1.48ｍ、深さは0.55ｍであった。掘形法面は急な勾配を持っており、底部は比較的平坦であった。埋土は３層から構成され、ほぼ水平に堆積していた。



第180図　ＳＫ34出土土器

ＳＤ14を破壊してつくられている。

２．遺物

当該遺構からは、広口壺Ｂ１（685）、蓋（679）、甕Ａ（680・681）、甕Ｂ（683）、甕Ｃ（686）、甕Ｄ（687・688）、鉢Ａ（684）、鉢Ｂ（689・690）、叩石（798）等が出土している。

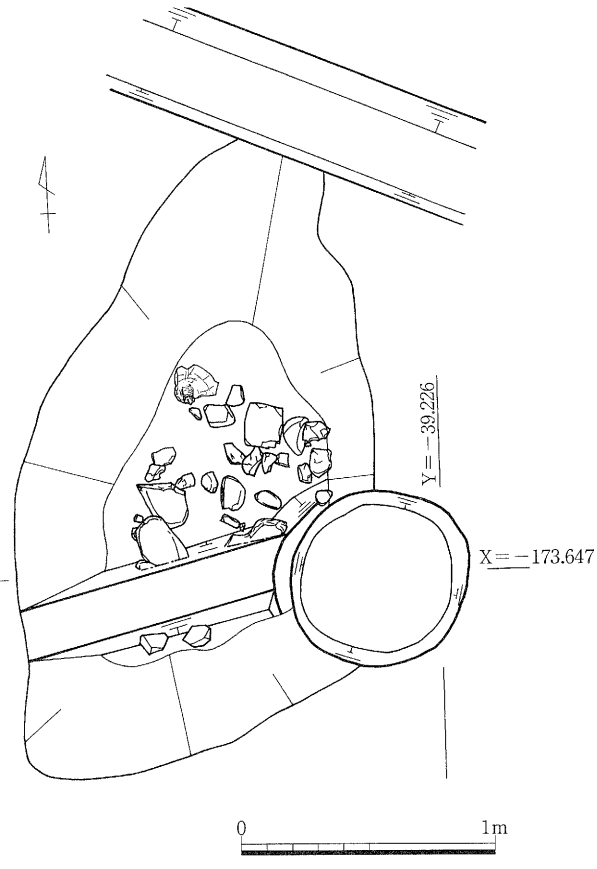
685は広口壺Ｂ１である。口縁部外面には、間隔の短い簾状文を施文した後、刺突文を巡らす。682は壺の底部である。外面には細かいハケを施した後、縦方向のミガキを施す。680、681は甕Ａである。両者とも頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部は面を持つ。680は口縁端部上面を窪ませている。

683は甕Ｂである。口縁端部を上方向に拡張し、口縁端部外面には凹線を施している。686は甕Ｃである。口縁端部は肥厚し断面三角形を呈する。外面には縦方向のミガキ、内面には横方向のミガキを施す。687・688は甕Ｄである。687の外面には縦方向の粗いハケを施している。688は、頸部が鋭い稜を持って屈曲し、上下に拡張した口縁端部外面は強くナデて窪ませている。687に比べて薄手でシャープなつくりである。内外面にやや粗いハケを施している。679は甕の蓋である。外面には板ナデを施す。

684は鉢Ａである。鉢部は内湾しながら開く形態を呈する。口縁部には２条の凹線を施す。689・690は、大型の鉢Ｂである。689は口縁端部が肥厚し、断面が三角形を呈する。690は前者よりも口縁端部の拡張が進んでいるが、口縁端部は体部に密着していない。両者ともに、口縁端部と体部に幅が狭く間隔の短い簾状文を施文している。口縁端部外面には簾状文を施文した後、刺突を加える。

798は砂岩製の叩石である。使用痕はほとんど観察できない。

当該遺構から出土した遺物は、Ⅳ様式に位置づけられる。

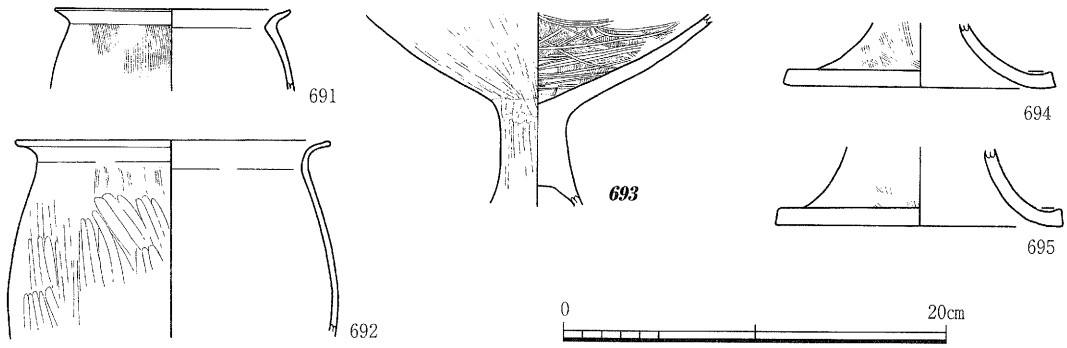


第181図　ＳＫ35遺物出土状況図（1/30）

〔ＳＫ35〕（第177・181・182・205図、図版75・99）

１．遺構

Ｈ－ｃ５区に位置する土坑で、検出面の



第182図　ＳＫ35出土土器

標高は121.74ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は2.64ｍ、短軸は1.35ｍ、深さは0.51ｍであった。ＳＤ14を破壊してつくられている。埋土には、直径10～15㎝の礫と弥生土器が多く含まれていた。

２.遺物

当該遺構からは甕Ａ（691・692）、高坏Ａ（693）、削器（793）等が出土している。

691・692は甕Ａである。691は頸部がくの字状に屈曲する。外面には細かいハケを施す。692は頸部が緩やかに外反する。外面は粗いハケの上から幅の広いミガキを施している。693は高坏の坏部から脚部にかけての破片である。脚柱部上部は中実である。坏部は直線的に開く。坏部底部から脚部外面は縦方向のミガキを施し、坏部内面は放射状のハケの上から横方向のミガキを施している。坏部内面には煤が付着している。694・695は高坏の裾部である。裾部は湾曲しながら広がり、端部が肥厚する。外面にはハケを施す。

793はサヌカイト製の削器である。一部に自然面を残す。

当該遺構出土の遺物はⅢ様式からⅣ様式に位置づけられる。

〔ＳＫ36〕（第177・183図、図版75・80）

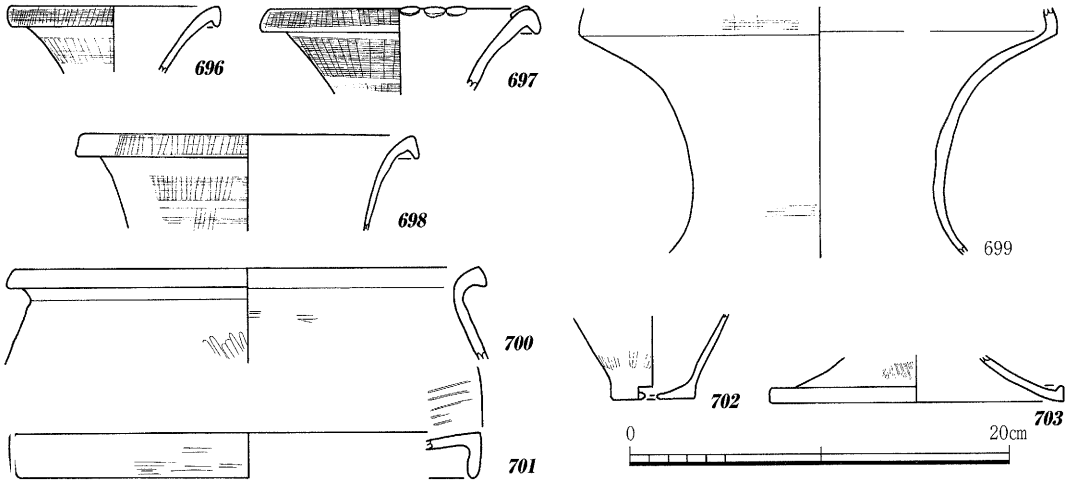
１.遺構

Ｈ－ｃ５区からＨ－ｄ５区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は121.55ｍである。平面形は不正形を呈している。弥生土器が出土しており、埋土の特徴から、弥生時代の遺構であるといえる。

２.遺物

当該遺構からは、広口壺Ａ（696～698）、広口壺Ｂ２（699）、甕Ｃ（700）、高坏Ｂ（701）等が出土している。

696・697は小型の広口壺Ａである。口縁端部を下方向に拡張し、口縁端部と頸部に簾状文を施文している。697は、口縁部内側に円形浮文を貼り付ける。698は広口壺Ａである。



第183図　ＳＫ36出土土器

口縁端部と頸部にはやや幅の狭い簾状文を施文する。699は広口壺Ｂ２である。口縁端部上端を欠損している。口縁端部には間隔の長い簾状文を、頸部には直線文を施文している。

700は甕Ｃである。口縁端部は肥厚して、断面はシャープな三角形を呈する。外面には斜め方向のミガキ、内面には横方向のミガキを施している。702は甕の底部である。外面には縦方向のミガキを施している。底部には穿孔している。

701は高坏Ｂである。口縁端部を下方向に長く拡張する。水平に伸びた口縁部の上面には縦方向にミガキを施している。703は高坏の裾部である。端部を上方向に拡張している。外面には細かいハケを施している。

当該遺構から出土した遺物は、Ⅳ－１～２様式に位置づけられる。

〔ＳＫ37〕（第184・185・204図、図版75・98）

１.遺構

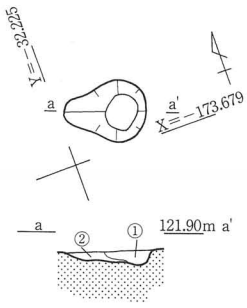
Ｈ－ｃ５区に位置する土坑で、検出面の標高は121.77ｍである。平面形は不正形を呈しており、長軸は0.64ｍ、短軸は0.51ｍ、深さは0.12ｍであった。埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、弥生土器が出土していることから当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

２.遺物

当該遺構からは高坏Ａ（711）、石鏃（784）が出土している。

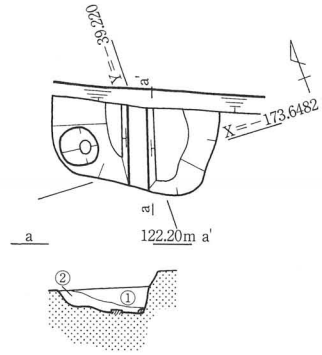
711は高坏Ａである。坏部は底部から屈曲して口縁部まで直立する形態である。口縁部と屈曲部にはヘラ状工具による刻目を施している。

784はサヌカイト製の凸基式石鏃である。基部と先端を欠損している。



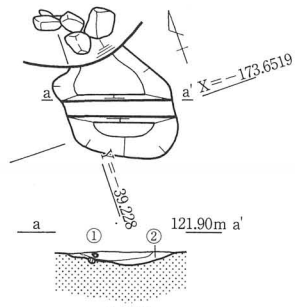
S K37

① 10YR 2/2 黒褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂
(炭化物を含む)
② 10YR 2/2 黒褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂
(炭化物を含む)
(2.5Y 6/3 にぶい黄色　微砂～粗砂のブロックを含む)



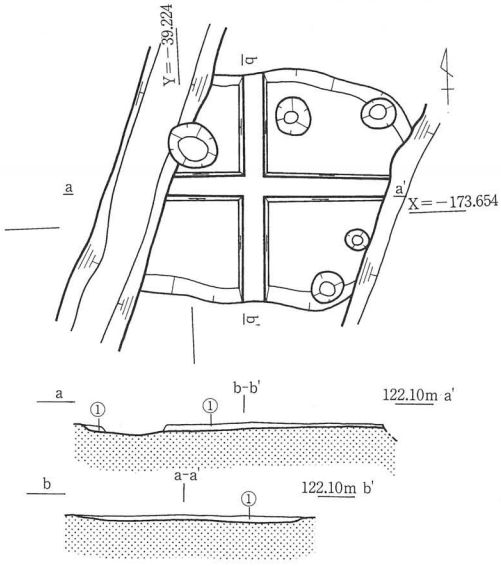
S K38

① 2.5Y 3/2 黒褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂
(炭化物を多く含む)
② 2.5Y 3/2 黒褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂
(炭化物をやや含む)



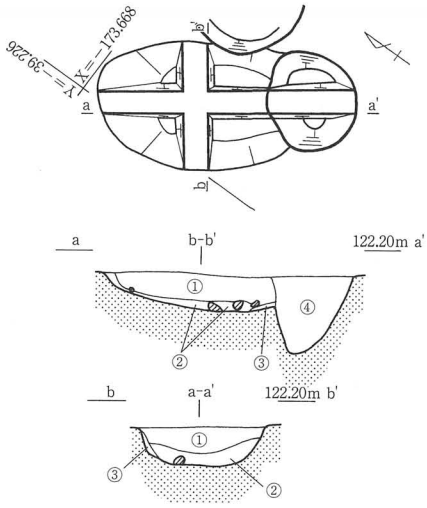
S K39

① 10YR 2/2 黒褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂
(炭化物を含む)
② 10YR 2/2 黒褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂



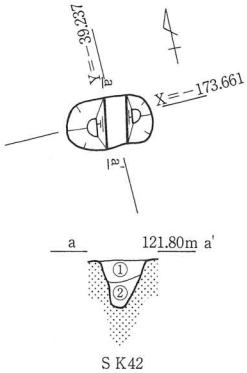
S K40

① 2.5Y 3/2 黒褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(炭化物をやや含む)



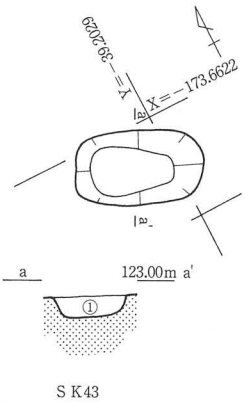
S K41

① 10YR 2/2 黒褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂(炭化物を多く含む)
② 10YR 4/2 灰黄褐色　粗砂～粗砂混じりシルト～細砂
③ 2.5Y 6/2 灰黄色　極粗砂～礫混じり微砂～粗砂
④ 2.5Y 5/6 黄褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂



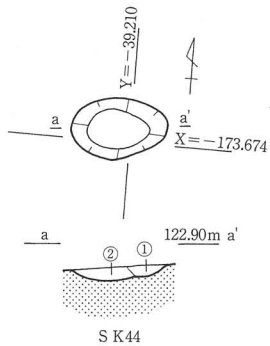
S K42

① 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色　粗砂～
礫混じり微砂～細砂(炭化物を含む)
② 10YR 4/2 暗灰黄褐色　微砂～細砂



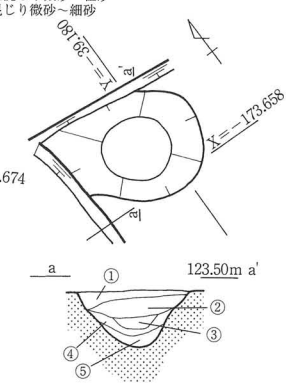
S K43

① 10YR 3/2 黒褐色　粗砂～
礫混じり微砂～細砂



S K44

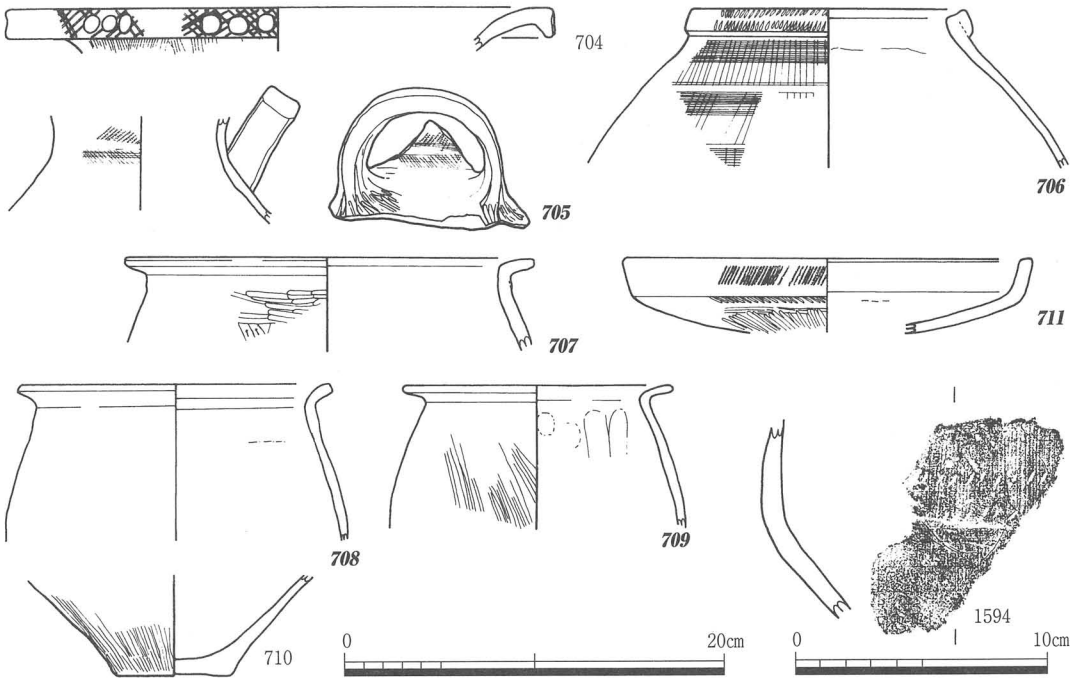
① 2.5Y 3/2 黒褐色　粗砂～
礫混じり微砂～細砂
(2.5Y 6/3 にぶい黄色　微砂～
砂のブロックを含む)
② 2.5Y 3/2 黒褐色　粗砂～
礫混じり微砂～細砂



S K45

① 10YR 5/4 にぶい黄褐色　粗砂混じりシルト
② 10YR 6/1 褐灰色　粗砂混じりシルト
(2.5Y 8/6 黄色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
③ 10YR 5/2 灰黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
(2.5Y 8/6 黄色　微砂～シルトのブロックを少量含む)
④ 10YR 6/1 褐灰色　粗砂混じり微砂～シルト
(2.5Y 8/4 淡黄色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
(炭化物を少量含む)
⑤ 5Y 3/1 オリーブ黒色　炭化物の層

第184図　ＳＫ37～45平面図・土層断面図（1/60）



第185図　ＳＫ37・38・40・41・43～48出土土器

〔ＳＫ38〕（第184・185図、図版75）

１．遺構

Ｈ－ｂ５区からＨ－ｃ５区にかけて位置する土坑で、検出面の標高は121.86ｍである。大部分は調査区外に位置しているため、平面形や大きさは不明である。埋土は、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

２．遺物

当該遺構からは甕Ａ（708）が出土した。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は短く外反している。

〔ＳＫ39〕（第184図）

Ｈ―ｃ６区に位置する土坑で、検出面の標高は121.75ｍである。平面形は不正形を呈しており、長軸は1.01ｍ、短軸は0.82ｍであった。浅く皿状を呈している。北側の肩部は近世の井戸の掘形によって破壊されている。弥生土器が出土しているが図化できなかった。埋土は、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

〔ＳＫ40〕（第184・185図、図版75）

１．遺構

Ｈ―ｃ６区に位置する土坑で、検出面の標高は122.00ｍである。平面形は隅丸方形を呈

しており、短軸は1.82m、深さは0.05mであった。浅く、底部は平坦であり、直径0.3m前後のピットが5箇所認められた。弥生土器が出土しており、埋土は、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

2．遺物

当該遺構からは無頸壺（706）が出土している。口縁端部は段状に肥厚し、外面には2段にわたってヘラ状工具による刻目を施している。体部には幅が広く間隔の極めて短い簾状文を施文している。

〔SK41〕（第184・185図、図版75）

1．遺構

H—c 6区に位置する土坑で、検出面の標高は122.00mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.29m以上、短軸は1.02m、深さは0.32mであった。掘形法面は急な勾配を持っており、底部は比較的平坦であった。南側の肩は、現代の攪乱によって一部破壊されていた。埋土は、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、弥生土器が出土していることから弥生時代の遺構といえる。

2．遺物

当該遺構からは広口壺A（704）が出土している。口縁端部を下方向に拡張している。口縁端部には斜格子文を施文した後、その上から円形浮文を貼り付けている。1594は壺の体部から頸部である。外面に縦方向のハケを施し、頸部にはヘラ状工具による押圧を加えている。

〔SK42〕（第184図）

H－d 7区に位置する土坑で、検出面の標高は121.73mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.7m、短軸は0.4m、深さは0.38mであった。掘形は深く、掘形法面は急な勾配を持って掘られていた。埋土の特徴から、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。弥生土器が出土しているが図化できなかった。

〔SK43〕（第184・185図、図版75）

1．遺構

H－a 7区に位置する土坑で、検出面の標高は122.85～122.90mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.02m、短軸は0.57m、深さは0.18mであった。掘形法面は深く、掘形は急な勾配を持って掘られていた。弥生土器が出土しており、埋土の特徴は、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

2．遺物

当該遺構からは水差（705）が出土している。把手は挿入法で体部に接合している。把手の根元にはミガキを施す。頸部には列点文と簾状文を施文している。

〔ＳＫ44〕（第184・185図、図版75）

1．遺構

Ｈ－ａ８区からＨ－ｂ８区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は122.70mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.76m、短軸は0.49m、深さは0.13mであった。掘形は浅く、皿状に掘られていた。埋土は、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

2．遺物

当該遺構からは甕Ａ（709）が出土している。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁端部を丸くおさめる。外面には細かいミガキを施している。

〔ＳＫ45〕（第184図）

Ｇ－ｈ６区からＧ－ｉ６区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は123.35mである。当該遺構の一部は調査区外にあるものの、平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.29m以上、短軸は0.83m、深さは0.45mであった。遺物は出土しなかったが、埋土が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。遺物は出土していない。

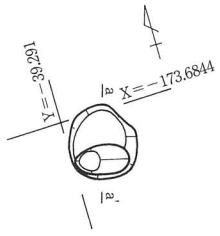
〔ＳＫ46〕（第186図）

Ｈ－ｊ９区に位置する土坑で、検出面の標高は119.67mである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.6m、短軸は0.55m、深さは0.06～0.19mであった。弥生土器が出土しているが図化できなかった。埋土は３層からなる。埋土は、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

〔ＳＫ47〕（第185・186図、図版75）

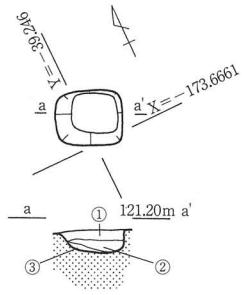
1．遺構

Ｈ－ｅ７区に位置する土坑で、検出面の標高は121.10mである。平面形は方形を呈しており、長軸は0.54m、短軸は0.46m、深さは0.18mであった。掘形法面は急な勾配を持って掘られており、底部は比較的平坦であった。埋土の特徴から、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。



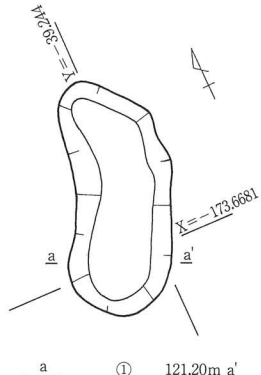
S K46

① 5Y 5/2 灰オリーブ色　シルト～微砂
(2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～微砂を少量含む)
② 2.5Y 4/1 黄灰色　シルト
③ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂



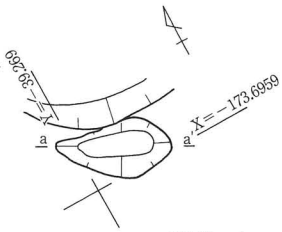
S K47

① 10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルト
(10YR 7/3 にぶい黄橙色　微砂～シルトのブロックを含む)
② 10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルト
③ 10YR 6/2 灰黄褐色　シルト



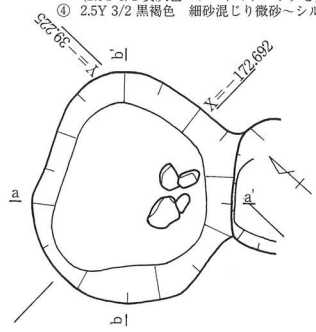
S K48

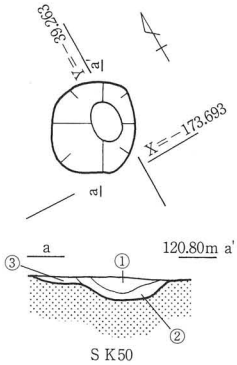
① 10YR 3/2 黒褐色　微砂～シルト
(炭化物を含む)



S K49

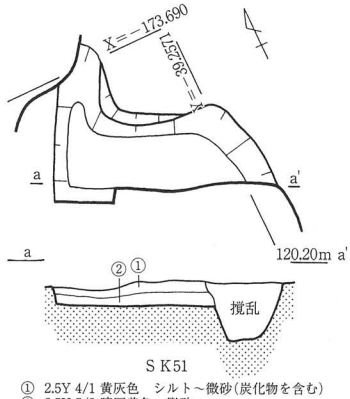
① 2.5Y 3/2 黒褐色　細砂混じり微砂～シルト
(2.5Y 8/6 黄色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
② 2.5Y 3/2 黒褐色　細砂混じり微砂～シルト
(2.5Y 7/4 浅黄色　微砂～シルトのブロックを多く含む)
③ 2.5Y 3/2 黒褐色　細砂混じり微砂～シルト
(2.5Y 6/1 黄灰色　シルトのブロックを少量含む)
④ 2.5Y 3/2 黒褐色　細砂混じり微砂～シルト





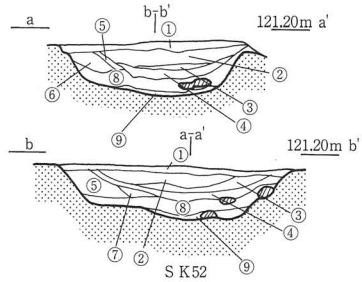
S K50

① 10YR 3/1黒褐色　シルト
(10YR 8/4 浅黄橙色　細砂のブロックを含む)
② 10YR 3/1 黒褐色　シルト
③ 10YR 3/1 黒褐色　シルト(炭化物を含む)



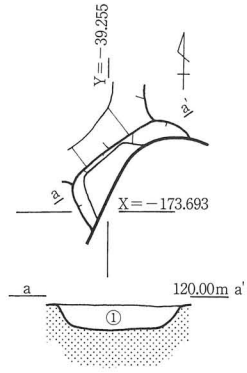
S K51

① 2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂(炭化物を含む)
② 2.5Y 5/2 暗灰黄色　微砂



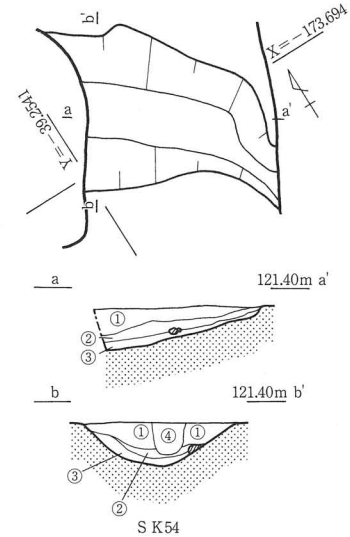
S K52

① 10YR 4/3 にぶい黄褐色　シルト～微砂(若干細粒砂を含む)
② 10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂(若干細粒砂を含む)
③ 10YR 2/1 黒色　微砂～シルト
(2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂を多く含む)
④ 10YR 1.7/1 黒色　微砂～シルト(炭化物を含む)
(2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂を多く含む)
(10YR 6/6 明黄褐色　シルト～微砂を若干含む)
⑤ 5YR 5/6 明赤褐色　シルト～微砂
(10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂を少量含む)
⑥ 10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂
(10YR 5/2 灰黄褐色　微砂～細粒砂を少量含む)(若干中粒砂を含む)
⑦ 10YR 5/2 灰黄褐色　微砂～細粒砂
⑧ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～中粒砂 (若干微砂粒砂を含む)
⑨ 10YR 3/2 黒褐色　シルト～微砂 (若干細～中粒砂を含む)



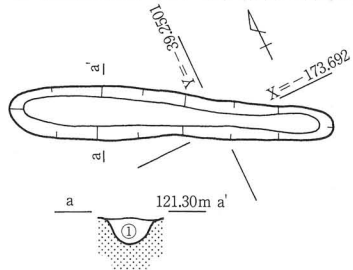
S K53

① 10YR 4/3 黄褐色　シルト～微砂
(炭化物を含む)



S K54

① 10YR 4/2 灰黄褐色　シルト～微砂
(若干細粒砂を含む)
② 2.5Y 6/4 にぶい黄色　シルト～微砂
(10YR 6/2 灰黄色　シルト～微砂を少量含む)
③ 10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルト
(10YR 6/1 褐灰色　シルト～微砂を少量含む)
④ 10YR 3/2 黒褐色　シルト～微砂(細～粗砂を含む)



S K55

① 10YR 3/2 黒褐色　シルト～微砂 (細～粗砂を含む)

第186図　ＳＫ46～55平面図・土層断面図 (1/60)

2．遺物

当該遺構からは甕A（708）が出土している。頸部は逆L字状に屈曲する。体部外面にはケズリを施した後、頸部付近に横方向のミガキを施している。

〔SK48〕（第185・186図、図版75）

1．遺構

H－e 7区に位置する土坑で、検出面の標高は北側121.24m、南側121.08mである。平面形は不正形を呈しており、長軸は1.74m、短軸は0.82m、深さは0.11mであった。埋土の特徴から、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。

2．遺物

当該遺構からは甕の底部（710）が出土している。外面と底部には細かいミガキを施す。

〔SK49〕（第186図）

H－g10区に位置する土坑で、検出面の標高は120.60mである。平面形は不正形を呈しており、長軸は0.92m、短軸は0.49m、深さは0.22mであった。弥生土器が出土しているが図化できなかった。埋土の特徴から、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。

〔SK50〕（第186図）

H－g10区に位置する土坑で、検出面の標高は120.60mである。平面形は隅丸方形を呈しており、長軸は0.73m、短軸は0.66m、深さは0.18mであった。比較的浅い皿状の断面を呈している。弥生土器が出土しているが細片のため図化できなかった。埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

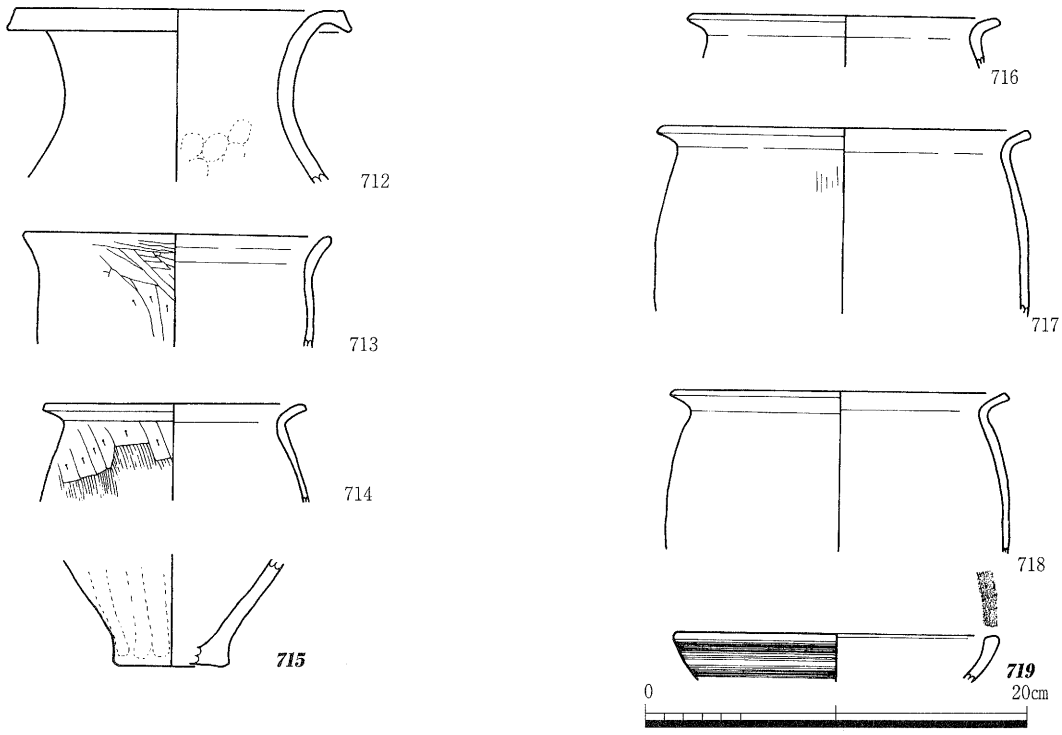
〔SK51〕（第186図）

H－f 9区からH－f10区にかけて位置する土坑で、検出面の標高は121.08mである。当該遺構は、調査区外へさらに伸びており、平面形は不正形を呈しており、長軸は1.78m以上、短軸は1.25m以上、深さは0.2mであった。遺物は出土しなかったが、埋土が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

〔SK52〕（第186・187・204・205図、図版76・99・100）

1．遺構

H－f10区に位置する土坑で、検出面の標高は121.11mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.84m、短軸は1.61m、深さは0.42mであった。掘形法面は急な勾配を持



第187図　ＳＫ52出土土器

って掘られており、底部には比較的起伏が多く認められた。

２．遺物

当該遺構からは広口壺Ａ（712）、甕Ａ（713・714・716～718）、高坏Ａ（719）、石鏃（788）、石錐（791）等が出土している。

712は広口壺Ａである。頸部は外反し、口縁部は水平に伸びる。口縁端部はわずかに下方向に拡張する。頸部内面には指押さえ痕が顕著である。

713・714・716～718は甕Ａである。713は頸部にしまりがなく、口縁部は短く外反する。外面にはケズリを施す。714・716～718は頸部がくの字状に屈曲する。714は、外面はやや粗いハケを施した後、頸部付近にはケズリを施している。715は甕の底部である。内外面にナデを施す。

719は高坏Ａである。坏部は椀状である。外面には直線文を、口縁端部上面には波状文を施文している。

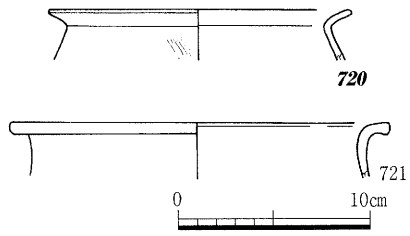
788は凸基式石鏃、791は石錐である。両者とも先端を欠損している。サヌカイト製である。

当該遺構出土の遺物はⅢ－１様式に位置づけられる。

〔ＳＫ53〕（第186図）

Ｈ－ｆ10区に位置する土坑で、検出面の標高は121.11ｍである。当該遺構は、攪乱によって、大部分が破壊されていおり、平面形・規模ともに不明である。遺物は出土しなかっ

たが、埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。



第188図　ＳＫ54・55出土土器

〔ＳＫ54〕（第186・188図、図版76）

１.遺構

Ｈ－ｆ10区に位置する土坑で、検出面の標高は121.30ｍである。当該遺構は、攪乱によって、大部分が破壊されており、平面形・規模ともに不明である。出土した遺物から弥生時代のものと考えられる。

２.遺物

当該遺構からは甕Ａ（721）が出土した。口縁部のみの細片である。頸部は逆Ｌ字状に屈曲する。

〔ＳＫ55〕（第186・188・204図、図版76・99）

１.遺構

Ｈ－ｅ10区とＨ－ｆ10区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は121.30ｍである。溝状に細長い平面形態を呈しており、長軸2.58ｍ、短軸0.42ｍである。弥生土器が出土しており、埋土が周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

２.遺物

当該遺構からは甕Ａ（720）、石鏃（786）が出土している。

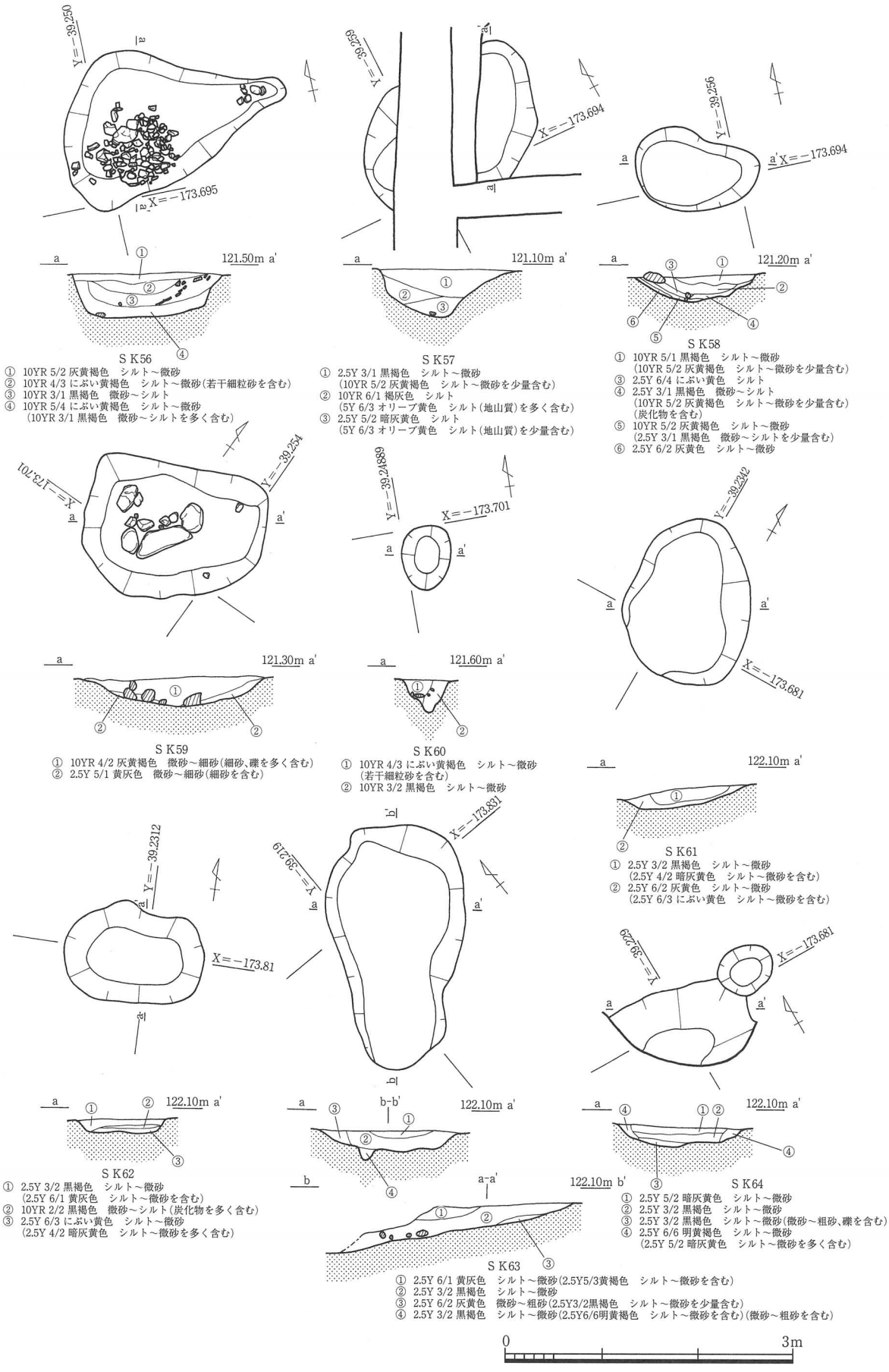
720は甕Ａである。頸部はくの字状に屈曲している。外面には細かいハケを施す。

786はサヌカイト製の石鏃である。基部を欠損している。

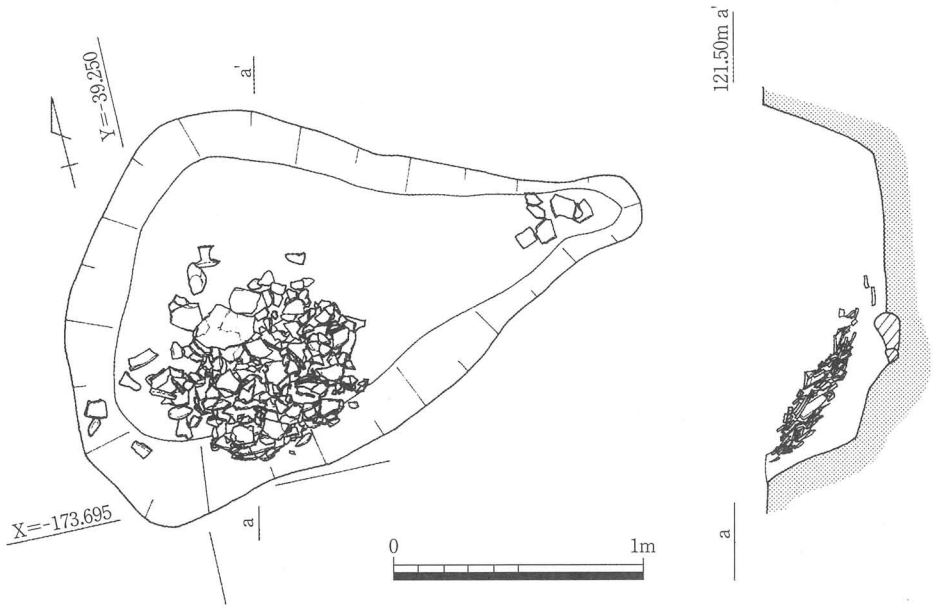
〔ＳＫ56〕（第189～193図、図版36・76・77・78）

１．遺構

Ｈ－ｅ10区とＨ－ｆ10区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は東側121.50ｍ、西側約121.40ｍである。平面形は不正形を呈しており、長軸は2.42ｍ、短軸は1.54ｍ、深さは0.52ｍであった。掘形法面は急な勾配を持って掘られており、底部は比較的平坦であった。埋土は４層からなり、最下層である④層及び、この上層に堆積する③層には、大量の遺物が含まれていた。また、遺物は細片となった状態で、南西部隅からかたまって出土しており、南西方向から投棄された状況で出土している。出土した遺物から弥生時代のものと考えられる。



第189図　ＳＫ56～64平面図・土層断面図（1/60）



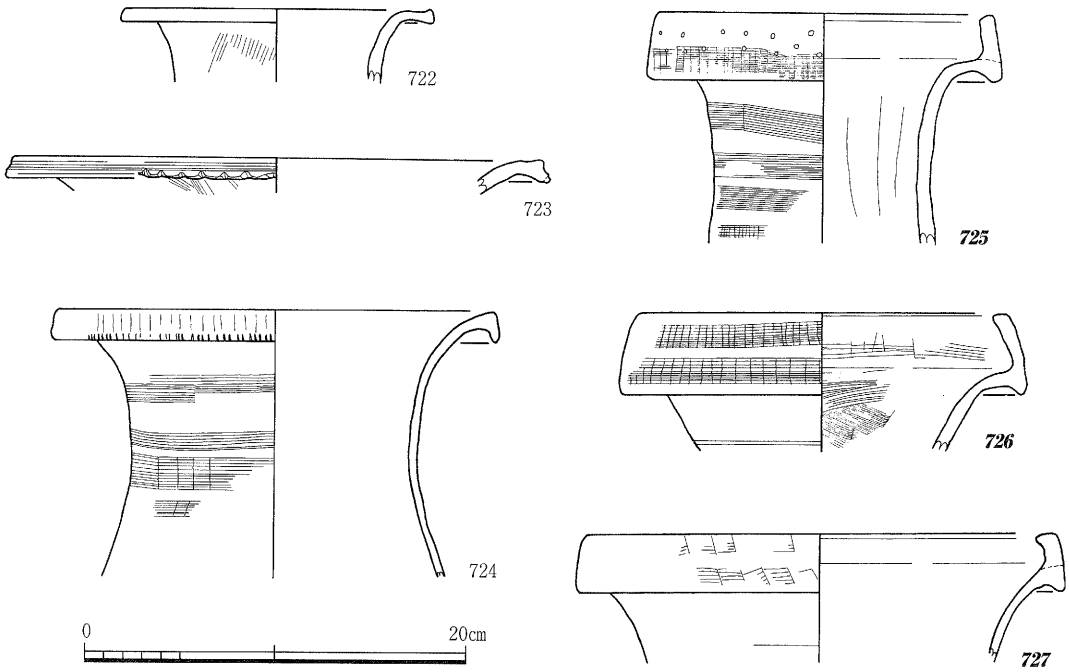
第190図　ＳＫ56遺物出土状況図（1/30）

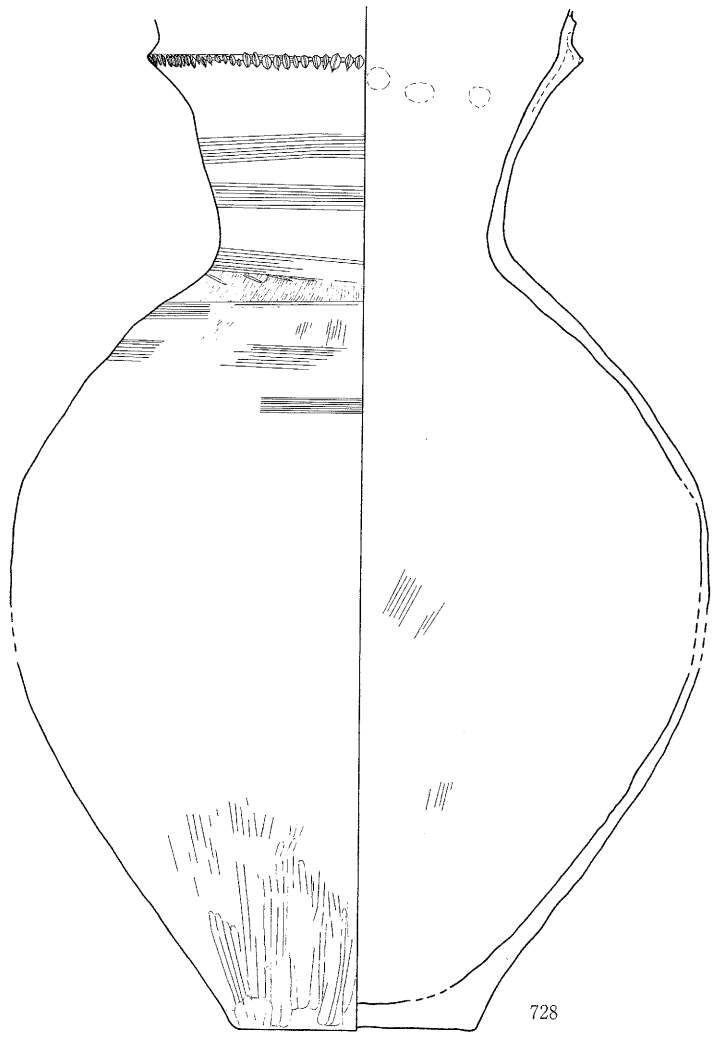
２．遺物

723・724は広口壺Ａである。723は口縁端部を下外方向に拡張している。口縁端部には直線文を施文し、端部下端には刻目を加えている。724は体部から頸部、口縁部まで緩やかに接続する特異な形態を持つ。口縁端部は垂直方向へ拡張している。口縁端部には簾状文を施文し、端部下端には刻目を加える。頸部には直線文と簾状文を施文している。

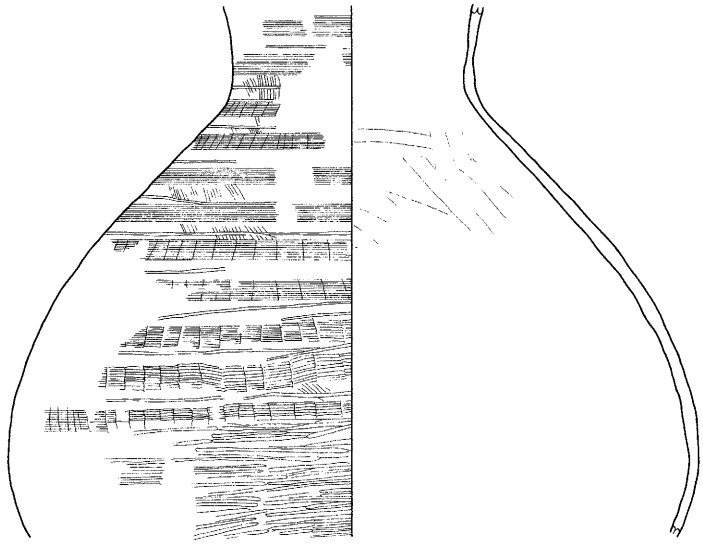
725～727は広口壺Ｂ１である。ともに口縁端部に幅の狭い間隔の長い簾状文を施文している。725の上方向に拡張した口縁端部は直立する。下方向への拡張は小さい。口縁端部には簾状文の施文の後、刺突を加え、頸部には直線文と簾状文を施文している。726は上下に拡張した口縁端部が内傾する。口縁端部には簾状文、頸部には直線文を施文している。727は上方向に拡張した口縁端部は直立気味で、端部上端は内側に肥厚する。728は広口壺Ｂ２である。口縁部は欠損している以外はほぼ完形に復元できた。体部は最大径を中ほどに持つ。受け口状口縁の屈曲部には刻目を施す。頸部から体部には直線文を施文している。722は広口壺Ｃである。口縁部は水平に伸びて、端部をわずかに上方向に拡張している。729は壺の体部から頸部である。体部は丸味を持つ。頸部は、わずかに開きながら直線的に立ち上がる。体部上半部から頸部には、直線文と幅が狭く間隔の長い簾状文を施文し、文様間には暗文状のミガキを施している。734は壺の底部である。外面には縦方向のミガキを密に施し、内面はハケの後ナデを施している。

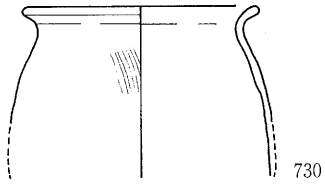
730～732・735～739・741～745は甕Ａである。頸部が緩やかに外反するもの（730・731・732・735・736・741・745）と、くの字状に屈曲するもの（737・738・739・742～744）がある。730は、外面にミガキを施す。731・732は内外面に細かいハケを施した後ミガキを施している。735・736は頸部が緩やかに外反し、口縁端部にやや広い面をもつ。741は口縁端部が凹線状に窪む。737・738・739・742～744は、頸部がくの字状に屈曲する。

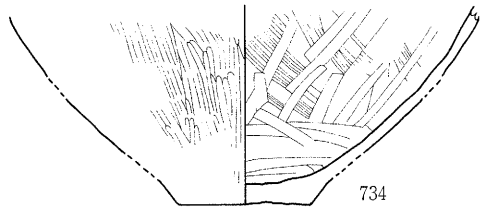


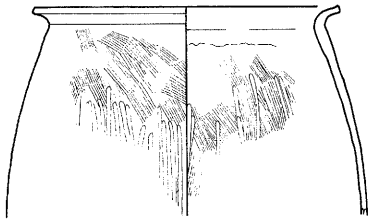


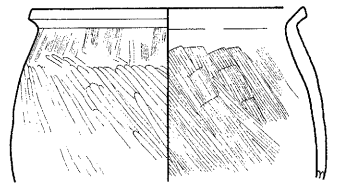
第191図　ＳＫ56出土土器①

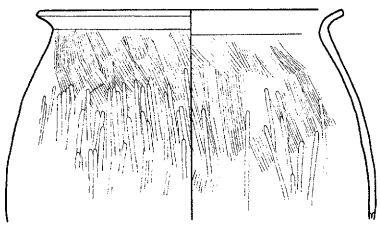


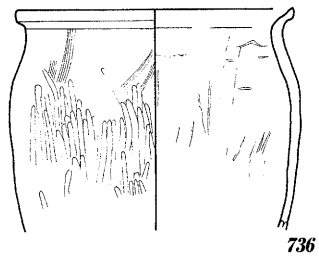


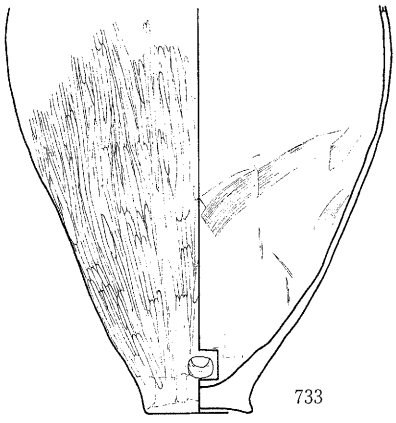


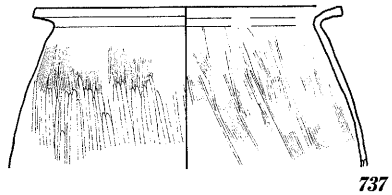


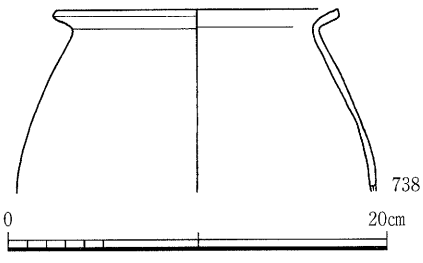




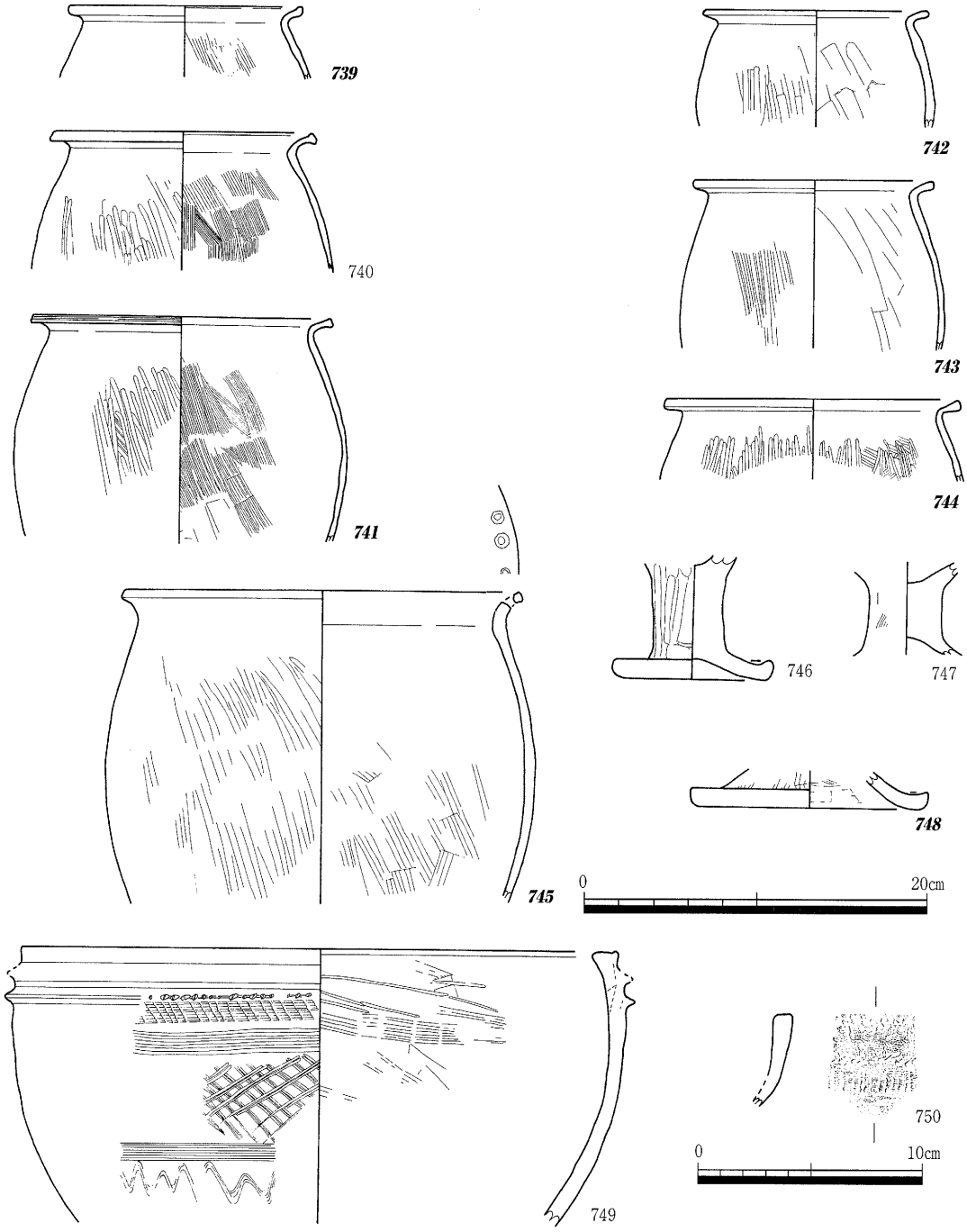








第192図　ＳＫ56出土土器②



第193図　ＳＫ56出土土器③

737は内外面に細かいハケの後、ミガキを施している。738は摩滅が激しいが内面に指押さえ痕が残る。742は外面に幅の広いミガキを施す。743は外面が赤変している。744は口縁端部が肥厚する。内外面に密にミガキを施している。739は、口縁端部を上方向に拡張している。内面に細かいハケ、外面にはナデを施す。745は大型の甕Ａである。外面には斜め方向のミガキ、内面には粗いハケを施す。口縁部の一部に紐孔を穿つ。740は甕Ｂであり、外面にやや太いミガキの上から、細いミガキを施し、内面には粗いハケの上から、細かいハケを施している。

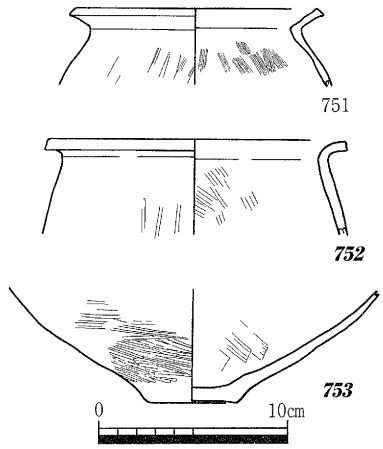
749は大型の鉢である。口縁端部は内側に肥厚する。口縁部外面には突帯を２条貼り付

け、刻目を加えている。体部には簾状文、直線文、斜格子文、波状文を施文する。

750は高坏Ａである。口縁部は直立する。外面には扇状文と簾状文を施文している。

746～748は高坏の脚部である。いずれも脚柱部は中実である。748は外面に放射状のハケを施している。

当該遺構出土の遺物はⅢ－１～２様式に位置づけられる。



第194図　ＳＫ57・58出土土器

〔ＳＫ57〕（第189・194図、図版78）

1.遺構

Ｈ－ｆ10区に位置する土坑で、検出面の標高は121.08ｍである。攪乱によって中央部が破壊されているが、平面形は隅丸方形を呈しており、長軸は2.08ｍ、深さは0.5ｍであった。比較的深い掘形を有しており、底部は椀状を呈している。埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同様の特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

2.遺物

当該遺構からは甕Ｂ（751）が出土している。頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部はわずかに拡張する。内外面に細かい斜め方向のハケを施す。

〔ＳＫ58〕（第189・194・204図、図版78・98）

1．遺構

Ｈ－ｆ10区に位置する土坑で、検出面の標高は約121.10ｍである。平面形は不正形を呈しており、長軸は1.29ｍ、短軸は0.88ｍ、深さは0.28ｍであった。弥生土器が出土している。出土した遺物から弥生時代のものと考えられる。

2．遺物

当該遺構からは甕Ａ（752）、石鏃（787）等が出土している。

752は甕Ａである。頸部が緩やかに外反する。外面に縦方向のミガキ、内面には細かいハケを施している。753は壺の底部である。外面には横方向のミガキを密に施し、内面には細かいハケを施している。

787はサヌカイト製の凸基式石鏃である。先端を欠損している。

当該遺構からは、時期を決定する器種が少ないが、土器はⅢ様式からⅣ様式に位置づけられる。

〔ＳＫ59〕（第189・204図、図版98）

１.遺構

Ｈ－ｆ10区とＭ－ｆ１区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は121.20ｍである。平面形は隅丸方形を呈しており、長軸は1.89ｍ、短軸は1.53ｍ、深さは0.3ｍであった。埋土には直径が10㎝～30㎝の礫が多く含まれていた。埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

２.遺物

782はサヌカイト製の凸基式石鏃である。基部を欠損している。

〔ＳＫ60〕（第189・195図、図版78）

１.遺構

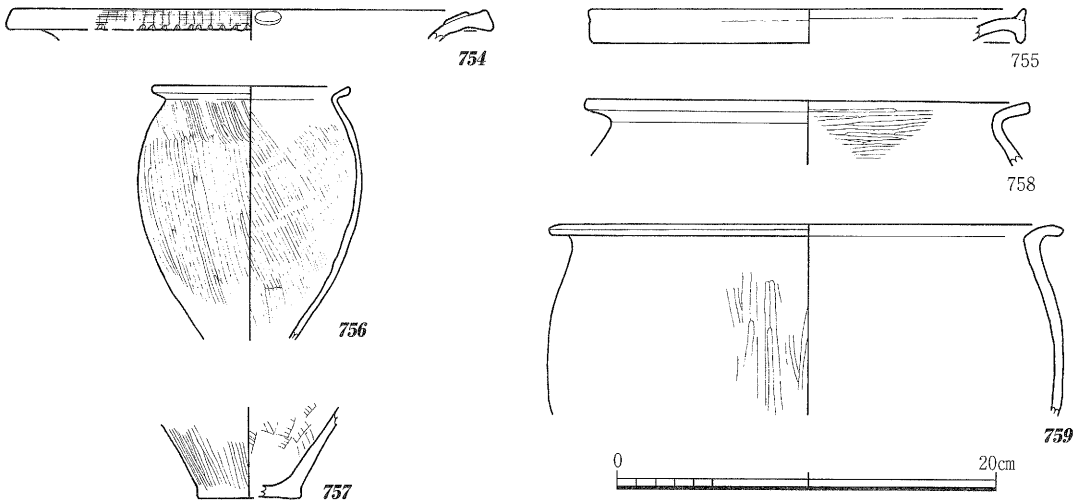
Ｍ－ｅ１区に位置する土坑で、検出面の標高は121.51ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.67ｍ、短軸は0.51ｍ、深さは0.36ｍであった。掘形は比較的深く、底部は起伏が認められた。弥生土器が出土しており、埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有していることから、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

２.遺物

当該遺構からは広口壺Ｅ（755）、甕Ａ（758・759）等が出土している。いずれも細片である。

755は広口壺Ｅである。口縁端部を上下に拡張している。口縁端部外面には、上方向に口縁端部を拡張した際の粘土接合痕が残る。

758・759は甕Ａである。758は頸部が緩やかに外反する。頸部内面には横方向のミガキを密に施す。759は、頸部が稜を持って屈曲し、口縁部は短く外反する。外面には縦方向



第195図　ＳＫ60・62出土土器

のミガキを施す。757は甕の底部である。外面には縦方向のミガキを密に施す。

当該遺構出土遺物は、Ⅲ様式からⅣ様式に位置づけられる。

〔ＳＫ61〕（第189図）

Ｈ－ｄ８区からＨ－ｄ９区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は北側121.96m、南側121.89mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.73m、短軸は1.34m、深さは0.22mであった。掘形は比較的浅く、皿状を呈している。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴が、周囲にある弥生時代の遺構埋土と同じ特徴を有しており、当該遺構も弥生時代の遺構と判断できる。

〔ＳＫ62〕（第189・195図、図版78）

１．遺構

Ｈ－ｄ９区に位置する土坑で、検出面の標高は122.00mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.45m、短軸は1.09m、深さは0.19mであった。掘形は比較的浅く、皿状を呈している。弥生土器が出土しており、埋土の特徴から、弥生時代の遺構である。

２．遺物

当該遺構からは広口壺Ａ（754）、甕Ａ（756）が出土している。

754は広口壺Ａであり、口縁端部を下方向にほとんど拡張せず、肥厚する程度である。口縁端部外面には間隔の長い簾状文を施し、端部下端には刻目を加える。口縁部内部には円形浮文を貼り付けている。

756は甕Ａである。頸部は、くの字状に屈曲する。外面は頸部までミガキを施している。

当該遺構出土遺物は、754の特徴からⅢ－１様式に位置づけられる。

〔ＳＫ63〕（第189図）

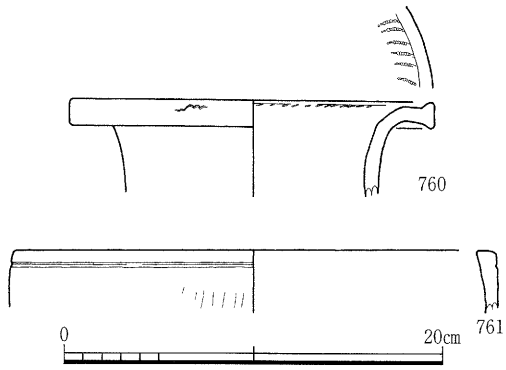
Ｈ－ｃ９区からＨ－ｄ９区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は121.90～122.00mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は2.54m、短軸は0.93～1.46m、深さは0.31mであった。ＮＲ１によって南半部が破壊されている。掘形は比較的浅く、皿状を呈している。埋土の特徴から、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。

遺物は出土していない。

〔ＳＫ64〕（第189図）

Ｈ－ｃ９区に位置する土坑で、検出面の標高は122.00mである。平面形は不正形を呈しており、長軸は1.45m、短軸は0.89m以上、深さは0.21mであった。ＮＲ１によって南半部が破壊されている。掘形は比較的浅く、皿状を呈している。弥生土器が出土しているが

図化できなかった。出土した遺物から弥生時代のものと考えられる。



第196図　ＳＫ65・68出土土器

〔ＳＫ65〕（第196・197図、図版78）

１.遺構

Ｈ－ｅ10区に位置する土坑で、検出面の標高は121.96ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.62ｍ、短軸は0.37ｍ、深さは0.23ｍであった。比較的深く掘られており、掘形法面は急な勾配を持っていた。底部は比較的平坦であった。出土した遺物から弥生時代のものと考えられる。

２.遺物

当該遺構からは広口壺Ｃ（760）等が出土した。他に弥生土器の細片が出土したが図化できなかった。

760は口縁部が水平に伸び、口縁端部を上方向に拡張する。端部外面には波状文、内面には列点文を施文している。

〔ＳＫ66〕（第197図）

Ｍ－ｄ１区に位置する土坑で、検出面の標高は121.84ｍである。平面形は隅丸方形を呈しており、長軸は0.7ｍ、短軸は0.64ｍ、深さは0.04ｍであった。弥生土器が出土しているが図化できなかった。出土した遺物から弥生時代のものと考えられる。

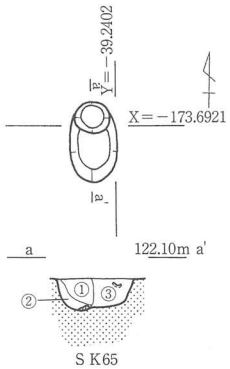
〔ＳＫ67〕（第197図）

Ｍ－ｅ１区に位置する土坑で、検出面の標高は121.88ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は8.8ｍ、短軸は5.1ｍ、深さは0.25ｍであった。掘形は椀形に掘られている。弥生土器が出土しているが図化できなかった。出土した遺物から弥生時代のものと考えられる。

〔ＳＫ68〕（第196・197図）

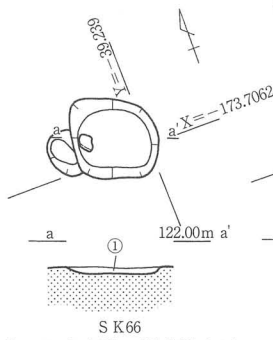
１.遺構

Ｈ－ｂ９区に位置する土坑で、検出面の標高は122.56ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.58ｍ、短軸は0.55ｍ、深さは0.1ｍであった。掘形は椀形に掘られている。出土した遺物や埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。



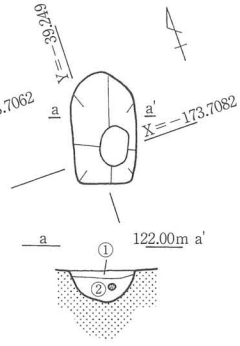
S K65

① 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂
（若干細粒砂を含む）
② 2.5Y 6/2 灰黄色　微砂～細粒
③ 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂
（2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂を含む）



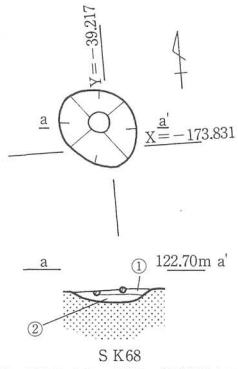
S K66

① 2.5Y 5/1 黄灰色　粗砂混じりシルト
（2.5Y 3/1 黒褐色　炭化物層がレンズ状に堆積）



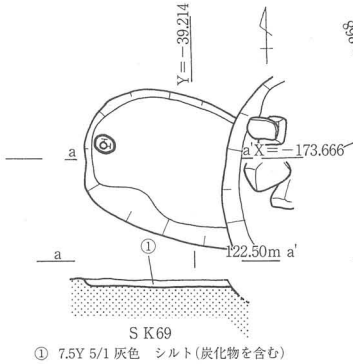
S K67

① 撹乱
② 2.5Y 4/2 暗灰黄色　粗砂混じりシルト
（炭化物を若干含む）



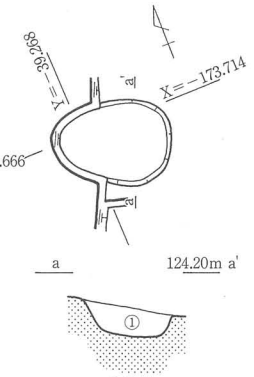
S K68

① 5Y 3/1 オリーブ黒色　細砂混じりシルト
② 2.5Y 4/2 暗灰黄色　粗砂混じり細砂
（礫を少量含む）



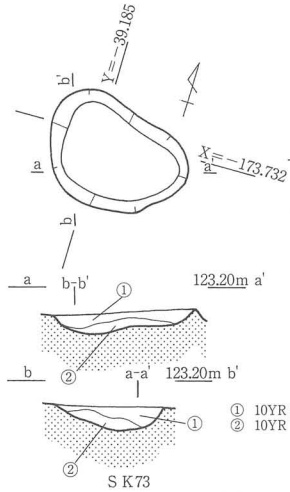
S K69

① 7.5Y 5/1 灰色　シルト（炭化物を含む）



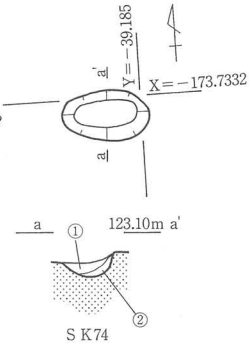
S K71

① 10YR 4/1 褐灰色　礫混じり細砂



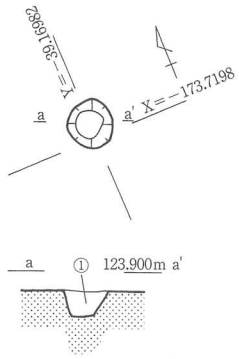
S K73

① 10YR 5/3 にぶい黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
② 10YR 7/4 にぶい黄橙色　粗砂混じり微砂～シルト



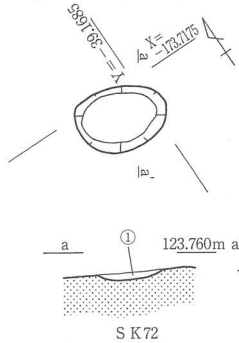
S K74

① 10YR 5/3 にぶい黄褐色　粗砂混じり微砂～シルト
② 10YR 7/4 にぶい黄橙色　粗砂混じり微砂～シルト



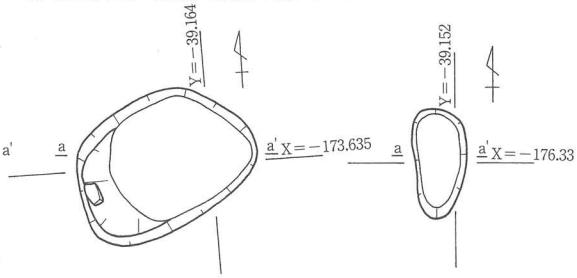
S K70

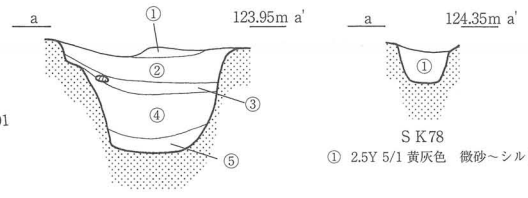
① 7.5Y 5/1 灰色　シルト（炭化物を含む）



S K72

① 2.5Y 5/1 黄灰色　シルト
（炭化物を含む）



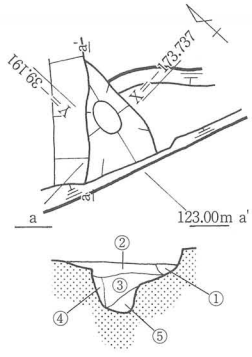


S K77

① 10YR 5/1 褐灰色　シルト～微砂
② 10YR 5/4 にぶい黄褐色　微砂～微砂
③ 10YR 5/4 にぶい黄褐色　微砂～微砂
（10YR 4/2 灰黄褐色　シルト～微砂を多く含む）
④ 10YR 4/2 灰黄褐色　シルト～微砂
⑤ 10YR 4/2 灰黄褐色　シルト～微砂
（2.5Y 7/6 明黄褐色　シルトのブロック（地山質）を含む）

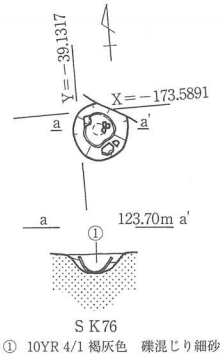
S K78

① 2.5Y 5/1 黄灰色　微砂～シルト



S K75

① 2.5Y 8/3 淡黄色　細砂混じりシルト
② 10YR 6/2 灰黄褐色　細砂混じり微砂～シルト（炭化物を少量含む）
③ 10YR 5/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト（炭化物を含む）
④ 10YR 8/4 浅黄橙色　細砂混じり微砂～シルト
⑤ 10YR 6/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト



S K76

① 10YR 4/1 褐灰色　礫混じり細砂

第197図　ＳＫ65～78平面図・土層断面図（1/60）

2．遺物

当該遺構からは無頸壺（761）が出土した。口縁部外面には凹線文を施文している。

〔ＳＫ69〕（第197図）

Ｌ－ｊ２区とＭ－ａ２区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は122.62ｍである。西半部は破壊を受けている。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.29ｍ以上、短軸は1.09ｍ、深さは0.1ｍであった。遺物は出土していない。

〔ＳＫ70〕（第197・198図、図版79）

1．遺構

Ｌ－ｇ２区に位置する土坑で、検出面の標高は123.75ｍである。平面形は楕円形を呈しており、直径は0.35ｍ、深さは0.2ｍであった。掘形は椀形に掘られている。遺物は瓦器椀が出土している。

2．遺物

当該遺構からは瓦器椀（764）が出土した。内外面の摩滅が激しく調整は観察できなかった。

12世紀ごろの所産であると考えられる。

〔ＳＫ71〕（第197・198図、図版79）

1．遺物

Ｌ－ｇ２区に位置する土坑で、検出面の標高は124.00～123.90ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.89ｍ、短軸は0.69ｍ、深さは0.22ｍであった。掘形は椀形に掘られている。古墳時代後期の遺構である。

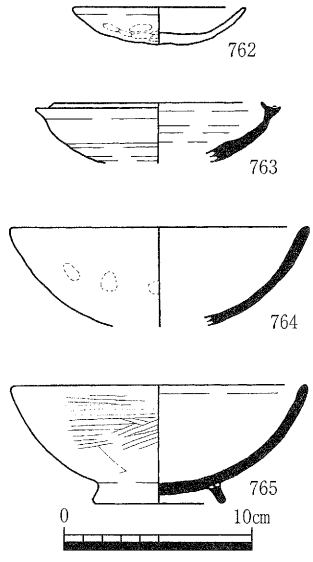
2．遺物

763は須恵器蓋坏の坏身である。飛鳥Ⅰ式に位置づけられる。

〔ＳＫ72〕（第197・198図、図版79）

1．遺構

Ｌ－ｇ２区に位置する土坑で、検出面の標高は123.66ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.72ｍ、短軸は0.51ｍ、深さは0.1ｍであった。掘形は浅く皿状を呈している。遺物は黒色土器椀・土師皿が出土している。



第198図　ＳＫ70～72出土土器

2.遺物

762は土師皿である。765は黒色土器椀である。外面に横方向のミガキを密に施している。

11世紀の所産であると考えられる。

〔ＳＫ73〕（第197図）

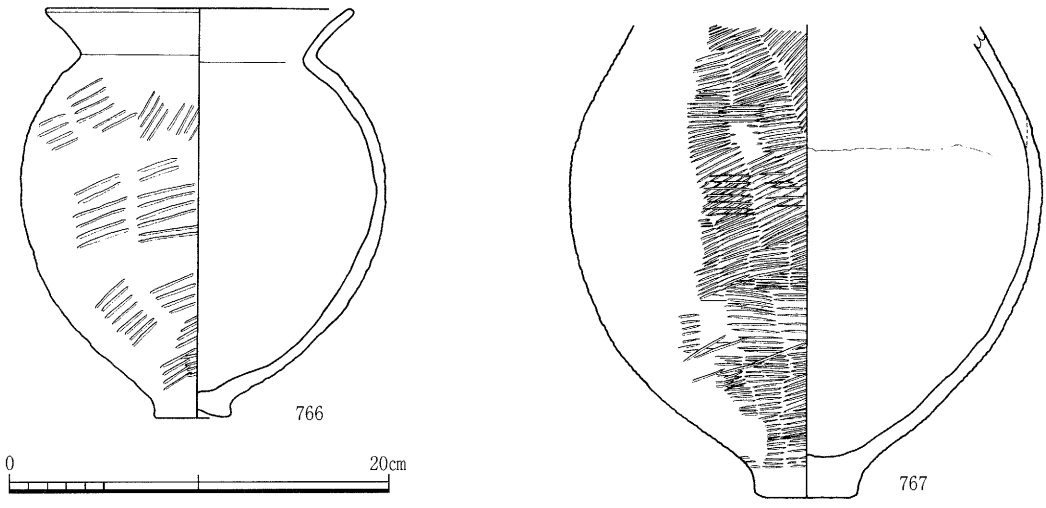
Ｌ－ｉ４区に位置する土坑で、検出面の標高は123.00ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.06ｍ、短軸は0.92ｍ、深さは0.17ｍであった。掘形は浅く皿状を呈している。埋土の特徴から、弥生時代の遺構と判断できる。遺物は出土していない。

〔ＳＫ74〕（第197図）

Ｌ－ｉ４区に位置する土坑で、検出面の標高は123.00ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.7ｍ、短軸0.4ｍ、深さは0.11ｍであった。埋土の特徴から、弥生時代の遺構と判断できる。遺物は出土していない。

〔ＳＫ75〕（第197図）

Ｌ－ｉ４区に位置する土坑である。検出面の標高は122.77ｍである。平面形は不正形を呈しており、長軸は0.9ｍ以上、短軸は0.6ｍ程度と思われ、深さは0.4ｍであった。ＳＩ28に西半部を破壊されている。遺物は出土していないが、埋土の特徴や、弥生時代の竪穴住居によって破壊を受けていること等から、当該遺構も弥生時代の遺構といえる。遺物は出土していない。



第199図　ＳＫ76出土土器

〔ＳＫ76〕（第197・199図、図版79）

１.遺構

Ｂ－ｄ９区とＢ－ｄ10区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は123.50ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.4ｍ、深さは0.15ｍであった。

２.遺物

当該遺構からはＶ様式系甕（766・767）が出土している。

両者とも体部最大径を中位に持ち、外面に右上がりのタタキを施している。766は円板充填法により底部を上げ底に仕上げている。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。767は前者に比べて細かいタタキを施している。

ともにＶ様式末～庄内期に位置づけられる。

〔ＳＫ77〕（第197・200図、図版79）

１.遺構

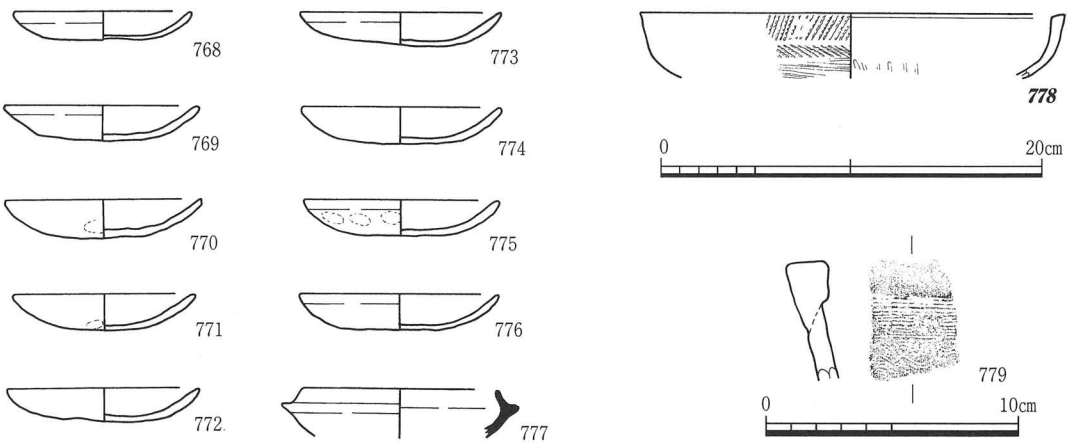
Ｇ－ｇ４区に位置する土坑で、検出面の標高は123.89ｍである。隅丸方形を呈しており、長軸は1.45ｍ、短軸は1.13ｍで深さは0.68ｍであった。掘形法面は急な勾配を持って、比較的深く掘られており、底部は平坦であった。土師質の皿が出土しており、中世の遺物といえる。

２.遺物

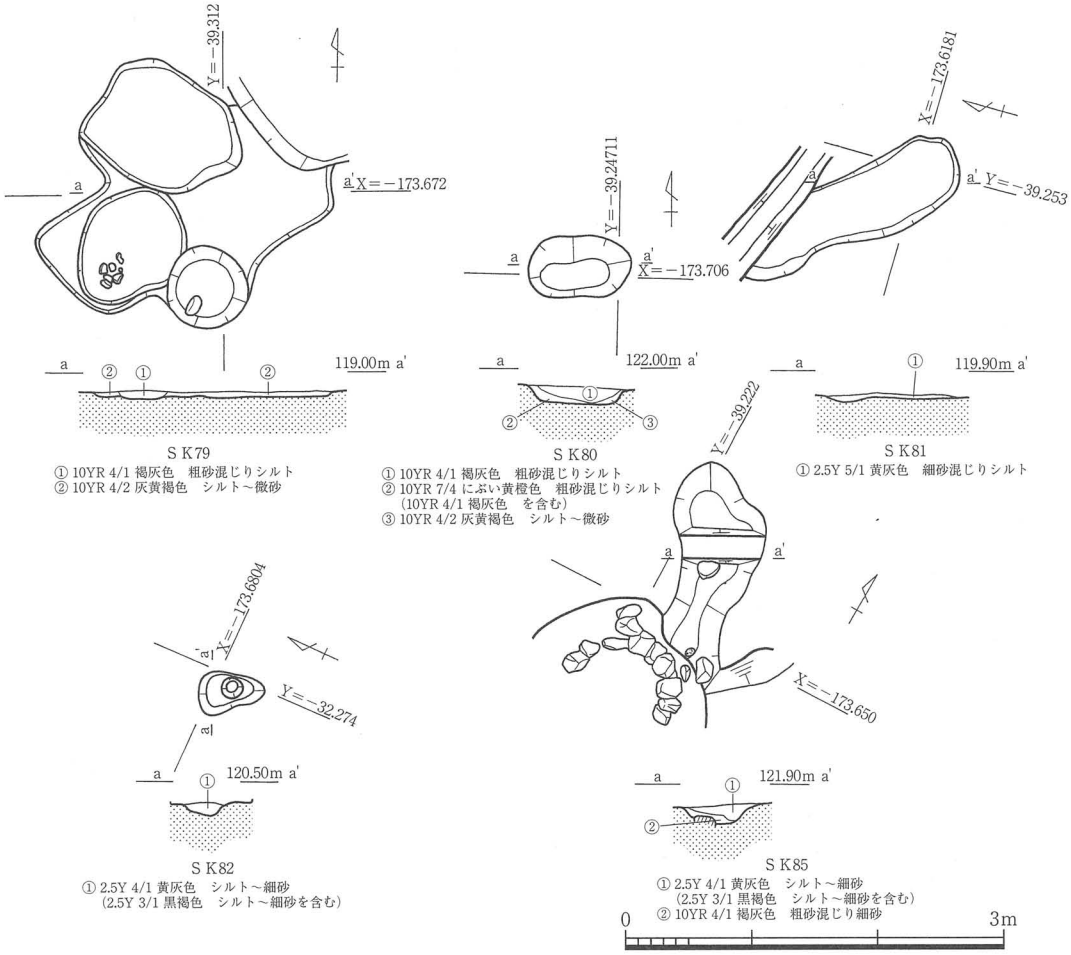
768～776は土師皿である。16世紀から17世紀ごろの所産と考えられる。

〔ＳＫ78〕（第197・200図、図版80）

１.遺構



第200図　ＳＫ77～79出土土器



第201図　ＳＫ79～82・85平面図・土層断面図（1/60）

Ｇ－ｆ４区に位置する土坑で、検出面の標高は124.20ｍである。隅丸方形を呈しており、長軸は0.84ｍ、短軸は0.44ｍで深さは0.34ｍであった。掘形法面は急な勾配を持って、比較的深く掘られており、底部は平坦であった。

２.遺物

777は須恵器は蓋坏の坏身である。ＴＫ209型式に位置づけられ、古墳時代後期の所産である。

〔ＳＫ79〕（第200・201図、図版80）

１.遺構

Ⅰ－ａ８区とⅠ－ｂ８区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は118.63ｍである。隅丸方形を呈しており、長軸は1.66ｍ、短軸は1.44ｍで深さは0.07ｍであった。浅い土坑である。当該土坑埋没後にＳＫ14～16が掘られていた。弥生時代の遺物包含層下で検出できたことから、弥生時代の遺構といえる。

2.遺物

当該遺構からは高坏A（778）、鉢B（779）が出土した。

778の坏部は口縁部が低部から屈曲して直立する。口縁部外面にヘラ状工具による刻目を綾杉状に施している。

779は大型の鉢Bである。口縁端部は低く段状に肥厚する。体部には間隔の短い簾状文と波状文を施文している。

〔SK80〕（第201図）

M－e1区に位置する土坑で、検出面の標高は121.92mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.79m、短軸は0.49m、深さは0.14mであった。埋土の特徴から、弥生時代の遺構と判断できる。弥生土器が出土しているが図化できなかった。

〔SK81〕（第201・202図、図版80）

1.遺構

H－f2区に位置する土坑で、検出面の標高は119.91mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は2.00m、短軸は0.59m、深さは0.04mであった。弥生土器が出土していることから、弥生時代の遺構であるといえる。

2.遺物

781は細頸壺の肩部から頸部であると考えられる。方形周溝墓群出土の破片と接合した。外面には、幅がやや広く間隔が比較的短い簾状文を施文している。

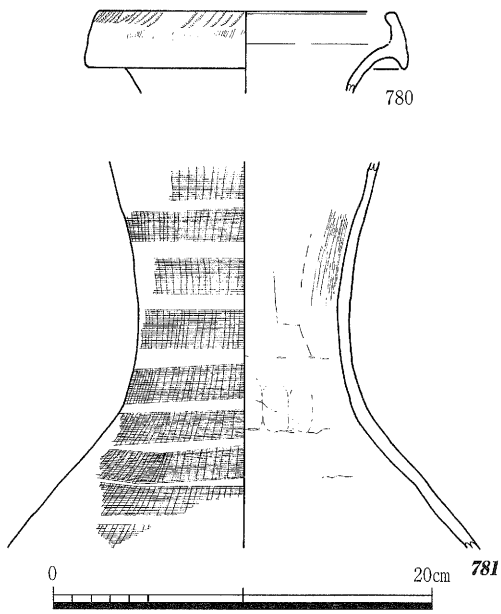
〔SK82〕（第201・205図、図版100）

1.遺構

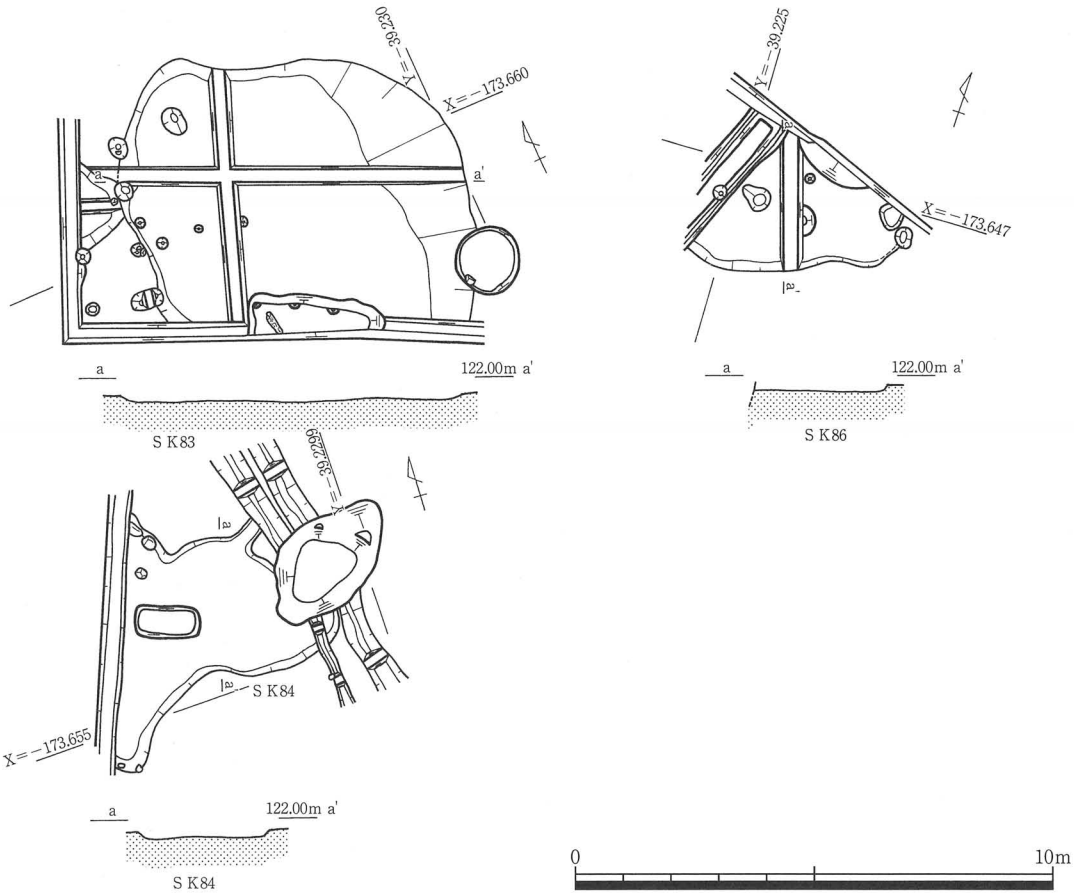
H－h9区に位置する土坑で、検出面の標高は120.32mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.51m、短軸は0.35m、深さは0.19mであった。埋土の特徴から、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。

2.遺物

792は、サヌカイト製の石匙である。把手の一部を欠損している。



第202図　SK81・84出土土器



第203図　ＳＫ83・84・86平面図・土層断面図（1/160）

〔ＳＫ83〕（第203・205図、図版98）

１.遺構

Ｈ－ｄ６区とＨ－ｄ７区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は121.60ｍである。調査区外へと続いており、全体の規模や形態は不明であるが一辺は、7.3ｍあり、深さは0.37ｍであった。出土遺物から弥生時代のものといえる。

２.遺物

795は石器の未製品である。自然面が残る。サヌカイト製である。

〔ＳＫ84〕（第202・203図、図版80）

１.遺構

Ｈ－ｄ６区に位置する土坑で、検出面の標高は121.60ｍである。調査区外へと続いており、全体の規模や形態は不明である。検出した限りでは、深さは、0.24ｍであった。

弥生土器が出土している。このようなことから、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。

2．遺物

当該遺構からは広口壺Ｂ１（780）が出土している。上下に拡張した口縁部は、やや内傾している。口縁端部外面には列点文と扇状文を施す。

〔ＳＫ85〕（第201図）

Ｈ－ｃ５区に位置する土坑で、検出面の標高は121.70ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.67ｍ以上、短軸は0.74ｍ、深さは0.22ｍあった。埋土の特徴が弥生時代の遺構埋土に近似しており、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。遺物は出土しなかった。

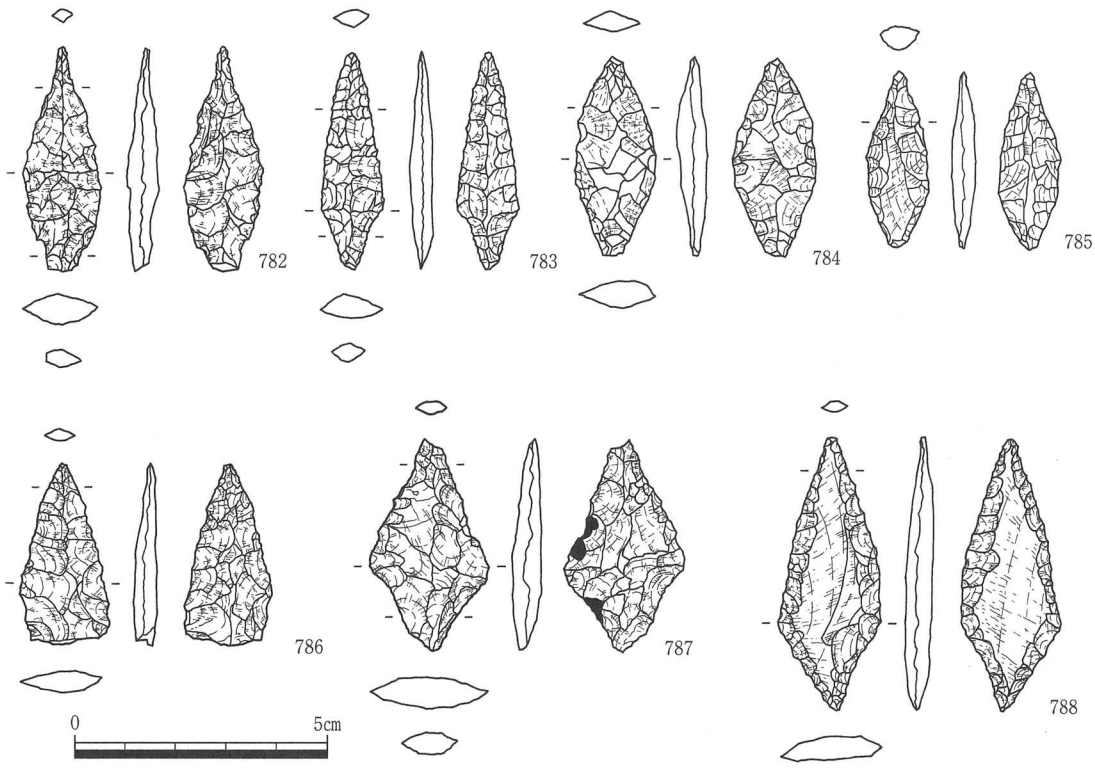
〔ＳＫ86〕（第203・205図、図版100）

１．遺構

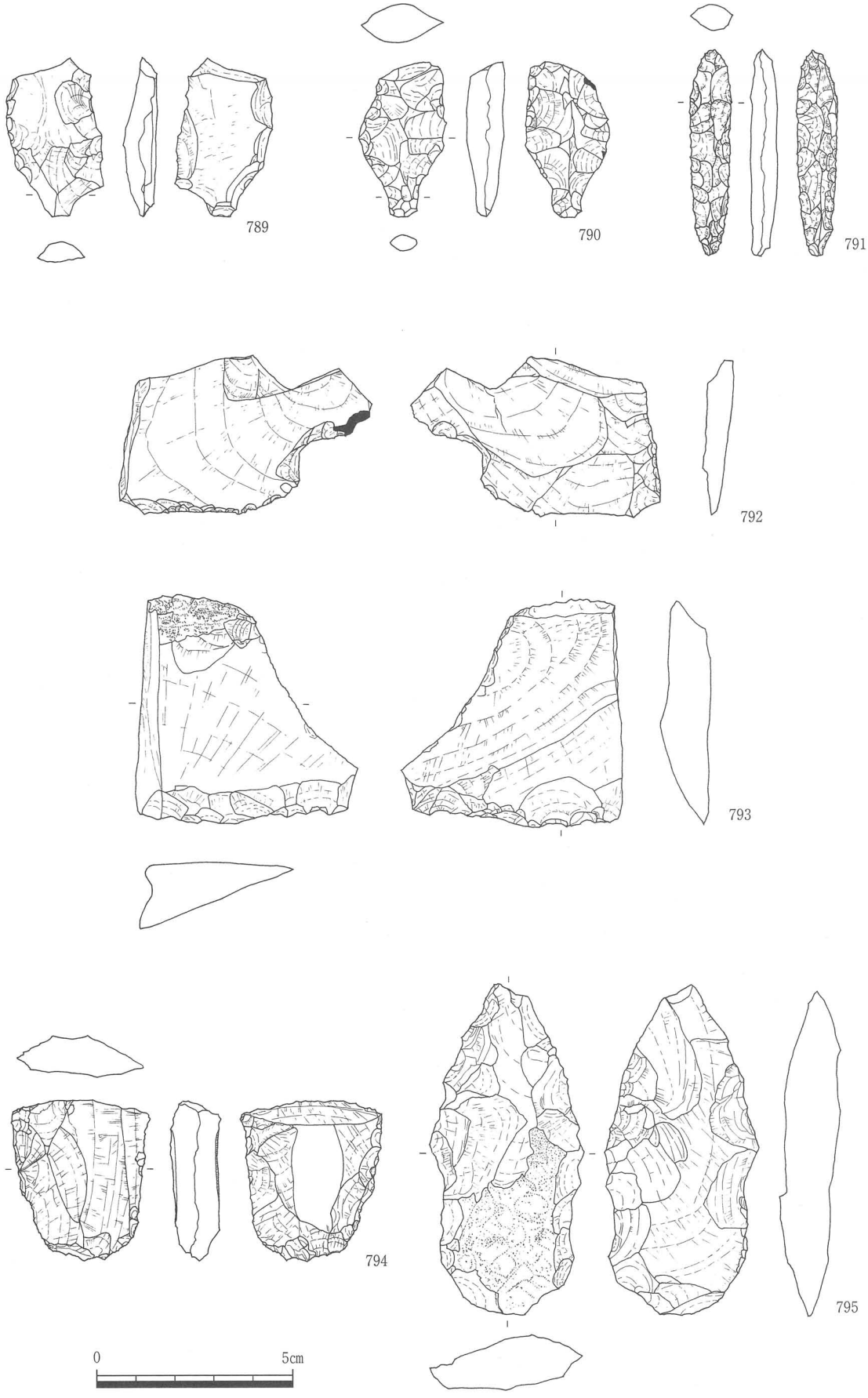
Ｈ－ｃ５区に位置する土坑で、検出面の標高は121.80ｍである。調査区外へと続いており、全体の規模や形態は不明である。深さは、0.23ｍあった。埋土の特徴から、弥生時代の遺構である可能性が指摘できる。

２．遺物

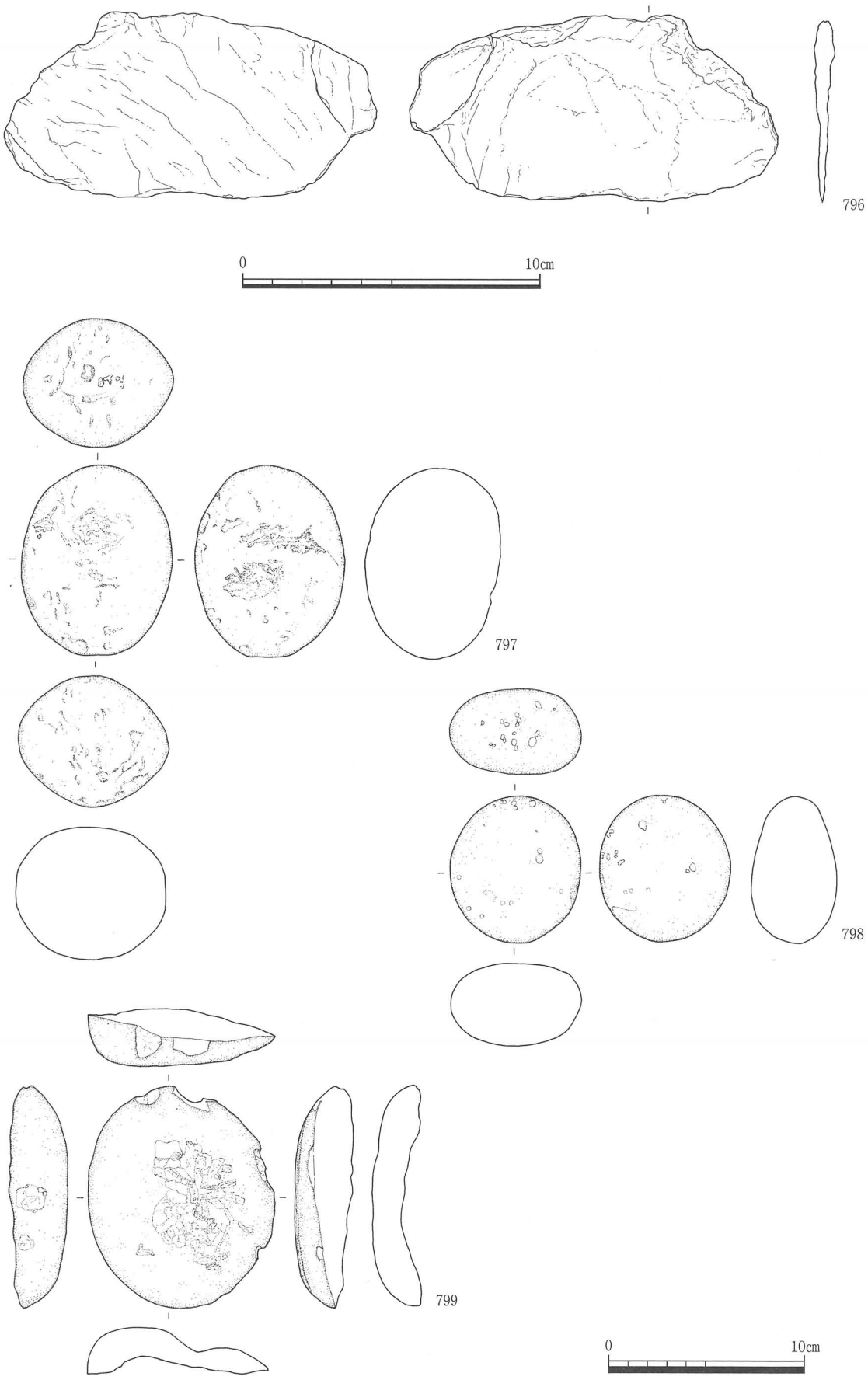
当該遺構からは石錐（790）が出土している。サヌカイト製である。先端を欠損している。



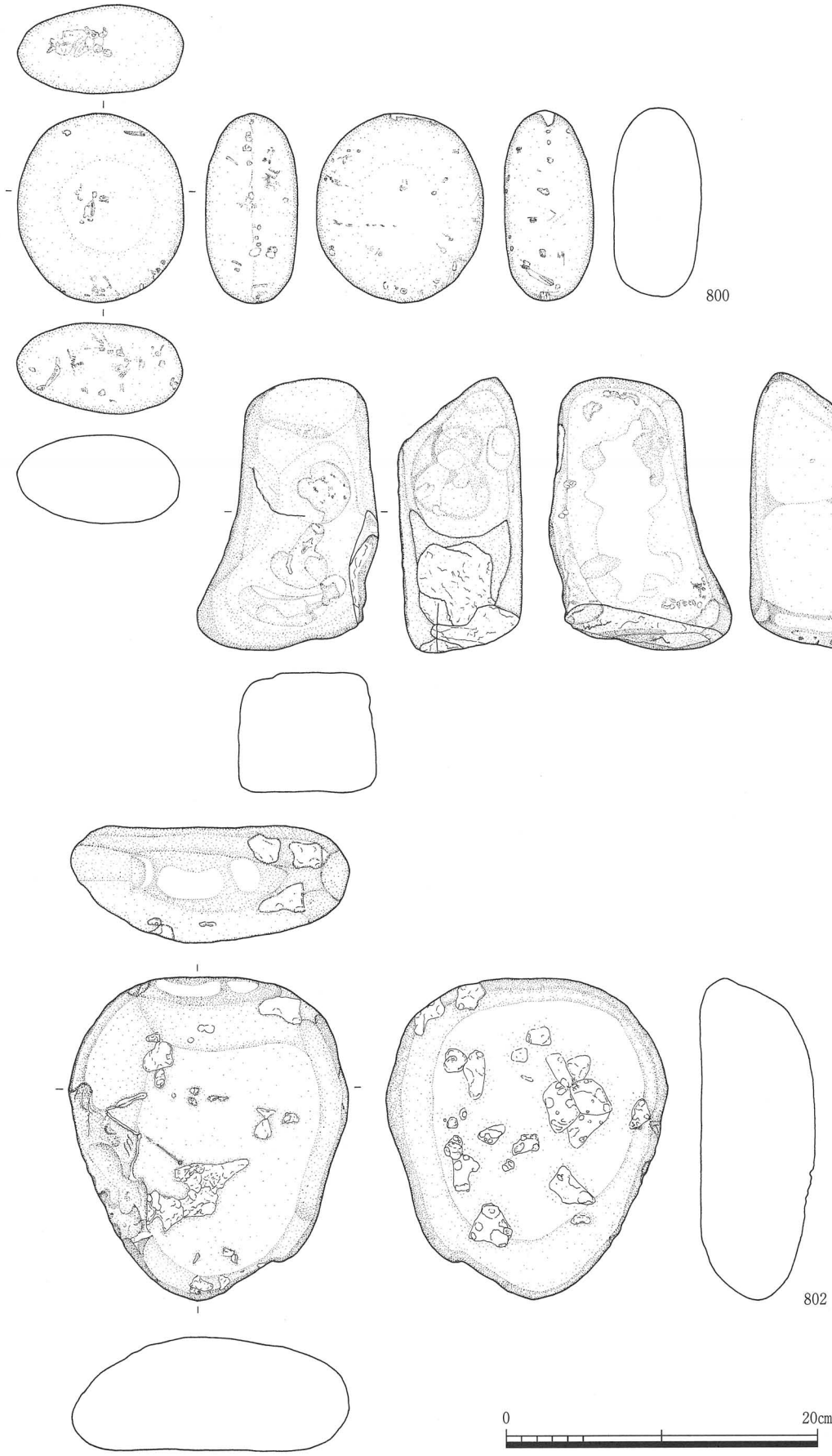
第204図　ＳＫ出土石器①



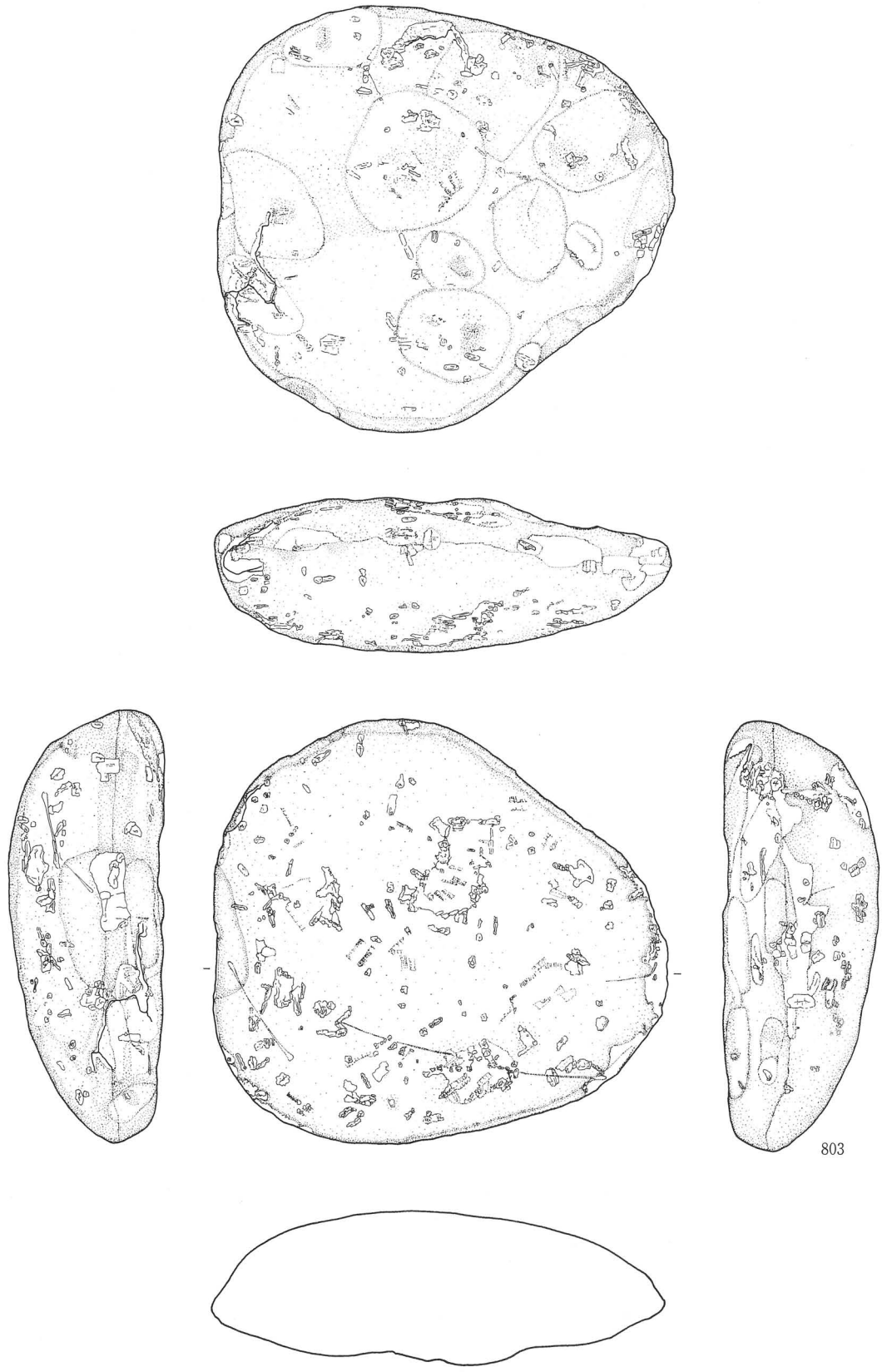
第205図　ＳＫ出土石器②



第206図　ＳＫ出土石器③



第207図　ＳＫ出土石器④



第208図　ＳＫ出土石器⑤

（５）　遺物出土ピット

本節では、遺物が出土したピットの報告を行う。遺物の図面については、土器・石器ともに一括して図示している。

〔ＳＰ１〕（第209・211図、図版80）

Ｉ－ｂ８区に位置するピットで、検出面の標高は118.55ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.45ｍ、短軸は0.3ｍ、深さは0.14ｍであった。遺物は、弥生土器壺、甕の砕片が出土した。この内、806が図化できた。甕Ａであり、外面はミガキ調整、内面はハケ調整が認められた。

〔ＳＰ２〕（第209・211図、図版80）

Ｈ－ｅ３区に位置するピットで、検出面の標高は120.80ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.35ｍ、深さは0.2ｍであった。遺物は、広口壺Ａ（804）が出土している。口縁端部に簾状文を施文している。

〔ＳＰ３〕（第209・211図、図版80）

Ｈ－ｄ４区に位置するピットで、検出面の標高は120.95ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.42ｍ、短軸は0.33ｍ、深さは0.11ｍであった。遺物は、807が図化できた。甕Ａであり、外面はミガキ調整が認められた。

〔ＳＰ４〕（第209図）

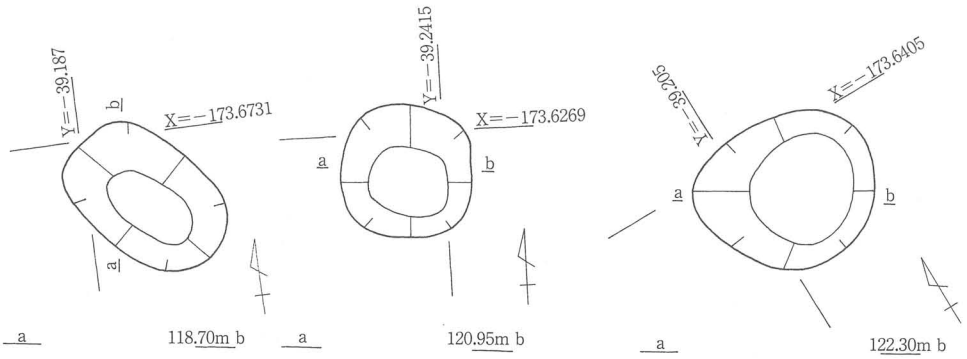
Ｈ－ｄ４区に位置するピットで、検出面の標高は121.00ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.59ｍ、短軸は0.47ｍ、深さは0.18ｍであった。弥生土器が出土しているが、図化できなかった。

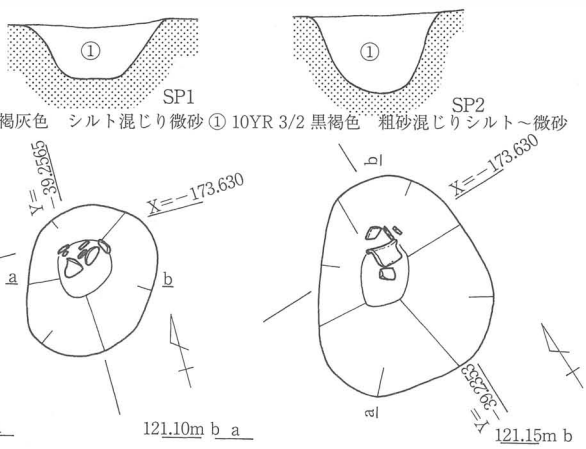
〔ＳＰ５〕（第209図）

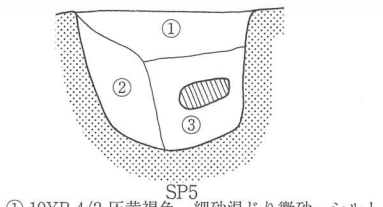
Ｈ－ａ５区に位置するピットで、検出面の標高は122.30ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は0.48ｍ、短軸は0.43ｍ、深さは0.37ｍであった。弥生土器が出土しているが、図化できなかった。

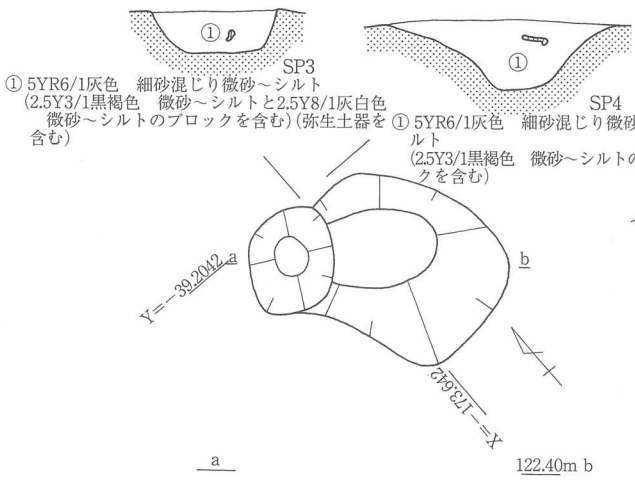
〔ＳＰ６〕（第209図）

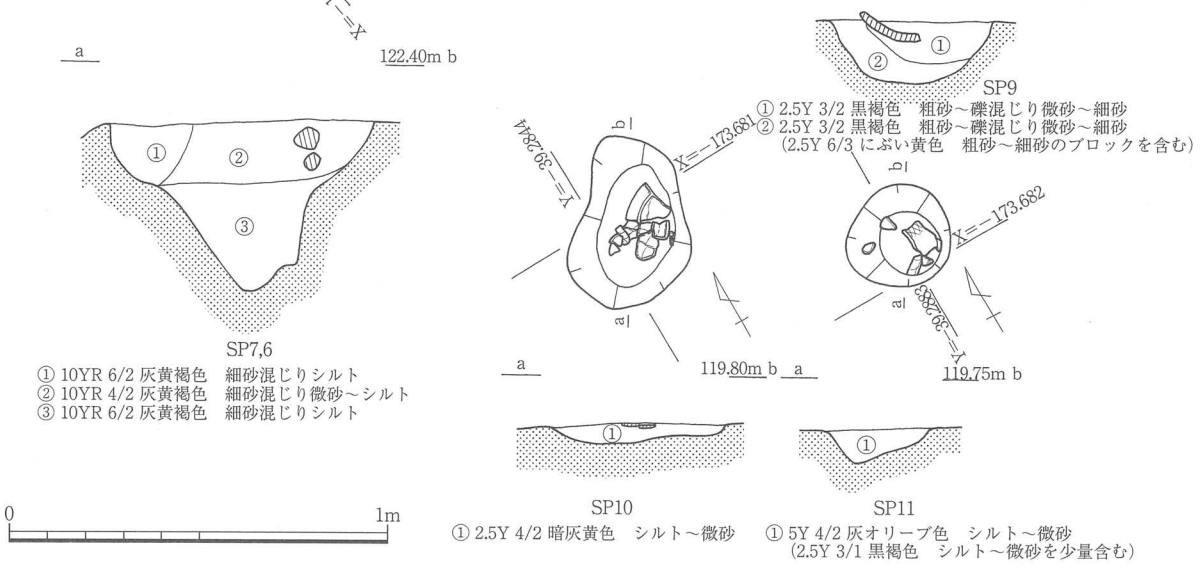
Ｈ－ａ５区に位置するピットで、検出面の標高は122.25ｍである。平面形は隅丸方形を呈しており、長軸は0.55ｍ、短軸は0.48ｍ、深さは0.45ｍであった。弥生土器が出土しているが、図化できなかった。



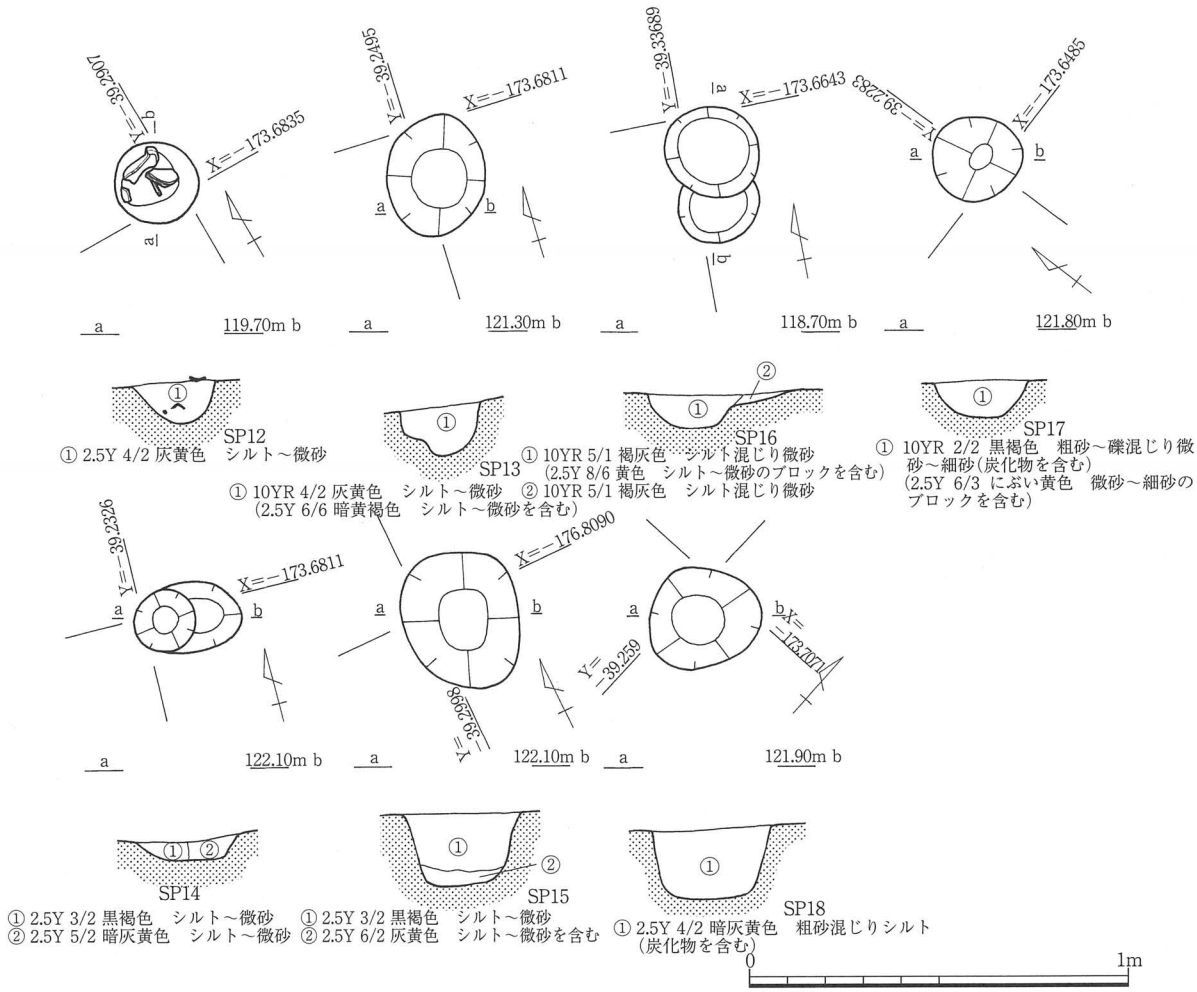








第209図　ＳＰ１～11平面図・土層断面図（1/20）



第210図　ＳＰ12～18平面図・土層断面図（1/20）

〔ＳＰ７〕（第209図）

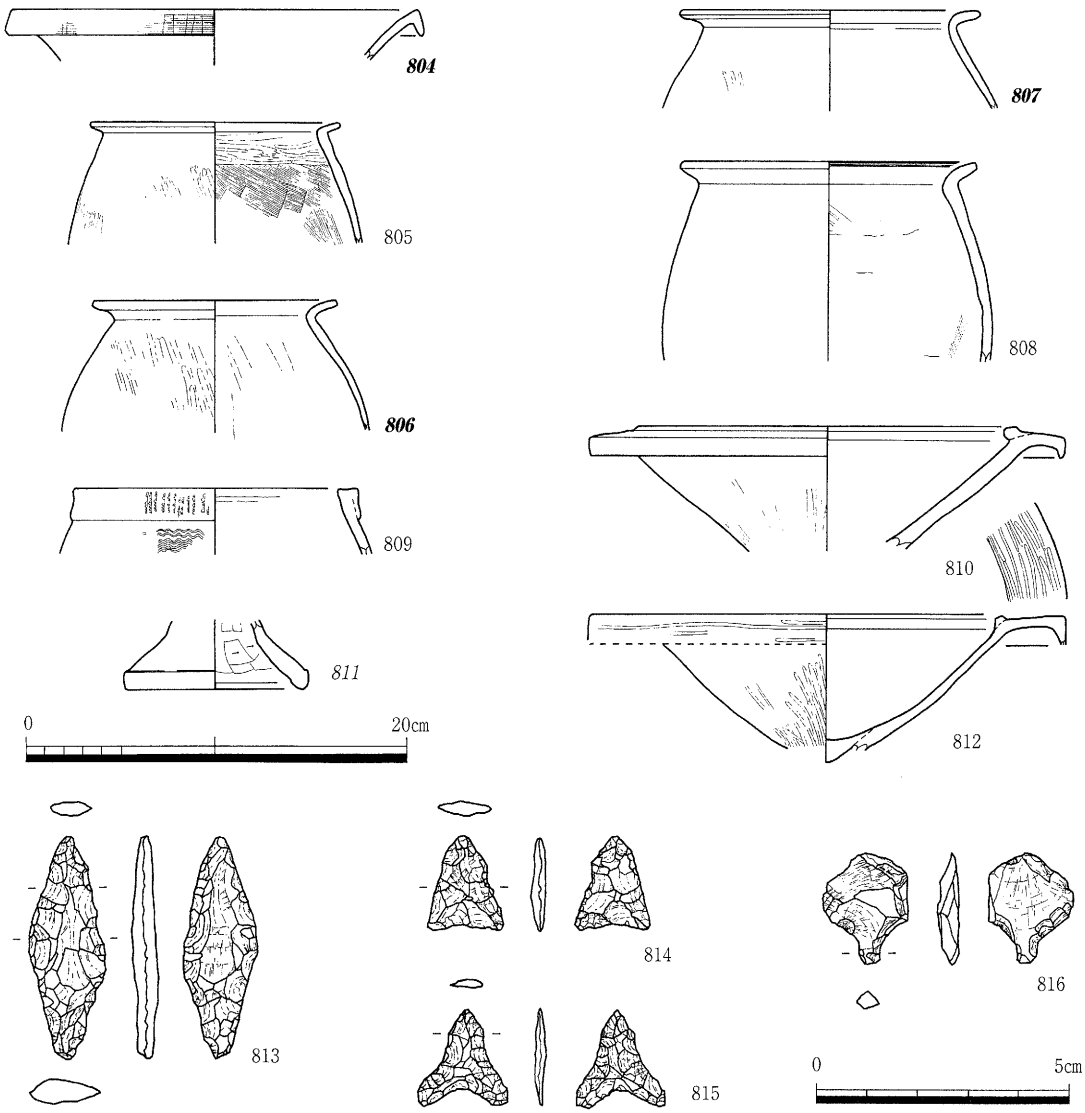
Ｈ－ａ５区に位置するピットで、検出面の標高は122.25ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.28ｍ、短軸は0.23ｍである。深さは0.16ｍであった。ＳＰ６の、東半部を破壊している。弥生土器が出土しているが、図化できなかった。

〔ＳＰ８〕（第209図）

Ｇ―ｉ５区に位置するピットで、検出面の標高は123.15ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.14ｍ、深さは0.05ｍであった。弥生土器が出土しているが、図化できなかった。

〔ＳＰ９〕（第209・211図、図版80）

Ｈ－ａ８区に位置するピットで、検出面の標高は122.75ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.48ｍ、短軸は0.43ｍ、深さは0.16ｍであった。遺物は、高坏Ｂ（810）が出土している。口縁端部を下方向に若干拡張している。



第211図　ＳＰ出土土器・石器

〔ＳＰ10〕（第209・211図、図版80）

Ｈ－ｉ９区に位置するピットで、検出面の標高は119.67ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.49ｍ、短軸は0.33ｍ、深さは0.05ｍであった。遺物は、812が出土している。高坏Ｂであり、口縁端部は下方向に若干拡張している。

〔ＳＰ11〕（第209・211図、図版80）

Ｈ－ｉ９区に位置するピットで、検出面の標高は119.60ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.25ｍ、短軸は0.26ｍ、深さは0.09ｍであった。遺物は、甕Ａ（805）が出土している。

〔ＳＰ12〕（第210・211図、図版80）

Ｈ－ｊ９区に位置するピットで、検出面の標高は119.55ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.22ｍ、深さは0.11ｍであった。遺物は、甕Ａ（808）が出土している。

〔ＳＰ13〕（第210・211図、図版98）

Ｈ－ｅ９区に位置するピットで、検出面の標高は121.10ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.33ｍ、短軸は0.26ｍ、深さは0.16ｍであった。周囲には同様のピットが集まっており、竪穴住居等が存在していた可能性がある。弥生土器が出土しているが、図化できなかった。サヌカイト製の有茎式石鏃（813）が出土した。

〔ＳＰ14〕（第210・211図、図版99）

Ｈ－ｄ９区に位置するピットで、検出面の標高は122.00ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.16ｍ、深さは0.05ｍであった。周囲には同様のピットが集まっており、竪穴住居等が存在していた可能性がある。弥生土器が出土しているが、図化できなかった。サヌカイト製の平基式石鏃（814）が出土した。

〔ＳＰ15〕（第210・211図、図版99）

Ｈ－ｃ９区に位置するピットで、検出面の標高は122.00ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.39ｍ、短軸は0.32ｍ、深さは0.19ｍであった。周囲には同様のピットが集まっており、竪穴住居等が存在していた可能性がある。弥生土器が出土しているが、図化できなかった。サヌカイト製の凹基式石鏃（815）が出土した。

〔ＳＰ16〕（第210・211図、図版80）

Ｉ－ｄ７区に位置するピットで、検出面の標高は118.50ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.24ｍ、深さは0.19ｍであった。遺物は、811が出土している。高坏の脚部である。

〔ＳＰ17〕（第210・211図、図版100）

Ｈ－ｃ５区に位置するピットで、検出面の標高は121.70ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は0.23ｍ、深さは0.1ｍであった。弥生土器が出土しているが、図化できなかった。サヌカイト製の石錐（816）が出土した。

〔ＳＰ18〕（第210・211図、図版80）

Ｍ－ｅ１区に位置するピットで、検出面の標高は121.85ｍである。平面形は円形を呈しており、長軸は0.3ｍ、短軸は0.27ｍ、深さは0.19ｍであった。遺物は、鉢Ｂ（809）が出土している。口縁端部は肥厚し、列点文を施文しており、体部には波状文を施文している。

（６）方形周溝墓

〔ＳＵ１〕（第212～214図、図版40）

Ｈ－ｅ１区を中心に位置する方形周溝墓と考えられる遺構である。上部は大きく削平されており、盛土は遺存していなかった。方形周溝墓ではなく、方形に巡る溝である可能性も残されているが、同様の方形周溝墓と考えられる遺構が連接していることから、方形周溝墓と考えた。規模は、南北8.6m以上、東西16.3mであった。周溝は、ＳＵ２と共有しており、幅２～7.3mであった。検出面からの深さは東側で0.5～0.6m、南側で0.2m、西側で0.2mであった。

〔ＳＵ２〕（第212～214図、図版40）

Ｈ－ｃ２区を中心に位置する方形周溝墓と考えられる遺構である。上部は大きく削平されており、盛土は遺存していなかった。方形周溝墓ではなく、方形に巡る溝である可能性も残されているが、同様の方形周溝墓と考えられる遺構が連接していることから、方形周溝墓と考えた。規模は、南北７m以上、東西11.1mであった。周溝は、幅4～7.1mであり、検出面からの深さは、東側で0.2～0.6m、南側で0.4～0.5m、西側で0.5～0.6mであった。

〔ＳＵ３〕（第212～214図、図版40）

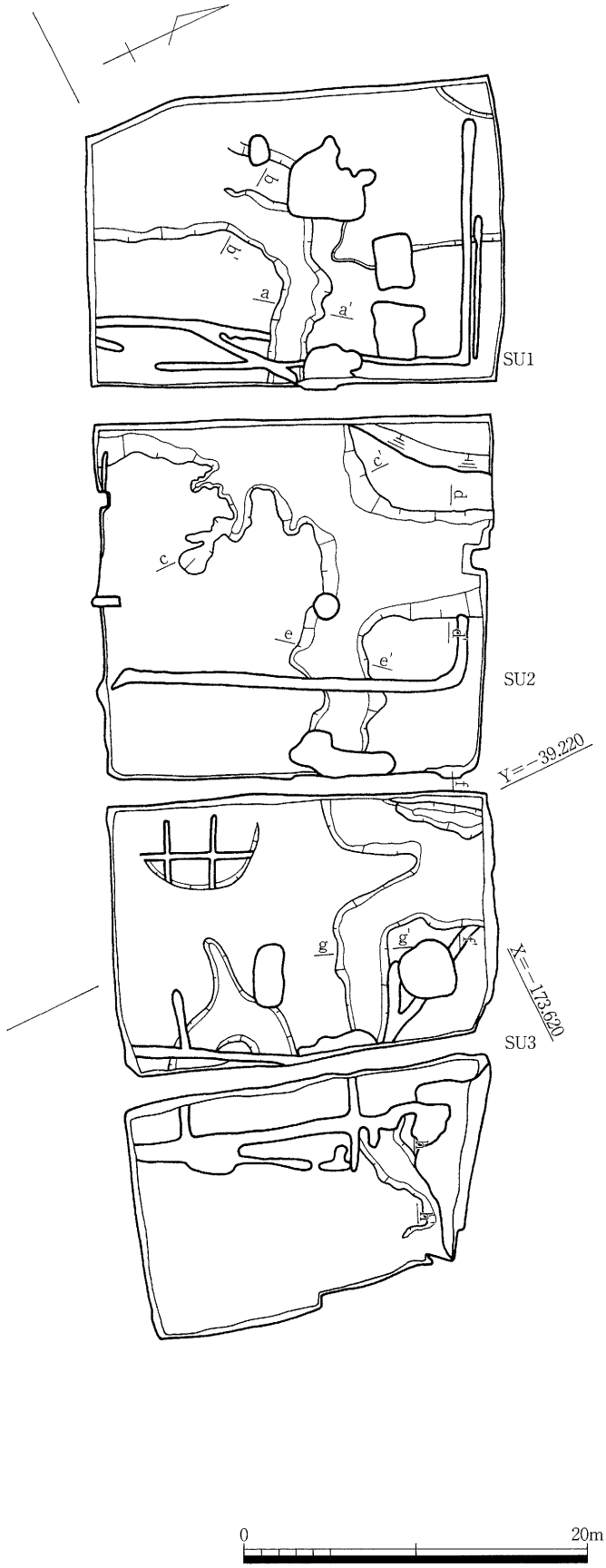
Ｈ－ｂ３区を中心に位置する方形周溝墓と考えられる遺構である。上部は大きく削平されており、盛土は遺存していなかった。方形周溝墓ではなく、方形に巡る溝である可能性も残されているが、同様の方形周溝墓と考えられる遺構が連接していることから、方形周溝墓と考えた。規模は、南北６m以上、東西13mであった。周溝は、幅２～5.3mであり、検出面からの深さは東側で0.4m、南側で0.3mであった。

出土遺物

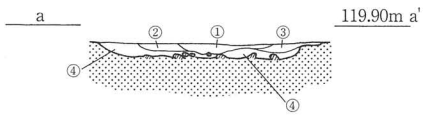
ＳＵ１～ＳＵ３の周溝と考えられる溝からは、大量の土器と石器が出土している。各溝は、連続していたため、ここで一括して報告する。遺物の取り上げは、第214図に示した各地区単位で行っているので、以下の報告も各地区ごとに行う。また、各遺物は、いずれも細かな破片となって、溝の埋土に混じった状態で出土している。なお、石器については、最後に一括して図示している。

Ｈ－ｆ１（第215図、図版81）

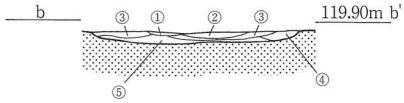
821は細頸壺である。ヘラ状工具による刻目と幅の広い簾状文を施文している。822は甕Ｃである。口縁端部は下方向に拡張しており、外面には、刺突文を施文している。819は高坏の脚部である。820は須恵器蓋坏の蓋もしくは、短頸壺の蓋である。



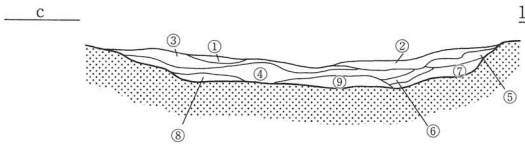
第212図　方形周溝墓群平面図（1/400）



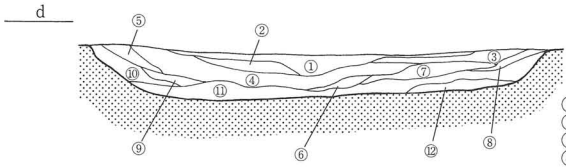
① 10YR 8/1 灰白色　粗砂混じり細砂
② 10YR 6/1 褐灰色　粗砂混じりシルト～微砂(5cm大の礫を含む)
③ 2.5Y 8/3 淡黄色　粗砂混じりシルト～微砂
④ 10YR 8/1 褐灰色　粗砂混じりシルト～微砂
(2.5Y 8/4 淡黄色　シルト～微砂のブロックを含む)



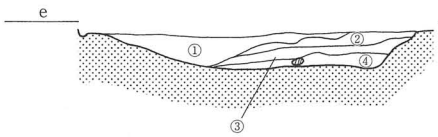
① 撹乱
② 5Y 6/3 オリーブ黄色　細砂混じりシルト～微砂
③ 10YR 6/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト～微砂
④ 10YR 7/1 灰白色　細砂混じりシルト～微砂
⑤ 10YR 6/2 灰黄褐色　細砂(5cm大の礫を含む)



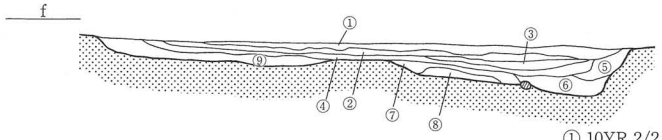
① 10YR 4/1 褐灰色　粗砂混じりシルト
② 10YR 6/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト～微砂
③ 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂混じり細砂
④ 10YR 5/1 褐灰色　細砂
⑤ 10YR 7/1 灰白色　細砂混じりシルト～微砂
⑥ 10YR 6/2 灰黄褐色　細砂(5cm大の礫を含む)
⑦ 10YR 3/4 にぶい黄褐色　粗砂混じりシルト～微砂
⑧ 2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂
⑨ 10YR 6/1 褐灰色　礫混じり細砂



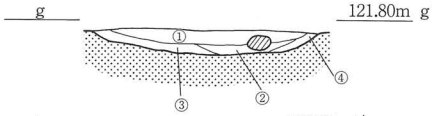
① 10YR 3/4 にぶい黄褐色　粗砂混じりシルト～微砂
② 2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂
③ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂
④ 2.5Y 3/1 黒褐色　シルト～微砂
⑤ 2.5Y 4/1 黄灰色　粗砂混じりシルト～微砂
⑥ 2.5Y 6/3 にぶい黄褐色　粗砂混じり細砂
⑦ 2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂
⑧ 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト
⑨ 2.5Y 4/1 黄灰色　粗砂混じりシルト～微砂
(2.5Y 8/4 淡黄色　シルト～微砂のブロックを含む)
⑩ 10YR 6/3 にぶい黄褐色　粗砂混じりシルト～微砂
⑪ 5Y 6/1 灰色　シルト～微砂
⑫ 5Y 5/1 灰色　シルト～微砂



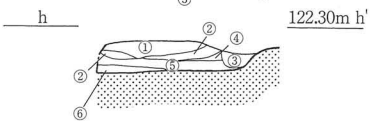
① 2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂
② 10YR 6/2 灰黄褐色　粗砂混じり細砂
③ 10YR 5/1 褐灰色　細砂
④ 10YR 6/1 褐灰色　細砂



① 10YR 2/2 黒褐色　粗砂～礫混じりシルト～細砂
② 2.5Y 4/2 灰黄褐色　微砂～礫(洪水などによる蓄積？)
③ 10YR 2/1 黒色　微砂～粗砂混じり微砂～シルト
④ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～礫混じりシルト～粗砂(炭化物、土器片を多く含む)
⑤ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じりシルト～粗砂(炭化物をやや含む)
⑥ 2.5Y 2/1 黒色　細砂～礫混じりシルト～微砂
⑦ 2.5Y 5/1 黄灰色　細砂～礫混じりシルト～微砂
(2.5Y 6/3 にぶい黄色　シルト～粗砂のブロック(地山層)を含む)
⑧ 2.5Y 4/1 黄灰色　粗砂～礫混じりシルト～粗砂(洪水などによる蓄積？)

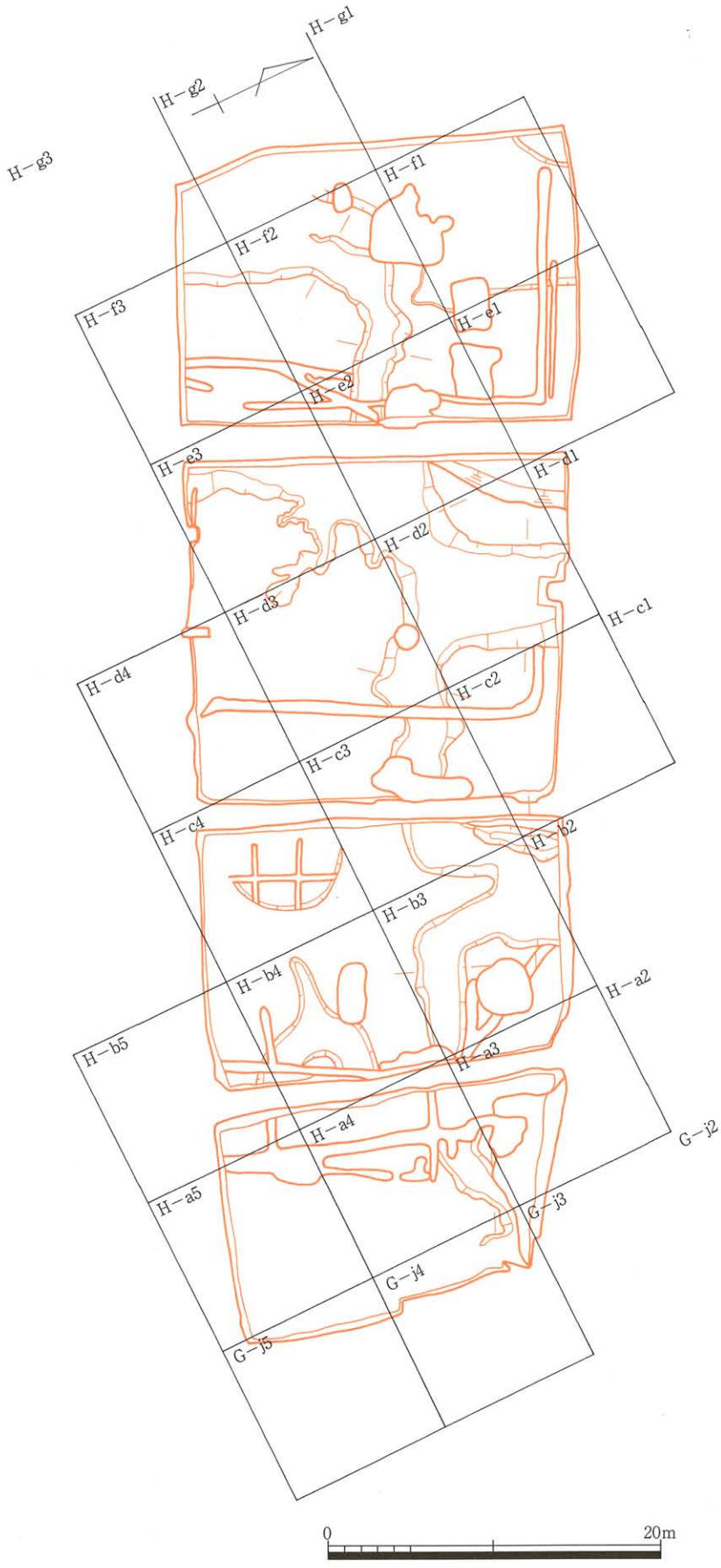


① 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～礫混じりシルト～粗砂(炭化物、土器片を多く含む)
② 2.5Y 3/1 黒褐色　細砂～礫混じりシルト～微砂(炭化物、土器片を多く含む)
③ 2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～礫混じりシルト～粗砂
④ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じりシルト～細砂

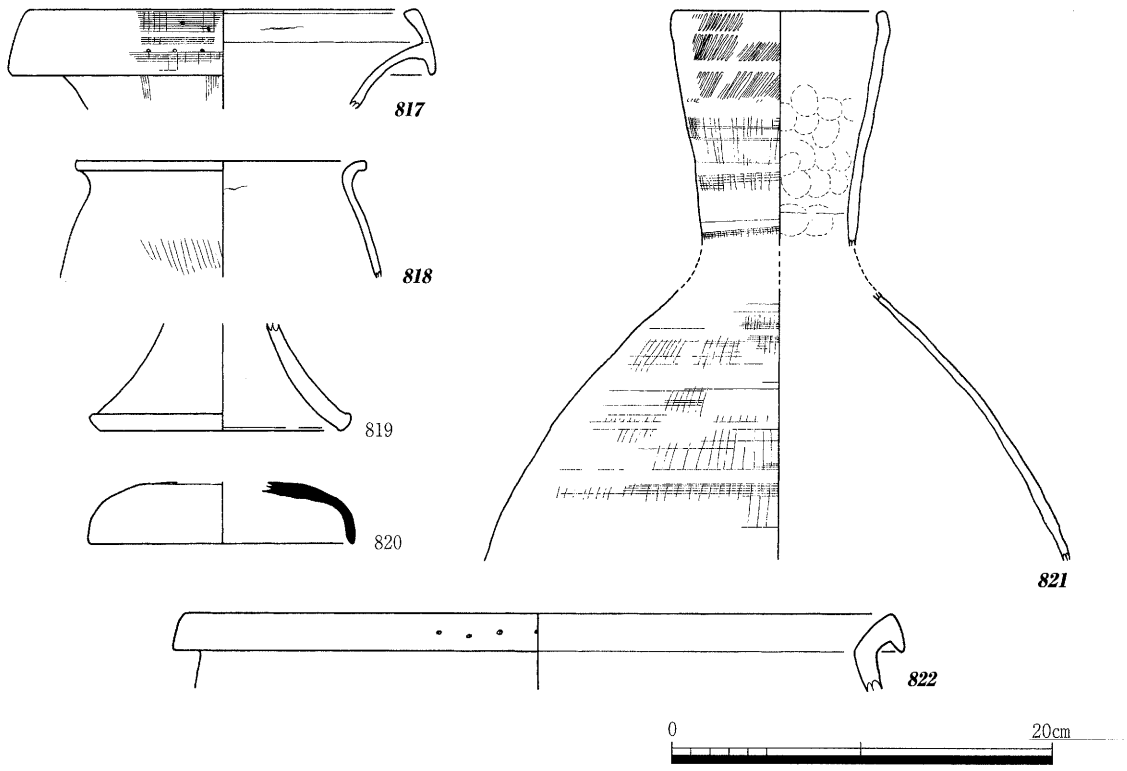


① 10YR 4/2 灰黄褐色　シルト～微砂(5～10cm大の礫を含む)
② 10YR 3/1 黒褐色　細砂混じり微砂
③ 7.5Y 7/2 灰白色　シルト混じり微砂
④ 10YR 3/2 黒褐色　シルト混じり微砂
⑤ 2.5Y 4/1 黄灰色　シルト～微砂
⑥ 2.5GY 7/1 明オリーブ灰色　細砂混じりシルト

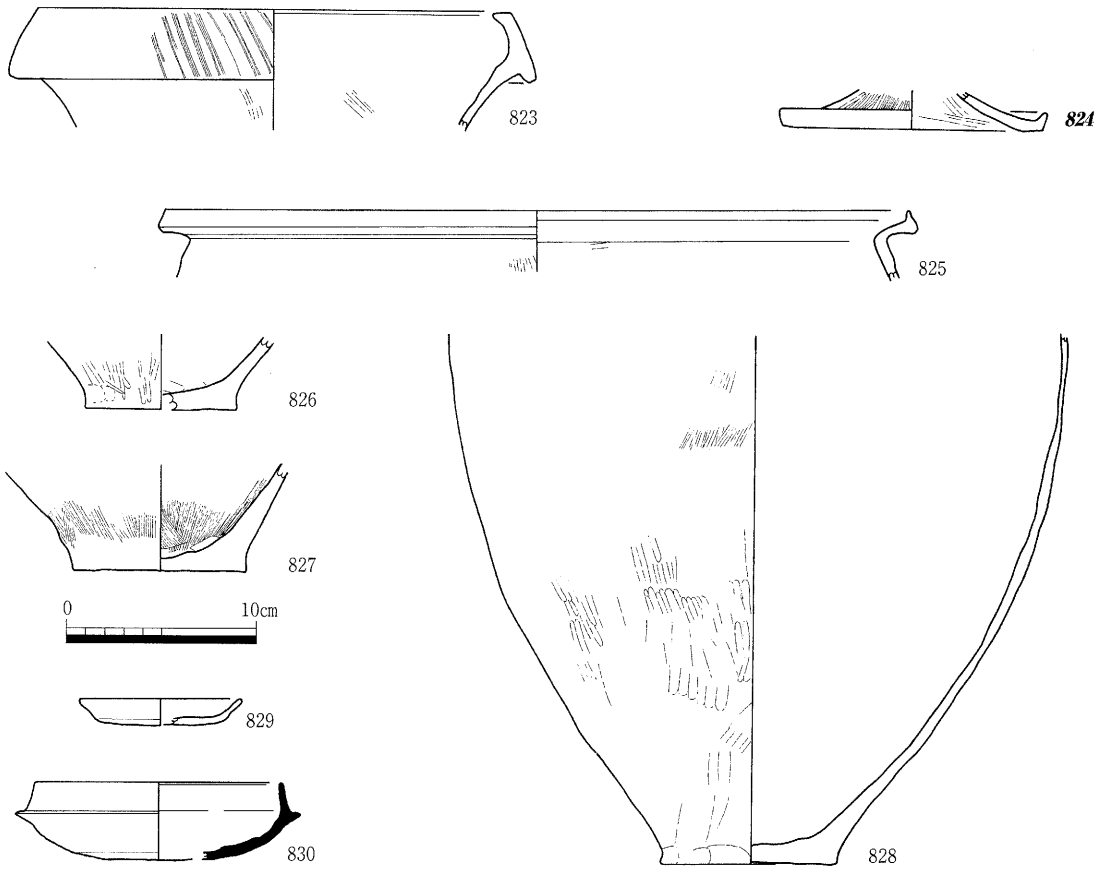
第213図　方形周溝墓群土層断面図（1/100）



第214図　方形周溝墓群遺物出土位置図（1/400）



第215図　方形周溝墓群（Ｈ－ｆ１・２）出土土器



第216図　方形周溝墓群（Ｈ－ｆ４）出土土器

Ｈ－ｆ２（第215図、図版81）

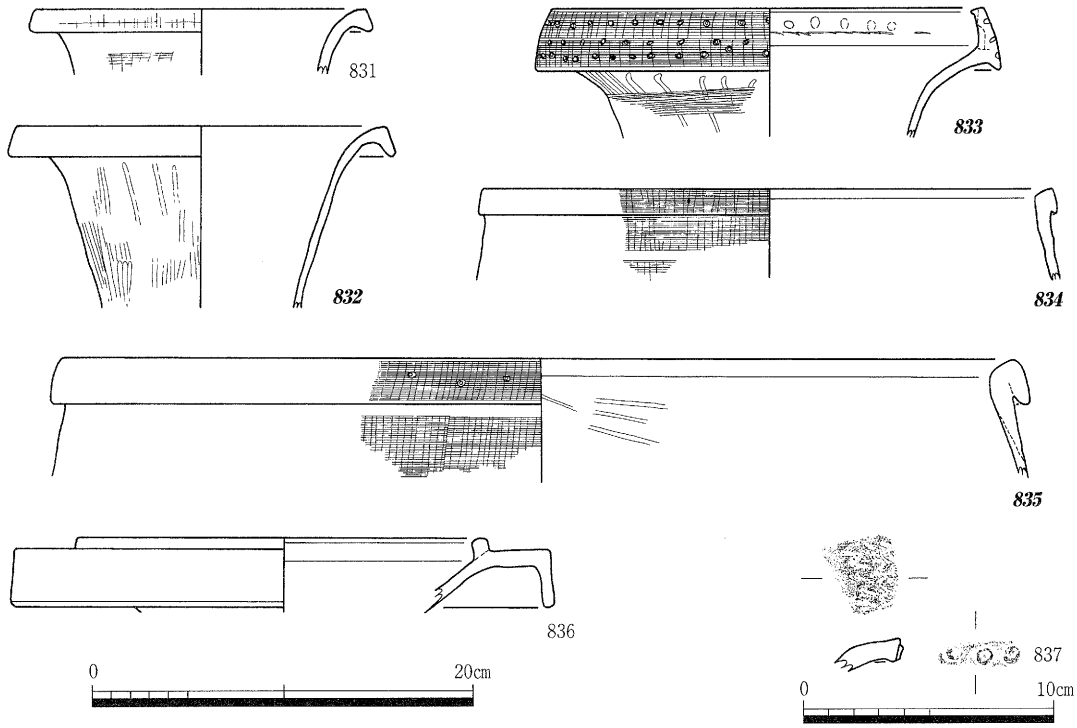
817は広口壺Ｂ１である。口縁端部を上下方向に拡張しており、外面には、簾状文、刺突文を施文している。818は甕Ａである。口縁端部は丸くおさめており、外面はミガキで仕上げている。

Ｈ－ｆ４（第216図、図版81）

823は、広口壺Ｂ１の口縁部である。口縁端部の上方向に対する下方向の拡張は、あまり顕著ではない。825は、甕Ｄである。外面はハケで仕上げている。826・827は甕の底部である。828は、甕の体部である。ハケを施しており、体部下半分にはハケの後、ミガキを加えている。甕Ｄと考えられる。824は、高坏の脚部である。外面はミガキで仕上げている。830は、須恵器の蓋坏の身である。ＴＫ10型式のものと考えられる。829は土師皿である。

Ｈ－ｅ２（第217図、図版81）

831・832は、口縁部を下方向に拡張する広口壺Ａである。831は、摩滅が著しいが、外面には簾状文を施文している。832は口縁端部を下方向に拡張しており、外面はミガキで仕上げられており、施文はされていない。833は広口壺Ｂ１である。口縁端部には簾状文と刺突文、頸部にはミガキの後、直線文を施す。837は広口壺Ｄであり、口縁端部外面に竹管文を施文している。834・835は鉢Ｂである。ともに口縁端部が肥厚し、簾状文を施文しているが、835は簾状文施文後に、刺突文を施文している。836は、高坏Ｂである。口縁

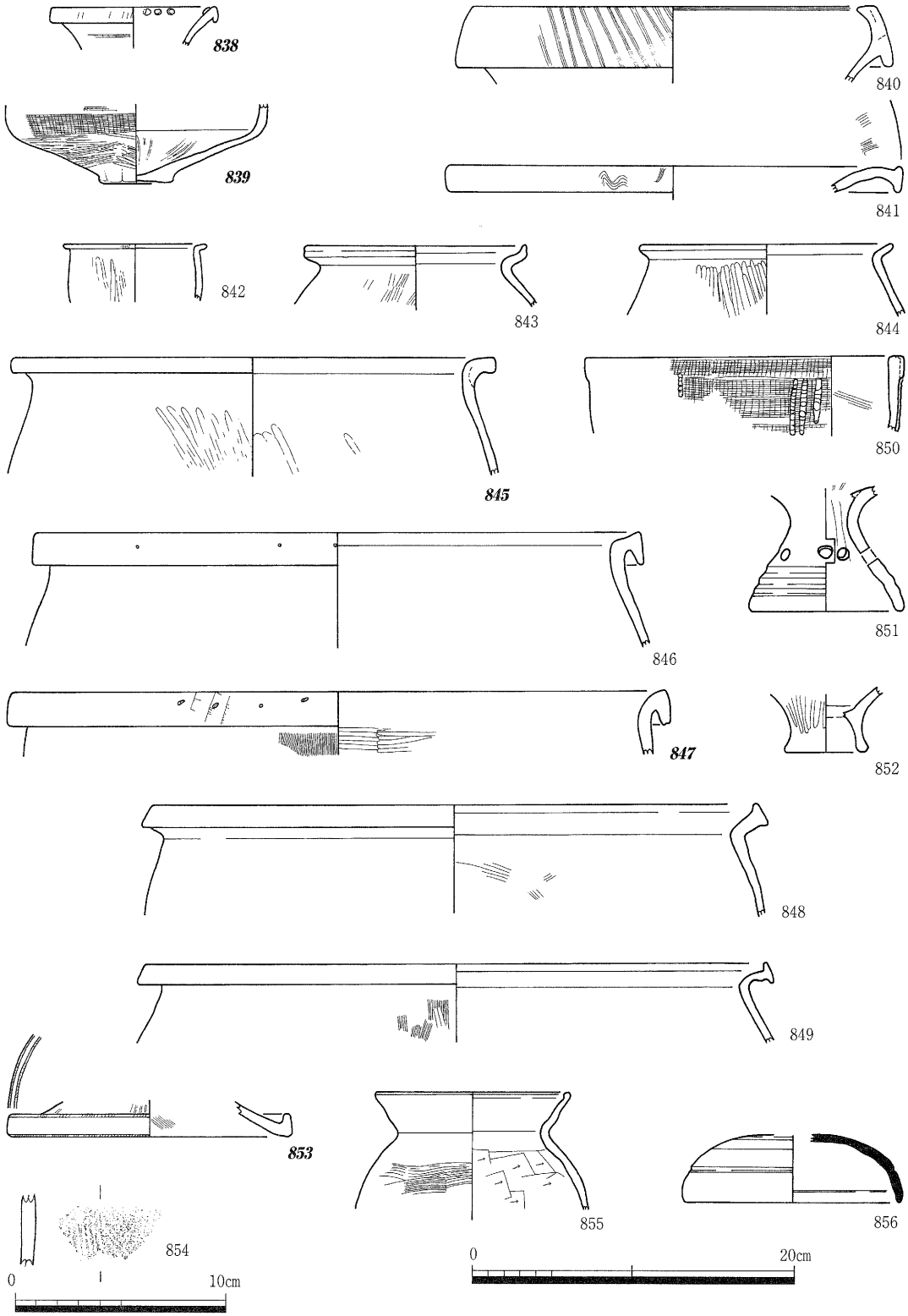


第217図　方形周溝墓群（Ｈ－ｅ2）出土土器

部は水平に拡張した後、口縁端部を下方向に拡張している。

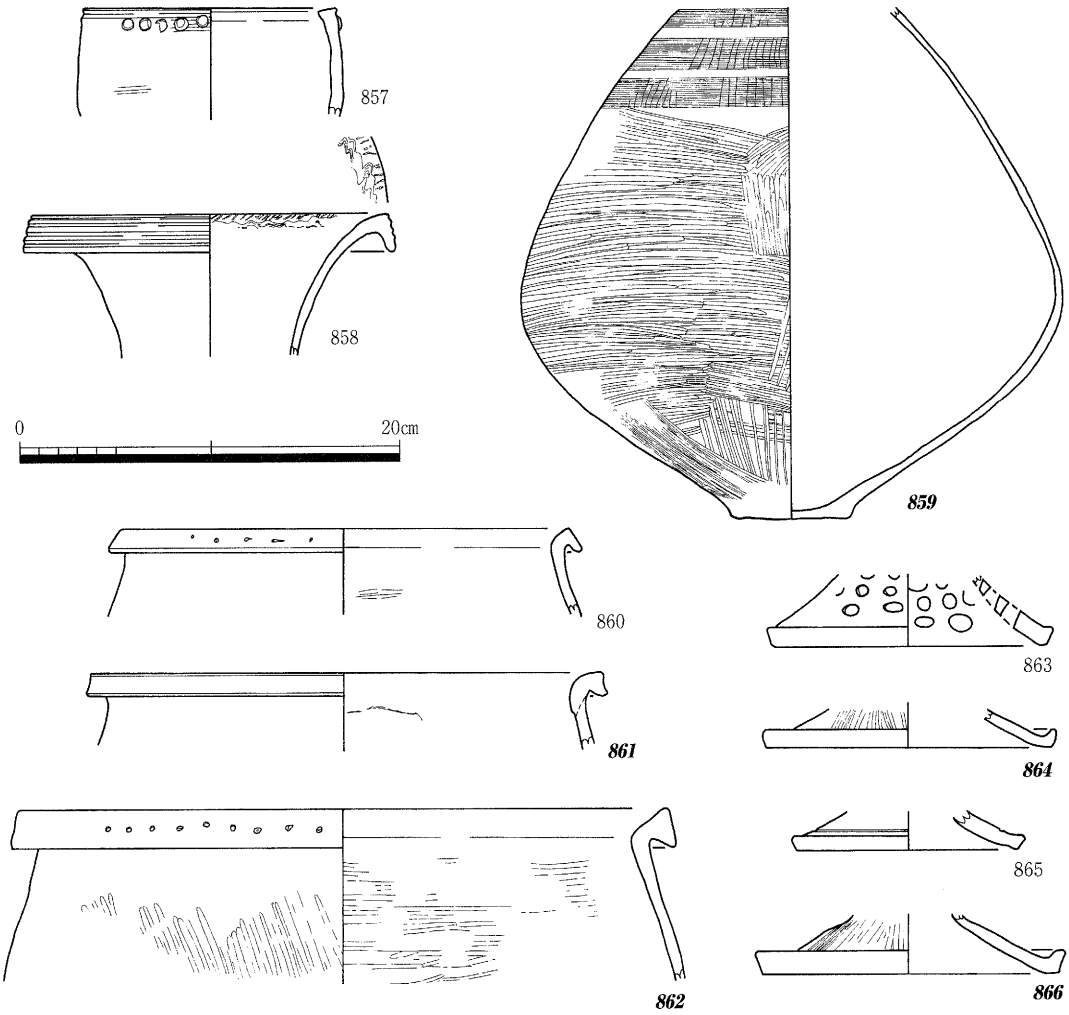
Ｈ－ｅ３（第218・231～233図、図版81・82・84・100～102）

840は、広口壺Ｂ１である。口縁端部の上方向に対する下方向の拡張は、あまり顕著で



第218図　方形周溝墓群（Ｈ－ｅ3）出土土器

はない。口縁端部外面には、斜線文を施文している。841は広口壺Ｅである。口縁端部外面には波状文を内面には扇状文を施文している。842・844は、甕Ａである。外面はヘラミガキで仕上げている。842は甕Ａで、口縁端部に刻目を加える。838は、小型広口壺Ａである。摩滅が著しいが、外面には簾状文を、内面には、円形浮文を施文している。843は、甕Ｂである。外面はハケで仕上げている。845～847は甕Ｃであり、846・847は、口縁端部には刺突文を施文している。848・849は甕Ｄである。850は、鉢Ｂである。口縁端部は低く段状に肥厚している。簾状文施文後に、棒状浮文を施文している。851は鉢の脚部である。852は高坏脚部の破片である。853は高坏の脚部である。端部を上方向に拡張し、端部上端の内外面には刻目を加える。854は、絵画土器の破片である。1060は石庖丁である。緑泥片岩製である。1055は、サヌカイト製の石剣、1051はサヌカイト製の石鏃の未製品と考えられる。855は布留式期Ｉの甕である。口縁端部は肥厚し、内面はケズリを施し、外面は横ハケで仕上げている。856は、須恵器蓋坏の蓋である。ＴＫ10型式に位置づけられる。



第219図　方形周溝墓群（Ｈ－ｄ2）出土土器

Ｈ－ｄ２（第219図、図版82）

858は、広口壺である。口縁部は下方向に拡張しており、外面に凹線文を、内面に波状文、列点文を施文する。859は広口壺Ａもしくは細頸壺の体部である。最大径は、下半部にあり、上半部に比較的間隔が長く、幅の狭い簾状文を施文する。857は細頸壺である。口縁部外面には、凹線文、円形浮文、直線文を施文する。860～862は、甕Ｃである。860・862は、口縁端部外面には、刺突文を施文する。863は鉢の脚部であり、円形透を穿孔している。864～866は高坏の脚部である。864・866は、端部を上方向に拡張し、ミガキで仕上げている。

Ｈ－ｄ３（第220・221・231・233図、図版83・99・100・103）

867～872は広口壺Ａである。867・870・872は外面に簾状文を施し、刺突文や刻目を施文するが、868・869・871は無文化の進んだものであり、868・869は外面をミガキで仕上げている。874・875は広口壺Ｂ２である。口縁部外面には、凹線文を施文する。873は広口壺Ｂ１である。簾状文と刻目を施文している。879～881は広口壺Ｃである。口縁端部を上方向に若干拡張し、外面を粗いハケで仕上げている。882も広口壺Ｃであり、口縁端部外面に簾状文、内面に刻目を施文する。877は広口壺Ｄである。口縁端部は、上下方向に拡張している。凹線文を口縁端部に施文している。878も広口壺Ｄであり、外面はハケを施している。876は細頸壺である。列点文、円形浮文を施文している。

883は甕の蓋である。884～889は甕Ａである。893～895は、甕Ｂである。口縁端部を上方向に拡張し、外面には凹線を施している。体部外面は粗いハケで仕上げている。890～892は、甕Ｃである。896・897は甕Ｄである。口縁端部は上下方向に拡張している。898は鉢Ａである。凹線文を施文している。899は高坏Ａ、902・903は高坏Ｂである。905は高坏の脚部、901は鉢の脚部である。1052・1053はサヌカイト製の石錐である。1054はサヌカイト製の削器である。1062・1063は、砂岩製の叩石である。

Ｈ－ｃ３（第222・232図、図版102）

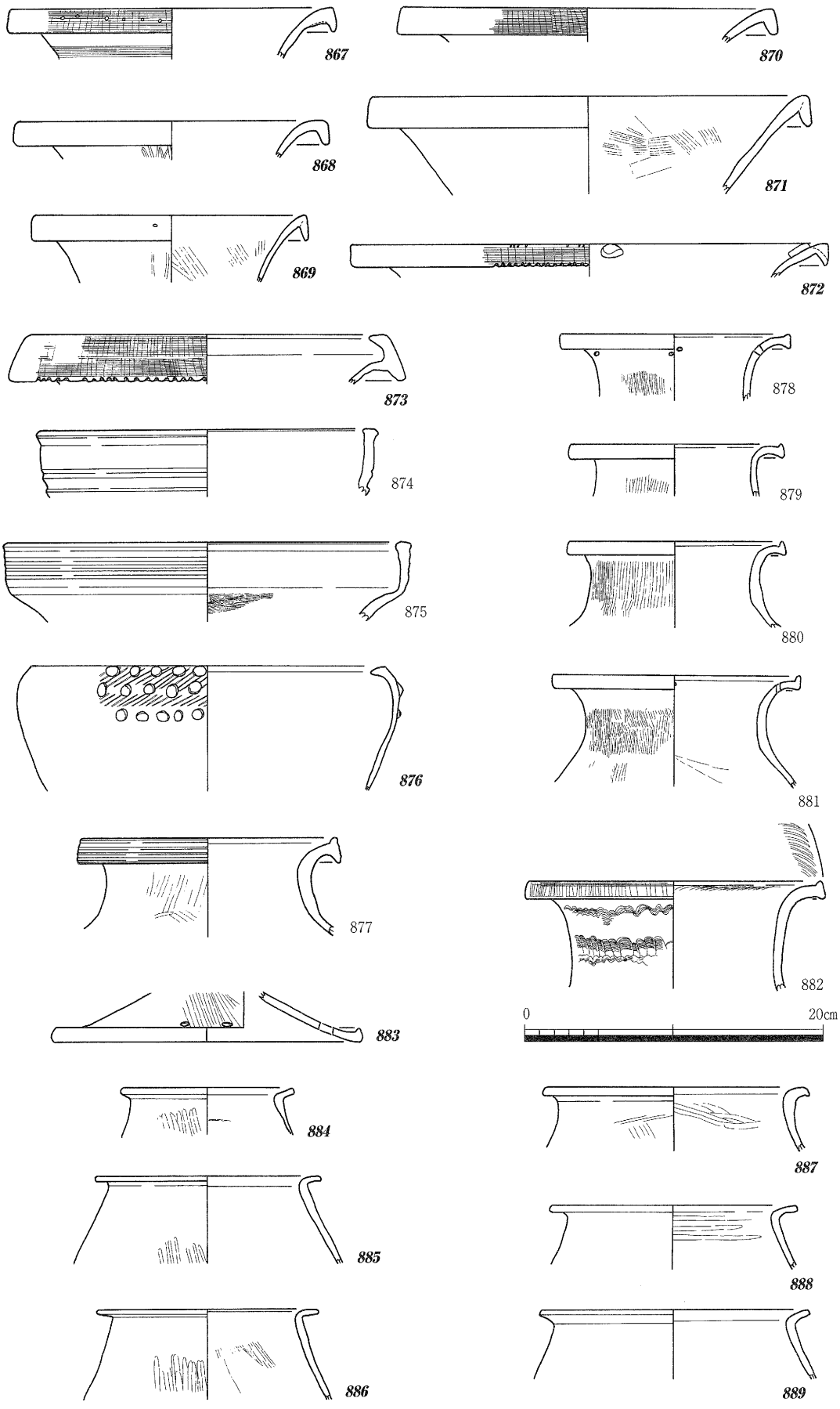
907は甕Ｄである。908は高坏Ａである。椀形の坏部を有する。909は高坏の脚部である。1057はサヌカイト製の石剣の未製品である。

Ｈ－ｃ４（第222図）

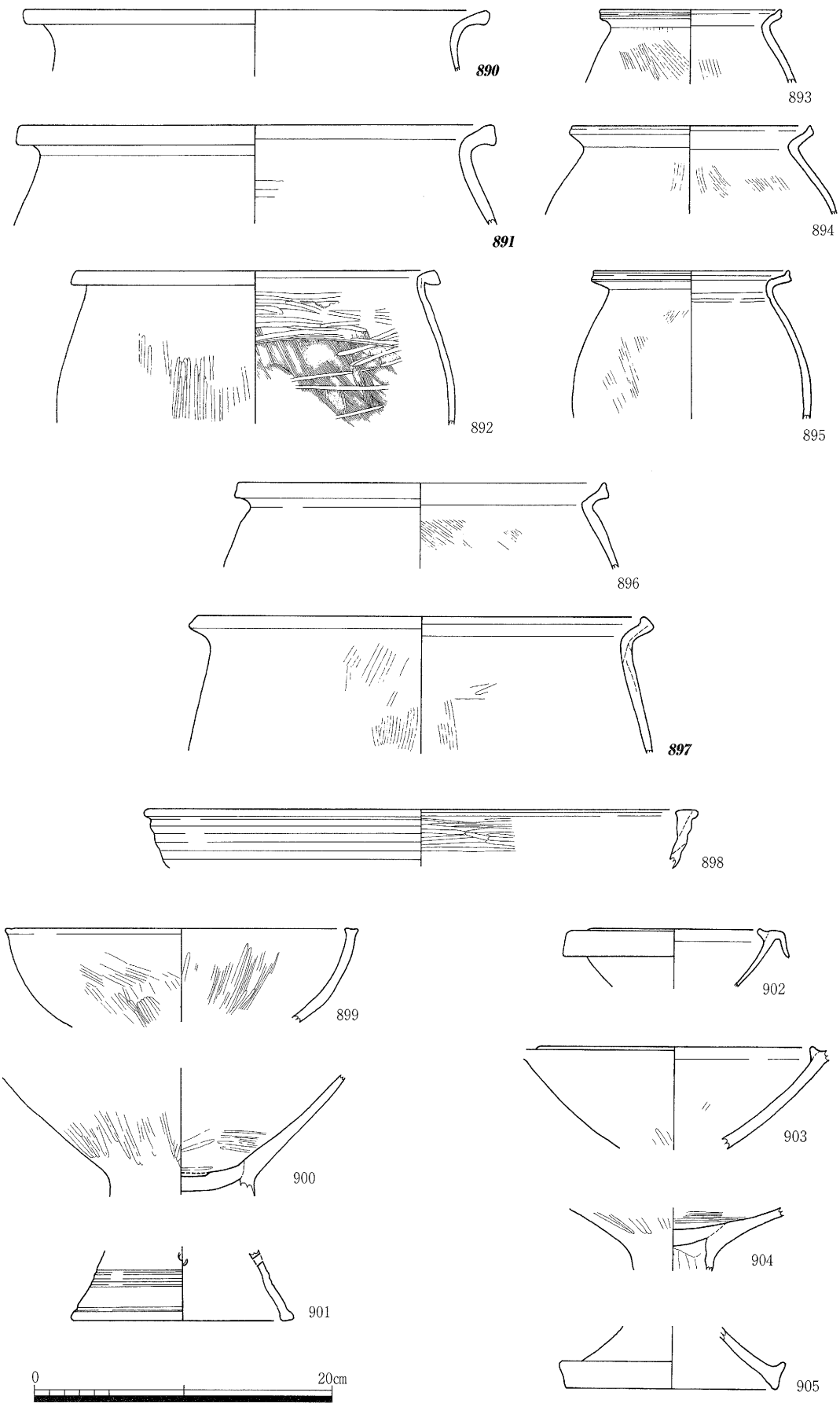
906は高坏Ａである。口縁部外面には凹線文を施文する。

Ｈ－ｂ３（第223～229・231～233図、図版84～88・98・99・101・103）

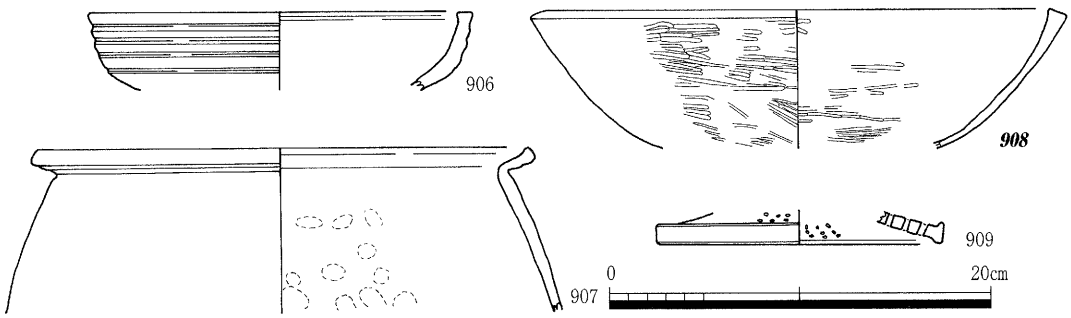
910～918、923～931は広口壺Ａである。外面に簾状文を施文するもの（916・917・926・929・930）、簾状文に加えて刺突文を施文するもの（911・914・924・925・927・928）、



第220図　方形周溝墓群（Ｈ－ｄ３）出土土器①



第221図　方形周溝墓群（Ｈ－ｄ３）出土土器②



第222図　方形周溝墓群（Ｈ－ｃ３・４）出土土器

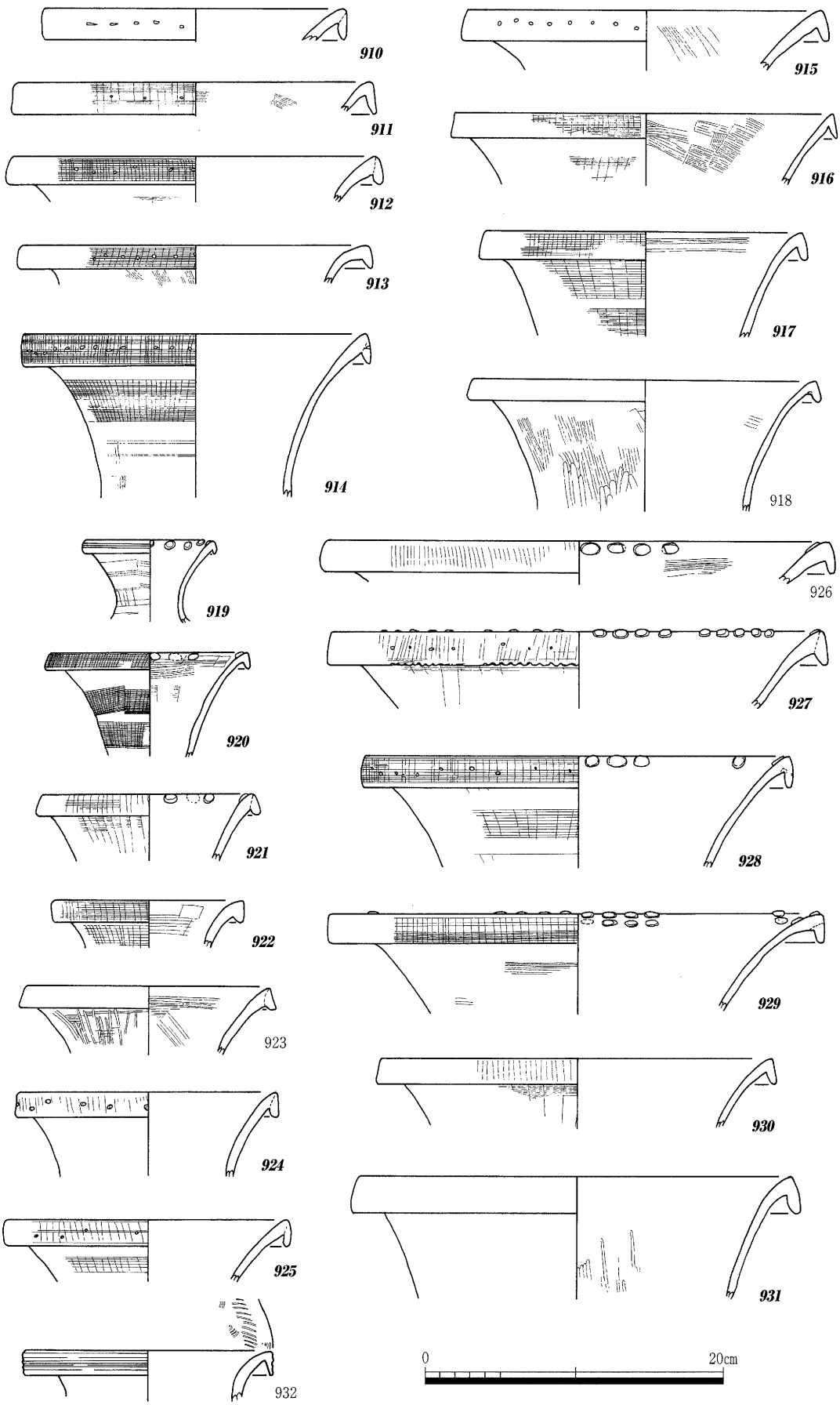
刺突文のみを施すもの（910・915）、無文のもの（931・918・923）がある。918はハケの後、ミガキで仕上げている。また簾状文を施文する個体には、内面に円形浮文を施文するもの（927～929）がある。

919～922は、小型の広口壺Ａである。外面に簾状文を施文する。また、919～921は、口縁部内面に円形浮文が施文されている。933～941は広口壺Ｂ１である。口縁端部に施文される文様にはいくつかのバリエーションがあり、簾状文を施文するもの（941）、簾状文と刺突文を施文するもの（934・939・940）、斜線文と刺突文を施文するもの（935～938）、斜線文のみを施文するもの（933）がある。943・944は広口壺Ｃである。943は、口縁端部には凹線文を施文し、944は波状文を施文している。頸部外面は粗いハケで調整している。945・946・953は広口壺Ｄである。942・947～952は広口壺Ｅである。口縁端部に施文される文様にはいくつかの組みあわせがあり、外面に波状文、内面に列点文を施文するもの（948）、外面に凹線文と円形浮文を施文するもの（942・951）、外面に簾状文と円形浮文を施文し、内面に列点文を施文するもの（950・952）がある。932は、口縁端部を下方向に拡張するが、口縁端部には凹線文を施文している。964は広口壺の頸部である。凹線文と波状文を施文している。932・964は、摂津からの搬入品である。954～956・960は細頸壺である。簾状文、列点文、円形浮文を施文するもの（954～956）、簾状文、凹線文を施文するもの（960）がある。963は壺の底部である。958、959は、水差の口縁部である。列点文を施文している。961・962は蛸壺である。

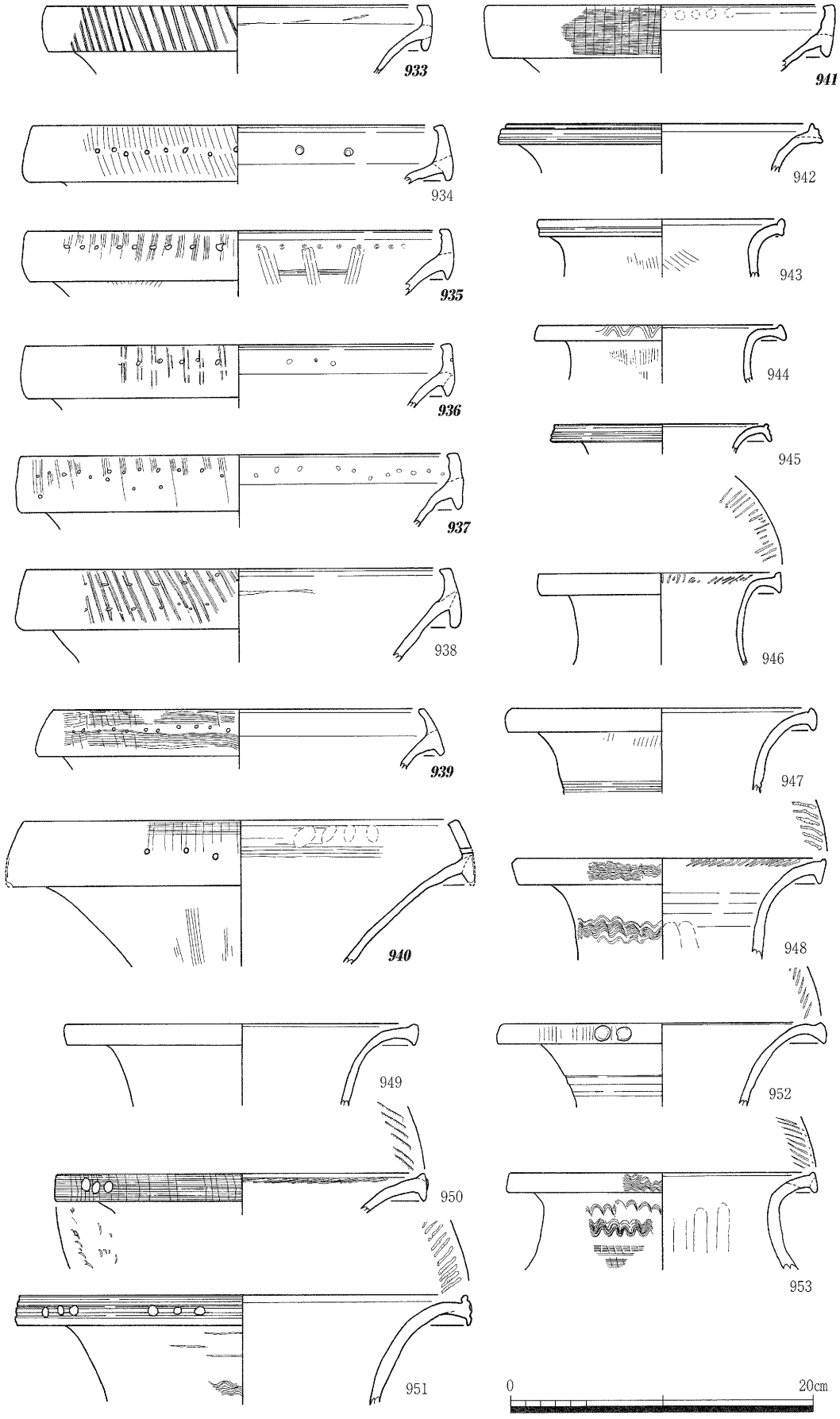
965・966は、甕の蓋である。967～972は甕Ａである。外面はミガキで仕上げている。973～977は、甕Ｂである。973・974・976は、外面を粗いハケで仕上げている。978～983・986は甕Ｃである。980～983・986は口縁端部外面に刺突文を施文している。978・979は口縁端部が断面三角形を呈する。984・985・987・988は甕Ｄである。985・987は、外面は粗いハケで調整している。985は口縁端部外面に凹線文を施文している。

1001～1005は鉢Ａである。1002は凹線文・波状文、直線文を施文し、1004は刻目を加える。

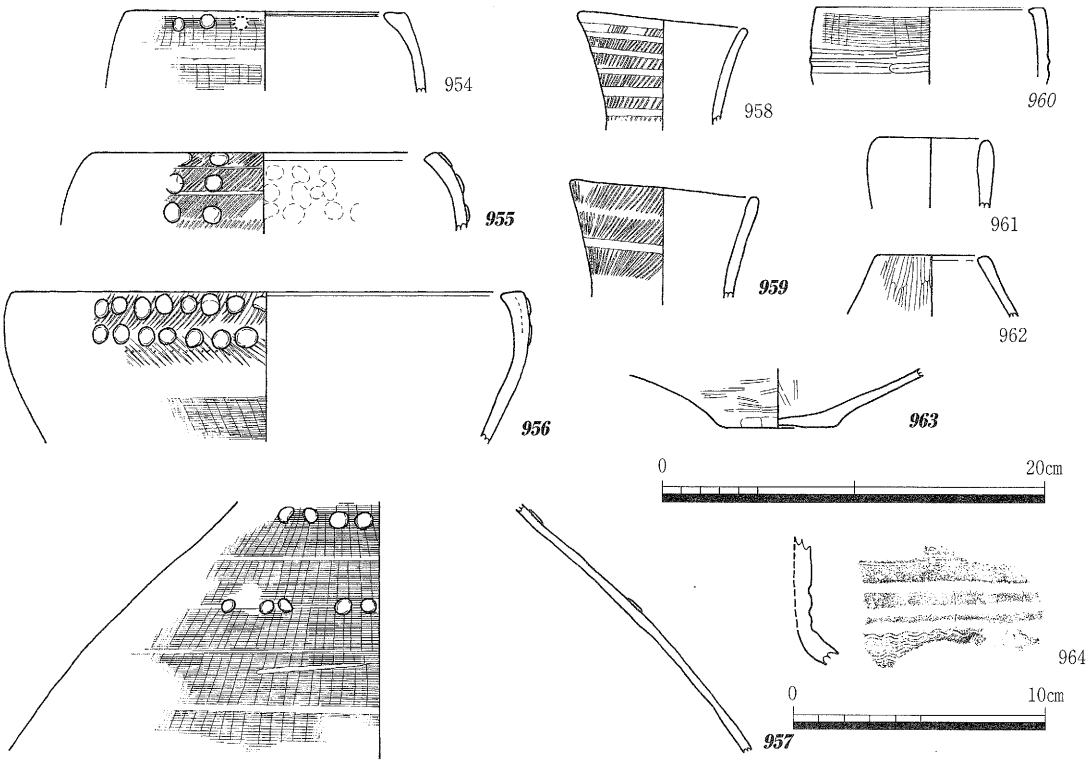
989～1000・1010は鉢Ｂである。993は、口縁端部を、下方向に拡張しており、簾状文を施文している。989～992・994～1000・1010は、口縁端部が肥厚するが、端部外面に施文される文様にはバリエーションがある。990～992・997・999・1010は簾状文を施文し、989・994・996・998・1000はヘラ状工具による刻目を施す。



第223図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器①



第224図　方形周溝墓群（H－b 3）出土土器②



第225図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器③

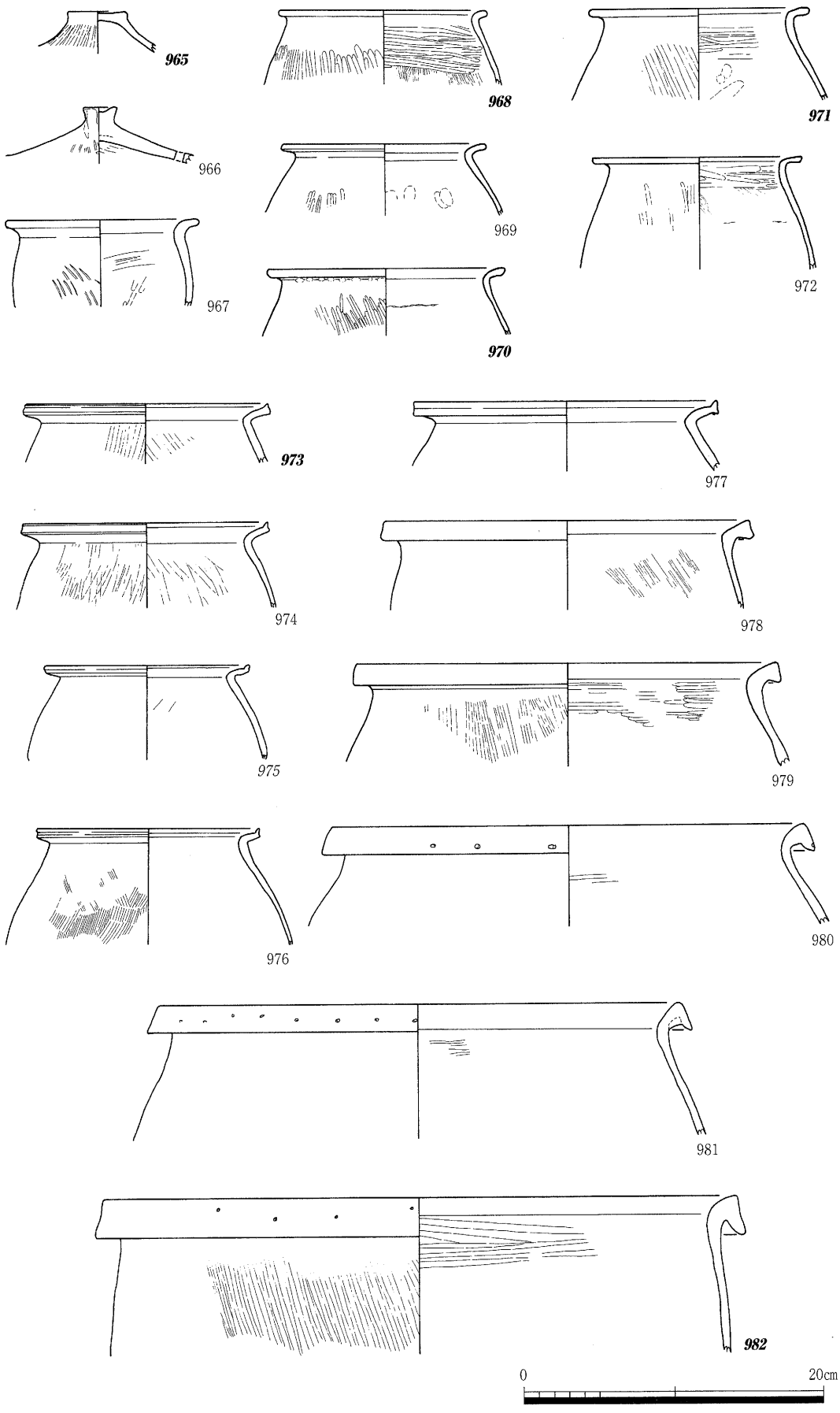
1011～1017は、高坏Ａである。1013～1015は、屈曲する坏部を持ち、凹線文を施文する。1016、1017は直線的に開く坏部を有する。1018～1022は高坏Ｂである。1018～1020は口縁部上面に斜格子状にミガキを施す。1023～1032は高坏の脚部である。1007～1009は鉢の脚部である。円形透と凹線文を施文している。1033は紡錘車である。1064は砂岩製の砥石である。1058は緑泥片岩製の石庖丁である。1059は緑泥片岩製の柱状片刃石斧である。1049はサヌカイト製の凹基式石鏃、1050はサヌカイト製の凸基式石鏃である。1056はサヌカイト製の石剣の未製品である。

Ｈ－ａ３（第229図、図版88）

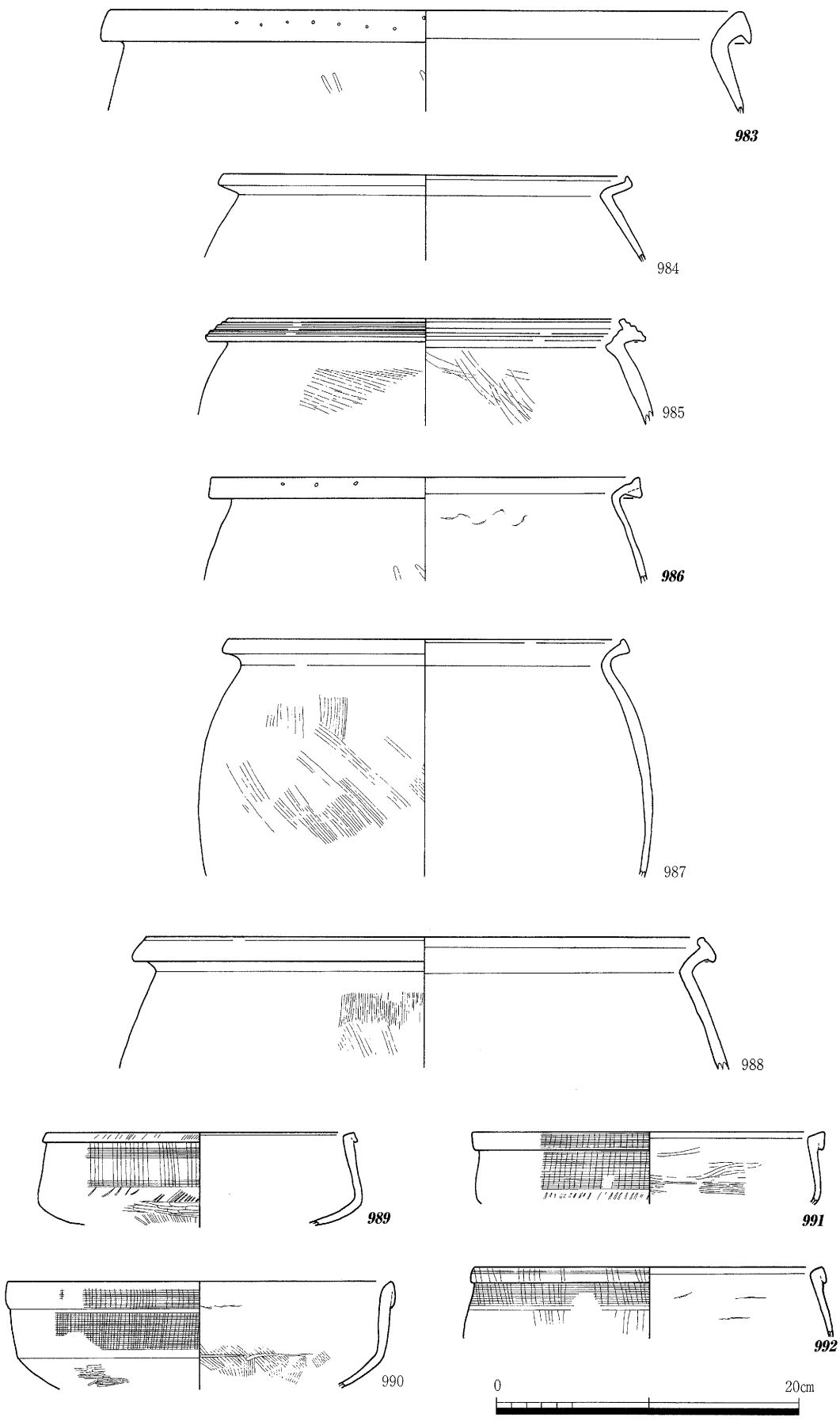
1034は甕Ｃである。内外面ともにミガキで仕上げている。

Ｈ－ａ４（第230図、図版88）

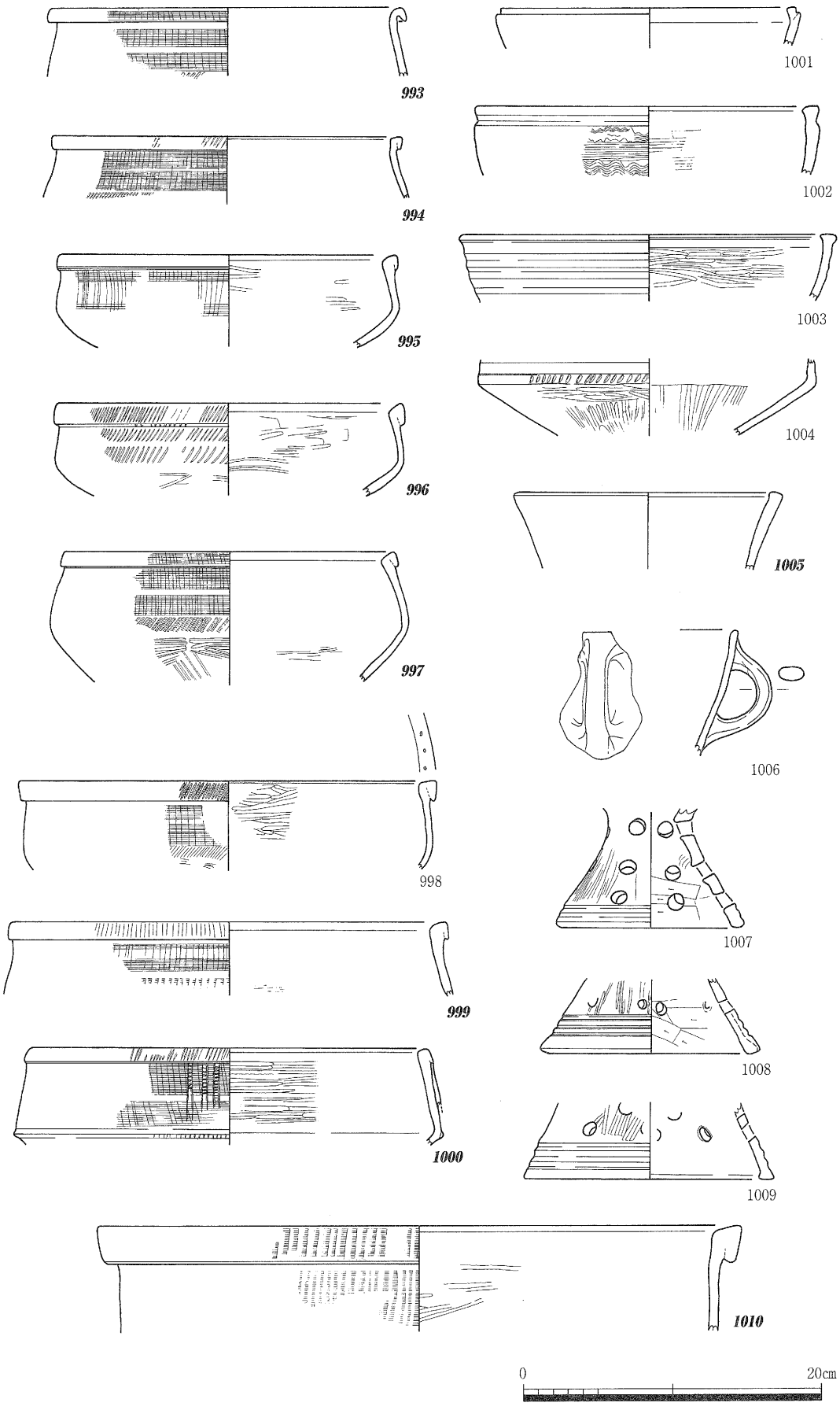
1035は広口壺Ａである。外面に簾状文を施文するが、施文は波打ち、稚拙である。1036は広口壺Ｂ１である。口縁端部外面には、斜線文と刺突文を施文する。1037・1038は広口壺Ｅである。1037は簾状文を施文している。1038は、口縁部外面に凹線文を、頸部には波状文、直線文を施文する。1039は広口壺Ｃである。1040は、細頸壺の口縁部である。列点文と円形浮文を施文している。1041は甕Ｃである。口縁端部外面には刺突文を施文する。1042は、甕Ｄである。口縁端部には凹線文を施文し、内外面ともに粗いハケで仕上げている。1043・1044は鉢Ａである。ともに凹線文を施文している。1045・1046は鉢Ｂである。



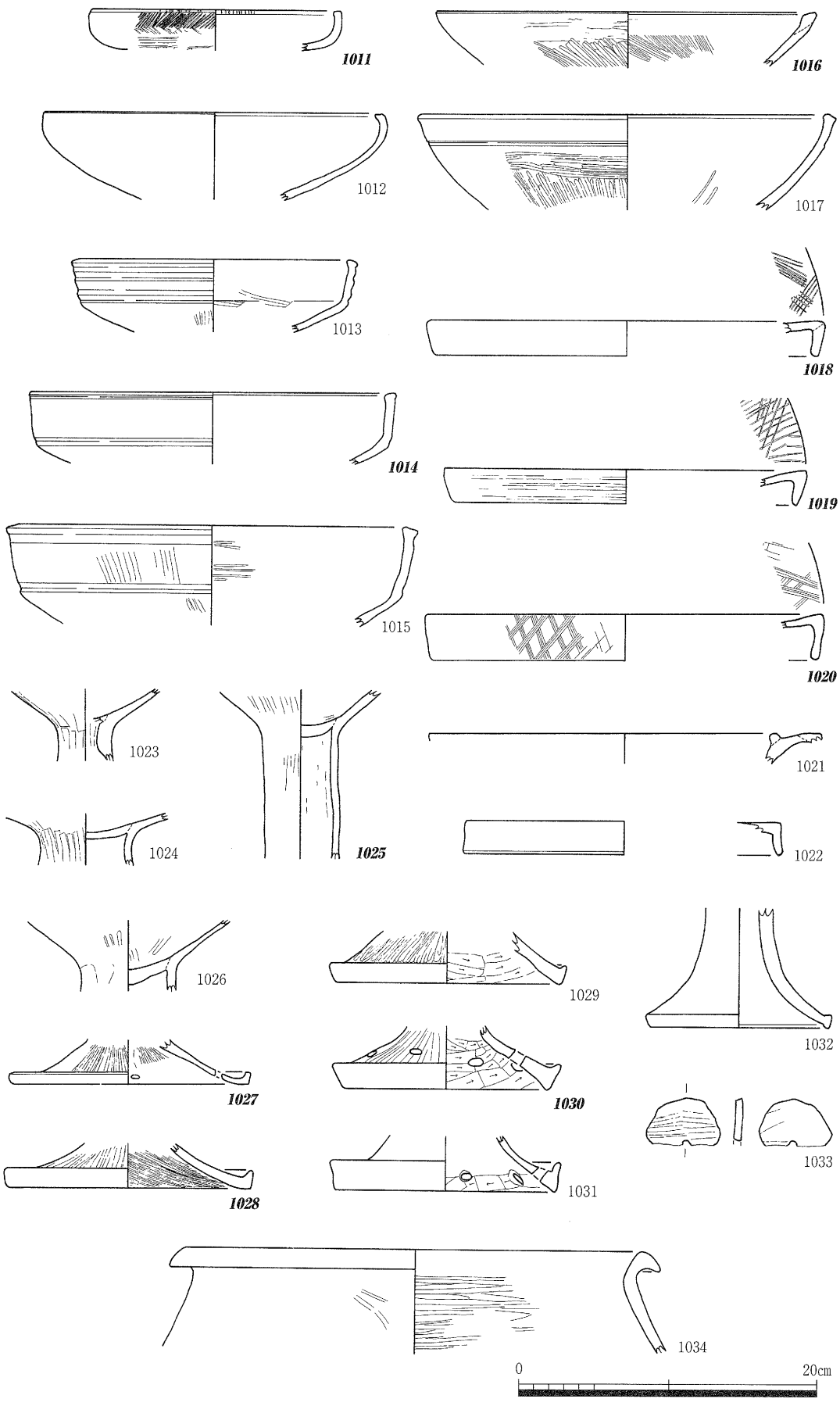
第226図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器④



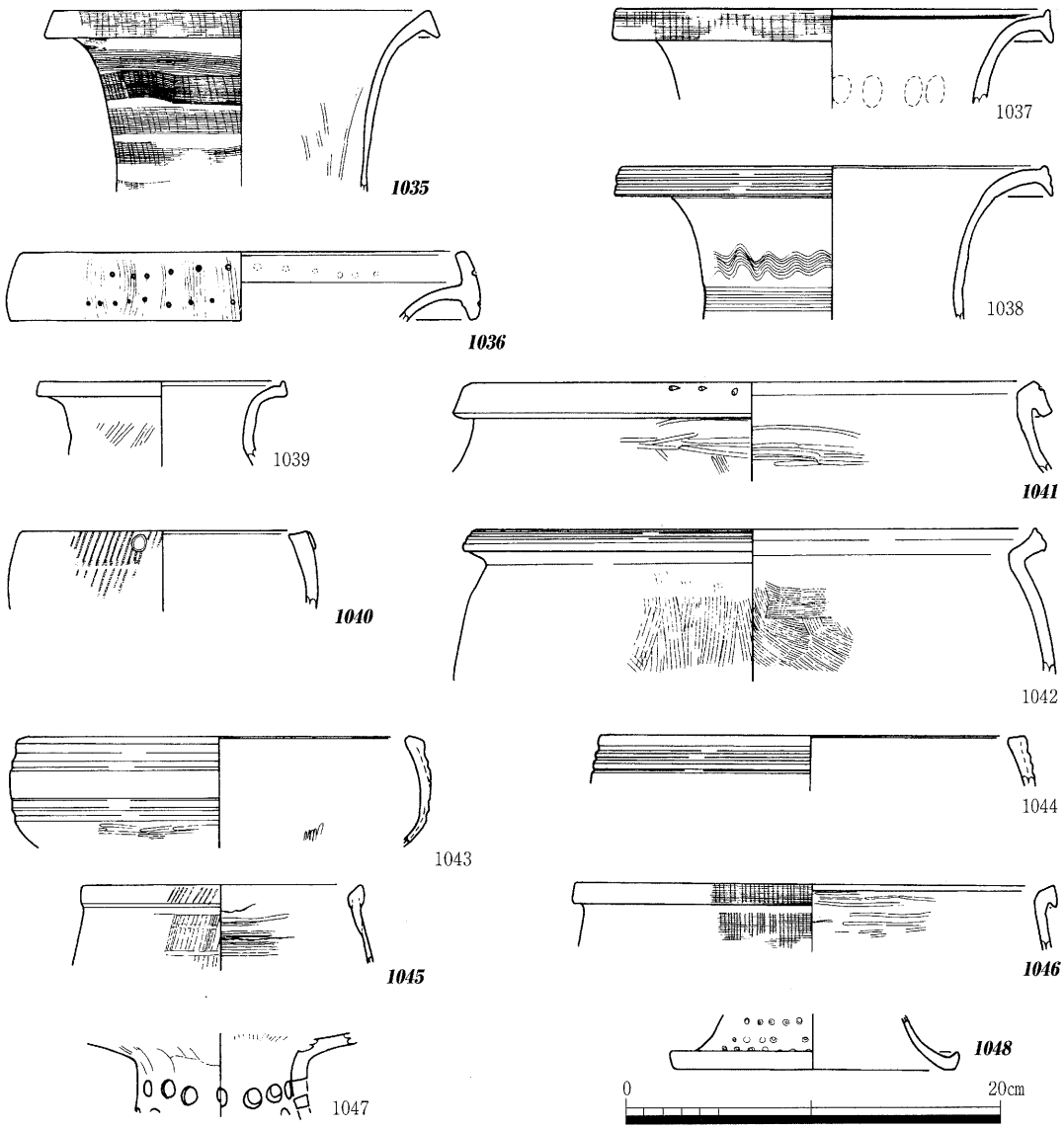
第227図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器⑤



第228図　方形周溝墓群（Ｈ－ｂ３）出土土器⑥



第229図　方形周溝墓群（H－b 3・H－a 3）出土土器

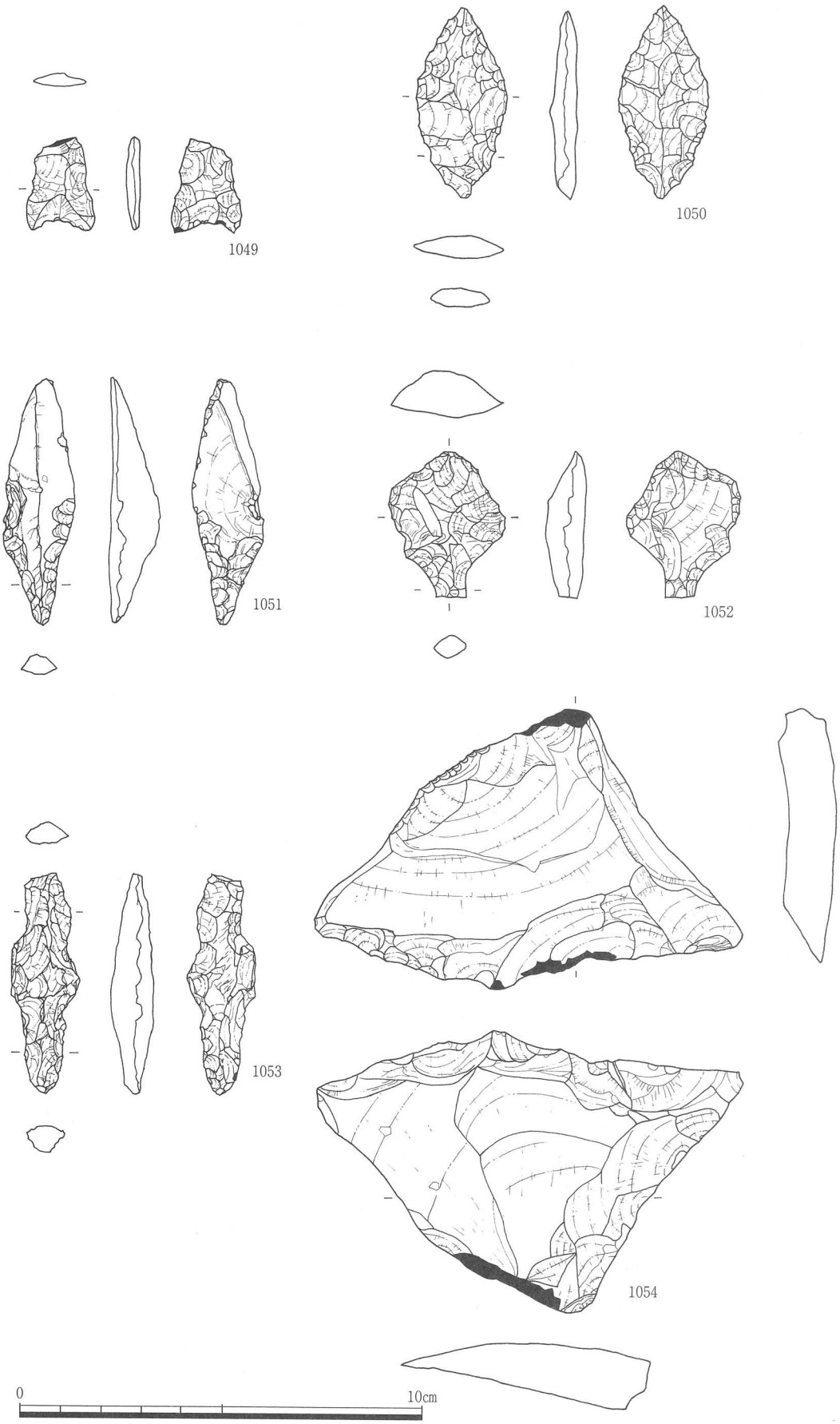


第230図　方形周溝墓群（Ｈ－ａ４）出土土器

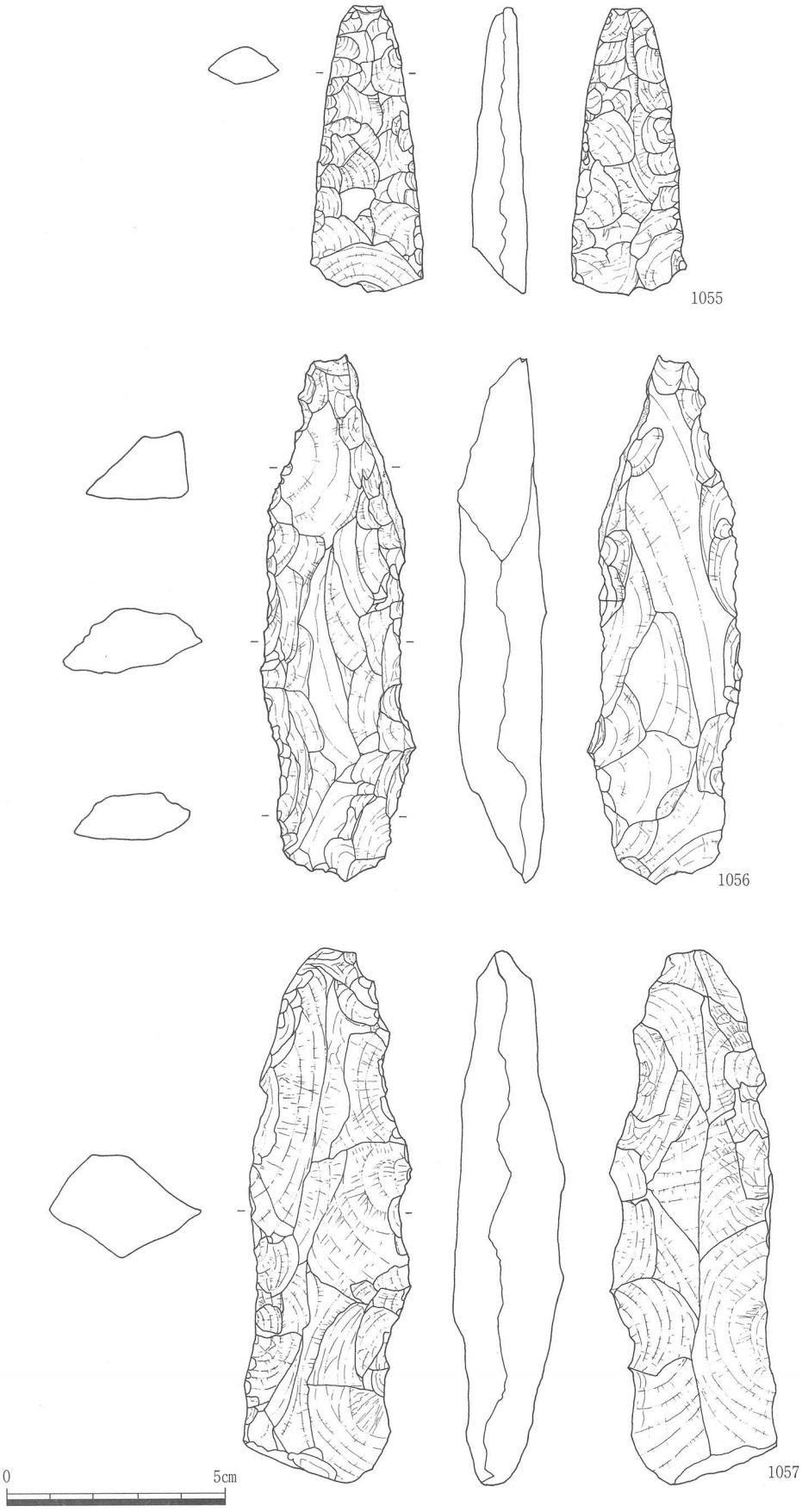
1045は、口縁端部が肥厚し、ヘラ状工具による刻目を加える。体部には簾状文を施文する。1046は、口縁端部を下方向に折り曲げ、簾状文を施文する。1047・1048は、鉢の脚部である。1047は、円形透を穿孔し、1048は竹管文を施文する。

まとめ

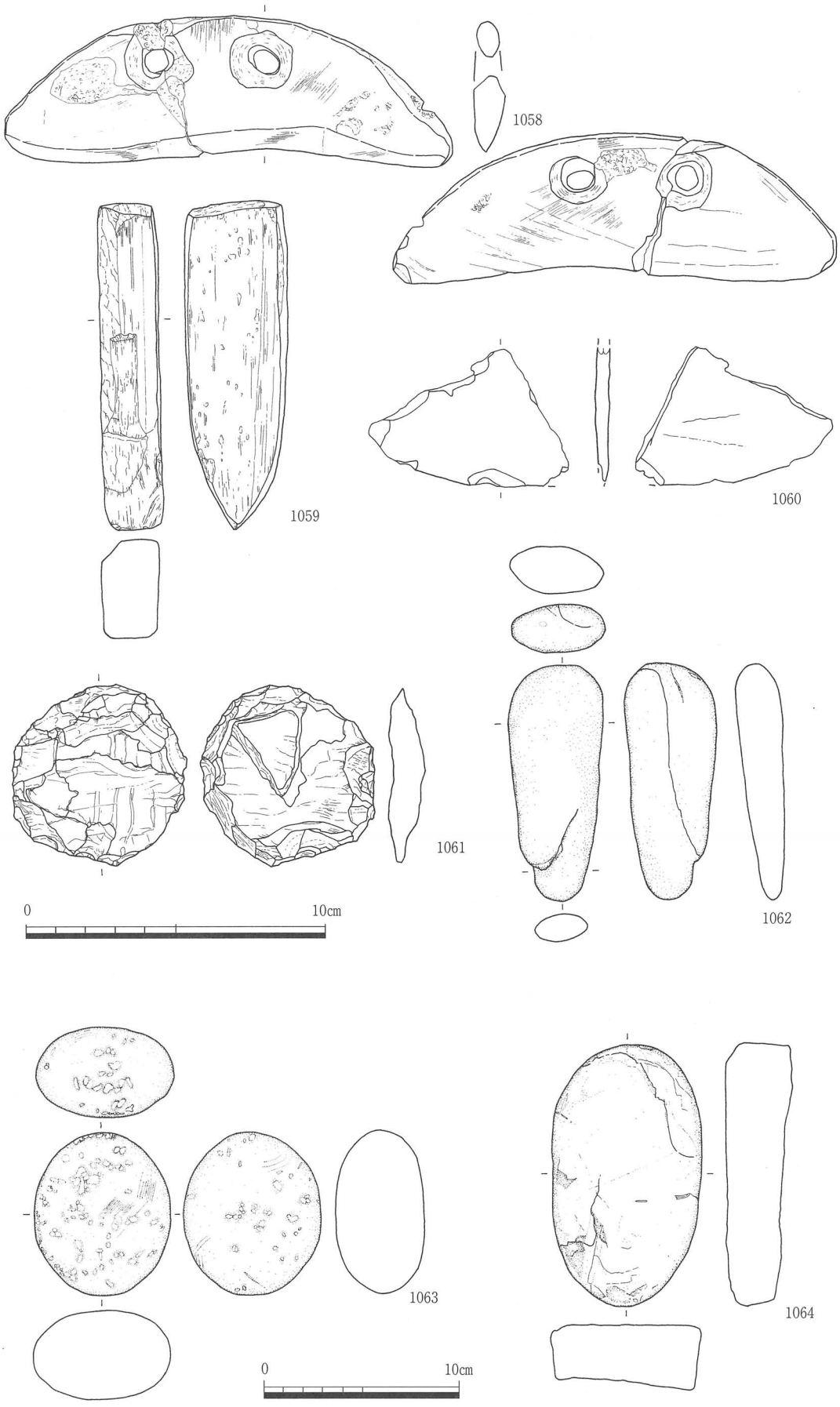
方形周溝墓群から出土した土器は、竪穴住居群から出土した土器群とはやや異なる様相が認められる。特徴の１つとして、広口壺Ｂに施文されている文様の違いが指摘できる。広口壺Ｂには、斜線状文を施文するものが多いという点が指摘できる。また、２つめとして広口壺Ｃ・Ｄ・Ｅの出土が多い点も指摘できる。



第231図　方形周溝墓群出土石器①



第232図　方形周溝墓群出土石器②



第233図　方形周溝墓群出土石器③

（７）自然流路

〔ＮＲ１〕

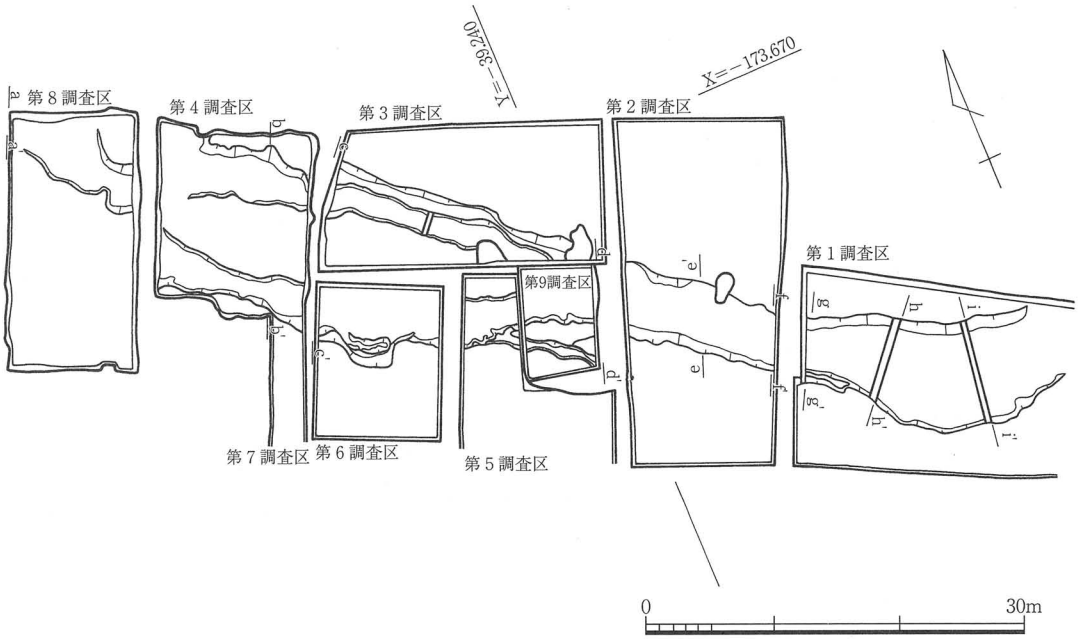
１．遺構（第234～236図、図版37・38）

調査区のほぼ中央にあり、東西方向に位置する流路である。流路の幅は5.3～14.4ｍであり、長さは85.2ｍにわたって検出されている。ＮＲ１は、調査区中央を蛇行しており、東から西へ向かって水流があったようである。深さは、場所によって大きく異なるが、最も深い場所で、遺構面から0.92ｍで底を検出した。

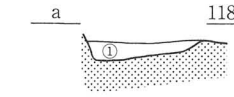
流路内堆積土は、粗砂・細砂・シルト等を主体としていた。底部の勾配もきつく、粘土・粘性土の堆積がみられなかったことから、長期間にわたって滞水していた痕跡はみられなかった。土石流等によって、一時期に形成されたものであろう。流路は、弥生時代の遺構を破壊して流れており、ＳＩ14、ＳＩ19は、約半分が流跡によって削られている。また、流路内堆積土から出土した遺物で最も新しいものは、古代末期の遺物である。また、堆積土上面には近世の遺構が形成されていた。このようなことから、当該遺構が形成されたのは、古代である可能性が高いと思われる。この流路の形成に伴って抉られた弥生時代の遺物包含層及び地山は、段丘崖１下のＩ－ａ８区からＨ－ｊ８区にかけて堆積していた。堆積土より得られた試料をもちいて、花粉分析を行っている。分析結果については第３章にまとめている。

２．出土遺物

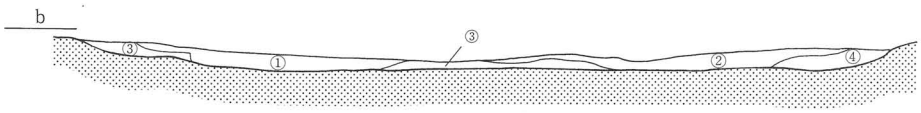
ＮＲ１からは、大量の土器や、石器・木製品等が出土している。ＮＲ１は合計９次にわたる調査を行っている。各調査区は、敷地単位で設定したものであり、敷地によって、削



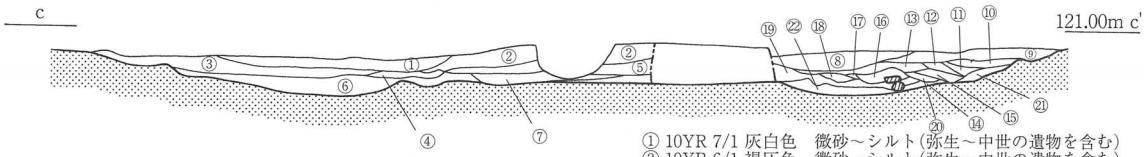
第234図　ＮＲ１平面図（1/600）



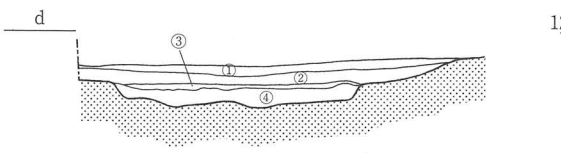
① 5Y 4/1 灰色　微砂～シルト
(5Y 7/1 灰白色　細砂のブロックを含む)(2cm大の礫を含む)



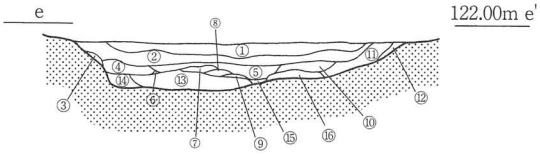
① 10YR 7/1 灰白色　粗砂混じりシルト
② 10YR 5/1 褐灰色　粗砂混じり細砂
(7.5GY 8/1 明緑灰色　シルトのブロックを含む)
③ 7.5GY 8/1 明緑灰色　シルト
④ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂混じり細砂



① 10YR 7/1 灰白色　微砂～シルト(弥生～中世の遺物を含む)
② 10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルト(弥生～中世の遺物を含む)
③ 10YR 4/2 灰黄褐色　微砂～シルト(弥生～中世の遺物を含む)
④ 5Y 7/3 浅黄色　微砂～シルト
(10YR 6/1 褐灰色　微砂～シルトのブロックを含む)
⑤ 10YR 4/1 褐灰色　微砂～シルト(弥生～中世の遺物を含む)
⑥ 10YR 3/1 黒褐色　微砂～シルト(弥生～古墳時代の遺物を含む)
⑦ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
(5G 7/1 明緑灰色　シルトのブロックを多く含む)
⑧ 10YR 6/2 灰黄褐色　シルト～微砂(鉄分の沈着あり)
⑨ 10YR 5/2 灰黄褐色　シルト～微砂
(10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂を多く含む)
⑩ 10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂(細砂を少量含む)
⑪ 2.5Y 6/2 灰黄色　シルト
⑫ 2.5Y 7/2 灰黄色　細砂
⑬ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂
⑭ 10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂(若干細砂を含む)(ややしまりが良い)
⑮ 2.5Y 7/2 灰黄色　シルト
⑯ 2.5Y 6/3 にぶい黄色　シルト～微砂
⑰ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～シルト(ややしまりが良い)
(2.5Y 6/2 灰黄色　シルトのブロックを含む)
⑱ 2.5Y 6/3 にぶい黄色　微砂～細砂
⑲ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～シルト
(2.5Y 6/2 灰黄色　シルトのブロックを含む)
⑳ 2.5Y 3/1 黒褐色　微砂～シルト
(2.5Y 6/2 灰黄色　シルトのブロックを含む)
㉑ 2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～シルト
㉒ 2.5Y 6/3 にぶい色　微砂～細砂
(2.5Y 5/1 黄灰色　シルト～微砂のブロックを含む)

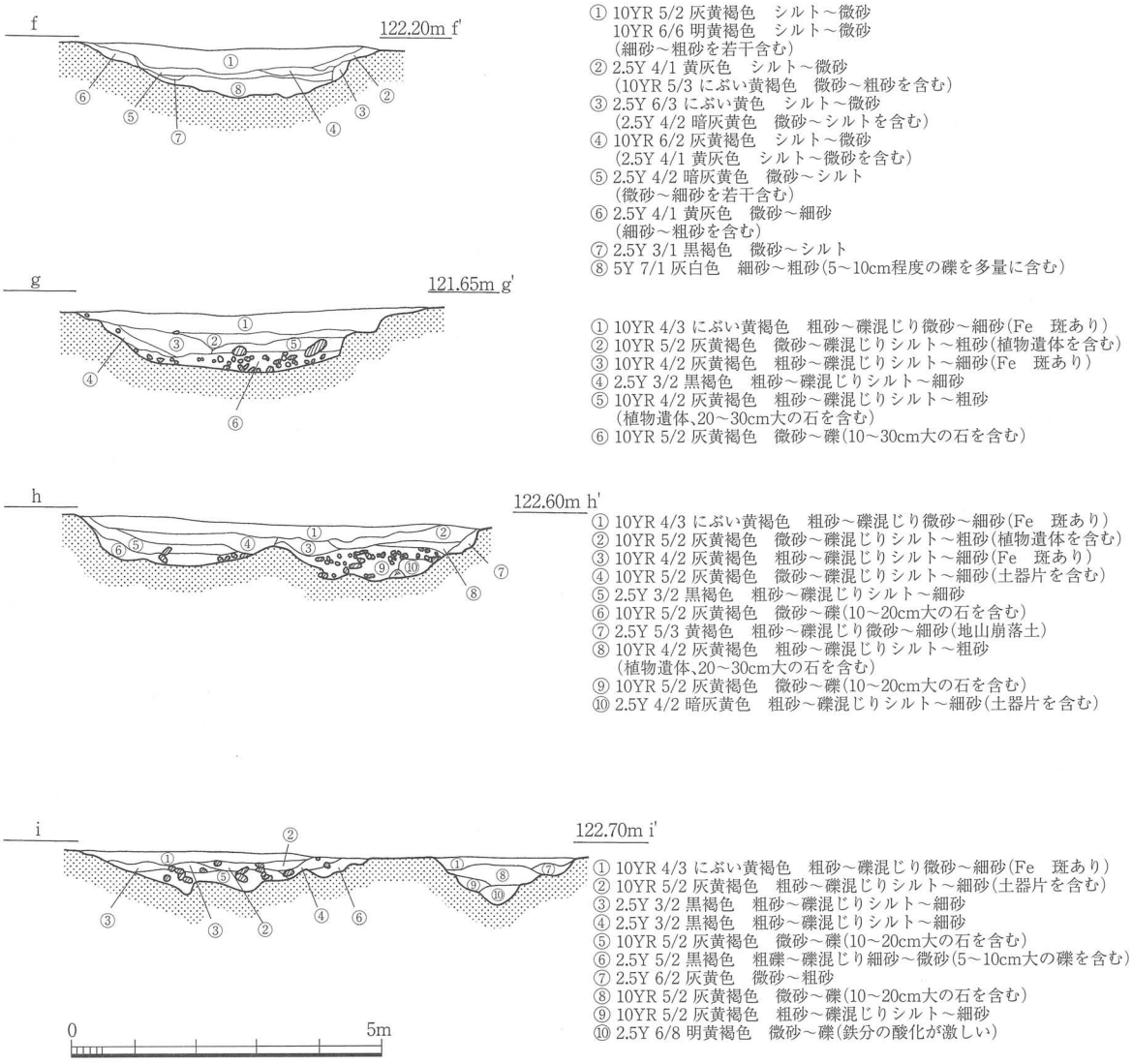


① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂～細礫混じり粗砂
② 2.5Y 4/2 暗灰黄色　粗砂～細礫混じり粗砂
③ 2.5Y 3/1 黒褐色　粗砂～細砂(土器片を含む)
④ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　細砂～粗砂
(10～30cm大の礫、土器片を含む)(洪水砂層)



① 10YR 5/2 灰黄褐色　シルト～微砂
(10Y 6/6 明黄褐色　シルト～微砂を少量含む)
② 2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～シルト
(2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～細砂を若干含む)
③ 2.5Y 6/3 にぶい黄色　シルト～微砂
(2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～シルトを含む)
④ 10YR 5/1 褐灰色　微砂～シルト
(部分的に細砂～粗砂を含む)
⑤ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～シルト
(10YR 5/1 褐灰色　細砂～粗砂のブロックを多く含む)
⑥ 2.5Y 7/2 灰黄色　細砂～粗砂
(2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～シルトを含む)
⑦ 5Y 7/2 灰白色　微砂～細砂
⑧ 5Y 5/1 灰色　微砂～シルト
(5Y 7/1 灰白色　微砂～細砂を含む)
⑨ 5Y 5/1 灰色　微砂～シルト
⑩ 2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～シルト
⑪ 10YR 3/1 黒褐色　シルト～微砂
(2.5Y 6/3 にぶい黄色　シルト～微砂のブロックを少量含む)
⑫ 2.5Y 6/3 にぶい黄色　シルト～微砂
(2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～シルトを含む)
⑬ 5Y 7/1 灰白色　細砂～粗砂(5～10cm大の礫を多く含む)
⑭ 2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～シルト
⑮ 2.5Y 6/2 灰黄色　細砂～粗砂
⑯ 2.5Y 6/2 灰黄色　細砂～粗砂
(2.5Y 4/1 黄灰色　微砂～シルトを少量含む)(5cm大の礫を多く含む)

第235図　ＮＲ１断面図①（1/120）



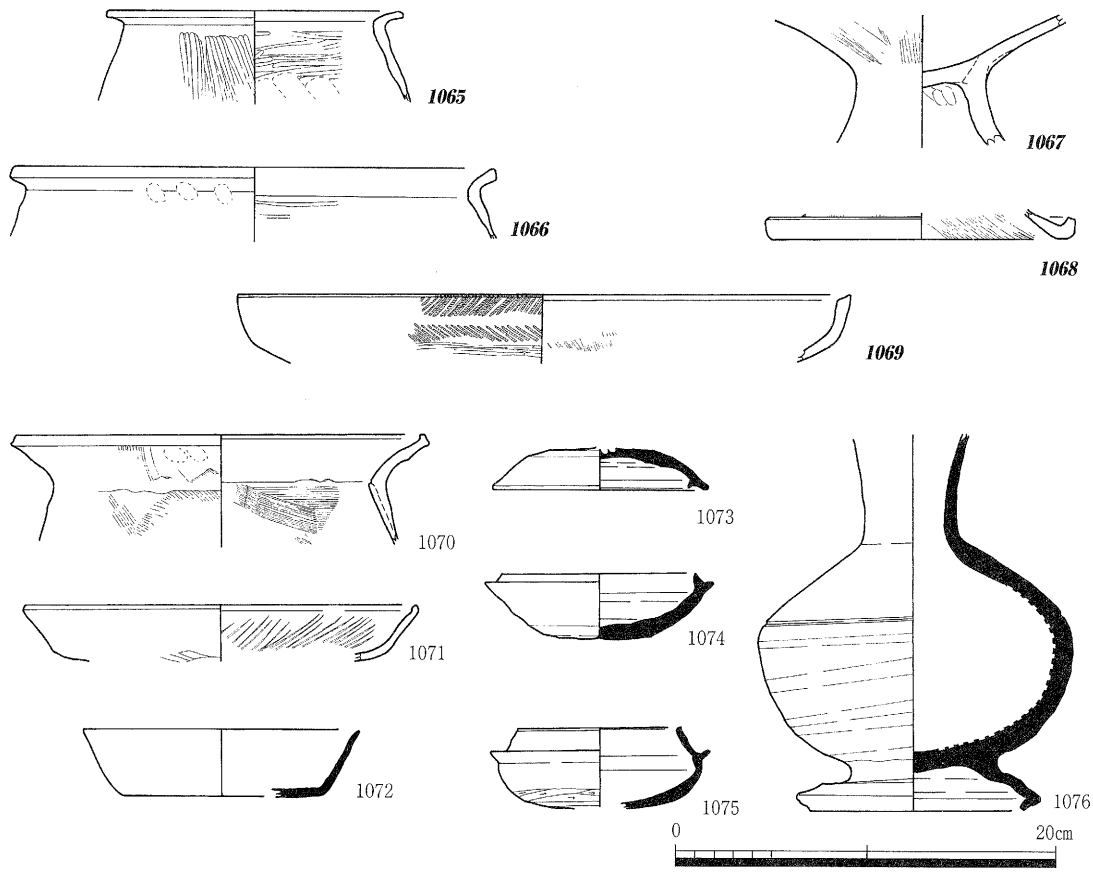
第236図　ＮＲ１断面図②（1/120）

平の度合いが異なっていた。ここでは、各調査区をＮＲ１－第１調査区からＮＲ１－第９調査区と呼び各調査区ごとに遺物の説明を行う。なお、土器については、各調査区ごとに図示しており、石器については、最後に一括して図示している。

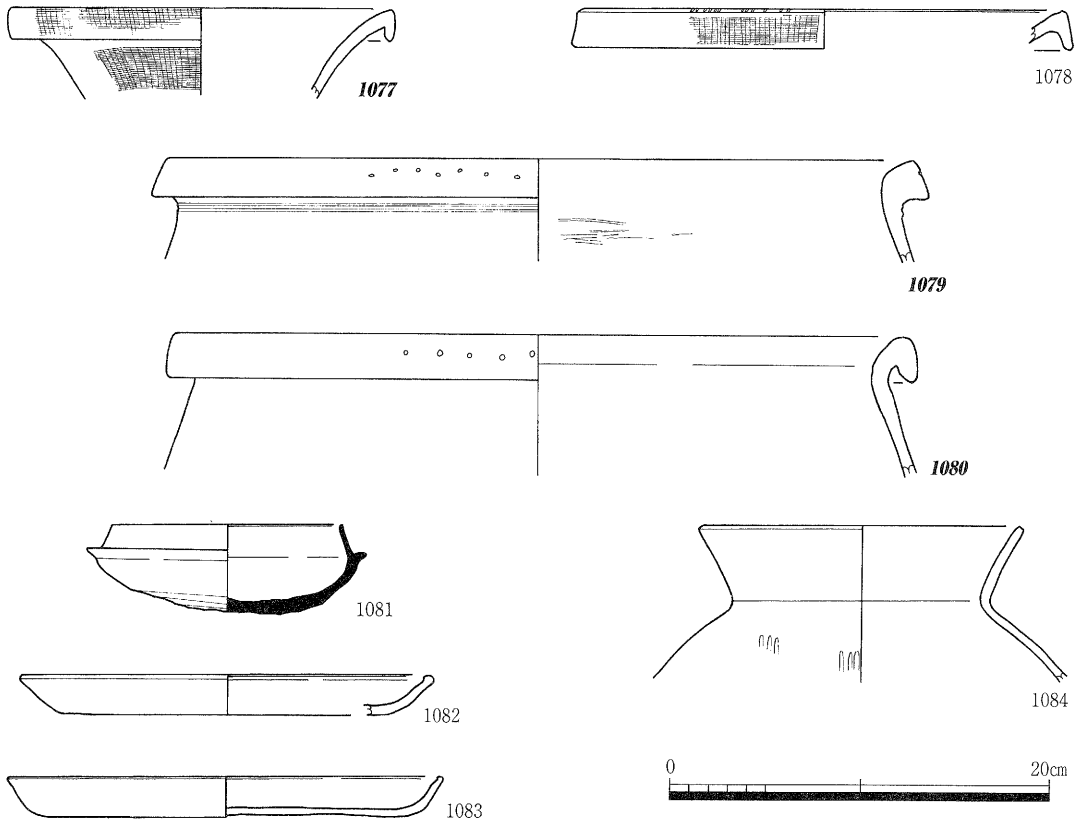
ＮＲ１－第１調査区（第237～240・254・255図、図版89・90・99）

ＮＲ１－第１調査区では、最下層（ｇ④⑥・ｈ⑤⑥⑨⑩・ｉ⑧⑨⑩③⑤⑥層）・下層（ｇ③⑤・ｈ⑧③④・ｉ④層）・中層（ｇ②・ｈ②・ｉ②層）・上層（ｇ①・ｈ①・ｉ①層）の４層に分けて遺物の取り上げをおこなった。

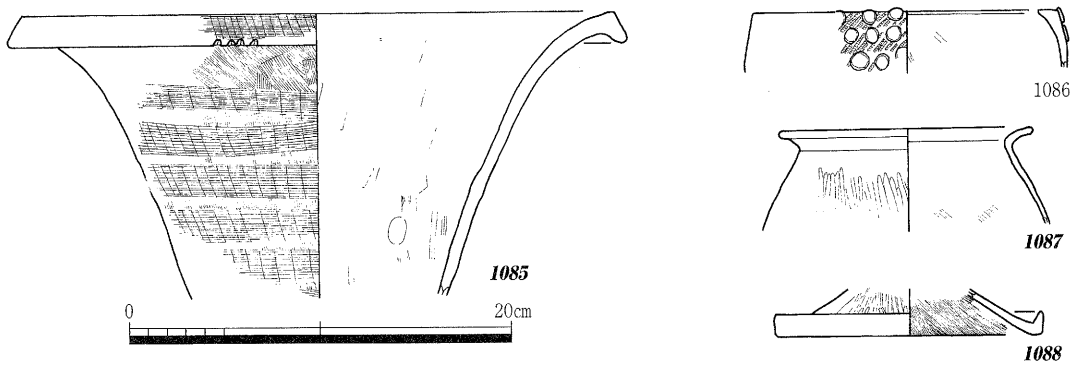
最下層からは、弥生土器の甕Ａ（1065・1066）、高坏（1067～1069）、土師器の甕（1070）、坏（1071）、須恵器の蓋坏の身（1072・1074・1075）、蓋坏の蓋（1073）、長頸壺（1076）、サヌカイト製の凸基式石鏃（1183）が出土している。弥生土器は、Ⅲ様式からⅣ様式にかけてのもので、石鏃も弥生時代のものである。土師器は、７世紀代のもの（1070）と、８世紀代のもの（1071）がある。須恵器は、ＴＫ216型式のもの（1075）、飛鳥Ⅰ～Ⅱ式のも



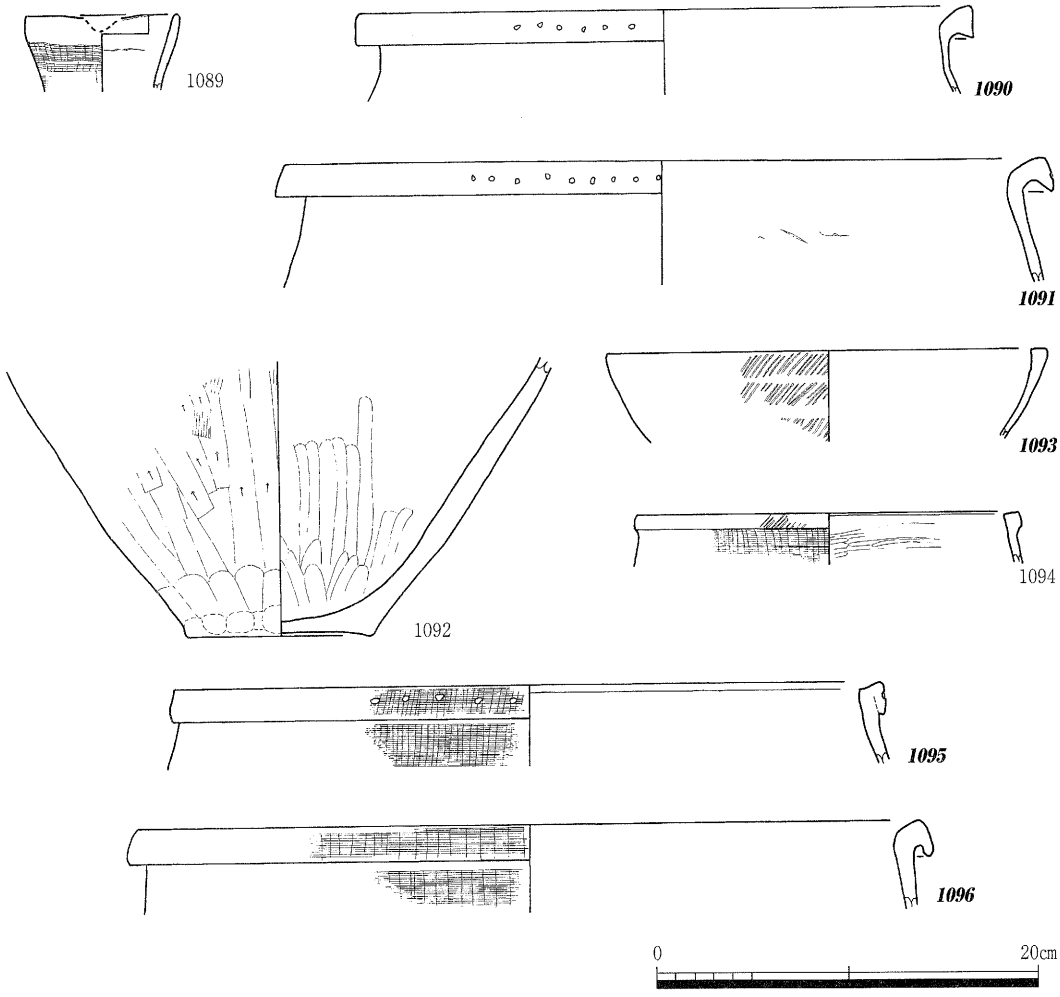
第237図　ＮＲ１－第１調査区最下層出土土器



第238図　ＮＲ１－第１調査区下層出土土器



第239図　ＮＲ１－第１調査区中層出土土器



第240図　ＮＲ１－第１調査区上層出土土器

の（1072～1074、1076）とがある。

下層からは、弥生土器の広口壺Ａ（1077・1078）、甕Ｃ（1079・1080）、壺（1084）、須恵器蓋坏の身（1081）、土師器のⅢ（1082・1083）が出土した。弥生土器は、Ⅲ様式からⅤ様式にかけてのもので、須恵器はＴＫ10型式のもの、土師器は９世紀代のものである。

中層からは、弥生土器の広口壺Ａ（1085）、細頸壺（1086）、甕Ａ（1087）、高坏（1088）が出土している。これらは、Ⅲ様式からⅣ様式に位置づけられる。

上層からは、弥生土器の水差（1089）、甕Ｄ（1092）、甕Ｃ（1090・1091）、鉢Ａ（1093）、鉢Ｂ（1094～1096）、サヌカイト製の凸基式石鏃（1186）、サヌカイト製の削器（1196）が出土している。弥生土器は、Ⅲ様式からⅣ様式に位置づけられる。

ＮＲ１－第２調査区（第241・253・254図、図版90・98・101・103）

ＮＲ１－第２調査区では、下層（ｅ⑧～⑯層）・上層（ｅ①～⑦層）の２層に分けて遺物の取り上げをおこなった。

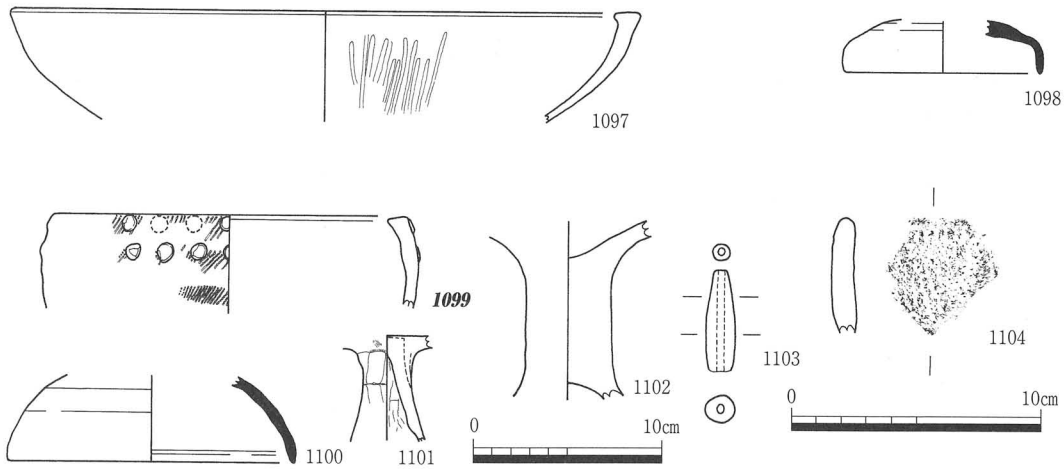
下層からは、縄文土器の深鉢の細片（1104）、弥生土器高坏Ａ（1097）、須恵器蓋坏の蓋（1098）、緑泥片岩製の石斧（1179）が出土している。縄文土器は高山寺式であり、縄文時代早期の所産である。弥生土器は、Ⅳ様式に位置づけられる。須恵器は飛鳥Ⅰ式に位置づけられる。

上層からは、弥生土器の細頸壺（1099）、高坏（1102）、土師器の高坏（1101）、須恵器蓋坏の蓋（1100）、土師質の土錘（1103）、緑泥片岩製の石庖丁の未製品（1175）、サヌカイト製の凸基式石鏃（1180）が出土した。弥生土器はⅣ様式に、須恵器はＴＫ43型式に位置づけられ、土師器は５世紀から７世紀の所産である。

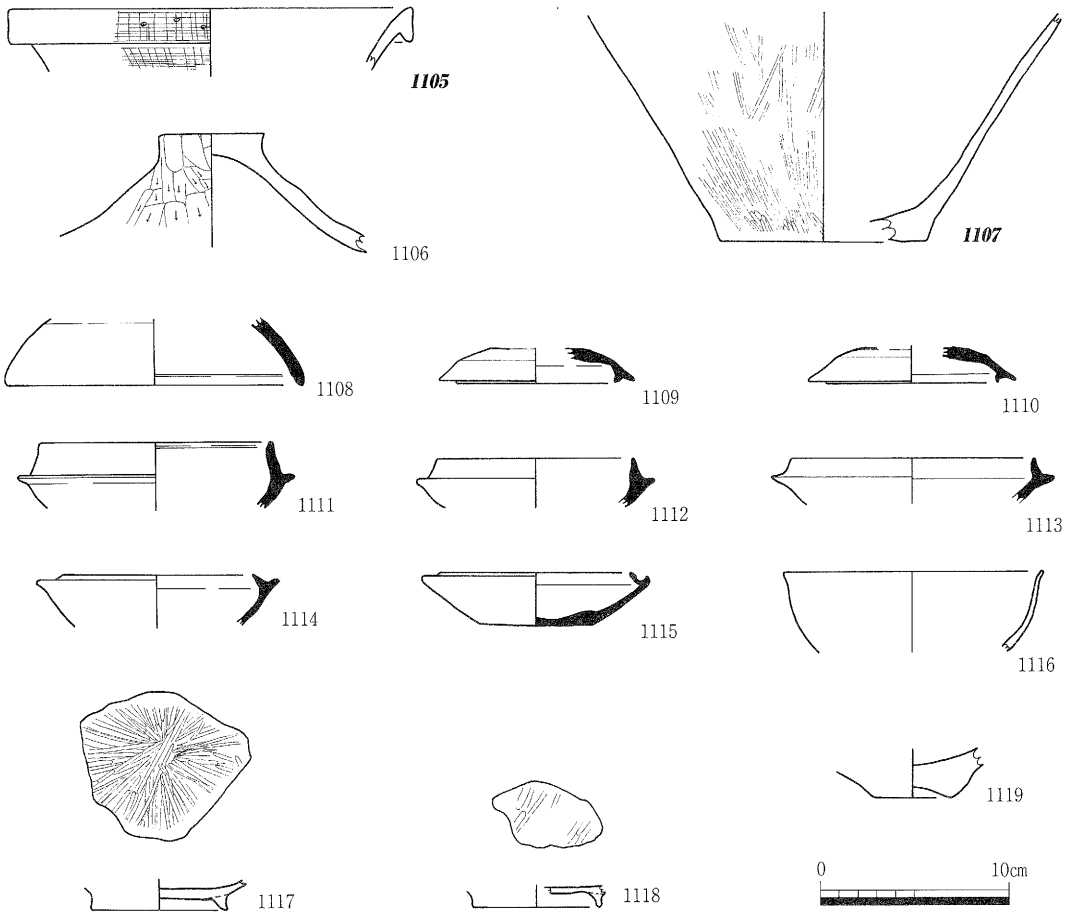
ＮＲ１－第３調査区（第242・254・255図、図版90・99・102）

ＮＲ１－第３調査区では、一括して遺物を取り上げている。弥生土器広口壺Ａ（1105）、蓋（1106）、甕Ｃ（1107）、須恵器蓋坏の蓋（1108～1110）、身（1111～1115）、黒色土器（1117・1118）、縄文土器（1119）、サヌカイト製の有茎式石鏃（1182）、石剣（1191）、削器（1195・1197）が出土している。弥生土器は、Ⅳ様式のものである。土師器は５世紀から８世紀の所産であり、須恵器はＴＫ15型式～飛鳥Ⅰ式のものである。縄文土器は後期から晩期の所産である。

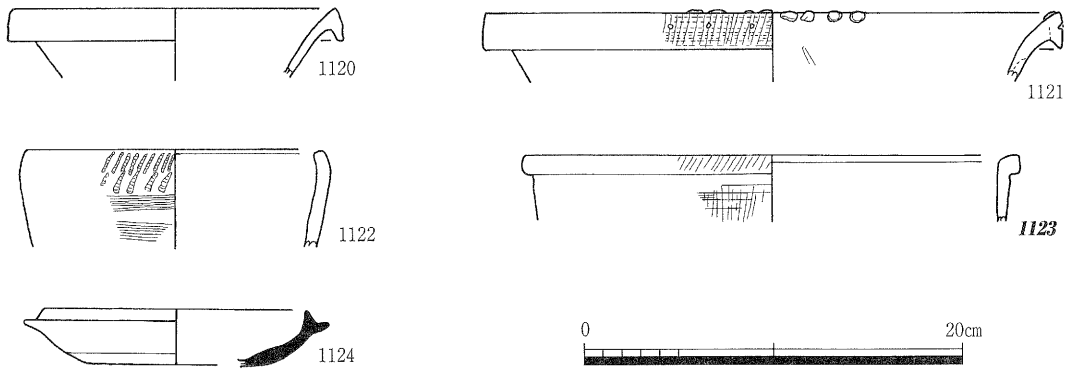
ＮＲ１－第４調査区（第243・254図、図版91・98）



第241図　ＮＲ１－第２調査区出土土器



第242図　ＮＲ１－第３調査区出土土器

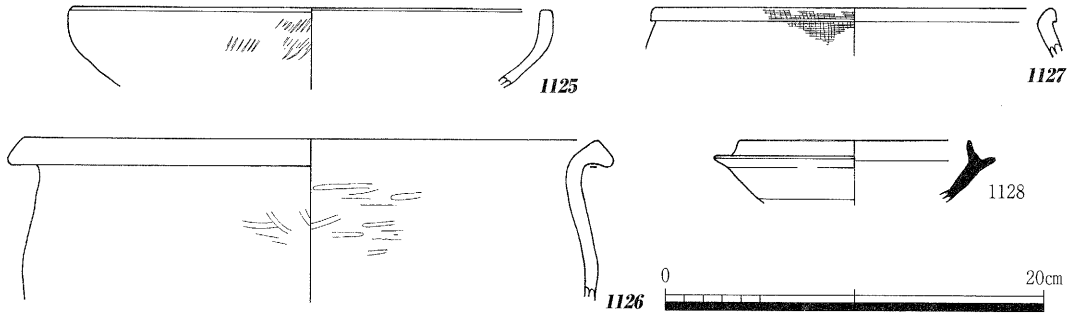


第243図　ＮＲ１－第４調査区出土土器

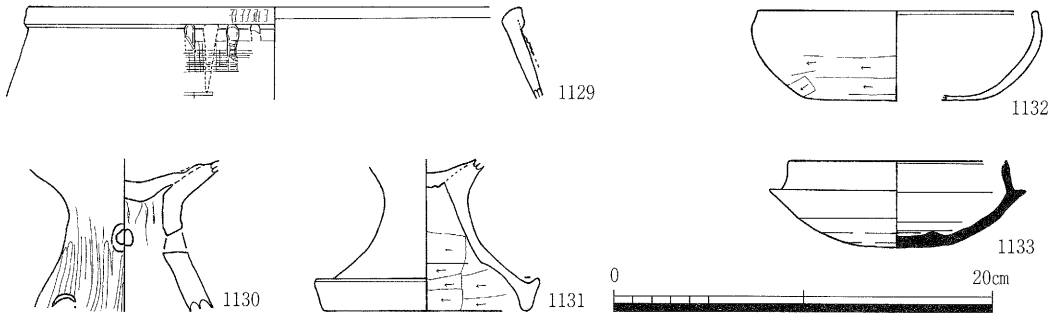
ＮＲ１－第４調査区では、一括して遺物を取り上げている。弥生土器広口壺Ａ（1120・1121）、細頸壺（1122）、鉢Ｂ（1123）、須恵器蓋坏の身（1124）、サヌカイト製の凸基式石鏃（1187・1189）が出土している。弥生土器は、Ⅳ様式に、須恵器はＴＫ209型式に位置づけられる。

ＮＲ１－第５調査区（第244・252・254・255図、図版93・98・99・103）

ＮＲ１－第５調査区では、下層（ｄ④層）、上層（ｄ①～③層）の２層に分けて遺物の取り上げをおこなった。下層からは弥生土器の甕Ｃ（1126）、鉢Ｂ（1127）、サヌカイト製



第244図　ＮＲ１－第５調査区出土土器



第245図　ＮＲ１－第６調査区出土土器

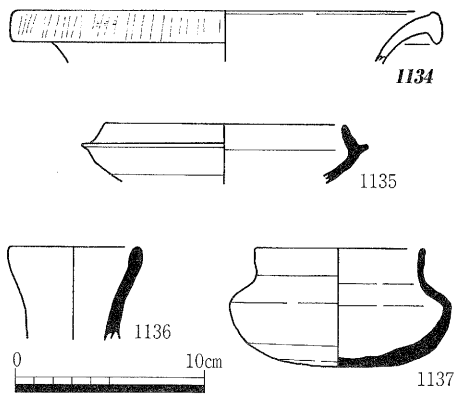
の凸基式石鏃（1181）、サヌカイト製の削器（1197）、サヌカイト製のナイフ型石器（1198）、上層からは、弥生土器の高坏Ａ（1125）、須恵器蓋坏の坏身（1128）が出土した。弥生土器はⅣ様式に、須恵器はＴＫ43型式に位置づけられる。

ＮＲ１－第６調査区（第245・253～255図、図版93・99～101・103）

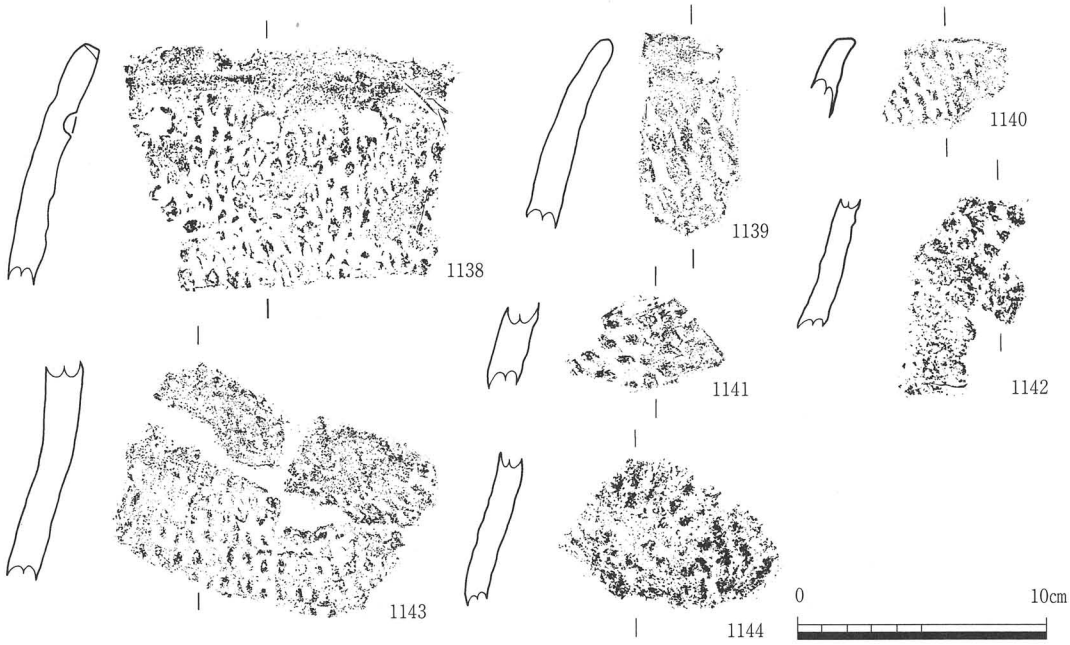
ＮＲ１－第６調査区では、下層（ｃ㉒層）・上層（ｃ⑧⑨層）の２層に分けて遺物の取り上げをおこなった。下層からは、弥生土器の鉢Ｂ（1129）、高坏（1131）、土師器坏（1132）、須恵器蓋坏の身（1133）、緑泥片岩製の石庖丁（1176）、緑泥片岩製の砥石（1177）、サヌカイト製凸基式石鏃（1184・1190）、サヌカイト製の石錐（1192）、サヌカイト製の削器（1194）が出土している。弥生土器はⅣ様式、土師器は８世紀、須恵器はＴＫ47型式に位置づけられる。上層からは、弥生土器の高坏（1130）が出土している。Ⅲ～Ⅳ様式に相当する。

ＮＲ１－第７調査区（第246・253・254図、図版91・98・101）

ＮＲ１－第７調査区では、一括して遺物を取り上げている。弥生土器広口壺Ａ（1134）、須恵器蓋坏の身（1135）、平瓶（1136）、短頸壺（1137）、サヌカイト製の凸基式石鏃（1188）、緑泥片岩製の石庖丁の未製品（1178）等が出土している。弥生土器はⅣ様式、須恵器はＴＫ43型式である。



第246図　ＮＲ１－第７調査区出土土器



第247図　ＮＲ１－第８調査区出土土器①

ＮＲ１－第８調査区（第247～250図、図版91・92）

ＮＲ１－第８調査区では、一括して遺物を取り上げている。当該地区からは、縄文土器、弥生土器が豊富に出土しており、若干の木器も出土している。

1138～1144は高山寺式の押型文土器である。1145は弥生土器の広口壺である。1148～1151は、広口壺Ａである。1146・1147は広口壺Ｂ１である。1153は蓋である。1152・1154～1156は、甕Ａである。1158・1162は甕Ｃである。1159～1161は甕Ｄである。1157は大和形甕である。1163～1166は鉢Ｂである。1167・1168は鉢Ａである。1169・1170は高坏の脚部である。1171は木製の椀である。1172は木器砧である。

出土した弥生土器はⅡ様式からⅣ様式に位置づけられる。

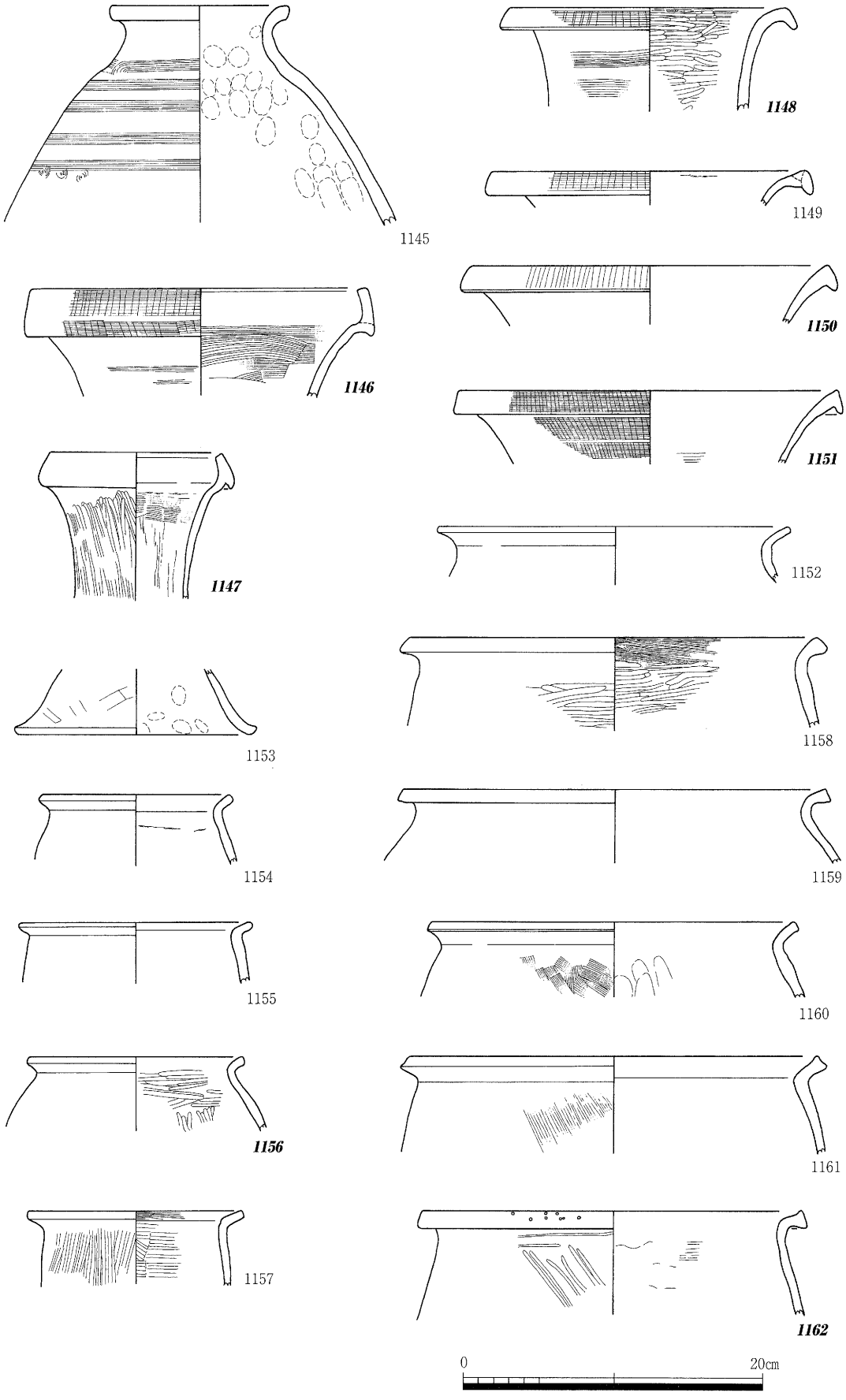
ＮＲ１－第９調査区（第251・254図、図版93・98）

ＮＲ１－第９調査区では、一括して遺物を取り上げている。弥生土器広口壺Ａ（1173）、甕Ｄ（1174）、サヌカイト製の有茎式石鏃（1185）が出土している。弥生土器はⅣ様式に位置づけられる。

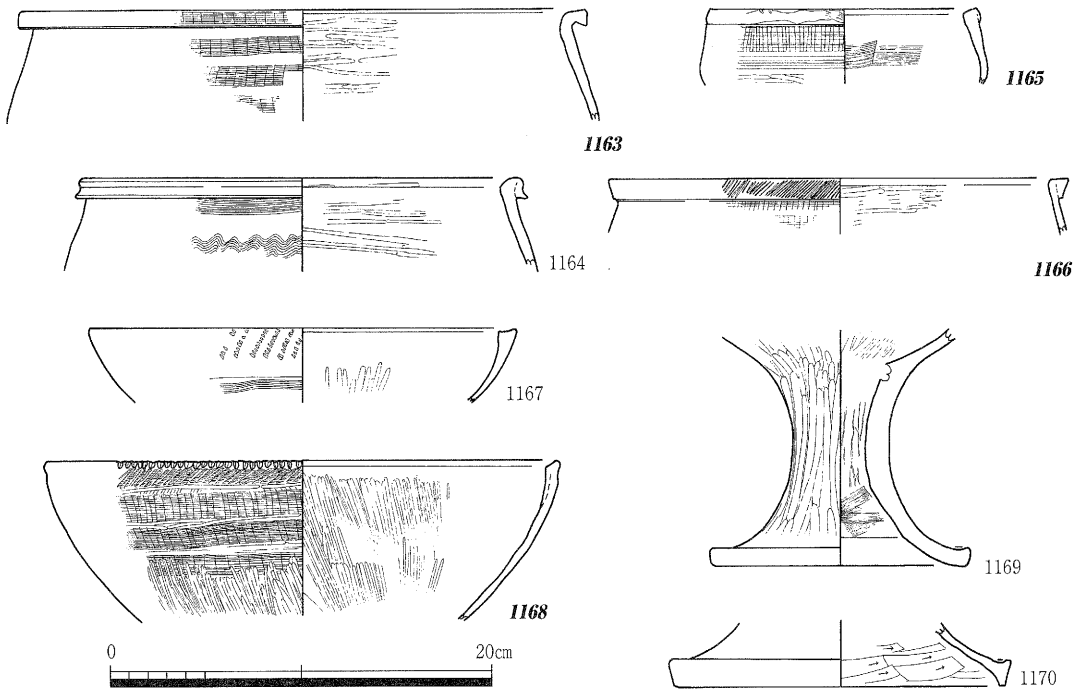
３．まとめ

ＮＲ１は、縄文時代から古代にかけての幅広い遺物が出土した。流路が形成された時期については、最下層から８世紀代の土器が出土していることから、この時期に形成された可能性が高い。

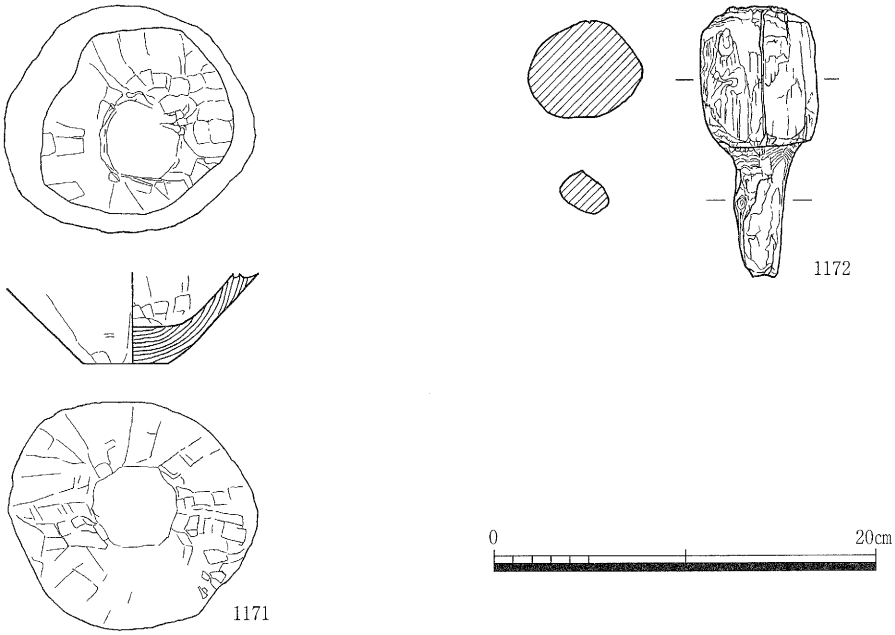
含まれる遺物の時期には、いくつかのまとまりがある。最も古いものは旧石器時代のナイフ形石器、次いで縄文時代早期の高山寺式である。次に弥生時代中期のものがあり、続



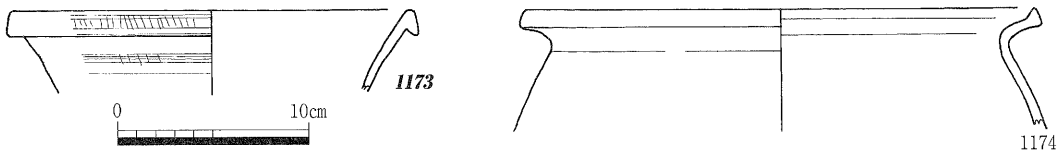
第248図　ＮＲ１－第８調査区出土土器②



第249図　ＮＲ１－第８調査区出土土器③



第250図　ＮＲ１－第８調査区出土木器



第251図　ＮＲ１－第９調査区出土土器

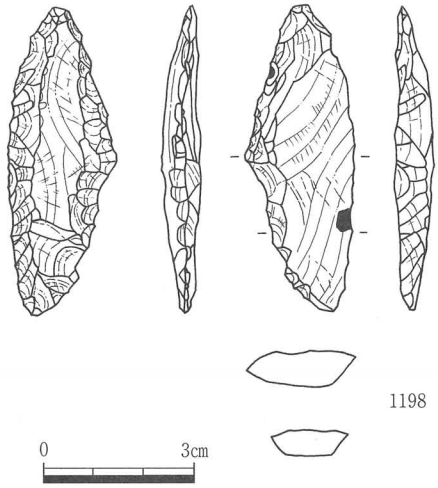
いて５世紀後半から６世紀前半のもの、７世紀中葉のもの、８世紀のものと続く。このような遺物の様相は、当該遺跡周辺の集落の消長を反映していると考えることができる。

縄文土器については、一定量のものが出土している。しかし、当該遺跡において、縄文時代単純層の遺物包含層は検出しておらず、縄文時代の遺物のみで構成される遺構もない。

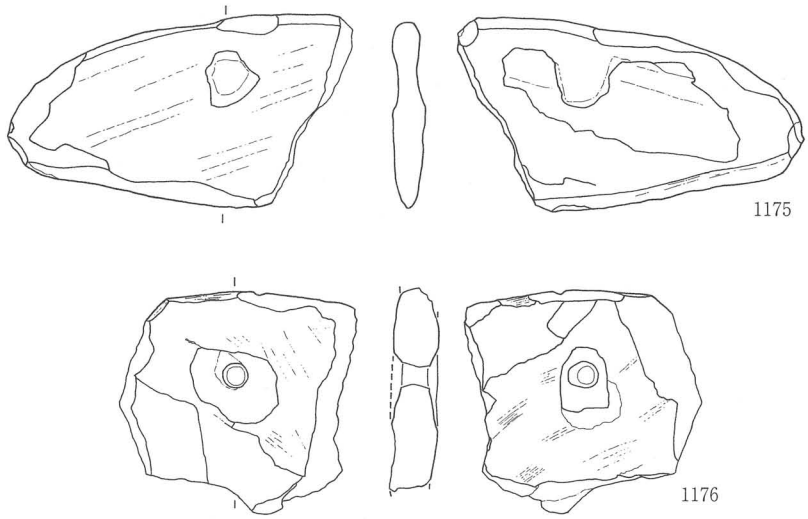
このようなことを勘案すると、流路のより上流に縄文時代の遺構が存在する地点があり、流水によって運ばれた可能性がある。

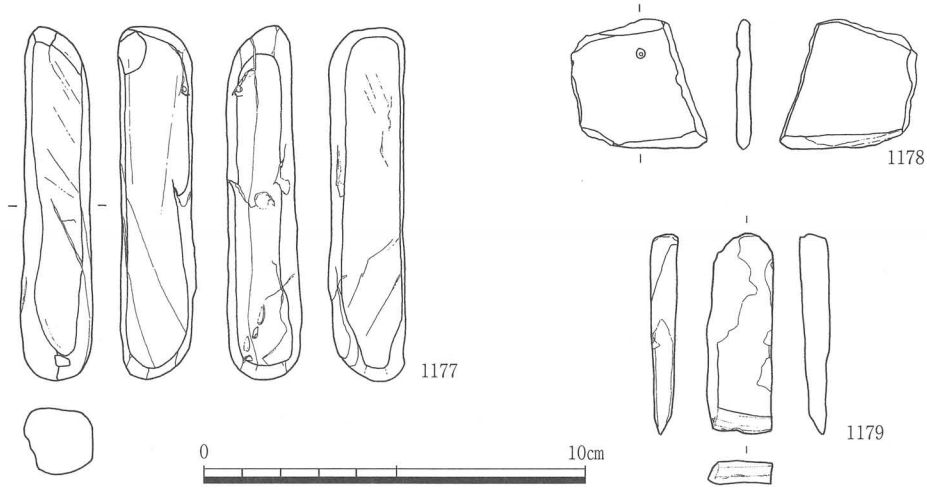
一方で、出土した遺物の大部分は弥生時代の遺物で占められる。これらは、当該遺構が弥生時代の集落の中心部を破壊して形成されたことによって、弥生時代の遺物包含層や遺構埋土に含まれていた遺物が流出して混入したものと考えられる。

6世紀以降の遺物についても、今回の調査区からは遺構が検出されていないので、より上流から流水によって運ばれてきたと考えられる。当該遺構の下層は砂が堆積しており、その後は、弥生時代の包含層に近似した土質の層が堆積していた。このようなことから、当該流路には流水があったことが推定できる。

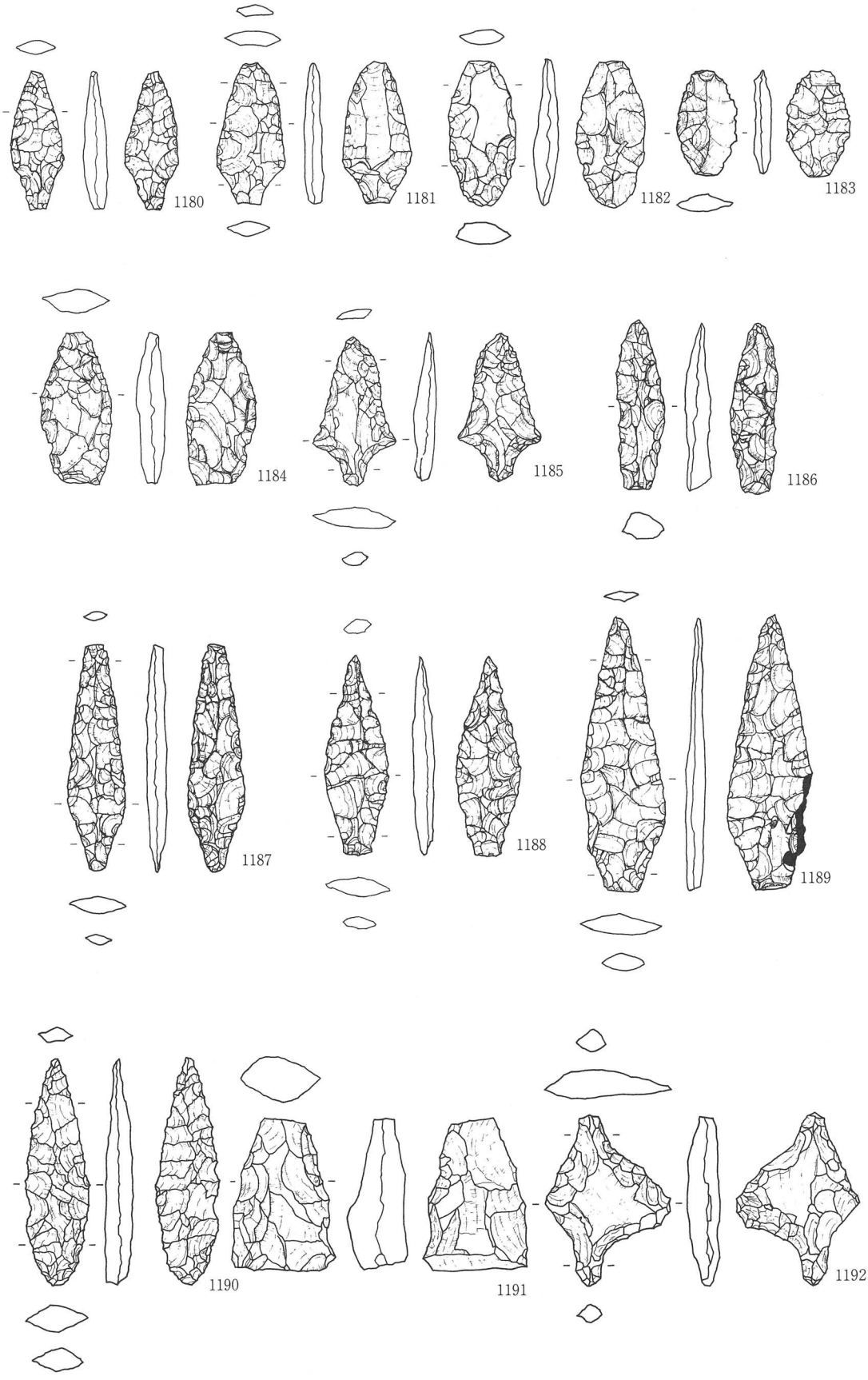


第252図　ＮＲ１出土石器①

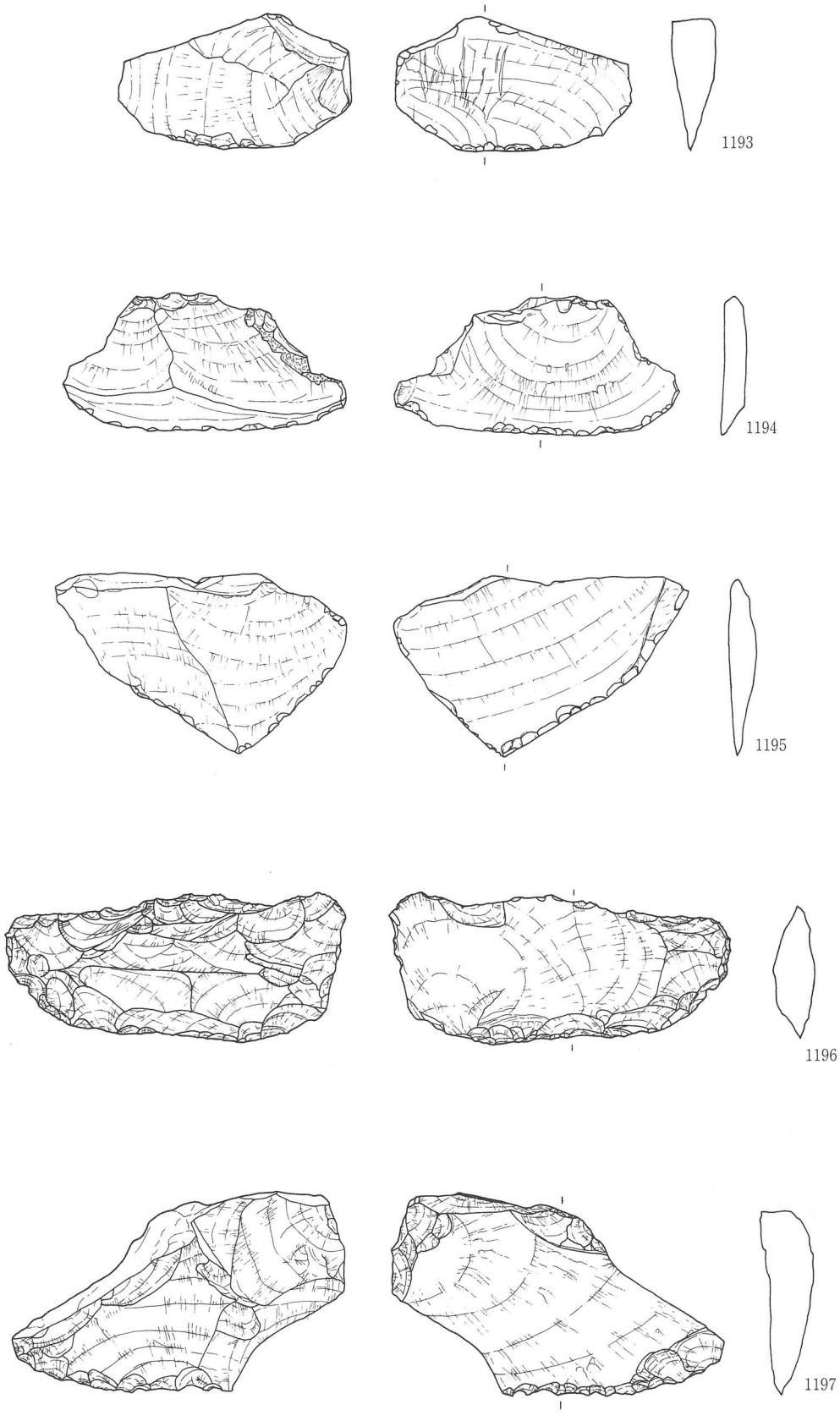




第253図　ＮＲ１出土石器②



第254図　ＮＲ１出土石器③



第255図　ＮＲ１出土石器④

（８）落ち込み

〔ＮＶ１〕（第256・257図、図版39・94・99・103）

１.遺構

第１章第２節で、述べた調査区中央を南北に走る段丘崖２をＮＶ１としている。段丘崖２下面から上面までの被高差は約0.8～１ｍあり、主に黒褐色系のシルト～粘土が堆積していた。堆積物からは土壌のサンプルを採取し、花粉分析を行っている。分析結果については、第３章に記述してる。

２.遺物

1201～1205は広口壺Ａである。1203は比較的間隔の長い簾状文と、直線文を施文する。1202・1204は、簾状文を施文している。1205も簾状文、直線文を施文し、口縁端部を下外方向に若干拡張している。1201は無文化の進んだものである。外面はミガキで仕上げている。

1206は、広口壺Ｂ１である。口縁端部外面には２条の簾状文を施文する。

1207・1209は、甕Ａである。1209は外面を、縦方向のヘラミガキで仕上げている。1207は口縁端部に刻目を加えており、Ⅰ～Ⅱ様式に位置づけられる。

1208は甕Ｃであるが、口縁端部を拡張せず、肥厚させる程度である。1210は甕の底部である。穿孔が行われている。

1214は高坏Ａである。口縁端部には、刻目が施されている。1215～1217は高坏の脚部である。

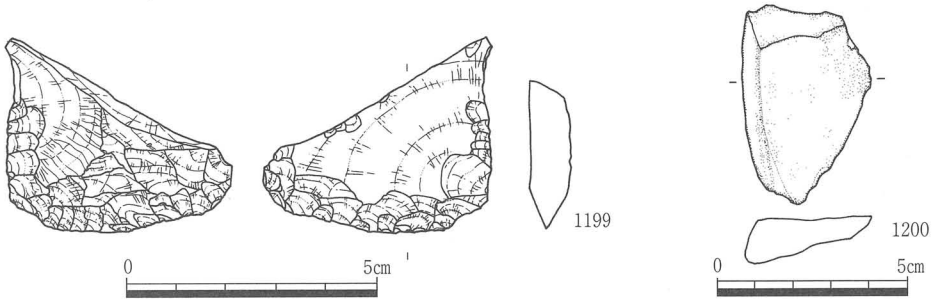
1211～1213は鉢Ｂである。1212・1211は口縁端部が肥厚する。1213は口縁端部を下方向に拡張し、体部には列点文を施文する。

1218は手ずくね土器である。

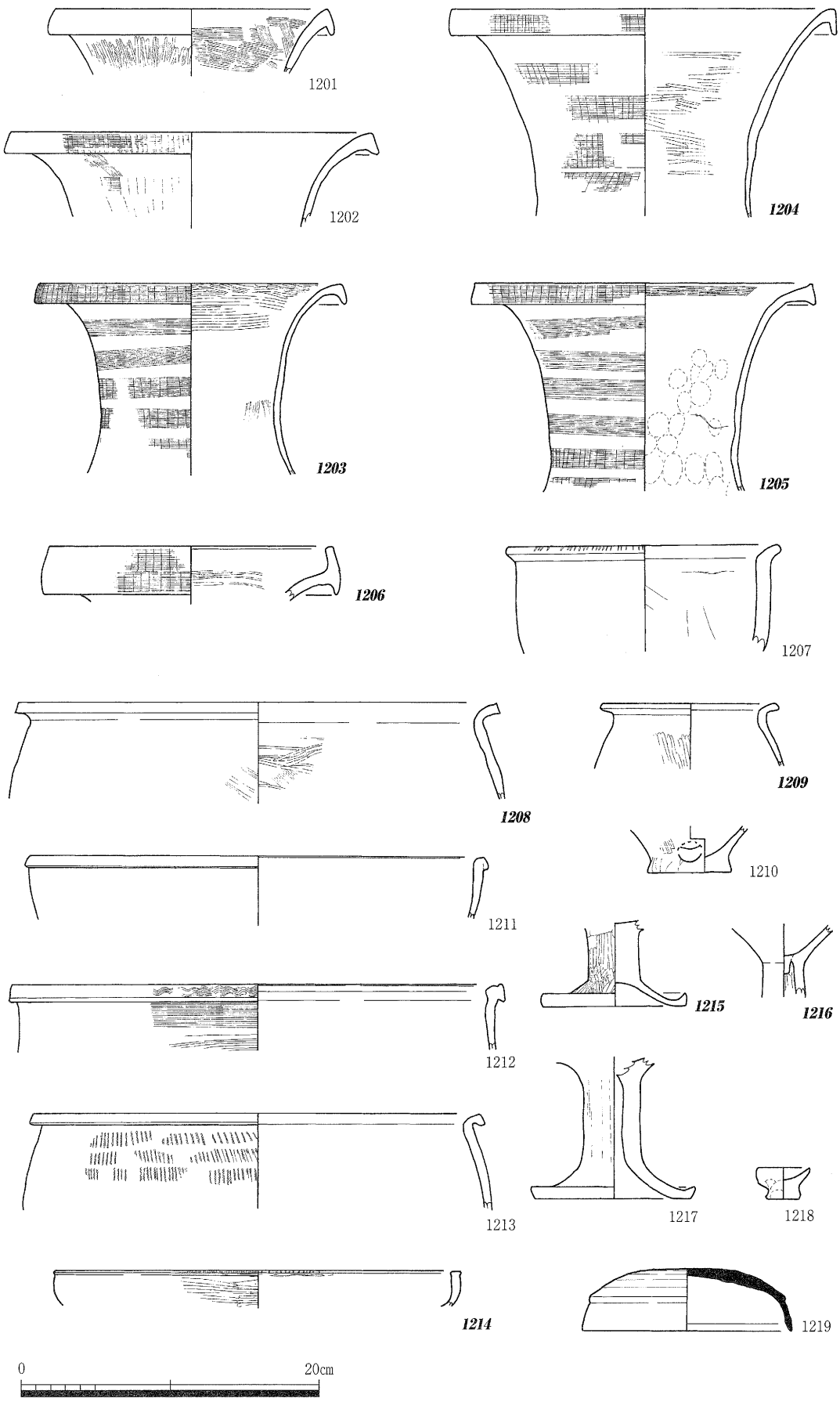
1200は凝灰岩の破片である。

1199はサヌカイト製の削器である。

1219は須恵器の蓋坏である。ＴＫ10型式のものである。



第256図　ＮＶ１出土石器



第257図　ＮＶ１出土土器

第４節　近世の遺構・遺物

（１）溝・石組暗渠

〔ＳＤ１〕（第258図）

Ｈ－ｆ１区からＨ－ｅ２区にかけて位置する石組暗渠である。調査区の北隅に位置する。ＳＤ１は、東西方向に15m直線的にのびた後、ほぼ直角に南方向に屈曲し、18m続いている。南端は、削平によって破壊されているが、溝はさらに南方向にのび、ＳＤ３及び、ＳＤ４に接続するものと考えられる。検出面の標高は、西端で119.80m、屈曲部で119.92m、南端で119.95mである。ＳＤ１は、ＳＤ２と交わっており、ＳＤ２によって破壊されている。幅は、0.5～0.75mであり、深さは0.15mであった。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底部は平坦であり、20cm大の円石が充当されていた。円石は組まれているような状況は見受けられなかった。

〔ＳＤ２〕（第258図）

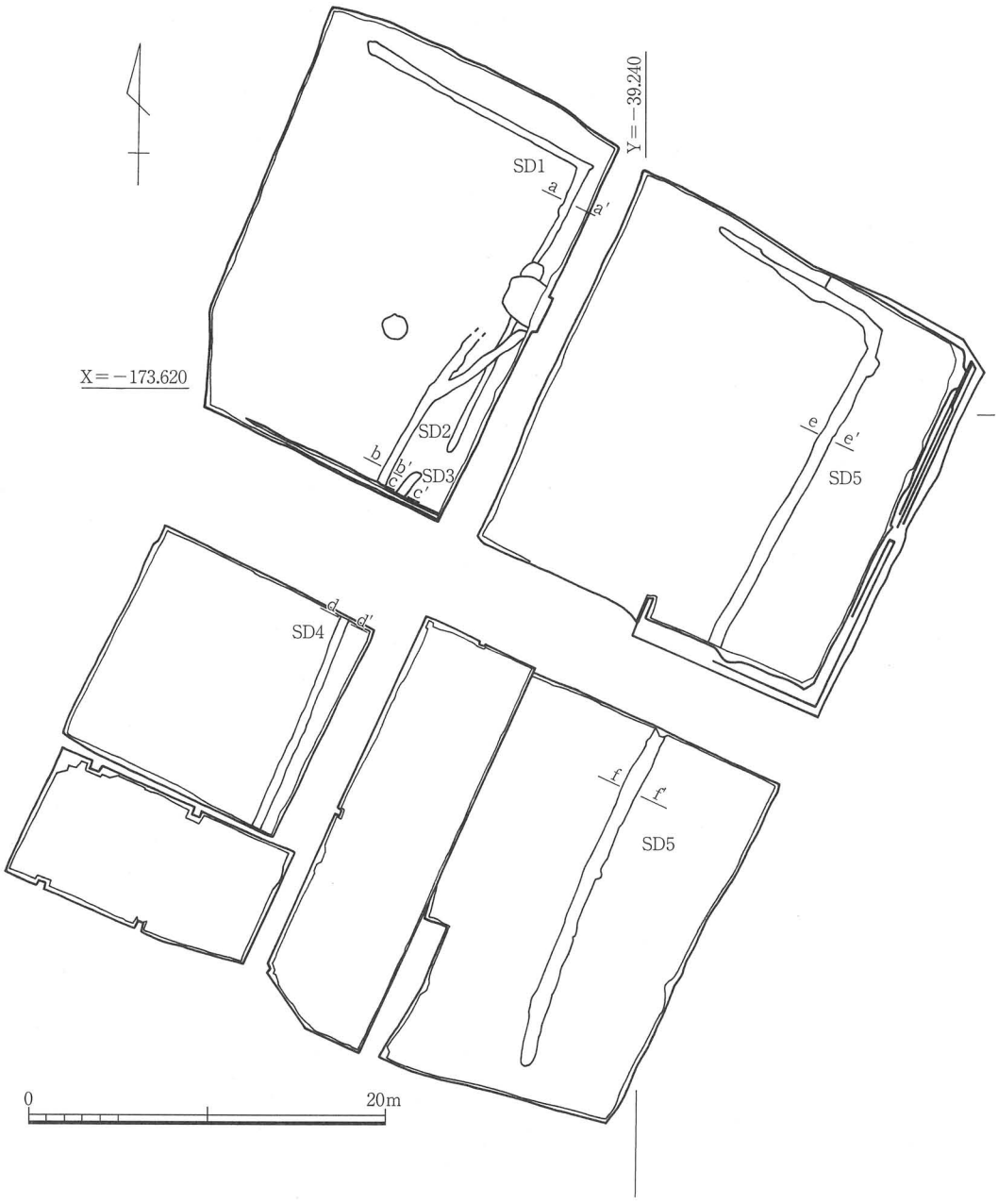
Ｈ－ｆ２区からＨ－ｆ３区にかけて位置する石組暗渠である。調査区の北隅に位置する。ＳＤ２は、直線的に5.5mのび、その後、２方向に分岐する。分岐した２本の暗渠のうち西側のものは、３m直線的にのびていた。東側のものは５mほどのびており、調査区外にさらに続いていた。検出面の標高は、南の端で119.90m、分岐点付近で119.80m、北端部で119.80mであった。ＳＤ２の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であり、20～30cm大の円石が両端に置かれ、その間に10cmの円石が充当されていた。

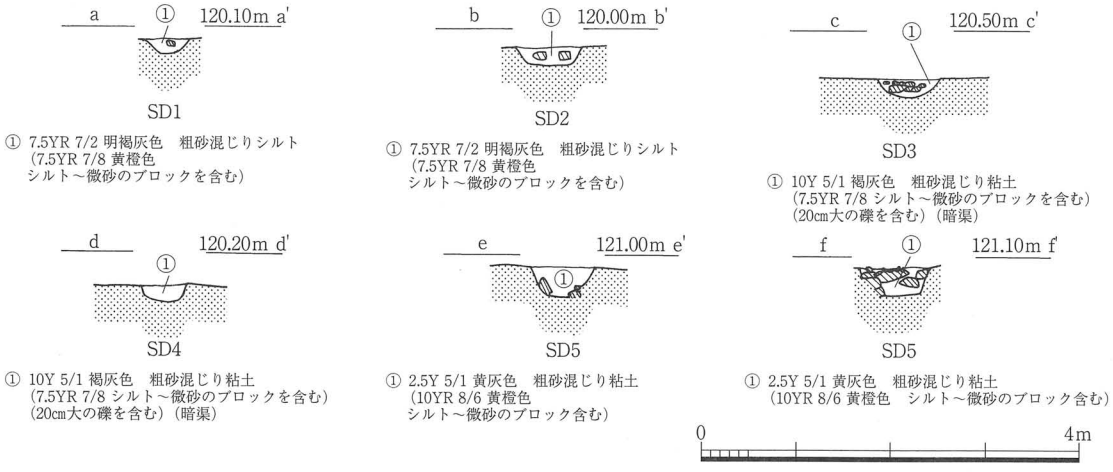
〔ＳＤ３〕（第258図）

Ｈ－ｆ３区に位置する石組暗渠である。調査区の北隅に位置する。南北方向に直線的にのびており、幅0.6m、長さ1.66mにわたり検出した、検出面の標高は119.90～120.00mである。ＳＤ３の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。10cm大の円石が充当されていた。本来ＳＤ１、ＳＤ４と接続していたと考えられる。

〔ＳＤ４〕（第258図）

Ｈ－ｆ４区からＨ－ｇ５区にかけて位置する石組暗渠である。石組暗渠は、南北方向に直線的にのびている。検出面の標高は、北端部で、119.80m、南端部で118.85mであった。規模は幅0.44m、深さ0.16m、長さ12.5mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。10cm大の円石が充当されていた。





第258図　近世ＳＤ１～５平面図（1/400）・土層断面図（1/80）

〔ＳＤ５〕（第258図）

Ｈ－ｄ１区からＨ－ｅ６区にかけて位置する石組暗渠である。溝は、東西方向に10m直線的にのびた後、ほぼ直角に南方向に屈曲し、45m続いている。検出面の標高は西端部で120.90m、屈曲部で121.00m、南端部で、120.90mであった。規模は幅0.5～0.8m、深さは0.3mであった。溝底部は平坦であり、20～30cm大の円石を両端に配して、この間に10cm大の円石を充当していた。ＳＤ１と一定の間隔を置いて、ほぼ並行につくられている。

〔ＳＤ６〕（第11図）

Ｈ－ｉ９区に位置する石組暗渠である。ＳＤ６は、南西から北東に直線的にのびている。検出面の標高は南西端部で119.70m、北東端部で119.70mであった。規模は幅0.5～0.75m、深さ0.07m、長さ7.4mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底はほぼ平坦であった。北東端部でＳＤ７と交わっており、ＳＤ７が当該遺構を破壊して作られていた。10cm大の円石が充当されていた。

〔ＳＤ７〕（第11図）

Ｈ－ｉ９区に位置する石組暗渠である。ＳＤ７は、南北方向に直線的にのびている。検出面の標高は北端部で、119.70m、南端部で119.80mであった。規模は幅0.5～0.6mで、長さ6.54mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。10cm大の円石が充当されていた。溝底部はほぼ平坦であった。北部でＳＤ６と交わっているが、ＳＤ７がＳＤ６を破壊してつくられていた。

〔ＳＤ８〕（第259図、図版41）

Ｈ－ｂ３区に位置する石組暗渠である。ＳＤ８は、北西から南東に直線的にのびている。検出面の標高は北西端部で121.80m、南東端部で121.60mである。規模は幅0.5～0.64m、長さ8.52mにわたり検出した。溝の断面はＵ形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。10cm大の円石は南半分に充当されていた。ＳＤ９と交わっており、当該遺構がＳＤ９を破壊してつくられている。

〔ＳＤ９〕（第259図、図版41）

Ｈ－ｂ３区に位置する石組暗渠である。ＳＤ９は、北西から南東に直線的にのびている。検出面の標高は北西端部で121.80m、南東端部で121.50mである。直線的にのびている。規模は幅0.5～0.63m、深さ0.18m、長さ3.9mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底はほぼ平坦であった。20～30cmの円石が両側に配置され、間に10cm大の円石が充当されていた。当該遺構は、ＳＤ８と交わっているが、ＳＤ８によって破壊されている。

〔ＳＤ10〕（第259図、図版41）

Ｈ－ｂ４区に位置する石組暗渠である。ＳＤ10は、南北方向に直線的にのびている。南方向にも北方向にも調査区外へ続いている。検出面の標高は北端部で121.70m、南端部で121.85mである。規模は幅0.5～0.6m、深さ0.16m、長さ９mにわたり検出した。ＳＤ10の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。10cm大の石が充当されていた。

〔ＳＤ11〕（第259図、図版41）

Ｈ－ａ４区からＨ－ａ５区にかけて位置する石組暗渠である。ＳＤ11は、南北方向に直線的にのびている。検出面の標高は北端部で、122.00mである。規模は幅0.34m、深さ0.12m、長さ10.68mにわたり検出した。ＳＤ11の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。10cm大の石がまばらに充当されていた。

〔ＳＤ12〕（第259図、図版41）

Ｈ－ａ４区からＨ－ａ５区にかけて位置する石組暗渠である。ＳＤ12は、南北方向に直線的にのびている。検出面の標高は北部で122.05mであり、南部で122.06mであった。規模は幅0.38m、深さ0.1m、長さ5.0mにわたり検出した。ＳＤ12の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。10～30cm大の石が充当されていた。

〔ＳＤ13〕（第259図、図版41）

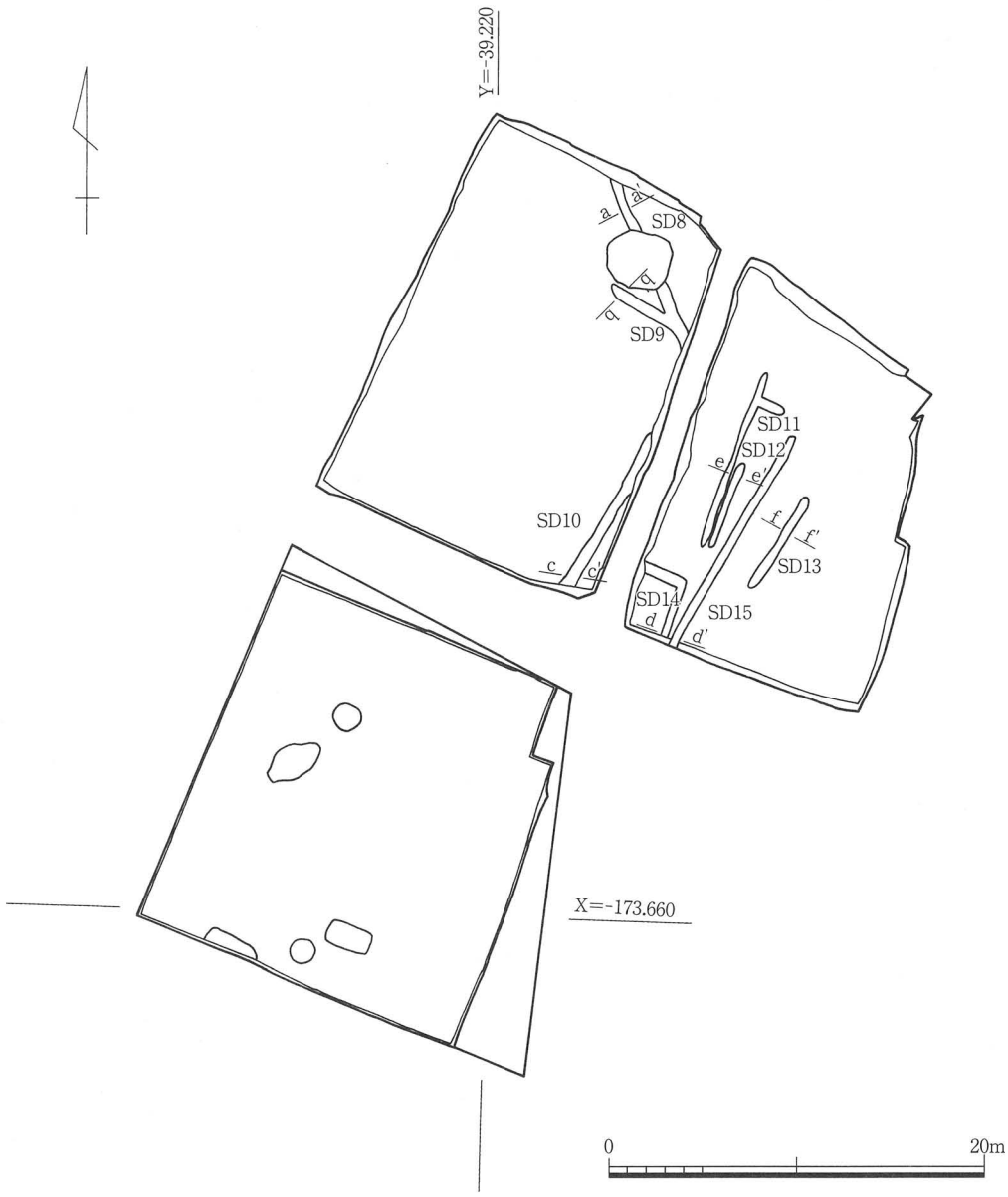
Ｈ－ａ４区からＨ－ａ５区にかけて位置する石組暗渠である。ＳＤ13は、南北方向に直線的にのびている。検出面の標高は北端部で122.10m、南端部で122.10mである。規模は幅0.4～0.5m、深さ0.08m、長さ5.52mにわたり検出した。ＳＤ13の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。10cm大の石がまばらに充当されていた。

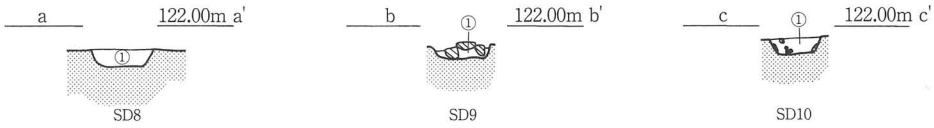
〔ＳＤ14〕（第259図、図版41）

Ｈ－ｂ５区に位置する石組暗渠である。ＳＤ14は、東西方向にのびた後、直角に屈曲し南北方向に直線的にのびている。検出面の標高は、西端部で122.00m、屈曲部で122.04m、南端部で122.00mである。ＳＤ14の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。10cm大の石が若干充当されていた。

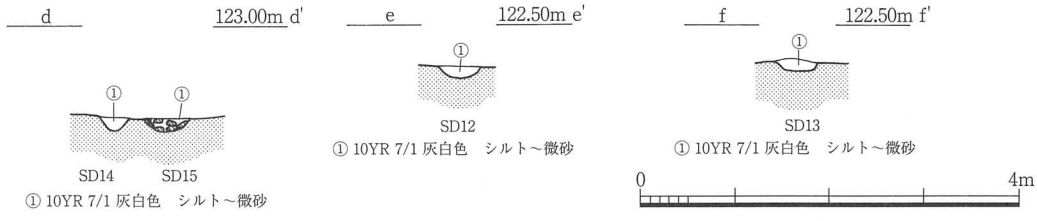
〔ＳＤ15〕（第259図、図版41）

Ｈ－ａ４区からＨ－ａ５区にかけて位置する溝である。ＳＤ15は、南北方向に直線的にのびている。検出面の標高は122.00mである。規模は幅0.5m、深さ0.1m、長さ13mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。10～30cm大の石が充当されていた。





① 2.5Y 4/1 黄灰色　細砂～粗砂混じりシルト～細砂　① 2.5Y 4/1 黄灰色　細砂～粗砂混じりシルト～細砂　① 2.5Y 4/3 オリーブ褐色　シルト～微砂
(5～20cm大の礫を含む)



① 10YR 7/1 灰白色　シルト～微砂　① 10YR 7/1 灰白色　シルト～微砂　① 10YR 7/1 灰白色　シルト～微砂

第259図　近世ＳＤ８～15平面図（1/400）・土層断面図（1/80）

〔ＳＤ16〕（第260図、図版41）

Ｈ－ａ７区に位置する石組暗渠である。ＳＤ16は、南北方向に直線的にのびている。検出面の標高は北端部で122.60m、南端部で122.70mである。規模は幅0.5～0.8m、深さ0.25m、長さ11.5mにわたり検出した。北端部は、撹乱によって破壊されている。溝底部は、ほぼ平坦である。10cm～30cm大の石が充当されている場所があった。

〔ＳＤ17〕（第260・261図、図版41・94）

Ｇ－ｊ７区からＨ－ａ８区にかけて位置する石組暗渠である。ＳＤ16と並行して南北方向に直線的にのびている。検出面の標高は北端部で122.70m、南端部で122.70mである。規模は幅1.2～2.0m、深さ0.15～0.20m、長さ19.69mにわたり検出した。溝底部はほぼ平坦であった。10cm～30cm大の石が充当されていた。

ＳＤ17からは、磁器が出土している。

1220は、肥前系磁器の碗である。1221・1222・1223は、新生瀬戸の端反碗である。1224は、産地不明磁器の広東碗である。1225・1226は、新生瀬戸の碗蓋である。1227は肥前系磁器の半筒形の中碗である。1228は、新生瀬戸の端反皿である。

各遺物は17世紀末から18世紀にかけてのものである。

〔ＳＤ18〕（第260図、図版42）

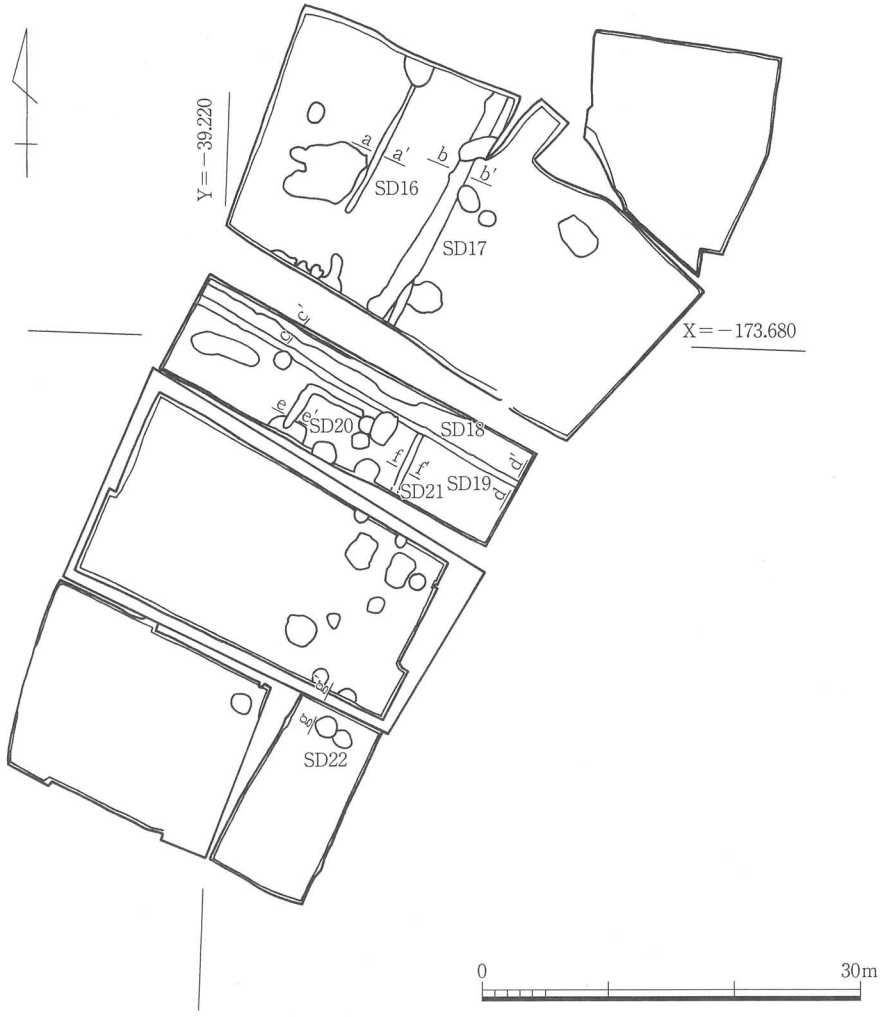
Ｈ－ｂ９区を中心に位置する石組暗渠である。ＳＤ18は、東西方向に直線的にのびている。検出面の標高は東端部で122.50m、西端部で122.40mである。規模は幅0.5～1.26m、深さ0.15m、長さ22.86mにわたり検出した。溝底部は、ほぼ平坦であった。10cm～30cm大の石が充当されていた。

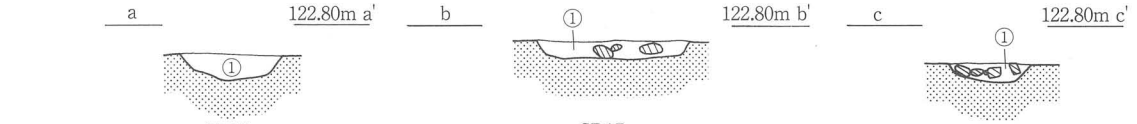
〔ＳＤ19〕（第260図、図版42）

Ｈ－ｂ９区を中心に位置する石組暗渠である。ＳＤ19は、東西方向に直線的にのびている。検出面の標高は東端部で122.61m、西端部で122.41mである。規模は幅0.5～0.73m、深さ0.2m、長さ29.0mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。10cm～30cm大の石が充当されている場所があった。

〔ＳＤ20〕（第260図）

Ｈ－ｂ９区を中心に位置する石組暗渠である。ＳＤ20は、南北方向に直線的にのびた後、直角に東方向に屈曲する。検出面の標高は、南端部で122.50m、屈曲点付近で122.50m、東端部で122.60mである。規模は幅0.5～0.73m、深さ0.2m、長さ8.79mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。10cm大の円石が、まばらに充当されていた。

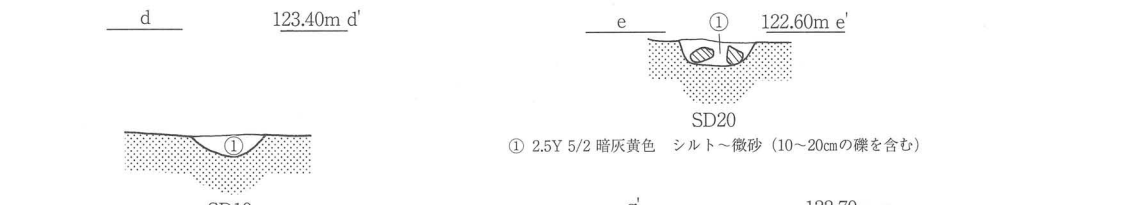




① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂（10～20㎝の礫を含む）

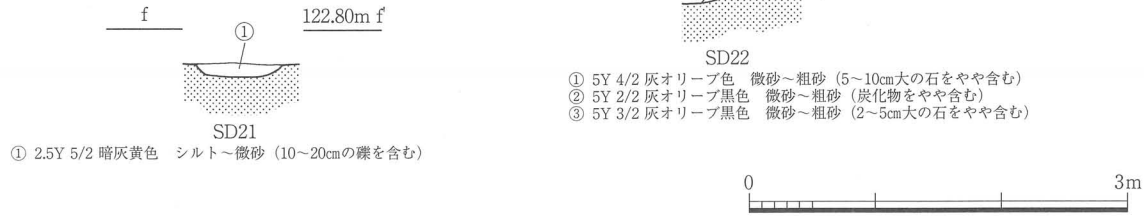
① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂（10～20㎝の礫を含む）

① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂（10～20㎝の礫を含む）



① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂（10～20㎝の礫を含む）

① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂（10～20㎝の礫を含む）



① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂（10～20㎝の礫を含む）

① 5Y 4/2 灰オリーブ色　微砂～粗砂（5～10㎝大の石をやや含む）
② 5Y 2/2 灰オリーブ黒色　微砂～粗砂（炭化物をやや含む）
③ 5Y 3/2 灰オリーブ黒色　微砂～粗砂（2～5㎝大の石をやや含む）

第260図　近世ＳＤ16～22平面図（1/600）・土層断面図（1/60）

〔ＳＤ21〕（第260図）

Ｈ－ａ９区からＨ－ａ10区にかけて位置する石組暗渠である。ＳＤ21は、南方向に直線的にのびている。検出面の標高は南端部で122.50m、北端部で122.50mである。規模は幅0.5～0.65m、深さ0.1～0.2m、長さ4.5mにわたり検出した。溝底部はほぼ平坦であった。10cm大の石がまばらに充当されていた。

〔ＳＤ22〕（第260図）

Ｍ－ａ１区を中心として位置する石組暗渠である。ＳＤ22は、東西方向に直線的にのびている。検出面の標高は122.50mである。調査では南半部が対象となった。長さ6.5mにわたり検出した。溝底はほぼ平担であった。10cm大の石が充当されていた。

〔ＳＤ23〕（第261・262図、図版42）

Ｇ－ｇ１区を中心として位置する石組暗渠である。ＳＤ23は、北西から南東に直線的にのびている。検出面の標高は北西端部で122.90m、南東端部で123.50mである。規模は、幅0.8～0.9m、長さ23.4mにわたり検出した。断面はＵ字形を呈している。溝底部は平担であった。両側に20～30cm大の石を配置し、この間に10cm大の石を充当していた。

〔ＳＤ24〕（第261・262図、図版42・94・95）

Ｇ－ｆ２区を中心として位置する石組暗渠である。ＳＤ24は北から南に直線的にのびている。検出面の標高は、北端部で123.50m、南端部123.40mである。規模は幅0.6m、深さ0.2～0.27m、長さ9.24mにわたり検出した。溝底部はほぼ平坦であった。両側に20～30cm大の石を配置し、間に10cm大の石を充当していた。

溝内からは、近世陶磁器、炮烙、瓦が出土した。

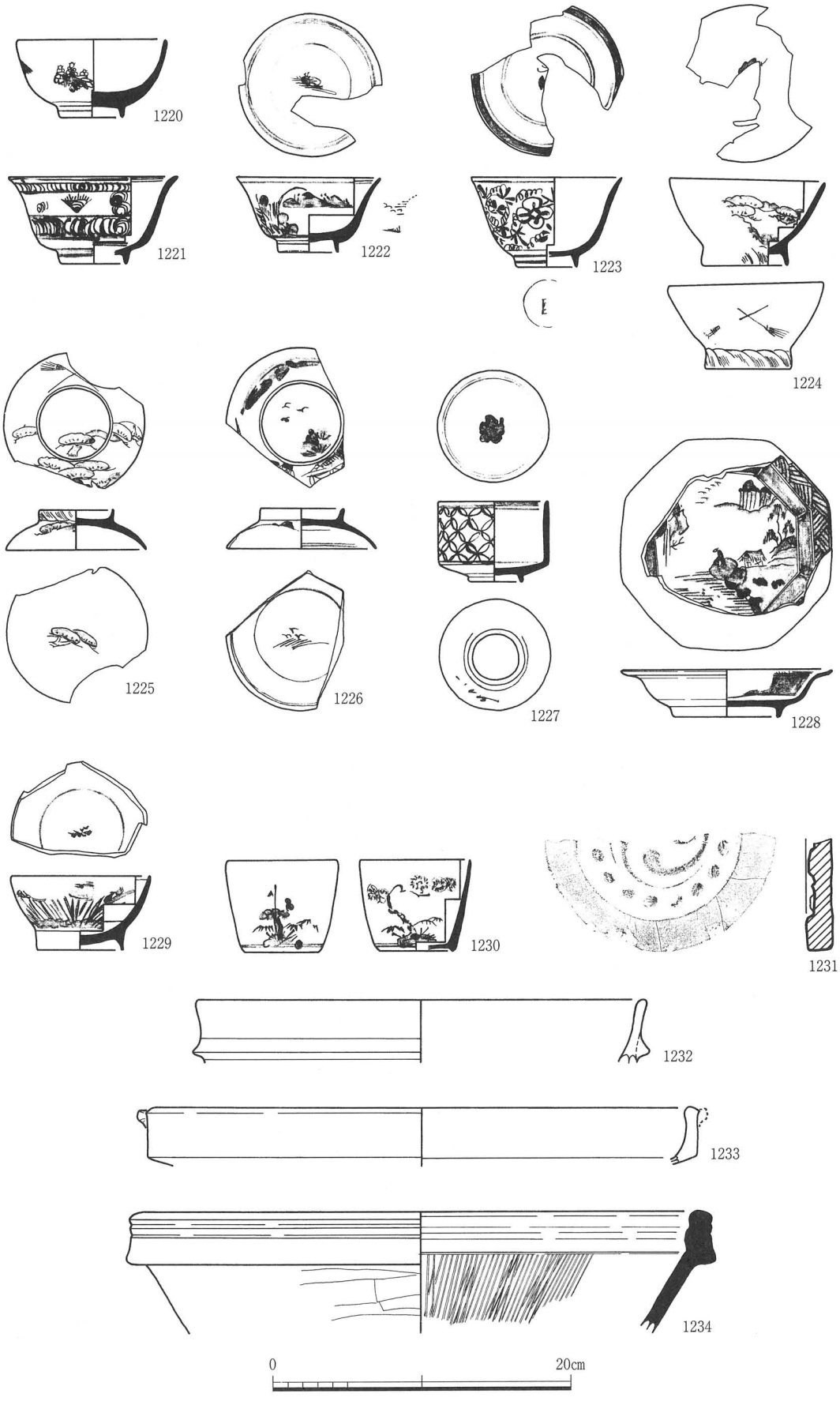
1229は、肥前系磁器の広東碗である。1230は肥前系磁器の猪口である。1231は巴文軒丸瓦である。1232・1233は炮烙である。1234は、堺擂鉢である。

〔ＳＤ25〕（第262・263図、図版42・95）

Ｇ－ｈ１区を中心として位置する石組暗渠である。ＳＤ25は、北東から南西に直線的にのびている。検出面の標高は北東端部で122.70m、南西端部で122.90mであった。規模は幅0.5～0.84m、深さ0.2m、長さ9.1mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底部は、ほぼ平坦であった。両側に20～30cm大の石を配置し、間に10cm大の石を充当していた。

ＳＤ25からは、近世陶磁器が出土した。

1235は陶器の酒坏である。1236は、産地不明磁器の碗である。1237は、産地不明磁器の碗蓋である。1238は産地不明磁器の仏花瓶である。1239は堺擂鉢である。1240は、産地不



第261図　近世ＳＤ17・24出土遺物

明磁器の土瓶である。

〔ＳＤ26〕（第262・263図、図版42・95）

Ｇ－ｇ１区を中心として位置する石組暗渠である。ＳＤ26は、南から北に直線的にのびている。検出面の標高は北東端部で122.57m、南西端部で122.91mであった。規模は幅１～1.3m、深さ0.4～0.54m、長さ約16.0mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。

10cm大の石がまばらに充当されていた。

ＳＤ26からは、近世陶磁器と瓦が出土した。

1241は、肥前系磁器の碗である。1243は、丸瓦である。1242は産地不明磁器の皿である。

〔ＳＤ27〕（第262図、図版42・43）

Ｇ－ｈ１区を中心として位置する石組暗渠である。ＳＤ27は、北から南に直線的にのびている。検出面の標高は北東端部で122.70m、南西端部で123.00mであった。規模は幅0.8～1.0m、深さ0.1m、長さ15.0mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。両側に20～30cm大の石を配置し、間に10cm大の石を充当していた。

〔ＳＤ28〕（第262図、図版42・43）

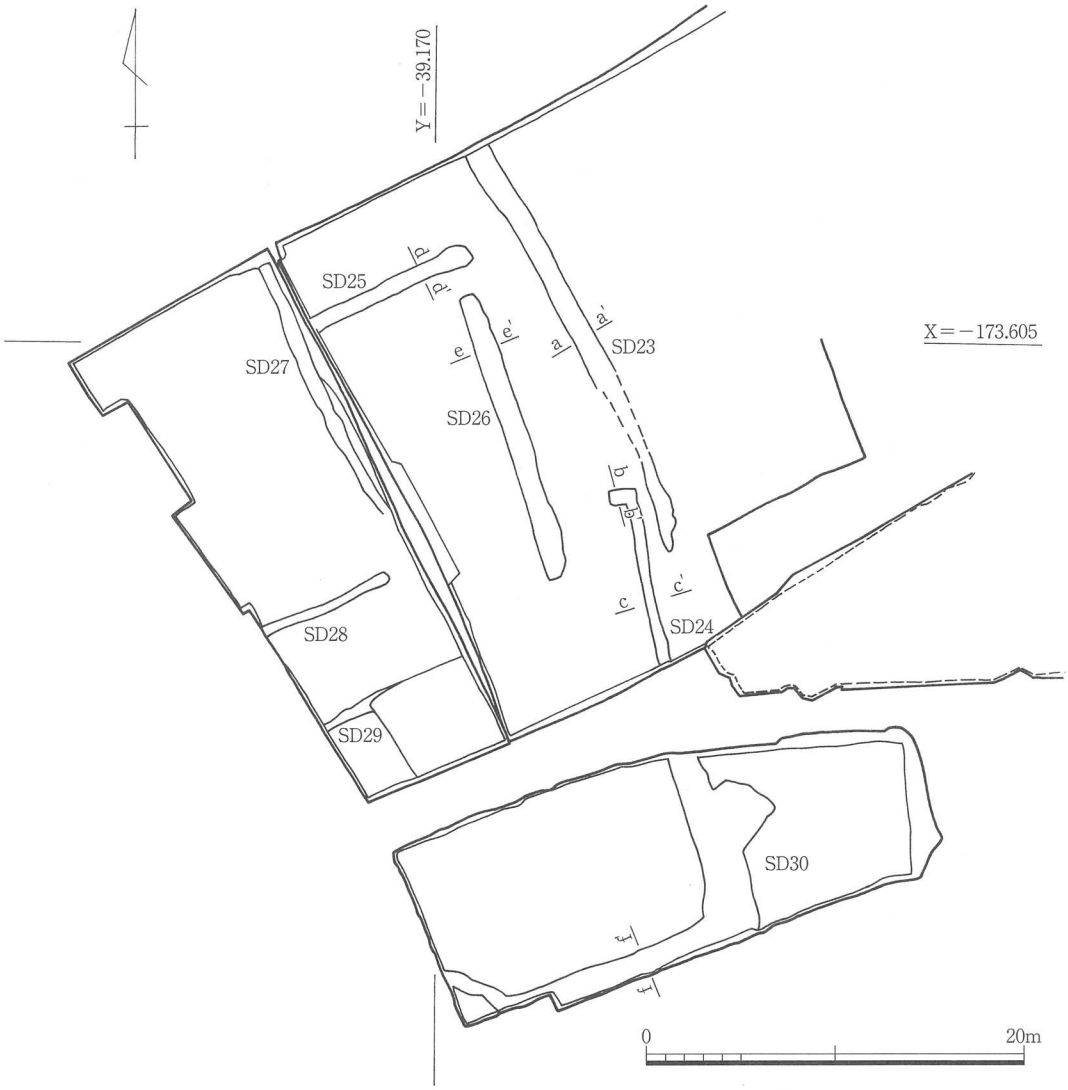
Ｇ－ｈ２区を中心として位置する石組暗渠である。ＳＤ28は、東から西に直線的にのびている。検出面の標高は西端部で123.18m、東端部で123.23mであった。規模は幅0.4～0.6m、深さ0.12m、長さ７mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。両側に20～30cm大の石を配置し、間に10cm大の石を充当していた。

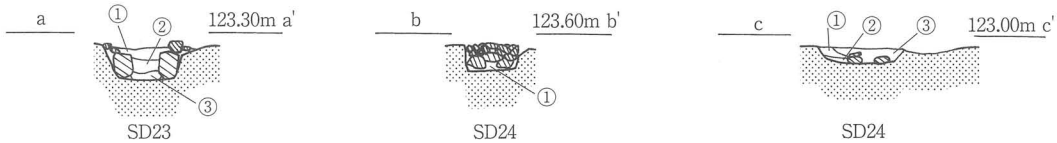
〔ＳＤ29〕（第262図、図版42・43）

Ｇ－ｈ３区を中心として位置する溝である。ＳＤ29は、東から西に直線的にのびている。検出面の標高は東端部で123.25m、西端部で123.29mであった。規模は幅0.5～0.55m、深さ0.05m、長さ４mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底部はほぼ平坦であった。

〔ＳＤ30〕（第262図）

Ｇ－ｆ４区を中心として位置する石組暗渠である。ＳＤ30は、北から西に直線的に逆Ｌ字状にのびている。検出面の標高は北東端部で123.63m、南西端部で123.56mであった。規模は幅２～0.7m、深さ0.65m、長さ26mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。部分的に、10cm大の円石を充当していた。





SD23

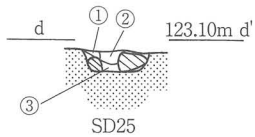
① 5Y 4/2 灰オリーブ色　微砂～粗砂
(5～10cm大の石をやや含む)
② 5Y 2/2 オリーブ黒色　微砂～粗砂
(炭化物をやや含む)
③ 5Y 3/2 オリーブ黒色　微砂～粗砂
(2～5cm大の礫をやや含む)

SD24

① 2.5Y 4/3 オリーブ褐色　シルト～微砂
(若干炭化物を含む)

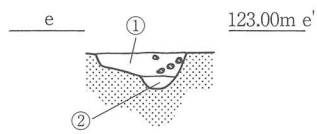
SD24

① 5Y 5/2 灰オリーブ色　シルト～微砂
② 5Y 4/3 暗オリーブ色　微砂
③ 5Y 4/1 灰色　粘土～シルト



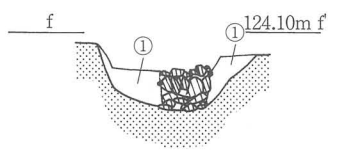
SD25

① 5Y 5/1 灰色　微砂（若干細砂を含む）
② 2.5YR 5/2 暗灰黄色　シルト～微砂
③ 10YR 4/1 褐灰色　シルト～微砂（炭化物を含む）



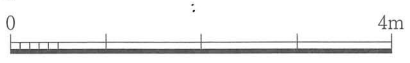
SD26

① 10YR 4/2 灰黄褐色　シルト～微砂
(2.5Y 6/8 明黄褐色　の微砂～シルトのブロックを含む)
② 7.5Y 5/1 灰色　微砂～シルト（若干礫を含む）



SD30

① 10YR 4/2 灰黄褐色　微砂～シルト（若干礫を含む）



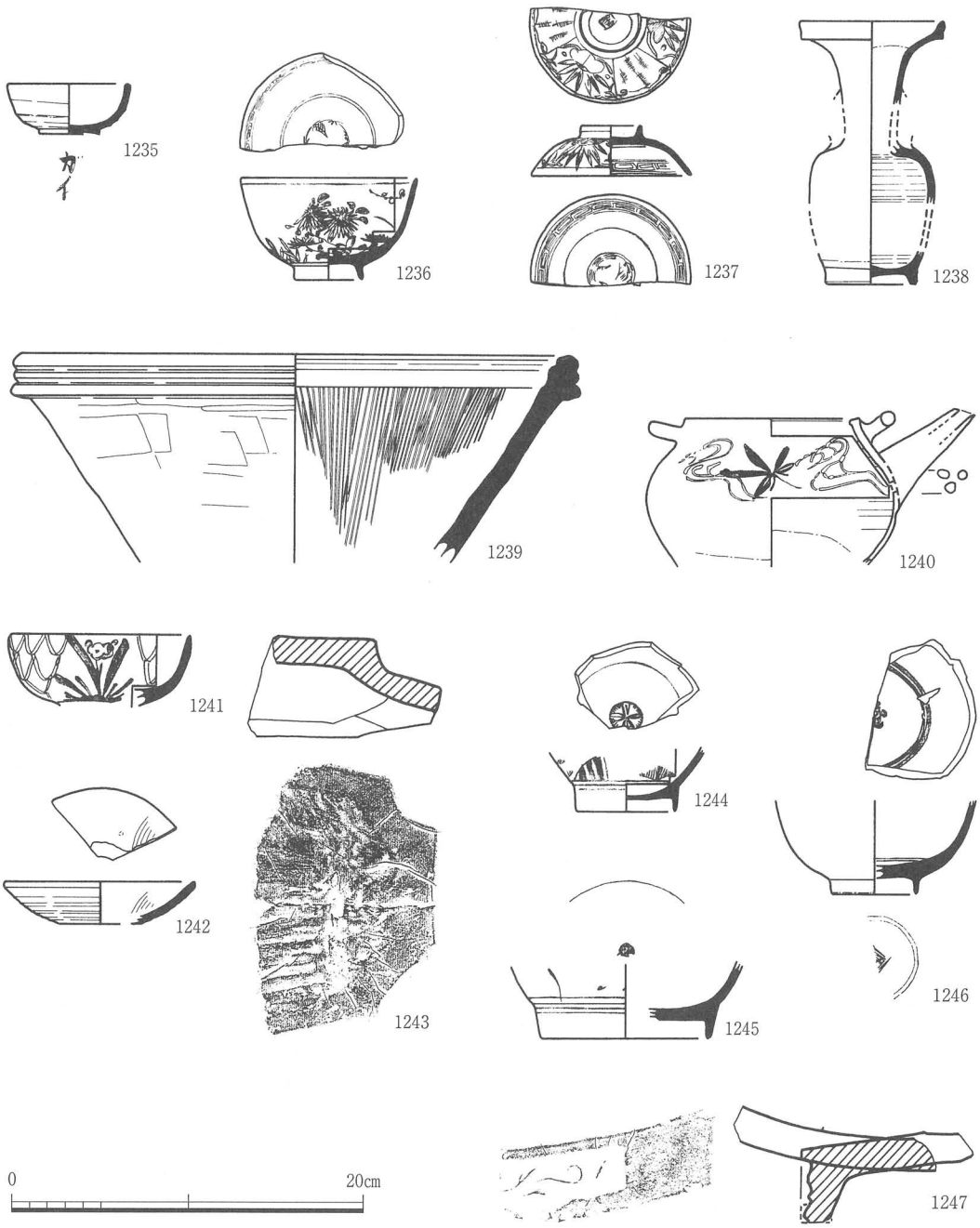
第262図　近世ＳＤ23～30平面図（1/400）・土層断面図（1/80）

〔ＳＤ31〕（第263・264図、図版44・95）

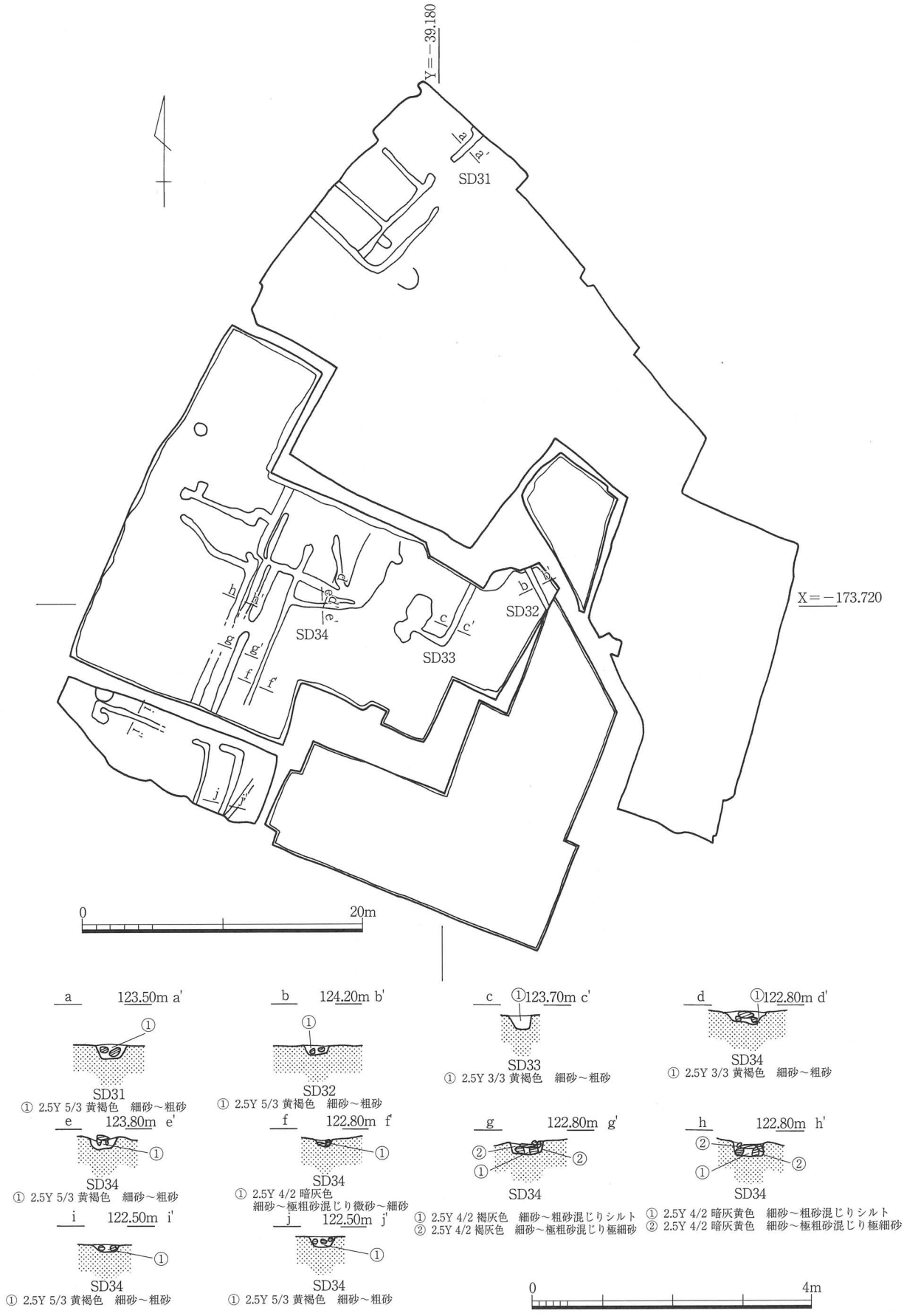
Ｇ－ｆ10区を中心として位置する石組暗渠である。ＳＤ31は、方形にめぐる。検出面の標高は、122.90～123.30ｍであった、規模は幅0.3～0.5ｍ、深さ0.2ｍであった。溝底部はほぼ平坦であった。10㎝大の石が充当されていた。

溝内からは、近世陶磁器と瓦が出土した。

1244は、産地不明磁器の広東碗である。1245は、肥前系陶磁器の広東碗である。1246は肥前系磁器の青磁染付の碗である。1247は軒平瓦である。



第263図　近世ＳＤ25・26・31出土遺物



第264図　近世ＳＤ31～34平面図（1/400）・土層断面図（1/80）

〔ＳＤ32〕（第264図）

Ｌ－ｈ２区を中心として位置する石組暗渠である。ＳＤ32は、北西から南東に直線的にのびている。検出面の標高は北西端部で123.56m、南東端部で123.61mであった。規模は幅0.4～0.3m、深さ0.1m、長さ2.9mにわたり検出した。溝の断面はＵ字形を呈している。溝底はほぼ平坦であった。両側に10cm大の円石が配置されて、その間にも５～８cm大の石が充当されていた。

〔ＳＤ33〕（第264図）

Ｌ－ｈ３区を中心として位置する石組暗渠である。溝は、北東から南西に逆Ｌ字形を呈している。検出面の標高は北東端部で123.52m、南西端部で123.45mであった。規模は幅0.3～0.7m、深さ0.29m、長さ5.5mにわたり検出した。溝底はほぼ平坦であった。部分的に、10cm大の円石が充当されていた。

〔ＳＤ34〕（第264図、図版44・45）

Ｌ－ｊ２区を中心として位置する石組暗渠群である。ＳＤ34は、数条のものが複雑に重なっているものである。検出面の標高は122.30～122.60mであった。規模は幅0.3～0.7m、深さは、概ね0.2mであった。溝底はほぼ平坦であった。両側に20～30cmの円石が充当されており、その間に10cmの円石が充当される構造をとるものが多かった。

（２）土坑

〔ＳＫ１〕（第265図）

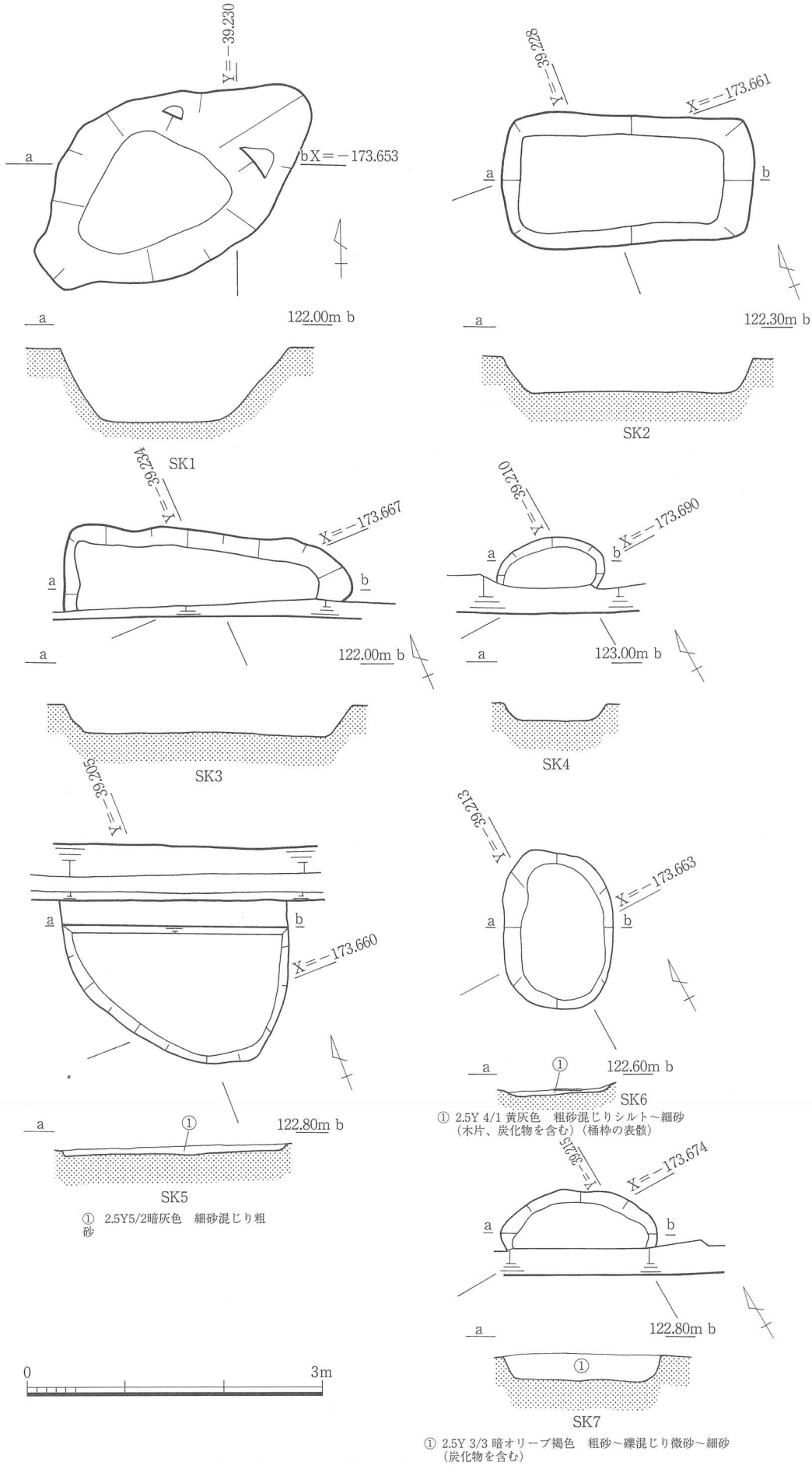
Ｈ－ｃ６区からＨ－ｄ６区にまたがって位置する土坑で、検出面の標高は121.74mである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は、3.13m、短軸は1.84m、深さは0.80mであった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ２〕（第265図）

Ｈ－ｃ７区に位置する土坑で、検出面の標高は122.00mである。平面形は方形を呈しており、長軸は2.54m、短軸は1.3m、深さは0.4mであった。埋土の特徴から、近世のものと考えられる。遺物は出土しなかった。

〔ＳＫ３〕（第265図）

Ｈ－ｄ７区に位置する土坑で、検出面の標高は121.60mである。南半分は、調査区外に位置している。平面形は隅丸方形を呈しており、長軸は2.9m、短軸は0.87m以上、深さは0.3mであった。聞き取りから、戦時中に防空壕としてつくられたものであることが判明している。



第265図　近世ＳＫ１～７平面図・土層断面図（1/60）

〔ＳＫ４〕（第265図）

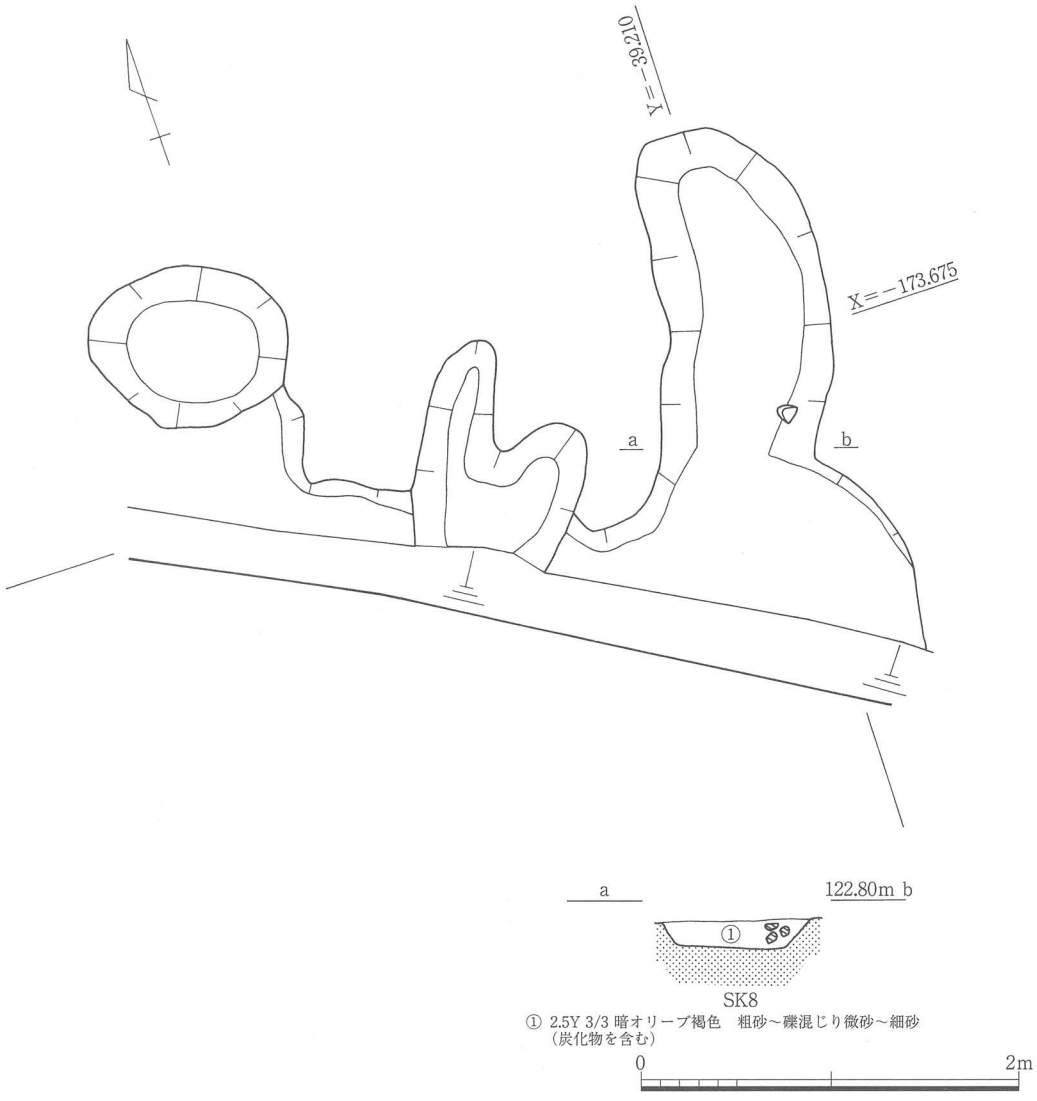
Ｈ－ｂ９区に位置する土坑で、検出面の標高は122.60ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.06ｍ、短軸は0.52ｍ以上、深さは0.17ｍであった。遺物は出土していないが埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ５〕（第265図）

Ｈ－ａ６区に位置する土坑で、検出面の標高は122.70ｍである。調査区外に北半部が位置している。平面形は楕円形を呈していると思われ、直径は2.2ｍ、深さは0.08ｍであった。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ６〕（第265図）

Ｈ－ｂ７区に位置する土坑で、検出面の標高は122.50ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は1.58ｍ、短軸は1.1ｍ、深さは0.05ｍであった。遺物は出土しなかったが、



第266図　近世ＳＫ８平面図・土層断面図（1/40）

埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＫ７〕（第265図）

Ｈ－ｂ８区に位置する土坑で、検出面の標高は122.60ｍである。南半部は調査区外にあるが、平面形は楕円形を呈していると思われる、長軸は1.56ｍ、深さは0.26ｍであった。埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ８〕（第266図）

Ｈ－ｂ８区に位置する土坑で、検出面の標高は122.67ｍである。平面形は不定形を呈している。埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ９〕（第267図）

Ｈ－ａ７区に位置する土坑で、検出面の標高は122.80ｍである。平面形は楕円形を呈しており、長軸は2.13ｍ、短軸は1.43ｍであり、深さは0.24ｍであった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ10〕（第267図）

Ｇ－ｊ８区に位置する土坑で、検出面の標高は122.80～123.00ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は1.33ｍ、深さは0.29ｍであった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ11〕（第267・268図、図版49・96）

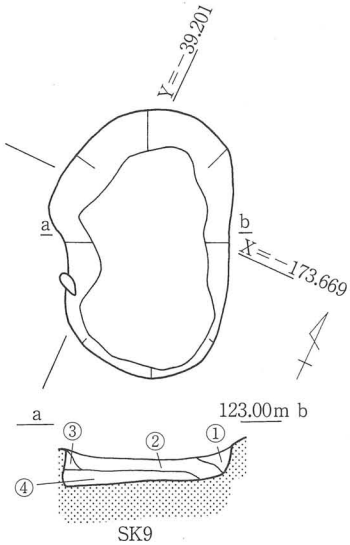
Ｈ－ｂ９区に位置する土坑で、検出面の標高は122.55ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は1.22ｍ、深さは0.54ｍであった。埋土は３層からなり、各層はほぼ水平に堆積していた。最下層には、直径10㎝～20㎝の円石が多く含まれていた。出土した遺物から近世のものと考えられる。

当該遺構からは、近世陶磁器と瓦、漆器が出土している。

1248は、丸瓦である。1249は、軒丸瓦である。1252は、肥前系陶器の大鉢である。1250は漆器の皿である。1251は産地不明磁器の小甕である。

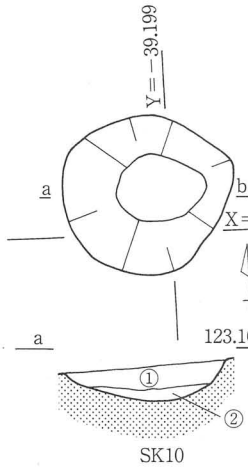
〔ＳＫ12〕（第267図）

Ｈ－ｂ９区に位置する土坑で、検出面の標高は122.55ｍである。調査区外に南半部が位置し、全掘していないが、平面形は長方形を呈しているようである。長辺は2.94ｍ、深さは0.5ｍであった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、近世のものと考えられる。



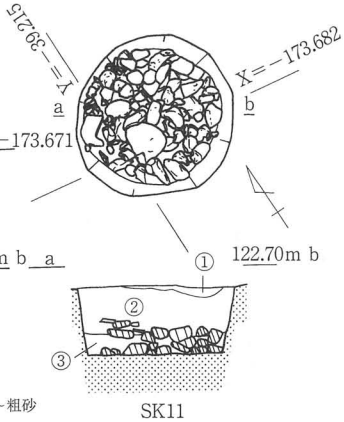
SK9

① 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色　粗砂～礫混じり微砂～細砂（炭化物を含む）
② 2.5Y 3/2 黒褐色　粗砂混じりシルト～粗砂（炭化物を含む）
③ 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂混じりシルト
④ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じりシルト～粗砂



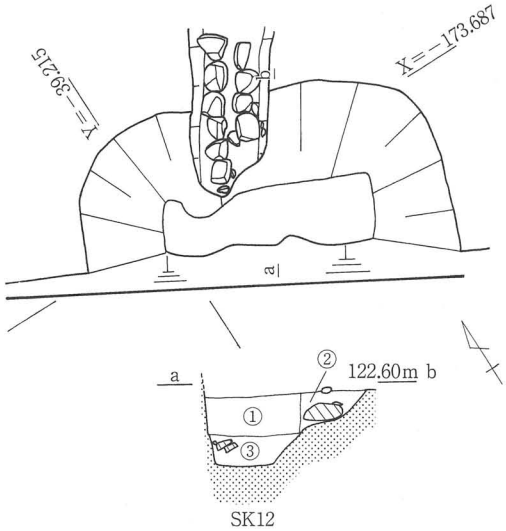
SK10

① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂混じり微砂～粗砂
（炭化物を含む）
② 2.5Y 4/2 暗灰黄色　微砂～粗砂



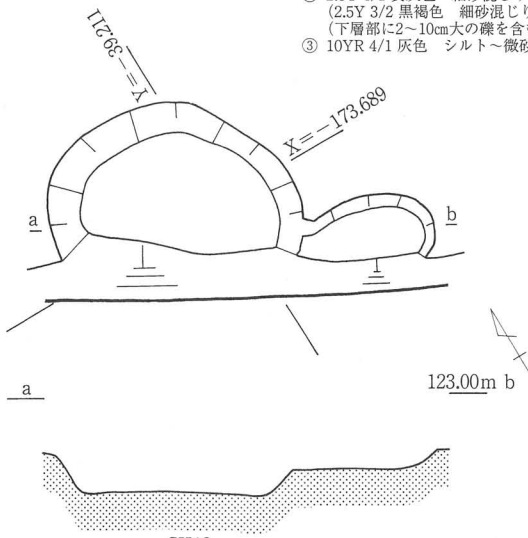
SK11

① 10YR 6/6 明黄褐色　粗砂混じり細砂
② 2.5Y 4/1 黄灰色　細砂混じりシルト
（2.5Y 3/2 黒褐色　細砂混じりシルトを含む）
（下層部に2～10cm大の礫を含む）
③ 10YR 4/1 灰色　シルト～微砂（若干炭化物を含む）

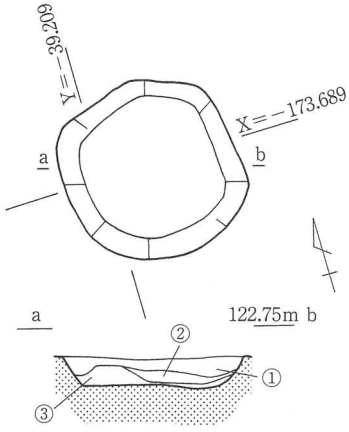


SK12

① 撹乱
② 5Y 4/1 灰色　細砂～粗砂
（2.5Y 4/3 オリーブ褐色　細砂～粗砂を30%含む）（礫を含む）
③ N 3/0 暗灰色　シルト～微砂

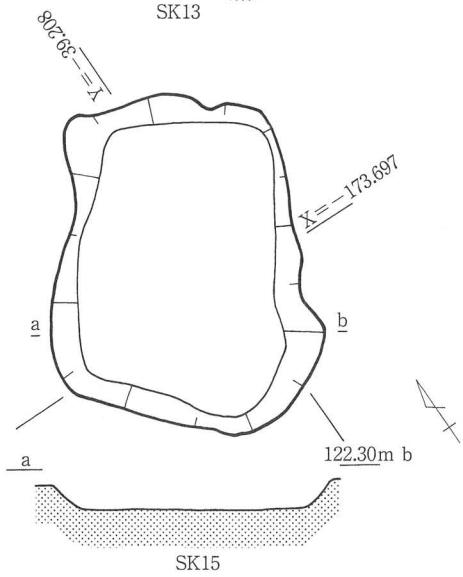


SK13



SK14

① 10YR 6/6 明黄褐色　粗砂混じり細砂
② 5Y 5/1 灰色　微砂混じりシルト（木片、炭化物を含む）
③ 7.5Y 7/2 灰白色　粗砂混じり細砂



SK15

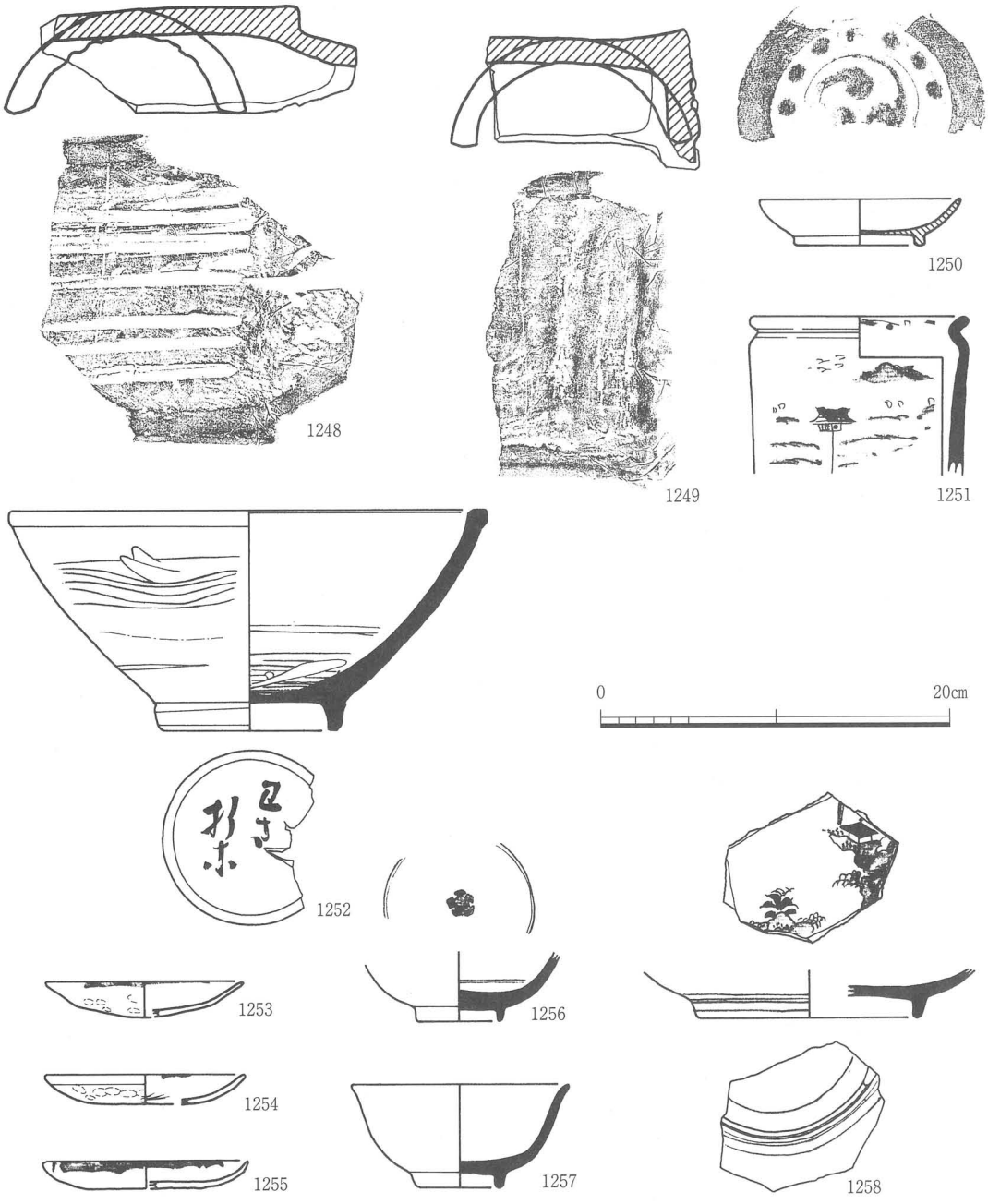
第267図　近世ＳＫ９～15平面図・土層断面図（1/60）

〔ＳＫ13〕（第267図）

Ｈ－ｂ９区に位置する土坑で、検出面の標高は122.80ｍである。平面形は楕円形を呈しており、直径は２ｍ、深さは0.34ｍであった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ14〕（第267・268図、図版96）

Ｈ－ａ９区に位置する土坑で、検出面の標高は122.80ｍである。平面形は方形を呈しており、一辺は1.4ｍ、深さは0.22ｍであった。出土した遺物や、埋土の特徴から、近世の



第268図　近世ＳＫ11・14出土遺物

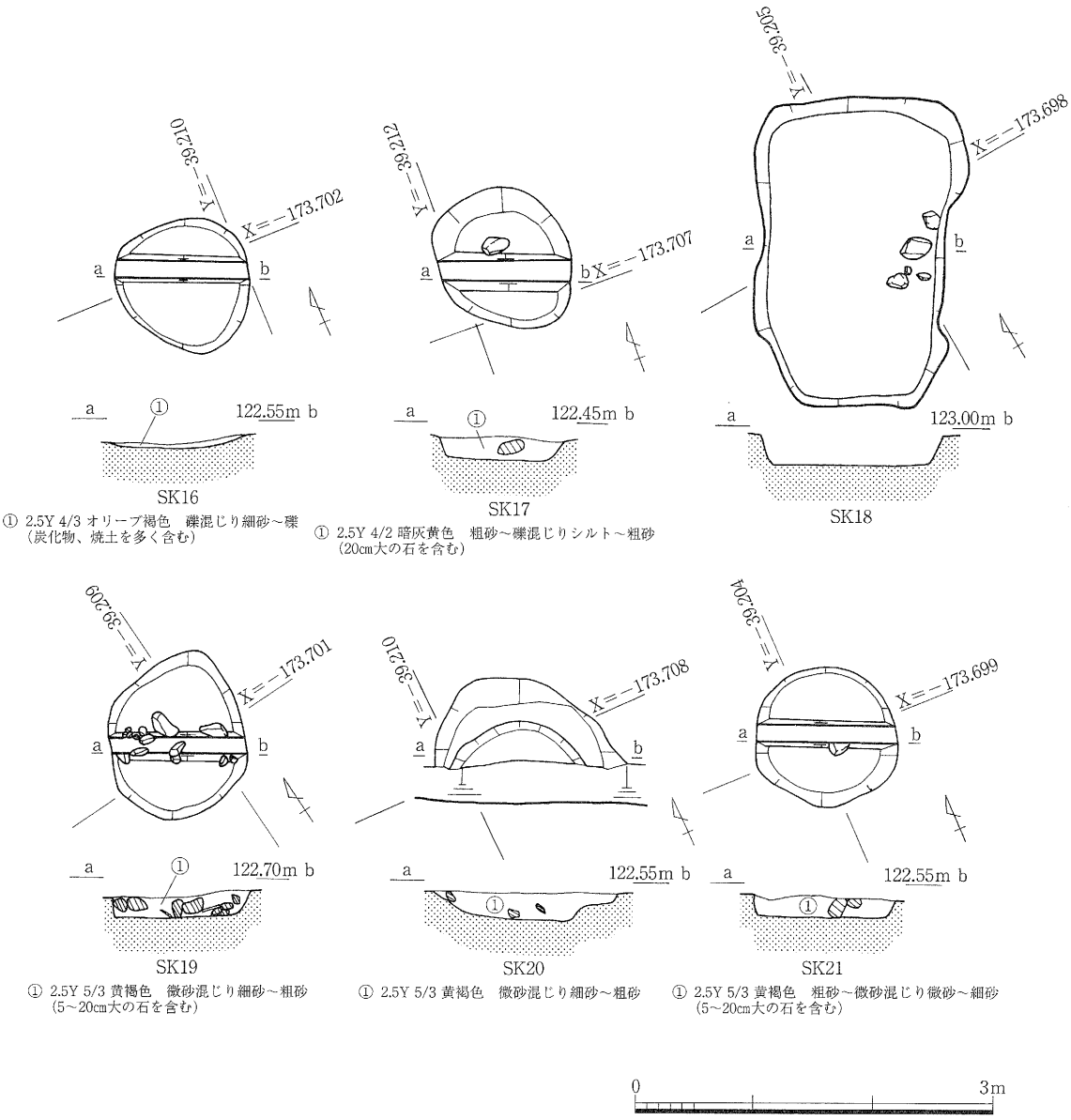
ものと考えられる。

当該遺構からは、灯明皿、近世陶磁器が出土している。

1253・1254・1255は灯明皿である。1256・1257は肥前系陶磁器の碗である。1258は肥前系陶磁器の大皿である。

〔ＳＫ15〕（第267図）

Ｈ－ａ10区に位置する土坑で、検出面の標高は約122.20ｍである。平面形は方形を呈しており、一辺は2.2ｍ、深さは0.25ｍであった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、近世のものと考えられる。



第269図　近世ＳＫ16～21平面図・土層断面図（1/60）

〔ＳＫ16〕（第269図）

Ｈ－ｂ１区に位置する土坑で、検出面の標高は122.30ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は1.13ｍ、深さは0.1ｍであった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ17〕（第269図）

Ｈ－ｂ１区に位置する土坑で、検出面の標高は122.30ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は1.3ｍ、深さは0.2ｍであった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ18〕（第269図）

Ｈ－ａ10区に位置する土坑で、検出面の標高は122.95ｍである。平面形は長方形を呈しており、長軸は2.6ｍ、短軸は、1.5ｍ、深さは0.3ｍであった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ19〕（第269図）

Ｍ－ａ１区に位置する土坑で、検出面の標高は122.55ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は1.45ｍ、深さは0.2ｍであった。埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

〔ＳＫ20〕（第269図）

Ｍ－ａ１区に位置する土坑で、検出面の標高は122.45ｍである。調査区外に南半部があるものと考えられ全掘していない。平面形は円形を呈しているものと考えられ、直径は1.4ｍ、深さは0.25ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＫ21〕（第269図）

Ｈ－ａ10区に位置する土坑で、検出面の標高は122.40ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は1.2ｍ、深さは0.16ｍであった。遺物は出土していない。埋土の特徴から、近世のものと考えられる。

（３）その他の遺構

井戸

〔ＳＥ１〕（第11図）

Ｈ－ｆ２区に位置する石組井戸で、検出面の標高は119.90ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は石組の内側で0.73ｍ、掘形で1.44ｍであった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＥ２〕（第11図）

Ｈ－ｄ３区に位置する石組井戸で、検出面の標高は120.60ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は石組の内側で0.84ｍ、掘形で1.27ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＥ３〕（第11図）

Ｈ－ｃ６区に位置する石組井戸で、検出面の標高は121.70ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は石組の内側で0.71ｍ、掘形で1.54ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＥ４〕（第11図）

Ｈ－ｃ７区からＨ－ｄ７区に位置する素掘の井戸で、検出面の標高は121.90ｍである。平面形は円形を呈しており、掘形の直径は1.4ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＥ５〕（第11図）

Ｈ－ｆ７区に位置する石組井戸で、検出面の標高は120.80ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は石組の内側で0.7ｍ、掘形で1.6ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＥ６〕（第11図）

Ｈ－ｅ７区に位置する石組井戸で、検出面の標高は121.10ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は石組の内側で0.6ｍ、掘形で1.55ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＥ７〕（第11図）

Ｇ－ｉ８区に位置する石組井戸で、検出面の標高は123.20ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は石組の内側で1.16ｍ、掘形で1.93ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＥ８〕（第11図）

Ｈ－ａ10区に位置する石組井戸で、検出面の標高は122.60ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は石組の内側で0.88ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＥ９〕（第11図）

Ｍ－ｂ１区に位置する石組井戸で、検出面の標高は122.50ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は石組の内側で1.06ｍ、掘形で2.53ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＥ10〕（第11図）

Ｇ－ｉ10区に位置する石組井戸で、検出面の標高は123.00ｍである。平面形は円形を呈している。西半分は、石組暗渠によって破壊されている。直径は石組の内側で0.96ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＥ11〕（第11図）

Ｇ－ｅ２区に位置する石組井戸で、検出面の標高は124.50ｍである。平面形は円形を呈しており、直径は石組の内側で0.64ｍ、掘形で1.96ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

桶埋置遺構

〔ＳＮ１〕（第270図）

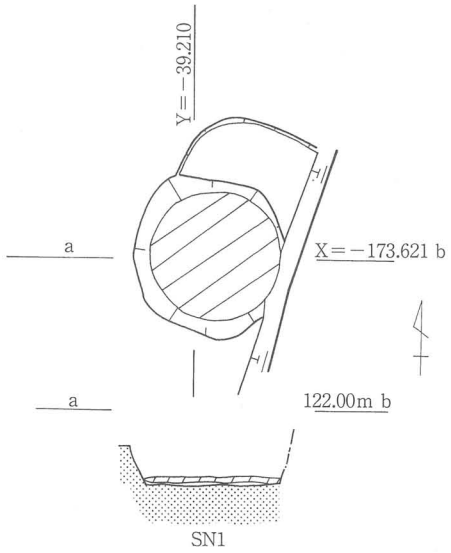
Ｈ－ａ３区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は121.75ｍである。ＳＤ８の東側に接している。掘形の平面形は円形を呈している。掘形の直径は1.31ｍ、深さ0.3ｍであった。底部で、桶枠の底板を検出した。桶枠底板の直径は、1.02ｍであった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

〔ＳＮ２〕（第270図）

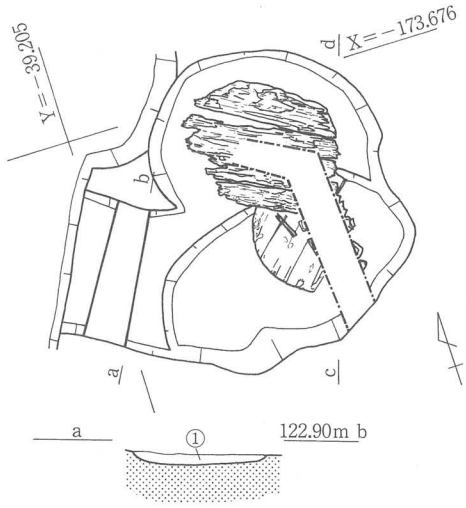
Ｈ－ａ８区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.80ｍである。掘形の平面形は不正形を呈している。掘形の規模は長軸2.59ｍ、短軸1.35ｍであり、深さ0.1～0.26ｍであった。２基の桶埋置遺構が重覆している。底部で、桶枠の底板と側板と思われる部材を検出した。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世もしくは、近現代のものと考えられる。

〔ＳＮ３〕（第270図、図版46）

Ｈ－ｂ８区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.50ｍである。掘形は、北半部が調査区外に位置しているが、平面形は楕円形を呈していると思われる。掘形の規模は、直径が1.71ｍ、深さ0.44ｍであった。底部で、桶枠の底板と側板と思われる部材を検出した。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

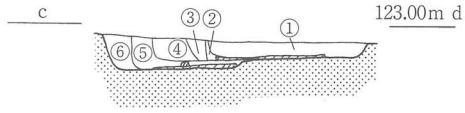


SN1

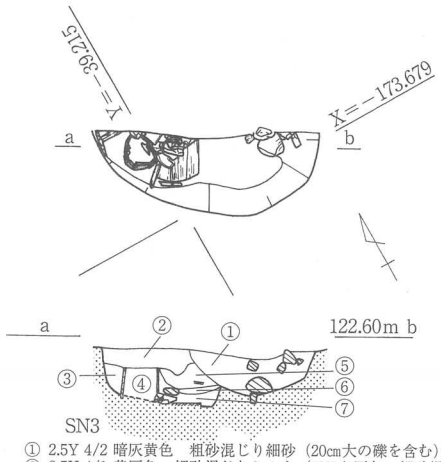


SN2

① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じり微砂～粗砂

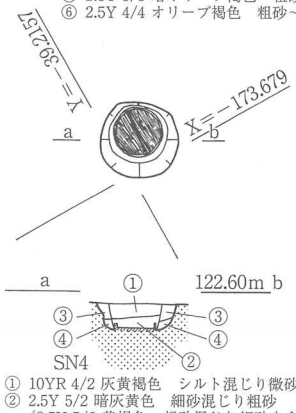


① 2.5Y 5/2 暗灰黄色　粗砂～礫混じり微砂～粗砂
② 2.5Y 3/2 黒褐色　シルト～微砂（木片を含む）
③ 2.5Y 6/3 にぶい黄色　粗砂～礫混じり微砂～粗砂
④ 2.5Y 4/2 暗灰黄色　粗砂混じりシルト～細砂
⑤ 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色　粗砂混じりシルト（木片を含む）
⑥ 2.5Y 4/4 オリーブ褐色　粗砂～礫混じり微砂



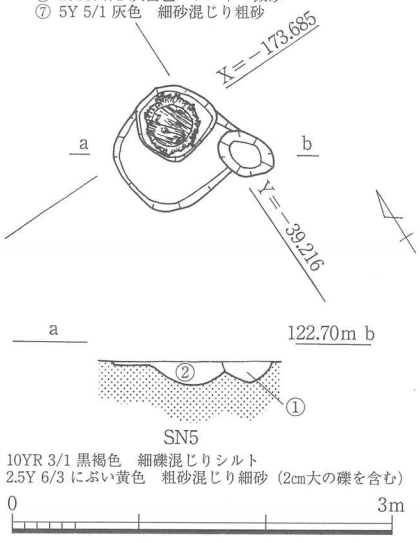
SN3

① 2.5Y 4/2 暗灰黄色　粗砂混じり細砂（20㎝大の礫を含む）
② 2.5Y 4/1 黄灰色　細砂混じりシルト（5Y5/1灰色　細砂混じり粘土を含む）
③ 7.5Y 4/1 灰色　細砂
④ 5Y 4/1 灰色　細砂混じり粘土
⑤ 5Y 5/1 灰色　粗砂混じり細砂（2.5Y4/2暗灰黄色　細砂混じり粘土を含む）
⑥ 10YR 7/2 灰白色　シルト～微砂
⑦ 5Y 5/1 灰色　細砂混じり粗砂



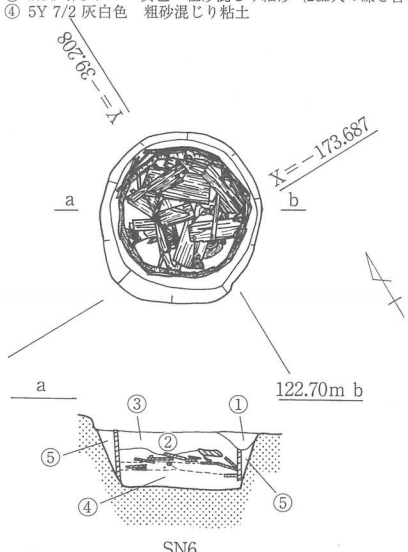
SN4

① 10YR 4/2 灰黄褐色　シルト混じり微砂～粘土
② 2.5Y 5/2 暗灰黄色　細砂混じり粗砂
（2.5Y 5/6 黄褐色　粗砂混じり細砂を含む）（5㎝大の礫を少量含む）
③ 2.5Y 6/3 にぶい黄色　粗砂混じり細砂（2㎝大の礫を含む）
④ 5Y 7/2 灰白色　粗砂混じり粘土



SN5

① 10YR 3/1 黒褐色　細礫混じりシルト
② 2.5Y 6/3 にぶい黄色　粗砂混じり細砂（2㎝大の礫を含む）



SN6

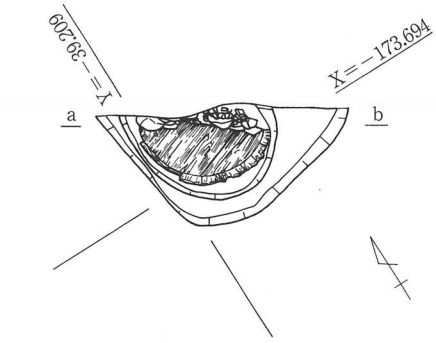
① 撹乱
② 7.5GY 4/1 暗緑灰色　細砂時混じりシルト
③ 5Y 3/1 オリーブ黒色　粗砂混じりシルト
④ 5Y 7/ 2灰白色　細砂（上層は腐食した木くず泥）
⑤ 7.5GY 4/1 暗緑灰色　細砂混じりシルト

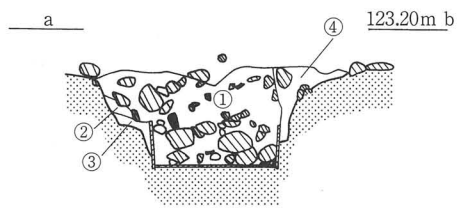
0　3m

第270図　近世ＳＮ１～６平面図・土層断面図（1/60）

〔ＳＮ４〕（第270図、図版46）

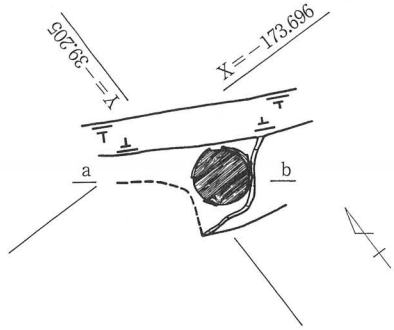
Ｈ－ｂ８区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.50ｍである。掘形の平面形は円形を呈している。掘形の直径は0.62ｍ、深さ0.21ｍであった。底部で、桶枠の底板と側板の一部を検出した。桶枠底板の直径は、0.38ｍであった。遺物は出土しなかったが、埋

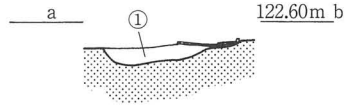




SN7

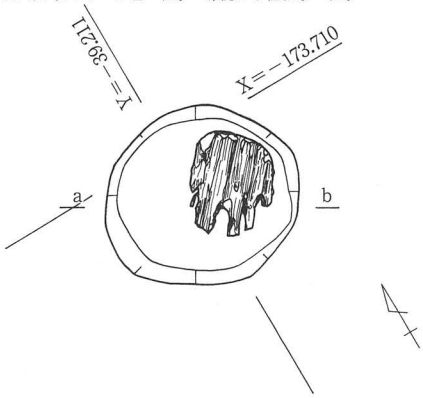
① 5Y 3/1 オリーブ黒色　細砂混じりシルト～微砂（5～20㎝大の石を多く含む）
② 5Y 3/1 オリーブ黒色　粗砂混じりシルト
③ 5Y 7/2 灰白色　細砂（上層は腐食した木くず泥）
④ 5Y 6/2 灰オリーブ色　粗砂～礫混じり極細砂～細砂

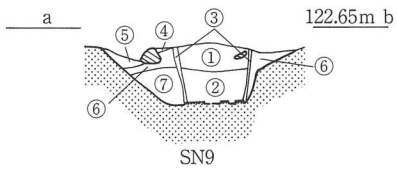




SN8

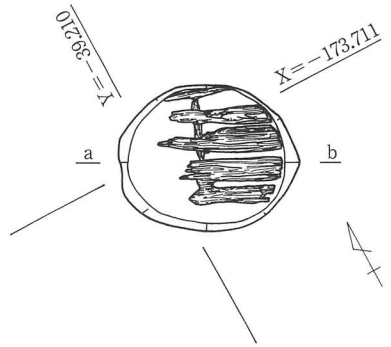
① 5Y 4/2 灰オリーブ色　微砂～礫

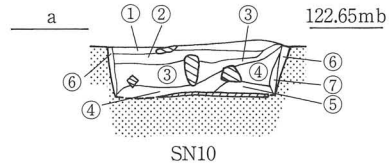




SN9

① 5Y 5/2 灰オリーブ色　微砂混じりシルト～粗砂（土器片、炭化物を含む）
② 5Y 3/2 オリーブ黒色　粗砂～微砂混じり細砂（炭化物を含む）
③ 5Y 3/2 オリーブ黒色　極粗砂混じり微砂～粗砂
④ 5Y 8/4 淡黄色　微砂混じりシルト～細砂
⑤ 5Y 5/2 灰オリーブ色　細砂混じりシルト～細砂
⑥ 5Y 5/2 灰オリーブ色　粗砂～礫混じり微砂～粗砂
⑦ 5Y 5/2 灰オリーブ色　粗砂～礫混じり微砂～粗砂
（5Y 6/3 オリーブ黒色　シルト～微砂のブロックを含む）





SN10

① 5Y 5/2 灰オリーブ色　粗砂～礫混じり微砂～細砂（炭化物を含む）
② 5Y 7/3 浅黄色　微砂～礫混じり細砂～粗砂
③ 5Y 4/2 灰オリーブ色　粗砂～礫混じり微砂～粗砂（10～20㎝大の石を含む）
④ 5Y 6/2 灰オリーブ色　粗砂～礫混じり微砂～粗砂
⑤ 5Y 8/3 浅黄色　粗砂混じり細砂～粗砂
⑥ 5Y 7/4 淡黄色　粗砂～細礫混じり極細砂～粗砂
⑦ 5Y 6/2 灰オリーブ色　粗砂～礫混じり微砂～細砂

第271図　近世ＳＮ７～10平面図・土層断面図（1/60）

土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

〔ＳＮ５〕（第270図）

Ｈ－ｂ９区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.55ｍである。掘形の平面形は隅丸方形を呈している。掘形の規模は、長軸が、0.9ｍ、短軸が、0.85ｍであり、深さは0.2ｍであった。底部で、桶枠の底板と側板の一部を検出した。桶枠底板の直径は、0.46ｍであった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

〔ＳＮ６〕（第270・272図、図版46・97）

Ｈ－ａ９区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.50～122.60ｍである。掘形の平面形は円形を呈している。掘形の直径は1.36ｍ、深さ0.45ｍであった。底部で、桶枠の底板と側板の残骸と思われる部材を検出した。底板の直径は、1.0ｍであった。出土した遺物と、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

ＳＮ６からは、近世陶磁器と漆器が出土している。

1259は、灯明皿である。1260は、漆器の碗である。1261・1262は、肥前系磁器である。

〔ＳＮ７〕（第271・272図、図版97）

Ｈ－ａ10区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.90ｍである。北半部は調査区外に位置している。掘形の平面形は円形を呈している。掘形の直径は2.0ｍ、深さは0.8ｍであった。底部で、桶枠の底板と側板の一部を検出した。桶枠底板の直径は、1.0ｍであった。出土した遺物と、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

ＳＮ７からは近世陶磁器が出土している。

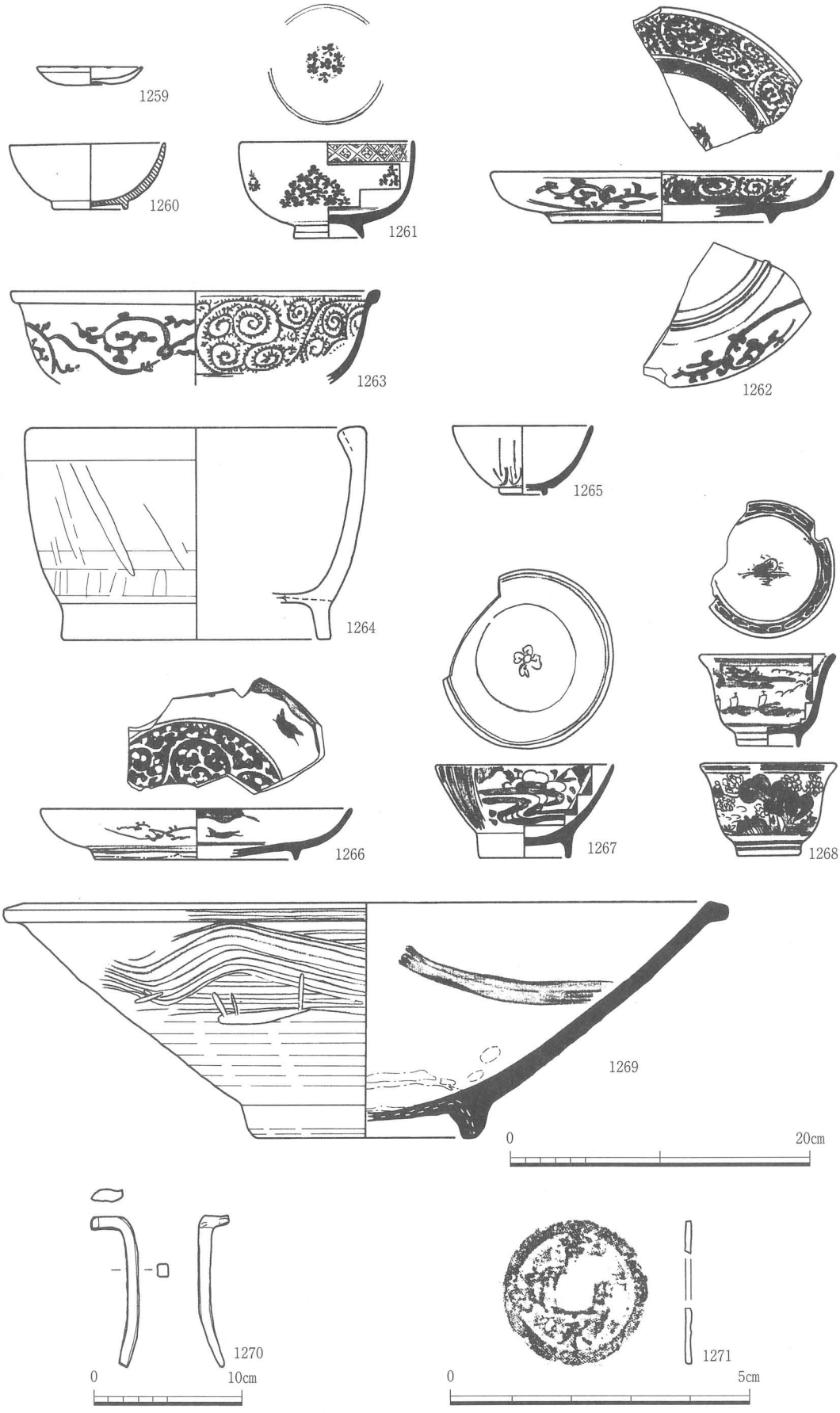
1263は肥前系磁器の大鉢である。1264は、中甕である。1265は関西系陶磁器の小杉碗である。

〔ＳＮ８〕（第271図、図版47）

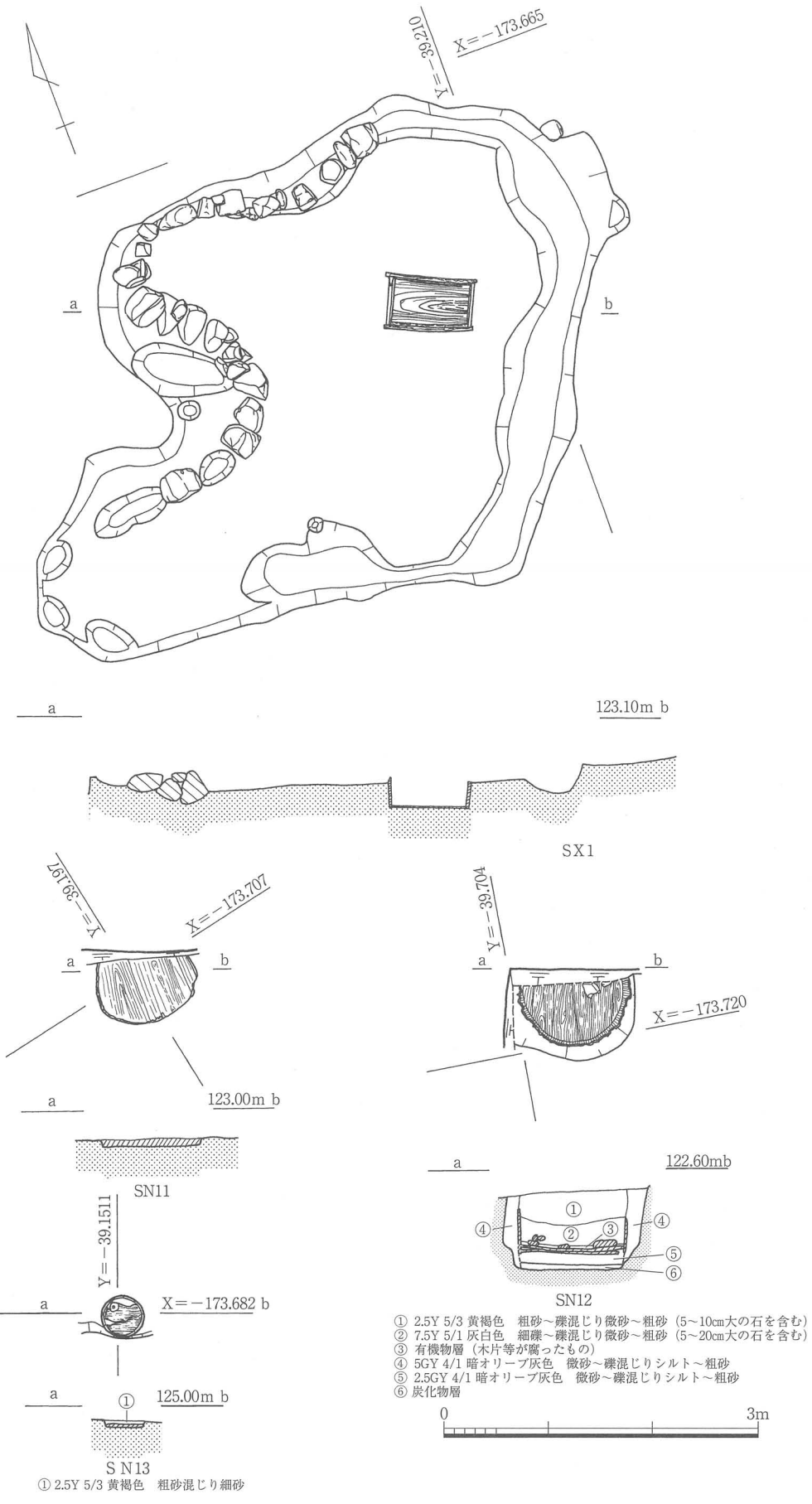
Ｈ－ａ10区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.45ｍである。掘形は、北部が調査区外に位置しており、南部は攪乱によって破壊されているため、形態は不明である。底部で、桶枠の底板を検出した。桶枠底板の直径は、0.45ｍであった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

〔ＳＮ９〕（第271図、図版47・96・97）

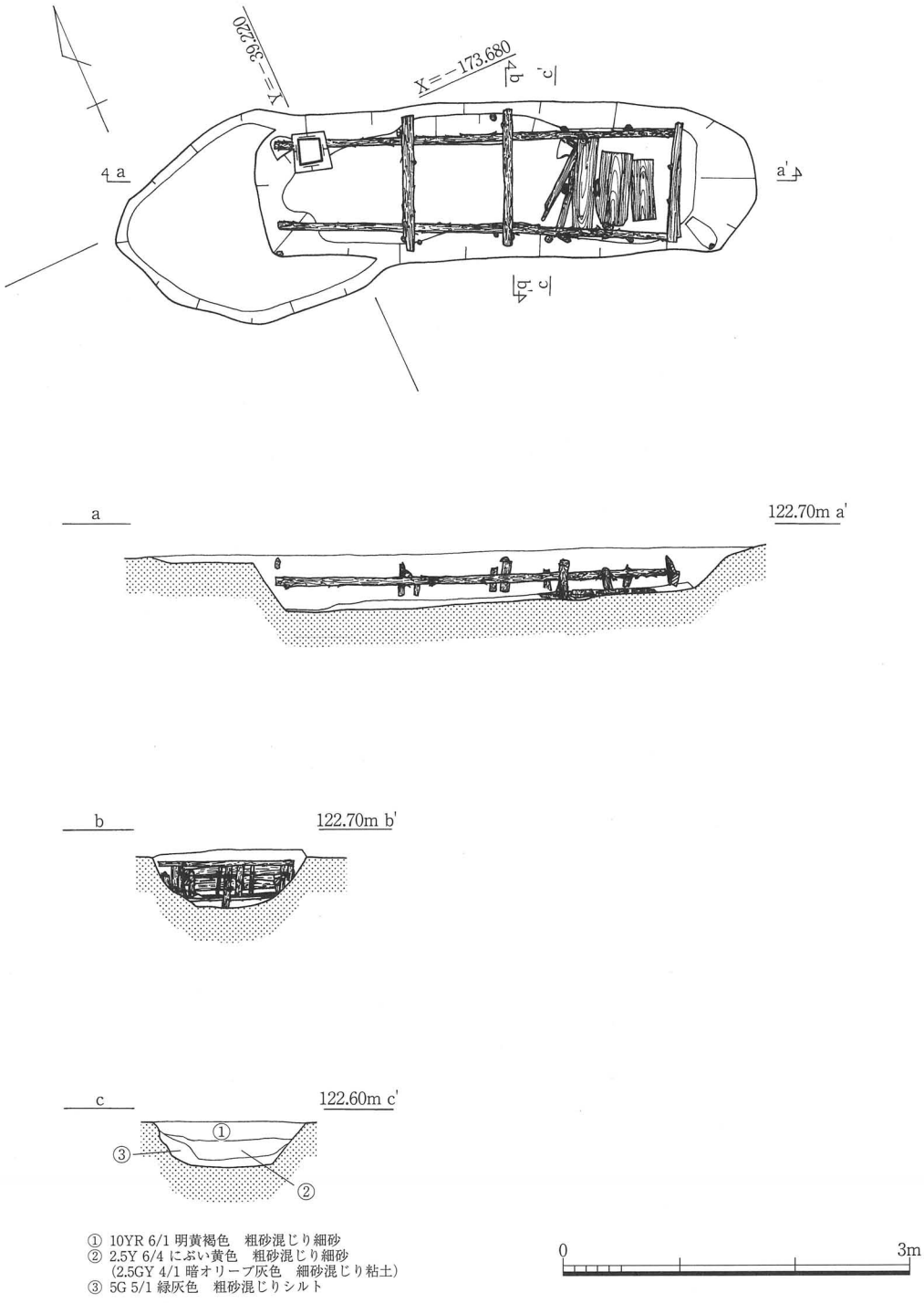
Ｍ－ｂ２区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.50ｍである。掘形の平面形は円形を呈している。掘形の直径は1.59ｍ、深さ0.48ｍであった。底部で、桶枠の底板の一



第272図　近世ＳＮ６・７・９・12出土遺物



第273図　ＳＮ11～13・ＳＸ１平面図・土層断面図（1/60）



第274図　近世ＳＸ２平面図・土層断面図（1/60）

部と考えられる部材を検出した。出土した遺物と、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

ＳＮ９からは近世陶磁器が出土している。

1266は、肥前系磁器の皿である。1267は肥前系磁器の広東碗である。1268は肥前系磁器

の小碗である。1269は肥前系陶器の大鉢である。

〔ＳＮ10〕（第271図、図版47）

Ｍ－ａ２区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.50ｍである。掘形の平面形は楕円形を呈している。掘形の規模は、長軸1.42ｍ、短軸1.14ｍ、深さ0.44ｍであった。底部で、桶枠の底板の一部と考えられる部材を検出した。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

〔ＳＮ11〕（第273図、図版48）

Ｌ－ｊ１区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.76ｍである。掘形の平面形は楕円形を呈している。掘形の規模は、直径1.11ｍ、深さは0.05ｍであった。底部で、桶枠の底板を検出した。桶板底板の直径は、0.95ｍであった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

〔ＳＮ12〕（第272・273図、図版48・96）

Ｍ－ａ３区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は122.50ｍである。北半部は、調査区外にあるが、掘形の平面形は円形を呈していると考えられる。掘形の直径は1.4ｍ、深さ0.73ｍであった。底部で、桶枠の底板及び側板の一部を検出した。桶枠底板の直径は、0.97ｍであった。埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

遺物は寛永通宝（1271）・釘（1270）が出土している。

〔ＳＮ13〕（第273図）

Ｇ－ｆ９区に位置する桶埋置遺構で、検出面の標高は125.30ｍである。掘形の平面形は円形を呈している。掘形の直径は0.41ｍ、深さ0.07ｍであった。底部で、桶枠の底板を検出した。底板の直径は、0.4ｍであった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

不明遺構

〔ＳＸ１〕（第273図、図版49）

Ｈ－ｂ７区からＨ－ａ７区に位置する。検出面の標高は122.50ｍである。平面形は不正形を呈している。規模は長軸が7.1ｍ、短軸が4.76ｍ、深さ0.29ｍであった。溝底部の東側縁には、石組があり、石材の据付穴もみられた。底部西縁には、石組がみられなかったが、西縁は溝状をなしており、幅0.65ｍで巡っていた。この溝は、石材の据付穴と考えられ、西側にも本来石垣が巡っていたものと思われる。遺物は出土しなかった。ＳＸ１が検出された場所は、江戸から明治にかけて「形屋」の屋号を持つ旅籠の庭園部分にあたるた

め、ＳＸ１は、庭園の池状施設であった可能性がある。

〔ＳＸ２〕（第274図）

Ｈ－ｂ９区を中心に位置する長方形の遺構である。検出面の標高は約122.50ｍである。掘形の平面形は楕円形を呈している。掘形の長軸は4.38ｍ、短軸は1.38ｍ、深さは0.51ｍであった。底部からは、丸太材で組まれた骨組みと、底板が出土した。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世もしくは、近代のものと考えられる。

第５節　遺物包含層

本節では、遺物包含層についての記述を行う。遺物包含層は、場所によって形成された年代が異なっていた。特に、段丘崖２を境として、これよりも東側と西側では顕著な違いが認められ、また局所的に堆積状況が異なる箇所も認められた。そこで、第275図に示したように４つの地区に分けて遺物包含層出土遺物の報告を行う。

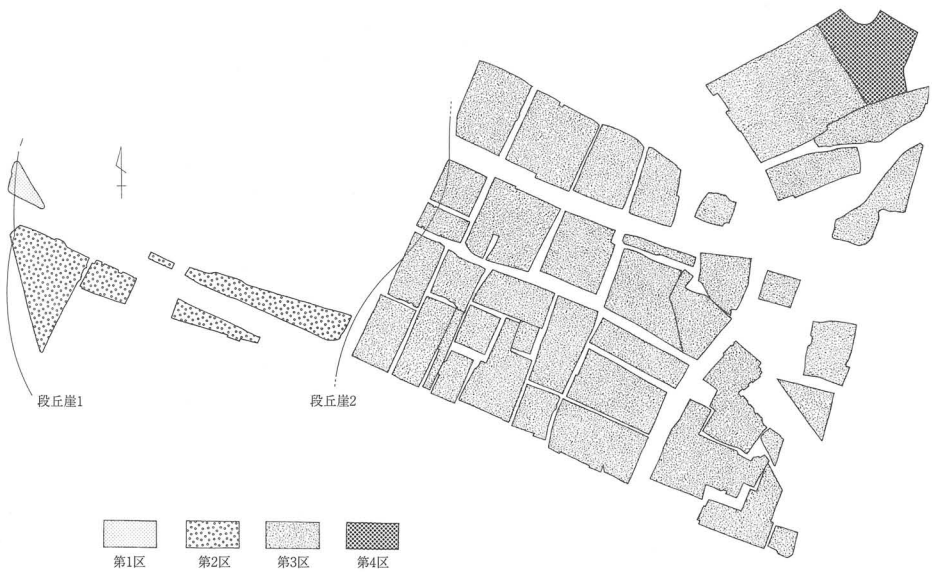
まず、段丘崖２西側は、弥生時代に形成された遺物包含層が広がっていたが、局所的な堆積状況の違いが認められた。そこで、段丘崖２西側の遺物包含層出土遺物については、第１区と第２区に地区を２分し報告を行う。

次に、段丘崖２東側は、弥生時代の遺物包含層がいったん削平され、新たに近世の遺物包含層が形成されていた。この層に弥生時代の遺物が近世の遺物に混じる形で包含されていた。ただし、局所的に、庄内期の遺物包含層が良好に遺存していたので、段丘崖２東側は、近世の遺物包含層が形成されている第３区と、庄内期の遺物包含層が遺存している第４区に２分して報告を行う。

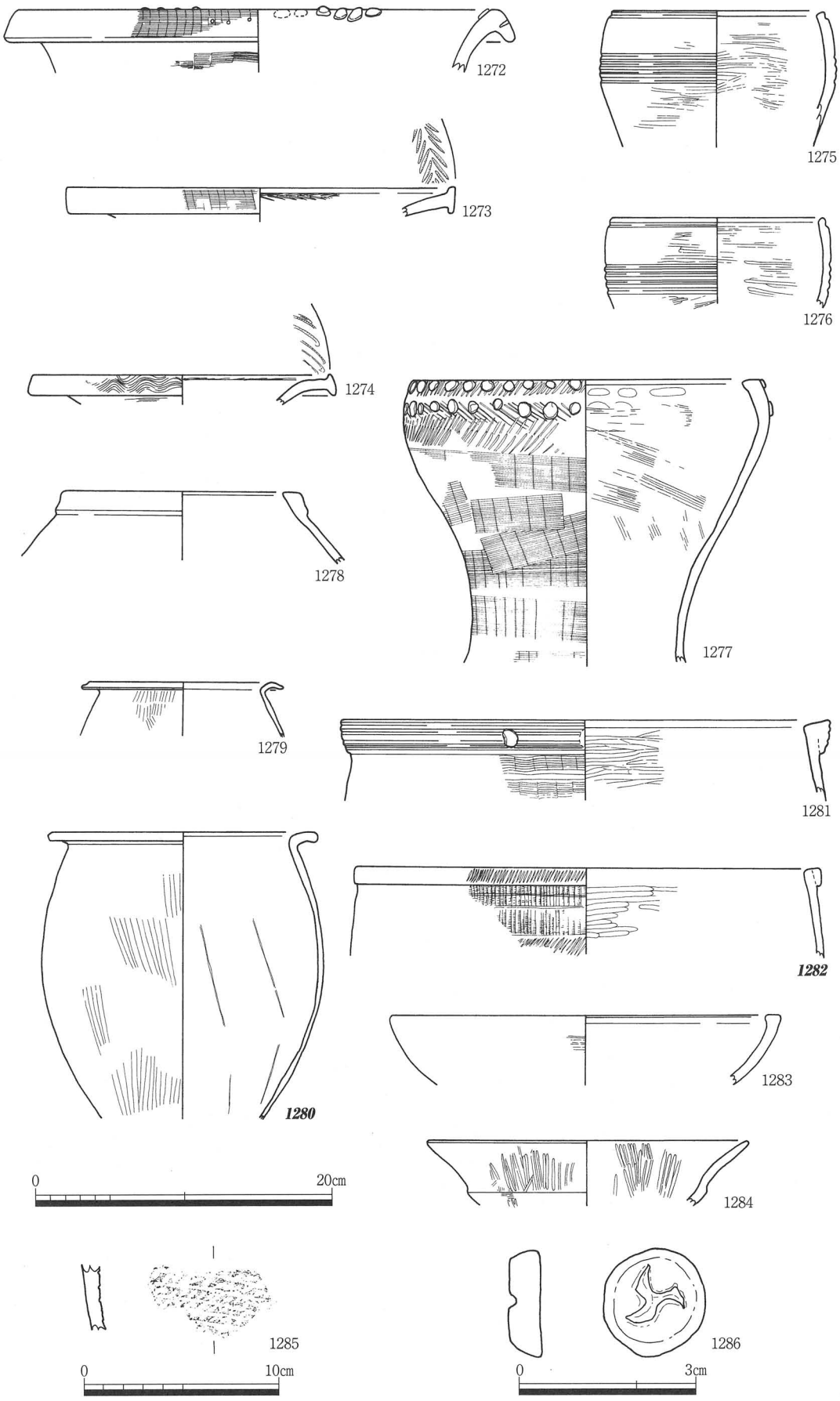
以上、述べてきたように、遺物包含層出土の遺物については、合計４箇所に分けて報告を行う。

（１）第１区遺物包含層出土の遺物

ここでは、段丘崖２西側に広がる遺物包含層のうち、第１区に形成された遺物包含層に



第275図　包含層遺物出土位置図



第276図　包含層出土土器①

含まれていた遺物について記述を行う。この範囲では、段丘崖１の肩部を検出しており、段丘崖１に堆積した遺物包含層より多量の遺物を検出している。出土した遺物にも年代的幅があり、層序ごとに遺物を取り上げた結果、異なる２つの時期の遺物包含層によって堆積土が構成されていることが分かった。ここではこれらを上層（第14図の③④層）、下層（⑤層）とし、遺物の記述を行う。

上層出土遺物（第276・277図）

各時代にわたって多量の遺物が出土しているが、そのうち特徴的なものを中心に掲載した。

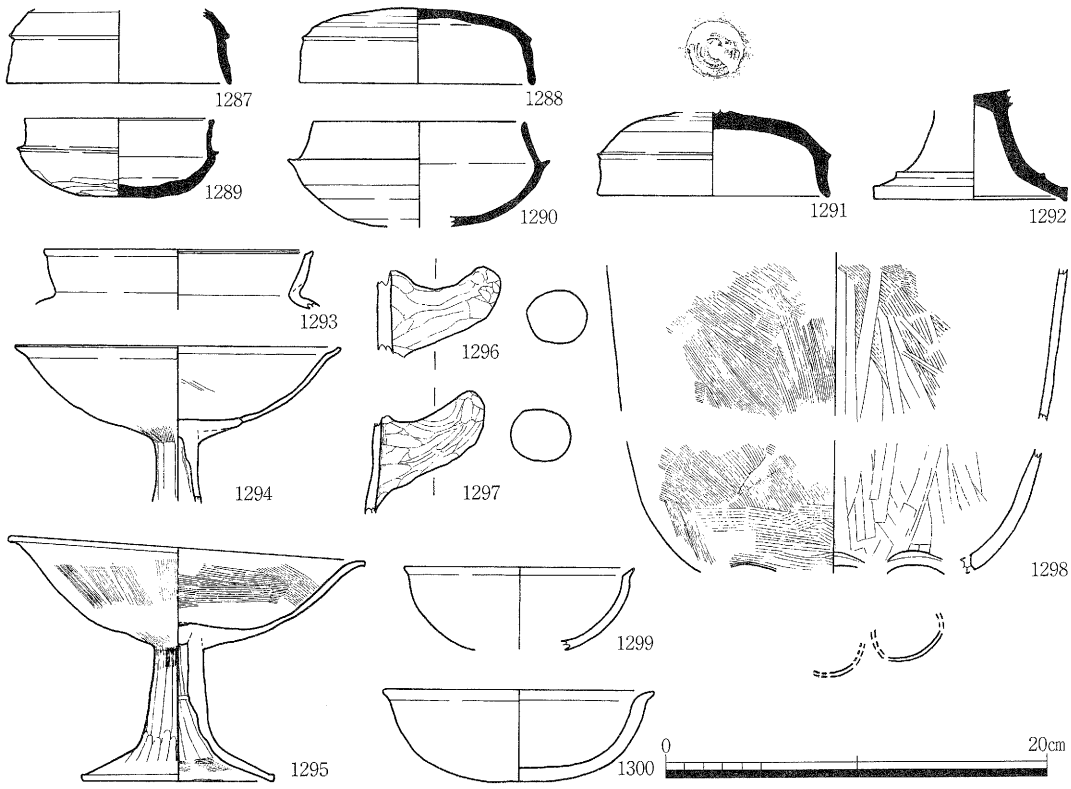
1272は広口壺Ａである。口縁端部には外面に簾状文と刺突文を施文し、頸部には簾状文を施文している。口縁部内面には円形浮文を貼り付ける。1273・1274は広口壺Ｅである。1273は口縁端部外面に簾状文、内面には綾杉文状に列点文を施文している。1274は口縁端部外面に波状文、口縁部内面にはヘラ状工具による押圧を施している。1275～1277は細頸壺である。1275・1276は小型のもので、外面に凹線文を施文する。1277は大型のもので、口縁部にヘラ状工具による刻目を綾杉文状に施した後、円形浮文を貼り付けている。頸部には間隔の広い簾状文を施文する。1278は無頸壺である。口縁端部が低く段状に肥厚する。無文である。1279・1280は甕Ａである。1279は口縁部が外反し、体部外面には粗いハケを施している。1280は逆Ｌ字状に屈曲する頸部を持つ。外面にはミガキを施している。1281・1282は大型の鉢Ｂである。両者とも口縁端部が段状に肥厚する。1281は端部に凹線文を施文後、円形浮文を貼り付ける。1282は口縁端部にヘラ状工具による刻目を施している。1283は高坏Ａである。椀状の坏部を持つ。以上の土器はⅢ～Ⅳ様式に位置づけられる。

1284は屈曲する坏部を持つ高坏である。内外面に縦方向のミガキを施す。Ⅴ様式に位置づけられる。

1285は広口壺の頸部である。平行にヘラ描き沈線を施し、沈線間に刻目を施している。Ⅰ様式に位置づけられる。

1287・1288は須恵器蓋坏の蓋である。1289・1290は須恵器蓋坏の身である。1289は直径が小さく、全体的にシャープなつくりである。立ち上がりは直立しており、口縁端部には面を持つ。底部には手持ちヘラケズリを施す。1291は有蓋高坏の蓋である。器壁はやや厚く、口縁端部は丸くおさめている。つまみの欠損部では、つまみを貼り付ける際に施した同心円状の刻目が観察できる。1292は須恵器高坏の脚部である。以上の須恵器は、1292がＴＫ216～208型式、1287～1289・1291がＴＫ208～23型式、1290がＴＫ10型式に位置づけられる。

1293は土師器の甕である。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁端部は内傾する面を持ち、外側に肥厚している。口縁部が内湾しない点、口縁端部の内側への肥厚がみられない点から須恵器出現以後のものであると考えられる。1294・1295は土師器



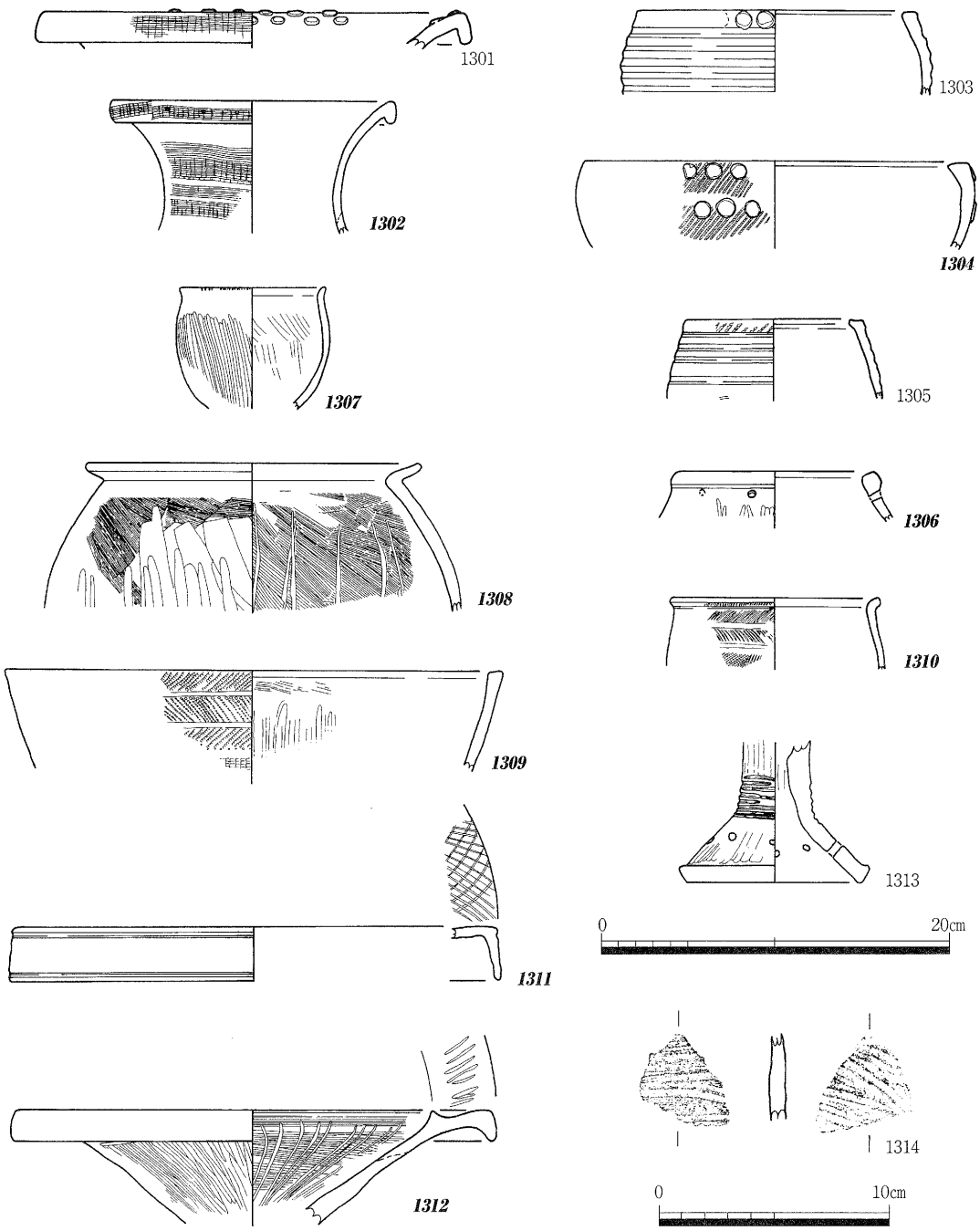
第277図　包含層出土土器②

の高坏である。1294は坏部が底部から緩やかに内湾しながら開き、口縁端部が外反する。脚柱部外面にはハケを施した後、面取り状に幅の広いミガキを加えている。脚柱部内面には絞り目が残る。坏部との接合法は円盤充填法と考えられるが、坏部底部への脚部内面からの刺突は観察できない。布留式期Ⅳに位置づけられる。1295は前者に比べて坏部がやや直線的に開き、口縁端部が稜を持って屈曲する点で、後出の様相を持つ。脚部内面には絞り目が残る。布留式期Ⅳに位置づけられる。1298は甑である。体部から底部には、丸みを持って接続している。外面にはやや細かい縦方向のハケを施した後、底部付近には、先行するハケに比べて、粗い横方向のハケを施している。内面には縦方向のハケの後、下半部のみケズリを施している。底部には、残存部から推測すると、円形の蒸気孔が少なくとも７つ穿孔されていたと考えられる。1296・1297は甑の把手である。両者とも、断面はほぼ円形を呈する。挿入法で甑本体に接合されていた。1296は内面にハケを、1297はケズリを施している。1299・1300 は土師器の坏である。両者とも口縁部を短く外折している。後者の方が器壁がやや厚い。

これらの須恵器及び土師器は、４世紀末から６世紀の所産である。

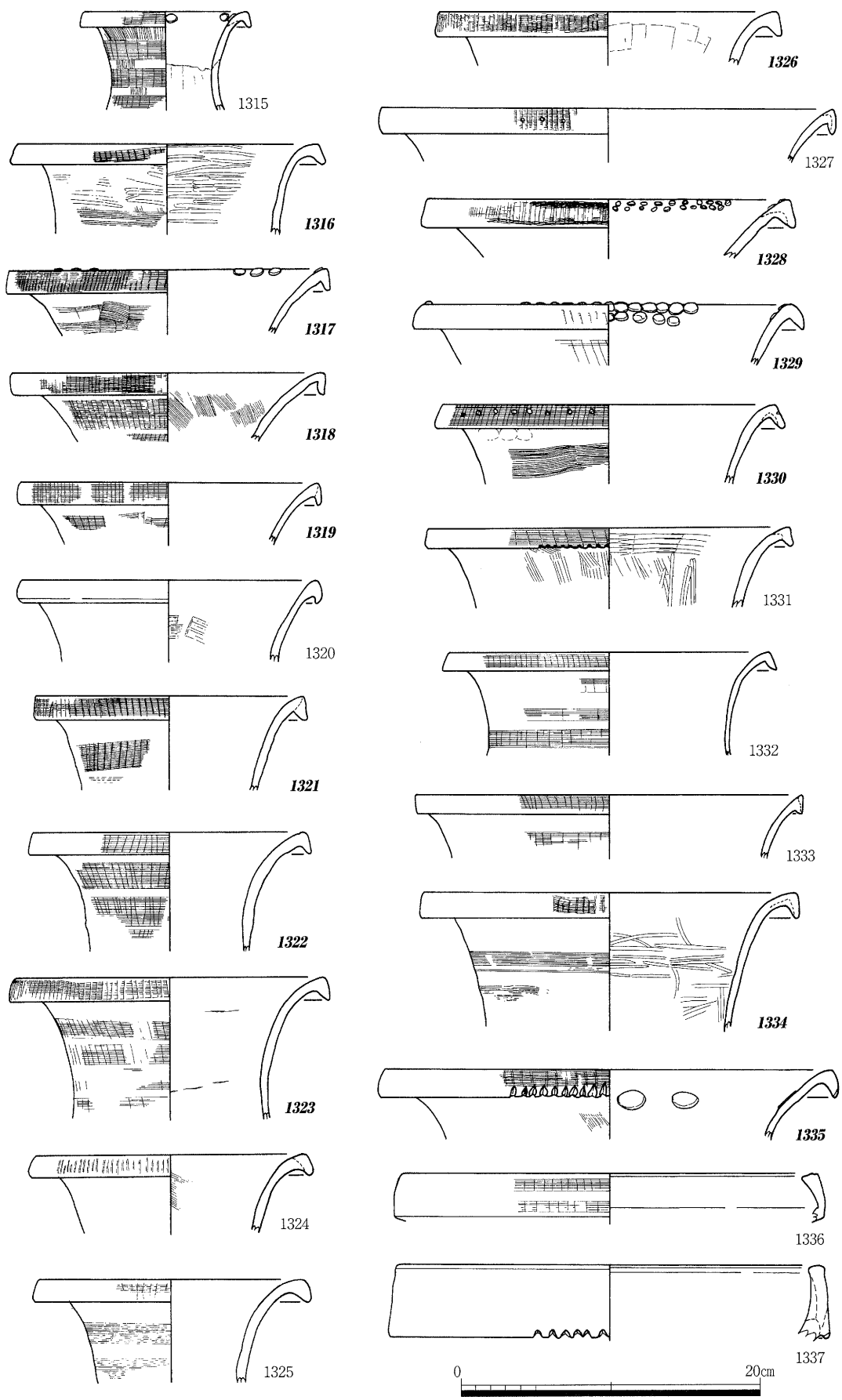
以上のように、遺物包含層第１区上層出土遺物は、弥生時代前期から古墳時代中期までの広い時期のものを含んでおり、古墳時代に堆積した遺物包含層ということができる。

下層出土遺物（第278・296・297図、図版98・100）



第278図　包含層出土土器③

1301は広口壺Ａ、1302は広口壺Ａ１である。1302は口縁端部に簾状文と刺突文、頸部には直線文と簾状文を施文する。1303～1305は細頸壺である。1303は凹線文、1304は列点文を施文し、ともに円形浮文を貼り付ける。1305は頸部に凹線文、口縁端部に粒の大きな列点文を施文する。1306は無頸壺である。口縁端部は低く段状に肥厚する。外面にはミガキを施している。1307・1308は甕Ａである。1307は小型の甕で、外面に縦方向のミガキ、内面には斜め方向の粗いハケを施し、口縁端部に刻目を加える。1308は、外面に細かいハケを施した後、板ナデを施し、その後縦方向のミガキを施している。1309・1310は鉢Ａである。1309は体部に列点文を施し、その上に横方向のミガキを加えて一部を消している。1310は小型の鉢Ａである。口縁端部を短く外折し、外側に刻目を加える。体部外面にはヘラ状工



第279図　包含層出土土器④

具による刻目を彩杉文状に施文している。下段の刻目は途中で施文の角度が変わり、斜格子状を呈する。1311・1312は高坏Bである。1311は下方向に拡張した口縁端部に凹線文を、口縁部上面には、ミガキを斜格子状に施している。1312は口縁端部の拡張が顕著ではない。口縁部上面には縦方向のミガキをやや深く施している。1313は高坏の脚部である。脚柱部には沈線状の退化凹線が施されているが、凹線の始点と終点が明確であり、一本ずつ施されていることが分かる。1314は縄文土器深鉢の体部である。内外面に巻貝条痕を施す。1567・1572は、サヌカイト製の凸基式石鏃である。1579は、サヌカイト製の削器である。

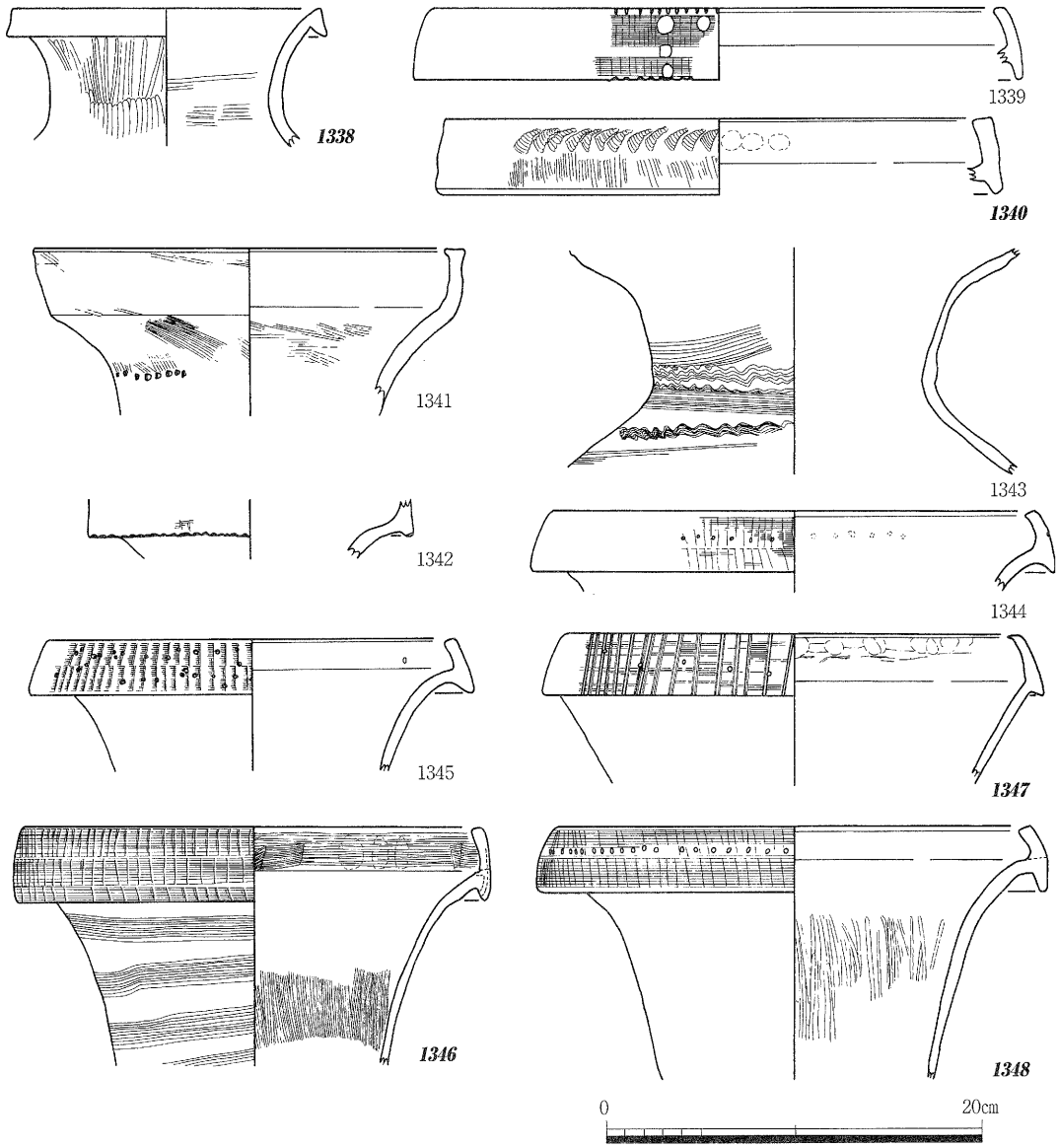
以上の第1区下層出土土器は縄文土器を含むものの、おおむね弥生時代中期の所産であり、弥生時代中期に堆積した遺物包含層といえる。

（2）第2区遺物包含層出土の遺物（第279～289・296～299図、図版98～100・102・103）

ここでは、段丘崖2の西側に広がる遺物包含層のうち、第2区に堆積した遺物について記述を行う。この範囲では、弥生時代中期の遺構が検出されており、この上層には当該時期の良好な遺物包含層が堆積していた。

1315は小型の広口壺Aである。下方向に拡張した口縁端部と頸部に、幅が狭く間隔の広い簾状文を施文する。口縁部内面には円形浮文を貼り付けている。1316～1335・1338は広口壺Aである。1320・1338が無文である以外は、下方向に拡張した口縁端部に簾状文を施文している。1316・1325・1330・1334は、口縁端部に簾状文、頸部に直線文を施文している。1316は頸部内外面に、横方向のミガキを施す。1334は、頸部内面に横方向のミガキを施している。1330は口縁端部に簾状文を施文した後、刺突文をめぐらす。1317～1319・1321～1323・1332・1333は、口縁端部と頸部に簾状文を施文している。1329は口縁部内面に円形浮文を貼り付けている。1324・1326・1327・1328・1331・1335は、頸部に文様を施文していない。1326は頸部内面に板ナデを施している。1328は口縁部内面に小型の円形浮文を貼り付けている。1331は頸部内外面に粗いハケを施し、口縁端部には簾状文を施文した後、口縁端部下端に刻目を加えている。1335は口縁端部外面に簾状文を施文した後、口縁端部下端には刻目を加え、口縁部内面には大型の円形浮文を貼り付けている。1320・1338は施文が行われていない。1320の下方向に拡張した口縁端部は、内側に巻き込むような形態を呈する。頸部内面には斜め方向のハケを施す。1338は頸部に縦方向のミガキを密に施している。

1339・1340・1344～1348は広口壺B1である。1339は口縁端部に簾状文を施文後、円形浮文を貼り付ける。口縁端部上下端には、刻目を加えている。1340は口縁端部に扇状文と垂下直線文を施文する。1344・1345・1348は簾状文の施文の後、刺突文をめぐらす。1346は頸部に直線文、口縁端部には簾状文を3条施文している。1347は横方向のハケの後、斜線文、刺突文を施文する。1343は壺の頸部である。残存部端部付近の内湾具合からみて、



第280図　包含層出土土器⑤

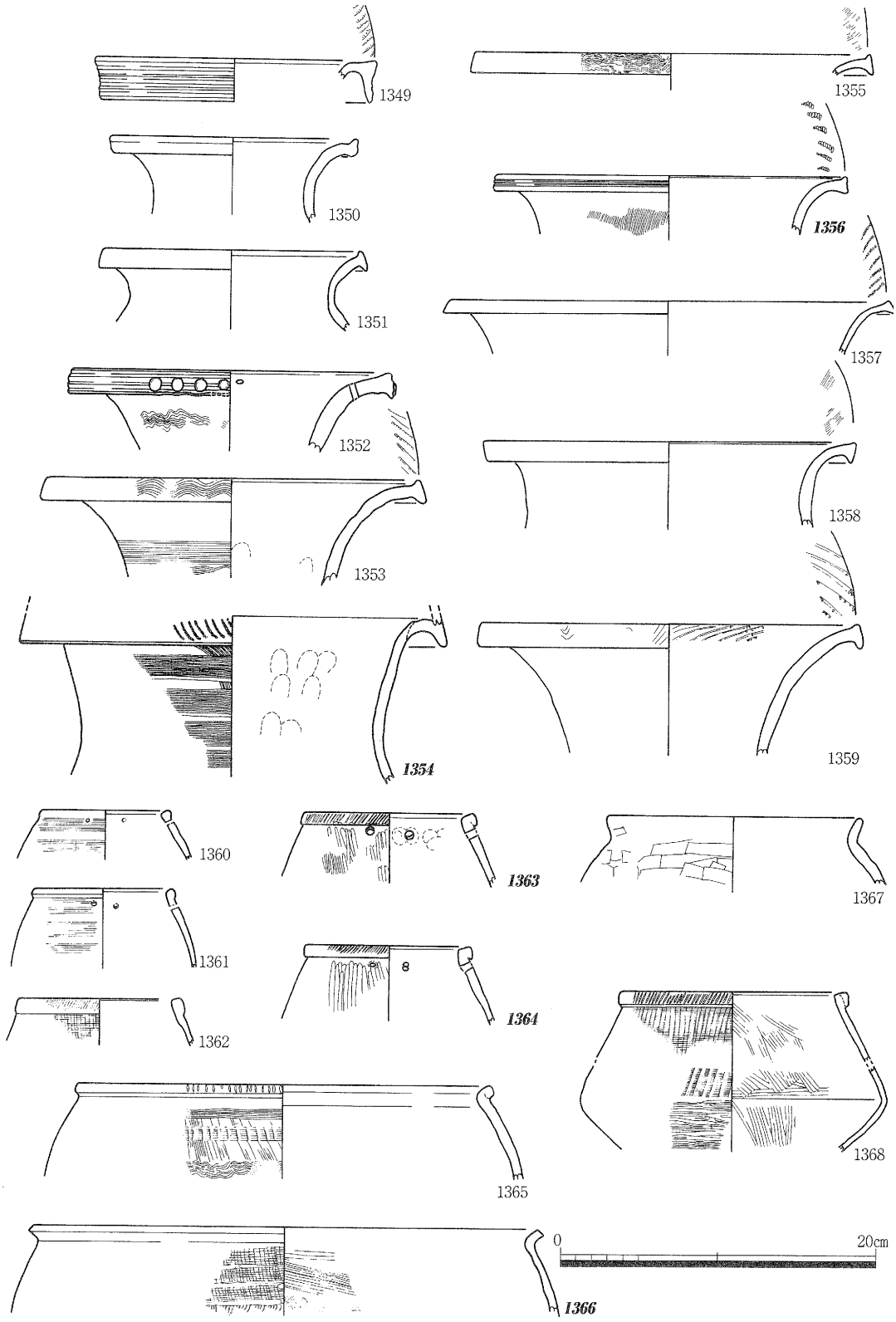
広口壺Ｂ２と考えられる。頸部には直線文と波状文を交互に施文している。

1336・1337・1341・1342は広口壺Ｂ２である。1337・1341は施文が行われていない。1337は口縁端部下端に刻目を施す。1341は内外面にハケを施し、頸部には刺突を加えている。1336・1342は口縁端部に簾状文を施文する。1342は口縁端部上端を欠損しているが、口縁端部下端には刻目を加えている。

1349は口縁端部を下方向に拡張するタイプの広口壺であるが、口縁端部外面には凹線文を施し、口縁部内面には列点文を施文している。摂津地域からの搬入品と考えられる。

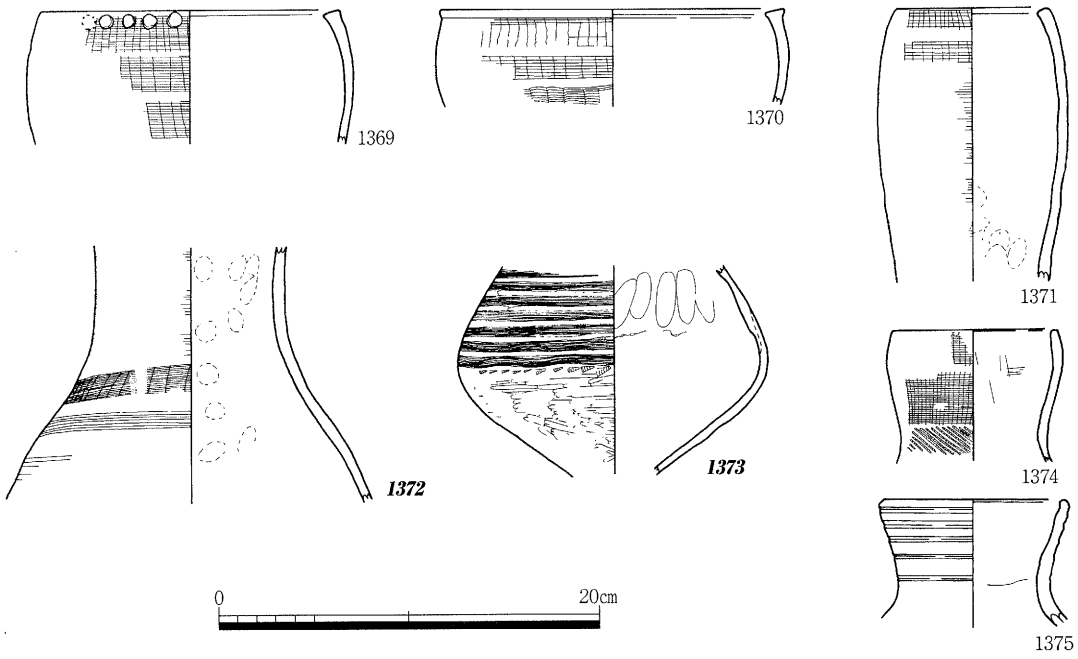
1350は広口壺Ｃ、1351は広口壺Ｄである。両者とも内外面をナデで仕上げている。

1352・1353・1355～1359は広口壺Ｅである。1352は頸部に波状文を施文し、口縁端部に凹線文の後、円形浮文を貼り付ける。口縁部では残存していた範囲で一箇所にのみ穿孔している。1353は頸部に直線文、波状文、口縁端部外面に波状文を施文し、口縁部内面には



第281図　包含層出土土器⑥

列点文を施している。1355は口縁端部外面に波状文、口縁部内面に扇状文を施文する。1356は口縁端部外面に凹線文、口縁部内面に扇状文を施文する。1357は口縁部内面に列点文を施文する。1358は口縁部内面にハケ状工具で扇状文状の文様を施す。1359は口縁端部



第282図　包含層出土土器⑦

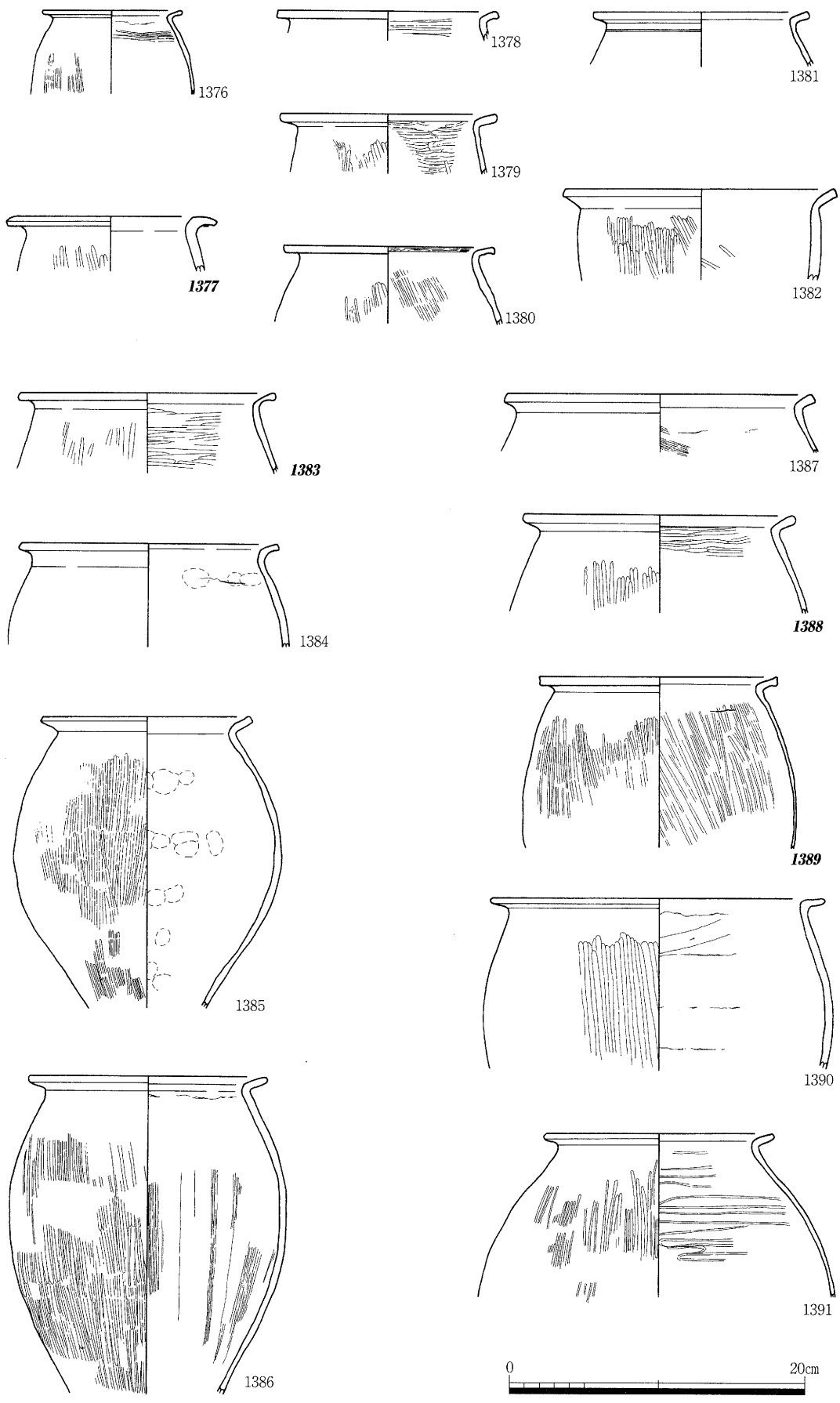
外面に波状文、口縁部内面に列点文を施文する。1354は広口壺Ｂ１である。上方向に拡張した口縁端部は欠損している。頸部には直線文、口縁端部には列点文を施文する。

1360～1368は無頸壺である。1360・1361は低い段状に肥厚する口縁端部を持つ。体部には直線文を施文し、紐孔を穿孔する。1362～1364は肥厚した口縁端部にヘラ状工具による刻目を施している。1362は体部に簾状文を施文し、1363・1364は体部に縦方向のミガキを施した後、紐孔を穿孔する。1365は大型の無頸壺で、肥厚した口縁端部には刻目を加える。体部には直線文と波状文を施文する。この波状文は板状原体の片端を固定して半円を描く動作を繰り返して施文している。1366は口縁端部を外折し、体部には簾状文と扇状文を施文している。1367は施文が行われておらず、外面には板ナデを施している。1368は口縁端部に列点文、体部に幅が広く間隔の短い簾状文を施文する。

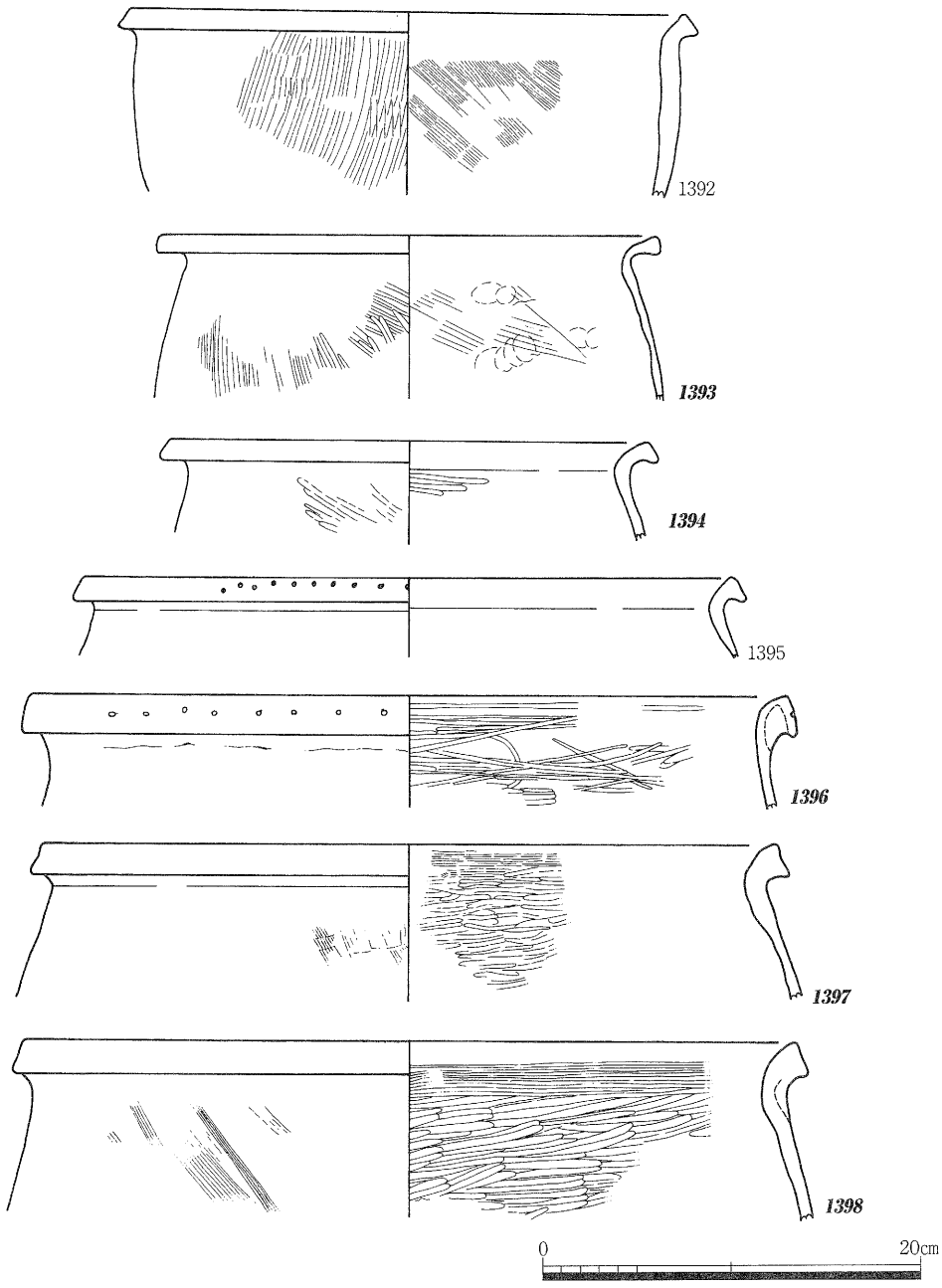
1369～1373は細頸壺である。1369・1370はやや大型のもので、ともに簾状文を施文する。1370は簾状文の上から円形浮文を貼り付ける。1371は前２者に比べて小型のもので、簾状文と直線文を施文している。1372は細頸壺の体部から頸部である。直線文と簾状文を施文する。1373は細頸壺の体部である。体部最大径を中ほどに持ち、強く張り出す。直線文を施文し、文様帯間に横方向のミガキを施す。最下段には扇状文を施文する。

1374・1375は短頸壺もしくは水差である。口縁部の残存率が低く、残存している部分では抉りは確認できなかった。1374は簾状文と列点文、1375は凹線文を施文している。

1376～1391は甕Ａである。1376～1382は小型のものである。おおむね頸部がくの字状に屈曲する。1376・1377・1379・1380・1382は、外面を縦方向のミガキで仕上げている。1376・1378・1379は内面に横方向のミガキを施す。1380は体部と口縁部の内面にハケを施している。1377は口縁部が外反して、口縁端部が下方向へのびている。1382は頸部の締まらない釣鐘状の形態を呈すると考えられる。内面には疎らにミガキを施す。1381は内外面

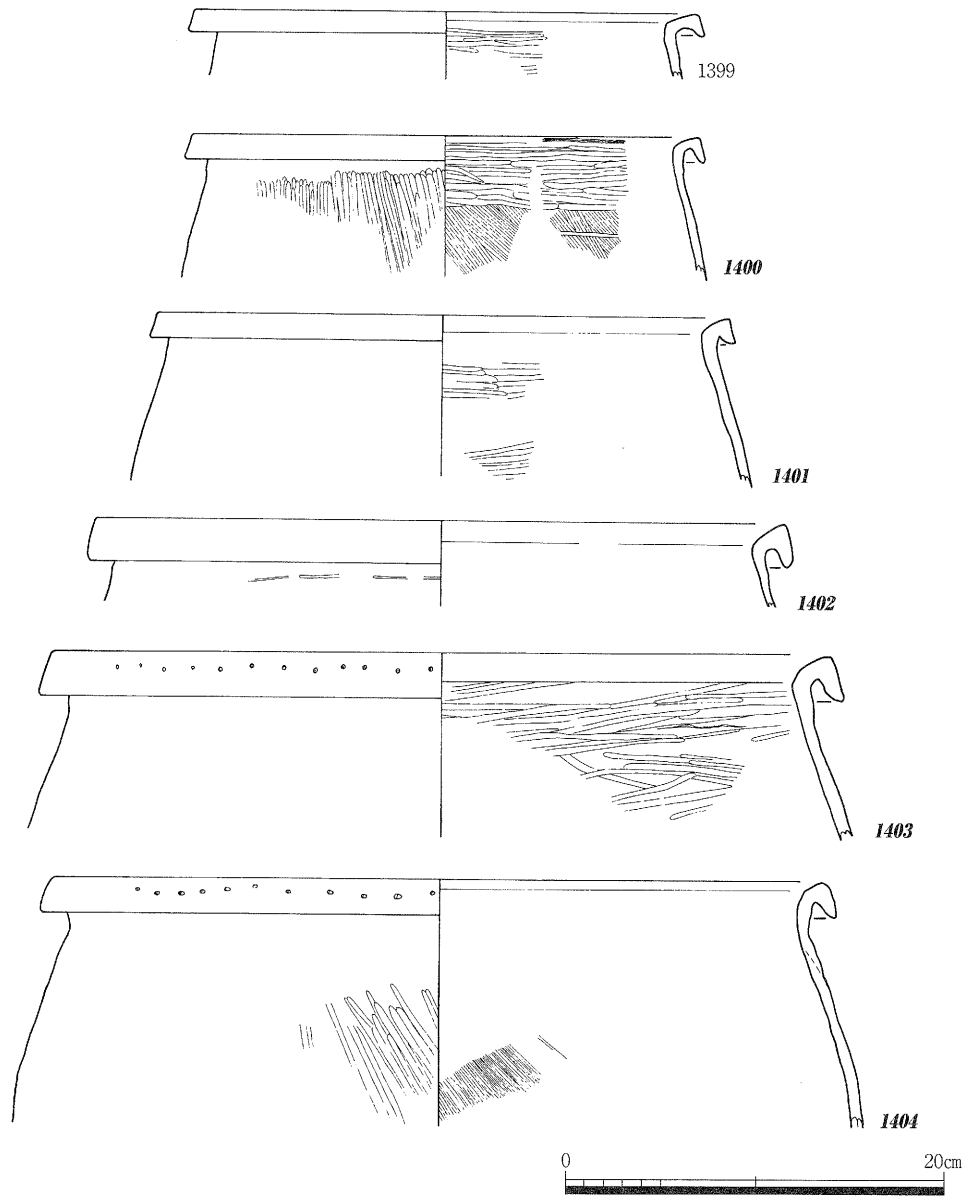


第283図　包含層出土土器⑧



第284図　包含層出土土器⑨

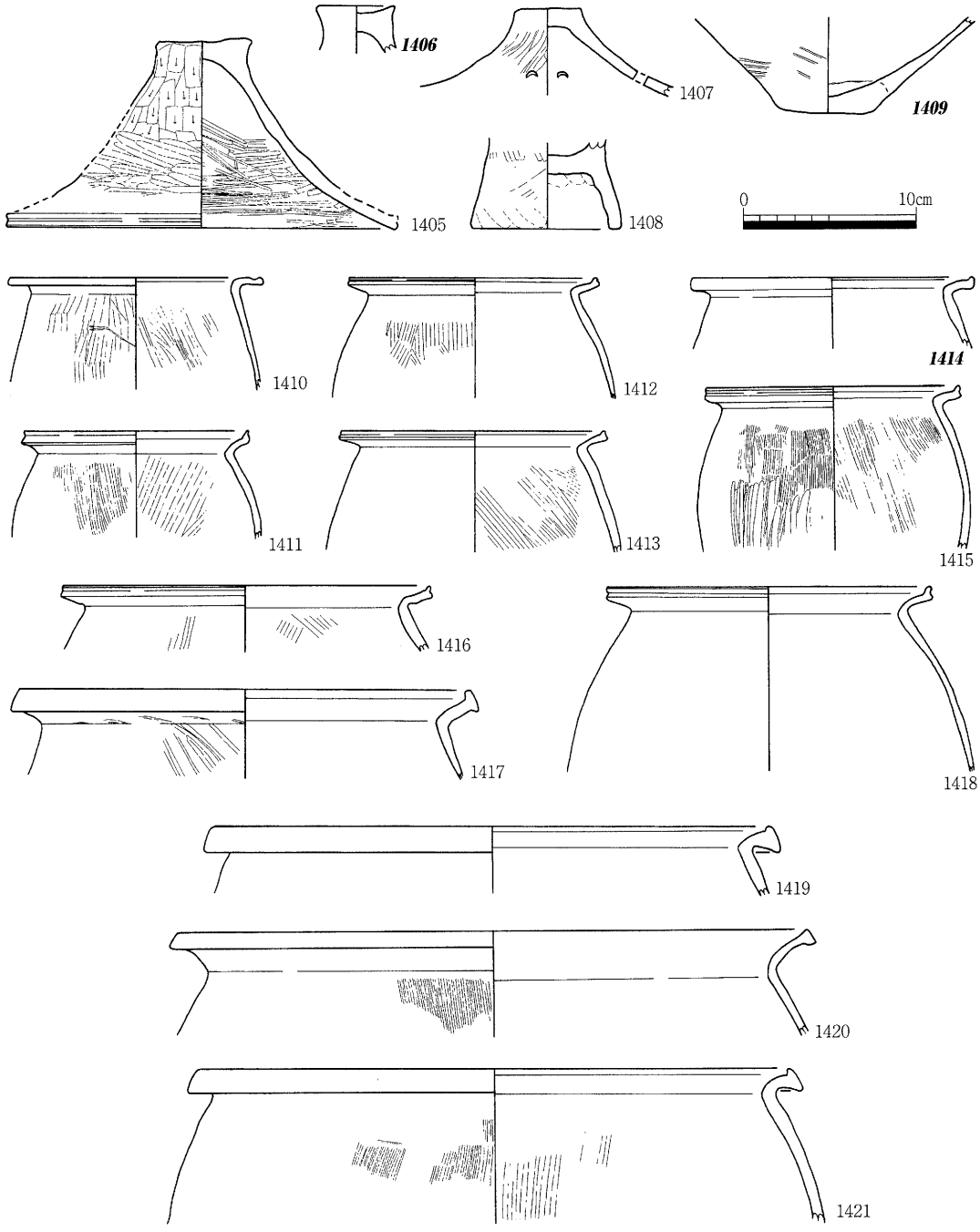
をナデで仕上げている。頸部外面には、沈線ではなく、段がついている。1383～1391は中型の甕Aである。頸部がくの字状に屈曲するもの（1383・1385～1389・1391）と逆L字状に屈曲するもの（1390）、緩やかに外反するもの（1384）がある。1383・1385～1389・1391は頸部がくの字状に屈曲するもので、外面に密に縦方向のミガキを施すものが多い。1383・1388は頸部内面付近に横方向のミガキを施す。1385は体部中位に最大径を持ち、頸部のしまりが強い。1386は内面に細かいハケを施す。1387は内面に斜め方向のハケを施している。1389は内外面を縦方向の密なミガキで仕上げている。1391は頸部が強く締まる。内面には疎らに横方向のミガキを施す。1384は頸部が緩やかに屈曲する。内面をナデで仕上げている。外面は煤化が顕著である。1390は頸部が逆L字状に屈曲する。内面にはナデ



第285図　包含層出土土器⑩

の後ケズリを加えている。

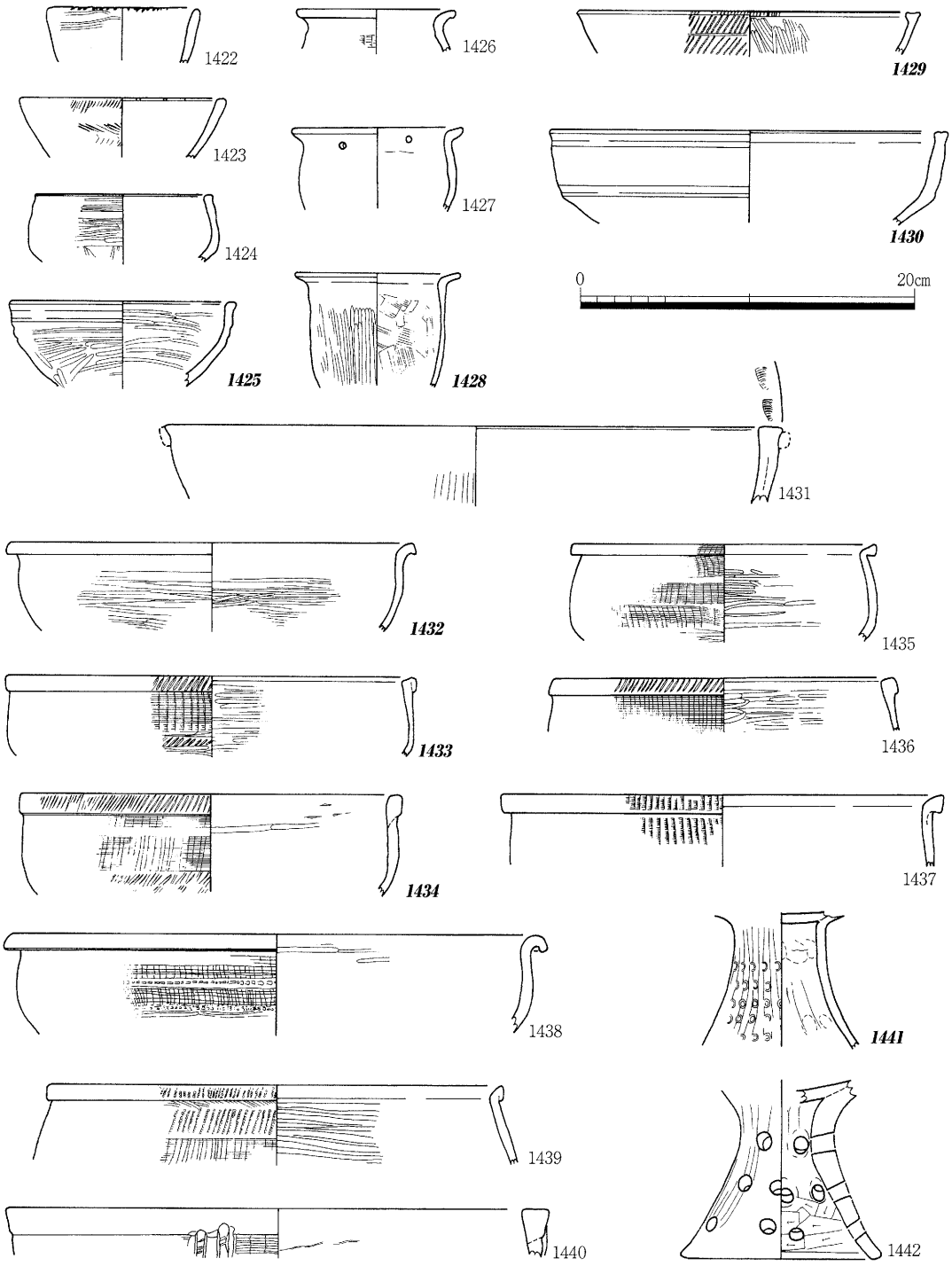
1392～1404は甕Cである。口縁端部の拡張が顕著でないもの（1392・1393）から口縁端部が肥厚して断面三角形を呈するもの（1394～1398）、口縁端部を長く拡張するもの（1399～1404）までさまざまな形態のものがある。1392は頸部のしまりがなく、体部が釣鐘状を呈すると考えられる。外面には粗いハケ、内面には細かいハケを施している。1393は体部外面に斜めハケの後、縦方向のミガキを施す。1395・1396は、口縁端部に刺突文をめぐらす。1397・1398は、外面に細かい斜めハケを施し、内面には体部に横方向のミガキ、口縁部にハケを施している。1400は体部内面に細かい斜めハケを施した後、頸部に横方向ミガキを密に施す。1402は頸部外面付近に疎らに横方向のミガキを施している。1403・1404は口縁端部外面に刺突文をめぐらす。1403は内面に横方向のミガキ、1404は斜め方向



第286図　包含層出土土器⑪

に細かいミガキを施している。

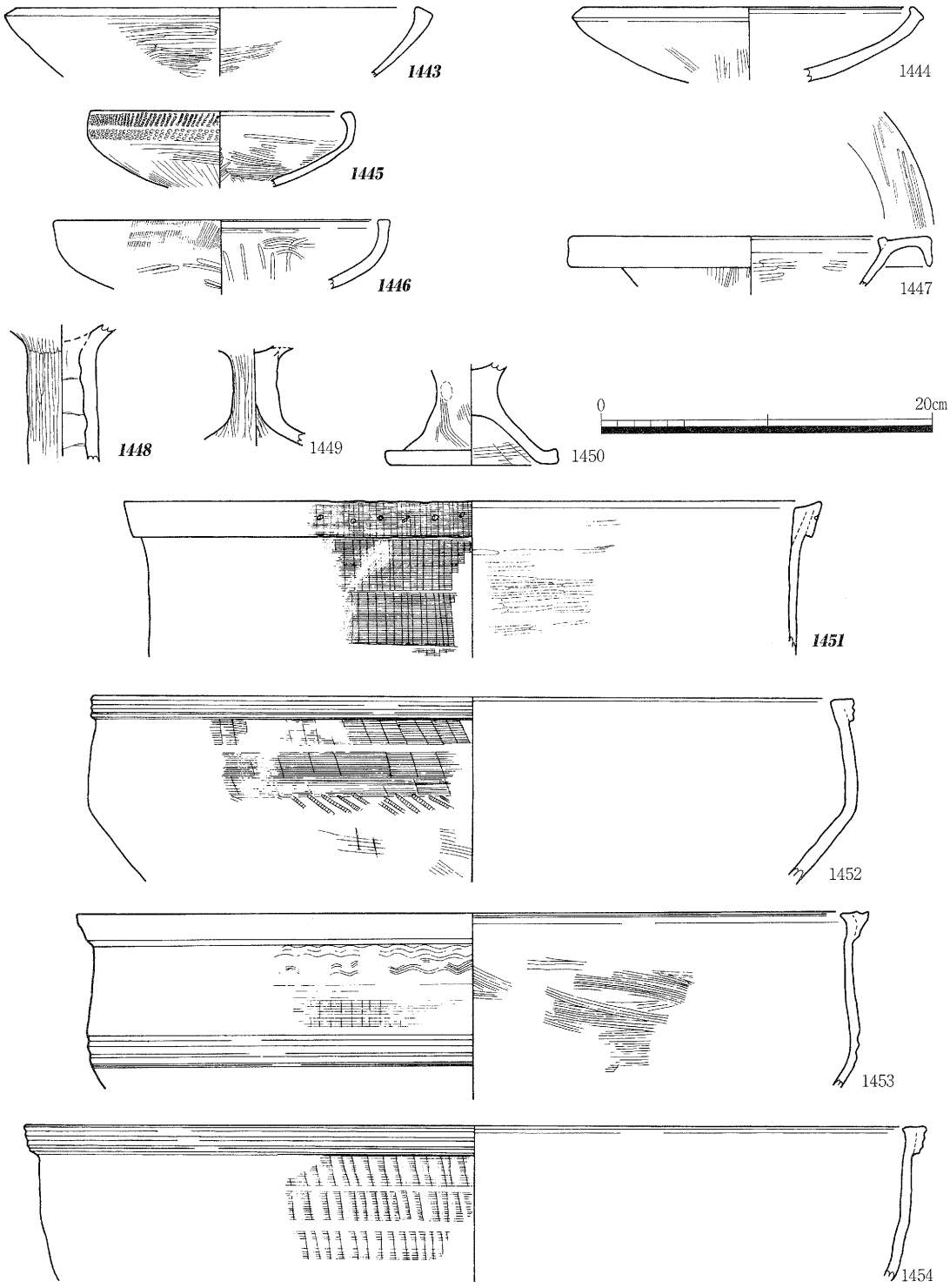
1410～1418は甕Bである。1410～1415は小型のものである。1410・1411は、内外面に粗いハケを施す。1412は外面にハケ、内面にナデを施し、1413は外面にナデ、内面にハケを施している。両者とも口縁端部に凹線を施す。1414は内外面をナデで仕上げる。1415は外面に縦方向のハケを施した後、体部下半部にミガキを施している。内面には外面に比べてやや粗いハケを施している。1416～1418は、大型のものである。1416は内外面に粗いハケを施す。1417は体部外面に斜め方向のミガキを施し、頸部には板状工具の当りが残る。



第287図　包含層出土土器⑫

1419～1421は、甕Dである。1419は内外面をナデで仕上げる。胎土が他のものに比べて、緻密である。1420は体部外面に細かいハケを施している。1421は外面に細かいハケ、内面には外面に比べて粗いハケを施している。

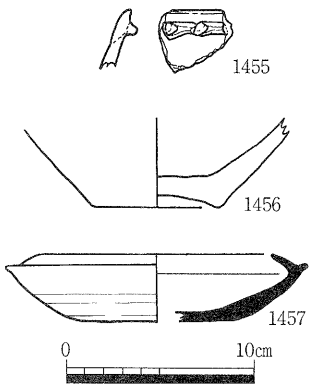
1405～1407は、甕の蓋である。1405は外面にヘラケズリの後、ミガキを施す。内面はやや幅の広い板状の工具でミガキを施している。1407は外面に板ナデを施す。1408は台付甕の脚部である。外面には粗いハケが残る。甕の体部にはミガキを施している。1409は甕の



第288図　包含層出土土器⑬

底部である。左上がりのタタキを施している。

1422～1428は、小型の鉢である。1422は外面に直線文を施文し、口縁端部には刻目を加えている。1423はヘラ状工具による刻目を施す。1425は外面にミガキを施す。口縁部に凹線文を施文している。1426・1428は口縁端部を短く外折する。1426は外面に簾状文を施文している。



第289図　包含層出土土器⑭

1429～1431は、鉢Ａである。1429は外面に列点文を施文し、文様間に横方向のミガキを１条加える。口縁端部内外には刻目を施している。1430は口縁部に凹線文を施文している。1431は口縁部外面に突帯が貼り付けられていた痕跡が見られる。口縁端部上面には扇状文を施文している。

1432～1440は、小型の鉢Ｂである。1432・1435は口縁端部が外方向に屈曲する。1432は内外面にミガキを施しているのみで、無文である。1435は口縁端部と体部に簾状文を施文する。1433・1434・1436～1440は、口縁端部が段状に肥厚する。1433・1434は口縁端部にヘラ状工具による刻目、体部に簾状文と刻目を施す。1436は口縁端部に刻目、体部に簾状文を施文する。1437は口縁端部と体部に簾状文を施文している。1439は口縁端部に列点文、体部に列点文と簾状文を施文する。体部上位には、口縁端部を折り返す前に施した斜めハケが残る。1438は口縁端部を下方向に拡張しているが、体部に密着していない。体部外面には原体の櫛目の不ぞろいな簾状文を施文する。1440は体部外面に簾状文施文の後、棒状浮文を貼り付けている。

1451～1454は、大型の鉢Ｂである。いずれも口縁端部は段状に肥厚する。1451は口縁端部に簾状文と刺突文、体部に簾状文を施文する。1452・1454は、口縁端部に凹線文を施す。1452は体部に間隔の広い簾状文と列点文を施文する。1454もやや幅の広い簾状文を施文している。1453は口縁端部が内側にも肥厚している。外面には体部屈曲部に凹線文、体部上部に簾状文と波状文を施文する。

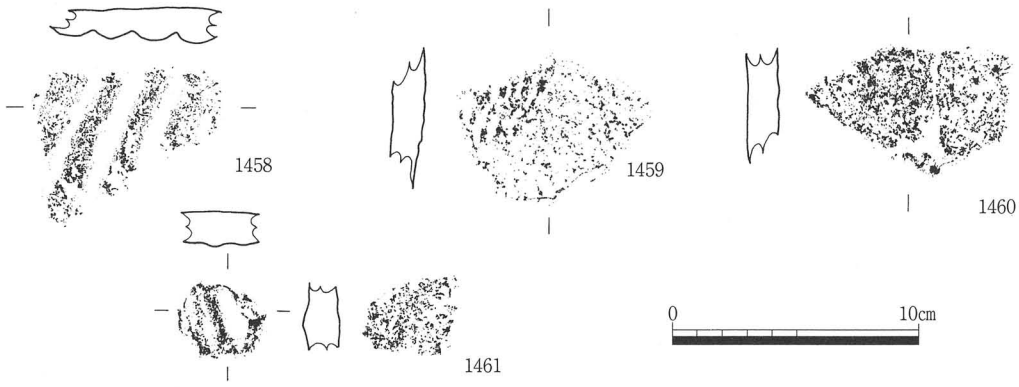
1441・1442は鉢の脚部である。1441は外面に竹管文を施文する。1442は内面にケズリを施し、円孔透を多数穿孔している。

1443～1446は高坏Ａである。1443・1444は坏部が内湾しながら開き、1443は外面に横方向のミガキ、1444は縦方向のミガキを施している。1445・1446は、口縁部が坏部底部から屈曲して立ち上がる坏部の形態を持つ。1445は口縁部に列点文を施文し、1446は垂下直線文を施文している。1447は高坏Ｂである。水平にのびた口縁部上面に、横方向のミガキを施している。1448～1450は高坏の脚部である。1448は筒状の脚柱部を持ち、外面に密にミガキを施す。1449・1450は脚柱部上部が中実である。1449は外面にミガキ、1450はハケを施している。

以上の第２区出土の弥生土器は、弥生時代中期の所産である。

1455は縄文土器深鉢の口縁部である。口縁部に刻目突帯を貼り付けている。滋賀里式～船橋式に比定され、縄文時代晩期の所産である。1456は上げ底を呈する縄文土器深鉢の底部である。縄文時代晩期の所産と考えられる。1457は須恵器坏身である。ＴＫ43型式に位置づけられ、古墳時代後期の所産である。

1561・1562・1564はサヌカイト製の凹基式石鏃である。1570・1571は、サヌカイト製石



第290図　包含層出土土器⑮

剣の未製品、1573は、サヌカイト製の凸基式石鏃である。1575・1576は、サヌカイト製の石錐である。1581～1584・1586は、サヌカイト製の削器である。1589・1590・1592は砂岩製の叩石である。1581・1582は、00－５第２調査区から出土した。1593は花崗岩製の叩石である。

以上のように、第２区の遺物包含層から出土した土器は、Ⅳ様式に位置づけられるものが主体であるが、一定量のⅢ様式の土器や、少量の縄文時代晩期の土器（1455）やⅡ様式の土器（1371）、古墳時代後期の土器も含まれている。このことから本地区の遺物包含層は主に弥生時代中期に堆積したと考えられる。

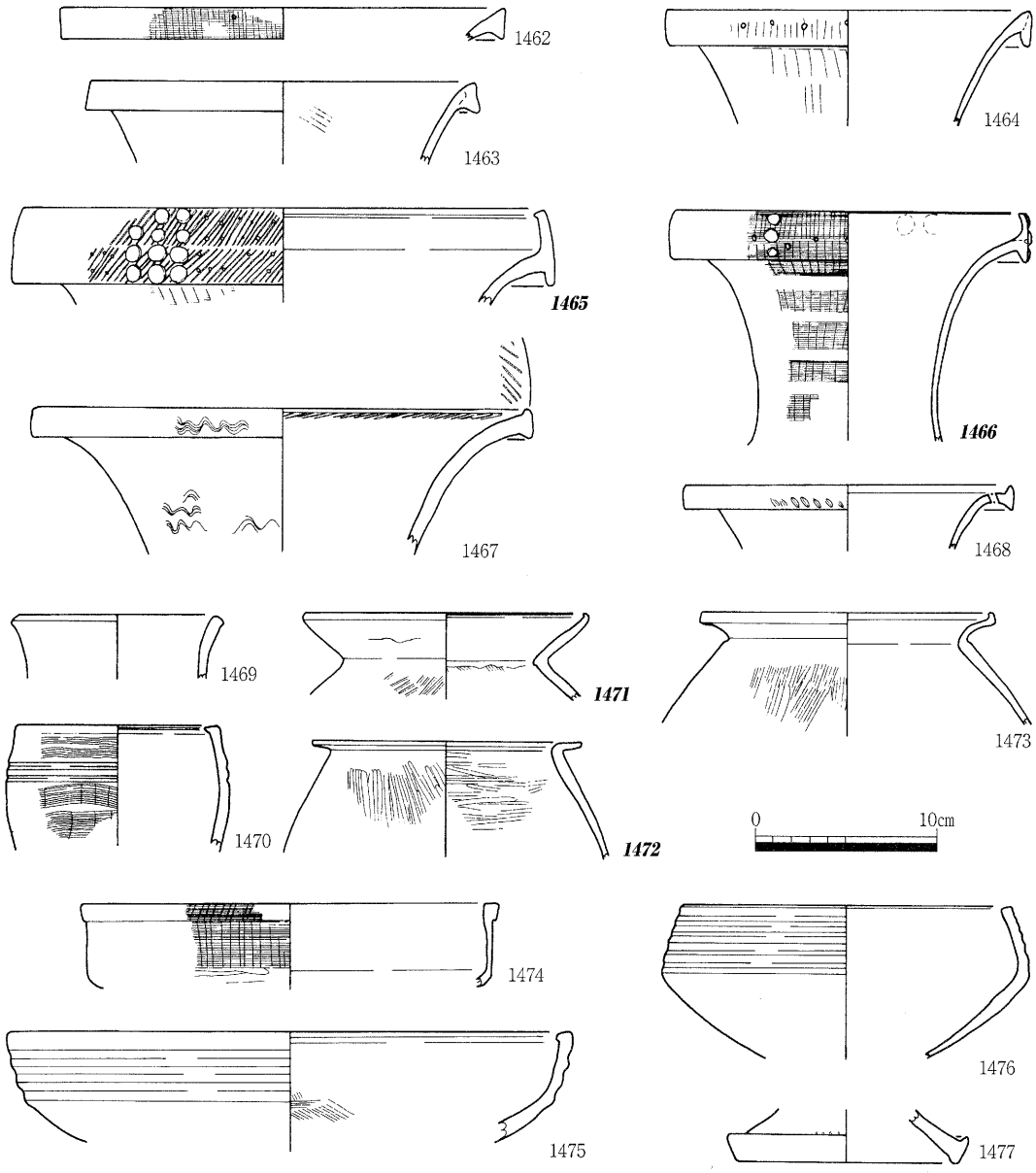
（３）第３区遺物包含層出土の遺物（第290～294・296～299図、図版98～100・103）

ここでは、段丘崖２の東側に広がる遺物包含層のうち、第３区に堆積した遺物包含層より出土した遺物について記述を行う。この範囲は、弥生時代の遺物包含層がいったん削平され、新たに近世の遺物包含層が形成され、この層に縄文時代・弥生時代の遺物が近世の遺物に混じる形で包含されていた。

1458～1461は、縄文土器深鉢の破片である。1459～1461は、外面に押型文を施文している。1458・1461も、押型文土器の体部片であるが、底部に近い破片で、1458は内面に右上がりの沈線を、1461は左上がりの沈線を施している。これらはいずれも、高山寺式に比定でき、縄文時代早期の所産である。

1462～1464は、広口壺Ａである。1462・1464は、口縁端部に簾状文と刺突文を施文する。1463の外面は無文で、内面には斜め方向のハケを施す。1465・1466は、広口壺Ｂ１である。頸部には簾状文、口縁端部には簾状文、刺突文、円形浮文を施文している。1467・1468は、広口壺Ｅである。1467は頸部、口縁端部に波状文、口縁部内面には列点文を施文している。1468は口縁端部外面に刻目を施している。1469は短頸壺の口縁部である。1470は細頸壺である、外面に直線文、凹線文、波打った稚拙な簾状文を施文している。

1471は河内型庄内甕である。頸部は鋭く屈曲し、口縁部はわずかに内湾気味に開く。口縁端部は上方向につまみ上げる。内面の頸部よりやや下の部分では口縁部接合前のハケが

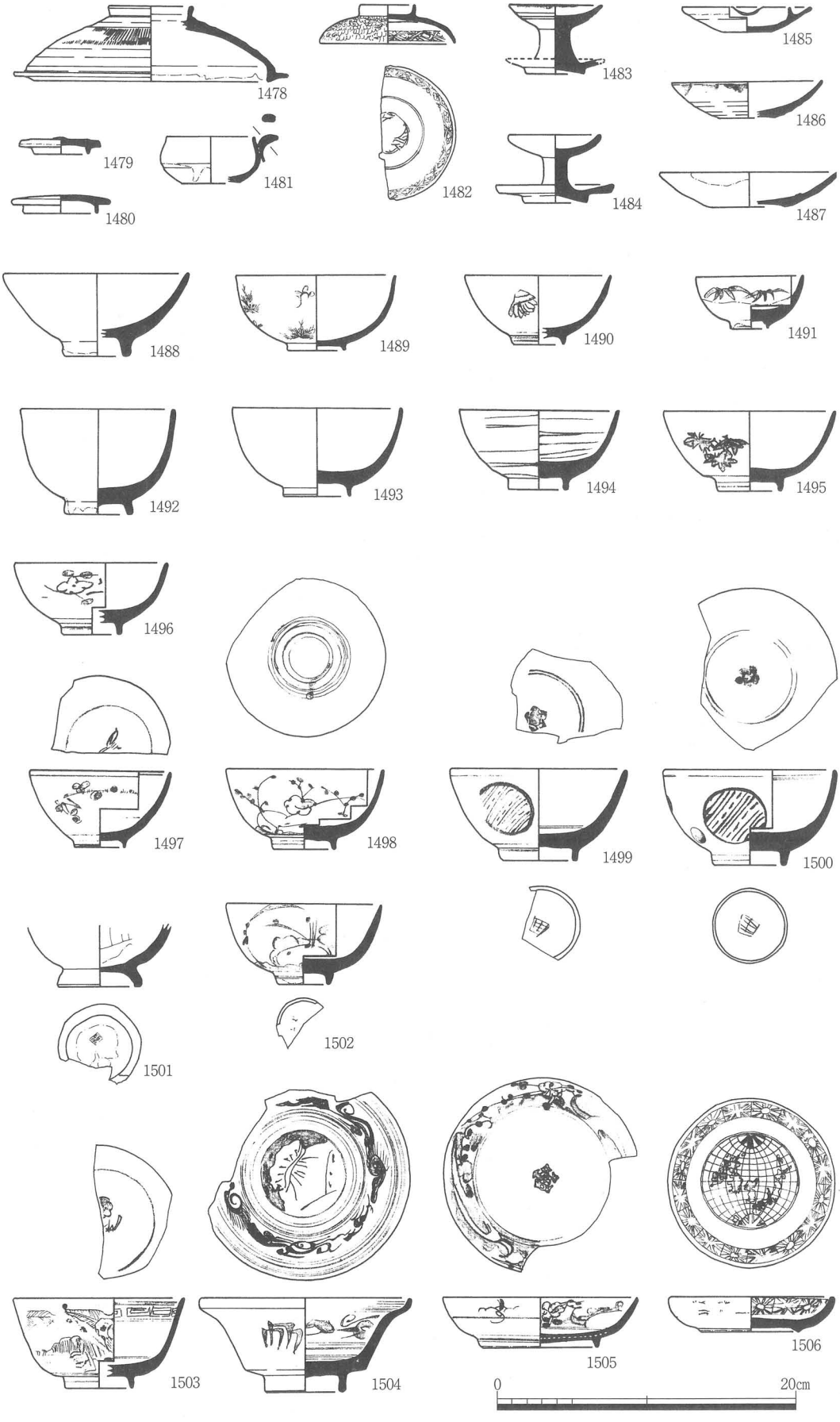


第291図　包含層出土土器⑯

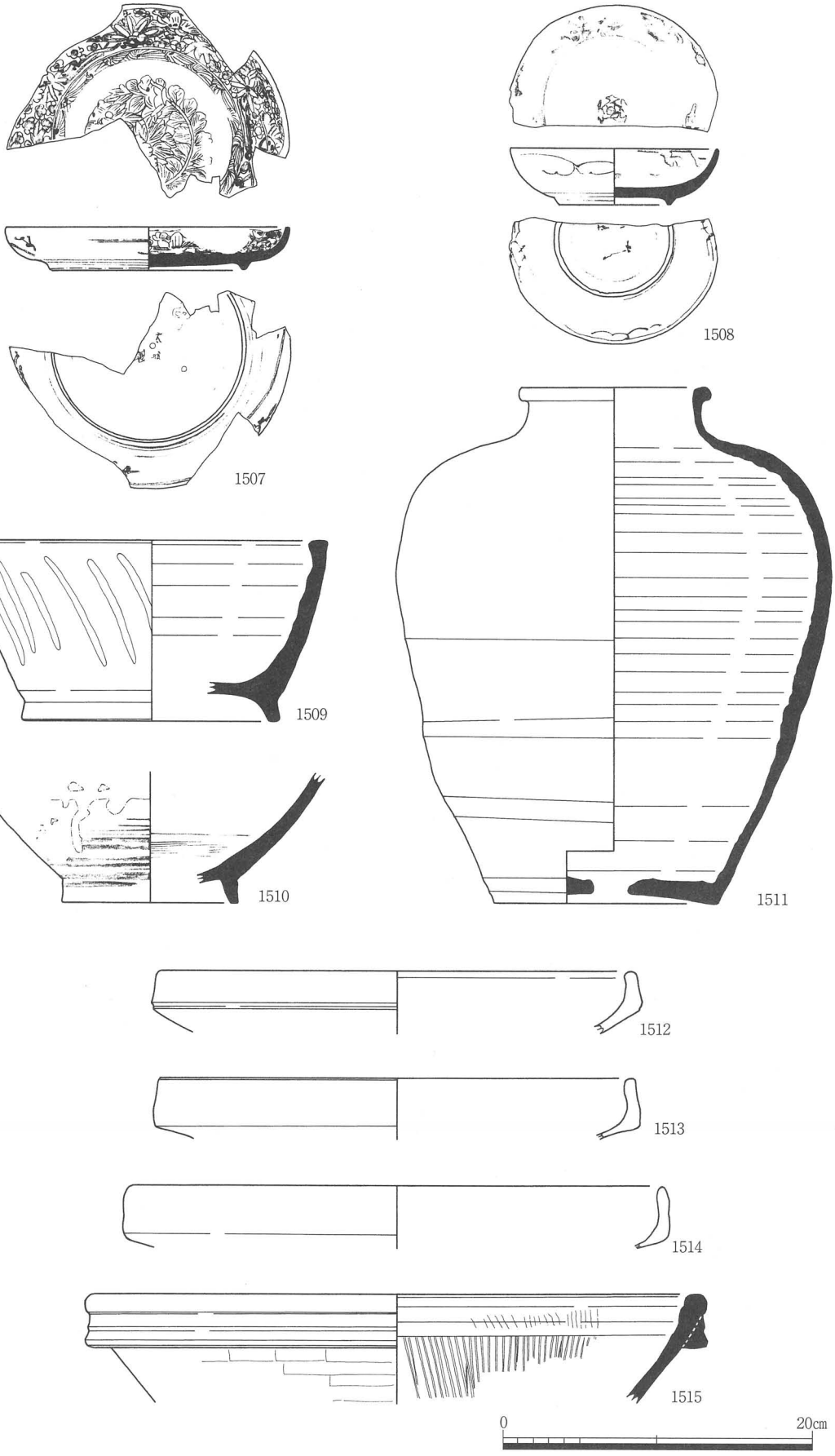
残る。外面にはハケのような細かい右上がりのタタキを施している。1472は甕Aである。頸部は逆L字状に屈曲し、外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施している。1473は甕Dである。頸部のしまりが強い。外面にはやや粗いハケを施す。1474は鉢Bである。口縁端部と体部に簾状文を施文している。1476は鉢Aである。口縁部に凹線文を施文している。1475は高坏Aである。口縁部が底部から屈曲して立ち上がる坏部の形態である。口縁部外面には凹線文を施文している。1477は高坏の脚部である。裾部に刻目を加えている。これらの土器は弥生時代中期から庄内期に位置づけられる。

1560は凹基式石鏃、1563・1565・1566・1568・1569は凸基式石鏃である。いずれもサヌカイト製である。1574・1577はサヌカイト製の石錐である。1578・1585・1587・1588はサヌカイト製の削器である。1591は砂岩製の叩石である。

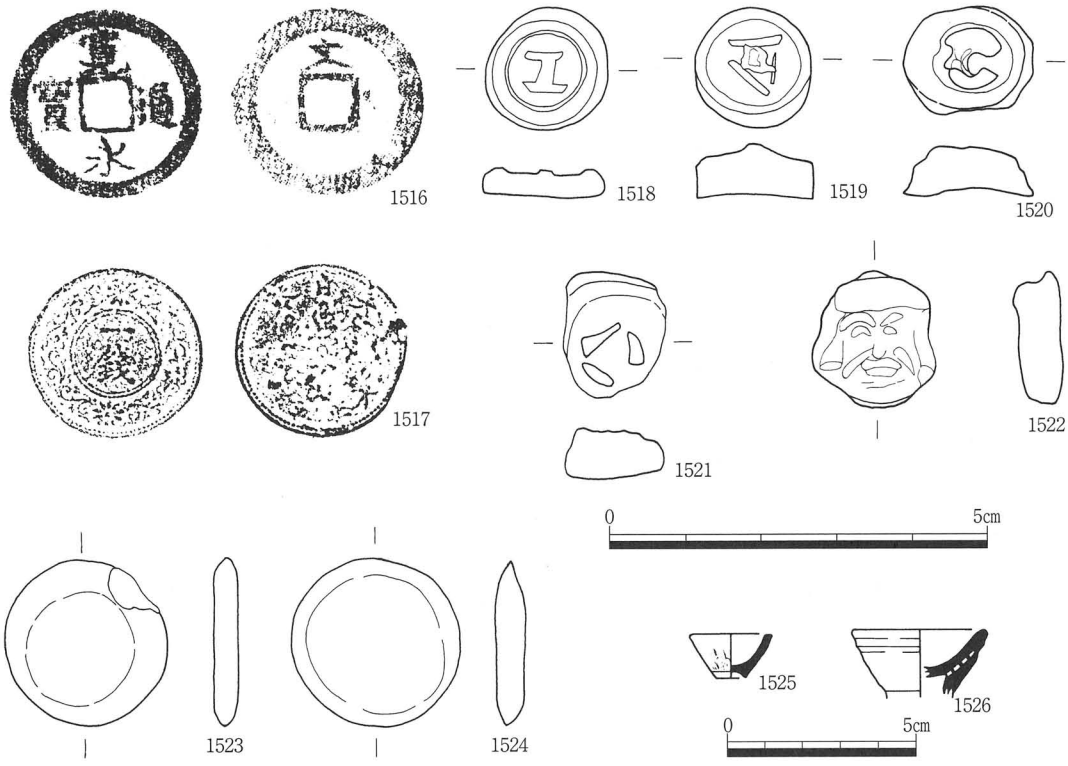
1478は産地不明陶器の鍋蓋である。1479・1480は、合子の蓋である。1482は産地不明磁



第292図　包含層出土土器⑰



第293図　包含層出土土器⑱



第294図　包含層出土土器⑲

器の広東碗蓋である。1485～1487は、灯明皿である。内面と外面の口縁端部にのみ施釉がなされている。1488は、肥前系磁器の碗である。1489・1497は、肥前系磁器の碗である。1490・1495・1496・1498～1500・1502は、肥前系陶磁の碗である。1491は肥前系陶磁の小坏である。1492は肥前系磁器の碗である。1493は青磁碗である。1494は肥前系陶器の刷毛目碗である。1503は肥前系磁器の蓋付碗である。1504は産地不明磁器の鉢である。1505・1508は肥前系陶磁の中皿である。見込みに五弁花文が描かれている。1506は新生瀬戸の小皿である。1507は肥前系磁器の大皿である。1509・1510は、肥前系陶器の火鉢である。1511は備前写し産地不明陶器の壺である。1515は堺擂鉢である。1501は、産地不明磁器の瓶である。

1512～1514は、炮烙である。

1516は寛永通宝である。1517は一銭である。

1523・1524は、碁石である。前者が白色、後者が黒色である。

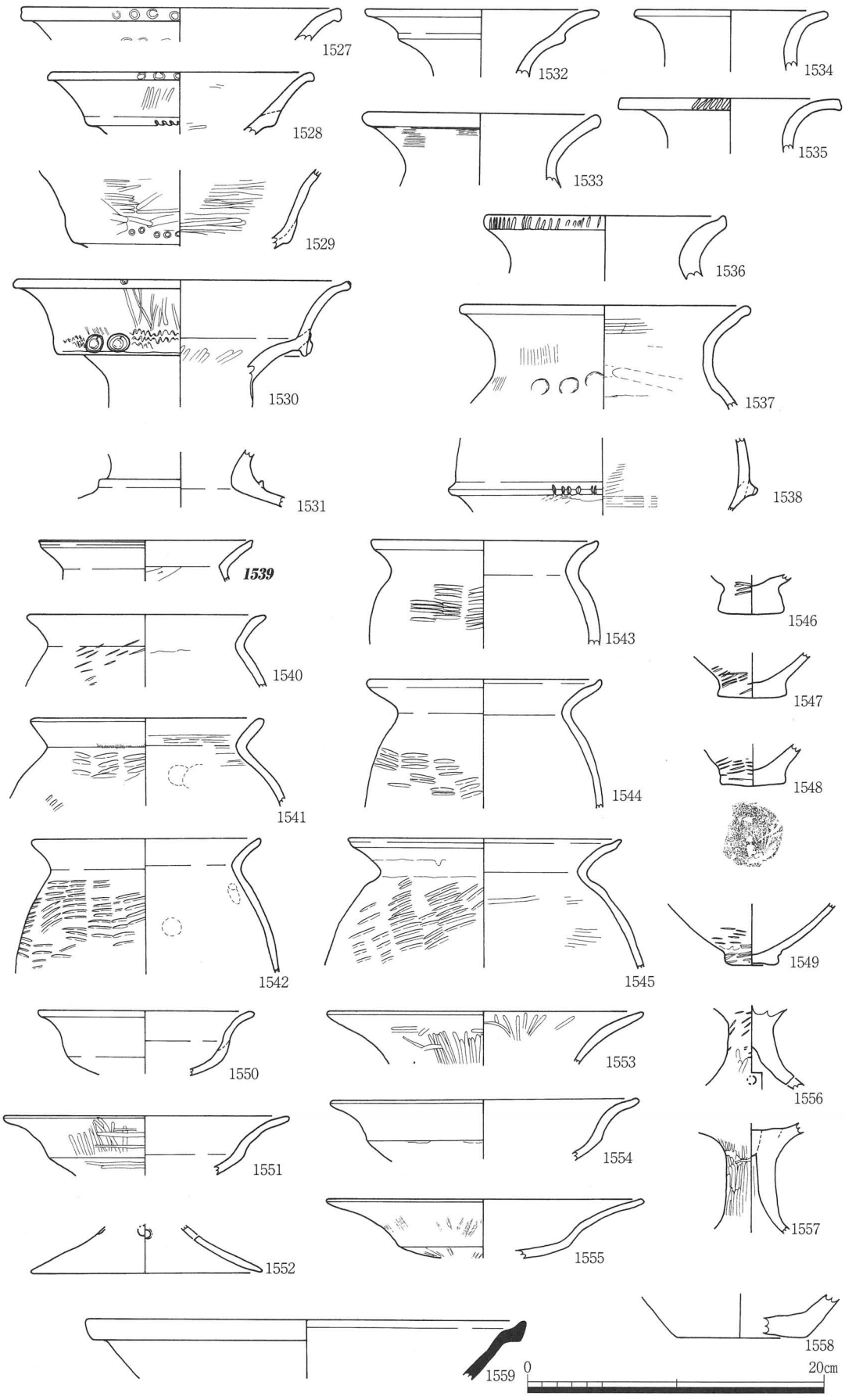
1518～1522は泥面子である。

1525・1526は紅皿である。

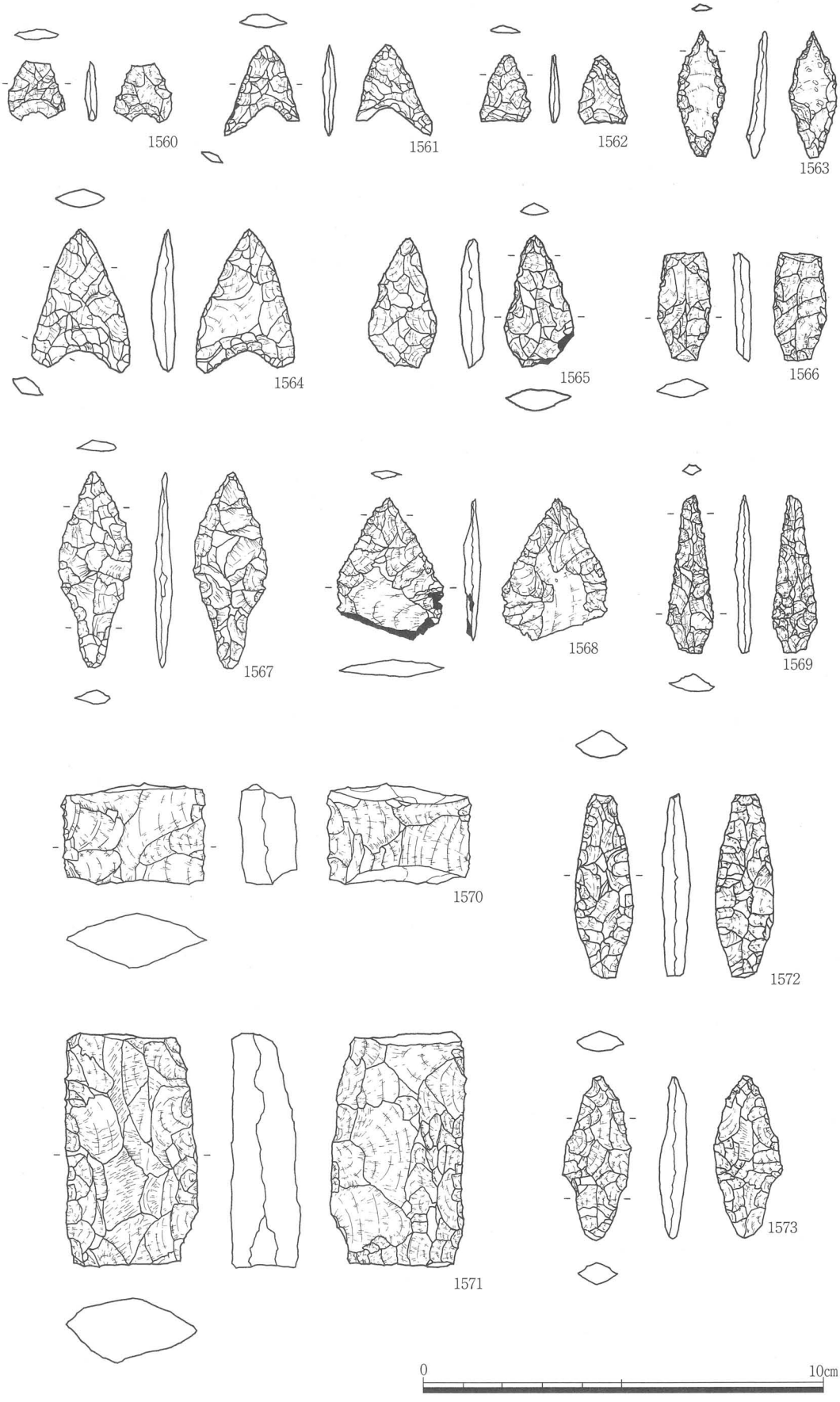
以上の第３区遺物包含層出土遺物は弥生時代中期から庄内期のものと17～18世紀ごろのものがある。

（４）第４区遺物包含層出土の遺物（第295・297図、図版99）

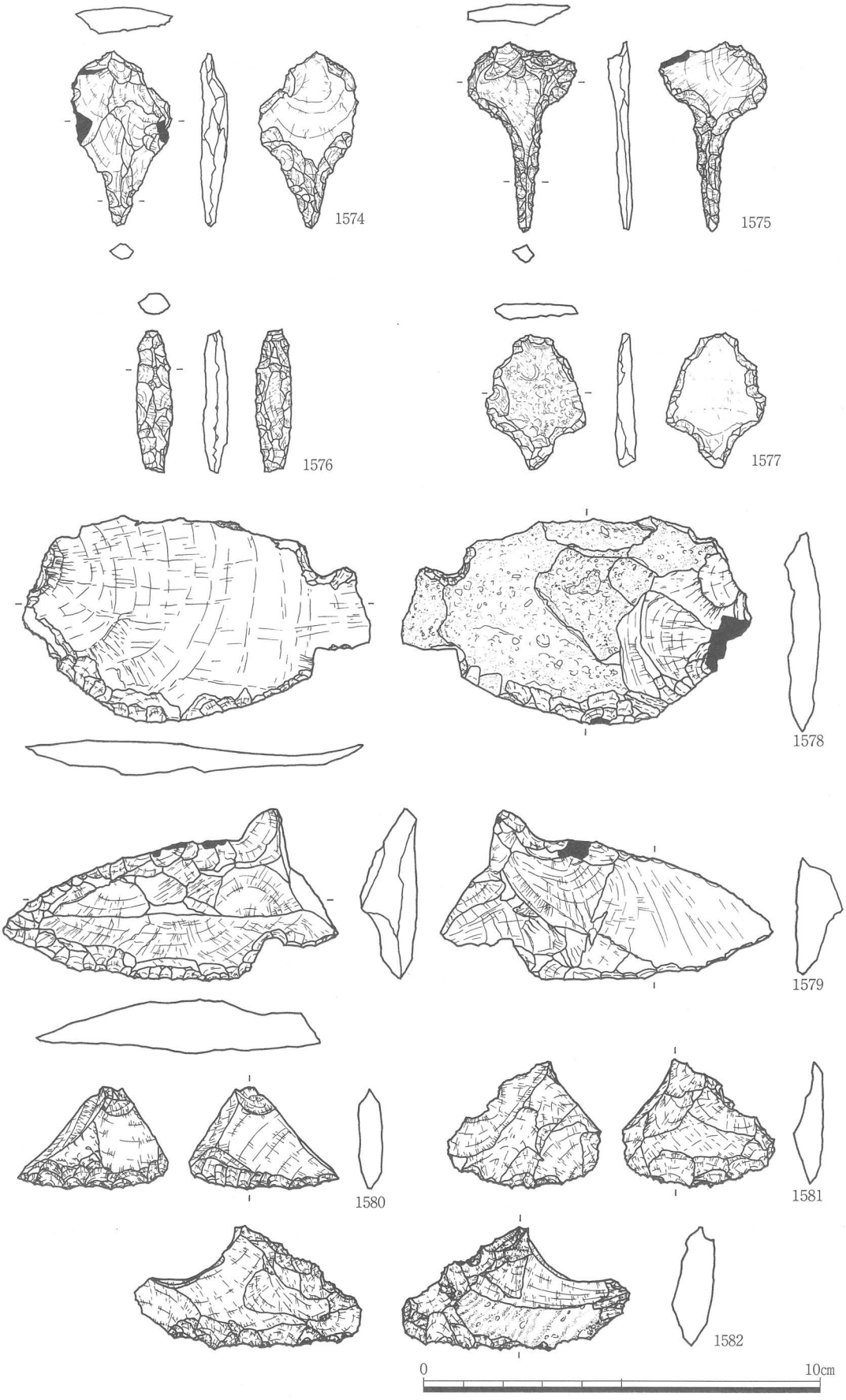
ここでは、段丘崖２の東側に広がる遺物包含層のうち、第４区に堆積した遺物包含層よ



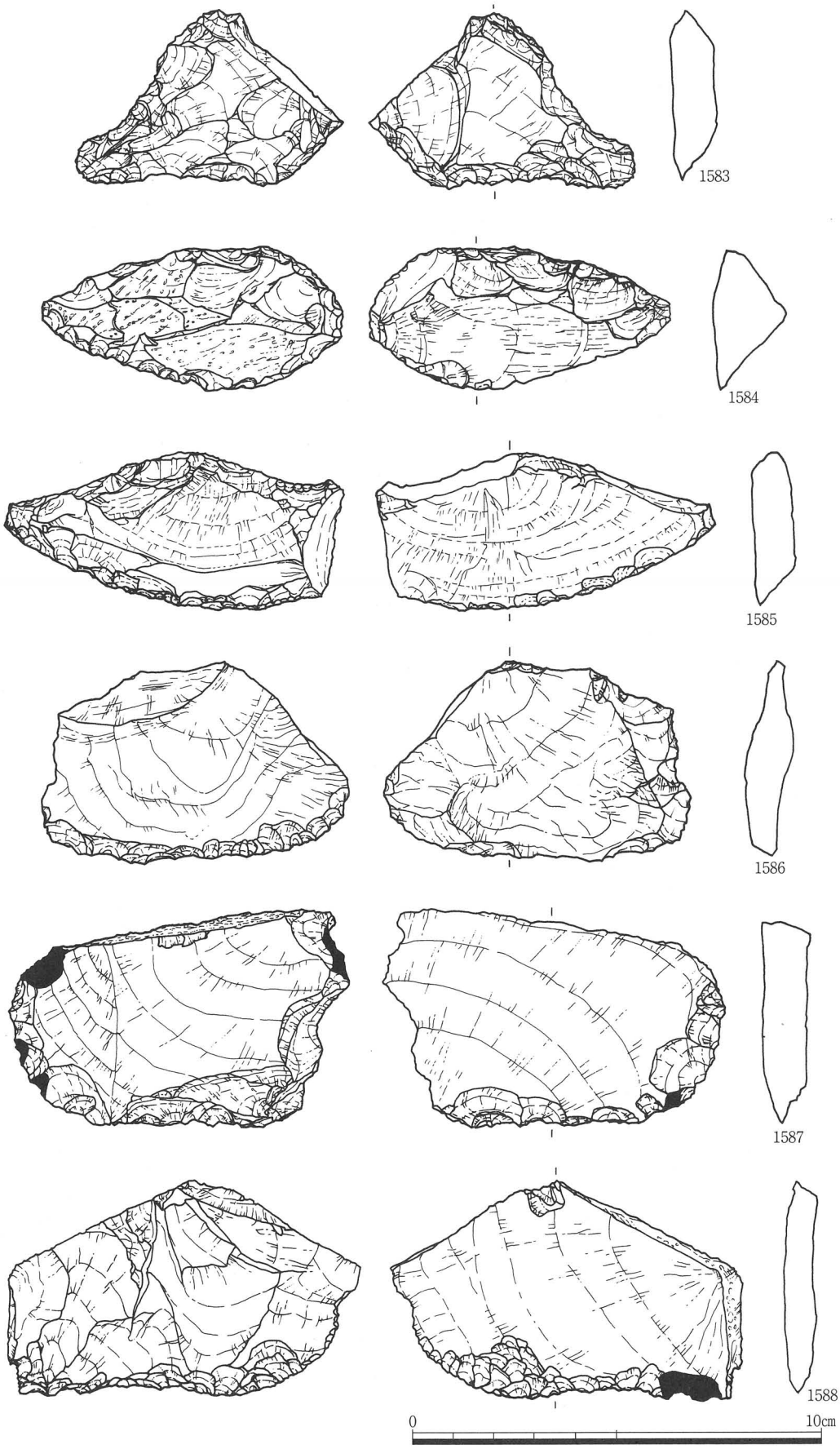
第295図　包含層出土土器⑳



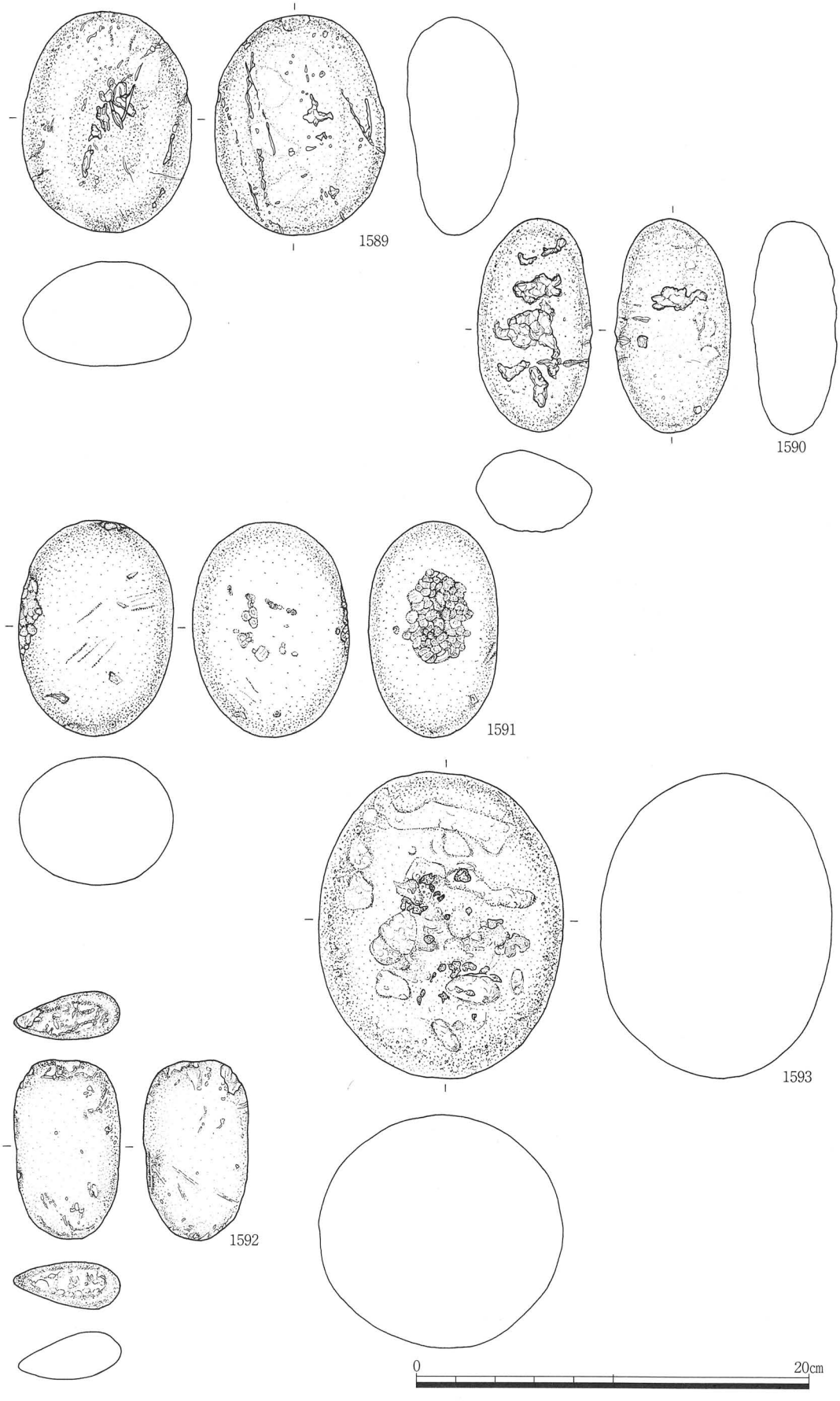
第296図　包含層出土石器①



第297図　包含層出土石器②



第298図　包含層出土石器③



第299図　包含層出土石器④

り出土した遺物について記述を行う。この範囲は、Ⅴ様式末～庄内期の遺物包含層が良好に遺存していた。

1527～1530・1532は、二重口縁壺である。1527の口縁端部には竹管文を施している。1528の口縁部は直線的に開く。口縁端部には竹管文、屈曲部には刻目を加えている。1529は内外面に横方向のミガキを施し、屈曲部は竹管文を施文している。1530は口縁部が大きく外反する。口縁端部には竹管文を施文する。口縁の屈曲部には間隔の短い波状文を施した後、二個一対の円形浮文を貼り付け、円形浮文間の波状文をナデ消している。1532は口縁部が大きく外反して開く。無文である。1531は壺の頸部である。頸部と体部の境界に突帯を貼り付けている。

1533～1537は、広口壺である。いずれも口縁部が大きく外反して開く。1535・1536は、口縁端部に刻目を加えている。1537は頸部に円形浮文を貼り付けていたが、欠損している。1538は手焙形土器である。突帯には刻目を加える。

1539～1545は、甕である。いずれも頸部をくの字状に屈曲させ、右上がりのタタキを施している。1539は頸部に鋭い稜を持つ。体部内面にはケズリを施す。1540の口縁端部は内傾する面を持つ。1541は頸部外面に、口縁部接合時に施したハケが残る。口縁端部は丸くおさめる。1542～1545は、口縁端部を上方向に摘み上げる。1546～1549は、甕の底部である。いずれも右上がりのタタキを施す。1546も甕の底部である。1548の底面には、籾殻圧痕と藁の痕跡が残る。

1550・1551・1553～1555は、高坏の坏部である。いずれも口縁部が底部から屈曲して大きく外反して広がる坏部を持つ。1550はやや小型のものである。1551・1553は、縦方向のミガキの後、横方向のミガキを施している。1552は高坏の裾部である。直線的に大きく開き、4方向に円孔透を穿つ。1556・1557は、高坏の脚部である。前者は脚柱部上部が中実で、外面タタキの後ミガキで仕上げている。後者は脚柱部が中空で、坏部内面側から円盤を充填している。

1580はサヌカイト製の削器である。

1559は須恵質の片口鉢である。口縁部下端には重ね焼きの痕跡が残る。

1558は縄文土器深鉢の底部である。上げ底を呈する。

以上第4地区遺物包含層出土土器は須恵質土器が13世紀ごろ、縄文土器が縄文時代晩期の所産である他は、おおむねⅤ様式末～庄内期に位置づけられる。

第３章　自然科学的分析

（１）はじめに

本章では、当該遺跡及びその周辺の古環境の復元を目的として実施した植物珪酸体分析と微細物分析の結果について報告する。

（２）試料

・分析試料

植物珪酸体分析は、弥生時代遺物包含層の３点（弥生時代遺物包含層試料１～３）と古代の流路であるＮＲ１埋土（第300図－７層より採集）について実施した。微細物分析は、古代に形成された谷部（三日市北遺跡Ⅱで報告）の埋土（試料番号Ⅰ・Ⅱ）とＮＲ１埋土（７層より採集）について実施した。なお、微細物分析を実施した古代の谷部埋土の試料番号Ⅱについては、同層準においてⅡ－１とⅡ－２の２点の分析を行っている。

・ＮＲ１を充填する堆積層について

ＮＲ１については、現地調査を実施して、ＮＲ１－第２調査区西壁（Ｐ290参照）において試料採取を実施している。以下に、現地で観察を行ったＮＲ１埋土の特徴について示す（第300・301図）。

ＮＲ１を埋積する堆積物は、１～８層の単層に区分された。各層において認められた層相から推定される堆積環境については、河成堆積相コード（Miall　1992・1996、松田1999・2000）や人為的な擾乱堆積物の層相についての松田氏の研究（松田1996）に基づく記載を示す。

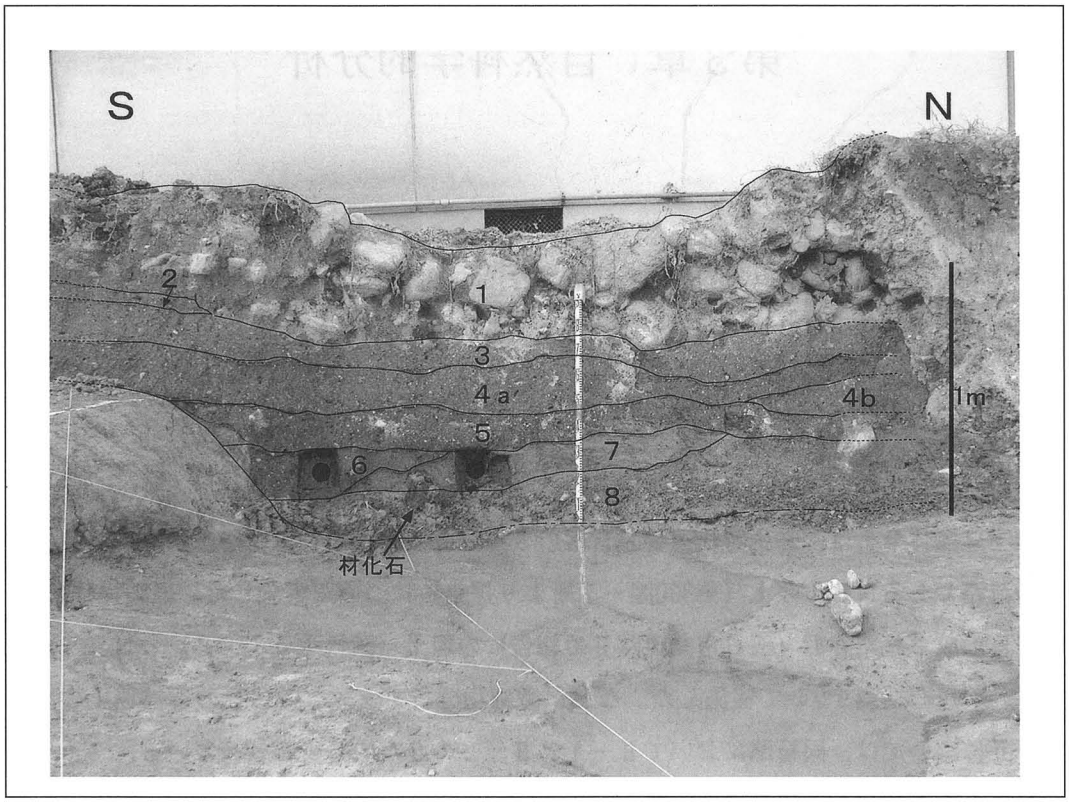
１層：現代の盛土

２層：オリーブ褐色を呈し、塊状をなす砂質シルト。堆積層内には粒団構造が発達している。層相から、耕作土であると推定される。発掘調査結果から、近現代に形成されたことが想定されている。

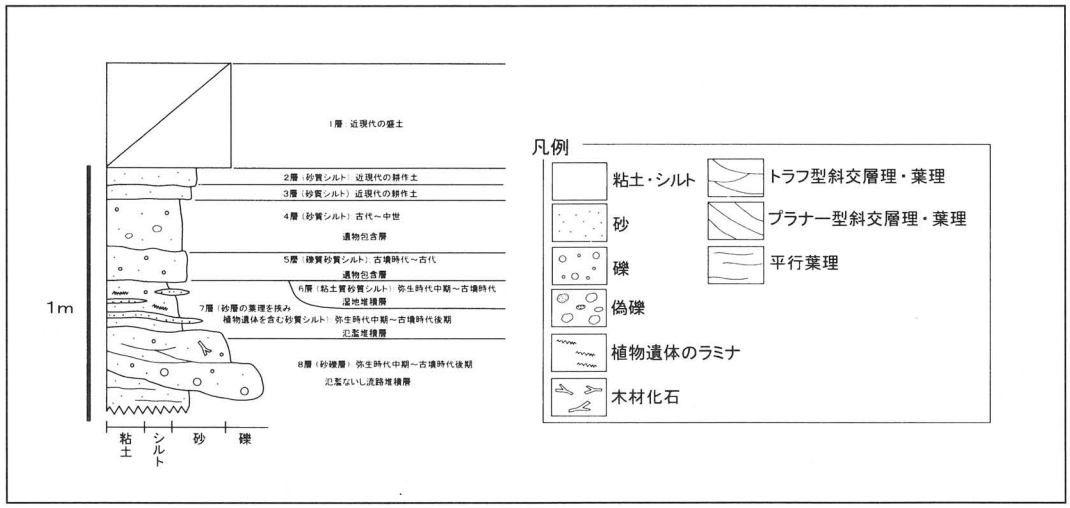
３層：オリーブ褐色を呈し、塊状をなす砂質シルト。層相２層と同様で、耕作土であると推定される。発掘調査結果から、近現代に形成されたことが想定されている。

４層：オリーブ褐色を呈し、塊状をなす砂質シルト。４ａと４ｂ層に分かれる。堆積層内には、直径３㎝程度のシルトの偽礫が含まれている。さらに、粒団構造の発達も認められる。層相から、耕作土であることが推定される。出土遺物の相対年代から、本層は近世に形成されたことが推定されている。

５層：暗オリーブ色を呈し、塊状をなす礫質砂質シルト。層相は４層と同様で、耕作土であると推定される。出土遺物の相対年代から、本層は近世に形成されたことが



第300図　ＮＲ１試料摂取位置図



第301図　ＮＲ１堆積層柱状図

推定されている。

6層：暗オリーブ灰色を呈し、塊状をなす粘土質砂質シルト。層相から、湿地等の静水域の堆積環境が想定される。出土遺物の相対年代から、本層は弥生時代中期～古代末期までの遺物を含み、弥生時代の遺物包含層を撹拌しながら古代末期に堆積

したことが推定されている。

7層：灰色を呈し水平葉理をなす砂質シルト。中粒砂～粗粒砂の葉理が多く挟在する。堆積層内には、炭化物や植物遺体が含まれている。層相から、氾濫堆積物であると推定される。本層は弥生時代中期～古代末期までの遺物を含み、弥生時代の遺物包含層を撹拌しながら古代末期に堆積したことが推定されている。

8層：灰白色を呈しトラフ型斜交層理をなす細礫～粗粒砂。堆積層に含まれる礫の最大直径は、粗粒な中礫サイズである。堆積層内には、材化石が多く含まれる。層相から、氾濫ないし流路堆積物であると推定される。本層は弥生時代中期～古代末期までの遺物を含み、弥生時代の遺物包含層を撹拌しながら古代末期に堆積したことが推定されている。

（3）分析方法

1、植物珪酸体分析

湿重5ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、及びこれらを含む珪化組織片の分類（近藤・佐瀬1986）に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数を一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

2、微細物分析

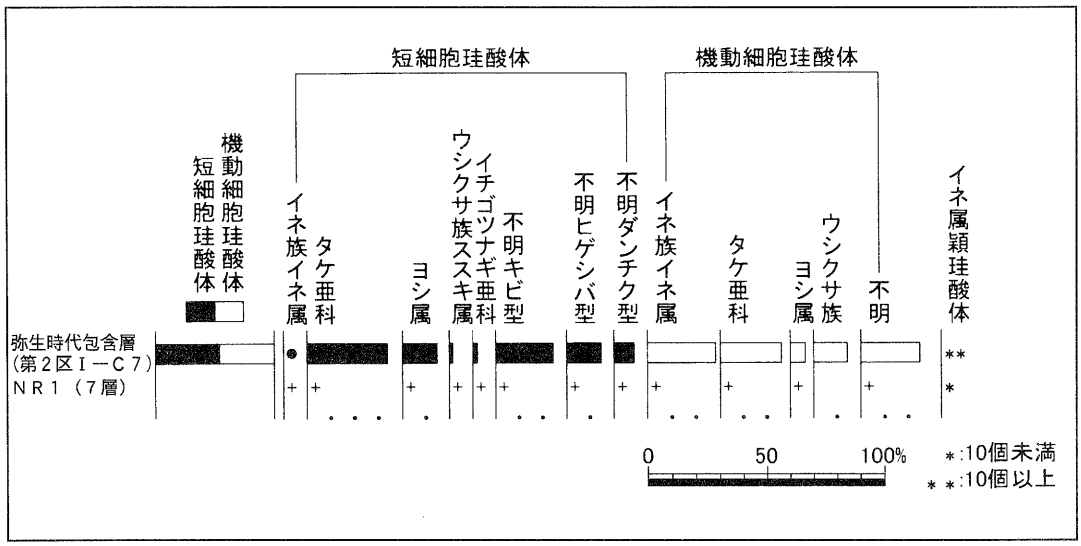
土壌試料200ccを水に一晩浸し、0.5㎜目の篩を通して水洗し、残渣をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や炭化材等を抽出する。検出された植物遺体等は、48時間80℃で乾燥後の重量を求め、種類毎にビンに入れて保管する。

（4）結果

1、植物珪酸体分析

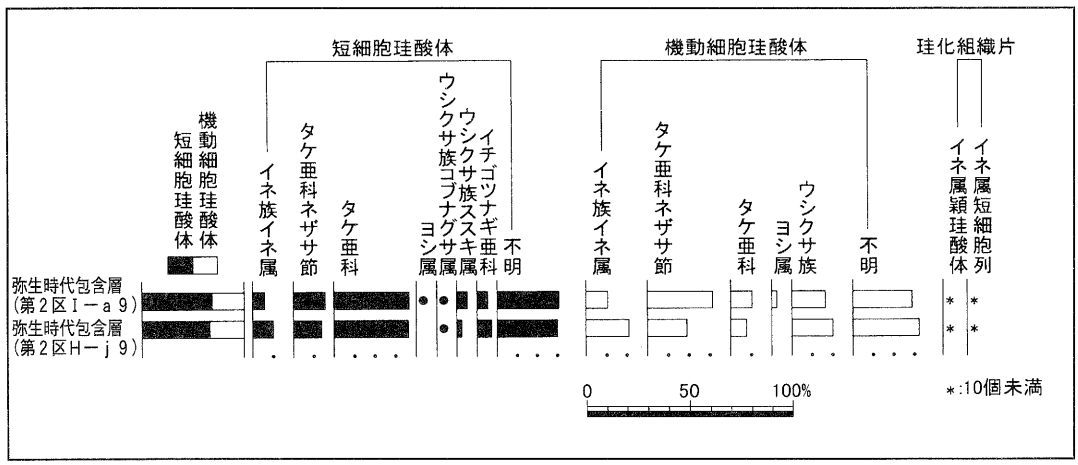
・ＮＲ１（7層）

結果を第3表、第302図に示す。保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体、稲籾に形成されるイネ



第302図　植物珪酸体群集と珪酸組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で計算した。なお、●は１％未満、＋は100個未満の試料で検出された種類を示す。また珪化組織片の産状を＊で示す。



第303図　植物珪酸体群集と珪酸組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で計算した。なお、●は１％未満、＋は100個未満の試料で検出された種類を示す。また珪化組織片の産状を＊で示す。

属穎珪酸体が検出される。この他、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科が検出される。

・弥生時代包含層試料１（第２区Ⅰ－ｃ７区採集）

結果を第３表、第302図に示す。保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。栽培植物では、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体、稲籾に形成されるイネ属穎珪酸体が検出される。この他、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科が検出されるが、タケ亜科の産出が目立つ。

・弥生時代包含層試料２（第２区Ⅰ—ａ９区採集）

結果を第４表、第303図に示す。保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認め

られる。分析試料では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、栽培植物のイネ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出される。イネ属には、葉部に形成される短細胞列と籾殻に形成される穎珪酸体も見られる。

・弥生時代包含層試料３（第２区Ｈ－ｊ９区採集）

結果を第４表、第303図に示す。保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。分析試料では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、栽培植物のイネ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出される。イネ属には、葉部に形成される短細胞列と籾殻に形成される穎珪酸体も見られる。

２、微細物分析

Ａ．ＮＲ１（７層）

結果を第５表に示す。以下に示す種実の他、植物のトゲ、材、炭化材、蘚苔類、不明炭化物（植物由来と思われるが組織が認められないもの）、菌核、昆虫遺骸が検出される。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

・ヤマグワ

（*Morusaustralis* Poiret）

クワ科クワ属

種子が検出された。黄褐色で三

第３表　植物珪酸体分析結果

種　類	弥生時代包含層（第２区Ｉ－ｃ７）	ＮＲ１(7層)
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属	1	2
タケ亜科	66	46
ヨシ属	29	7
ウシクサ族ススキ属	3	3
イチゴツナギ亜科	4	5
不明キビ型	48	11
不明ヒゲシバ型	29	4
不明ダンチク型	16	6
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属	47	4
タケ亜科	44	7
ヨシ属	11	1
ウシクサ族	24	
不明	42	4
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	196	84
イネ科葉身機動細胞珪酸体	168	16
総　計	364	100
組　織　片		
イネ属穎珪酸体	16	1

第４表　植物珪酸体分析結果

種　類 試料番号	弥生時代包含層（第２区Ｉ－ａ９）	弥生時代包含層（第２区Ｈ－ｊ９）
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属	15	21
タケ亜科ネザサ節	40	29
タケ亜科	93	76
ヨシ属	1	－
ウシクサ属コブナグサ属	1	1
ウシクサ族ススキ属	13	5
イチゴツナギ亜科	13	15
不明キビ型	34	28
不明ヒゲシバ型	15	18
不明ダンチク型	29	17
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属	12	22
タケ亜科ネザサ節	36	20
タケ亜科	12	8
ヨシ属	3	－
ウシクサ族	19	21
不明	33	34
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	254	210
イネ科葉身機動細胞珪酸体	115	105
総　計	369	315
珪化組織片		
イネ属穎珪酸体	3	9
イネ属短細胞列	2	2

角状広倒卵形。一部破損している。長さ２㎜、幅1.5㎜程度。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様があり、ざらつく。

・タラノキ

(*Araliaelata*(Miq.)*Seemann*)　　ウコギ科タラノキ属

核（内果皮）が検出された。茶褐色、半月形でやや偏平。長さ2.5㎜、幅1.5㎜程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

・ムラサキシキブ属（*Callicarpa*）　　クマツズラ科

核（内果皮）が検出された。淡～黄褐色、偏平で卵形。長さ２㎜、幅1.5㎜程度。背面は丸みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮がきわめて薄く柔らかいため、破損してドーナツ状になっている。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

第５表　ＮＲ１埋土微細植物片分析結果

種類名	部位	7層
木本		
ヤマグワ	種子	1
タラノキ	核	1
ムラサキシキブ属	核	1
草本		
イバラモ属	種子	1
スブタ	果実	1
ホタルイ属	果実	3
カヤツリグサ科	果実	20
イボクサ	種子	3
カラムシ属	果実	14
アカザ科	種子	1
ナデシコ科	種子	14
キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属	核	5
カタバミ属	種子	1
スミレ属	種子	4
不明種実		5
植物のトゲ		3
材		＋
炭化材		＋
蘚苔類		多
不明炭化物		＋
菌核		4
昆虫遺骸		＋
分析量(cc)		200

＋:細片を含むため個体数推定が困難であることを示す。
多:100個体以上を示す。

・イバラモ属（*Najas*）　　イバラモ科

種子が検出された。淡～茶褐色、針状長楕円体。長さ1.5－２㎜程度。両端は細くなり尖る。種皮は薄く透き通り、表面には縦長の網目模様が配列する。

・スブタ近似種（*Blyxaechinosperma*(Clarke)Hooker）　　トチカガミ科スブタ属

種子が検出された。楕円形で大きさは１㎜程度。表面薄くて柔らかく、微細な突起がある。両端に刺状の突起がある。

・ホタルイ属（*Scirpus*）　　カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、片凸レンズ状の広倒卵形。長さ２㎜、幅1.5㎜程度。背面はやや高く稜がある。先端部は尖り、基部からのびる逆刺をもつ髭状の腕が残る。表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。上述のホタルイ属以外の形態上差異のある複数の種を含んでいるものを一括した。スゲ属と思われる個体等を含む。

・イボクサ（*Aneilema Keisak* Hassk.）　　ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。赤みがかった灰褐色で半横長楕円形。径２㎜程度。背面は丸みがあ

り、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

・カラムシ属（*Boehmeria*）　　イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径１㎜程度。先端部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

・アカザ科（Chenopodiaceae）

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径１㎜程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・ナデシコ科（Caryophyllaceae）

種子が検出された。茶褐色、腎臓状円形でやや偏平。径１㎜程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属（*Potentilla－Duchesnea－Fragaria*）バラ科

核（内果皮）が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。長さ0.9㎜、幅0.5㎜程度。内果皮は厚く硬く、表面は微細な網目模様がありざらつく。

・カタバミ属（*Oxalis*）　　カタバミ科

種子が検出された。黒灰色、卵形で偏平。長さ1.6㎜、幅1.2㎜程度。先端は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には４～７列の肋骨状横隆条が並び、わらじ状にみえる。

・スミレ属（*Viola*）　　スミレ科

種子が検出された。淡黄～淡灰褐色、広倒卵形。長さ1.5㎜、径１㎜程度。基部は尖り、頂部には円形の臍点がある。種皮は薄く、表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

Ｂ．古代の谷部埋土（試料番号Ⅰ）

微細な炭化材や昆虫の破片が微量認められた程度で、種類が特定できる種実遺体等は検出されなかった。

Ｃ．古代の谷部埋土（試料番号Ⅱ）

篩別後の残渣からは、炭化材や木材組織が確認されない。種類、部位共に不明の炭化物（不明炭化物）が少量検出されたのみで、同定可能な種実は認められない。また、炭化材は、Ⅱ－1からは0.1ｇに満たない微砕片が検出され、Ⅱ－２からは１㎝角以下の破片が0.3ｇ程度検出された。不明炭化物は両試料とも0.1ｇに満たない検出量であった。

（５）考察

１、植物珪酸体分析

植物珪酸体分析については、弥生時代包含層とＮＲ１埋土について分析を実施した。分析の結果からは、すべての試料において化石の保存状態が不良であったことが指摘される。植物珪酸体の組成をみると、ネザサ節を含むタケ亜科植物珪酸体が多産する。このうちネザサ節は温暖で乾燥した場所に多いため、照葉樹林が分布する西日本の植物珪酸体分析結果には多くみられる種類であり（杉山、1999）、遺跡周辺に広く分布していたものと考えられる。一方、タケ亜科植物珪酸体は生産量も多く風化に強いため（近藤、1982：杉山・藤原、1986：近藤・佐瀬、1986等）風化に強い種類が多く残った状況も考えられる。このことから、周辺には、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が生育していたと考えられるが、その中でタケ亜科が多くを占めていたとは必ずしもいえない。以上の分析結果をふまえると、分析を実施した調査区及びその周辺では、弥生時代頃及び古代末期頃の時期に、乾燥した土壌環境上に開けた植生景観が展開するような場所であったことが推定される。

また、すべての分析試料において、栽培種であるイネ属植物珪酸体が検出され、稲籾に検出される珪酸体や組織片（葉部組織内に植物珪酸体が配列している破片）も認められた。このような産状は、分析試料中にイネの葉や籾が混入していることを示唆している。このことから、弥生時代頃及び弥生時代中期～古代末期に分析地点では、イネ属珪酸体が地表面付近の土壌・堆積物に取り込まれるような状況が存在していたことが推察される。しかしながら、これらのイネ属珪酸体が分析地点での稲作によるものかどうかについては、微化石分析結果のみからでは判断することが難しい。この点については、本地点周辺の分析結果や発掘結果、地層等の情報をふまえ、さらに検討していくことが必要であると判断される。

２、微細物分析

・ＮＲ１（７層）

ＮＲ１埋土の分析では、これまで河内長野市域でほとんど情報が得られてこなかった弥生時代中期～古代末期の古植生に関するデータが得られた点で重要である。検出された種実遺体をみると、山地に森林を作るような種類は見られず、林縁に生育する低木類、人里近くに生育する草本類、水湿地に生育する水生植物がみられる。また、渡来種や栽培の可能性がある種類等は検出されていない。木本類で検出されるヤマグワ、タラノキ、ムラサキシキブ属は、林縁等に生育する中低木類であり、後背地の丘陵斜面と台地や氾濫原等の境を中心に生育していたものとみられる。また、イバラモ属、スブタ、ホタルイ属、イボクサは水生植物であることから、流路内等の水湿地に生育していたと思われる。カヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、カタバミ属、スミレ属、カラムシ属は、人里等開けた草地に好んで生育するいわゆる「人里植物」であることから、これらは遺跡内やその周辺に分布していたものと考えられる。一方、植物珪酸体をみると、その産出量は少なかった。砂質な氾濫堆積物であることを考慮する

と、堆積速度が早く、取り込まれにくかった可能性がある。なお、微量ではあるが、栽培種のイネ属の植物珪酸体が検出されていることから、遺構周辺に栽培種のイネ植物体が存在したことが推定される。以上のような微細物分析から得られた種実分析から、弥生時代中期～古代末期にＮＲ１近辺では、草地が卓越する開けた植生景観であったことが推定される。このような種実分析結果は、同一層準で実施された植物珪酸体分析結果と調和的である。

・古代の谷部

古代の谷部を埋積する分析試料からは、種実遺体がまったく検出されなかった。分析試料は、淘汰の非常に悪い砂質泥層であった。粒度組成及び調査区周辺の地形をふまえると、分析試料は、クリープ等の地形営力によって丘陵斜面から谷内へ運搬されてきた重力性の堆積物であることが推測される。このような斜面性の地形営力は、通常、乾燥した土壌環境下で形成される。分析を実施した古代の谷部では、掃流性や滞水性の堆積物が認められず、重力性と推測される堆積物によって充填されていた。このことから、古代の谷部では、流水や滞水の堆積環境は形成されず、重力性の地形営力が卓越する場所であったと判断される。以上のことから、古代に谷部では、種実等の植物遺体が非常に残りにくい乾燥した堆積ないし土壌環境が形成されていたことが推定される。

３、河内長野市域の古植生

河内長野市域では、三日市遺跡、高向遺跡や寺元遺跡等で奈良時代及び中世を中心とした花粉分析データが得られている（パリノ・サーヴェイ、1988・1995・1997)。これらの分析結果からは、高向遺跡や寺元遺跡周辺で、奈良時代にカシ類・シイ類による暖温帯林、いわゆる照葉樹林が形成されていたことが推定される。また、奈良時代や奈良時代以降の層準では、マツ属が増加し始め、人為的営力による二次林化の影響が認められるようになる。一方、三日市遺跡周辺では、中世にはカシ類を主体とする暖温帯林が成立していたことが推定されており、三日市遺跡周辺は寺元遺跡周辺に比較して、二次林化の影響があまり及んでいなかったことがうかがえる。このように河内長野市域における奈良時代以降の植生変遷は、地点によって差異があったことが推定される。また、各遺跡の奈良時代以降の花粉化石群集には、上記の種類の他に、コウヤマキ属・ツガ属・モミ属・スギ属といった針葉樹花粉が多く認められている。これらの針葉樹の種類は、随伴種の組成から判断して、温帯性針葉樹のモミ・ツガ・コウヤマキ・スギに比定されるものと考えられる。温帯性針葉樹は、現在では暖温帯林から冷温帯林の推移帯に成立する中間温帯林を構成する要素として認められることから、当時も後背地である丘陵上部に分布していたと考えられるが、花粉化石の出現率が高く、遺跡周辺の林分を構成する要素であった可能性も否めない。これら針葉樹の木材は、弥生時代以降に多用されていることから、その分布拡大様式を捉えることは、人間活動を捉える上でも重要な課題であり今後の情報の蓄積を待って再評価したい。

（6）まとめ

三日市北遺跡で実施した自然科学分析結果から、以下のような知見を得られた。

・分析を実施した調査区及びその周辺では、弥生時代頃及び弥生時代中期～古代末期頃に、草地が卓越する開けた植生景観が展開していたことが推定された。

・分析を実施した調査区では、弥生時代頃及び弥生時代中期～古代末期頃に、地表面付近で乾燥した土壌環境が形成される領域が広がっていたと考えられた。

・弥生時代中期～古代末期頃に、遺跡内の草地のうち相対的に乾燥した土壌環境の場所では、「人里植物」であるカヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、カタバミ属、スミレ属、カラムシ属が分布していた。

・ＮＲ１内で認められた水生植物のバラモ属、スブタ、ホタルイ属、イボクサは古代末期に流路内に生育していた植物に由来すると考えられた。

・弥生時代頃及び弥生時代中期～古代末期頃の時期には、分析地点付近で栽培種であるイネが流路内や地表面付近の堆積物・土壌に取り込まれるような状況が存在していた。

・遺跡後背地の丘陵斜面林縁部等には、古代末期にヤマグワ、タラノキ、ムラサキシキブ属が生育していた。

・古代の谷部では、丘陵斜面に近い部分で斜面性の地形営力が卓越する乾燥した堆積ないし土壌環境が形成されていた。

・三日市北遺跡周辺では、中世にカシ類を主体とする暖温帯林が成立していたことが推定され、寺元遺跡周辺に比較して、二次林化の影響があまり及んでいなかったことが推測された。

第4章　総括

第1節　三日市北遺跡出土畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器について

（1）はじめに

本節では、本遺跡出土の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器様式を検討する。本遺跡は、南河内でも最南端に位置するが、南河内の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器様式は、まとまった調査事例が少ないため、従来、中河内地域と一括されて扱われてきた。しかし、本遺跡の調査で一定量の資料が得られ、その分析により、中河内とは異なる傾向が認められた事から、以下の方法により、本遺跡出土の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器様式について分析・検討を行う（註1）。

本遺跡出土の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器は、生駒山西麓地域からの搬入品（註2）と、生駒山西麓地域以外の地域からの搬入品、そしてそれ以外の非生駒山西麓産土器によって構成されている。このように、使用時の土器様式が複数の生産時の土器様式から成立している点に注目し、まずは、それぞれの生産時の様式に対する分析を行う。生駒山西麓型土器の分析を行う際には、生駒山西麓産土器が本遺跡出土の土器群に占める割合を明らかにするという目的から、搬入率を機能別、時期別に示した。次に、非生駒山西麓型土器を分析する際には、これらの構成を明らかにするという目的から、分類を行い、それぞれの土器群の編年を行った。最後に、使用時の土器様式についても、生産の様式である生駒山西麓産土器と複数の様式の非生駒山西麓産土器がどのように関わり合い、使用時の土器様式を構成するのか若干考察を加えた。

（2）中・南河内の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器様式についての研究史

畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器編年は、小林行雄氏が奈良県唐古遺跡で提唱し（末永・小林・藤岡1943）、その後、佐原真氏が畿内編年として確立した。佐原氏は、第三様式古様式では櫛描文を盛用し、第三様式新様式では凹線文を採用し、第四様式では櫛描文の使用が衰退して凹線文を盛用するという編年を提示した（佐原1968）。しかし、調査が進むにつれて、特に中河内の平野部で、佐原編年と実際の調査成果との齟齬が見出されるようになった。すなわち、凹線文を施す土器のみで構成される土器群が純粋な一括資料として現れず、簾状文を多用する土器群と共伴する事実が判明したのである。以来、佐原編年と事実との齟齬を埋めるために、いくつかの編年が先学により提示されたのである（井藤1983、今村・曽我編1981、広瀬1986、寺沢・森井1989）が、中・南河内の土器の様式構造を明確にとらえるには至らなかった。その後、生駒山西麓産の胎土と器形、文様が強い相関性を有する事、その型式変化が明確である事が判明し、生駒山西麓型（生駒西麓型）と呼ばれる一つの様式が把握された（森井1982、三好1987、1993、國分1992、濱田1990、1993、若林

1997）（註３）。また、生駒山西麓型土器に伴う非生駒山西麓産胎土の土器群も、畿内通有型（河内平野式）として把握されるようになり（濱田1990、1993、國分1992、若林1992、1996、1997、長友2004）（註４）、中・南河内の使用時における土器様式は、生駒山西麓型と畿内通有型の２つの生産時における様式で構成される事が判明した（註５）。

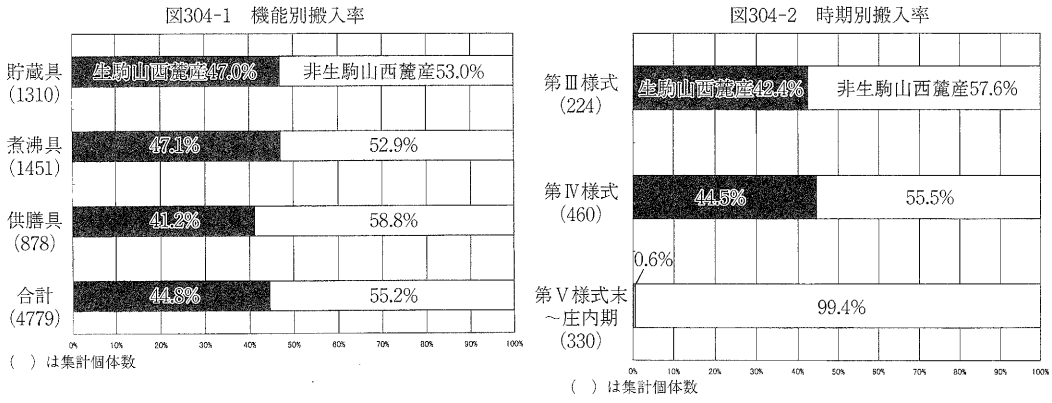
一方、畿内通有型土器群と生駒山西麓型土器群の関係についても研究が進められた。若林邦彦氏は、生駒山西麓産土器の搬入率が生産地である生駒山西麓地域からの距離に反比例して減少していく事、また、生駒山西麓産土器の搬入率が高い程、生駒山西麓型の規範に対して、畿内通有型土器の器形と文様の規範が高くなる事、この事によって、生駒山西麓産土器の搬入率の高い地域では、２つの系列の規範が明確になる事を指摘している。また、この傾向が強い中河内の平野部では、非生駒山西麓産胎土で製作された生駒山西麓型土器と同様の形態・文様を持つ土器がほとんど存在しない。この事から、中河内の平野部での畿内通有型の規範の高さを強調した（若林1997）。

このように、調査事例の多い中河内では、使用時の土器様式が２つの生産時の様式からなる事が判明し、両者の影響関係に関する研究が進んでいる。しかし、前述のように、まとまった調査成果の少ない南河内では、土器様式構造の把握が遅れている（註６）。

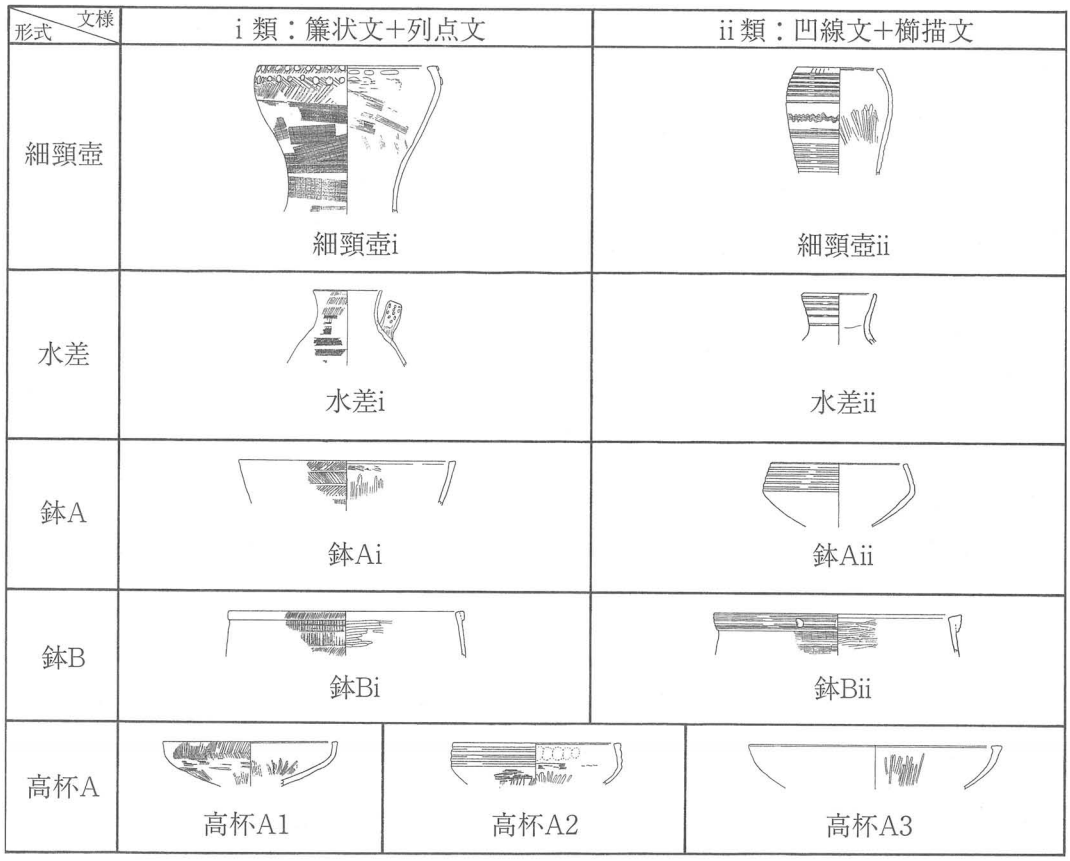
しかし、南河内についての先学の指摘や、本遺跡出土土器の概観から、以下のような中河内との相違点が認められた。すなわち、生産地である生駒山西麓地域からの距離が離れているにもかかわらず、生駒山西麓型土器の搬入率が高い点（三好1987）（註７）、非生駒山西麓産胎土で製作された生駒山西麓型土器と同様の形態・文様を持つ土器が多数存在する点、この土器群に施文されている簾状文の静止痕間隔が一貫して広い点（井藤1987）等である。このような中河内地域との相違点を手がかりに、本遺跡出土の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器様式構造を検討する。

（３）生駒山西麓産土器の分析

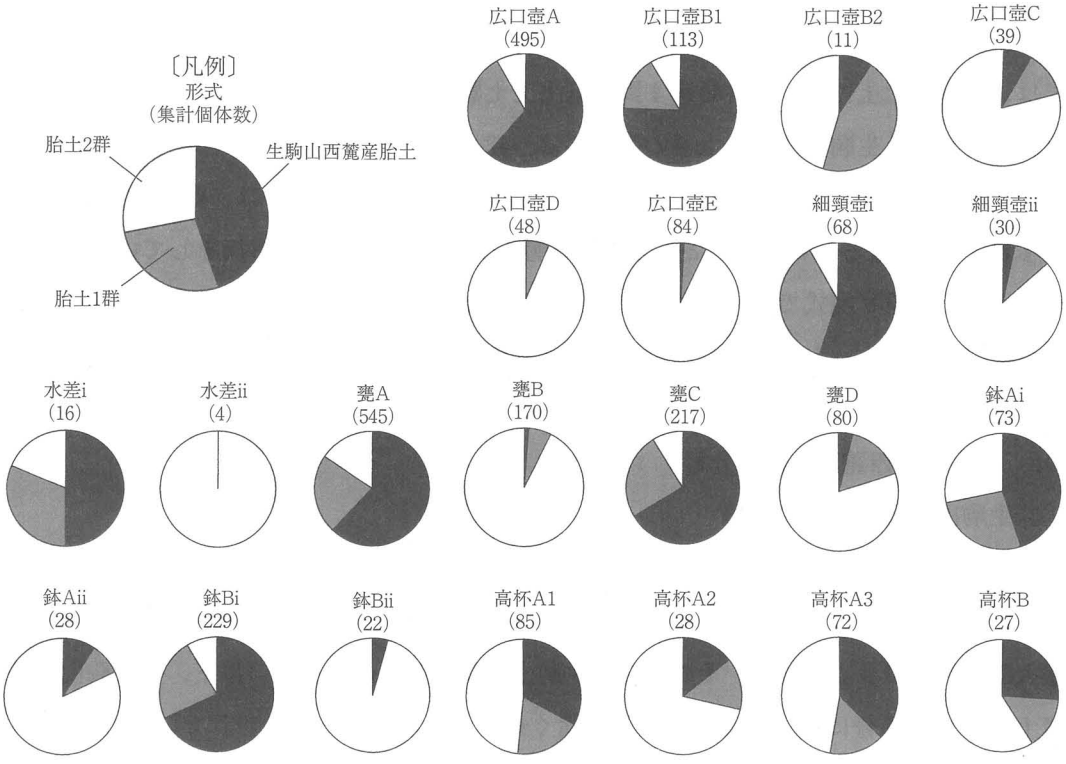
本遺跡出土の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器群は、高い比率で搬入されている生駒山西麓産土器群、わずかな生駒山西麓地域以外からの搬入土器群（註８）、そして約半数を占めるそ



第304図　生駒山西麓産土器の搬入率



第305図　各形式の細分



第306図　各形式に占める生駒山西麓産胎土・胎土１・２群の割合

の他の非生駒山西麓産土器群で構成されている。そこでここでは、非生駒山西麓産土器の規範の発現に強い影響を持つとされる（若林1997）生駒山西麓産土器の搬入率を示す。

近年、各地の生駒山西麓産土器の搬入率に関しては、秋山浩三氏らが精力的に再集計を行っている。秋山氏らは、土器の機能、時期、遺構の性格別に生駒山西麓産土器の搬入率を示している。具体的には、遺跡出土土器全点の内、口縁部の残存する個体を対象として、機能別、時期別、遺構の性格別に、集計作業を実施している。さらに、前述の口縁部の破片に甕・壺の底部、高坏・鉢の脚部、蓋を加算して、遺跡全体の合計として比率を示している（秋山・瀬川・中川2002、秋山・瀬川・中川・池谷2002、秋山・中川・長友・河村2004）。本節でも、秋山氏らの集計方法に従って作業を実施し、本遺跡の生駒山西麓産土器の搬入率について機能別、時期別に提示する（註９）。

第304－１図では、畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器について、土器の機能別に生駒山西麓産土器の搬入率を示した。対象とした器種は、「貯蔵具」として壺・水差、「煮沸具」として、甕、「供膳具」として、高坏・鉢である。また、全点を対象とした「合計」では、秋山氏らの集計方法と同様に、端部の残る破片をすべて集計した数値を示した。この結果によると、本遺跡出土の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器群に占める生駒山西麓産土器の割合は、44.8％と非常に高い数値を示す。土器の機能別にみると、貯蔵具で47.0％、煮沸具で47.1％、供膳具で41.2％と、ほぼどの機能でも、高い数値を示している。このような傾向は、都出比呂志氏が提示している土器の移動類型のＢに当たる（註10）。

第304－２図では、時期別の生駒山西麓産土器の搬入率を示した。ここで対象とした資料は、遺構出土のある程度一括性の高い土器群である。また、第Ⅴ様式末～庄内期については、遺構出土土器と、包含層第４調査区出土土器を対象として集計した。この結果、第Ⅲ様式における生駒山西麓産土器の搬入率は、42.4％という高い数値を示し、第Ⅳ様式においても、44.5％と大きく差はない。一方、第Ⅴ様式末～庄内期では、搬入率が激減し、わずか0.6％となる。この原因として、山田隆一氏が以下のような指摘をしている。山田氏によると、第Ⅴ様式では、土器の動きが緩慢になる。特に石川流域は、弥生時代中期以来の物資の流通ルートから外れる事から、土器の搬入率が低下するという（山田2001）。

（４）非生駒山西麓産土器の分析

①非生駒山西麓産土器の分類

（３）では、畿内第Ⅲ・Ⅳ様式において、生駒山西麓産土器が非常に高い比率で搬入されている事が判明した。これらを除く土器は、形態から生駒山西麓地域以外の地域からの搬入品と判断できる土器と、その他の非生駒山西麓産胎土の土器群（以下、非生駒山西麓産土器とする場合には、確実な搬入品を除くものとする）から構成されている。前者は、本遺跡出土土器の内１％にも満たず、後者がおよそ55％を占めている。以下では、これらの非生駒山西麓産土器を分析する。まずは、形態、胎土からこれらを分類する。

形態の分類については、基本的には第２章第１節で示した分類を踏襲する。広口壺は、口縁端部の形態でＡからＥに分類し、甕は、法量と口縁端部の形態でＡからＤに分類している。また、鉢、高坏についても、坏部の形態でＡ・Ｂに分類した。ここでは、さらに細頸壺、水差、鉢について、文様で細分し、高坏Ａについては、坏部の形態と文様で細分する（第305図）。細頸壺、水差、鉢Ａ・Ｂは、簾状文、列点文を施文するｉ類と、凹線文や多様な櫛描文を施文するii類に細分する。したがって、例えば、鉢Ａでｉ類の文様を施文するものは、鉢Ａｉと呼ぶ。高坏Ａは、坏部の形態で、口縁部が坏部底部から屈曲して直立するものと、内湾しながら開くものに２分し、前者を文様でさらに２分する。これにより、高坏Ａは、口縁部が坏部底部から屈曲して直立する形態の坏部を持ち、簾状文、列点文を施文する高坏Ａ１、同様の形態で、凹線文を施文するＡ２、大きく内湾して開く坏部を持つＡ３に細分した。なお、無頸壺は、母数が極端に少ないため、細分の対象としなかった。

胎土の分類については、特徴的な含有鉱物、色調、焼成で以下のように３群に細分する（註11）。

１群　胎土は緻密である。長石、石英、チャート等を少量含む。長石を多量に含むものや、赤色斑粒を含むものもある。色調はにぶい黄褐色から淡橙色を呈し、全体として明るい色調である。焼成は甘いものが多い。

２群　胎土はやや緻密である。長石、石英の他、チャート、金雲母等の有色鉱物を多量に含む。器壁はざらざらした印象を受ける。色調は白灰色や橙色等さまざまであるが、全体として灰色がかったにぶい色調を呈する。焼成は良好堅緻で断面が灰色を呈するものも多い。

３群　胎土は緻密である。長石、石英、チャート、金雲母をわずかに含む。微細な角閃石を含む事が最大の特徴である。色調は白灰色を呈し、焼成は良好堅緻である。

②土器群の抽出

①で分類した各形式、胎土各群と生駒山西麓産胎土の相関性を示したグラフが第306図である。ここでは、形式と胎土の相関性から、土器群を抽出すると共に、中河内の様相（若林1997）との比較を行う。なお、胎土３群で製作されたものは、甕Ｄが多いが、個体数としては、本遺跡出土土器中の１％程度にも満たず、図示はしていない（註12）。

第306図では、生駒山西麓産胎土で製作されたものが半数以上を占めるもの、胎土２群で製作されたものが半数以上を占めるもの、胎土１・２群、生駒山西麓産胎土が同程度存在するものの３つに分類できる。広口壺Ａ・Ｂ１、細頸壺ｉ、水差ｉ、甕Ａ・Ｃ、鉢Ｂｉは、生駒山西麓産胎土で製作されたものが半数以上を占め、広口壺Ｂ２・Ｃ・Ｄ・Ｅ、細頸壺ii、水差ii、甕Ｂ・Ｄ、鉢Ａii、鉢Ｂii、高坏Ａ２・Ｂは、非生駒山西麓産胎土で製作されたものが半数以上を占める。また、鉢Ａｉ、高坏Ａ１・Ａ３は、非生駒山西麓産胎土が多いが、生駒山西麓産胎土も一定量存在している。

ところで、生駒山西麓産胎土で製作されたものが半数以上を占める広口壺Ａ・Ｂ１、細

頸壺ｉ、水差ｉ、甕Ａ・Ｃ、鉢Ｂｉの各形式は、中河内でも生駒山西麓産胎土との相関性が高く、生駒山西麓型を構成する形式であるとされてきた（三好1987、國分1992、濱田1993、若林1997）。たとえば、広口壺Ａについて、若林氏の研究成果によると、中河内では生駒山西麓産胎土9割、非生駒山西麓産胎土1割と、圧倒的に生駒山西麓産胎土で製作されたものが占める。これに対し、本遺跡では、生駒山西麓産胎土7割、非生駒山西麓産胎土3割と非生駒山西麓産胎土で製作されたものが一定量を占める。この傾向は、他の生駒山西麓型の形式でも同様である。つまり、本遺跡においては、生駒山西麓型の諸形式は、生駒山西麓産胎土で製作されたものと、一定量の非生駒山西麓産胎土で製作されたものの２者がある事になる。また、非生駒山西麓産胎土での中では、胎土１群が多いという傾向がある。本遺跡での、非生駒山西麓産胎土と生駒山西麓型土器に特徴的な形態・文様の組み合わせは、生駒山西麓型の属性のうち胎土が欠落しており、生駒山西麓型模倣型といえる。

また、非生駒山西麓産胎土と相関性の高い広口壺Ｂ２・Ｃ・Ｄ・Ｅ、細頸壺ⅱ、甕Ｂ・Ｄ、鉢Ａⅱ、鉢Ｂⅱ、高坏Ａ２の各形式は、畿内通有型（河内平野式、非生駒西麓型）を構成する形式であるとされてきた（國分1992、濱田1990、1993、若林1997、長友2004）。これらの形式は、中河内においても非生駒山西麓産胎土で製作されたものが多く、本遺跡でみられる傾向と一致する。また、本遺跡では胎土２群で製作されたものが多いという傾向がある。

一方、鉢Ａⅱ、高坏Ａ１・Ａ３・Ｂは、胎土１・２群・生駒山西麓産胎土で製作されたものが同程度である。鉢Ａⅱ、高坏Ａ３については、中河内のデータは示されていないが、高坏Ａ１については、生駒山西麓産胎土で製作されたものの比率が中河内よりも低い結果となっている。この事から、本遺跡では、特に供膳具について、特定の胎土との相関性が低いといえる。

また、甕Ａ・Ｂといった中・小型甕は、中河内においては特定の胎土との相関性が比較的低い傾向がある。しかし、本遺跡では、甕Ａも他の生駒山西麓型の形式と同様に生駒山西麓産胎土との高い相関性を示し、甕Ｂも、非生駒山西麓産胎土、特に胎土２群との相関性が高いという傾向を示す。

以上のように、本遺跡の非生駒山西麓産胎土で製作された土器群には、生駒山西麓型模倣型土器群と畿内通有型土器群があり、これらが、胎土１・２群とそれぞれ相関性が高い事が判明した。この２つの土器群を、それぞれ生駒山西麓型模倣型＝Ａ類・畿内通有型＝Ｂ類と呼ぶ。

以下では、それぞれの土器群について、形態、文様、調整の型式学的な検討を加える。

③Ａ類土器群の分析

Ａ類＝生駒山西麓型模倣型土器群には、前述のように、広口壺Ａ・Ｂ１、細頸壺ｉ、水差ｉ、甕Ａ・Ｃ、鉢Ｂｉがある。生駒山西麓産胎土で製作されたこれらの形式の土器群、つまり生駒山西麓型土器は、時系列的な型式変化が明瞭であると指摘されてきた（森井

1982、寺沢・森井1989、國分1992、三好1993、濱田1993、長友2004）（註13）。

以下では、Ａ類の土器群が、生駒山西麓型土器の型式変化を忠実に模倣しているのか否かを検討する。検討の方法としては、個体数が比較的多く、型式変化が特に明確な広口壺Ａ、甕Ｃの口縁端部を、以下のように形態で分類し、一括性のある程度高い資料によって、生駒山西麓型土器と比較した。

広口壺Ａ、甕Ｃの口縁部の分類については、第307図のとおりである。

次に、一括資料によって、これら形態の類型の現れ方をＡ類と生駒山西麓型について比較する（第308図）。また、比較の際には、形態の比較に加えて、同類型のものについて、Ａ類と生駒山西麓型で、簾状文の原体幅と静止痕の間隔を比較した（第309図）。

この結果、ＳＫ20、ＳＫ５、ＳＫ56ではａ１類、ａ２類、ｃ１類が出土し、ＳＤ12ではａ３類、ａ６類を含むもののａ４類、ａ５類が主体をなす事で、両者が一致している。また、簾状文の静止痕の間隔については、ａ１類からａ４類までは、両者が同一であるが、ａ５類になると相違が見られる。生駒山西麓型は原体幅20～30㎜、静止痕間隔２～５㎜と、原体幅が広がり、逆に静止痕の間隔がきわめて狭くなるのに対し、Ａ類では原体幅20～30㎜、静止痕間隔３～８㎜と原体幅は広くなるものの、静止痕間隔は広いままのものもある（註14）。

このように、Ａ類の広口壺Ａ、甕Ｃの型式変化は、形態ではおよそ生駒山西麓型の型式変化に一致するが、Ａ類広口壺Ａの簾状文の静止痕の間隔については、一貫して広いものもあるという傾向がある。ただ、広口壺Ａ、甕Ｃの両者について、下方向に拡張した口縁端部の内側を丁寧にナデて仕上げるという手法上の特徴があり、生駒山西麓型土器に見られるような口縁端部と体部の間隔が非常に狭いもの（ａ６類、ｃ４類）は、ほとんど見られない傾向がある。また、口縁端部を内側に巻き込む形態を持つものがある事も、Ａ類広口壺Ａの特徴と考えられる。

以上のように、細部では異なるものの、Ａ類の広口壺Ａ、甕Ｃは、ほぼ生駒山西麓型土器と同様の型式変化を採る事が判明した。以下では、広口壺Ａ、甕Ｃの各形式を基軸として、既往の河内編年（寺沢・森井1989）（註15）に添った形で、Ａ類の他形式の編年を行い、Ａ類土器群全体の時系列的な変化を追い、小様式の設定を行った（第310図）。本来ならば、他の形式も型式組列を組み、それぞれの並行関係を一括資料で確認するという方法を採るべきであるが、編年の基軸とした形式以外は個体数が少なく、組列を組む事は不可能であった。したがって、基本的には、一括資料で編年の基軸とした形式と共伴したものを同様式として位置づける。しかし、一括資料から形式を欠く場合には、河内編年に従い、方形周溝墓群、自然流路、包含層出土土器をもって補完した。また、一小様式に相当する良好な一括資料が欠落している場合にも、河内編年に従い包含層等から出土した資料を用いて小様式を構成した。したがって、この場合には複数の遺構から出土した資料によって小様式が構成されており、今後の調査で良好な一括資料が検出された場合は、修正を行う

第307図　広口壺Ａ・甕Ｃ口縁端部形態分類

	生駒山西麓型広口壺A						A類広口壺A						生駒山西麓型甕C					A類甕C				
	a1	a2	a3	a4	a5	a6	a1	a2	a3	a4	a5	a6	c1	c2	c3	c4	c5	c1	c2	c3	c4	c5
SK20								1					4					1				
SK5	1	3						2					2									
SK56							2	2		1			1					1				
SD1		1	1				1	1					2									
SD12			1	9	10	3			1	2	4	1	3	2	2	2		1	1	2		
SD4			2		1		1				1				1							1
方形周溝墓			8	17	26	4			2	7	9	5	8	10	6	2		6	9	2		

第308図　広口壺Ａ・甕Ｃ口縁端部各類型の一括資料における共伴関係

	生駒山西麓型		A類	
	原体幅(単位mm)	静止痕幅(単位mm)	原体幅(単位mm)	静止痕幅(単位mm)
a1類	▲	▲	▲	▲
a2類	▲	7～10	▲	8～10
a3類	10～20	4～8	10～20	6～8
a4類	20～30	4～6	20～30	4～6
a5類	20～30	2～5	20～30	3～8
a6類	無文	無文	無文	無文

▲は計測可能な個体がないことを示す

第309図　広口壺Ａの簾状文の原体幅・静止痕間隔と口縁端部形態の相関関係

必要がある。

Ⅲ-１様式　広口壺Ａでは、ａ１類の口縁端部形態を採るもの、甕Ｃでは、ｃ１類の口縁端部形態を採るものを本様式の指標とする。第Ⅲ様式に属する土器は、一括性の高い遺

構出土のものが多いが、全体として個体数は少ない。一括資料としてはＳＫ20、ＳＫ４出土土器、ＳＫ５出土土器の古相の土器群がある。広口壺Ａ１の体部としては、ＳＫ４出土のものがある。この壺体部は、体部中ほどに最大径を持ち、頸部へと緩やかに接続している。ＳＫ20出土の広口壺は、これ以降の広口壺Ａの祖形となると考えられる。ＳＫ５出土の無頸壺は、無文であり、口縁端部を外折している。

上記の一括資料以外のものでは、簾状文や扇状文を施文する鉢Ｂｉがある。これらは、口縁端部を外折する点で型式学的に本様式に位置づけられると考えられる。

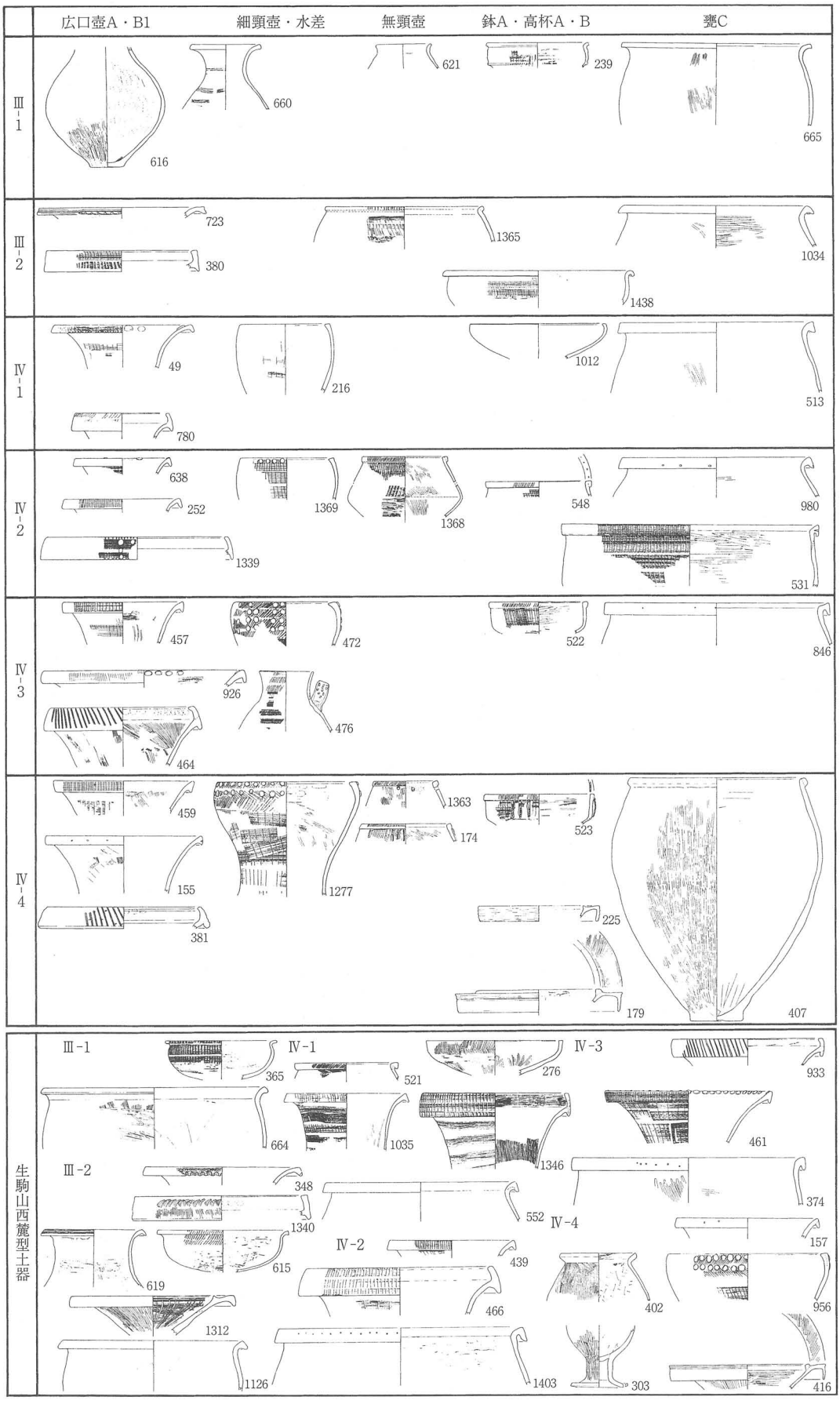
Ⅲ-２様式　広口壺Ａは、ａ２類の口縁端部形態のものを本様式の指標とする。甕Ｃは、ｃ１類の形態を持つが、前様式より口縁端部が拡張する傾向にあり、口縁端部が水平方向にのびるものを本様式に位置づける。一括資料としてはＳＤ１、ＳＫ５新相、ＳＫ56出土土器がある。ＳＤ１出土の広口壺Ｂ１は、上下に拡張した口縁端部がわずかに内傾する。

上記の一括資料以外のものでは、口縁端部が頸部に密着して段状を呈する無頸壺が、本様式に位置づけられる。施文された波状文は、原体を回転させて施文する佐原氏の波状文の分類のⅡａ種（小林・佐原1964）である。鉢Ｂは口縁部を外折し、口縁端部を下方向に拡張するものが本様式に相当する。本様式までに施文される簾状文は原体の幅が狭く、器壁に施文が深くなされている。また、1438にみるように、原体の条痕の間隔が不ぞろいなものも散見される。

Ⅳ-１様式　広口壺Ａは、ａ３類の口縁端部形態を持つもの、甕Ｃでは、ｃ２類の口縁端部形態を持つものを本様式の指標とする。本様式に位置づけられる一括資料は、見当たらない。よって本様式に相当する土器群は、河内編年（寺沢・森井1989）に従って包含層等出土土器から補完したものである。

広口壺Ｂ１は、前様式と比較して、口縁端部の下方向への拡張が進み、口縁端部がやや内傾する。扇状文を施文するやや古い様相を示すが、口縁部の形態から本様式に位置づけた。細頸壺ｉは、生駒山西麓型に見られるような頸部が細いタイプが、前様式までに見られず、やや大型化した頸部が内湾するタイプが、本様式から出現すると考えられる。鉢Ｂｉは、下方向に拡張した口縁端部が体部に密着し、段状を呈するものが本様式であると考えられるが、本遺跡では確認できない。また、胎土１群の高坏Ｂも出土例がない。高坏Ａ１は、屈曲した口縁部が内傾し、坏部全体が深いものが本様式に相当しよう。このように、Ⅳ-１様式では、扇状文や波状文が施文されなくなり、簾状文を多用し、円形浮文の採用が始まる。個体差が大きかった前様式までに比べて、文様に関して斉一性が向上したといえる。

Ⅳ-２様式　広口壺Ａは、ａ４類の口縁端部形態を採るもの、甕Ｃは、ｃ3類の口縁端部形態を採るものが本様式の指標である。一括資料では、ＳＤ12出土土器の古相の土器群が、本様式に位置づけられる。ＳＤ12出土の大型の鉢Ｂｉは、口縁端部を下方向へ大きく拡張しているが、体部には密着していない。広口壺Ｂ1には、生駒山西麓型土器にみるような、



第310図　A類土器群編年表（S＝1/10）

上下の口縁端部が強く内湾するタイプが該当すると考えられるが、本遺跡のA類では、見受けられない。前様式と比較して、さらに口縁端部の下方向への拡張と、口縁端部全体の内傾傾向が進むものが位置づけられよう。

上記の一括資料以外のものでは、細頸壺ｉにおいて、前様式に比べて、頸部の内湾の度合いが強まるとともに、口縁端部の内側への肥厚が始まるものが本様式に相当する。口縁端部がやや高い段状を呈する無頸壺、鉢Ｂｉも本様式と考えられる。Ⅳ-２様式は、鉢Ｂｉや無頸壺に一部列点文（註16）や刻目が施文される他は、簾状文が盛用される様式である。

Ⅳ-３様式　広口壺Ａは、ａ５類の口縁端部形態を持つものが、本様式の指標である。甕Ｃは、前様式と比較して、さらに口縁端部の拡張傾向が進んでいる。一括資料では、ＳＤ12出土土器の新相の土器群が、本様式に位置づけられる。ＳＤ12出土の広口壺Ｂ１は、口縁端部が内側に肥厚し、口縁部外面は斜線文と刺突文で飾る。細頸壺ｉも、口縁端部が内側に肥厚する傾向にあり、外面を列点文や刻目、円形浮文で飾っている。水差ｉは、Ⅳ-１様式で出現していると考えられるが、確実に確認できるのは本様式からである。これも列点文と簾状文で飾っている。

上記の一括資料以外のものでは、前様式に比べて、さらに口縁端部の段が扁平化する鉢Ｂｉが本様式に相当する。口縁端部には刻目を加えるものが多い。この形式に施文される簾状文は、前様式に比べて、原体の幅が拡大し、静止痕の間隔が狭くなる傾向にあるものもある。また、無頸壺も、同様の型式変化を採ると考えられる。以上のように、Ⅳ-３様式では、簾状文は未だ盛用されているが、列点文と併用される傾向にある。また、広口壺Ｂ１の口縁部の文様は、斜線文に置き変わる。

Ⅳ-４様式　広口壺Ａは、ａ６類の口縁端部形態を持つもの、甕Ｃは、ｃ５類の口縁部形態を持つものが本様式の指標となる。遺構出土資料としては、一括性が低いが、ＳＤ４出土土器の最も新相を示す土器群が本様式に位置づけられると考えられる。広口壺Ａでは、無文のものが増加する。ＳＤ４出土の広口壺Ｂ1は、各部の屈曲が甘くなり、矮小化した感がある。高坏Ｂでは、下方向に拡張した口縁端部に、凹線文を施文するようになる。

上記の一括資料以外のものでは、頸部が肥大化し、太頸壺と化した細頸壺ｉが本様式に相当する。口縁部外面は、刻目と円形浮文で飾り、頸部に原体幅が広く、静止痕の幅も広い簾状文を施文している。この点で、細頸壺ｉの型式変化も、細部では生駒山西麓型のそれと異なっているものがある事が分かる。口縁端部が前様式に比べてさらに扁平化し、わずかに段をなす鉢Ｂｉ、無頸壺も、本様式に位置づけられる。これらは、刻目、簾状文、棒状浮文で飾るものもあるが、無文のものも現れる。このように、Ⅳ-４様式では、広口壺Ａや無頸壺で無文化が進む一方、細頸壺は華麗に飾る。また、Ａ類では初めて凹線文が導入される。

以上のように、広口壺Ａと甕Ｃの型式変化を基軸として、一括資料で並行関係を確認し、河内編年（寺沢・森井1989）で補完しつつ、各形式の型式変化を位置づけた。これにより、

広口壺A、甕Cは、生駒山西麓産型とほぼ同様の変遷を採り、他形式も、生駒山西麓型と同形態のものが、ほぼどの様式にも存在する事が判明した。この中では、生駒山西麓型土器を忠実に模倣するものと、大筋では同形態であるが、細部が異なるものに分かれる。

④B類土器群の分析

B類＝畿内通有型には、前述のように、広口壺B２・C・D・E、細頸壺ii、甕B・D、鉢Aii、鉢Bii、高坏A２がある。これらの型式学的変化は、わずかに広口壺の変化が指摘されている（國分1992、長友2004）が、生駒山西麓型ほど明確ではない。そこで、複雑な様相を示す広口壺C・D・Eについて形態を細分し、文様との相関関係を整理した後、形式を改めて設定する。その後、他の形式とともに編年的な位置づけを行う。ここでは、後の考察の都合上、分類についてはすべての胎土で製作された広口壺C・D・Eを対象とし、編年については、胎土２群で製作されたもののみを対象とした。

形態の分類としては、基本的には第２章第１節で示したものを踏襲するが、口縁端部の形態でさらに細分する。

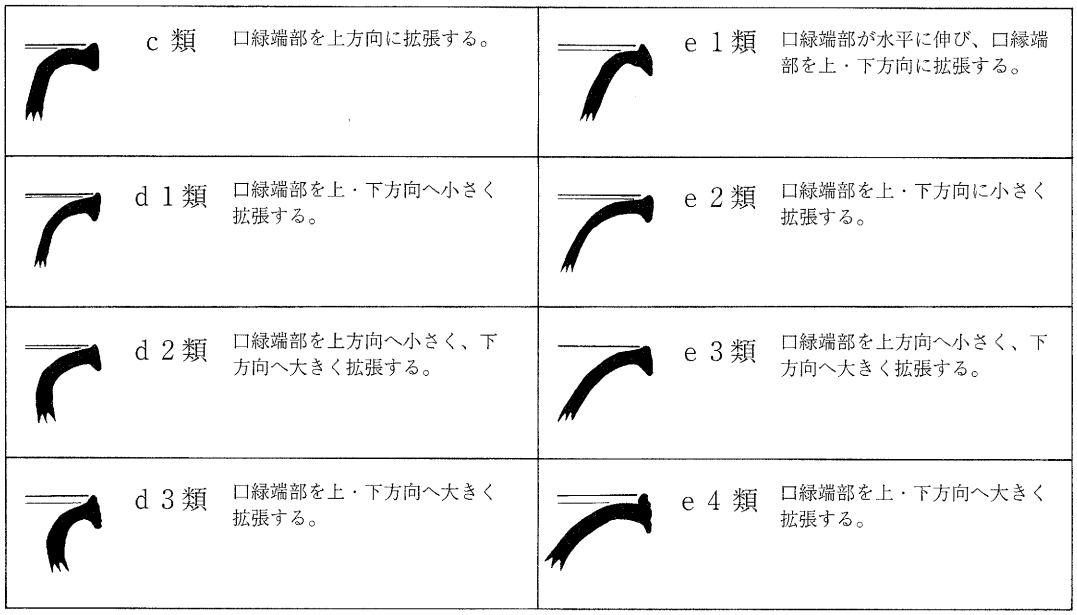
広口壺D・Eは、口縁端部の形態で第311図のように細分する。これらの類型の時系列的な変化を検討するが、対象とした広口壺は、編年の基軸とした形式と共伴した資料が少ない。このため、先に型式変化の方向性を想定し、それと諸属性の相関関係を検討する事で、それぞれの組列の妥当性を検証する。

これらの型式変化の方向性としては、口縁端部の拡張という型式変化を想定する。すなわち、想定される組列は、c類→d１類→d２類→d３類、e１類→e２類→e３類→e４類の２つである。

次に、文様の分類を行う。本来であれば、体部の文様構成を検討すべきであるが、本遺跡出土土器は、頸部より下部の形態が判明している個体がほとんどない。このため、ここでは、口縁端部外面と口縁部内面の文様の相関関係を検討する。

口縁端部外面の文様は、波状文、列点文、簾状文手法の列点文、凹線文、凹線文に研磨痕を加えたもの、簾状文、刻目、無文に分類する。口縁部内面の文様は、扇状文、列点文、ヘラ押圧、直線文、無文に分類する。これらの文様が、実際にどのような組み合わせで存在するのかを示したのが第312図である（註17）。

以上の形態分類と文様の分類の組み合わせを図313に示した。無文のものはc・d１～d３類の口縁端部の分類と組合い、有文の各文様の組み合わせは、ある程度特定類型と相関性がある。この事から、大きく無文のc・d１～３類と、有文のc・d１～３類、e１～４類の３つの組列に分類可能である。これらの型式変化を、前述のようにc類→d１類→d２類→d３類、e１類→e２類→e３類→e４類と仮定すると、２群の胎土で製作されたものについては、それぞれの組列で文様との組み合わせをスムーズにたどる事が可能である。この傾向に合致しないものは、胎土1群や生駒山西麓産胎土といった２群以外の胎土で製作されたものである。よって、胎土２群で製作されたこれらの型式組列を有文の



第311図　広口壺ｃ・ｄ・ｅ口縁端部形態分類

	口縁端部外面	口縁部内面
a類	波状文	列点文
b類	波状文	無文
c類	波状文	扇状文
d類	列点文	列点文
e類	刻目	列点文
f類	無文	扇状文
g類	波状文	波状文
h類	凹線文	扇状文

	口縁端部外面	口縁部内面
i類	凹線文	無文
j類	簾状文手法の列点文	無文
k類	簾状文	列点文
l類	凹線文	列点文
m類	凹線文	ヘラ押圧
n類	簾状文	直線文
o類	凹線文+研磨痕	無文
p類	無文	無文

第312図　広口壺ｃ・ｄ・ｅ口縁端部内外文様組み合わせ

	a類 (波・列)	b類 (波・無)	c類 (波・扇)	d類 (列・列)	e類 (刻・列)	f類 (無・扇)	g類 (波・波)	h類 (凹・扇)	i類 (凹・無)	j類 (簾列・無)	k類 (簾・列)	l類 (凹・列)	m類 (凹・へ)	n類 (簾・直)	o類 (凹研・無)	p類 (無・無)
c類	4●1	3	1						3		1					12●4▲2
d1類	6	1●1	1		●1											24●2
d2類									3							8
d3類									1							
e1類	2		2													
e2類	12	3	5●1	1	1					1	2					2
e3類	8●1	4	●1		●1	●1	●1	▲1	2●1	3	1	2●2				
e4類										1	3	2	1	1	●1	

※文様の分類の略称は次のとおり 括弧内は(口縁端部外面文様・口縁部内面文様)の順で記述 波=波状文、無＝無 文、扇＝扇状文、列＝列点文、刻＝刻目、凹＝凹線文、簾列＝簾状文手法の斜列点文、へ＝ヘラによる押圧、凹研＝凹線文に研磨痕を加える
※●の数値は胎土1群の個体数
※▲の数値は生駒山西麓産胎土の個体数

第313図　広口壺ｃ・ｄ・ｅ口縁端部形態と文様の相関関係

ｃ類→ｄ１類→ｄ２類→ｄ３類（広口壺ｄ）、ｅ１類→ｅ２類→ｅ３類→ｅ４類（広口壺ｅ）、無文のｃ類→ｄ１類→ｄ２類→ｄ３類（広口壺ｃ）として、Ｂ類の広口壺の形式に設定する。

以下では、これらの広口壺の型式組列とＢ類の他形式の編年的な位置づけを試みる。検討の方法は、Ａ類と同様に、生駒山西麓型広口壺Ａ、甕Ｃ、Ａ類広口壺Ａ、甕Ｃを編年の基軸とし、一括資料で広口壺ｃ・ｄ・ｅの型式組列との並行関係を探る。広口壺ｃ・ｄ・ｅは、ほとんどが包含層等から出土した資料であるが、ｅ２類が頸部に凹線文を施文している事、ｅ３類がＳＤ12から出土している事を定点として、前節で示したＡ類土器の編年に位置づける。また、これと同時に他の形式も、一括資料で並行関係を確認し、一括資料

から欠如している場合は、河内編年（寺沢・森井1989）や和泉地域の編年（樋口1990、地村1999等）を参考に位置づけた。

Ⅲ-１様式　前述のように、第Ⅲ様式に属する遺構は多いが、個体数は少ない。ＳＫ56出土土器の古相が本様式に位置づけられる。ＳＫ56出土の広口壺ｃ類は、口縁が水平方向に長くのびる。

上記の一括資料の以外のものとしては、大型の鉢で、口縁部が直立するタイプを本様式に位置づける。また、図化していないが、長頸で口縁端部を上下に拡張する河内平野式広口壺Ａ（國分1992）と考えられる口縁端部片も出土している。このように、Ⅲ-１様式は、直線文やわずかに扇状文を施文する程度で装飾性は低い。

Ⅲ-２様式　ＳＫ５、ＳＤ１出土土器、ＳＫ56出土土器の新相部分等が、本様式に位置づけられる。ＳＫ５から出土した大型の鉢は、口縁部が内湾し、口縁端部も内側へ肥厚するタイプである。また、ＳＤ１からは甕Ｂが出土しており、本様式から出現したと考えられる。この甕は、口縁端部の内側をわずかにくぼませる程度で、口縁端部をほとんど上方向には拡張していない。

上記の一括資料以外のものでは、広口壺Ｂ２も口縁端部を欠損しているが、内傾気味に立ち上がると想定できる事から、本様式に位置づけられる。広口壺では、前様式の広口壺ｃに比べて、水平にのびた口縁部が短縮する型式変化と、有文化という形式分化を想定して、有文のｄ1類、ｅ1類を本様式に位置づける。文様はａ・ｂ・ｃ類がある。本様式の列点文は、粒がやや大きく、それぞれの間隔が離れているものが多い。このような列点文は、一単位ごとの間隔も広い。胎土２群の高坏Ｂは、坏部内面の突帯がわずかに突出し、口縁端部の拡張が始まる。このように、Ⅲ-２様式では、直線文に加えて、波状文、列点文、斜線文等多用な文様が採用され、装飾性が豊かになる。

Ⅳ-１様式　前述のように、本様式に位置づけられる一括資料は、見当たらないが、凹線文の採用を本様式の指標とする。本様式では、凹線文が広口壺Ｂ２の口縁端部、広口壺ｄ・ｅの頸部、細頸壺iiの口縁部、鉢Ａii・高坏Ａ２の口縁部及び鉢Ｂiiの大型品の口縁端部に採用される。広口壺Ｂ２は、口縁端部が直立するものを本様式に位置づける。広口壺eはe２類の形態を持つものが、頸部に凹線文を施文するので、本様式に該当すると考えられる。同様の口縁端部の形態を持つｄ１類も本様式であると考えられる。文様はａ類、続いてｃ類が多く、ｄ・ｅ類もわずかに伴う。列点文は、前様式の粒の大きなタイプに加えて、小ぶりの粒が連なっているタイプが現れる。後者は、一単位ごとの間隔が狭い。また、粒の単位の見えない板状工具による押圧も出現している。これには、櫛目が観察可能なタイプと、観察できないタイプがある（註18）。広口壺cの型式変化は明確でないが、広口壺ｄ・ｅとの形態の類似性から、頸部が直立するものを本様式に位置づける。細頸壺iiは、頸部がわずかに膨らむ傾向にあり、口縁部に凹線文を施文する。高坏Ａ２は、口縁部が内傾して立ち上がり、凹線文を施文する。大型の鉢Ｂiiは、口縁端部が段状に肥厚し、

凹線文を施文する。鉢Ａii、高坏Ａ２は口縁部が内傾する。高坏Ａ３は深い坏部を持つ。高坏Ｂは口縁端部の拡張が進む。このように、Ⅳ-１様式では、凹線文が一部の形式に導入された点で、大きな画期といえる。

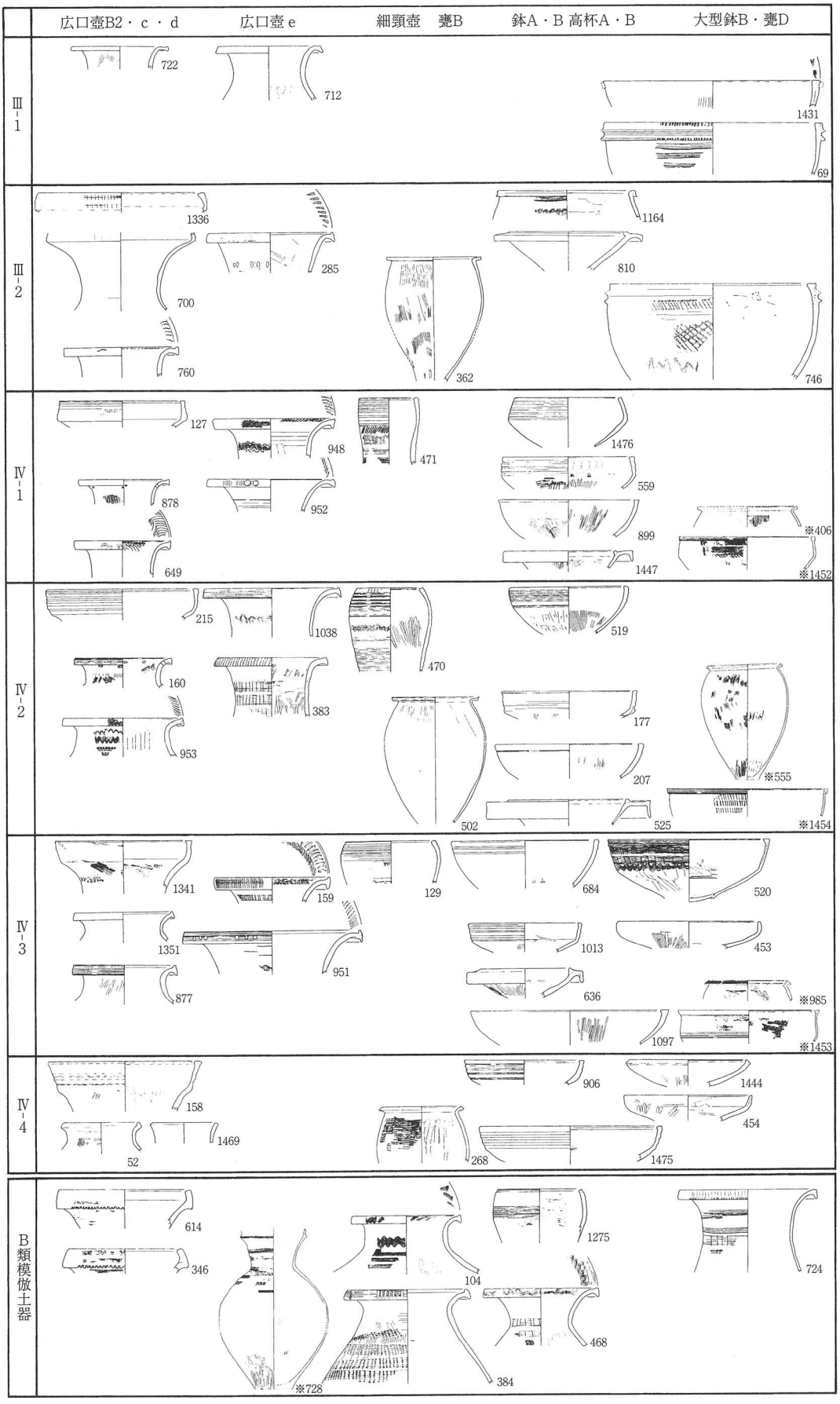
Ⅳ-２様式　ＳＤ12出土土器の古相部分が、本様式に位置づけられる。ＳＤ12出土の広口壺ｅは、口縁部に凹線文を施文する。文様はａ類が残る。また、本様式から口縁端部の装飾に凹線文と簾状文が導入されるため、ｉ・ｊ・ｋ類等もあり、新旧の組み合わせが並存している。細頸壺iiは、頸部が大きく膨らむようになる。鉢Ａiiは、口縁部がほぼ直立する。

上記の一括資料以外のものでは、広口壺Ｂ２の口縁部は直立し、口縁端部がわずかに内側に肥厚するようになる。広口壺ｄ・ｅは、ｄ２類とｅ３類の形態が、本様式である。広口壺ｄは、本様式を最後に凹線文以外の文様が施文されなくなる。このため、広口壺ｃに凹線文が採用させたものとの峻別は、口縁部のみでは不可能である。また、甕Ｂ・Ｄの口縁端部に、凹線文が導入されるのも本様式と考える。大型の鉢Ｂiiは、口縁端部が内側に肥厚するようになる。高坏Ａ３は、坏部がやや浅くなり、口縁部が肥厚する。高坏Ａ２は口縁部が直立する。高坏Ｂは口縁端部の拡張が本様式に最大になる。以上のように、Ⅳ-２様式は、凹線文の採用が拡大し、各種の櫛描文と併用される。

Ⅳ-３様式　ＳＤ12出土土器の新相部分が、本様式に位置づけられる。ＳＤ12出土の中型の鉢Ｂiiは、口縁端部が内側に肥厚する。

上記の一括資料以外のものについては、広口壺Ｂ２は、口縁端部がわずかに外傾し、口縁端部の内外へ肥厚するようになる。広口壺ｄ・ｅでは、ｄ３類、ｅ４類の形態を持つものと、広口壺ｃではｄ3類の形態を持つものがある。文様の組み合わせは、ｋ・ｌ・ｍ類がある。この中では、列点文の一単位の間隔が狭いものが多い。細頸壺iiは、頸部がさらに膨らむ傾向がある。口縁端部が内側に肥厚するものはあまり認められない。文様は櫛描文が衰退し、凹線文が盛用される。甕Ｄの凹線文が施された口縁端部は、さらに拡張されている。小型の鉢Ａii、高坏Ａ２では、口縁部がわずかに外傾するようになり、口縁端部が内側に肥厚する。このタイプの高坏では、無文のものも登場する。高坏Ａ３は、さらに坏部が浅くなり、口縁端部も内側に大きく肥厚する。また、大型の鉢Ｂiiの口縁端部も、内側への肥厚が顕著となる。このように、Ⅳ-３様式では、一部の形式で櫛描文が衰退するが、広口壺では簾状文が盛用され、大型の鉢Ｂii・中型の鉢Ａiiの一部は、依然として多様な櫛描文で飾られる。櫛描文の衰退と凹線文の盛用をもって、本様式も大きな画期の一つとする事ができる。

Ⅳ-４様式　良好な一括資料は少ない。広口壺Ｂ２は、口縁部がさらに外傾し、屈曲がなだらかになる。広口壺ｅは、本遺跡では出土例がない。広口壺ｄもしくはｃは、頸部の短縮を想定すると、口縁端部が矮小化したタイプが、本様式に位置づけられる。また、直口の短頸壺も本様式から出現すると考えられる。細頸壺は、肥大化したものが本様式に位



第314図　B類土器群編年表（S＝1/10　※は1/20）

置づけられると考えられるが、出土例がない。高坏Ａ２は有文・無文両者とも口縁部がさらに外傾し、屈曲が緩やかになる。高坏Ａ３は坏部がさらに浅くなり、口縁部も直線的に開くようになる。このように、Ⅳ-４様式では、無文化が進行し、次の第Ⅴ様式につながるような形式も出現している。

以上のように、Ｂ類の広口壺の口縁端部を型式分類し、その型式組列を編年的に位置づけた。また、他の形式も河内編年（寺沢・森井1989）に従って位置づけた。個体数が少ない水差ii等は、位置づけが困難であった。良好な一括資料が少ないという資料的な制約のために、中河内との細かな時間差を見出す事はできなかったが、本遺跡のＢ類土器群は、およそ中河内の畿内通有型と同様の様相を示すと考えられる（註19）。

⑤Ａ・Ｂ類土器群以外の土器

最後にＡ・Ｂ類以外の土器群、すなわち胎土と形態の組み合わせがＡ・Ｂの規範から逸脱する土器群に触れる。これらの土器群には、①胎土３群で製作された畿内通有型土器群、②胎土１群で製作された畿内通有型土器群、③胎土２群で製作された生駒山西麓型模倣型土器群がある（註20）。①は、甕Ｄに多いが、胎土が緻密で、焼成は堅緻、シャープなつくりをしているものがほとんどである。これらの土器群は、その特徴的な胎土から、中河内の平野部からの搬入品と考えられる（註21）。また、③は、広口壺Ｂ２に多く、生駒山西麓型をほぼ忠実に模倣している。一方、②は、やや異質な形態や文様を持つものが存在する。以下では、これら②の土器群を型式学的特徴や、共伴した土器から編年的に位置づけながら、様相を概観する。

Ⅲ-１様式　ＳＫ４出土の広口壺Ｂ２（614）が、本様式に位置づけられる。口縁部下端に刻目を加える点が特徴である。

Ⅲ-２様式　ＳＫ56から出土した広口壺（724）は、体部と頸部の境界がきわめて不明瞭な形態を呈する。共伴した土器から本様式に位置づけられると考える。また、ＳＫ56出土の広口壺Ｂ２（728）は、口縁部を欠損しているが、残存部が外側に直線的にのび、屈曲部に刻目を加える。ＳＤ１出土の広口壺Ｂ２（346）も、口縁部に波状文を施文し、口縁部下端に刻目を加えている（註22）。３者とも、口縁部下端に刻目を加える点で、広口壺Ｂ２としては異質なものと考えられる。このような広口壺Ｂ２は、遅くともこの次のⅣ-１様式を最後に姿を消す。

Ⅳ-２様式　広口壺ｄ（104）はｄ２類の形態を呈し、本様式に位置づけられる。文様の組み合わせはｃ類＝波状文・扇状文であり、本様式のＢ類にはすでに採用されなくなった組み合わせである。また、広口壺ｅ（468）は、ｇ類＝波状文・波状文の組み合わせを採る。これはＢ類には見られない組み合わせである。さらに、頸部の簾状文も河内平野の畿内通有型の編年（國分1992）に照らし合わせると、早い時期の採用である（註23）。

Ⅳ-４様式　ＳＤ４から出土した広口壺ｅ（384）は、ｅ４類の形態を呈し、本様式に位置づけられる。文様の組み合わせはｏ類＝凹線文に研磨痕を加えたもの・無文であり、

B類には見られない。体部の文様も、一見簾状文と見紛うような直線文と列点文の組み合わせである。また、編年的な位置づけは困難であるが、口縁端部の内側への肥厚のほとんど見られない細頸壺（1275）も特異な形態であると考えられる。

このように、畿内通有型土器群には、形態や文様において異質なものがあり、これらは胎土１群で製作されているものが多い。これらをＢ類模倣土器と仮称する。

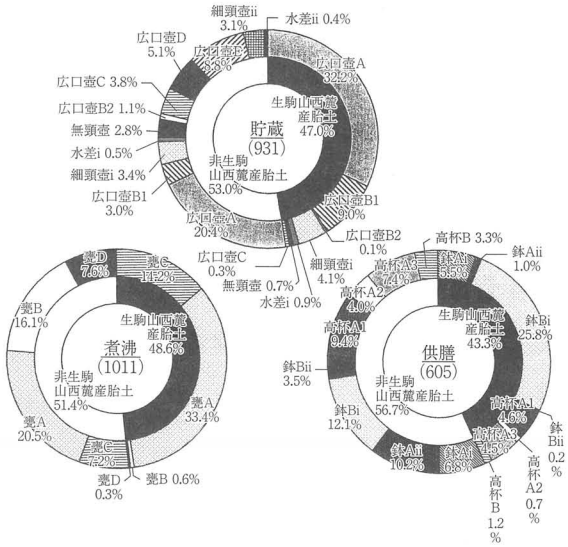
（５）まとめ

以上のように、本遺跡出土の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器を、まずは、生駒山西麓産と非生駒山西麓産に分けて、その比率を集計した。その結果、生駒山西麓産土器がどの機能においても、高い比率で搬入されている事が判明した。次に、非生駒山西麓産土器群について、胎土、形式により、Ａ類＝生駒山西麓型模倣型、Ｂ類＝畿内通有型に分類し、それぞれについて編年を行った。この結果、Ａ類＝生駒山西麓型模倣型土器群は、生駒山西麓型土器群とほぼ同様の型式変化をするが、細部において異なる事、Ｂ類＝畿内通有型は、中河内のそれと同様の型式変化を取る可能性がある事が判明した。一方、このような特定の胎土と形式の組み合わせが適用されにくい形式が存在する事も確認できた。最後に、Ａ・Ｂ類に該当しない土器について検討し、畿内通有型と同様の形態をとりながらも、やや異質な土器群は、胎土1群で製作されているものが多く、これらをＢ類模倣土器と仮称した。

このように、本遺跡出土の非生駒山西麓産土器の大半が、非生駒山西麓産胎土１・２群で製作されている。この２者は、大師山遺跡や本遺跡出土の第Ⅴ様式末～庄内期の土器群にもみられる。このような事から胎土１・２群は、本遺跡周辺で産出する粘土と混和材を用いた胎土であり、Ａ・Ｂ類土器群及び、Ｂ類模倣土器は、本遺跡周辺で製作された在地系土器群と呼ぶ事が可能ではないだろうか。

以上の点をもとに、本遺跡での畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の使用時の土器様式について、若干検討を加える。まず、生産体制について、在地系土器群が胎土、形態の相関性により分類可能である事から、少なくともＡ類、Ｂ類土器群を製作した二つの集団を想定する。以下集団Ａ・Ｂと呼ぶ。また、Ａ類の中でも、生駒山西麓型土器の模倣の度合いが異なる事から、集団Ａの中でも複数の単位による作り分けが想定される。また、Ｂ類模倣土器に関しては、Ａ類と同様に胎土１群で製作されているが、簾状文を模倣している事等からも前２者と別の集団を想定するが、これらの土器群の出土が少ない事や、様式としてとらえられない事からも、集団Ａ・Ｂのようなレベルでのまとまりとしてはとらえられないものであると考えられる。

一方、甕Ａは、中河内の平野部では、特定の胎土と相関性が低い事が指摘されている（若林1997）。若林氏によると、中・小型甕（筆者らの分類の甕Ａ・Ｂ）は消耗の度合いが高く、回転率が高い。このような形式には、規範が適用されにくいとしている。しかし、本遺跡では、甕Ａについては、生駒山西麓産胎土で製作されたものが７割、非生駒山西麓



第315図　三日市北遺跡出土土器における胎土各類型と各形式の占める割合

産胎土で製作されたものが３割であり、この比率は、他の生駒山西麓型の諸形式と同様の数値を示す。また、この７：３という比率は、中河内平野部においては、規範が適用されにくいとされている甕Ａと同様の比率である。中河内平野部の規範と比較すると、本遺跡での様相は、生駒山西麓産土器の搬入率は同様であるが、形式と胎土の相関性は低いといえる。また、甕Ｂについても、非生駒山西麓産胎土で製作されたものが９割と高い比率を占め、これも中河内平野部との相違点である。

以上の事から、これらの集団Ａ・Ｂの情報伝達について検討すると、Ａ類は生駒山西麓型土器と比較して、忠実に模倣しているものと、形態・文様において若干異なるものが見出される事から、生駒山西麓地域からの人々が、在地系の胎土である胎土１群で製作した場合と、彼らからの直接的な土器製作の情報伝達ではなく、搬入された生駒山西麓型土器を集団Ａが模倣した場合があると想定される。一方、Ｂ類については、中河内の平野部とほぼ同様の土器を製作しており、集団Ｂは畿内通有型の情報を直接的に授与していると考えられる。畿内通有型の模倣というより、畿内通有型の緩やかな情報伝達の一端に位置しているといえるのではないだろうか（註24）。また、Ｂ類模倣土器の製作集団は、Ｂ類の土器群を間接的な情報から模倣して製作しているものと推測する。最後に、甕Ａ・Ｂについて、甕Ａは特定の胎土と相関性が低いという傾向は、本遺跡では認められず、生駒山西麓型の形式として集団Ａが模倣したものと推測される。甕Ｂについても、生駒山西麓産胎土で製作されたものはほとんど搬入されていない。本遺跡では、中河内の様式として、集団Ｂが製作していたと推測する。

ここまでは、本遺跡での生産時の様式とその背景について、若干の検討を加えた。これに対して、使用時の様式についても若干触れる。（２）の研究史で概観したとおり、中河内の土器様式は、畿内通有型と生駒山西麓型から構成されている事が判明している。本遺跡では、それに生駒山西麓型模倣型が加わり、３つの生産時の様式で使用時の土器様式が構成されている事が判明した。その内訳は第315図のとおりである。本遺跡出土土器のうち、生駒山西麓型土器と生駒山西麓型模倣土器が占める割合は、貯蔵具で約75％、煮沸具でも約75％となる。一方、供膳具では、鉢Ｂｉ以外に生駒山西麓産胎土と相関性の高い形式が認められない（註25）が、非生駒山西麓産胎土の鉢Ｂｉと生駒山西麓産土器を合わせると約60％程度である。このように、本遺跡では生駒山西麓型土器、生駒山西麓型模倣土器の割合が非常に高い事が使用時の様式の特徴であるといえ、生駒山西麓型土器の需要の高さが窺える。

以上、本遺跡出土土器の整理から看取された点から、畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器様式に若干触れた。本遺跡での傾向を直ちに南河内に適用する事はできないが（註26）、従来まで様相が明らかでなく、閉鎖的なイメージがあった南河内の弥生中期の土器様相の一端を多少とも示す事ができたのではないかと思われる。しかし、本遺跡の土器様式には、生駒山西麓型土器の搬入が深く起因すると考えられるが、この生駒山西麓型土器に付与された意味についての言及は、筆者の力量不足のため、また報告書の後論という本節の趣旨から外れるため、今後の課題とする。本節が三日市北遺跡の重要性を伝える一助となれば幸いであり、本節に課せられた課題は達成できると考える。

本節を執筆するに当たって以下の方々にご指導、ご助言、ご協力を賜った。末筆ながら御礼申し上げます（五十音順、敬称略）。

粟田薫、柏田有香、北山峰生、木立雅朗、竹村忠洋、田中元浩、坪田恵、鍋島隆宏、廣瀬覚、藤田徹也、森岡秀人、和田晴吾

註

（註１）本節執筆後、富田林市教育委員会粟田薫氏のご厚意により、喜志遺跡出土土器を実見する機会を得、また、有益なご教示を頂いた。喜志遺跡出土土器には、本遺跡出土土器と異なる様相が認められ、南河内の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器様式は一様ではない事が分かった。本節の分析で得られた土器様式構造は、南河内全域に適用できるとはいえないが、複雑な様相を示す南河内の土器様式構造のあり方の一つを示す事はできたと考える。

（註２）本節では、角閃石を大量に含み、茶褐色を呈する胎土を生駒山西麓産胎土とする。また、この胎土と特定の形態、文様が一致するものを生駒山西麓型と呼ぶ。このように、胎土の産地を無批判に限定する事や、胎土の産地と土器の生産地を同一に考える事に、問題を指摘する意見もある（藤田1984）。しかし、南河内では、角閃石を含む地質が確認されておらず、中河内からの粘土の移動及び、混和材としての角閃石の移動の可能性を除くならば、南河内においては、角閃石を含む胎土で製作された土器群は、搬入品であるという事が可能であると考える。

（註３）森井貞雄氏は、筆者らの言う生駒山西麓型広口壺Aの型式変化を明らかにし、また、胎土、形態、調整の斉一性が高いこれらの一群の土器を「瓜生堂式」と呼んだ（森井1982）。曽我恭子氏も、瓜生堂遺跡出土土器を河内の土器（生駒山西麓産）、他地域の土器（非生駒山西麓産）に分類し、それぞれを編年した（今村・曽我編1981）。その後、三好孝一氏もこれらの土器群を「生駒山西麓型土器」と呼び、各地への搬入率を示した（三好1987）。また、亀井遺跡出土土器を中心として「生駒山西麓型土器」の編年を提示した（三好1993）。広瀬和雄氏も亀井遺跡における生駒山西麓産土器の搬入率を示し、「恒常的供給体制」を指摘した（広瀬1986）。

（註４）濱田延充氏は、河内平野で出土する土器群が胎土、形態、文様から「生駒西麓型」と「非生駒西麓型」に分類可能である事を指摘し、「生駒西麓型」の編年を提示した（濱田1990、1993）。また、國分政子氏も「生駒西麓式」「河内平野式」それぞれの編年を提示した（國分1992）。

（註５）若林邦彦氏はこのような状況を「様式の二重構造」と呼んだ（若林1992）

（註６）南河内の著名な弥生時代中期の集落としては、喜志遺跡、甲田南遺跡、中野遺跡、国府遺跡等がある。中野遺跡では、溝出土土器が層位的に取り上げられ、非生駒山西麓産胎土で製作された生駒山西麓型と同形態・文様の土器群が含まれている事が指摘された（忍・中辻1984）。また、中野遺跡の溝

各層出土の土器群は、南河内の畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の土器の型式学的変遷を層位学的に検証できる資料の一つであるとされた（濱田1993、長友2004）。さらに、喜志遺跡では、遺構出土土器が既往の土器編年（寺沢・森井1988）に当てはめて報告された（栗田・田中1997）。このような成果がありながらも、南河内の土器様式構造は、未だ明らかになっておらず、頻繁に中河内と一括して扱われてきた。

（註７）南河内地域の特に石川流域では、生駒山西麓型土器の搬入率が高い事が指摘されている（三好1987）。この成果は、前述の若林氏の研究と齟齬をきたしている。和泉地域の池上曽根遺跡と本遺跡は、生産地である生駒山西麓地域からの距離が30kmと同程度であるが、生駒山西麓型土器の搬入率は前者が10％程度であるのに対し、本遺跡は40％以上と三好氏の指摘どおり高い。一方、中野遺跡では、生駒山西麓産土器の搬入率が１割程度と報告されている（忍・中辻1984）。このように、南河内でも一様に生駒山西麓産率の搬入率が高いとはいえない。

（註８）生駒山西麓産土器以外の搬入土器について、生産地が判明しているものとしては、以下のようなものがある。これらは、主に土器の形態から搬入土器と判断した。

Ⅱ様式末からⅢ様式にかけて搬入されている大和形甕（390・435・626）。胎土に角閃石を含み、外面には非常に細かい列点文を施文する鉢。讃岐産（173・669）。外面にハケ調整後、縦方向にヘラ状押圧を加えている壺の頸部。西方からの搬入品と考えられる（1594）。頸部に凹線文を施した壺（964）、垂下口縁に凹線文を施文し、内面には列点文や扇状文、波状文を施文する広口壺（632・858・932・1349）。ともに摂津産。口縁部に突帯を貼り付けた直口壺。紀伊産（350）。口縁端部の肥厚が少ない受口壺。播磨産（875）、等がある。以上は、森岡秀人氏のご教示による。また、本遺跡は南河内最南端に位置し、紀伊とも地理的に近いが、胎土に結晶片岩を含む紀伊形甕は出土していない。

（註９）本節でも、集落域と墓域に分けて遺構の性格別に集計すべきであるが、本遺跡の方形周溝墓出土土器には、集落から流入した包含層に含まれた土器が混入しており、純粋な供献土器を抽出する事が不可能であった。このような資料的な制約から、本節では、遺構の性格別の分析を行わない。また、秋山氏は、大型の甕に煤が付着していない事から、大型の甕を貯蔵具として扱っている（秋山1991）が、本遺跡では、口径を算出できる破片が少ないため、甕はすべて煮沸具として集計した。

（註10）移動Ｂ累計とするものは、壺、甕、高坏、鉢等、紡錘車を含む多くの器種が動き、人の移動が想定できるものとしている（都出1989）。

（註11）このように、出土土器の胎土を分類した研究に秋山浩三氏（秋山1991）や、國下多美樹氏（國下1997、2001）らの研究等がある。

（註12）たとえば、515・1037・1419などがある。

（註13）具体的には、広口壺Ａでは、口縁端部を拡張する方向が下斜め方向から垂直方向へと変化する。この間に、口縁端部の製作技法が、口縁部を継ぎ足して成形する連続成形から、擬口縁を一旦作った後に拡張した口縁端部を付加する分割成形に変化する（森井1982）。また、体部の最大径の位置が、下方へ移動する。文様に関しては、簾状文の幅が広くなると同時に、静止痕の間隔が狭くなる傾向がある。甕Ｃでは、口縁端部の下方向への拡張が顕著になる傾向がある。この他、広口壺Ｂ１や細頸壺ｉ、鉢Ｂｉでも型式変化が明瞭である。

（註14）生駒山西麓型模倣型土器の中には、狭い原体幅の工具を用い、静止痕の位置を合わせる事で、原体幅の広い工具を用いた施文と同様の効果を意図したものもあるという。富田林市教育委員会粟田薫氏のご教示による。

（註15）寺沢氏・森井氏の編年（寺沢・森井1989）は、生駒山西麓型と畿内通有型を分離していないが、生駒山西麓型広口壺Ａの型式学的変遷を基軸としており、時系列的な変遷としては妥当な編年案といえる。また、両氏は、畿内通有型の形式の型式学的な編年も行っており、両者が混在して様式を構成している点は、使用時の様式といえる。

（註16）本様式以降の列点文は、粒が小さく、それぞれの粒が密接して並ぶものが多い。

（註17）但し、凹線文・列点文の組み合わせは、垂下口縁を持つ広口壺にも見られる組み合わせである。

これらの土器は、摂津からの搬入品と考えられるため、ここで行う非生駒山西麓産土器の検討からは排除した。

(註18) これらの列点文のタイプは、原体の違いに起因するのではなく、手法の違いの差であると考えられる。櫛状の原体を垂直に器壁に押し当て、1回の施文ごとに丁寧に上下させると、粒が大きく、それぞれが間隔を持って連なるタイプの列点文になる。列点文の一単位ごとの間隔が開いているのも、このためであると考えられる。また、原体を器壁に対して斜め方向に押し当てると、粒が密接して連なったタイプの列点文となる。このタイプは、原体をあまり上下させず連続して施文するので、一単位ごとの間隔が狭くなると考えられる。また、後出するものは簾状文との峻別が困難ないわゆる簾状文手法の斜列点文（芋本1992）となるが、これについても、原体を上下させる動作の振幅幅がきわめて短くなった事によるもの考えられる。したがって、列点文の変化も、施文回数の増加とそれによる施文手法の省力化でとらえる事が可能である。一方、櫛目の有無は、横山浩一氏の研究成果（横山1978）で明らかなように、原体の磨耗度の差に起因する。

(註19) 本遺跡では、広口壺B2等に見られる頸部に突帯を貼り付けた破片や、器台と思われる凹線文が連続した破片は確認できなかった。

(註20) これら以外に、暗灰色や茶褐色を呈し、胎土に角閃石をほとんど含まない胎土で製作された生駒山西麓型土器と非常に類似した形態、文様を持つ土器がわずかにある。また、生駒山西麓胎土で製作された畿内通有型もわずかに出土している。

(註21) 森岡秀人氏のご教示による。瓜生堂遺跡の報告書では、微細な角閃石を含む胎土で製作された土器を瓜生堂産としている（藤沢他1980）。これには、多方面からの批判もある（今村・曽我編1981、藤田1984）。しかし、註2のように、少なくとも南河内においては、これらの土器も搬入品という事が可能である。

(註22) このように、広口壺B2の口縁部下端に刻目を加えるものが南河内の地域性である事を三好氏も指摘している（三好1983）。

(註23) 國分氏の編年によると、畿内通有型広口壺の体部の文様に簾状文が採用されるのは、本節のⅣ-4様式である（國分1992）。また、若林氏の研究によると、このタイプの頸部と簾状文の組み合わせは、和泉で多く存在する（若林1997）。

(註24) 胎土2群の中には、多少のバリエーションもみられる。本節では、特徴的な胎土である3群で製作された畿内通有型の土器群を中河内平野部からの搬入品として分離したが、他にもB類としたものの中にも、他地域からの搬入品が峻別できていない可能性もある。

(註25) 鉢Bi・Biiや凹線を施文する鉢Aiiや高坏A2以外は特定の胎土との相関性が低い。この傾向は、中河内でも認められ，貯蔵具や煮沸具に対して供膳具の性格の違いを表しているものと考えられる。

(註26) (註1) 参照。喜志遺跡や中野遺跡では生駒山西麓型模倣型土器を含む点では本節と同様であるが、生駒山西麓産土器の搬入率が低い点（忍・中辻1984）で本遺跡と異なり、また、喜志遺跡では、非生駒山西麓産胎土の点で本遺跡と異なっている。

脱稿後、三日市北遺跡土器検討会において森岡秀人氏、鍋島隆宏氏、竹村忠洋氏、北山峰生氏、田中元浩氏から有益なご教示をいただいたが、時間的な問題から本節にほとんど反映する事ができなかった。別稿を用意する事を約束してお詫びの言葉としたい。

第２節　弥生時代集落の検討

（１）はじめに

本節では、当該遺跡で検出された弥生時代集落の調査成果を総括し、周辺部の集落と比較検討を行う。当該遺跡が位置する河内長野市域は、３方向を丘陵に囲まれており、きわめて自己完結的な地域である。このことを踏まえて、集落群の消長の整理を行うことは、１つの地域が社会的・政治的変化の影響をどのように受けて変化していくのか検討する上で重要な例証となると考える。

そこで、本節では、（２）において分析の対象とする地域の設定を行い、（３）で調査成果を総括することで、当該遺跡より検出された弥生時代集落の構造を分析し、（４）において地域内にある他の集落遺跡との比較検討を行う。また（５）では、対象地域を広げ南河内地域の中での位置づけを行いたい。最後に（６）では、三日市北遺跡廃絶後の地域社会の展開について整理を行った。このような検討によって、当該遺跡を地域の中で位置づけ、歴史的な評価を与える。

（２）地域の設定

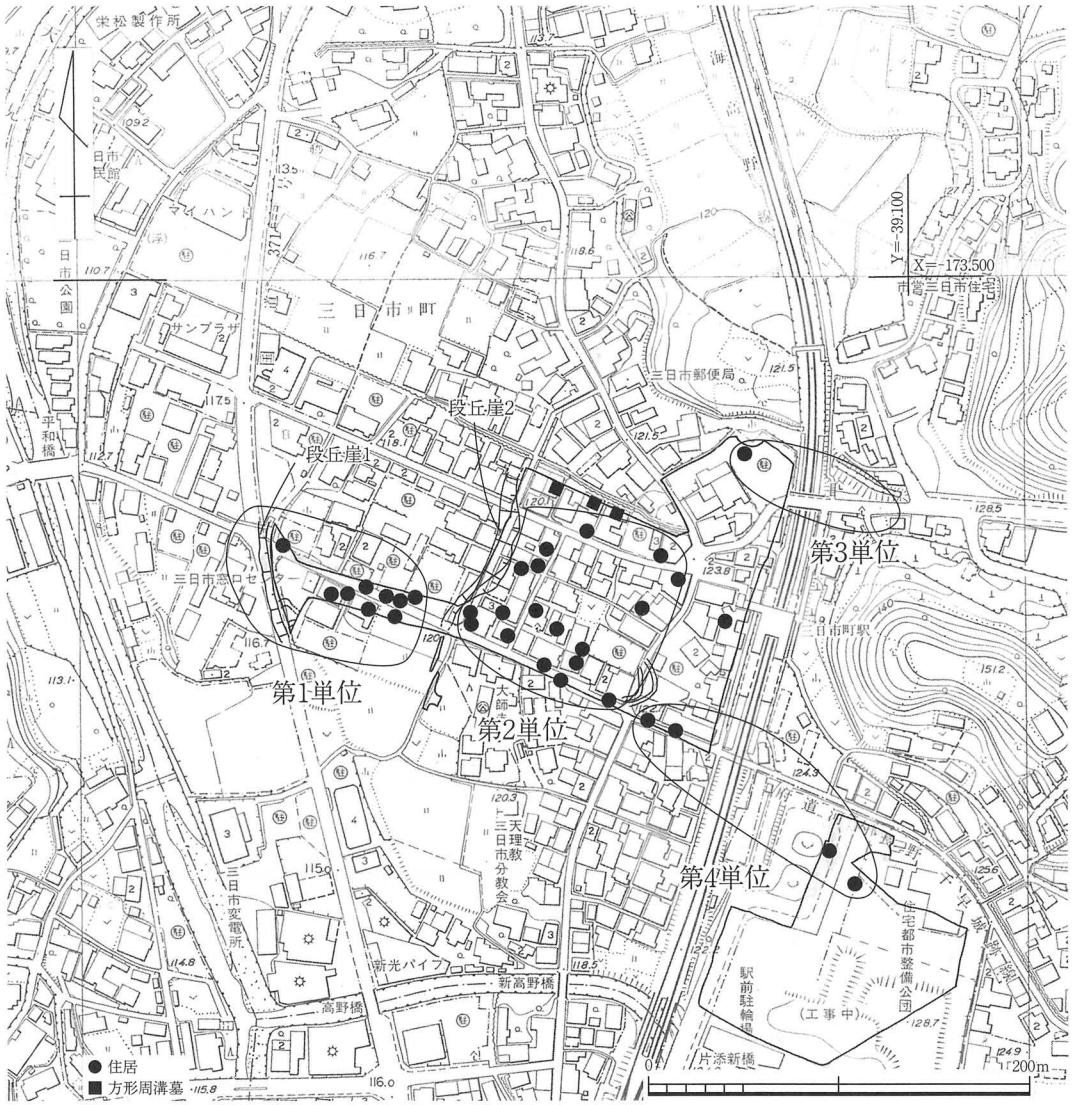
分析の対象とする河内長野市域は、西を小山田丘陵、東を金剛山、南を和泉山脈に囲まれている。小山田丘陵によって旧河内国と旧和泉国が隔てられており、金剛山によって旧河内国と旧大和国が隔てられ、和泉山脈によって旧河内国と旧紀伊国が隔てられているので、これらの自然地形は、社会的・政治的な地域境界としての意味をもっていたといえる。また、このような地理的範囲を基礎にして、首長墓である大師山古墳が築造されることから少なくとも古墳時代前期には政治的にも１つの単位としての意味を持ったものと考えられる。

また、河内長野市域の地形は、沖積地がほとんど存在しておらず、このような沖積地は河川沿いに細長く分布するのみである。なお、河川沿いには、河岸段丘が発達しており、市域の平坦地はほとんどがこのような河岸段丘で占められている。弥生時代の集落遺跡の多くは、このような河岸段丘上に位置している。

（３）三日市北遺跡の集落構造

ａ、立地と範囲

集落は、第２章第２節で述べたように、金剛山西山麓から東西方向に派生する尾根の裾部に位置し、石川の支流である天見川が形成した河岸低位段丘上に立地する。集落の範囲について、第２章第２節で述べたように、弥生時代の遺構が検出される場所と、されない場所の境界が東・西・南部で認識されている。北部については、遺構面が続くことも予想されるが、最北部に方形周溝墓群が位置しており、地形等を勘案しても、この方形周溝墓群の北にさらに居住域が広がる可能性は低いと考える。このようなことから、弥生時代集



第316図　三日北遺跡住居・方形周溝墓配置図（1/4000）

落の範囲は東西300m、南北200m程度であると考えられる。

b、竪穴住居の構造

第２章第３節で報告したように、当該遺跡で検出された弥生時代集落遺跡は、竪穴住居、掘立柱建物、溝、土抗、方形周溝墓によって構成されている。特に、弥生時代の竪穴住居は、調査区のほぼ全域にわたって31棟が検出されている。また、過去の調査でも２棟の弥生時代中期の竪穴住居が検出されており（三日市遺跡調査会1988ａ）、集落の様相を整理する上で重要である。ここでは、集落を構成する竪穴住居について整理を行う。竪穴住居は、弥生時代中期のものが30棟、庄内期のものが１棟検出されている。

各竪穴住居はすべて、床面が片付けられた状態で埋没しており、床面上に置かれた状態で出土した土器はない。ただし、石台と思われる石器は、普遍的に、床面に置かれた状態で出土している。床面上に穿たれた遺構からは、土器が出土する場合もあり、竪穴住居が

機能していた年代を考える際に参考となる。

弥生時代中期の竪穴住居には、構造上の共通点が多い。共通点として、まず、平面形態が円形を呈していることが挙げられ、28棟で確認されている。次に中央部に炭化物が堆積した土坑が検出されていることが挙げられる。このような土坑は、18棟で検出されている。これは、灰穴炉（都出1989）と考えられる。また、壁沿いに溝が巡っているものが25棟で確認できている。また、建替の痕跡が認められる竪穴住居も多く、14棟で痕跡を確認している。

このような共通性が認められる一方で、相違点も存在する。相違点としては、まず規模の違いが挙げられ、直径が８ｍ前後の大型のもの（ＳＩ１・４・７・12・13・17・19・21・22・23・25・26・31）と、6.5m前後の中型のもの（ＳＩ５・９・15・16・18・28・29）、５ｍ未満の小型のもの（ＳＩ２・３・８・10・11・20・24・27・30）がある。柱穴は大型のものが６本、中小型のものが４本となる場合が多いようであるが、ＳＩ９は２本柱である可能性がある。ちなみに、過去の調査では、２本柱の竪穴住居が検出されている（三日市遺跡調査会1988ａ）。

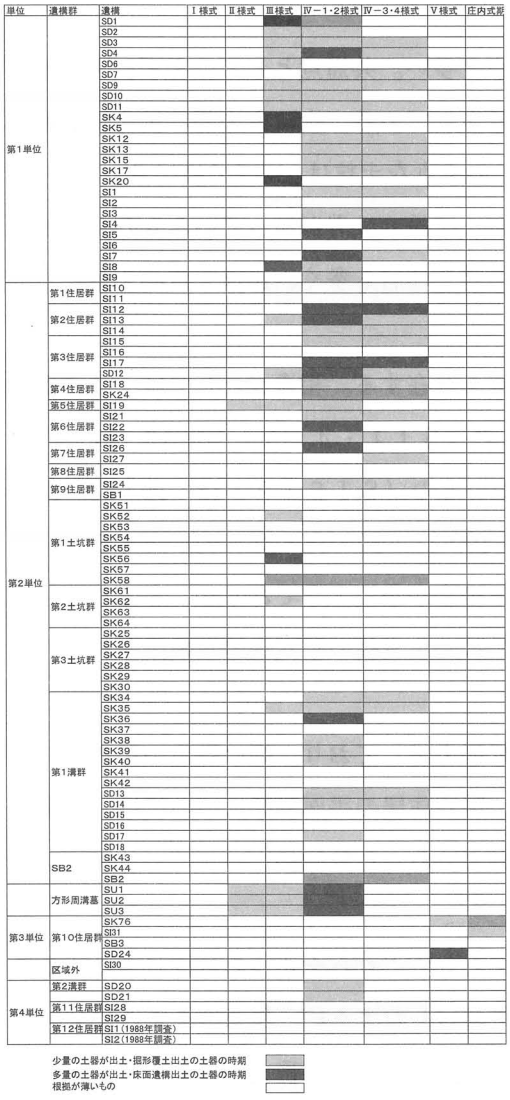
庄内期の竪穴住居（ＳＩ31）は、方形の平面形態を呈しており、炉は壁沿いにあり、弥生時代中期の竪穴住居と構造上の違いが大きい。竪穴住居の平面形態については、弥生時代後期に円形から方形に変遷することが指摘されている（石野1990）。

ｃ、集落の構造

竪穴住居は、一定のまとまりを持って分布しており、これらを４つの単位にまとめることが可能である（第316図参照）。第２章第２節で報告したように、集落域を東西に分断するように南北に段丘崖２が走っており、段丘崖２の裾は当時湿地帯となっていたようであり、この付近には竪穴住居は存在していない点が重要である。この段丘崖２と集落の西端をなす段丘崖１に挟まれた低位段丘面に竪穴住居の単位があり、これを第１単位と呼称する。この第１単位の東には、段丘崖２から丘陵西裾までの間に分布する竪穴住居の単位があり、これを第２単位とする。また、丘陵の北裾部と南裾部にも同様の竪穴住居の単位があり、これを第３単位、第４単位とする。

各単位の内、第１単位の調査は、道路拡張に伴い行った東西方向の線的なものであったため、南北方向にさらなる拡大が見込める。第２単位については、その中央部に後世の流路（ＮＲ１）が形成されており、後世の削平が著しいものの、ほぼ、全体を調査できている可能性がある。第３単位、第４単位については、調査をしていない箇所が大部分を占め、内容については不明な点が多い。

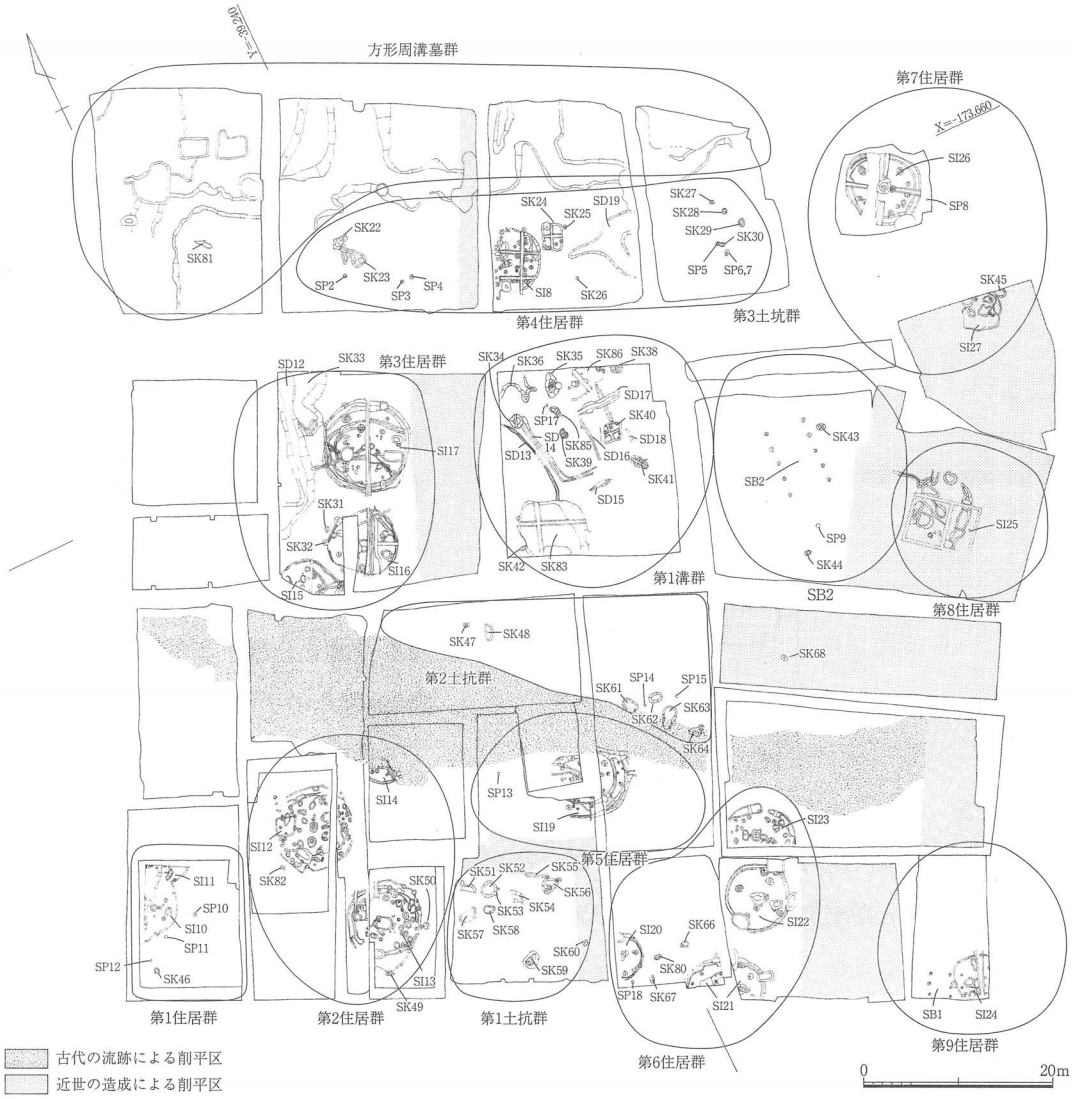
そこで、最も調査の進んでいる第２単位を例にして、単位内での空間利用の状況について整理を行う。まず、第２単位は、西方向が先述の段丘崖２により、東方向が尾根によって境界をなしている。第２単位の北側には方形周溝墓群が位置しており、これが第２単位の北限となっている。南側については、平成13年度に行われた住宅地造成に伴う調査及び、



第317図　各検出遺構の消長

平成17年度に行われた自治会館建築に伴う調査により溝及び湿地帯が検出されており、より南には遺構が広がらないことが確認できている。第318図は、第２単位の遺構の配置を示したものである。この図では、近世・近代の削平によって遺構の検出が見込めなかった場所には、トーンを貼っており、本来的に竪穴住居が存在しないと考えられる場所と後世の削平によって検出がなされなかった場所を区別できるようにしている。第318図からは、竪穴住居を築造する空間と築造しない空間に分化している状況が見て取れる。竪穴住居を築造する空間には、狭い空間に竪穴住居が密集しており、かつ各竪穴住居は、同じ場所に頻繁な建替を行っている。一方で、竪穴住居が築造されていない空間は、一定の広さを有しており、このような空間の中には、土坑が密集する場所や、特殊な溝が密集する場所がある。また、１間×４間の規模を有するＳＢ２の周辺部にも竪穴住居は築造されていない。

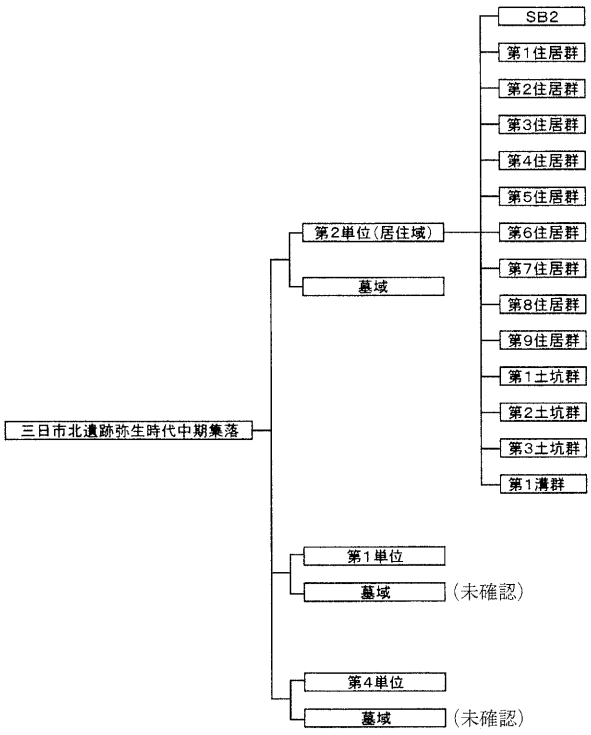
このような空間利用の状況から、第２単位に竪穴住居群を９箇所、土坑群を３箇所、溝群を１箇所、掘立柱建物を１箇所設定する。竪穴住居群は、第１住居群～第９住居群と呼称する。各竪穴住居群は、概ね２～３棟の竪穴住居で構成されている。各竪穴住居群内は竪穴住居が非常に近接して築造されているのが特徴である。また、個別の竪穴住居は複数の建替の痕跡が認められ、この竪穴住居群が比較的長期に及び居住空間として機能していたことが分かる。また、竪穴住居の復元案（都出1989）からは、調査によって検出できる竪穴住居掘形の外側に上部構造の軒先が位置することが想定されており、また尺度遺跡で確認された竪穴住居掘形の周囲にめぐる溝（大阪府文化財調査研究センター1999）や、八尾南遺跡の調査成果によって明らかになった土塁の存在（大阪府文化財センター2005）により、竪穴住居掘形の周囲には一定の構造物が付随することは明らかである。このような事を勘案すれば、各竪穴住居群は、複数の竪穴住居が同時に存在していたことを想定するよりも、単数か、これに近い状況で比較的長期間にわたり建替が行われた結果の累積状況として形成されたことを想定する方が妥当である。第２単位はこのような９つの竪穴住居群によって構成されているので、概ね９棟



第318図　第２単位遺構配置図（1/800）

前後の同時期に機能した竪穴住居から構成されていたと想定できる。また、このような竪穴住居群には、土坑群や溝群といった特定の役割を持つ空間が付随し、第２単位の居住域を構成していたと考えられる。また居住域には墓域が伴い、このような遺構の単位が複数集まって、集落を形成していたと考えられる。なお、第１単位・第２単位・第４単位が弥生時代中期の遺構群であるので、第１・４単位も第２単位と同様の構造を持つと仮定すれば、集落全体は同時期の30棟前後の同時期に機能していた竪穴住居から構成されていたと考えられる。

弥生時代集落が単一の構造を有するものではなく、複数の単位から成り立っていることは、これまでにも指摘されてきたことである。近藤義郎氏は、弥生時代の集落遺跡において「数戸からなる集団が１つの単位をなし、一定の居住区を確保・占居している」ことを認識し、これを「単位集団」と呼び水田経営の単位であることを想定した（近藤1983）。単位集団が概念化された際に、検討が行われた遺跡では、単位集団は３～６棟により構成されている（近藤1959）。また、同様の竪穴住居群の集合体は、都出比呂志氏により「世



第6表　三日市北遺跡弥生時代中期集落の構成

帯共同体」と再定義され、「耕地と生産物の占有単位」とし、小経営のあり方を示すものとされた（都出1970）。南河内地域においても、河南町東山遺跡の分析において同様の竪穴住居単位が認識されている（菅原1980）。このような竪穴住居単位が認識できた多くの集落は弥生時代後期の丘陵部に位置する集落であり、弥生時代中期のいわゆる沖積地に位置する大型集落ではない。若林邦彦氏は、弥生時代中期の平野部の集落遺跡を分析する中で、「径100～200m程度の平面規模」をもち、「20～50棟程度」の竪穴住居で構成される居住域の構造を認識し、これを「基礎集団」と呼び、血縁関係により結びついた「集落占有・耕作・利害調整上の重要な機能を果たす人間集団」とした（若林2001）。また、従来拠点集落と呼ばれてきた大規模集落は、このような「基礎集団」の複合体であるとした。

このような若林氏の論文に対して、森岡秀人氏は、若林氏が提唱した「基礎集団」と、従来、集落構造の基礎単位とされてきた「単位集団」には、推定される集団の規模に開きがみられるとし、「基礎集団」もまた、小集団の複合体である可能性を示した（森岡1999）。

本遺跡は沖積地に位置するわけではないが、いわゆる平地に立地する弥生時代中期の集落遺跡であり、このような問題を検討する上で重要である。先に整理を行った本遺跡の状況と、若林氏の「径100～200m程度の平面規模」とした定義を比較すると、面積については、ほぼ合致するといえる。竪穴住居の数については、同時期に機能していたと推定される数を比較すると、「20～50棟程度」とした定義には及ばないものの、従来単位集団として把握されてきた単位よりも多いといえる。なお、当該遺跡ではこのような単位の下に、さらに「２～３棟」で構成される小単位を認識しているが、本稿では、この小単位は、集団を反映するものではなく、単数もしくはこれに近い数の竪穴住居が移動を繰り返した結果であると結論づけた。したがって「単位集団」や「世帯共同体」の存在を示すものではないと考えている。本稿と同様の認識は、駒ヶ谷遺跡を分析した仲原知之氏によっても示されているものの（仲原2002）、同様の単位を集団の存在を示すものとして評価した分析例も存在する（宮崎1996）。

d、集落の存続期間

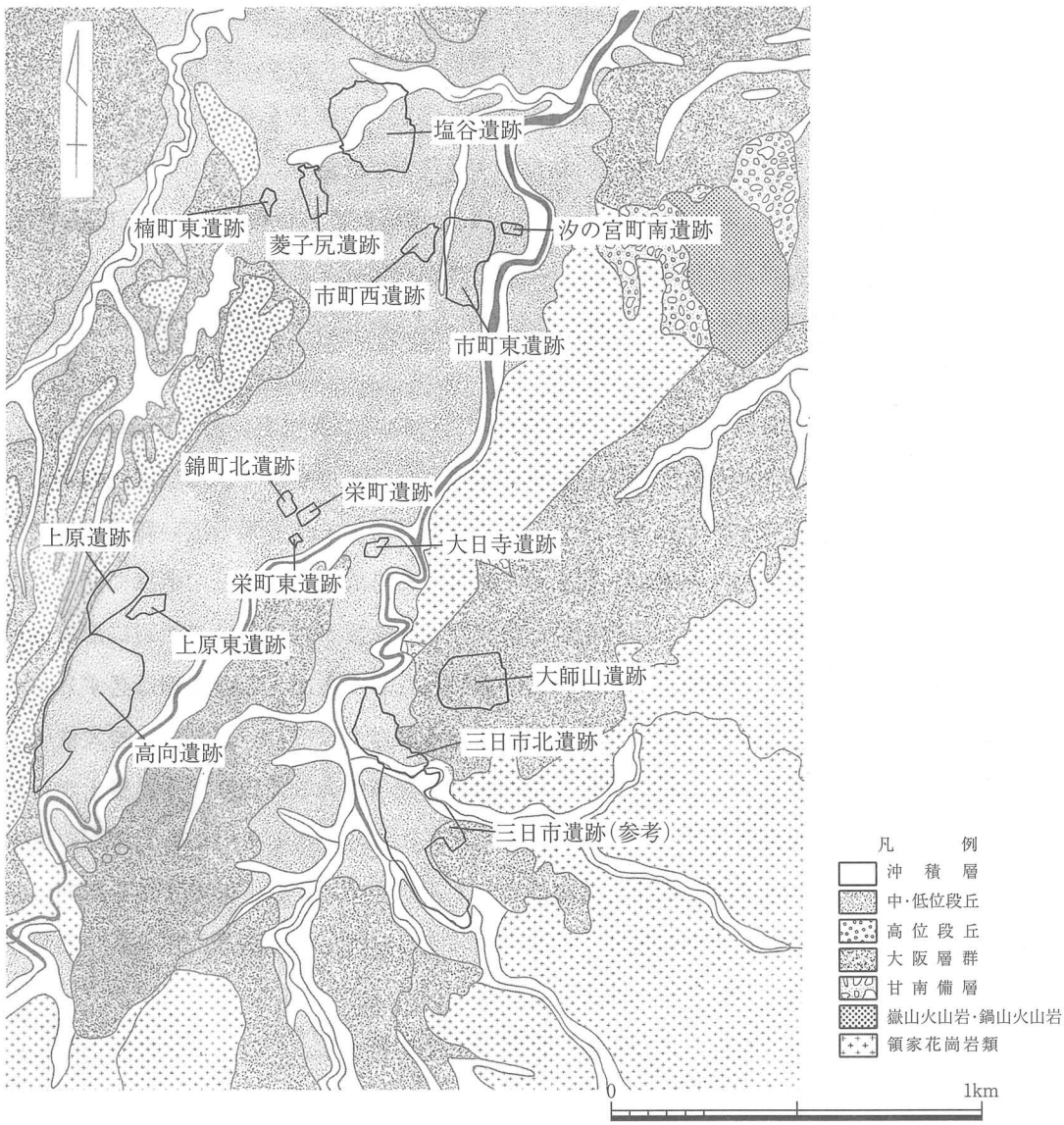
ここでは、先に設定した各単位がどのような消長をしていたのか、分析する。分析の方法としては、各単位から、検出された遺構の時期を確定し、消長を考える。しかし、各調査区からは、検出した遺構よりも古い時期を示す遺物が包含層等より出土している場合がある。このような事から、より古い時期に形成された遺構が新しい遺構によって破壊され、古い時代に形成された遺構が検出できていない可能性が指摘できる。

第317図は、各単位の遺構の時期を示したものである。第317図では、出土した土器をもとに各遺構の消長を示した。

第317図から明らかなように、溝は比較的幅の広い時期の遺物を含んでいる。一方で、土坑は、比較的短い期間の時期の遺物によって構成されるものが多く、出土状況からも一括して放棄されたとみなしうるものが多い。竪穴住居については、幅の広い時期の遺物を含んでいるものが多い。竪穴住居は、覆土から出土したものと、床面上の遺構に伴って出土したものに分けて時期を示した。覆土は、竪穴住居が放棄された段階で周辺に形成されていた遺物包含層が流入し形成されたもので、遺物包含層から出土した遺物は必ずしも竪穴住居に直接的に関連する遺物群から構成されているわけではない。しかし、竪穴住居の機能期間とその周囲の遺物包含層の形成には有機的な関連があると判断でき、覆土から出土した土器からも住居群が機能していた期間を間接的に推定できると考える。床面の遺構から出土した遺物は、覆土から出土した遺物よりも古いものによって構成される傾向にある。なお、竪穴住居は、複数回の建替を行っているものが大部分であり、相当長い期間にわたって機能していたものと考えられる。

次に、各遺構の帰属時期をもとに、各住居群の消長を考える。このような検討を行う際には、各単位を構成する竪穴住居の帰属時期を明らかにし、竪穴住居の集合体として、各単位の存続期間を求める方法がある。しかし、竪穴住居は、ある程度限定された空間に繰り返し築造されている。このため、最終段階の竪穴住居に伴う掘形覆土からは一定量の遺物が出土する場合が多いが、より古い段階の竪穴住居に伴う掘形は大部分が新しい段階の竪穴住居の掘形によって破壊されており、遺物はほとんど出土していない。また、古い段階に築造された竪穴住居がより深く、大きなものであった場合にのみ、新しい竪穴住居による破壊を一部免れることになり、検出が可能である。逆の場合には掘形の痕跡は残らない可能性がある。このようなことから、竪穴住居覆土や床面遺構から出土した土器により、竪穴住居の機能期間を想定し、このような竪穴住居の集合として住居群の存続期間を算定することは問題がある。そこで、竪穴住居周辺に形成された遺構も、竪穴住居の機能と密接な関連があるとの想定のもとに、このような遺構の帰属時期をも参考に各住居群の消長を考えた。この結果、第317図のように、大部分の住居群は、少なくともⅣ様式には並行して存続していたことが分かる。

このような考えのもとに、各単位が集落として機能していた期間を求めると、第１単位



第319図　河内長野市内弥生時代遺跡分布図（1/20000）

と第２単位がⅢ様式からⅣ様式にかけて、第４単位が少なくともⅣ様式に存続していることが分かる。このようなことからは、各単位を残した小規模な集団が立地を変えて、移動を繰り返した結果、当該集落が形成されていたわけではなく、同時期に並存した複数の集団によって本集落が形成されていたことが推定できる。また、少量ながらⅠ様式とⅡ様式の土器も出土しており、小規模ながらこの時期から集落は存続していたと考えられる。

また竪穴住居の重複関係等を分析すると、各竪穴住居群は、Ⅲ～Ⅳ様式にかけて少なくとも１～２回の竪穴住居の建替と竪穴住居群内での移動を行っていたことになる。比較材料として、当該遺跡の南方向に展開する三日市遺跡で検出された古墳時代の竪穴住居や当該遺跡第３単位で検出された庄内期の竪穴住居の重複関係をみると、これらでは、ほとんど重複関係をみることができない。このような事実は、弥生土器における各土器様式の存続期間を考える上で重要である。

	立地	類型	Ⅰ様式	Ⅱ様式	Ⅲ様式	Ⅳ様式	Ⅴ様式前半	Ⅴ様式後半	庄内式期	布留式期
汐の宮町南	中・低位段丘	Ⅰ類								
市町東	中・低位段丘	Ⅰ類								
市町西	中・低位段丘	Ⅰ類								
塩谷	中・低位段丘	Ⅰ類								
菱子尻	中・低位段丘	Ⅰ類								
楠町東	中・低位段丘	Ⅰ類								
錦町北	中・低位段丘	Ⅰ類								
栄町	中・低位段丘	Ⅰ類								
栄町東	中・低位段丘	Ⅰ類								
大日寺	中・低位段丘	Ⅰ類								
上原	中・低位段丘	Ⅰ類								
上原東	中・低位段丘	Ⅰ類								
高向	中・低位段丘	Ⅰ類								
大師山	丘陵	Ⅱ類								
三日市北	中・低位段丘	Ⅰ類								

住居跡が検出されているもの
住居跡以外の遺構もしくは遺物が出土しているもの

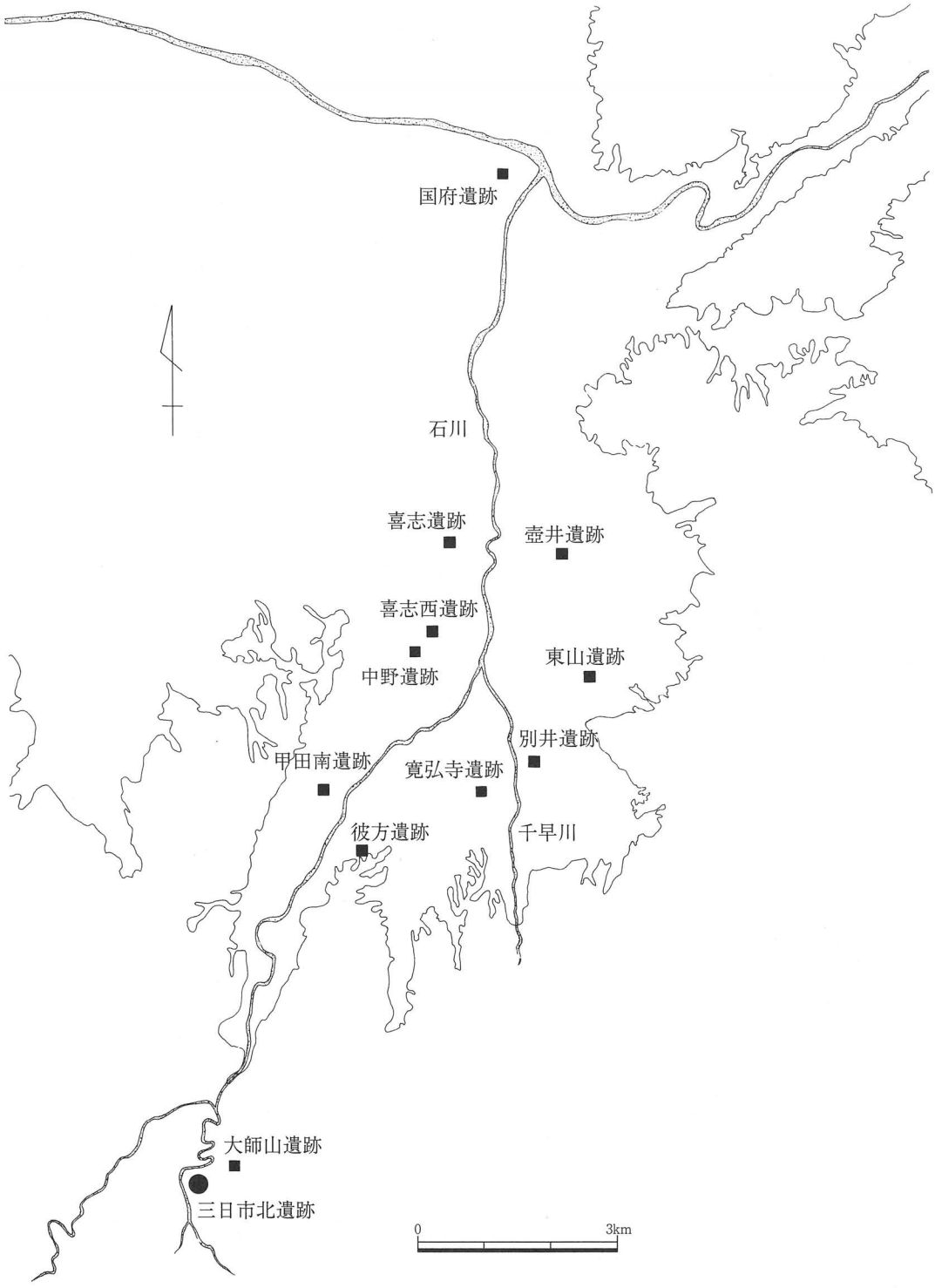
第320図　河内長野市内弥生時代遺跡の消長

（4）市域における弥生集落の消長

本節では、当該遺跡の意義を地域の中で評価し、位置づけるために周囲の弥生時代集落との比較検討を行った。（2）で設定したように、当該遺跡が位置する場所は、3方向を丘陵に囲まれており、自己完結性が高い。この範囲には、当該遺跡を含め15箇所の弥生時代の集落遺跡もしくは遺物散布地が確認されている（第319図参照）。多くの遺跡は、いまだ十分な調査が行われておらず、竪穴住居が検出されているのは、当該遺跡以外に大師山遺跡があるのみである。

各遺跡の消長を出土した土器によって示したのが第320図である。弥生時代の集落遺跡は、立地の上で平地である河岸段丘上に位置するⅠ類と丘陵上に位置するⅡ類に分類することが可能である。時期については、前期のものが、当該遺跡で、僅かな破片が確認されている以外に例がなく、中期にはⅠ類の集落が展開する。Ⅰ類の集落は、後期には存続せず、すべて中期で廃絶する。このような傾向は、南河内全体を対象として分析を行った鍋島隆宏氏の分析結果（鍋島2000）と一致している。また近隣地域では中河内の分析を行った米田敏幸氏によっても同様の傾向が指摘されている（米田1997）。

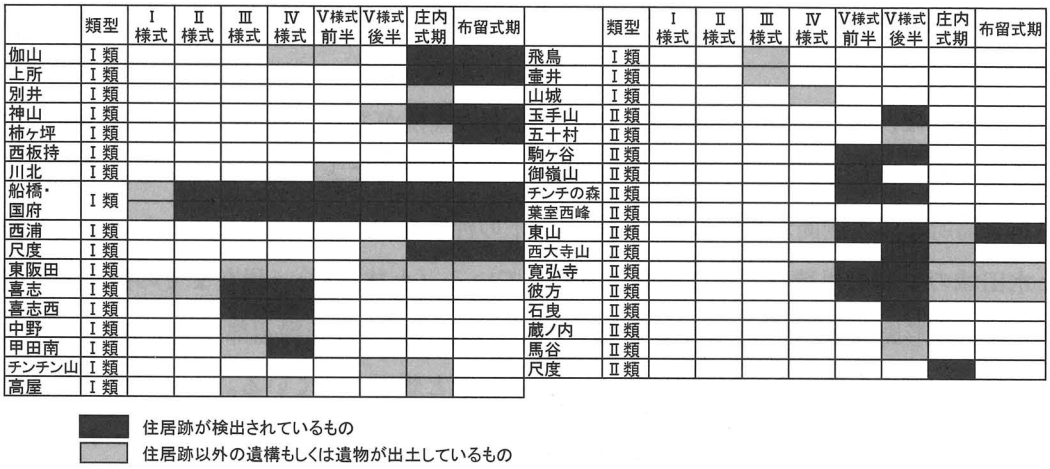
ただし、当該遺跡と、周辺の大師山遺跡・三日市遺跡は平面的な距離が近いだけではなく、消長において相互に補完関係があり、これらに有機的な関連が窺えることは重要である。付近には、古墳時代前期の前方後円墳である大師山古墳も位置しており、三日市遺跡は、古墳時代後期まで長期にわたり継続する。こうした、相互に年代的補完関係にある遺跡群は石野博信氏によって歴代遺跡と呼ばれているものである（石野1973）。弥生時代から古墳時代にかけては、三日市北遺跡（弥生時代中期）→大師山遺跡（弥生時代後期）→三日市北遺跡（庄内期・古墳時代前・中期）→三日市遺跡（古墳時代後期）と、比較的近接した場所で居住域を移動させていた。一方で、他の集落遺跡は、弥生時代中期のみで廃絶しており、いわゆる短期廃絶型の集落といえる。



第321図　南河内地域弥生時代集落遺跡分布図（1/100000）

（5）近隣地域との比較検討

弥生時代中期には、地域の核となる拠点集落が成立することが、一般的な傾向として知られている。当該遺跡は、その規模・継続性・搬入品の数量等から考えて、拠点集落の候補とすることができる。南河内地域において、当該遺跡以外に拠点集落もしくはその候補となりうる集落遺跡は、藤井寺市国府遺跡、富田林市喜志遺跡、甲田南遺跡等が知られて



第322図　南河内弥生時代集落の消長（鍋島2000を一部改変して作成）

いる。しかし、喜志遺跡、甲田南遺跡については、弥生時代前期の遺構が乏しく、集落の消長が中期を中心とすることから、拠点集落には該当しないという考えもある（栗田1996）。このような点では、当該遺跡も弥生時代前期の遺構は未確認であり、類似した状況を示しているといえる。このような考えに基づけば、石川上流部には、拠点集落が存在せず、中規模の遺跡が２～３㎞間隔を隔てて連続していることになる。

ただし、近年の調査研究からは、拠点集落と呼ばれている遺跡の多くが、前期から継続して地域の中核を担うのではなく、前期から中期にかけて集落に変化が見られることも知られるようになっている。中河内地域の弥生時代集落を分析した米田氏は、「弥生時代前期Ⅰ様式中段階前後の遺構、遺物が検出される多くの遺跡においては、弥生時代中期の集落遺構が重なって存在することはまずない。」とし、弥生時代前期と中期との間に大きな画期があるとした（米田1997）。また、森岡秀人氏は、前期の環濠集落と中期の環濠集落に規模の違いがあることを指摘して、「初期定着型」と「発展肥大型」という２つの集落類型を提示している（森岡2004）。前期からの継続性よりも、中期において地域の核となるような様相が見られるのかどうかが、拠点集落であるかどうか評価を行う際に重要な要素となると考える。そのような意味で、当該集落からは、他地域からの搬入品である遺物が出土している点が重要である。今後、周辺部の小規模集落と比較検討が重要となると考える。

南河内地域で拠点集落の可能性のある３箇所の遺跡について、その概要を示せば次のようになる。

国府遺跡は、南北700m、東西600m程度の規模があり、石川・大和川合流地点の西岸の台地上に立地する。Ⅰ様式からⅤ様式まで存続することが知られている。弥生時代を通じて傑出した規模を誇っており、南河内地域の中心的な集落であったことが知られている。国府遺跡の北に近接して船橋遺跡が立地している。両遺跡は、地理的に隣接していることに加え、土器様式の一部に補完的関係が認められることから、水田の老朽化への対処とし

て単一集団が移動を繰り返した結果、二つの遺跡が残された可能性が指摘されている（天野1997）。

喜志遺跡は、南北450m、東西200～300m程度の規模があり、石川の中流域左西岸の中位段丘上に立地している。Ⅰ様式からⅣ様式まで存続することが知られている。段丘面の平坦な場所に居住空間が設けられ、段丘崖直下の沖積地や埋積谷を水田域とし、居住空間と水田域の中間の埋積谷肩部に墓域を設定している（小林1983）。現在までの調査で、竪穴住居、方形周溝墓、土坑、溝等が検出されている。溝は、段丘縁辺部に掘削されており、断面はV字形をしている。居住空間を区画する施設と想定されている。土坑には、サヌカイト剥片が大量に出土したものがあり、石器製作に伴う調整剥離のサヌカイト・チップを一括投棄した土坑と考えられている。周囲に位置する中野遺跡や城山遺跡とともに石器製作のための集落と考えられている。

甲田南遺跡は石川西岸の低位段丘上に位置する。南北150m、東西200mほどの規模をもち、Ⅲ様式からⅣ様式にかけて存続する。現在までの調査で竪穴住居70棟、方形周溝墓、集落の東側を外部と区画する溝等が検出されている。遺物は、紡錘車が比較的多く出土し、板状鉄斧が出土している。土器は、搬入土器が、比較的豊富にみられ、生駒山西麓、和泉、大和、紀伊のものが認められる（粟田1996）。

各拠点集落間の直線距離は、国府遺跡から喜志遺跡までが5㎞、喜志遺跡から甲田南遺跡までが4㎞、甲田南遺跡から三日市北遺跡までが6㎞となっている。これは、酒井龍一氏が設定した、拠点集落モデルの拠点集落間の距離は5㎞という定義に一致する（酒井1984）。また、三日市北遺跡から、これら以外の拠点集落までの距離を述べると、紀伊北部の柏原遺跡までは、12㎞、和泉北部の池上曽根遺跡までは約18㎞となる。各拠点集落が、活発な交流を行っていたことは、生駒山西麓で製作された土器、紀ノ川流域で産出される緑泥片岩、二上山で産出されるサヌカイトの移動現象によって裏付けられている。これらの拠点集落については、石川下流域ほどはやく発達するようである。鍋島氏は、南河内の弥生時代集落をA～H群・a～i群の合計17の群にまとめ、国府遺跡を中心とするe群から喜志遺跡を中心とするf群が派生し、これを核として零細な集落が周辺に広がったとしている（鍋島2000）。また、喜志、甲田南遺跡は集落間の物流システムがある程度発達した段階で、当時の手工業生産において、なんらかの役割を担った集落として派生したことが想定されている（粟田1996）。また、当該遺跡でみられるような弥生時代中期の平地に立地する集落と後期の丘陵上の集落が近接して存在することは、南河内で普遍的に認められるようであり、平野部の喜志遺跡を中心とするf群に段丘上の尺度遺跡を中心とするH群、平野部の柿ヶ坪遺跡・西板持遺跡に丘陵上の彼方遺跡、平野部の別井遺跡・神山遺跡に丘陵上の寛弘寺遺跡・西大寺山遺跡がそれぞれ近接していることが指摘されている（鍋島2000）。

当該遺跡を中心とする遺跡群もf群＋H群と同様の構造を採るものであり、このような遺

	立地	庄内式期	布留式期	TK73～TK47	MT15～TK10	MT85～TK209	飛鳥Ⅰ～Ⅲ
三日市北	低位段丘上	■	■	■	□	□	□
三日市	低位段丘上				□	■	□
小塩	中位段丘上				□	■	□
西浦	中位段丘上					□	■
尾崎北	中位段丘上			□	■	■	
加塩	中位段丘上				■	■	
喜多町	低位段丘上					■	
大日寺	中位段丘上						□
高向	中位段丘上			□	□	□	□
上原	中位段丘上				□	□	

■ 住居跡が検出されているもの
□ 住居跡以外の遺構もしくは遺物が出土しているもの

第323図　河内長野市内古墳時代集落遺跡の消長

跡群の単位が複数結合して南河内地域の弥生時代社会は成り立っていたものと推察できる。

（6）三日市北遺跡廃絶後の河内長野市域

当該遺跡を含む遺跡群は、弥生時代を通じて存続し、中期には他地域からの搬入品も多く出土していることから、弥生時代においては地域の核として機能していたと考えられる。地域社会の核としての機能は、古墳時代にも引き続き認められる。古墳時代前期には、当該遺跡第4単位南部に居住域の中心が移り、竪穴住居6棟が検出されている（三日市遺跡調査会1988ａ）。全長50ｍの前方後円墳である大師山古墳が近接した場所に営まれることからも、当該遺跡群が地域の中核を担っていたことが指摘できる。ただし、地域の外部との交流のあり方には大きな変化があるようで、庄内期には、他地域からの搬入土器の量が著しく減少する。このような現象は、南河内全体の傾向としても指摘されている（山田2001）。ただし、第323図のとおり、当該遺跡群以外には庄内期～古墳時代前期の集落遺跡が認められず、その後の集落遺跡の展開をみた場合でも、当該遺跡群が地域の中で中心的な役割を担ったものと推察する。

三日市北遺跡は古墳時代中期まで引き続いて集落が存続し、中期の遺構として竪穴住居8棟と掘立柱建物2棟が検出されている。後期の遺構としては、石見川南岸の三日市遺跡から竪穴住居4棟が、検出されている。

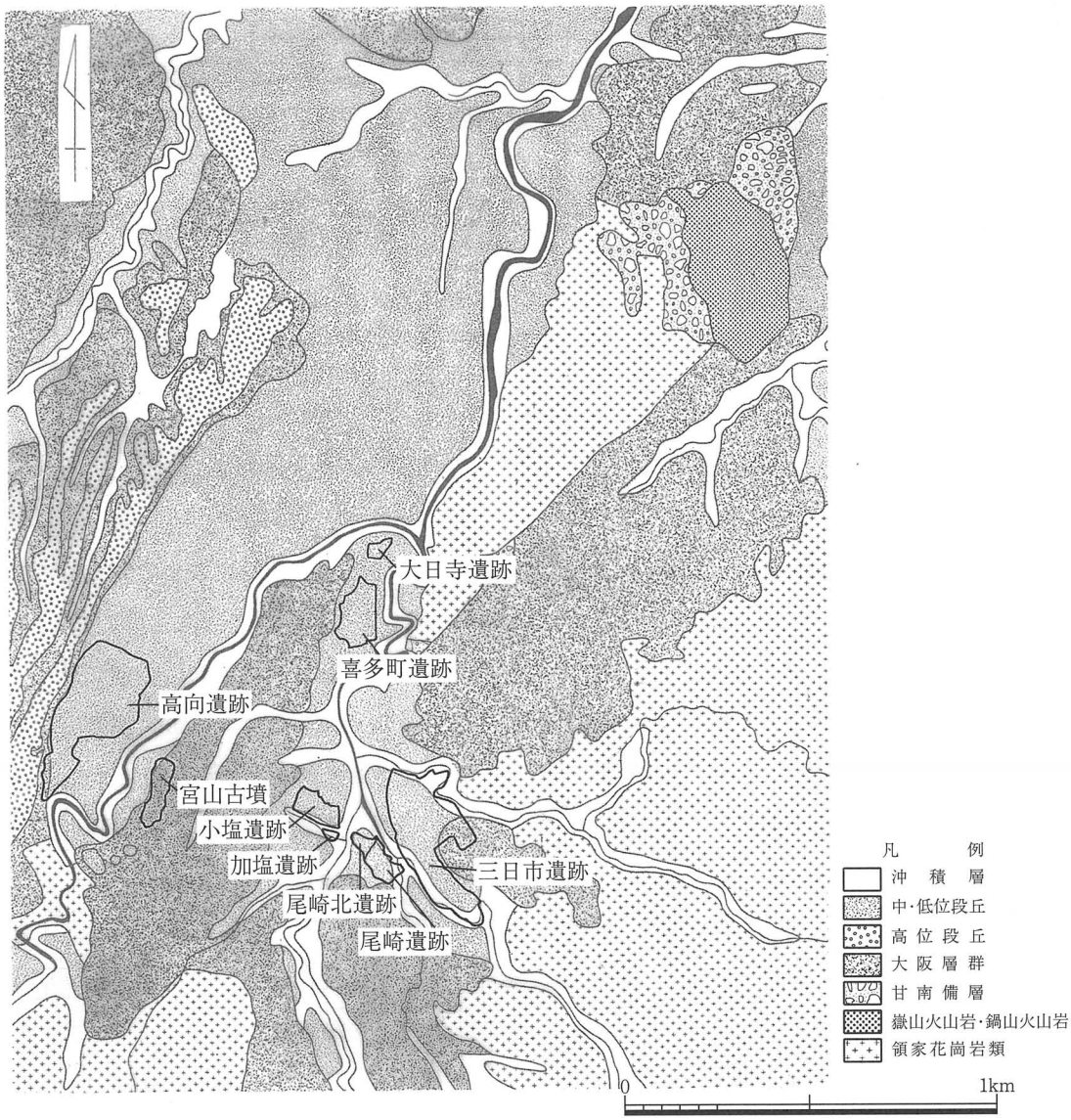
ここでは、当該遺跡を含む遺跡群が弥生時代以降、地域のなかでどのような役割を果たしていたのか検討する。

第323図は、古墳時代の集落遺跡について、その消長を示したものである。

なお、集落と密接な関係をもっていると考えられる古墳についてもここでは併せて検討する。

この際に、使用する時間軸として、須恵器出現以前については、土師器を用い、庄内期、布留期の2つの時期に区分した。須恵器出現以降は、ＴＫ73型式～ＴＫ47型式期、ＭＴ15型式～ＴＫ10型式期、ＭＴ85型式～ＴＫ209型式期、飛鳥Ⅰ式～飛鳥Ⅲ式期の4段階に時期区分した。

まず、墓域の変遷について述べる。まず、大師山古墳築造後は、市内には首長墳と考え



第324図　河内長野市内古墳時代集落遺跡分布図（1/20000）

られるような大型の古墳は確認されていない。このような状況は古市古墳群を除く石川流域全体にみられる現象であり、他市域においても中期の前方後円墳はほとんど例がみられない。また、石川流域同様に畿内地域を構成する北摂地域等でも同様の現象がみられる事が指摘されており、中期に入って台頭する百舌・古市古墳群を構成する中小規模墳として、首長墓が移動したとする見解がある（野上1970）。

次に、小規模墳の変化をみると、弥生時代中期には当該遺跡で方形周溝墓が検出されているが、弥生時代後期の墓の状況は不明である。その後、庄内期～古墳時代中期中葉までは小規模墳は築造されていない。中期末～後期初頭には、初期群集墳が出現する。先述の三日市遺跡からは4基の当該時期に所属する古墳が検出されている。このような小規模古墳群については、弥生時代の方形周溝墓と階層的な連続性を持ちつつ、古墳時代前中期の初期群集墳を経て、横穴式石室を有する後期群集墳へ連続するものと考えられている（石部1988、和田1992）。

当該地域では、この間を通じて連続する集落遺跡を確認しており、これらに伴う小規模墳の連続性を検討する上で重要な例となると考える。当該地域では、先述したように小規模墳は常に存在するのではなく、弥生時代後期から古墳時代中期中葉までの空白の期間を置いて中期末に再び出現している。また、このような状況は、畿内地域では一般に認められる状況といえる。

古墳時代後期には全国的に各地で横穴式石室を埋葬施設とする後期群集墳が出現するが、市内では三日市遺跡で検出された三日市古墳群が後期群集墳として位置づけることが可能である。この他には、市内菊水町に、五ノ木古墳がかつて位置しており、双子塚古墳、法師塚古墳等の古墳伝承地がある。これらは群集の度合いが弱く、後期群集墳と呼ぶには躊躇される。また、喜多町には烏帽子形古墳、大日寺古墳がやはり単独で存在している。比較的広範囲にわたって小規模な古墳が散漫に分布する状況があったのであろう。当該遺跡群の場合は、初期群集墳に連続して後期群集墳が営まれるがこのような事例は、畿内地域にあっては特殊であるといえる。また、古墳時代後期には、小規模墳の数が著しく増加したことは事実として提示できる。

つぎに、集落遺跡の消長をみると、当該遺跡群が古墳時代を通じて存続し、当該地域の中核的役割を担ったと考えられる。なお、古墳時代中期中葉まで、三日市北遺跡の他に集落遺跡が存在していない。市内集落遺跡の展開においては、中期末葉から後期が最大の画期をなしており、石川西岸の台地上に新しい集落群が展開するようになる。

このような集落遺跡として、小塩遺跡、加塩遺跡、尾崎遺跡、尾崎北遺跡、西浦遺跡が挙げられる。これらの場所は、それまでほとんど土地利用がなされておらず、この時期に大規模な開発が行われたものと考えられる。これらの集落群の他にも、高向遺跡、喜多町遺跡等が出現し、広範囲にわたって集落が拡散する。このような集落群の配置は、古代にもほぼ踏襲されてくる。

（7）まとめ

以上、述べてきたように、三日市北遺跡は、弥生時代中期を中心としながらも前期から存続する集落遺跡であり、竪穴住居１０棟前後を単位とする集団が複数集まることで構成されていることを明らかにした。また、周囲の三日市遺跡や大師山遺跡と遺跡群を構成し、弥生時代から古墳時代にかけて地域の中核的役割を担うことを述べた。

第3節　ま　と　め

三日市北遺跡の発掘調査では、弥生時代の集落遺跡と江戸時代の宿場町遺構の一部が検出された。

弥生時代の集落遺跡からは、竪穴住居31棟が検出され、これらの他に掘立柱建物跡３棟、溝、土坑等、方形周溝墓が検出された。出土した遺物は弥生時代中期のものが中心であり、Ｖ様式期末～庄内期のものが一定量含まれている他、弥生時代前期のものも若干含まれていた。

出土遺物の大部分は土器であり、生駒山西麓からの搬入土器が多く出土している。この他、石器ではサヌカイト製の打製石器、緑泥片岩製の磨製石器が出土している。周辺には、弥生時代後期や古墳時代の集落遺跡も存在しており、遺跡周辺が弥生時代～古墳時代までに地域の中心的な役割を担なっていたことが考えられる。

近世の遺構は、調査区の東端部に限って検出された。検出された遺構は、石組暗渠、桶埋納遺構、井戸等である。出土した遺物は１７世紀～１８世紀のものである。三日市宿の遺構の一部と考えられる。三日市宿が設置された年代について確かなことはわからないが、正徳元年（1711）の高札が残っているので、少なくとも１８世紀前半には宿駅として機能していたことが分かる。本陣格の油屋を中心に多くの旅籠屋があったことが知られており、明和８年（1771）の三日市村明細帳には、旅籠屋が23軒あったことが記されている。当該調査区は、このような宿場の中でも南端部にあたっており、宿場町の中心地からはやや外れているが、調査区の一部は、「片屋」の屋号を持つ旅籠屋があった場所に相当している。この場所からは、庭園の遺構と考えられる池の遺構が検出されている。明治初頭の屋敷図には、「泉」と記載されている場所があり、今回検出された池の遺構はこの「泉」に相当すると考えられる。

引用・参考文献一覧

秋山浩三　1991「鶏井出遺跡における畿内第Ⅱ様式の様相」『向日市埋蔵文化財調査報告書』23　（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会

秋山浩三　2005「弥生大形集落断想（上・下）」『大阪文化財研究』第27・28号

秋山浩三・瀬川貴文・中川二美　2002「生駒山西麓域における在地産・搬入弥生土器の推移」『大阪文化財研究』23　（財）大阪府文化財センター

秋山浩三・瀬川貴文・中川二美・池谷梓　2002「弥生土器の移動比率－生駒山西麓・河内湖東岸部遺跡群における集計データから－」『立命館大学考古学論集』Ⅲ　立命館大学考古学論集刊行会

秋山浩三・中川二美・長友朋子・河村恵理　2004「瓜生堂遺跡における生駒山西麓産弥生土器の占有率」『瓜生堂遺跡』Ⅰ　（財）大阪府文化財センター

天野末喜　1997「探訪　稲作のはじまり」藤井寺市教育委員会

粟田　薫　1996「甲田南遺跡の弥生時代集落の歴史的意義」『平成７年度　富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林市教育委員会

粟田　薫・田中正利　1997「喜志遺跡」『平成８年度　富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林市教育委員会

石野博信　1973「大和の弥生時代」『橿原考古学研究所紀要』２

石野博信　1990『日本原始・古代住居の研究』

井藤暁子　1983「近畿」『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社

1986「畿内の櫛描文」『弥生文化の研究』３　雄山閣

1987「畿内の櫛描文土器」『弥生文化の研究』４　雄山閣

今村道雄・曽我恭子編　1981『瓜生堂遺跡』Ⅲ　瓜生堂遺跡調査会

芋本隆裕　1992『西ノ辻遺跡第23次発掘調査報告』東大阪市教育委員会（財）東大阪市文化財協会

大阪府教育委員会　1982『石仏遺跡発掘調査概要』

大阪府文化財調査研究センター　1999『尺度遺跡Ⅰ』

大阪府文化財センター　2005『久宝寺遺跡発掘調査成果－2001～2004年度のまとめ－』

三日市遺跡調査会　1988ａ『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

三日市遺跡調査会　1988ｂ『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

河内長野市教育委員会　1994『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

河内長野市教育委員会　1991『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』

河内長野市教育委員会　1994『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』

河内長野市教育委員会　1995『河内長野市埋蔵文化財調査報告書ⅩⅠ』

河内長野市教育委員会　1997『河内長野市埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ』

河内長野市教育委員会　2000『河内長野市埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ』

河内長野市教育委員会　2002『河内長野市埋蔵文化財調査報告書ⅩⅧ』

川西幸行　1988「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻２号　日本考古学会

関西大学考古学研究室　1977『河内長野　大師山』

國下多美樹　1997「鶏井出遺跡をめぐる諸問題」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第45集（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会

國下多美樹　2001「わがムラの土器は何か－弥生土器の産地同定のための基礎的作業－」『みずほ』第36号　大

和弥生文化の会

國分政子　1992「河内地方弥生時代中期土器の検討－第Ⅲ・Ⅳ様式広口壺形土器の地域性と変遷－」『長岡京文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会

小林行雄・佐原真　1964『紫雲出』詫間町文化財保護委員会

小林義孝　1994ａ「甲田南弥生集落の実態」『甲田南遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会

小林義孝　1994ｂ「石川流域における弥生時代中期の集落群」『甲田南遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会

小林義孝　1983「喜志遺跡の遺構分布（弥生時代）」『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・Ⅳ』大阪府教育委員会

近藤義郎　1959「共同体と単位集団」『考古学研究』６巻１号　考古学研究会

近藤義郎　1983『前方後円墳の時代』岩波書店

近藤錬三　1982『Plant　opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究』<昭和56年度科学研究費（一般研究Ｃ）研究成果報告書,32p>

近藤錬三・佐瀬　隆　1986「植物珪酸体分析,その特性と応用」『第四紀研究』25,31-64.

酒井龍一　1984「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』第３集　奈良大学

佐原真　1968「畿内地方」『弥生式土器集成　本編2』東京堂出版

菅原正明　1980「集落の生成」『東山遺跡』大阪府教育委員会

末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎　1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告16

杉山真二・藤原宏志　1986「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19,69-84.

杉山真二　1999「植物珪酸体分析からみた最終氷期以降の九州南部における照葉樹林発達史」『第四紀研究』38,109-123.

曽我恭子　1972「土器」『瓜生堂遺跡』資料編　瓜生堂遺跡調査会

玉井　功　1987「石川流域の弥生集落－中・上流域を中心として－」『花園史学』第８号　花園大学史学会

地村邦夫　1999「和泉地域第Ⅲ・Ⅳ様式の編年－97年度調査出土土器の検討－」『池上曽根遺跡－拠点集落東方の墓域の調査－』大阪府教育委員会

都出比呂志　1970「農業共同体と首長権」『講座　日本史１』東京大学出版会

都出比呂志　1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

寺沢薫・森井貞雄　1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社

忍薫・中辻亘　1984『中野遺跡発掘調査概要』Ⅴ　富田林市教育委員会

長友朋子　2004「河内地域と他地域の並行関係」『弥生中期の並行関係』第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集　埋蔵文化財研究会

仲原知之　2002「弥生時代後期～古墳時代初頭の駒ヶ谷遺跡と南河内地域」『駒ヶ谷遺跡Ⅱ』（財）大阪府埋蔵文化財調査研究センター

鍋島隆宏　2000「南河内・石川流域における弥生後期集落の動向－土器編年再考－」『古代文化』第52巻第７号

禰宜田佳男　1995「南河内の弥生時代と遺跡」『弥生時代の大阪湾沿岸』

禰宜田佳男　1992「近畿地方の石斧の鉄器化」『弥生文化博物館研究報告』第１集

野上丈助　1970「摂河泉における古墳群形成とその特質」『考古学研究』第16巻第３号

蜂屋晴美　1983「終末期石器製作の性格とその社会」『藤澤一夫先生古稀記念　古代文化論叢』

濱田延充　1990「弥生時代中期におけるいわゆる生駒西麓産土器の製作地」『京都府埋蔵文化財情報』第35号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

濱田延充　1993「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『弥生文化博物館研究紀要』第2集　大阪府立弥生文化博物館

パリノ・サーヴェイ株式会社　1988「三日市北遺跡（５地区北壁）試料　花粉分析及び珪藻分析報告」『三日市北遺跡調査報告書Ⅰ』三日市北遺跡調査会,245-255.

パリノ・サーヴェイ株式会社　1995「花粉分析及び珪藻分析」『寺元遺跡』河内長野市遺跡調査会

パリノ・サーヴェイ株式会社1997「高向遺跡の古環境について」『高向遺跡』河内長野市遺跡調査会

樋口吉文　1990「和泉地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社

広瀬和雄　1986「弥生土器の編年と二・三の問題」『亀井（その２）』　（財）大阪文化財センター

藤沢真衣・上西美佐子他　1980『瓜生堂』（財）大阪府文化財センター

藤田憲司　1984「搬入土器研究の課題－巨摩・瓜生堂遺跡報告の検討から－」『大阪文化誌』第17号（財）大阪府文化財センター

松田順一郎　1996「北島遺跡の耕作地と古環境－」『寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第１次発掘調査報告書－』（財）東大阪市文化財協会

松田順一郎　1999「瓜生堂第40次調査地における河川堆積作用の変化」『瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘報告書－電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告』（財）東大阪市文化財協会

松田順一郎　2000「八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達」『小阪合遺跡－都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター

Miall,A.D.,1992,Alluvil Deposits,in Walker,R.G. and James,N.P.(ed) Facies Models.Geological assosiation of Canada

Miall,A.D.,1996,The Geology of Fluvial Deposits:Sedimentary Facies,Basin Analysis,and Petoleum Geology. Springer

宮崎康雄　1996「集落の構成」『古曽部・芝谷遺跡』高槻市教育委員会

三好孝一　1983「喜志遺跡80-3区出土土器の整理成果」『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要Ⅵ』大阪府教育委員会

三好孝一　1987「生駒山西麓型土器についての一視点」『花園史学』第８号　花園大学史学会

三好孝一　1993「河内における弥生中期土器様相―亀井遺跡を中心として―」『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』

三好孝一　2001「手工業生産と集落」『弥生時代の集落』大阪府弥生文化博物館編　学生社

森井貞雄　1982「河内地方の畿内Ⅲ・Ⅳ様式編年の一視点」『大阪文化誌』第15号　（財）大阪文化財センター

森岡秀人　1999「弥生集落研究の新動向Ⅱ」『みずほ』第31号　大和弥生文化の会

森岡秀人　2004「農耕社会の成立」『日本歴史講座』東京大学出版会

山田隆一　2001「大阪府南部、石川流域における弥生時代後期から古墳時代初頭社会の特質」『弥生時代の集落』大阪府立弥生文化博物館編　学生社

横山浩一　1978「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号　九州大学九州文化史研究施設

若林邦彦　1992「弥生土器地域色に関する一考察」『考古学と生活文化』同志社大学考古学研究室

若林邦彦　1996「近畿弥生中期における土器地域性構造と社会」『YAY！』弥生土器を語る会

若林邦彦　1997「中河内弥生中期土器にみる様相―「生駒西麓型土器」のもつ意味―」『考古学研究』43－４　考古学研究会

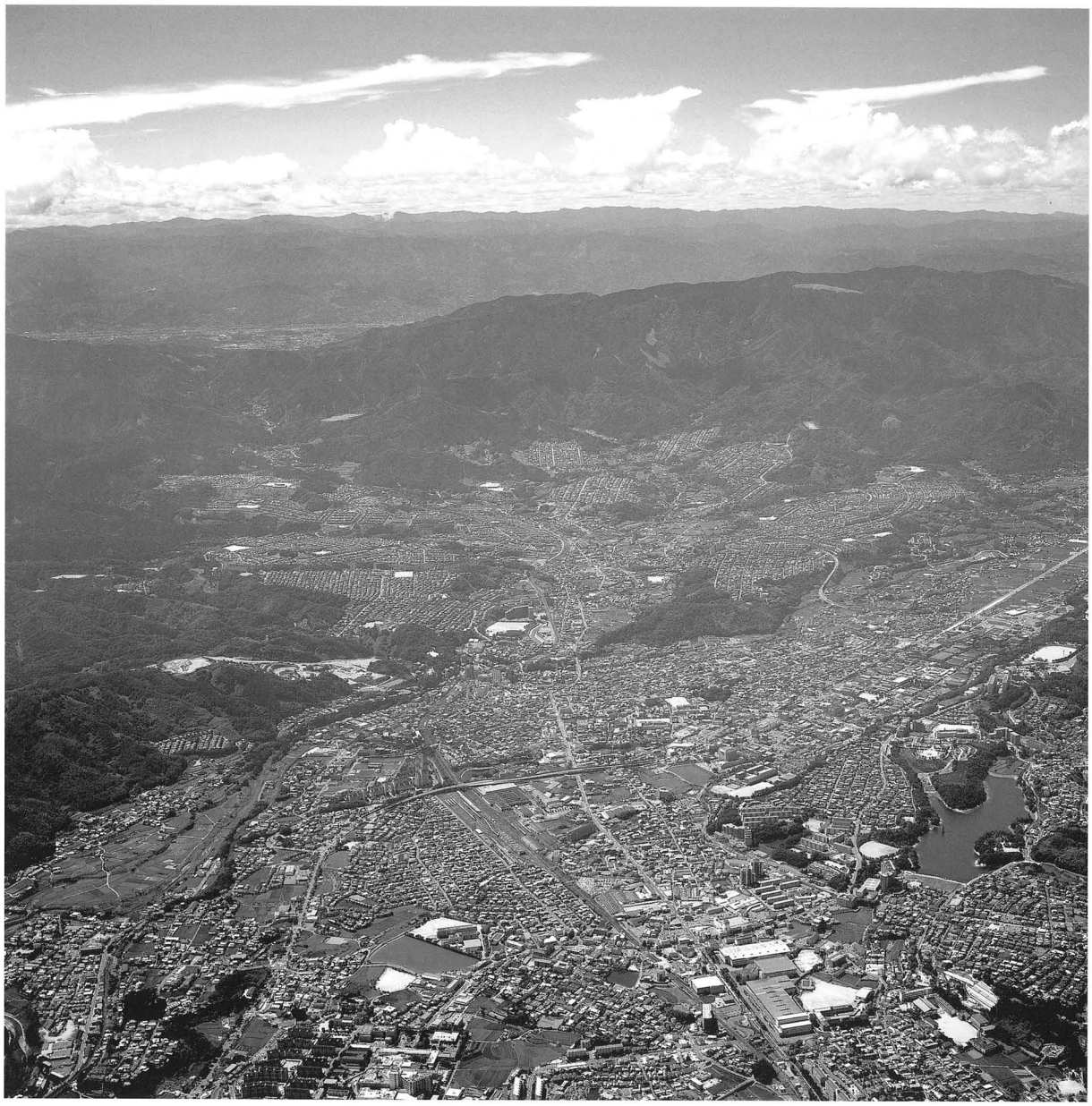
若林邦彦　2001「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』第12号

米田敏幸　1997「中河内弥生集落遺跡群の変遷」『河内古文化研究論集』和泉書院

和田晴吾　1992「群集墳と古墳の終末」『新版　古代の日本』５角川書店

石部正志　1988「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』

図　　版



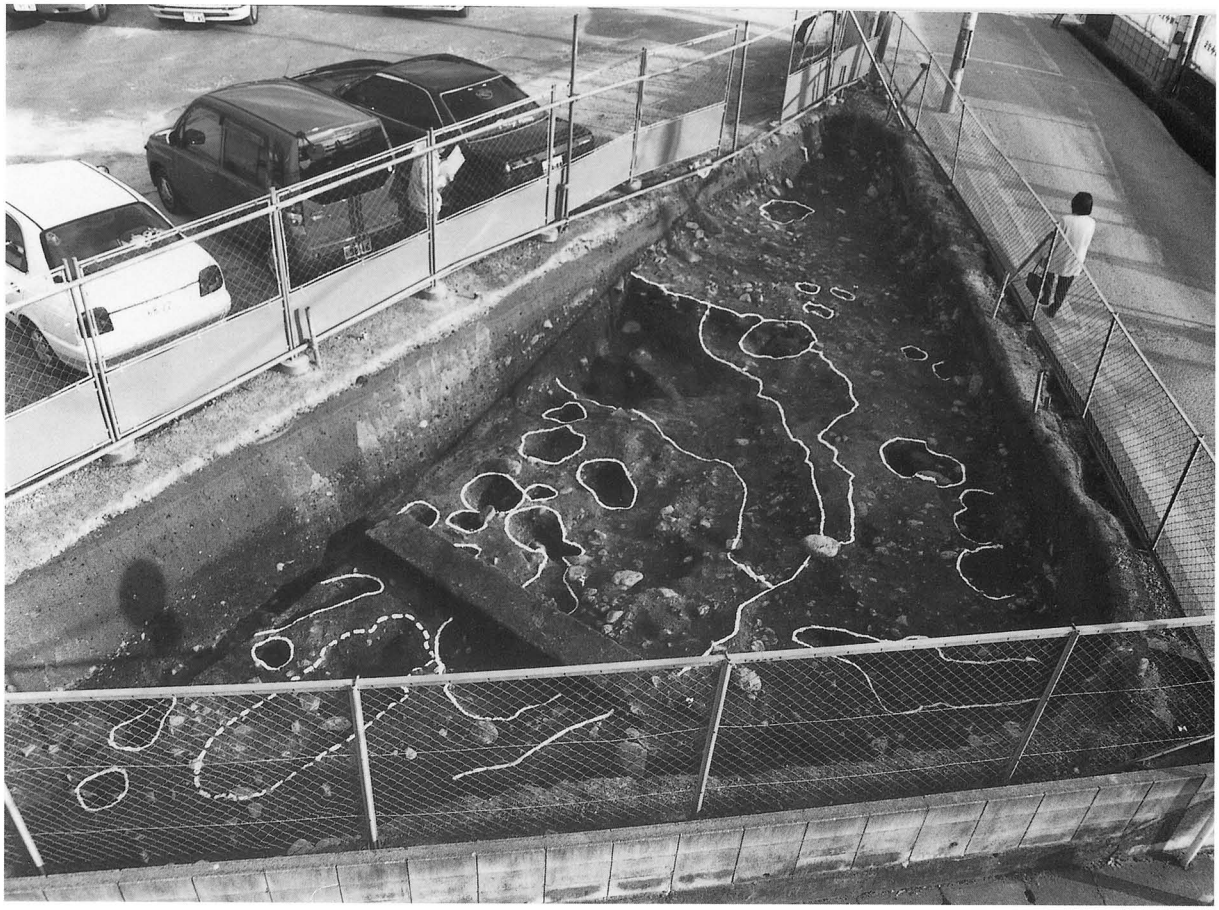
▲

三日市北遺跡遠景（北から）

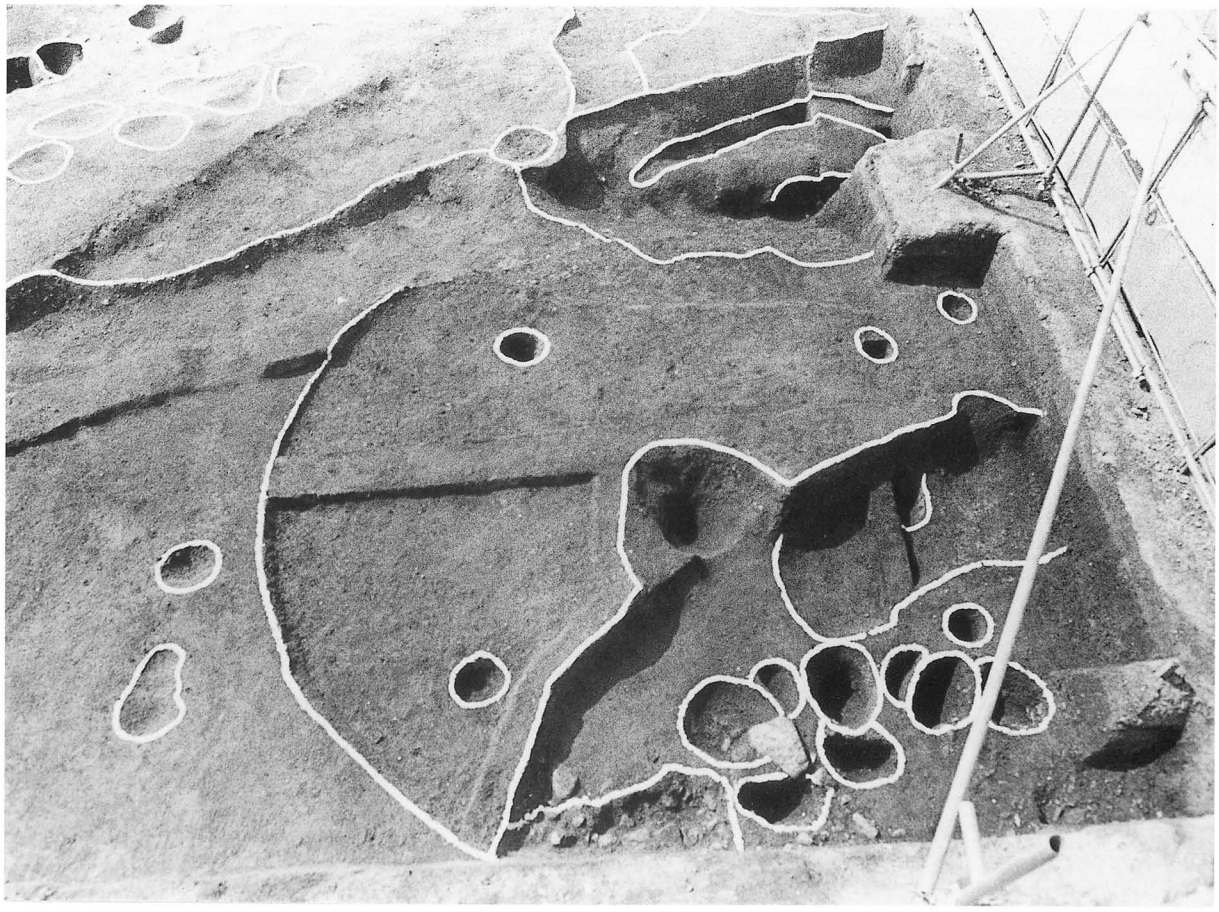
調査区西部（上から）

調査区中央部（上から）

調査区東部（上から）



ＳＩ１（西から）



ＳＩ２・３（東から）